岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255

桑山南古墳群
細畝古墳群

一般国道53号(津山南道路)改築工事に伴う発掘調査１

２０２２

岡 山 県 教 育 委 員 会

１　桑山南古墳群全景（南から）

２　桑山南１号墳横穴式石室内遺物出土状況（南東から）

１　桑山南１号墳１号陶棺蓋

２　桑山南１号墳１号陶棺身

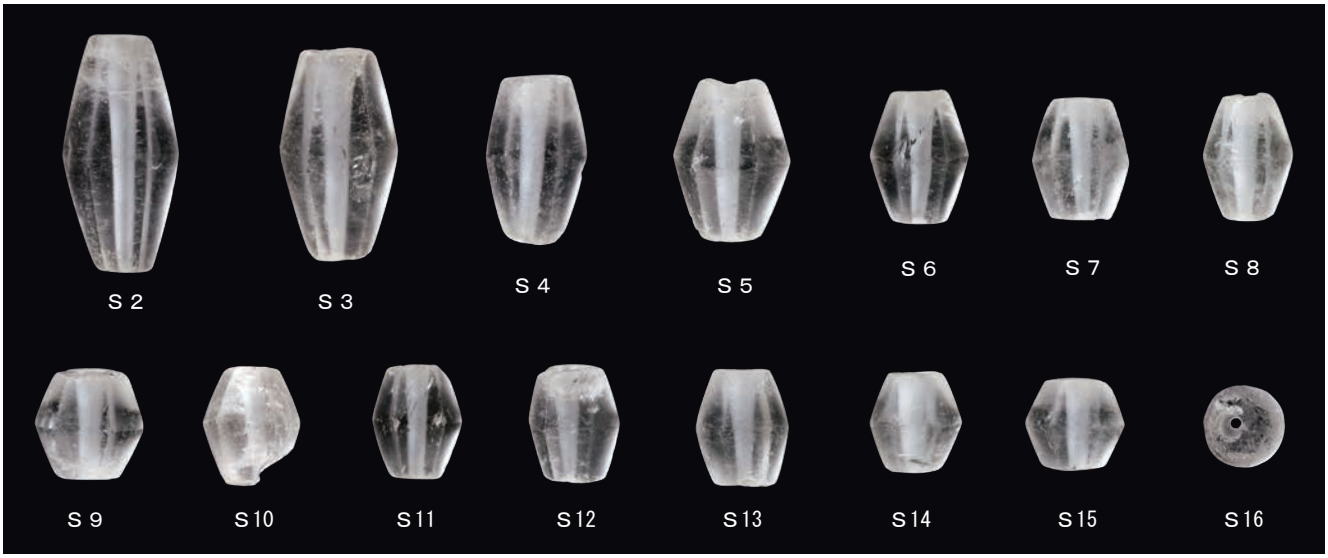
１　桑山南１号墳２号陶棺

２　鉄鐸（左端及び左から３番目：桑山南２号墳、右端及び右から３番目：桑山南３号墳）

１　桑山南１号墳出土象嵌装大刀

２　桑山南１号墳出土玉類

３　桑山南３号墳出土玉類



４　桑山南２号墳出土玉類

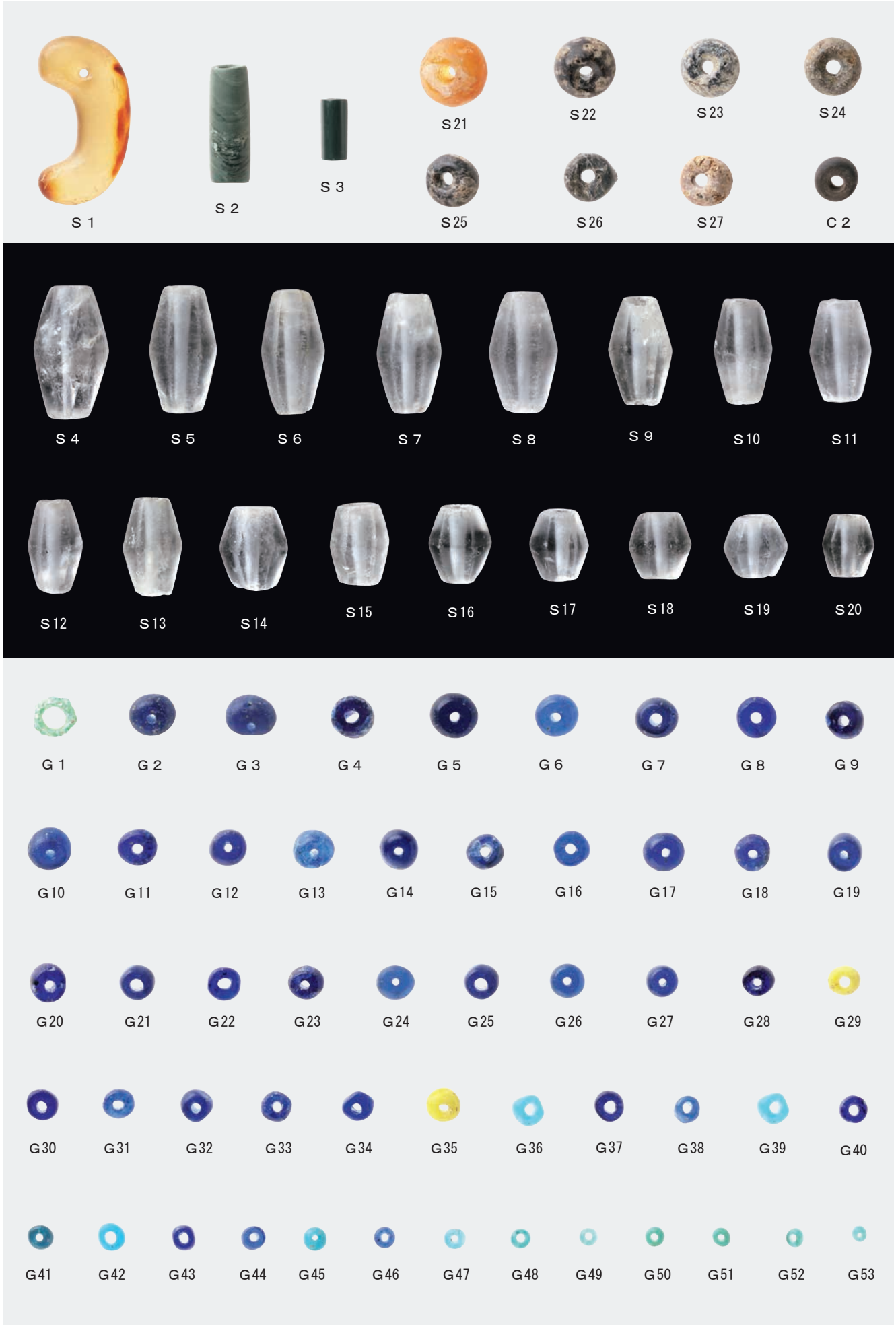
１　細畝古墳群全景（北から）

２　細畝１号墳石室内遺物出土状況（奥壁側から）

巻頭図版６

１　細畝３号墳石室内遺物出土状況（奥壁側から）

２　細畝３号墳出土須恵器特殊扁壺


S１
S２
S３
S21
S22
S23
S24
S25
S26
S27
C２
S４
S５
S６
S７
S８
S９
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
G１
G２
G３
G４
G５
G６
G７
G８
G９
G10
G11
G12
G13
G14
G15
G16
G17
G18
G19
G20
G21
G22
G23
G24
G25
G26
G27
G28
G29
G30
G31
G32
G33
G34
G35
G36
G37
G38
G39
G40
G41
G42
G43
G44
G45
G46
G47
G48
G49
G50
G51
G52
G53

細畝１号墳出土玉類

巻頭図版８

1　細畝２号墳出土玉類

2　細畝３号墳出土玉類

序

一般国道 53 号は、岡山市から津山市を経由し鳥取市に至る延長約 140km の主要幹線道路です。津山南道路は、津山周辺域と県南部の連携強化を促進し、沿線地域の発展を図ることを目的に、久米郡美咲町打穴中から津山市平福に至る区間、国道 53 号に並行する延長 5.4km のバイパス道路として計画されました。

計画路線内に所在する古墳群は、津山市街南西部の丘陵に築造された群集墳である佐良山古墳群を構成する支群です。佐良山古墳群についての昭和 20 年代の研究は、古墳時代後期の社会や墓制に関する研究の原点として後の研究に多大な影響を与え、現在なお学史的にも重要な古墳群として著名です。

このことに鑑み、県教育委員会では埋蔵文化財保護に関する重要な課題として認識し、この計画路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難なものについてはやむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を実施しました。

一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査報告書の第 1 冊目となる本書には、平成 29 年度から令和元年度にかけて行った、津山市高尾に所在する桑山南古墳群・細畝古墳群の発掘調査の記録を収載しています。

発掘調査の結果、８基の古墳と、その周辺に広がる遺構の内容が明らかとなりました。各古墳の埋葬施設である竪穴式石室や横穴式石室は、比較的保存状態の良いものが多く、陶棺や石棺のほか、武器・馬具・装身具などの豊富な副葬品が出土しました。なかでも桑山南 1 号墳から出土した銀象嵌装大刀は、被葬者の性格を表すものとして注目されます。

これらの調査成果を収めた本書が、地域の歴史研究に寄与し、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめとする関係機関や地域住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和４年１月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　大　橋　雅　也

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した、桑山南古墳群・細畝古墳群の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

2　桑山南古墳群・細畝古墳群は、津山市高尾に所在する。

3　発掘調査は平成 29 年度から令和元年度に実施した。平成 29 年度は尾上元規・小嶋善邦・森本直人が担当し 630 ㎡を、平成 30 年度は亀山行雄・澤山孝之・尾上・小嶋・藤井翔平が担当し 1,090 ㎡を、令和元年度は尾上・小嶋・藤井雅大・四田寛人が担当し 465 ㎡を調査した。

4　発掘調査及び報告書作成に当たって「一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う埋蔵文化財保護調査指導会」を設け、次の委員各位から指導・助言をいただいた。記して謝意を表する。

小郷　利幸（津山弥生の里文化財センター）	令和元年度まで
可児　通宏（津山市文化財保護委員）	令和元年度まで
澤田　秀実（くらしき作陽大学）	
清家　　章（岡山大学）	
富岡　直人（岡山理科大学）	平成 30 年度まで
仁木　康治（津山弥生の里文化財センター）	令和２年度
南　健太郎（岡山大学）	令和元年度から

5　報告書の作成は令和元年度及び２年度に実施し、尾上・小嶋・藤井翔が担当した。

6　本書の執筆は、第２章第１節を大橋雅也が行い、その他は尾上・小嶋・藤井翔・藤井雅が担当した。全体の編集は尾上・小嶋が行った。

7　遺物に関する鑑定・分析を次の諸氏に依頼し有益な教示を受けた。記して謝意を表する。

人骨の鑑定	鈴木真太郎・若山聡良（岡山大学）
須恵器・埴輪・陶棺の胎土分析	白石　　純（岡山理科大学）
石材の鑑定	鈴木　茂之（岡山大学）

8　赤色土・炭化物の分析と象嵌装大刀の保存処理等は、次の機関と業務委託契約を行い実施した。

赤色土の分析	株式会社パレオ・ラボ
陶棺胎土中炭化物の分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
象嵌装大刀の保存処理・材質分析	公益財団法人　元興寺文化財研究所

9　遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

10　本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻 1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は標高であり、挿図に示す北方位は平面直角座標Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。

2　挿図・報告書抄録の座標値・経緯度は、世界測地系に準拠している。

3　遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。

4　遺物番号は種類ごと、古墳群ごとに通し番号とした。また、土器・埴輪以外の遺物はその材質を示すため、番号の頭に次の記号を付している。

　土製品：C　　石製品：S　　金属製品：M　　ガラス製品：G

5　土器実測図において、口縁部または底部を示す上端・下端の線が中軸線の左右で途切れているものは、復元径が不確実であることを示している。

6　土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

7　次の挿図は、国土地理院発行の地形図を複製・加筆したものである。

　第２図　　1/25,000 地形図「津山西部」

　第３図・第 180 図　1/50,000 地形図「津山西部」

　第 179 図　　1/50,000 地形図「津山東部」

8　横穴式石室の袖・側壁等の左右は、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編―』同成社　2013 に従い、入口から奥壁側をみた場合の左右とした。

目　　次

巻頭図版

序

例　言

凡　例

目　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯 …… 9

第２節　発掘調査の経過 …… 11

第３節　報告書作成の経過 …… 14

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制 …… 15

第５節　日誌抄 …… 17

第６節　桑山南古墳群試掘調査 …… 19

第３章　桑山南古墳群

第１節　遺跡の概要 …… 21

第２節　桑山南１号墳 …… 25

1　墳丘と周溝 …… 25

2　横穴式石室 …… 29

3　棺 …… 32

4　石室内遺物出土状況 …… 32

5　石室内出土遺物 …… 35

6　その他の遺物 …… 50

第３節　桑山南２号墳 …… 51

1　墳丘と周溝 …… 51

2　竪穴式石室 …… 53

3　石室内遺物出土状況 …… 56

4　石室内出土遺物 …… 57

5　その他の遺物 …… 58

第４節　桑山南３号墳 …… 61

1　墳丘と周溝 …… 61

2　横穴式石室 …… 64

3　棺 …… 67

4　石室内遺物出土状況 …… 69
5　石室内出土遺物 …… 69
6　その他の遺物 …… 80
第５節　桑山南４号墳 …… 80
第６節　桑山南５号墳 …… 81
1　墳丘と周溝 …… 81
2　竪穴式石室 …… 81
3　石室内遺物出土状況 …… 84
4　石室内出土遺物 …… 84
第７節　古墳時代の箱式石棺墓・土坑墓群 …… 86
1　概要 …… 86
2　箱式石棺墓 …… 87
3　土坑墓 …… 89
4　桑山南１号墳下層遺物 …… 91
第８節　その他の遺構・遺物 …… 93
1　中世の土坑墓群 …… 93
2　土坑 …… 96
3　遺構に伴わない遺物 …… 96

第４章　細畝古墳群

第１節　遺跡の概要 …… 99
第２節　細畝１号墳 …… 101
1　墳丘と周溝 …… 101
2　横穴式石室 …… 103
3　棺 …… 106
4　石室内遺物出土状況 …… 107
5　石室内出土遺物 …… 110
6　その他の遺物 …… 118
7　石室の再利用 …… 118
第３節　細畝２号墳 …… 121
1　墳丘と周溝 …… 121
2　横穴式石室 …… 124
3　棺 …… 126
4　石室内遺物出土状況 …… 126
5　石室内出土遺物 …… 126
6　その他の遺物 …… 130
第４節　細畝３号墳 …… 131
1　墳丘と周溝 …… 131

２　横穴式石室 …… 134
３　石室内遺物出土状況 …… 136
４　石室内出土遺物 …… 137
５　その他の遺物 …… 146
第５節　箱式石棺墓 …… 147
第６節　その他の遺構・遺物 …… 150
１　土坑 …… 150
２　細畝１号墳下層遺物 …… 150
３　その他の遺物 …… 151
第７節　石室石材の再利用 …… 152

第５章　自然科学的分析
第１節　桑山南古墳群・桑山古墳群出土赤色土の自然科学的分析
…… 株式会社パレオ・ラボ　153
第２節　桑山南５号墳出土人骨の観察結果の報告
…… 岡山大学　鈴木真太郎・若山聡良　159
第３節　細畝２号墳出土陶棺胎土中炭化物の植物同定及び年代測定
…… パリノ・サーヴェイ株式会社　174
第４節　桑山南古墳群・細畝古墳群出土遺物の胎土分析
…… 岡山理科大学　白石　純　178

第６章　総　括
第１節　古墳群の構成と形成過程 …… 187
第２節　横穴式石室の変遷と特徴 …… 194
第３節　陶棺について …… 198
第４節　特徴的な副葬品 …… 208
１　象嵌装大刀 …… 208
２　鑷子状鉄製品 …… 214
３　鉄鐸 …… 217
４　特殊須恵器 …… 223
５　瓢形円環轡 …… 227

遺構一覧表
遺物観察表
図　版
報告書抄録
奥　付

図 目 次

第１章　地理的・歴史的環境

第１図　遺跡の位置（1/1,500,000） …… 1

第２図　周辺の遺跡分布（1/25,000） …… 2

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第３図　計画路線（1/50,000） …… 9

第４図　計画路線と調査対象遺跡（1/4,000） …… 10

第５図　発掘調査の工程 …… 12

第６図　桑山南古墳群年度別調査区割（1/500） …… 13

第７図　桑山南古墳群・細畝古墳群全体図（1/500） …… 20

第３章　桑山南古墳群

第８図　調査前の地形（1/400） …… 22

第９図　遺構の配置（1/300） …… 23

第 10 図　桑山南１・２・４号墳断面模式図（1/200） …… 24

第 11 図　桑山南１号墳墳丘（1/150） …… 25

第 12 図　桑山南１号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80） …… 26

第 13 図　桑山南１号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80） …… 27

第 14 図　桑山南１号墳北側周溝断面（1/60） …… 28

第 15 図　桑山南１号墳墳丘盛土１次工程における周溝状遺構（1/150） …… 28

第 16 図　土坑１（1/30） …… 29

第 17 図　桑山南１号墳石室掘り方（1/60） …… 29

第 18 図　桑山南１号墳石室（1/60） …… 30

第 19 図　桑山南１号墳石室閉塞施設・墓道（1/60） …… 31

第 20 図　桑山南１号墳石室内陶棺・棺内遺物出土状況（1/40） …… 33

第 21 図　桑山南１号墳石室内棺台石等出土状況（1/40） …… 33

第 22 図　桑山南１号墳石室内遺物出土状況（1/40・1/20） …… 34

第 23 図　桑山南１号墳１号陶棺①（1/20） …… 36

第 24 図　桑山南１号墳１号陶棺②（1/20・1/3） …… 37

第 25 図　桑山南１号墳２号陶棺①（1/20） …… 40

第 26 図　桑山南１号墳２号陶棺②（1/20） …… 41

第 27 図　桑山南１号墳石室内出土遺物①（1/4） …… 42

第 28 図　桑山南１号墳石室内出土遺物②（1/4） …… 43

第 29 図　桑山南１号墳石室内出土遺物③（1/4） …… 44

第 30 図　桑山南１号墳石室内出土遺物④（1/4） …… 45

第 31 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑤（1/4） …… 46

第 32 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑥（1/4） …… 47

第 33 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑦（1/2） …… 48
第 34 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑧（1/3） …… 49
第 35 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑨（1/2・1/1） …… 50
第 36 図　桑山南１号墳周辺出土遺物（1/3） …… 50
第 37 図　桑山南２号墳墳丘（1/150） …… 51
第 38 図　桑山南２号墳墳丘土層断面（1/80） …… 52
第 39 図　桑山南２号墳石室上面集石・集石除去後の天井石検出状況（1/30） …… 53
第 40 図　桑山南２号墳石室（1/30） …… 54
第 41 図　桑山南２号墳石室掘り方・土層断面（1/30） …… 55
第 42 図　桑山南２号墳石室内土器出土状況（1/30） …… 56
第 43 図　桑山南２号墳石室内鉄器・玉類出土状況（1/10） …… 56
第 44 図　桑山南２号墳石室内出土遺物①（1/4） …… 57
第 45 図　桑山南２号墳石室内出土遺物②（1/3・1/2） …… 58
第 46 図　桑山南２号墳周辺出土遺物①（1/4） …… 59
第 47 図　桑山南２号墳周辺出土遺物②（1/6） …… 60
第 48 図　子持器台想定復元図（1/6） …… 60
第 49 図　桑山南３号墳墳丘（1/150） …… 61
第 50 図　桑山南３号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80） …… 62
第 51 図　桑山南３号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80） …… 63
第 52 図　桑山南３号墳石室掘り方・盛土内遺物出土状況（1/60） …… 64
第 53 図　桑山南３号墳石室（1/60） …… 66
第 54 図　桑山南３号墳石室内棺配置状況（1/30） …… 68
第 55 図　桑山南３号墳石室内棺台配置状況（1/30） …… 68
第 56 図　桑山南３号墳石室内仕切石（1/30） …… 69
第 57 図　桑山南３号墳石室内遺物出土状況（1/30） …… 70
第 58 図　桑山南３号墳１号陶棺（1/20） …… 71
第 59 図　桑山南３号墳２号陶棺①（1/20） …… 73
第 60 図　桑山南３号墳２号陶棺②（1/20） …… 74
第 61 図　桑山南３号墳石室内出土遺物①（1/4） …… 76
第 62 図　桑山南３号墳石室内出土遺物②（1/3） …… 78
第 63 図　桑山南３号墳石室内出土遺物③（1/3・1/2・1/1） …… 79
第 64 図　桑山南３号墳石室内における鉄釘の分布（1/50） …… 79
第 65 図　桑山南３号墳墳丘・周辺出土遺物（1/4・1/3） …… 80
第 66 図　桑山南５号墳墳丘（1/150） …… 81
第 67 図　桑山南５号墳墳丘・石室内土層断面（1/80） …… 82
第 68 図　桑山南５号墳石室掘り方（1/60） …… 82
第 69 図　桑山南５号墳石室（1/30） …… 83
第 70 図　桑山南５号墳石室内遺物出土状況（1/30・1/10） …… 84

第 71 図　桑山南５号墳石室内出土遺物①（1/4） …… 85
第 72 図　桑山南５号墳石室内出土遺物②（1/3） …… 85
第 73 図　箱式石棺墓・土坑墓群の配置（1/200） …… 86
第 74 図　箱式石棺墓１（1/30）・出土遺物（1/4） …… 87
第 75 図　箱式石棺墓２（1/30） …… 88
第 76 図　箱式石棺墓２掘り方及び土層断面（1/30）・出土遺物（1/4） …… 89
第 77 図　土坑墓１（1/30）・出土遺物（1/4） …… 89
第 78 図　土坑墓２（1/30）・出土遺物（1/4・1/3） …… 90
第 79 図　土坑墓３（1/30）・出土遺物（1/4・1/3） …… 91
第 80 図　土坑墓４（1/30） …… 91
第 81 図　桑山南１号墳下層遺物（1/4・1/3） …… 92
第 82 図　土坑墓５～９（1/30）・土坑墓６出土遺物（1/4） …… 94
第 83 図　土坑墓 10 ～ 14（1/30） …… 95
第 84 図　土坑墓 10 出土遺物（1/3） …… 95
第 85 図　土坑２（1/30） …… 96
第 86 図　遺構に伴わない遺物①（1/4）…… 97
第 87 図　遺構に伴わない遺物②（1/3・1/2）…… 97

第４章　細畝古墳群

第 88 図　調査前の地形（1/300）…… 99
第 89 図　遺構の配置（1/300）…… 100
第 90 図　細畝１号墳墳丘（1/150） …… 101
第 91 図　細畝１号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80） …… 102
第 92 図　細畝１号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80） …… 103
第 93 図　細畝１号墳石室掘り方（1/60） …… 104
第 94 図　細畝１号墳石室（1/60） …… 105
第 95 図　細畝１号墳石室閉塞施設（1/60） …… 106
第 96 図　細畝１号墳石室内棺配置状況（1/30） …… 107
第 97 図　細畝１号墳石室内箱式石棺（1/30） …… 108
第 98 図　細畝１号墳石室内箱式石棺石材据え付け穴（1/30） …… 109
第 99 図　細畝１号墳石室内遺物出土状況（1/30） …… 109
第 100 図　細畝１号墳石室内遺物出土状況＜玉類集中部拡大＞（1/10） …… 110
第 101 図　細畝１号墳陶棺（1/20） …… 111
第 102 図　細畝１号墳石室内出土遺物①（1/4） …… 114
第 103 図　細畝１号墳石室内出土遺物②（1/4） …… 115
第 104 図　細畝１号墳石室内出土遺物③（1/3） …… 116
第 105 図　細畝１号墳石室内出土遺物④（1/2・1/1） …… 117
第 106 図　細畝１号墳石室内出土遺物⑤（1/1） …… 118
第 107 図　細畝１号墳周辺出土遺物（1/4） …… 119

第 108 図　細畝１号墳石室内に設けられた小石室（1/30）・出土遺物（1/3）……120
第 109 図　細畝２号墳墳丘（1/150）……121
第 110 図　細畝２号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）……122
第 111 図　細畝２号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）……123
第 112 図　細畝２号墳墳丘・外護列石立面〈東面〉（1/60）……124
第 113 図　細畝２号墳石室掘り方（1/60）……124
第 114 図　細畝２号墳石室（1/60）……125
第 115 図　細畝２号墳石室内遺物出土状況（1/30）……127
第 116 図　細畝２号墳陶棺（1/20）……128
第 117 図　細畝２号墳石室内出土遺物①（1/4）……128
第 118 図　細畝２号墳石室内出土遺物②（1/3・1/2・1/1）……129
第 119 図　細畝２号墳墳丘・周溝出土遺物（1/4）……130
第 120 図　細畝３号墳墳丘（1/150）……131
第 121 図　細畝３号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）……132
第 122 図　細畝３号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）……133
第 123 図　細畝３号墳石室掘り方・墓道（1/60）……135
第 124 図　細畝３号墳石室（1/60）……136
第 125 図　細畝３号墳石室内遺物出土状況（1/40・1/30）……138
第 126 図　細畝３号墳石室内出土遺物①（1/4）……139
第 127 図　細畝３号墳石室内出土遺物②（1/4）……140
第 128 図　細畝３号墳石室内出土遺物③（1/4）……141
第 129 図　細畝３号墳石室内出土遺物④（1/4）……142
第 130 図　細畝３号墳石室内出土遺物⑤（1/3）……143
第 131 図　細畝３号墳石室内出土遺物⑥（1/2・1/1）……144
第 132 図　細畝３号墳周溝・周辺出土遺物①（1/4）……145
第 133 図　細畝３号墳周溝・周辺出土遺物②（1/6）……146
第 134 図　箱式石棺墓１（1/30）・出土遺物（1/4）……147
第 135 図　箱式石棺墓１掘り方・土層断面（1/30）……148
第 136 図　箱式石棺墓２（1/30）……149
第 137 図　土坑１（1/30）……150
第 138 図　細畝１号墳下層遺物（1/6・1/4）……151
第 139 図　遺構に伴わない遺物（1/2）……151
第 140 図　石室石材搬出溝（1/300）……152

第５章　自然科学的分析

第 141 図　赤色土の蛍光Ｘ線分析結果①……155
第 142 図　赤色土の蛍光Ｘ線分析結果②……156
第 143 図　エナメル質減形成評価の基準……162
第 144 図　歯石付着の評価基準……163

第 145 図　切歯、犬歯、小臼歯における損耗の評価基準 …… 163
第 146 図　大臼歯における損耗の評価基準 …… 163
第 147 図　人骨出土状況（1/6） …… 173
第 148 図　暦年校正結果 …… 175
第 149 図　桑山南１・３号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較① …… 180
第 150 図　桑山南１・３号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較② …… 181
第 151 図　細畝１・２号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較① …… 181
第 152 図　細畝１・２号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較② …… 182
第 153 図　桑山南１号墳、細畝１・３号墳出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較① …… 182
第 154 図　桑山南１号墳、細畝１・３号墳出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較② …… 183
第 155 図　桑山南古墳群出土須恵器の産地推定① …… 183
第 156 図　桑山南古墳群出土須恵器の産地推定② …… 184
第 157 図　細畝古墳群出土須恵器の産地推定① …… 184
第 158 図　細畝古墳群出土須恵器の産地推定② …… 185

第６章　総　括

第 159 図　須恵器蓋杯の型式と古墳群の消長（1/8） …… 189
第 160 図　須恵器高杯の編年（1/8） …… 190
第 161 図　１期の桑山南古墳群（1/500） …… 192
第 162 図　美作中部における横穴式石室の変遷（1/200） …… 195
第 163 図　支群で異なる石室の特徴（1/100） …… 196
第 164 図　桑山南古墳群・細畝古墳群出土陶棺の分類と研究史との対応（1/80） …… 198
第 165 図　美作出土のⅠ～Ⅲ類陶棺（1/40） …… 200
第 166 図　Ⅳ類陶棺の類例（1/40） …… 201
第 167 図　美作におけるⅠ～Ⅳ類陶棺の変遷（1/60） …… 202
第 168 図　岡山南部出土Ⅰ・Ⅱ類陶棺（1/40） …… 203
第 169 図　六地蔵北古墳出土陶棺（縮尺不明） …… 204
第 170 図　こうもり塚古墳出土陶棺（1/20） …… 204
第 171 図　キノコ形陶栓の類例（1/40） …… 205
第 172 図　桑山南１号墳と関係する鍔と鏃（1/3） …… 208
第 173 図　樹枝状表現の種類 …… 209
第 174 図　樹枝状表現の変遷（1/3） …… 210
第 175 図　中国地方及び兵庫県出土の鑷子状鉄製品（1/3） …… 215
第 176 図　岡山県内鉄鐸出土遺跡の分布 …… 217
第 177 図　鉄鐸の民俗例（1/5） …… 218
第 178 図　鉄鐸の出土状況（1/30） …… 219
第 179 図　津山市観音山周辺出土の鉄製品（1/50,000・鉄器 1/8） …… 220
第 180 図　佐良山古墳群周辺の特殊須恵器（1/8）と分布（1/50,000） …… 224
第 181 図　瓢形円環轡の分布 …… 227

表 目 次

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過
第１表　本書関連調査一覧 …… 12
第２表　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 18
第５章　自然科学的分析
第３表　分析対象 …… 153
第４表　歯牙う蝕の評価基準 …… 161
第５表　エナメル質減形成の評価基準 …… 162
第６表　桑山南５号墳出土の人骨における歯牙資料 …… 164
第７表　炭化植物同定・放射性炭素年代測定結果 …… 175
第８表　桑山南古墳群・細畝古墳群出土須恵器の胎土分析結果 …… 186
第６章　総　括
第９表　桑山南古墳群・細畝古墳群一覧 …… 187
第 10 表　桑山南古墳群における１期の墳墓 …… 191
第 11 表　中国地方及び兵庫県出土の鑷子状鉄製品 …… 214
第 12 表　岡山県内出土の鉄鐸 …… 217
第 13 表　佐良山古墳群周辺出土の特殊須恵器 …… 223

写真目次

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過
写真１　埋蔵文化財保護調査指導会（平成 30 年２月 16 日） …… 14
写真２　桑山南古墳群現地説明会（平成 30 年６月 26 日） …… 14
写真３　陶棺復元作業 …… 14
写真４　大型石材の露出（調査前、東から） …… 19
写真５　トレンチ完掘状況（東から） …… 19
第３章　桑山南古墳群
写真６　桑山南１号墳１号陶棺細部 …… 38
写真７　桑山南１号墳２号陶棺細部 …… 41
写真８　桑山南２号墳北側墳丘断面（北東から） …… 52
写真９　桑山南２号墳南側墳丘断面（南東から） …… 52
写真 10　桑山南３号墳１号陶棺細部 …… 72
写真 11　桑山南３号墳２号陶棺細部 …… 74
写真 12　箱式石棺墓２須恵器転用枕（北東から） …… 90
写真 13　土坑墓１須恵器転用枕ほか（西から） …… 90
写真 14　須恵器 147・148 出土状況（東から） …… 92

写真 15　箱式石棺墓・土坑墓群調査状況（南から）　…… 92
第４章　細畝古墳群
写真 16　細畝１号墳墳丘断面（A-A’東半）　…… 102
写真 17　細畝１号墳石室掘り方（北から　…… 102
写真 18　細畝１号墳石室右側壁（南西から）　…… 104
写真 19　細畝１号墳石室閉塞施設（北から）　…… 104
写真 20　細畝１号墳陶棺細部　…… 112
写真 21　細畝３号墳周溝断面（東から）　…… 134
写真 22　細畝３号墳墳丘西側盛土断面（南から）　…… 134
写真 23　細畝３号墳石室内土層堆積状況（南東から）　…… 134
写真 24　細畝３号墳石室奥壁掘り方及び石材搬出のための奥壁背後の掘削面（南西から）　…… 134
写真 25　細畝３号墳墓道（南東から）　…… 135
写真 26　矢穴のある石材　…… 152
第５章　自然科学的分析
写真 27　分析対象試料写真　…… 157
写真 28　赤色土の生物顕微鏡写真　…… 158
写真 29　後頭骨外後頭隆起　…… 160
写真 30　下顎骨体下部　…… 160
写真 31　右大腿骨骨幹　…… 161
写真 32　左下顎犬歯のエナメル質減形成　…… 167
写真 33　右上顎第一小臼歯セメントエナメル境上のう蝕　…… 169
写真 34　右上顎第一大臼歯の損耗　…… 169
写真 35　左下顎第一大臼歯の損耗　…… 169
写真 36　陶棺胎土中炭化物　…… 177
写真 37　陶棺胎土中炭化物の電子顕微鏡写真①　…… 177
写真 38　陶棺胎土中炭化物の電子顕微鏡写真②　…… 177
写真 39　桑山南古墳群・細畝古墳群における脚の接合方法３種　…… 205

巻頭図版目次

桑山南古墳群
巻頭図版１　１　桑山南古墳群全景（南から）
　　２　桑山南１号墳横穴式石室内遺物出土状況（南東から）
巻頭図版２　１　桑山南１号墳１号陶棺蓋
　　２　桑山南１号墳１号陶棺身
巻頭図版３　１　桑山南１号墳２号陶棺
　　２　鉄鐸（左端及び左から３番目:桑山南２号墳、右端及び右から３番目:桑山南３号墳）
巻頭図版４　１　桑山南１号墳出土象嵌装大刀

２　桑山南１号墳出土玉類
３　桑山南３号墳出土玉類
４　桑山南２号墳出土玉類

細畝古墳群

巻頭図版５　１　細畝古墳群全景（北から）
２　細畝１号墳石室内遺物出土状況（奥壁側から）
巻頭図版６　１　細畝３号墳石室内遺物出土状況（奥壁側から）
２　細畝３号墳出土須恵器特殊扁壺
巻頭図版７　細畝１号墳出土玉類
巻頭図版８　１　細畝２号墳出土玉類
２　細畝３号墳出土玉類

図版目次

図版１　１　調査地遠景（南から）
２　桑山南古墳群（手前）と細畝古墳群（奥）（北東から）

桑山南古墳群

図版２　１　桑山南１号墳調査前（北西から）
２　桑山南１号墳全景（上が北西）
図版３　１　桑山南１号墳全景（北東から）
２　桑山南１号墳全景（北西から）
図版４　１　桑山南１号墳調査前石室天井石（南東から）
２　桑山南１号墳墳丘調査風景（南東から）
３　桑山南１号墳墳丘下層の土坑１（南から）
図版５　１　桑山南１号墳墳丘断面（南東から）
２　桑山南１号墳石室開口部と墓道（南東から）
図版６　１　桑山南１号墳石室（南東から）
２　桑山南１号墳石室右側壁（北西から）
３　桑山南１号墳石室左側壁（北から）
４　桑山南１号墳石室掘り方（開口部、東から）
５　桑山南１号墳石室裏込め部の陶棺片（東から）
図版７　１　桑山南１号墳石室閉塞施設（南東から）
２　桑山南１号墳石室閉塞施設下部（南東から）
３　桑山南１号墳石室閉塞施設（北東から）
図版８　１　桑山南１号墳１号陶棺蓋出土状況（北西から）
２　桑山南１号墳１号陶棺身出土状況（南東から）
図版９　１　桑山南１号墳１号陶棺・周辺遺物出土状況（北東から）
２　桑山南１号墳２号陶棺出土状況（東から）

図版 10　1　桑山南１号墳１号陶棺周辺遺物出土状況（南東から）
　　2　桑山南１号墳玄室西隅部土器出土状況（東から）
　　3　桑山南１号墳玄室北隅部土器出土状況（南東から）
図版 11　1　桑山南１号墳玄室中央部須恵器（22・24）出土状況（南西から）
　　2　桑山南１号墳１号陶棺付近耳環（Ｍ 51）出土状況（南から）
　　3　桑山南１号墳２号陶棺内象嵌装大刀（Ｍ１・Ｍ２）出土状況（南東から）
図版 12　1　桑山南１号墳石室羨道部遺物出土状況（南東から）
　　2　桑山南１号墳石室閉塞部須恵器提瓶（41）出土状況（北西から）
　　3　桑山南１号墳石室閉塞部須恵器鈴付高杯（27）出土状況（南から）
図版 13　1　桑山南２号墳調査前（南東から、奥は桑山南４号墳）
　　2　桑山南２号墳全景（南から）
図版 14　1　桑山南２号墳全景（東から）
　　2　桑山南１号墳（奥）・桑山南２号墳（手前）全景（北西から）
図版 15　1　桑山南２号墳石室上部集石（南東から）
　　2　桑山南２号墳石室天井石（南東から）
　　3　桑山南２号墳石室天井石（北から）
図版 16　1　桑山南２号墳石室（南東から）
　　2　桑山南２号墳石室北東端部遺物出土状況（南西から）
図版 17　1　桑山南２号墳石室北東端部遺物出土状況（南西から）
　　2　桑山南２号墳石室北東端部須恵器片転用枕（88）ほか出土状況（南西から）
　　3　桑山南２号墳石室北東端部枕下の遺物出土状況（西から）
図版 18　1　桑山南２号墳石室北西側壁（南東から）
　　2　桑山南２号墳石室南東側壁（北西から）
　　3　桑山南２号墳石室掘り方（南西から）
図版 19　1　桑山南３号墳調査前（東から）
　　2　桑山南３号墳全景（東から）
図版 20　1　桑山南３号墳全景（北東から、奥は桑山南５号墳）
　　2　桑山南３号墳墳丘作業風景（南東から）
　　3　桑山南３号墳盛土中須恵器高杯（122）出土状況（北から）
図版 21　1　桑山南３号墳石室（東から）
　　2　桑山南３号墳石室右側壁（南西から）
　　3　桑山南３号墳石室左側壁（北西から）
　　4　桑山南３号墳石室（西から）
　　5　桑山南３号墳石室奥壁部仕切石（東から）
図版 22　1　桑山南３号墳陶棺出土状況（東から）
　　2　桑山南３号墳１号陶棺出土状況（西から）
図版 23　1　桑山南３号墳１号陶棺出土状況（東から）
　　2　桑山南３号墳２号陶棺出土状況（東から）

3　桑山南３号墳２号陶棺出土状況（南から）

図版 24　1　桑山南３号墳２号陶棺身出土状況（南から）

2　桑山南３号墳陶棺棺台石（東から）

3　桑山南３号墳２号陶棺内遺物出土状況（東から）

図版 25　1　桑山南３号墳２号陶棺南側遺物出土状況（東から）

2　桑山南３号墳石室開口部遺物出土状況（南東から）

3　桑山南３号墳２号陶棺下須恵器子持器台（108・109）出土状況（南西から）

図版 26　1　桑山南４号墳墳端付近（南東から）

2　桑山南５号墳発見時の状況（南東から）

図版 27　1　桑山南５号墳全景（南東から、右奥は桑山南３号墳）

2　桑山南５号墳全景（北西から）

図版 28　1　桑山南５号墳墳丘作業風景（南東から）

2　桑山南５号墳石室（東から）

図版 29　1　桑山南５号墳石室控え積みの状況（西から）

2　桑山南５号墳石室掘り方断面（南西から）

3　桑山南５号墳石室北部遺物出土状況（南東から）

図版 30　1　桑山南５号墳石室内遺物出土状況（南東から）

2　桑山南５号墳石室内人骨頭部出土状況（東から）

図版 31　1　桑山南５号墳石室内遺物出土状況（南西から）

2　桑山南５号墳石室内人骨脚部出土状況（南東から）

図版 32　1　箱式石棺墓１（南東から）

2　箱式石棺墓１（北東から）

3　箱式石棺墓２蓋石（南東から）

図版 33　1　箱式石棺墓２（南西から）

2　土坑墓１（南から）

3　土坑墓１須恵器出土状況（南から）

図版 34　1　土坑墓２（北西から）

2　土坑墓２須恵器出土状況（北東から）

3　土坑墓３（南から）

図版 35　1　土坑墓３須恵器出土状況（南から）

2　土坑墓３と桑山南１号墳（南西から）

3　土坑墓４（南東から）

図版 36　1　桑山南１号墳盛土中須恵器（147・148）出土状況（南東から）

2　桑山南１号墳盛土中鉄鏃（M 147）出土状況（南東から）

3　中世の土坑墓群（北東から）

図版 37　1　中世の土坑墓群（西から）

2　土坑墓５（南から）

3　土坑墓６（南東から）

図版 38　1　土坑墓７（南東から）
2　土坑墓８（南から）
3　土坑墓９（東から）
図版 39　1　土坑墓 10（西から）
2　土坑墓 11（北西から）
3　土坑墓 12（東から）
図版 40　1　土坑墓 13（東から）
2　土坑墓 14（東から）
3　土坑２（南東から）
図版 41　桑山南１号墳出土１号陶棺（Ｃ１）
図版 42　桑山南１号墳出土２号陶棺（Ｃ２）
図版 43　桑山南１号墳石室内出土土器①
図版 44　桑山南１号墳石室内出土土器②
図版 45　桑山南１号墳石室内出土土器③
図版 46　桑山南１号墳石室内出土土器④
図版 47　桑山南１号墳石室内出土象嵌装大刀（クリーニング・保存処理前）
図版 48　桑山南１号墳出土金属製品
図版 49　1　桑山南２号墳石室内出土土器
2　桑山南２号墳石室内出土鉄器
図版 50　桑山南２号墳周辺出土遺物
図版 51　桑山南３号墳出土１号陶棺（Ｃ５）
図版 52　桑山南３号墳出土２号陶棺（Ｃ６）
図版 53　桑山南３号墳石室内出土土器①
図版 54　1　桑山南３号墳石室内出土土器②
2　桑山南３号墳墳丘・周辺出土遺物
3　桑山南３号墳石室内出土鉄器
図版 55　1　桑山南５号墳石室内出土土器
2　桑山南５号墳石室内出土鉄器
図版 56　1　箱式石棺墓・土坑墓群出土遺物
2　桑山南１号墳墳丘盛土中・周辺出土遺物
3　中世の土坑墓群出土遺物

細畝古墳群

図版 57　1　細畝１号墳調査前（東から）
2　細畝１号墳調査前石室開口部（南から）
図版 58　1　細畝１号墳全景（上が北）
2　細畝１号墳石室（南から）
図版 59　1　細畝１号墳石室右側壁（北西から）
2　細畝１号墳石室左側壁（北東から）

3　細畝１号墳石室内（南から）
図版 60　1　細畝１号墳石室閉塞施設（南から）
2　細畝１号墳石室閉塞施設（北から）
3　細畝１号墳石室内箱式石棺（北西から）
図版 61　1　細畝１号墳陶棺身出土状況（南から）
2　細畝１号墳陶棺脚出土状況（西から）
3　細畝１号墳箱式石棺内遺物出土状況（南から）
図版 62　1　細畝１号墳石室奥部遺物出土状況（北東から）
2　細畝１号墳石室内箱式石棺西側遺物出土状況（北から）
3　細畝１号墳石室奥部耳環（M 24・M 25）ほか出土状況（西から）
図版 63　1　細畝１号墳石室内玉類集中部（西から）
2　細畝１号墳石室閉塞部須恵器瑞（26）出土状況（東から）
3　細畝１号墳石室内作業風景（北から）
図版 64　1　細畝１号墳石室内古代の土器（40・41）出土状況（南から）
2　細畝１号墳石室奥の小石室天井石（北から）
3　細畝１号墳石室奥の小石室天井石除去後（北から）
図版 65　1　細畝２号墳調査前（南から）
2　細畝２号墳全景（東から）
図版 66　1　細畝２号墳石室（東から）
2　細畝２号墳石室（西から）
図版 67　1　細畝２号墳石室右側壁（南西から）
2　細畝２号墳石室左側壁（北西から）
3　細畝２号墳墳丘南半断面（東から）
4　細畝２号墳墳丘北半断面（東から）
図版 68　1　細畝２号墳石室内陶棺出土状況（東から）
2　細畝２号墳石室内土器出土状況（東から）
3　細畝２号墳石室内勾玉（S 28）出土状況（南から）
図版 69　1　細畝３号墳調査前（北西から）
2　細畝３号墳全景（北東から）
図版 70　1　細畝３号墳石室（南東から）
2　細畝３号墳石室（北西から）
図版 71　1　細畝３号墳石室右側壁（西から）
2　細畝３号墳石室左側壁（北から）
3　細畝３号墳石室羨道床面（南西から）
図版 72　1　細畝３号墳石室内遺物出土状況（北西から）
2　細畝３号墳石室内遺物出土状況（南東から）
3　細畝３号墳石室右側壁際遺物出土状況（北東から）
図版 73　1　細畝３号墳石室袖部周辺遺物出土状況（北から）

２　細畝３号墳石室袖部遺物出土状況（北東から）
３　細畝３号墳石室羨道部遺物出土状況（南西から）
図版 74　１　細畝３号墳石室内馬具（M 69 ほか）出土状況（南西から）
２　細畝３号墳石室内耳環（M 84・M 85）ほか出土状況（北西から）
３　細畝３号墳石室内作業風景（西から）
図版 75　１　箱式石棺墓１（西から）
２　箱式石棺墓１（東から）
３　箱式石棺墓１須恵器出土状況（南西から）
図版 76　１　箱式石棺墓２（東から）
２　箱式石棺墓２（北から）
３　土坑１（南西から）
図版 77　細畝１号墳出土陶棺（Ｃ１）
図版 78　細畝１号墳石室内出土土器①
図版 79　細畝１号墳石室内出土土器②
図版 80　１　細畝１号墳石室内出土金属器
２　細畝１号墳周辺出土土器
３　細畝２号墳出土陶棺（Ｃ４）
図版 81　１　細畝２号墳石室内出土土器
２　細畝２号墳石室内出土鉄器
図版 82　細畝３号墳石室内出土土器①
図版 83　細畝３号墳石室内出土土器②
図版 84　細畝３号墳石室内出土土器③
図版 85　１　細畝３号墳石室内出土土器④
２　細畝３号墳石室内出土鉄器
図版 86　１　細畝３号墳石室内出土耳環
２　細畝３号墳周溝・周辺出土遺物
３　箱式石棺墓１・細畝１号墳墳丘盛土中・細畝１号墳石室掘り方内出土遺物

第１章　地理的・歴史的環境

遺跡の位置と地勢

桑山南古墳群・細畝古墳群は、岡山県北東部の津山市高尾に所在し、学史上著名な佐良山古墳群[1]の一角をなしている。古代の行政区域では美作国久米郡長岡郷にあたる。

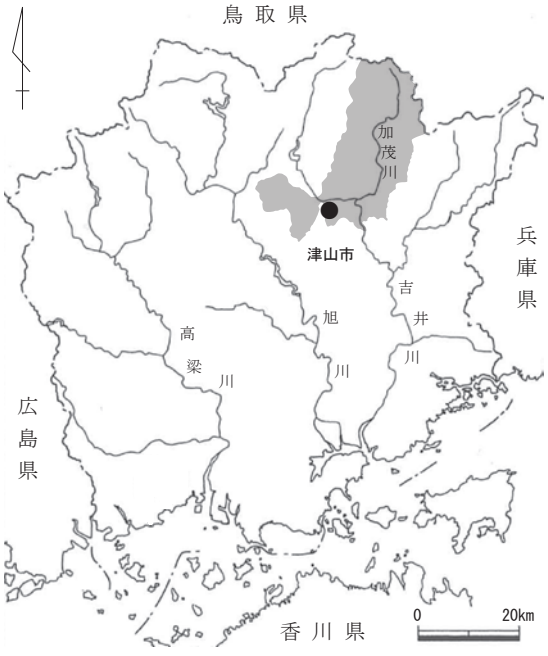
津山市は、標高 1,000 m前後の山々が連なる中国山地脊梁部の南から吉備高原の北縁まで、南北に長いおよそ 500 ㎢の市域で、調査地はその南端に位置する。市の中心部が所在する津山盆地は、吉井川と加茂川が合流する付近に形成された標高約 75 ～ 200 mの盆地である。岡山県東部を北から南に貫いて流れる吉井川は、この津山盆地で東西方向に大きく向きを変え、吉井川及びそれに注ぐ諸河川の流域にいくつもの小盆地を形成し、それらが東西に連なるように展開している。このような地勢から、津山盆地は河川に沿って美作地域を東西につなぐとともに、吉井川や津山往来（現国道 53 号）を介した備前地域との交通においても重要な位置を占めていることが分かる。さらに、盆地を横切って通る出雲道や、加茂川を遡る加茂往来、因幡道などで山陰地方にも通じており、東西及び南北に至る交通の結節点となっている。

旧石器時代

美作地域において人々の生活の最初の痕跡が認められるのは旧石器時代である。この時代の遺跡は、真庭市蒜山高原や鏡野町恩原高原など中国山地脊梁に近い地域において、厚く堆積した火山灰に覆われた状態で良好に残されている[2]。津山市内では、天神原遺跡[3]や大開遺跡[4]のナイフ形石器、大田茶屋遺跡[5]の細石刃・細石核などが報告されているが、いずれもわずかな石器類の出土のみで、生活の痕跡を留めていない（以下、津山市内の遺跡については市名を省略）。

縄文時代

縄文時代では、まず草創期に遡る石器が挙げられる。領家遺跡[6]で局部磨製石斧、稲荷遺跡[7]で有茎尖頭器が出土しており、勝央町大河内遺跡では局部磨製石斧とともに打製石斧、尖頭器、石鏃など多くの石器類が出土している[8]。早期になると、大田西奥田遺跡において竪穴住居が確認されている[9]。壁際に杭列が廻る構造で、鏡野町竹田遺跡[10]に類例がある。前期から中期にかけての遺跡は少ないが、前期の遺物が西吉田北遺跡[11]、山ノ奥遺跡[12]など、中期の遺物が堀坂宮ノ前遺跡[13]で出土している。いずれも少量の出土で、この時期の遺跡の希薄さを示している。後期以降になると遺跡数が増加する。沼京免遺跡[14]で後期の土坑、大田茶屋遺跡、押入兼田遺跡[15]でも晩期の土坑が発見され、後期の堀坂星ヶ坪遺



第１図　遺跡の位置（1/1,500,000）

第２図　周辺の遺跡分布（1/25,000）

1 桑山南古墳群
2 細畝古墳群
3 勝負峪遺跡
4 桑山古墳群
5 高尾桑山遺跡
6 正京茶畠古墳
弁慶岩古墳群
7 高尾北ヤシキ古墳
8 高尾北ヤシキ遺跡
9 高尾廃寺跡
10 高尾上ノ畑遺跡
11 高尾宮ノ前遺跡
12 西ノ岡古墳群
13 院庄毘沙門前遺跡
14 院庄五輪鼻遺跡
15 戸島丸山古墳
16 院庄大塚古墳
17 院庄権現ノ前遺跡
18 院庄大滝遺跡
19 二宮野辺遺跡
20 院庄奈良順古墳
21 二宮飛峪遺跡
22 二宮円通寺北遺跡
23 二宮円通寺遺跡
24 鐘つき堂古墳
25 大開遺跡
26 大開古墳群
27 二宮杉澤古墳
28 二宮杉澤古墳
29 後山古墳
30 二宮恵下遺跡
31 二宮天王遺跡
32 美和山古墳群
33 二宮岡の屺遺跡
34 二宮岡東遺跡
35 中禅奥古墳群
36 二宮俵田遺跡
37 二宮みのり学園古墳
38 二宮風呂屋峪遺跡
39 松原Ａ遺跡
40 松原Ｂ遺跡
41 二宮大成遺跡
42 二宮大成古墳
43 小田中狐塚古墳
44 小田中戌亥谷古墳
45 一方北遺跡
46 津山口十文字遺跡
47 一方岸上遺跡
48 一方今屋敷遺跡
49 井口井手端遺跡
50 井口宮下遺跡
51 一方北古墳群
52 神南備山城跡
53 門の山古墳群
54 寺山古墳群
55 煙硝庫古墳群
56 皿丸山遺跡
57 皿西寺坂遺跡
58 皿穴田遺跡
59 皿寺坂東遺跡
60 寺池東古墳群
61 カキ谷Ａ古墳群
62 カキ谷Ｂ古墳群
63 皿佐良山遺跡
64 皿高妻遺跡
65 皿立宿遺跡
66 皿山城跡
67 高尾ズリ谷古墳群
68 中曽根古墳群
69 高尾安廣遺跡
70 丸山古墳群
71 御笠美下古墳群
72 三ツ塚古墳群
73 高尾堂免南遺跡
74 御笠美下大塚古墳
75 大塚上古墳
76 御笠美古墳
77 比久尼塚古墳
78 高尾中宮上古墳群
79 中宮古墳群
80 丸山古墳群
81 高野山根古墳群
82 剣戸古墳群
83 小屋谷古墳群
84 小屋谷窯跡
85 若林古墳群
86 福田登尾遺跡
87 高清水古墳
88 奥山田古墳群
89 ウノメ古墳
90 福田ウノ免遺跡
91 丸山城跡
92 奥の屺古墳
93 三ツ塚古墳群
94 天神山城跡
95 福田湯田遺跡
96 岡道東遺跡
97 岡の屺古墳
98 山の谷古墳
召出山古墳群
太平古墳群
99 天笠山遺跡
100 小坂遺跡
101 散布地
102 奥禅寺跡
103 小坂古墳群
104 松ヶ崎古墳
105 散布地
106 古墳
107 後谷古墳
小麦尾古墳群
うるしざこ古墳群
108 散布地
109 鰻谷古墳群
110 方の谷古墳群
111 古墳
112 大久保古墳群
113 中山横穴墓
114 散布地
115 嵯峨山城跡
116 三ツ塚古墳群
117 中堂古墳群
118 片山古墳
119 平福向山遺跡
120 平福向山古墳
121 平佐古墳
122 祇園畝古墳群
123 火の釜古墳群
124 高塚古墳
125 下山田上古墳
126 中山田古墳群
127 高尾中山田遺跡
128 城成遺跡
129 長万寺跡

跡では土器多数や石器類が出土している[16]。また、鏡野町久田原遺跡[17]及び久田堀ノ内遺跡[18]では、後～晩期の竪穴住居や土坑、多量の遺物が確認され、長期間にわたり集落が営まれた様子が窺える。そのほか、縄文時代の落とし穴遺構が多数の遺跡で検出されている。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡はわずかしか知られていないが、前期後半の高橋谷遺跡[19]、天神原遺跡、沼京免遺跡などがいくつか確認されている。中期中葉～後期になると集落は増加し、沼遺跡[20]、沼Ｅ遺跡[21]、紫保井遺跡[22]、大田十二社遺跡[23]などの集落が形成される。後期の沼京免遺跡では環濠を廻らせる大規模集落がみられ、天神原遺跡や上部遺跡[24]では直径11ｍに達する大型竪穴住居が検出されている。竪穴住居は建て替えや拡張が多く認められ、比較的長期間にわたる居住が窺える。

弥生時代の墳墓では、中期以降、木棺墓群を中心とした集団墓がみられる。集落内に小規模な墓域を形成する竹ノ下遺跡[25]などのほか、後期には丘陵上に台状墓や区画墓が出現する。下道山遺跡では、方形台状墓２基に加えて135基の木棺墓群が検出され、特殊器台や供献土器が出土している[26]。有本遺跡Ｂ地区では、３基の区画墓とその内外に140基の木棺墓が検出され、特殊器台形土器が出土したほか、ガラス製管玉や鉄鏃などの副葬品を伴うものもある[27]。今回の調査地点の近隣においては、勝負峪遺跡などで中期後葉から後期前葉にかけての集落が展開しており、その一角に木棺墓群が形成されている[28]。また、皿丸山遺跡では、遺跡の性格は不明ながら鼓形器台や特殊器台などが出土している[29]。

古墳時代

古墳時代に入ると各地に大型前方後円墳（後方墳）が出現する。美作最大の勝央町植月寺山古墳[30]（墳長約92ｍの前方後方墳）や銅鏡３面などを出土した鏡野町郷観音山古墳[31]（墳長約43ｍの前方後円墳）が古く、津山市内ではやや遅れて、銅鏡などを出土した日上天王山古墳[32]（墳長約57ｍの前方後円墳）、さらに市内最大の美和山１号墳[33]（墳長約80ｍの前方後円墳）が築かれる。以上は前期前半頃に位置づけられ80～90ｍ級の大型古墳を含むが、美作では以後これを上回る規模の古墳は築かれていない。続いて前期中葉～後半には、銅鏡や竪矧板革綴短甲を出土した奥の前１号墳[34]（墳長約68ｍの前方後円墳）、竜山石製[35]の石棺をもち銅鏡２面などの出土を伝える正仙塚古墳[36]（墳長約56ｍの前方後円墳）が築造されている。津山の東に位置する勝英地域では、植月寺山古墳以降も美作市楢原寺山古墳[37]（墳長約46ｍ）、勝央町岡高塚古墳[38]（墳長約56ｍ）、同町美野高塚古墳[39]（墳長約65ｍ）など前期を通じて前方後方墳が多くみられ、山陰地方との関係が指摘されている。

中期（４世紀末～５世紀末頃）には、県南部において巨大前方後円墳が築かれたが、美作地方では前方後円墳がみられなくなり途絶えてしまう。代わって、国分寺飯塚古墳[40]（径約38ｍの円墳）や多数の武器を副葬する橋本塚１号墳[41]（径約30ｍの円墳）、美作最大の方墳とされる大日古墳[42]（一辺約34ｍ）など、30～40ｍ級の大型円墳・方墳が首長墓として認められる。

中期末（５世紀末頃）、津山盆地の中央部に墳長約60ｍの前方後円墳である十六夜山古墳が出現する。二重の盾形周濠を伴い、円筒・朝顔形・盾形・石見型など多量の埴輪が出土している[43]。二重周濠や石見型埴輪は、備前あるいは畿内地域との関係を示しており、突如現れた前方後円墳の背景に、そうした外部勢力との関わりを想定することができる。このあと後期中葉にかけて、津山盆地周辺で築造される古墳には、十六夜山古墳を頂点とする階層性が認められる。井口車塚古墳[44]、日上畝山58号墳[45]、玉琳大塚古墳[46]、高野山根１号墳[47]、中宮１号墳[48]など、十六夜山古墳の半分程度の規模をもつ前方後円墳ないし帆立貝形古墳が吉井川流域に分布しており、さらに下位に小規模な円墳群が位置づけられる。佐良山古墳群もこの頃から形成され始め、中でも笹山南西麓（ＪＲ津山線佐良山駅南方）には、高野山根１号墳、中宮１号墳などの首長墳が集中している。

後期中葉（６世紀中葉頃）には、美作地域にも横穴式石室が導入され、以後急速に普及する。美作地域の横穴式石室は、全長９ｍ前後以上のものが地域の首長墓と考えられ、そのうち万燈山古墳[49]や鏡野町井上大塚古墳[50]など大規模なものは全長11～12ｍに達する。横穴式石室を内蔵する前方後円墳は、津山市内では中宮１号墳、高野山根２号墳[51]、鴻の池２号墳[52]の３基のみで減少傾向にあり、いずれも墳長30ｍ前後の小規模なものである。６世紀末頃には前方後円墳はつくられなくなり、以後は首長墓でも主に円墳を採用する。佐良山古墳群には、中宮１号墳、桑山１・２号墳[53]など導入期の横穴式石室が集中しており、また高野山根２号墳、剣戸13・14号墳[54]などの大規模な石室も多くみられる。先進的な墓制をいち早く導入した有力な地域であったといえよう。

有力首長墓とされる前方後円墳や大型円墳・方墳のほかに、各地に密集して築かれる小墳群がある。佐良山古墳群の調査を行った近藤義郎は、このような小規模墳の大多数が古墳時代後期の所産であり、この時期急速に、爆発的に古墳の数が増えると指摘した。そしてこれらを「家父長的家族」の墓と考え、古い共同体の分解を示す大きな社会的変化と評価した[55]。近藤による調査と論文は考古学・古代史学界に大きな影響を与え、「群集墳」という概念を定着させた。しかし、その後の大規模な発掘調査成果の蓄積により、小型古墳の群集は古墳時代後期だけでなく、弥生時代以来古墳時代全般にわたっ

て存在することが知られるようになった[56]。それらは、①中期中葉頃までは低平な方墳が中心だが、②中期後葉以降、比較的高い盛土をもつ円墳に変わって築造数が増加し、③後期後半になると竪穴系埋葬施設から横穴式石室に変わる、という変化をたどる[57]。以上のうち①を弥生時代以来の小型墳墓群の流れをくむものと考え、②③を特に「群集墳」とし、さらに②を「古式群集墳」あるいは「初期群集墳」と呼ぶことが多い[58]。美作地域では、①の例として真庭市中原古墳群[59]、②の例として日上畝山古墳群[60]、③の例として糠山古墳群[61]などが挙げられる。ただし、佐良山古墳群では②から③にかけて連続して造営がなされており、必ずしも明確に区分できるものではない。これら群集墳の盛行の背景には、農耕、鍛冶、製鉄、製陶など著しい生産力の発展によって小規模ながらも古墳を築き得る新興勢力や有力家族が台頭し、そうした階層をヤマト王権が直接掌握しようとする状況などが想定されている。さらに、有力家族の軍事的編成、渡来系氏族の組織化なども指摘される。

前方後円墳の築造が停止する古墳時代終末期（６世紀末～７世紀頃）に至っても、横穴式石室を内蔵する小規模墳は築造が続く。この時期の美作地域を大きく特徴づけるのが、土師質亀甲形陶棺である。陶棺は全国でおよそ 800 の遺跡から出土しているが[62]、そのうち約７割が岡山県内で、さらに県内の約７割を美作地域が占め、市町村別では津山市が最多である。終末期も後半（７世紀後半）になると古墳の築造数は徐々に減り、横穴式石室の規模も縮小する。この時期の群集墳は糠山古墳群などで調査されている。

古　代

和銅６（713）年、備前国の６郡を割いて美作国が新設された。国府や国分寺・国分尼寺などの主要な施設が現在の津山市内に置かれ、美作国の中心をなしている。国府は津山市街地北方の高台に位置し、発掘調査によって国府前身官衙（苫田郡衙か）を含む７世紀後半から 12 世紀にかけての遺構が明らかになっている[63]。国府の北約 1.5㎞に所在する大田茶屋遺跡では、８世紀後半から９世紀前半にかけての建物群が検出されている。性格は不明であるが公的な宗教施設、軍事施設等の可能性が示されている[64]。国分寺は、吉井川と加茂川の合流点近くに置かれ、国府から直線で約 4.9㎞の距離にある。２町四方の寺域の中に、国分寺式伽藍配置をとる主要遺構が確認されており、創建は８世紀中頃で、13 ～ 14 世紀頃に廃絶したと推定されている[65]。国分尼寺は国分寺の西約 450 ｍにあり、発掘調査によって礎石建物などが検出された[66]。郡衙と推定される遺跡として、宮尾遺跡がある。長大な建物が東西及び南北方向に棟を揃え、久米郡衙に比定されている[67]。宮尾遺跡に近接する久米廃寺は、７世紀後半に創建されたとみられる寺院で、宮尾遺跡との関連が深い[68]。

美作における製鉄は、６世紀後半に遡るとされる大蔵池南遺跡[69]が初現で、７世紀の緑山遺跡[70]、８世紀のキナザコ遺跡[71]などと続く。８世紀を中心とする一貫西遺跡では、製鉄炉とともに、鉄滓や羽口を多く出土する集落遺構が検出されており、鉄生産に関わった集団の居住あるいは作業空間であったと推測されている[72]。今回の調査地点の近隣においても横口付製炭窯や鉄滓の出土が知られ、周辺で古代に製鉄が行われていたとみられる。

中　世

中世には美作にも守護職が置かれたが、守護所と推定されている院庄館跡は、一部発掘調査が行われ、平安時代末期から鎌倉時代前半頃の掘立柱建物や井戸、土塁などの遺構が検出されている[73]。また、美作地域は山陰と山陽を結ぶ交通の要衝であり、周辺諸勢力がたびたび侵入し攻防を繰り返した。南北朝時代には播磨赤松氏や伯耆山名氏、戦国時代には出雲尼子氏、安芸毛利氏、備中三村氏、備前浦

上氏、宇喜多氏などが攻め込み、戦場となっている。中世の城館遺跡数は美作で約 400 か所が確認されている[74]。

室町時代の中頃、美作守護となった山名教清は、その一門の将、山名忠政に命じ、美作国中央の鶴山に城砦を築かせた。これが津山城の起源とされるが、応仁の乱後、山名氏の退去により廃城となる。

近　世

関ヶ原の戦い後、美作国は岡山城を拠点とする小早川秀秋が支配したが、彼の死後の慶長８（1603）年、森忠政が 18 万 6,500 石を領して入国し津山藩が成立する。山名氏旧塁の鶴山を津山と改めて城地とし、城と城下町の建設に着手した。石垣に使われた石材は「津山石」と通称される凝灰岩で、吉井川の南側一帯などから切り出された。城下町は、津山城を中心として吉井川北岸に形成され、現在の津山市街の基礎となった。津山藩主は森氏４代の後、松平氏に替わり明治に至る。

近　代

明治４（1871）年の廃藩置県により津山県が置かれ、間もなく美作地域全体が北条県となった。明治９（1876）年には岡山県と合併し、ほぼ現在の県域となる。近代国家建設に向け、津山においても産業の育成や交通網の整備などが進められた。吉井川の高瀬舟も大いに栄え、津山と西大寺（現岡山市東区）との間には客船が運行された。明治 31（1898）年には中国鉄道（現ＪＲ津山線）の津山（現津山口駅）－岡山間が開通し、現津山口駅周辺は津山の玄関口として栄えた。付近に今も残る作州民芸館（旧土居銀行本店）、旧中島病院本館などの洋館がそれを物語っている。　　（尾上）

註

（１）近藤義郎・中島壽雄『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952

（２）稲田孝司編『恩原２遺跡』岡山大学考古学研究室　1996

稲田孝司編『恩原１遺跡』恩原遺跡発掘調査団　2009　ほか

（３）「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』７　岡山県教育委員会　1975

（４）「大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 51 集　津山市教育委員会　1994

（５）「大田茶屋遺跡２・大田西奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』129　岡山県教育委員会　1998

（６）「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』８　岡山県教育委員会　1975

（７）「稲荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 35 集　津山市教育委員会　1990

（８）「大河内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』216　岡山県教育委員会　2008

（９）註５

（10）土居徹「竹田遺跡」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県　1986

（11）「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 76 集　津山市教育委員会　2006

（12）「山ノ奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』180　岡山県教育委員会　2004

（13）「堀坂地内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 58 集　津山市教育委員会　1997

（14）「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 11 集　津山市教育委員会　1982

（15）「押入兼田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 69 集　津山市教育委員会　2000

（16）註 13

（17）「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184　岡山県教育委員会　2004

（18）「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192　岡山県教育委員会　2005

(19) 中山俊紀「高橋谷遺跡」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020
(20) 近藤義郎ほか『津山弥生竪穴住居群の研究―西地区―』津山市・津山郷土館　1957
(21)「沼Ｅ遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第８集　津山市教育委員会　1981
「沼Ｅ遺跡Ⅰ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 71 集　津山市教育委員会　2001
(22) 中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備』第 15 集　古代吉備研究会　1993
(23)「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 10 集　津山市教育委員会　1981
(24)「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 30 集　津山市教育委員会　1990
(25) 註 14
(26)「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17　岡山県教育委員会　1977
(27)「有本遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 62 集　津山市教育委員会　1998
(28)『所報吉備』第 70 号　岡山県古代吉備文化財センター　2021
(29) 河本清「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山市文化財年報』１　津山市教育委員会　1975
(30) 光永真一「植月寺山古墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県　1986
(31) 梅原末治「美作郷村観音山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』３　日本古文化研究所　1938
(32)「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 60 集　津山市教育委員会　1997
(33)「史跡美和山古墳群保存整備事業報告書」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 42 集　津山市教育委員会　1992
(34) 澤田秀実「奥の前１号墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020
(35) 間壁忠彦・間壁葭子「石棺研究ノート（一）石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第９号　倉敷考古館　1974
(36)「正仙塚古墳測量調査報告」『年報津山弥生の里』第３号　津山市教育委員会　1996
(37) 近藤義郎「楢原寺山古墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県　1986
澤田秀実「楢原寺山古墳」『美作町史』資料編１　美作市　2006
(38) 倉林眞砂斗・澤田秀実編『美作の首長墳―墳丘測量調査報告―』吉備人出版　2000
(39) 註 38
(40)「国分寺飯塚古墳測量調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 83 集　津山市教育委員会　2014
(41)「橋本塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 73 集　津山市教育委員会　2003
(42)「大日古墳測量調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 83 集　津山市教育委員会　2014
(43)「十六夜山古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』130　岡山県教育委員会　1998
(44)「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 52 集　津山市教育委員会　1994
(45)「日上畝山古墳群Ⅱ―範囲確認調査報告―」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 78 集　津山市教育委員会 2007
(46) 今井堯「津山市川崎玉琳大塚調査報告」『津山市文化財調査略報』第１集　津山市教育委員会　1961
平井泰明「玉琳大塚古墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020
(47) 安川豊史「高野山根１号墳・２号墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県　1986
(48) 近藤義郎「中宮第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952
(49)『万燈山古墳』岡山県苫田郡加茂町文化財保護委員会　1974
豊島雪絵「万燈山古墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020

(50) 土居徹「井上大塚古墳（まかべ 13 号墳・井上火の釜)」『鏡野町史』考古資料編　鏡野町　2000
(51) 内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備』第 13 集　古代吉備研究会　1991
(52) 澤田秀実「鴻の池２号墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020
(53)『所報吉備』第 67 号・第 68 号　岡山県古代吉備文化財センター　2019・2020
(54) 安川豊史「剣戸塚西塚・東塚」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県　1986
平井泰明「剣戸古墳群」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020
(55) 近藤義郎「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952
(56) 石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第４巻　朝鮮三国と倭国　学生社　1980　ほか
(57) 和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第５巻　近畿Ⅰ　角川書店　1992
安川豊史「古墳時代における美作の特質―群小古墳の動向と評価―」『吉備の考古学的研究』（下）　山陽新聞社　1992　ほか
(58) 註 56、白石太一郎『古墳と古墳群の研究』塙書房　2000　ほか
(59)「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会　1995
(60)「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 63 集　津山市教育委員会　1998、註 44
(61)『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980
(62) 津山郷土博物館『平成 25 年度特別展図録　土の棺に眠る―美作の陶棺―』2013
(63)「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』６　岡山県教育委員会　1973
「美作国府跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 15 集　津山市教育委員会　1984
「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 50 集　津山市教育委員会　1994
「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 56 集　津山市教育委員会　1995
「美作国府跡発掘調査概要」『年報津山弥生の里』第６号　津山市教育委員会　1999
「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』228　岡山県教育委員会　2011
(64)「大田茶屋遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』96　岡山県教育委員会　1994、註５
(65)「美作国分寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第５集　津山市教育委員会　1980
「美作国分寺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 72 集　津山市教育委員会　2002
(66)「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 12 集　津山市教育委員会　1983
(67)「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４　岡山県教育委員会　1973
(68)「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４　岡山県教育委員会　1973
(69)『糠山遺跡群』Ⅳ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1982
(70)「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 19 集　津山市教育委員会　1986
(71)『キナザコ製鉄遺跡』加茂町教育委員会　1980
(72)「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 33 集　津山市土地開発公社・津山市教育委員会　1990
(73)「史跡院庄館跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第１集　津山市教育委員会　1974
「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第７集　津山市教育委員会　1981］
(74)『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第３冊―美作編―　岡山県教育委員会　2020

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

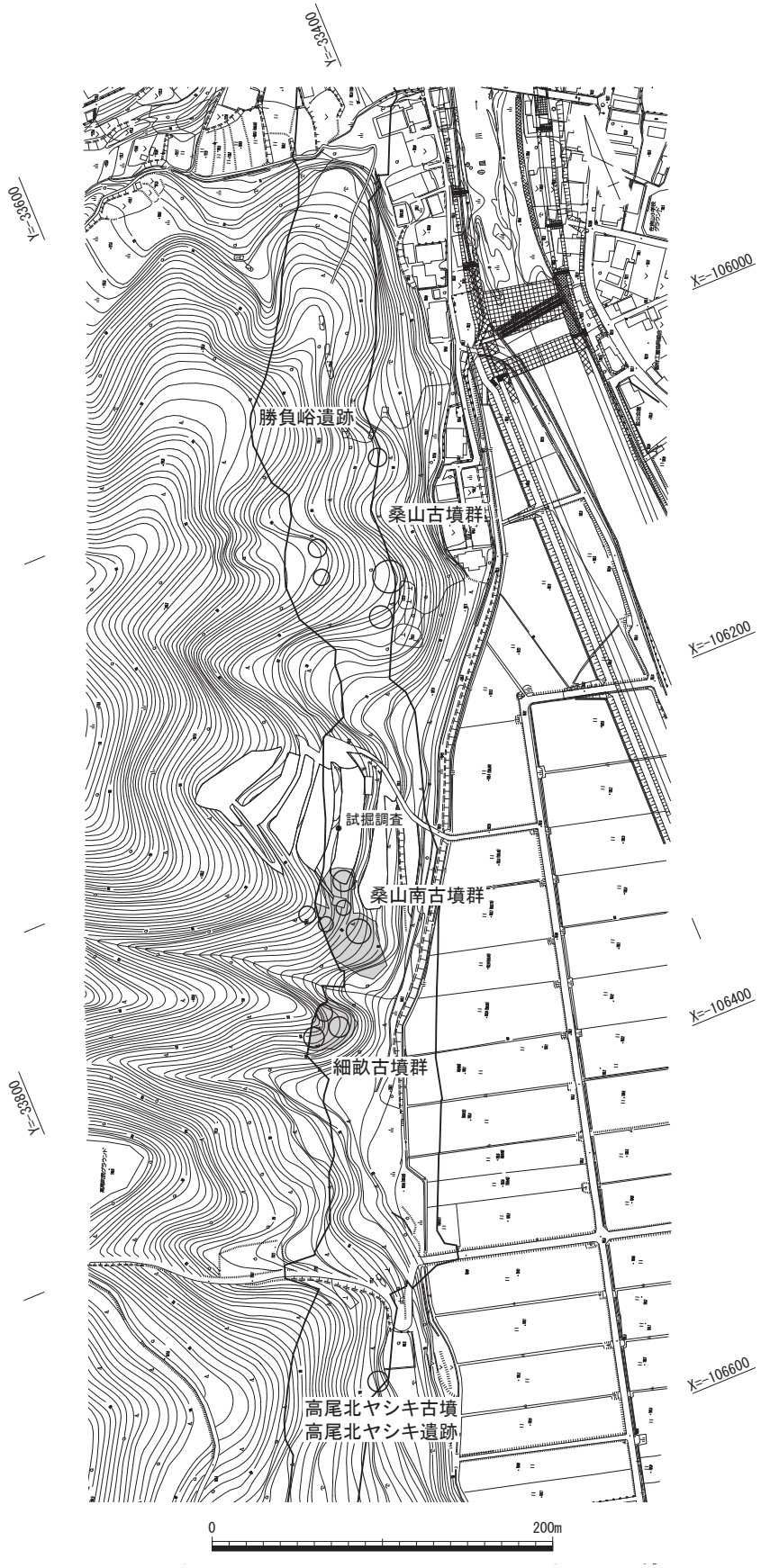
第１節　調査に至る経緯

一般国道 53 号は、岡山市北区から鳥取市までを結ぶ延長約 140 ㎞の主要幹線道路である。津山南道路は、この国道 53 号の久米郡美咲町打穴中から津山市平福に至る区間に並行する延長 5.4 ㎞のバイパスであり、地域高規格道路「空港津山道路」の一部を構成する。交通安全や災害時の代替ルート確保、救命救急活動支援をはじめ、県南部と津山周辺圏の連携強化を促進し、沿線地域の発展を図るため、久しく待ち望まれ、平成 15 年度に都市計画決定され、翌 16 年度に事業化、19 年度に用地化着手、26 年度から工事着手されている。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いは、都市計画決定以前から今日に至るまで、岡山県教育庁文化財課（当初は文化課、以下県文化財課）と事業を管轄する国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所（以下国道事務所）間で協議を重ねてきた。

まず、平成 14 年９月に県教育委員会教育長宛「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて」の文書によって、国道事務所から計画区域内における埋蔵文化財包蔵地の有無、名称、位置、及び法的手続きについての照会があった。これに対し 10 月、県文化財課は周知の埋蔵文化財包蔵地として７基の古墳と集落遺跡等３遺跡の存在を回答するとともに、現地において計画路線範囲の確認が困難であったため、計画が決定し、路線境界の確定後、再度分布調査が必要であると示した。計画路線内に所在する古墳は佐良山古墳群の支群として知られていた。佐良山古墳群は、津山市市街の南西部、皿川流域の丘陵に築造された６～７世紀の古墳群の総称で、複数の支群からなる約 170 基を超える群集墳である。昭和 20 年代の近藤義郎氏による発掘調査や詳細な分布調査に基づく『佐良山古墳群の研究』(1) は、古墳時代後期の墓制や家父長制社会に関する研究の原点として後の研究に多大な影響を与え、学史的にも重要な古墳群として著名である。また、支群の一つである中宮古墳群は県の重要遺跡となってい

第３図　計画路線（1/50,000）



第４図　計画路線と調査対象遺跡（1/4,000）

網がけは本書収載遺跡

る。このことに鑑み、県文化財課は埋蔵文化財保護に関する重要な課題として認識した。

平成16年３月、県文化財課は地元津山市教育委員会職員の支援を得、分布調査を実施したものの、荒廃が進む山林の中で現認できなかった古墳が複数あった。この後も現地確認を行い、平成22年１月に分布調査成果を国道事務所に示したが、なお所在不明な古墳があり、現認した古墳にも名称と位置の錯誤があった。

さらに平成23年度に再び詳細分布調査を実施し、不明であった古墳を現認し、ようやく『佐良山古墳群の研究』に記載された古墳名称と位置をほぼ整合させ、特定した。こうして平成24年度に、倭文川以北の路線内に10基、以南に２基の古墳が所在することを国道事務所に改めて提示し、その保存について重ねて要望し、協議を継続した。

平成26年10月には、平成23年度の分布調査によって倭文川以南の津山市福田地内で新たに発見した高まりについて試

掘調査を実施し、古墳であることを確認し、マンドウ山古墳と名称した(2)。

文化財課としては、この時点までに路線内の所在が明らかとなった計 13 基の古墳の取り扱いと保存についての基本方針を以下のように整理した。まず、第１に実施設計にあたり現状保存の配慮を求める、第２に路線境界に接する古墳については工事の影響が及ばないように求める、第３にやむなく現状保存ができない古墳については、十分な体制と調査期間を確保して記録保存の措置を講ずる。この方針をもとに、平成 27 年４月、国道事務所に再度要望を行い、この後も協議を継続した。また、所在が明らかな古墳以外の遺物散布地等については、内容と広がりを把握するため順次確認調査を実施し、その結果に基づき記録保存調査の対応を図ることとした。

同年５月には、平成 14 年 10 月の県文化財課回答に基づいて現地に用地幅杭が打設されたことから、国道事務所から「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取扱について」の再照会があった。これに対し６月に県文化財課は、路線内の包蔵地位置を明示するとともに、文化財保護法第 94 条に基づく通知が必要であること、実施設計に際して文化財保護に十分な配慮をすること、事業実施にあたっては事前の発掘調査が必要であること、さらに調査の結果、重要遺構等の発見時には別途保存について協議を求める、と回答した。この後、用地取得状況及び工事施工計画と具体的な発掘調査実施計画の調整を進めた。こうした中で、平成 28 年９月７日付で国道事務所から文化財保護法第 94 条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、県文化財課は発掘調査の実施を勧告した。

以上の経緯を経て、津山南道路改築工事に伴う記録保存調査は、平成 29 年１月に諸条件の整った桑山南１号墳から着手することとなった。（大橋）

註

（１）近藤義郎・中島寿雄『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952

（２）「一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う試掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』45　岡山県教育委員会　2015

第２節　発掘調査の経過

１　調査対象古墳と調査工程

桑山南古墳群については、古くから１～３号墳の３基が周知されていたが、本事業に伴う協議段階の分布調査によって新たに４号墳が認識された。ただし、この４号墳については大半が国道用地外にあり、用地内にかかると思われる墳裾部分のみが調査対象となった。また３号墳の調査中、１号墳と３号墳の間を通っていた既存舗装路を撤去したところ、その下から竪穴式石室が発見され、墳丘も伴うことが確認されたため、これを５号墳とした。細畝古墳群についても３基の古墳が周知されており、これらを調査対象とした。

発掘調査は、桑山南１・２・４号墳と細畝古墳群を平成 30 年１月から平成 31 年１月まで、桑山南３・５号墳を令和元年 11 月から令和２年３月までの期間に実施した（第５図）。桑山南３・５号墳の調査期間が遅れたのは、隣接するグラウンドゴルフ場との調整が必要であったことなどによる。

２　平成 29 年度

平成 29 年度は、桑山南４号墳と、１号墳南側の緩斜面地を調査対象とした。３か月間の調査で、対象面積 630 ㎡、担当調査員は３名であった。４号墳は大部分が国道用地外にあり、調査対象となったのは墳裾付近のみであるが、流失のため明確な墳端は検出されなかった（なお、津山市教育委員会が民間開発に伴い、令和２年３～５月にかけて発掘調査を実施している(1)）。また、近接して２号墳の周溝の一部を確認し、２号墳に伴うとみられる埴輪などが出土した。１号墳南側の緩斜面地では、調査前の分布調査において、北西端部でわずかな高まりが認められ（標高 121 m付近）、古墳の可能性が推定されていたが、調査の結果古墳と考えられる遺構は確認されなかった。１号墳の南側は一段と傾斜が緩く平坦で、削平された古墳その他の遺構が存在する可能性が考えられた。調査の結果、この部分から古墳時代後期の土坑墓・箱式石棺墓群及び中世の土坑墓群が検出され、想定外の成果が得られた。また、２月には埋蔵文化財保護調査指導会を開催し、指導を受けた。

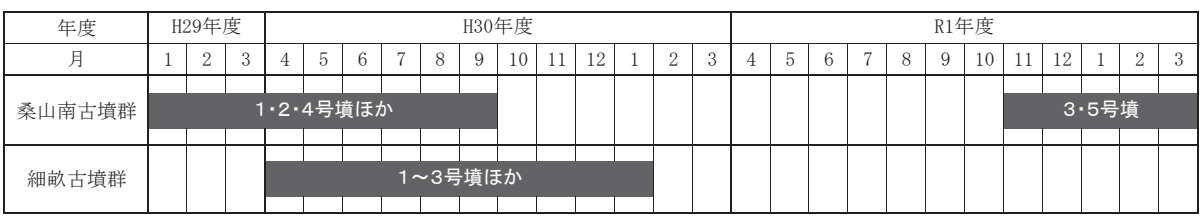
３　平成 30 年度

平成 30 年度は、桑山南１・２号墳と細畝古墳群の調査を行った。４月から１月までを要し、その後桑山古墳群（本書未収載）の調査に移った。調査対象面積は桑山南１・２号墳が 470 ㎡、細畝古墳群が 620 ㎡で、担当調査員は途中で交替があったが常時４名体制であった。

桑山南１・２号墳の調査は、４月から９月まで６か月間を要した。いずれも石室内の残存状態が良好で、特に１号墳では原位置を保つ陶棺２基に加え、多数の土器が出土した。うち１基の陶棺内から出土した大刀は、X線写真を撮影したところ象嵌文様を確認し注目された。２号墳の石室からも鉄鐸など注目すべき遺物が出土した。桑山南古墳群の全容が明らかになってきた６月 26・27 日には現地説明会を開催し、２日間で約 180 名の参加者があった。その翌日には１号墳石室内の陶棺を搬出し、

第１表　本書関連調査一覧

	遺跡・地点等	種別	年度	期間	面積（㎡）	担当者
1	桑山南古墳群（４号墳ほか）	発掘調査	平成 29	H30. 1. 4 ～ H30. 3. 16	630	尾上元規・小嶋善邦・森本直人
2	桑山南古墳群（１・２号墳）	発掘調査	平成 30	H30. 4. 9 ～ H30. 9. 18	470	亀山行雄・尾上元規・澤山孝之・小嶋善邦・藤井翔平
3	細畝古墳群（１～３号墳）	発掘調査	平成 30	H30. 4. 12 ～ H31. 1. 16	620	亀山行雄・尾上元規・澤山孝之・小嶋善邦・藤井翔平
4	桑山南古墳群（３・５号墳）	発掘調査	令和元	R1. 11. 21 ～ R2. 3. 13	465	尾上元規・小嶋善邦・藤井雅大・四田寛人
5	桑山南３号墳北地点（津山市高尾 1594）	試掘調査	令和元	R2. 2. 10	5. 2	尾上元規

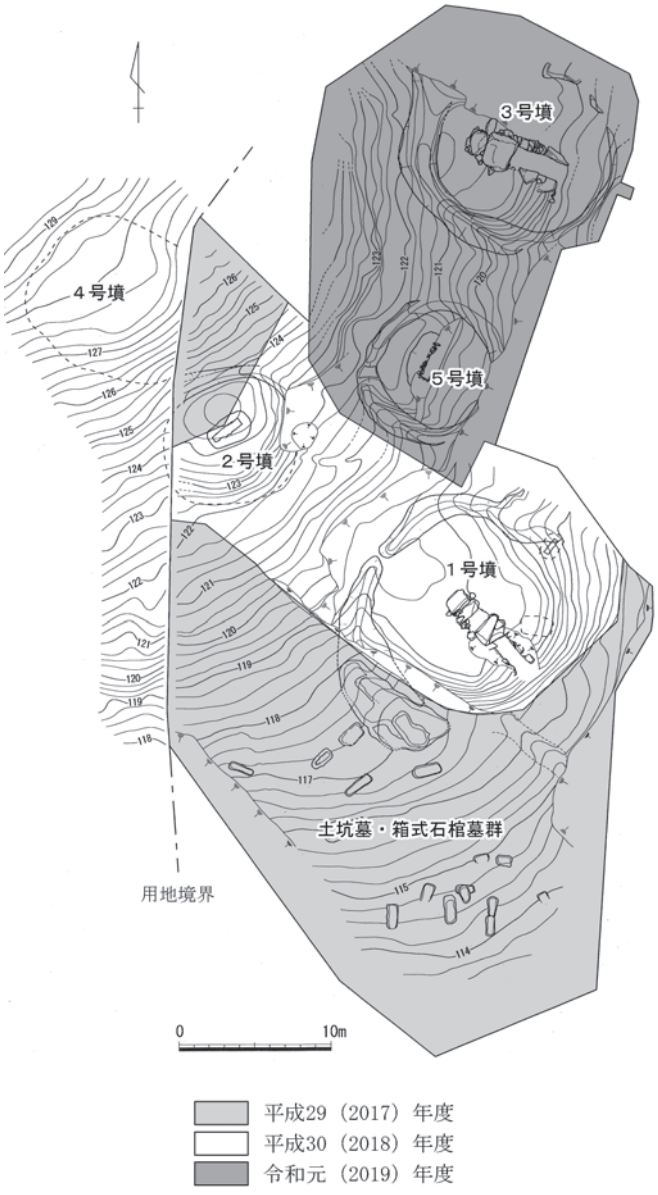


第５図　発掘調査の工程

続いて７月 11 日にラジコンヘリコプターによる空撮を行った。

細畝古墳群も４月から調査を開始したが、当初は桑山南古墳群を優先し、調査の進捗に合わせて徐々に細畝古墳群に調査の中心を移していった。そのため細畝古墳群の調査終了は１月で、10 か月を要したことになる。細畝古墳群のうち最も規模の大きい３号墳は、後世の採石により石室が大破していたが、多数の土器や武器、馬具、装身具などが出土し、豊かな副葬品の一端が明らかになった。また、１号墳は石室の残存状況が比較的よく、内部から陶棺と箱式石棺が検出された。細畝古墳群の全容が明らかになってきた 11 月 13・14 日には現地説明会を開催し、２日間で約 120 名の参加者があった。続いて 11 月 19 日にはドローンによる空撮を行った。

以上の調査の中で、横穴式石室が比較的よく保存されていた桑山南１号墳と細畝１号墳の２基については、石室の三次元レーザー測量を外部委託で実施し、詳細な記録を作成した。また、埋蔵文化財保護調査指導会は年度内に計３回開催し（７月･11 月･２月）、指導を受けた。



第６図　桑山南古墳群年度別調査区割（1/500）

４　令和元年度

令和元年度は、桑山南古墳群北東部にある３・５号墳の調査を行った。前年度から継続していた桑山古墳群（本書未収載）の調査終了に伴って開始し、11 月から３月までの４か月間に実施した。調査対象面積は 465 ㎡で、担当調査員は４名体制であった。

３号墳は、周辺を大きく改変されていたものの横穴式石室の残りはよく、石室内に原位置を保つ陶棺２基が検出された。うち１基は蓋も載った状態であり、棺内から副葬大刀などが発見された。２月４日にはこれらの陶棺を搬出し、続いて２月７日に石室の三次元レーザー測量を外部委託で実施した。５号墳は、３号墳の調査に伴う表土掘削及び既存道路の撤去に伴って新たに発見された古墳であり、急遽調査対象に組み込まれた。道路造成時に破壊を受けていたものの、竪穴式石室内に人骨が遺存し、副葬品もほぼ原位置を保っていた。埋蔵文化財保護調査指導会は、桑山古墳群の調査も含め年度内に計３回開催し（７月・10 月・２月）、指導を受けた。

なお、調査中に３号墳の北約 30 ｍの地点で横穴式石室の可能性のある大型石材が露出している状

況が注意され、２月に試掘調査を行っている（第６節）。　（尾上）

註

（１）仁木康治「岡山県津山市桑山南４号墳の発掘調査概要」『中四研だより』第 46 号　中国四国前方後円墳研究会　2020

写真１　埋蔵文化財保護調査指導会（平成 30 年２月 16 日）

写真２　桑山南古墳群現地説明会（平成 30 年６月 26 日）

第３節　報告書作成の経過

報告書の作成は、令和元年 11 月から令和３年３月の１年５か月間をかけて行った。対象遺構は古墳８基のほか、箱式石棺墓・土坑墓 18 基などがある。対象遺物数は、整理箱（コンテナ）に換算して約 168 箱であるが、この中に陶棺６基分を含んでいる。令和元年度は、桑山南１・２・４号墳及び１号墳南側で検出した箱式石棺墓・土坑墓群などを対象とし、調査員１名が担当した。令和２年度は、桑山南３・５号墳及び細畝古墳群などを対象とし、担当調査員は途中で交替があったが常時１～２名の体制であった。

遺物整理にあたっては、大型遺物である陶棺の復元に多くの時間を費やしたが、令和２年 11 月には完了し､復元作業を通じて製作技法等の様々な知見が得られた。陶棺の実測には主にトータルステーションを用いた。金属製遺物のうち桑山南１号墳出土の象嵌装大刀については、重要遺物であるためクリーニングと保存処理、材質調査などを公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。その他の金属製品については当センターで処理を行っている。図面のトレースは、遺構及び陶棺実測図をデジタルトレース、その他の遺物実測図を手描きトレースとした。遺構・遺物のトレース作業が終了次第、割り付けと文章の執筆を進め、令和３年３月には終了した。

写真３　陶棺復元作業

また、発掘現場で開催した埋蔵文化財保護調査指導会において、報告書作成の進捗状況や内容について報告し指導を受けた（令和２年２月・８月・11 月・令和３年３月の計４回）。　（尾上）

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制

平成 29 年度

岡山県教育委員会

教 育 長	竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長	日比謙一郎

文化財課

課　　長	小見山　晃
参　　事（文化財保存・活用担当）	横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田　英樹
主　　幹	平井　健太
主　　任	上栫　　武

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	宇垣　匡雅
次　　長（総務課長事務取扱）	髙田　　亮
参　　事（文化財保護担当）	大橋　雅也
＜総　務　課＞	
総括副参事（総務班長）	金藤　賢史
主　　任	浦川　徳子
主　　任	東　　恵子
＜調査第二課＞	
課　　長	髙田恭一郎
総括副参事（第一班長）	澤山　孝之
総括副参事（第二班長）	尾上　元規（調査担当）
主　　幹	小嶋　善邦（調査担当）
主　　事	森本　直人（調査担当）

平成 30 年度

岡山県教育委員会

教 育 長	鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長	日比謙一郎

文化財課

課　　長	大西　治郎
参　　事（文化財保存・活用担当）	横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田　英樹
主　　幹	上栫　　武
主　　任	原　　珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	向井　重明
次　　長（総務課長事務取扱）	髙田　　亮
参　　事（文化財保護担当）	大橋　雅也
＜総　務　課＞	
総括主幹（総務班長）	甲元　秀和
主　　任	浦川　徳子
主　　任	東　　恵子
＜調査第二課＞	
課　　長	亀山　行雄（調査担当）
総括副参事（第一班長）	澤山　孝之（調査担当）
総括副参事（第二班長）	尾上　元規（調査担当）
主　　幹	小嶋　善邦（調査担当）
主　　事	藤井　翔平（調査担当）

令和元年度

岡山県教育委員会

教 育 長	鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長	髙見　英樹

文化財課

課　　長	大西　治郎

参　　事（文化財保存・活用担当）　横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）　柴田　英樹
主　　幹　河合　　忍
主　　任　原　　珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　向井　重明
次　　長（総務課長事務取扱）　佐々木雅之
参　　事（文化財保護担当）　大橋　雅也
総括参事（調査第二課長事務取扱）　亀山　行雄

〈総　務　課〉

総括主幹（総務班長）　甲元　秀和
主　　任　東　　恵子
主　　任　多賀　克仁

〈調査第二課〉

総括副参事（第一班長）　澤山　孝之
総括副参事（第二班長）　尾上　元規（調査担当）
副 参 事　小嶋　善邦（調査担当）
主　　事　藤井　翔平（調査・整理担当）
主　　事　藤井　雅大（調査担当）

〈調査第三課〉

課　　長　弘田　和司
総括主幹（第一班長）　米田　克彦
主　　事　四田　寛人（調査担当）

令和２年度

岡山県教育委員会

教 育 長　鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長　髙見　英樹

文化財課

課　　長　小林　伸明
参　　事（文化財保存・活用担当）　大橋　雅也
総括参事（埋蔵文化財班長）　柴田　英樹
主　　幹　河合　　忍
主　　事　九冨　　一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　小見山　晃
次　　長（総務課長事務取扱）　佐々木雅之（～ 10 月 14 日）
参　　事（文化財保護担当）　亀山　行雄

〈総　務　課〉

課　　長　甲元　秀和（10 月 15 日～）
総括副参事（総務班長）　甲元　秀和（～ 10 月 14 日）
総括主任（総務班長）　多賀　克仁（10 月 15 日～）
主　　任　多賀　克仁（～ 10 月 14 日）
主　　任　井上　裕子

〈調査第二課〉

課　　長　澤山　孝之
総括副参事（第一班長）　尾上　元規（調査・整理担当）
副 参 事　氏平　昭則（調査担当）
主　　事　藤井　雅大（調査担当）
総括副参事（第二班長）　小嶋　善邦（調査・整理担当）
主　　事　藤井　翔平（整理担当）
主　　事　藤田　京佑（調査担当）

第５節　日誌抄

平成 29 年度

１月４日（木）　発掘調査事業開始
１月 10 日（水）　桑山南古墳群（１・２・４号墳ほか）調査開始
２月 16 日（金）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

平成 30 年度

４月 12 日（木）　細畝古墳群調査開始
６月 26 日（火）・27 日（水）　桑山南古墳群現地説明会開催（参加者 182 名）
６月 28 日（木）　桑山南１号墳石室内の陶棺を搬出
７月 11 日（水）　桑山南古墳群（１・２・４号墳ほか）全景写真撮影（ラジコンヘリによる空撮）
７月 23 日（月）　桑山南１号墳横穴式石室三次元レーザー測量
７月 26 日（木）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
９月 18 日（火）　桑山南古墳群（１・２・４号墳ほか）調査終了
11 月６日（火）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
11 月 13 日（火）・14 日（水）　細畝古墳群現地説明会開催（参加者 120 名）
11 月 19 日（月）　細畝古墳群全景写真撮影（ドローンによる空撮）
12 月 19 日（水）　細畝１号墳横穴式石室三次元レーザー測量
１月 16 日（水）　細畝古墳群調査終了
２月 14 日（木）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

令和元年度

７月 12 日（金）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
10 月 30 日（水）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
11 月１日（金）　報告書作成作業開始
11 月 21 日（木）　桑山南古墳群（３・５号墳）調査開始
２月４日（火）　桑山南３号墳石室内の陶棺を搬出
２月７日（金）　桑山南３号墳横穴式石室三次元レーザー測量
２月 10 日（月）　桑山南古墳群試掘調査（３号墳北）
２月 20 日（木）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
３月３日（火）　桑山南古墳群（３・５号墳）全景写真撮影
３月 13 日（金）　桑山南古墳群（３・５号墳）調査終了

令和２年度

８月 18 日（火）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
11 月 13 日（金）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
３月 11 日（木）　埋蔵文化財保護調査指導会開催
３月 31 日（水）　報告書作成作業終了

第２表　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類 名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第 153 号 R2. 3. 31	周知外	―	津山市高尾 1594	5. 2	一般国道 53 号（津山南道路）改築	無	岡山県古代吉備文化財センター所長	尾上元規	R2. 2. 10

埋蔵文化財発掘の通知（法第 94 条）

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	通知日	主な 勧告事項
1	教文埋 第 857 号 H28. 9. 28	古墳 桑山１号墳ほか	津山市高尾		道路	国土交通省中国整備局岡山国道事務所長	H28. 9. 7	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類 名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第 101 号 H30. 1. 4	周知	古墳 桑山南古墳群	津山市高尾 1582 ほか	630	一般国道 53 号（津山南道路）改築	岡山県古代吉備文化財センター所長	尾上元規 小嶋善邦 森本直人	H30. 1. 4 ～ H30. 3. 31
2	岡吉調 第３号 H30. 4. 1	周知	古墳 桑山南古墳群・ 細畝古墳群ほか	津山市高尾 1585 ほか	2,280	一般国道 53 号（津山南道路）改築	岡山県古代吉備文化財センター所長	亀山行雄 澤山孝之 尾上元規 小嶋善邦 藤井翔平	H30. 4. 2 ～ H31. 3. 29
3	岡吉調 第１号 H31. 4. 1	周知	古墳 桑山古墳群ほか	津山市平福・高尾	4,550	一般国道 53 号（津山南道路）改築	岡山県古代吉備文化財センター所長	尾上元規 小嶋善邦 藤井翔平 藤井雅大 四田寛人	H31. 4. 1 ～ H32. 3. 31

埋蔵文化財発見通知（法第 100 条第２項）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第 1757 号 H30. 3. 23	須恵器・土師器・金属製品・石器ほか 計　整理箱５箱	津山市高尾 桑山南古墳群	H30. 1. 4 ～ H30. 3. 16	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター
2	教文埋 第 1961 号 H31. 3. 27	土器（弥生土器・須恵器・土師器）・土製品（埴輪・陶棺）・金属製品（鉄刀・鉄鏃・刀子・馬具・鉄鐸・耳環）・玉類ほか 計　整理箱 75 箱	津山市高尾 桑山南古墳群	H30. 4. 2 ～ H31. 3. 15	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター
		土器（須恵器・土師器）・土製品（埴輪・陶棺）・金属製品（鉄刀・鉄鏃・刀子・馬具・鉄釘・耳環）・玉類ほか 計　整理箱 51 箱	津山市高尾 細畝古墳群				
3	教文埋 第 2023 号 R2. 3. 19	土器（弥生土器・須恵器・土師器）・土製品（埴輪・陶棺）・金属製品（鉄刀・鉄鏃・刀子・鉄鐸・鉄釘）・玉類・人骨ほか 計　整理箱 37 箱	津山市高尾 桑山南古墳群	H31. 4. 8 ～ R2. 3. 13	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター

第６節　桑山南古墳群試掘調査

桑山南古墳群の大部分は山林であったが、３号墳より北側は戦前から畑地として開発され、階段状に造成がなされている。『佐良山古墳群の研究』は、桑山南３号墳について「山林と畑との境界となっている所」と記しており（1）、その段階で３号墳より北は畑地であったことが分かる。その後植林が行われ、さらに約 20 年前からはグラウンドゴルフ場として利用されており、度重なる地形改変のために古墳の分布調査などが困難な状況であった。

桑山南古墳群の発掘調査中、３号墳の北約 30 ｍの地点において、大型の石材数点が地表に露出している状況が注意された。周辺はグラウンドゴルフ場及びその駐車場として平坦に削平されており、墳丘などは認められなかったが、露出石材は東西方向に並んでいるようにも見受けられ横穴式石室天井石の可能性も想定されたため、試掘調査を行うことになった。

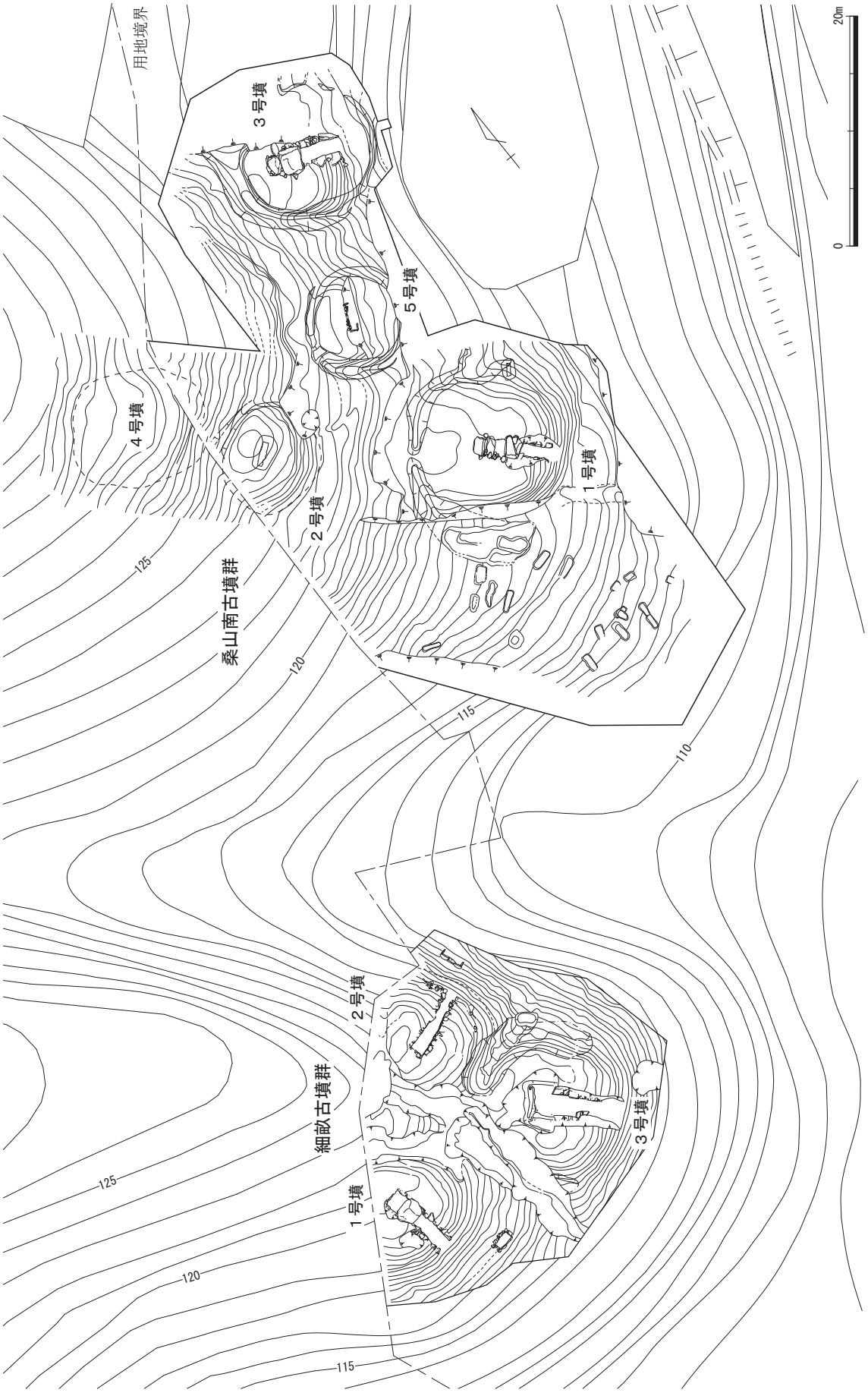
試掘調査は令和２年２月 10 日に実施した。調査面積は 5.2 ㎡で、露出石材のうち最も大きな東端の石材周辺にトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、地表下 10 ～ 40cm で東に向かって傾斜する地山を検出した。大型石材の直下にも地山が続くことから、石室石材ではなく自然の露岩であることが判明した。出土遺物も皆無であった。　（尾上）

註

（１）近藤義郎・中島寿雄『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952

写真４　大型石材の露出（調査前、東から）

写真５　トレンチ完掘状況（東から）



第７図　桑山南古墳群・細畝古墳群全体図（1/500）

第３章　桑山南古墳群

第１節　遺跡の概要

桑山南古墳群は、標高約 290 ｍの嵯峨山東麓の丘陵先端に位置し、眼前には吉井川の支流である皿川が北流している。南側にある細畝古墳群（本書第４章）も同様の立地であるが、両者は狭く深い谷を挟んで約 50 ｍの距離にある（第７図）。桑山南古墳群が立地するのは標高約 116 ｍから 128 ｍにかけてで、皿川西岸の現水田面からの比高は約 14 ～ 26 ｍである。調査前の状況（第８図）は、山林（１・２・４号墳）及び北に隣接するグラウンドゴルフ場の一角（３号墳）にあたり、調査中にはグラウンドゴルフ場に至る舗装路の下に埋没した古墳が新たに発見された（５号墳）。

古墳群の構成は、古墳時代後期に属する５基の円墳（１～５号墳）と、１号墳周辺で検出された箱式石棺墓２基（箱式石棺墓１・２）、土坑墓４基（土坑墓１～４）である（第９図）。古墳のうち尾根線上に位置するのが、地形の高い方から順に４号墳、２号墳、１号墳であり、４号墳と１号墳では現存する墳頂高で約 10 ｍの高低差がある（第 10 図）。そして、尾根線からやや北に偏った位置に５号墳と３号墳が築かれている。これらの古墳のうち４号墳は、大部分が調査対象地外にあるため調査時には地表面の測量を行ったのみであったが、その後民間開発に伴い、令和２年津山市によって全面発掘調査が実施された[(1)]。

調査の結果、各古墳の主体部は２・４・５号墳が竪穴式石室、１・３号墳が横穴式石室で、前３基が６世紀中葉頃に築かれた後、６世紀後半から７世紀前半にかけて１号墳、３号墳の順に築造されたことが判明した。また、箱式石棺墓・土坑墓群は、出土遺物から６世紀中葉頃に位置づけられ、２・４・５号墳と並行する時期のものと判断された。

古墳時代以外の遺構として、中世の土坑墓群がある。尾根の先端部、古墳群よりもやや低い位置にあり、標高 114 ｍから 115 ｍの間に計 10 基の土坑墓が一部重複しながら検出された（土坑墓５～14）。遺物を伴うものがほとんどないが、土坑墓６に副葬された土器などから中世に営まれた土坑墓群と推定している。

そのほか、伴う遺構等は確認されなかったが、調査区内各所から弥生土器、弥生時代の石器、古代・中近世の土器が少数出土している。地形や遺物の出土状況等から判断すれば、調査区内において弥生時代の集落が広がっていた可能性は低いが、近隣にその存在を想定することができる。　　（尾上）

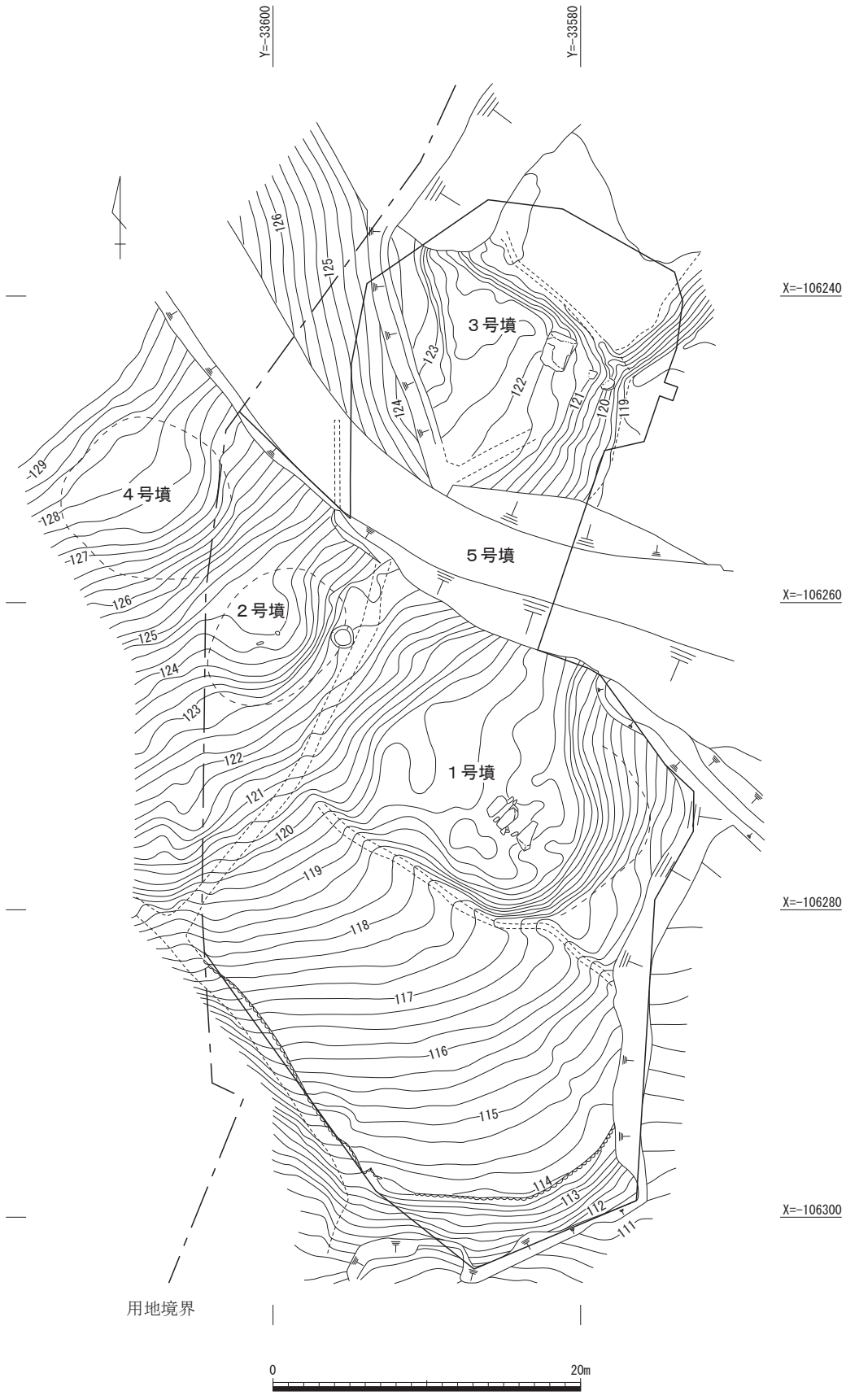
註

（１）『桑山南４号墳現地見学会資料』津山市産業文化部文化課文化財保護係　2020

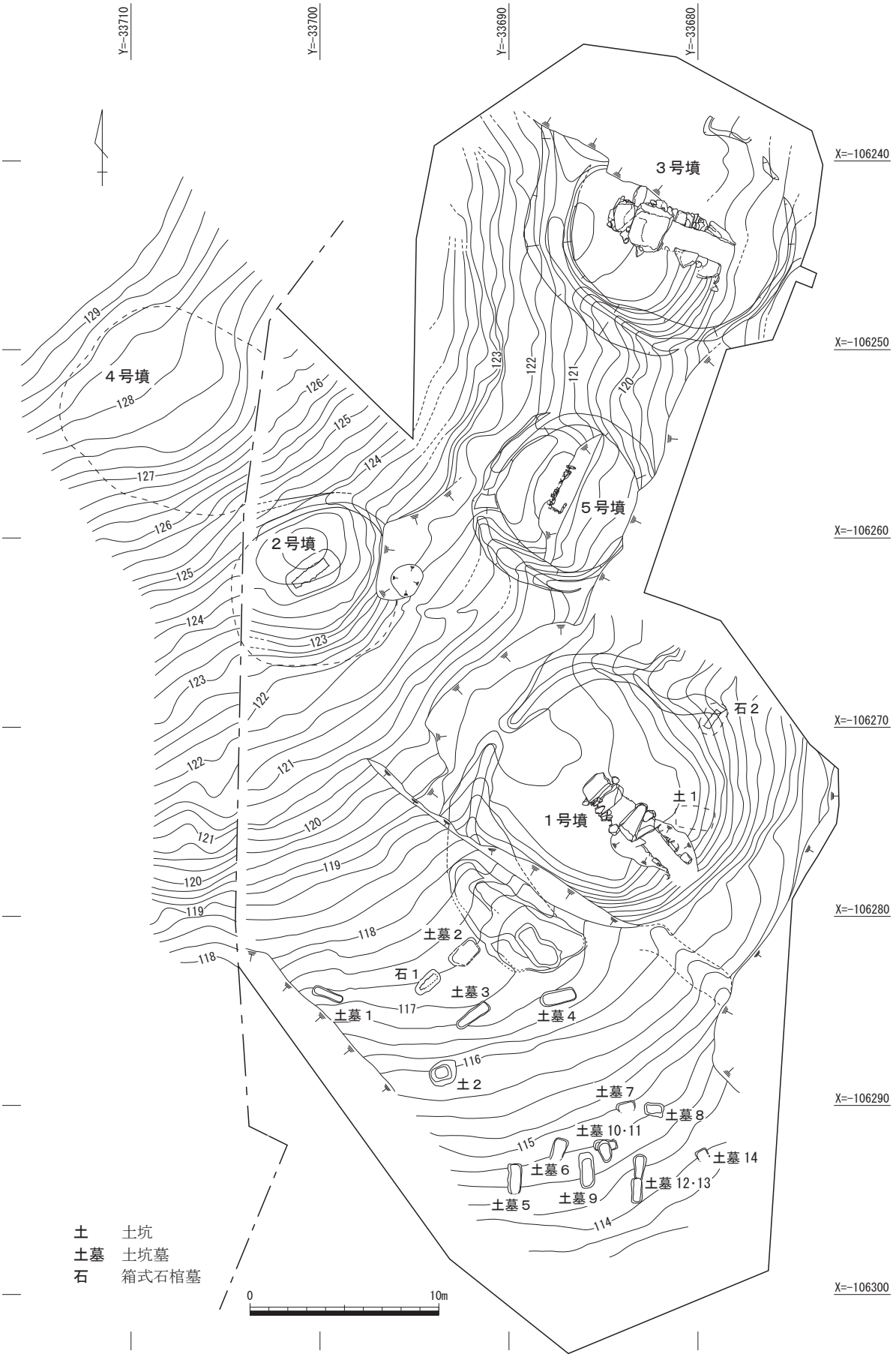
『津山市史だより』第 16 号　津山市史編さん室　2020

仁木康治「岡山県津山市桑山南４号墳の発掘調査概要」『中四研だより』第 46 号　中国四国前方後円墳研究会　2020

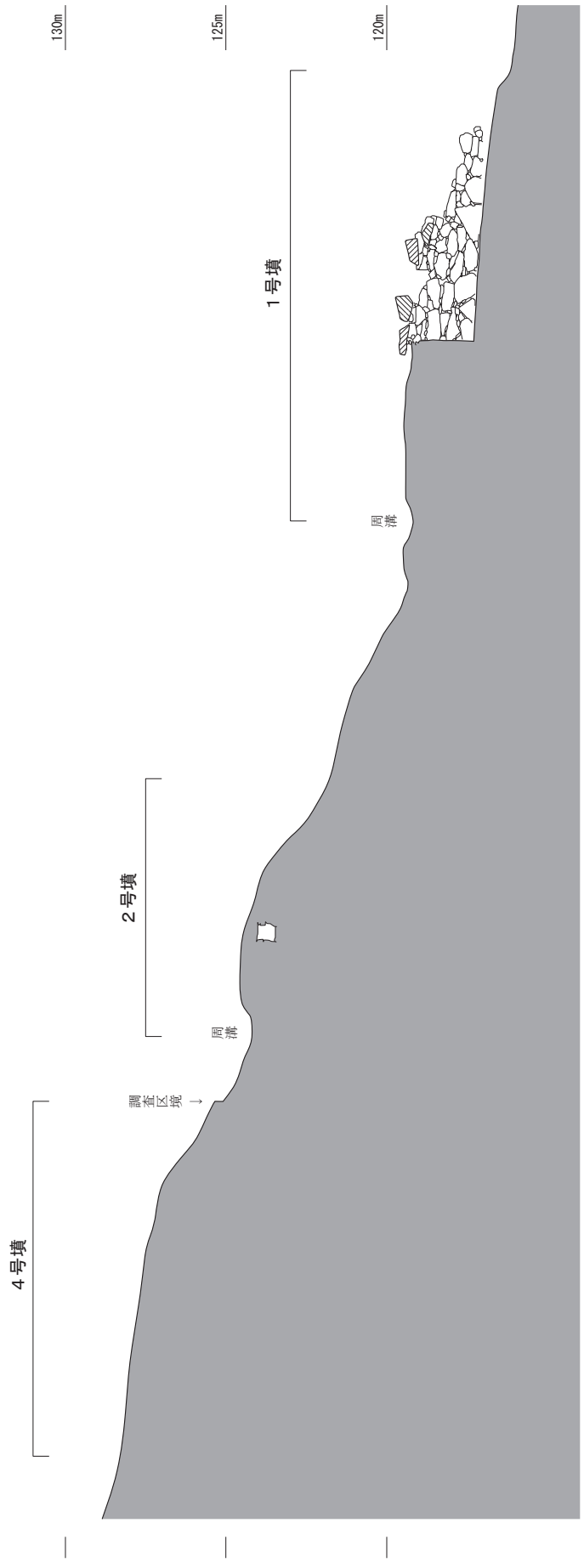
以下、その成果に基づき記述するが、報告書が未刊のため断片的な情報である。



第８図　調査前の地形（1/400）



第９図　遺構の配置（1/300）



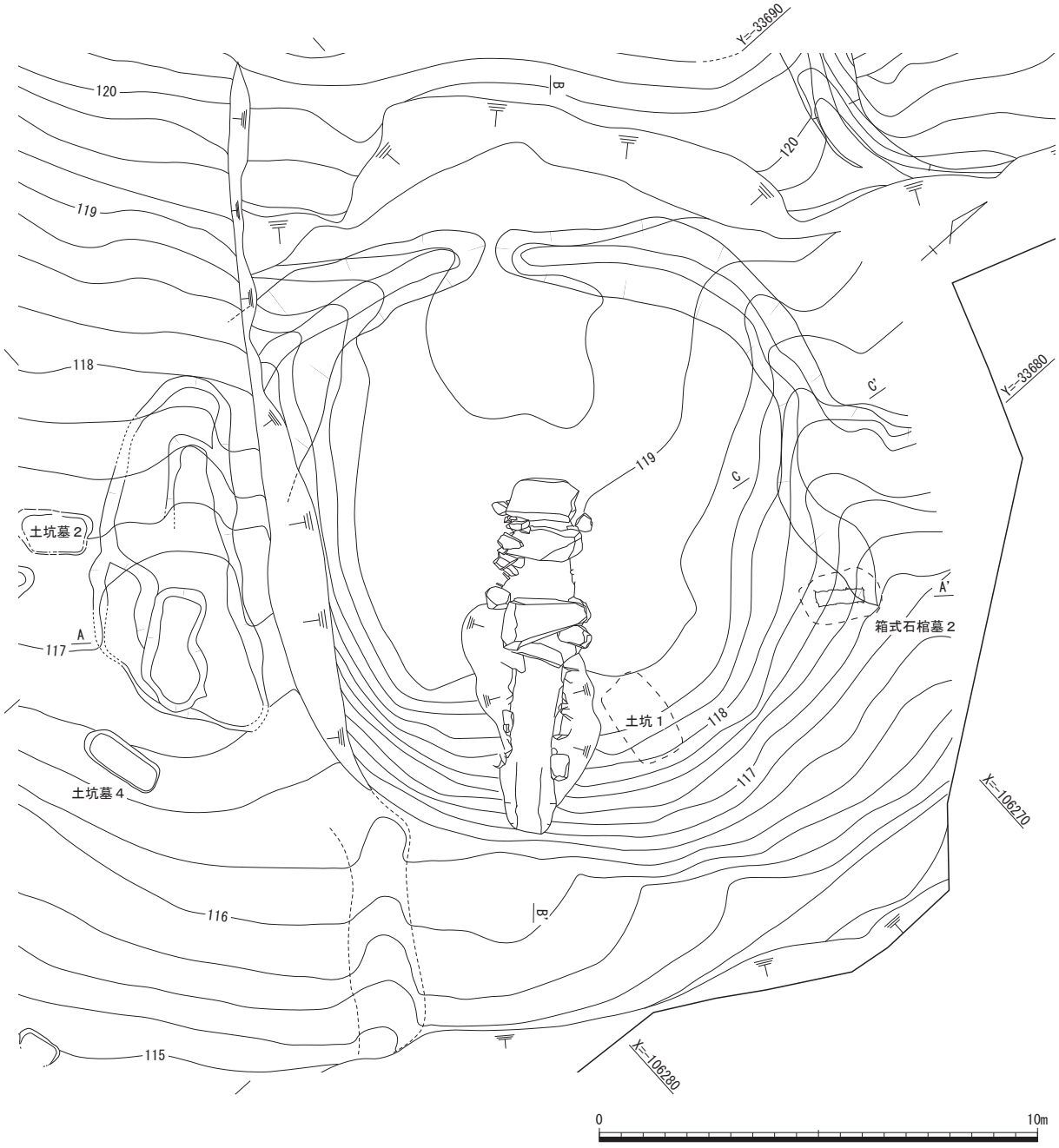
第10図　桑山南１・２・４号墳断面模式図（1/200）

第２節　桑山南１号墳

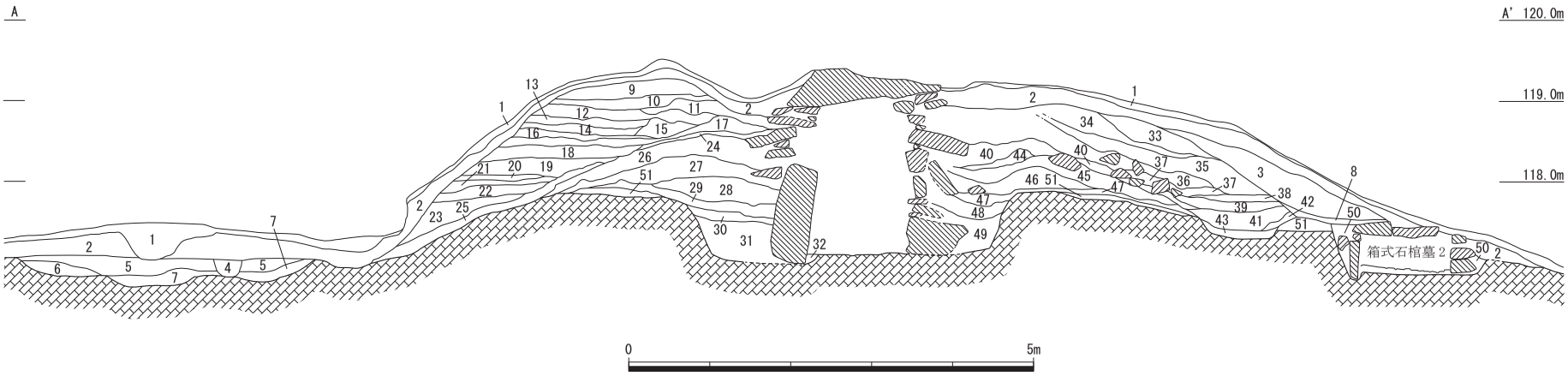
１　墳丘と周溝

１号墳は、古墳群が立地する尾根上のうち最も先端部に築かれている。

墳丘は上面を平坦に削平され、横穴式石室の天井石４石が地表に露出していた。また、墳丘の南西側を大きく削られ、石室開口部にあたる南東側も若干削り込まれている。墳丘の北西側およそ半分には周溝が残存していたが、南西側は削平が著しく底部が残存していたに過ぎず、北側は雨水の流路と

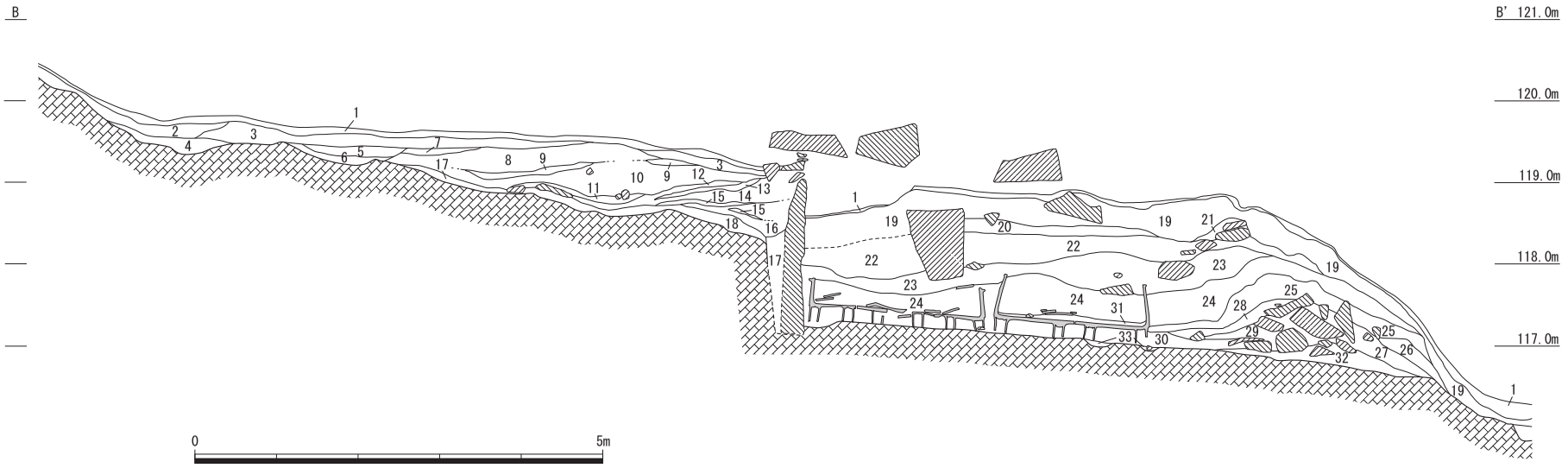


第 11 図　桑山南１号墳墳丘（1/150）



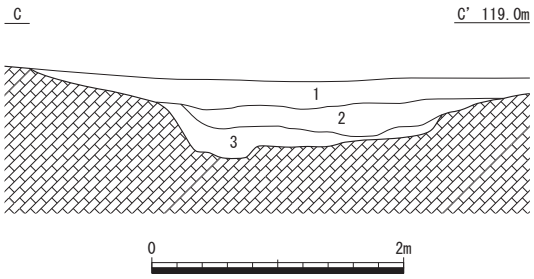
1　表土
2　褐色（10YR4/4）砂質土＜流土＞
3　褐色（10YR4/6）砂質土＜流土＞
4　灰黄褐色（10YR5/2）砂質土＜近世以降の溝＞
5　褐灰色（10YR6/1）砂質土＜周溝埋土＞
6　にぶい黄褐色（10YR6/4）砂質土＜周溝埋土＞
7　褐灰色（10YR5/1）砂質土＜周溝埋土＞
8　褐色（10YR4/4）砂質土＜以下盛土＞
9　褐色（10YR4/4）砂質土
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山礫を多く含む）
11　黒褐色（10YR2/2）砂質土
12　にぶい褐色（7.5YR5/3）砂質土（地山礫を多く含む）
13　暗褐色（10YR3/3）砂質土
14　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
15　暗褐色（10YR3/4）砂質土
16　褐色（10YR4/4）砂質土
17　黄褐色（10YR5/8）砂質土
18　暗褐色（10YR3/4）砂質土
19　褐色（10YR4/6）砂質土
20　暗褐色（10YR3/4）砂質土
21　褐色（10YR4/6）砂質土
22　暗褐色（10YR3/3）砂質土
23　褐色（10YR4/4）砂質土
24　褐色（10YR4/4）砂質土
25　暗褐色（10YR3/4）砂質土
26　褐色（10YR4/6）砂質土
27　黒褐色（10YR3/2）砂質土と褐色砂質土（10YR4/4）の互層
28　褐色（10YR4/6）砂質土
29　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山礫を多く含む）
30　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
31　褐色（7.5YR4/6）砂質土（地山土ブロックを多く含む）
32　黄褐色（10YR5/6）砂質土
33　褐色（10YR4/6）砂質土
34　黄褐色（10YR5/6）砂質土
35　暗褐色（10YR3/4）砂質土
36　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
37　暗褐色（10YR3/4）砂質土
38　褐色（10YR4/4）砂質土
39　黄褐色（10YR5/6）砂質土
40　暗褐色（10YR3/4）砂質土
41　暗褐色（10YR3/4）砂質土と褐色砂質土（10YR4/4）の互層
42　黄褐色（10YR5/6）砂質土
43　黒褐色（10YR2/3）砂質土
44　にぶい黄褐色（10YR6/4）砂質土
45　褐色（10YR4/4）砂質土
46　黄褐色（10YR5/6）砂質土
47　黒褐色（10YR2/3）砂質土
48　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
49　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
50　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土＜箱式石棺裏込め土＞
51　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜旧表土＞

第 12 図　桑山南１号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）



1　表土
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
4　褐色(10YR4/6)砂質土<近世以降の溝>
5　褐色(10YR4/6)砂質土<周溝埋土>
6　褐色(10YR4/4)砂質土<周溝埋土>
7　褐色(10YR4/4)砂質土<以下盛土>
8　明褐色(7.5YR5/6)砂質土
9　褐色 (10YR4/4) 砂質土
10　黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
11　褐色 (10YR4/6) 砂質土
12　黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
13　褐色 (10YR4/4) 砂質土
14　黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
15　褐色 (10YR4/4) 砂質土
16　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
17　褐色 (10YR4/4) 砂質土
18　暗褐色 (10YR3/4) 砂質土＜旧表土＞
19　褐色 (10YR4/6) 砂質土
20　褐色 (10YR4/4) 砂質土 (19 層よりしまりが弱い)
21　黄褐色 (10YR5/8) 砂質土
22　褐色 (10YR4/6) 砂質土
23　暗褐色 (10YR3/4) 砂質土
24　褐色 (10YR4/4) 砂質土 (中世土器を含む)
25　黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土
26　褐色 (10YR4/6) 砂質土
27　褐色 (10YR4/4) 砂質土
28　褐色 (10YR4/4) 砂質土 (目が粗い粒)
29　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 (非常に堅くしまっている)
30　黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (非常に堅くしまっている)
31　黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (粒子が細かい、堅くしまっている)
32　暗褐色 (10YR3/4) 砂質土
33　暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 (非常に堅くしまっている)

第 13 図　桑山南１号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）

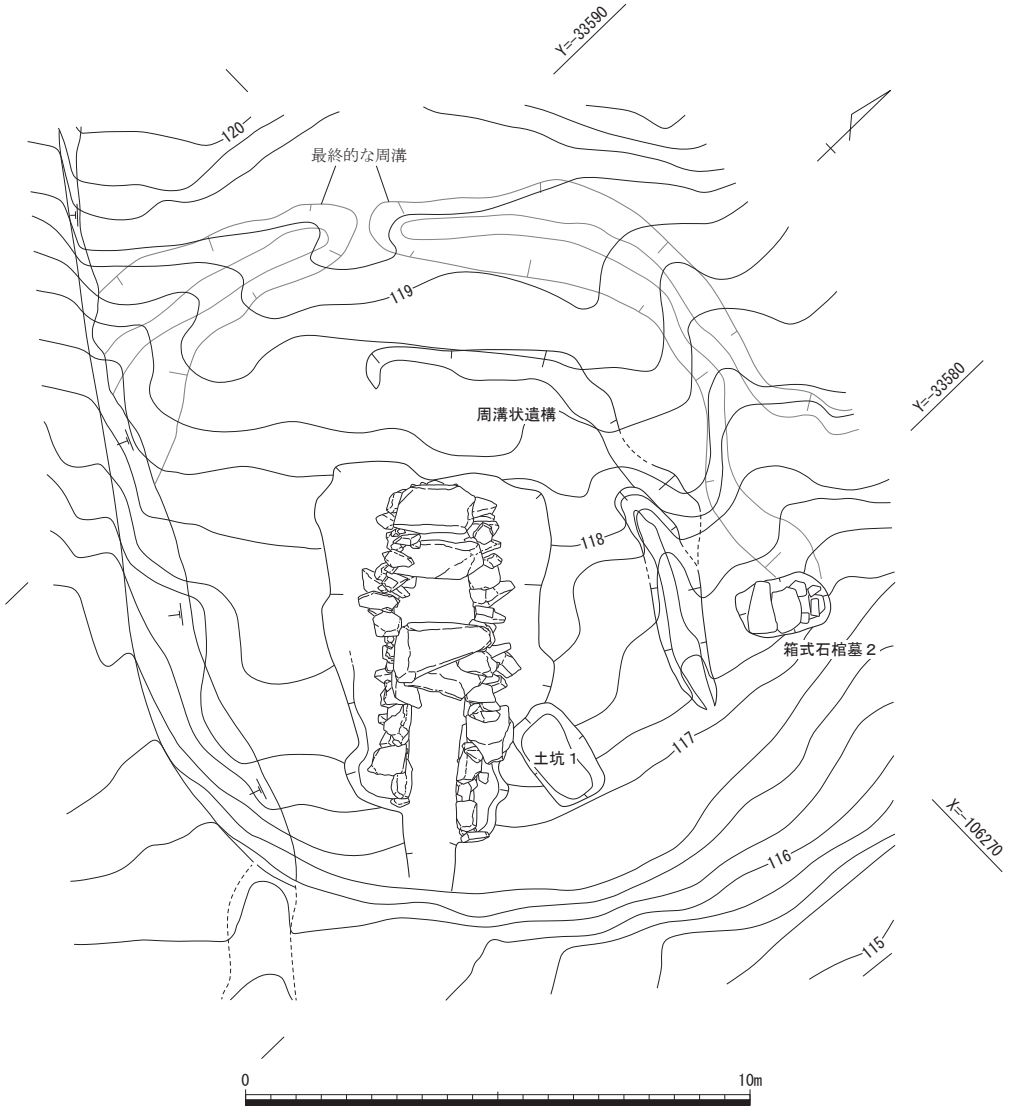


1　黄褐色（10Y5/6）砂質土〈流土〉
2　暗褐色（10YR3/4）砂質土〈周溝埋土〉
3　褐色（10YR4/6）砂質土〈周溝埋土〉

第 14 図　桑山南１号墳北側周溝断面（1/60）

なったらしく墳丘側を浸食している。周溝の断面形は、地山が岩場であることもあり安定しないが、おおむね逆台形を呈し、残りのよい部分で幅約2.5ｍ、深さ約 0.4 ｍを測る（第 14 図）。また、最も地形の高い北西部では周溝が一部途切れており、土橋状に周溝を掘り残したものと考えられる。以上の周溝検出状況等を手がかりに墳丘を復元すれば、径約 14 ｍの円墳になり、残存する墳丘の高さは約３ｍである。

墳丘の盛土は、まず横穴式石室の構築と併行してやや小規模な墳丘を天井石の高さまで築き（以下「１次工程」と呼ぶ）、その後全体に盛土を行っ



第 15 図　桑山南１号墳墳丘盛土１次工程における周溝状遺構（1/150）
等高線は盛土撤去後の状況を示す。

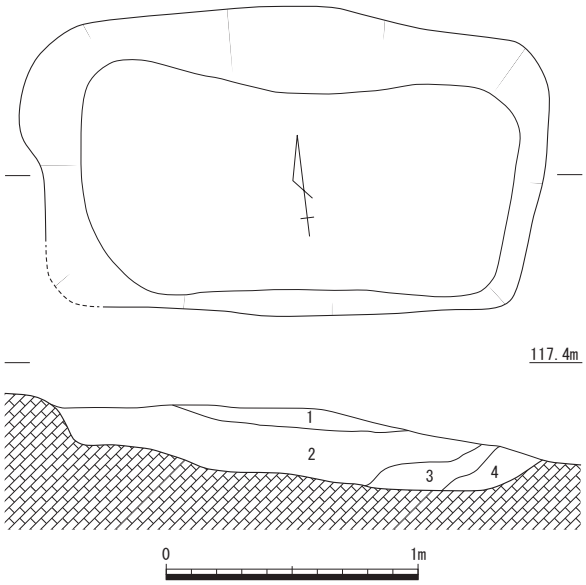
て最終的な墳丘を完成させている（以下「２次工程」と呼ぶ）ことが観察された（第 12 図）。１次工程では、盛土に礫を多く含む傾向があり、周縁に土手を築くように礫を積み上げている部分も認められた（第 12 図右側）。また、１次工程の盛土の周辺には周溝状に地山を掘削した状況が確認され（第 12 図第 43 層、第 15 図）、全周しないが復元すれば直径９ｍ程度の１次墳丘がつくられたと推定される。この周溝状の窪みは２次工程の盛土によって埋められている。２次工程では、暗褐色ないし黒褐色土と黄褐色ないし褐色土とを互層状に、水平に積み上げる傾向が認められた。

土坑１（第 16 図、図版４－３）

調査の最終工程として盛土の掘削・撤去を行ったが、その過程で石室羨道部の東側に土坑１基を検出した。盛土撤去の途中段階で検出しており、墳丘の構築過程で掘削された土坑と判断された。平面形は隅丸長方形で、検出面での規模は長さ 200cm、最大幅 122cm、深さは最大 24cm である。床面は傾斜しており西側が高く、凹凸がある。出土遺物もなく性格不明だが、墳丘や石室の構築作業に関わる遺構であろうか。

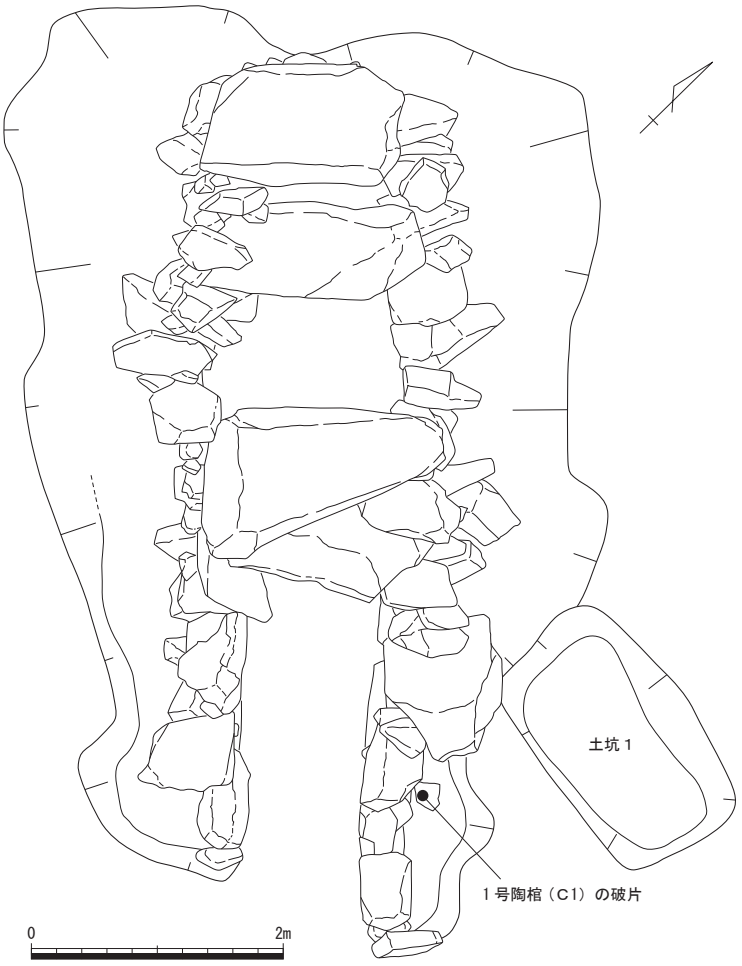
２　横穴式石室

１号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である。調査前、石室内はごくわずかな空間を残してほぼ埋没していた。使用石材の大部分は、周辺に産出する凝灰岩で、津山城の石垣にも使用された通

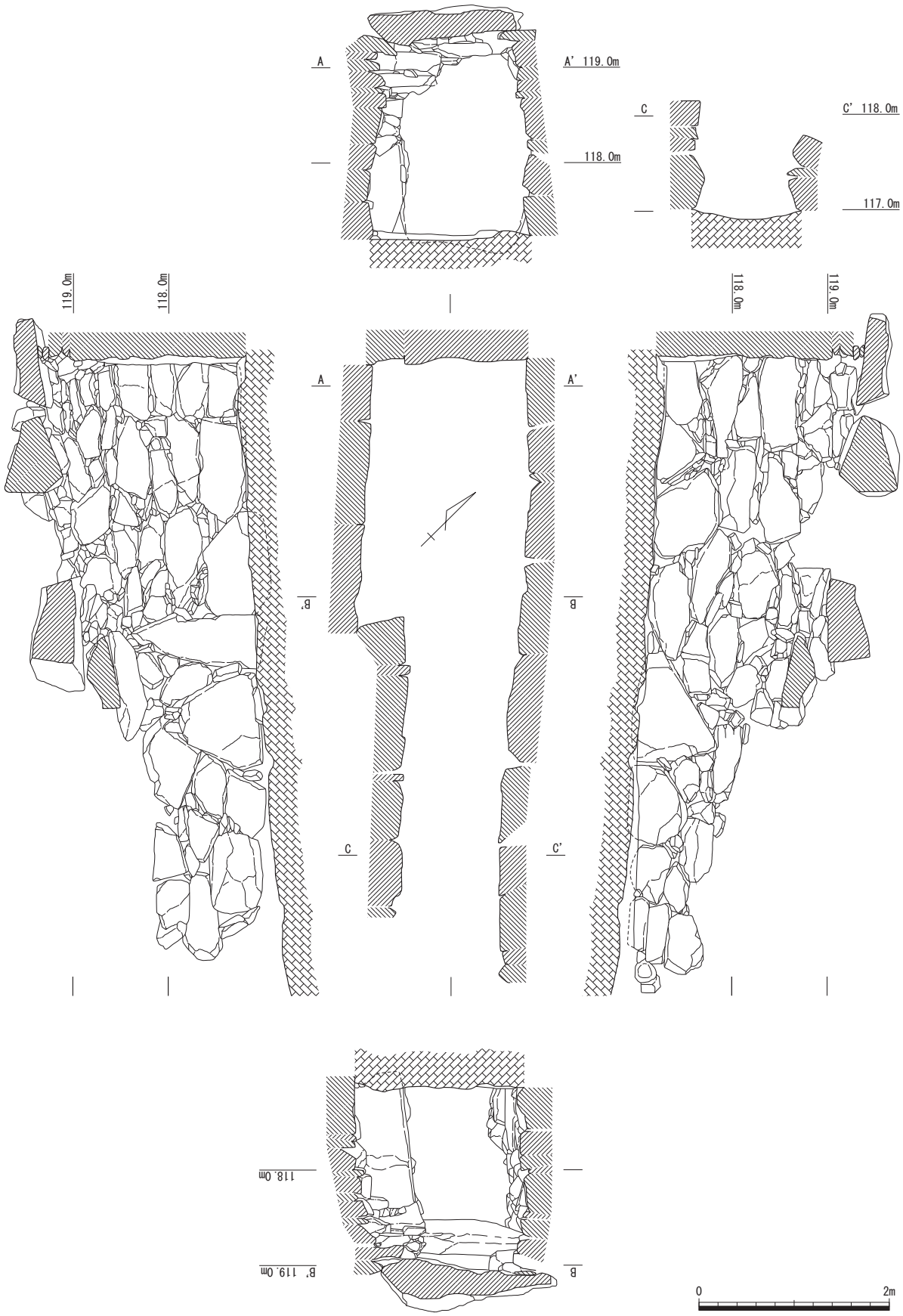


1　褐色（10YR4/6）砂質土　　3　黄褐色（10YR5/6）砂質土
2　暗褐色（10YR3/4）砂質土　　4　褐色（10YR4/4）砂質土

第 16 図　土坑１（1/30）



第 17 図　桑山南１号墳石室掘り方（1/60）

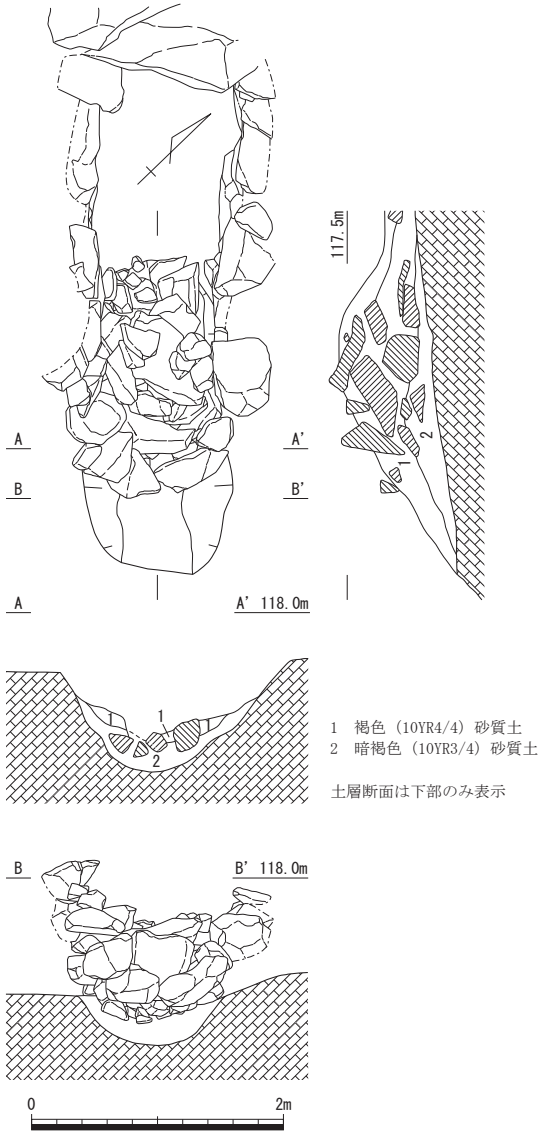


第 18 図　桑山南１号墳石室（1/60）

称「津山石」である。以下に報告する他の古墳についても、竪穴式石室、横穴式石室を問わず、同じ石材を使用している。

墳丘盛土に先行して石室構築のための掘り方を穿っており（第 17 図）、掘り方の深さは奥壁部で 1.2 mに達する。掘り方は羨道の前端部で回り込んで完結しており、平面「コ」の字形に開放していない。このことから、石室基底部は羨道前端まで完存していることが分かる。羨道前端の小型石材はこの掘り方に沿わせるように据えられている。

石室は、左側に袖をもつ片袖式である（第 18 図）。規模は玄室長 2.7 m、羨道長 3.8 m、全長 6.5 m、奥壁幅 1.6 m、玄室最大幅 1.7 m、羨道最大幅 1.2 m、玄室最大高 2.0 mで、南東方向（N 134° E）に開口する。天井石は玄室・羨道を合わせて４石が残存しているが、本来は玄室に４石が架けられていたと考えられ、欠落する１石は石室内に落下していた。玄門では天井石を一段下げており、羨道の天井石はこの１石を残して失われている。後述する閉塞施設の位置から考えると、本来は羨道のほぼ前端近くまで天井石を架けていたものと思われる。奥壁はほぼ垂直に立ち、おおむね１石で構成されるが、向かって左側から左上にかけての隙間に小型の石材を充填している。側壁はやや内傾するものの、持ち送りはそれほど顕著ではない。左側壁は、玄門にほぼ天井まで達する立柱石を立て、それを境に玄室と羨道で石積みがやや異なる。玄室はおおむね５～７段に石を積み、基底部にやや大きな石材を用いるほかは比較的小型の石材で構成される。縦目地が通るのが特徴で、３列ほどの単位が認められるが、袖付近ではやや乱れている。羨道は玄室よりも大きめな石材を用いており、斜めに目地が通る部分があるが、乱雑に積み上げられた印象を受ける。一方、右側壁には袖をもたないため、玄室から羨道まで一連の石積みとしている。玄室側でおおむね５段、羨道側で２～３段積みである。



第 19 図　桑山南１号墳石室閉塞施設・墓道（1/60）

上述のように、羨道の基底部は前端まで完存していると考えられるが、その前端は想定される墳端から約３m内側に位置する。そして、石室前端と墳端との間をつなぐ施設として、断面Ｕ字形に掘削された墓道が検出された（第 19 図）。残りのよい部分で、幅約 1.8 m、深さ約 0.9 mを測り、床面は墳端に向かって傾斜しているが、後世の削平により墳端との取り付き部分の詳細は不明である。

閉塞は、羨道前端から墓道にかけて、60cm 大以下の塊石を積み上げた施設が確認された（第 19 図）。奥行き約２m、高さ約 70cm が残存しており、石室中軸での断面形は三角形を呈する。羨道内に収まる

ように設置するのではなく、墓道側からも石室入口を覆うように積み上げているのが特徴的である。

墳丘盛土の掘り下げ･撤去作業中、羨道右側壁の裏込め部分から、陶棺の破片が出土した（第 17 図、図版６－５）。石室内の初葬棺と考えられる１号陶棺（Ｃ１）の破片であることが明らかであり、追葬時等に羨道の一部を改修し、その際に陶棺片が混入した可能性を想定した。そうだとすると、少なくとも右側壁の前端から基底石３石分までは追葬時等に積み替えられたことになる。同様の事例は、津山市コウデン２号墳でも確認されており、横穴式石室の裏込めから２点の陶棺片が出土している。出土位置は奥壁近くの側壁底部と、石室中央付近の盛土上層であり、古墳築造途中での混入あるいは「儀式」が想定されている [(1)]。特に奥壁近くの底部から出土した陶棺片は、追葬時における石室の改修、混入は想定しにくい。このコウデン２号墳の事例について藤田憲司は、石室構築段階にすでに陶棺が石室内か近くまで運ばれており、欠け落ちた破片が混入したものと想定し、陶棺に限らず中心となる棺は、石室構築と同時に石室内に据えられていた可能性を指摘している [(2)]。その場合、コウデン２号墳の２点の陶棺片は１号陶棺及び２号陶棺のものと報告されているので、初葬棺として２基の陶棺が同時におさめられたことになる。コウデン２号墳の１号及び２号陶棺は型式的にそれほど差がないのでその可能性も考えられるかもしれない。　桑山南１号墳の事例が、追葬時における石室の改修を示すのか、当初の石室構築と併行して陶棺が据え置かれその過程で破片が混入したのか、類例の増加を待って検討する必要があろう。

３　棺

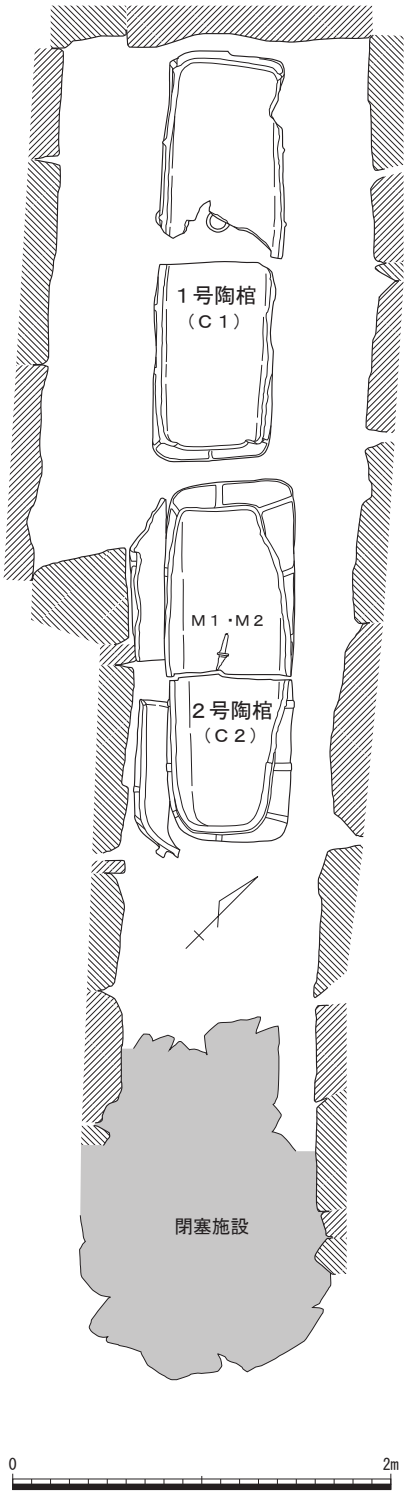
石室内におさめられた棺として、２基の陶棺がある（第 20 図）。玄室の奥側中央に１号陶棺（Ｃ１）、玄室外側から羨道にかけて２号陶棺（Ｃ２）が置かれており、いずれも身は原位置を保っていると考えられる。１号陶棺と奥壁との間は 10cm 未満、１号陶棺と２号陶棺の間も 10cm ほどしかなく、石室の奥側に可能な限り詰めて配置した様子がうかがえるが、玄室内の左右には空間を残している。１号陶棺の蓋は大破して周辺に散乱しており、２号陶棺の蓋は破損しているものの石室袖側に動かされた状態で残っていた。陶棺の脚の下には部分的に台石が配置されており（第 21 図）、棺を安定させ、また陶棺中央の分割部分がうまく接合するように調整を行ったものとみられる。

石室内からは鉄釘が出土しておらず、２基の陶棺以外に木棺等を想定できる空間も乏しいため、２棺のみの埋葬と考えられる。ただし、後述するように石室内から耳環が５点出土しており、一棺複数埋葬の可能性を含め計３人以上の埋葬が想定される。

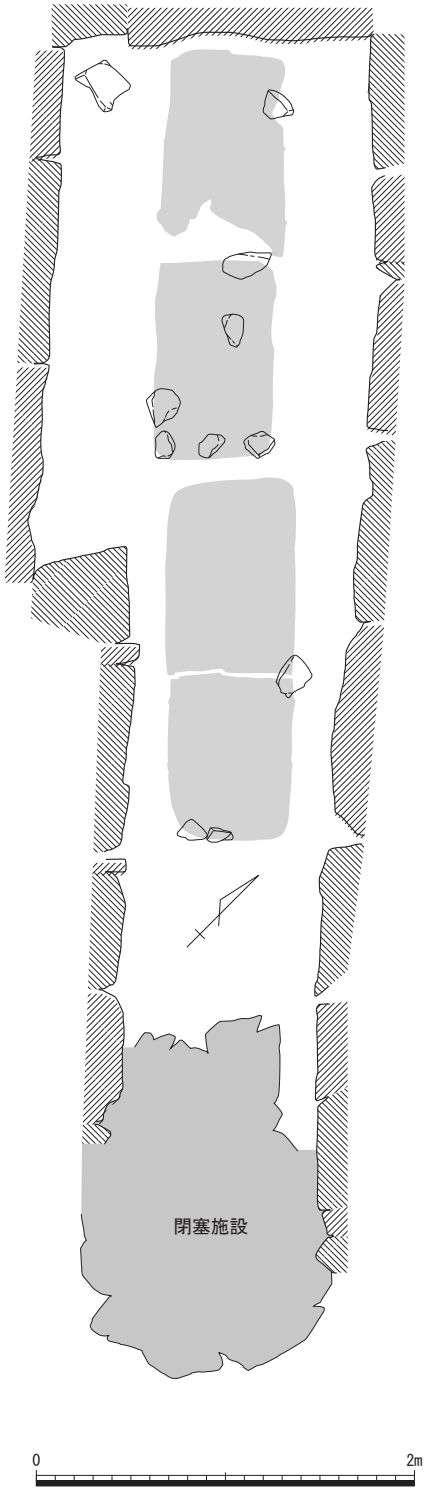
４　石室内遺物出土状況

棺内の副葬品として、２号陶棺内から出土した象嵌装大刀（Ｍ１・Ｍ２）がある（第 20 図）。棺内は攪乱を受けていたものの、茎から鍔、刀身の一部などが棺内底面に錆着した状態で出土しており、ほぼ原位置を保つものと考えられる。遺体を棺内中央に置き石室奥側に頭を向けていたと仮定すれば、大刀は、遺体の腰元右側に柄があり切先を足元に向け、刃を遺体側、棟を外側にして置かれていたことになる。また、この大刀の刀身と考えられる鉄片が２号陶棺内から多数出土したが、大部分が層状に剥離した細片となっており復元不可能であった。一方、１号陶棺内は底部まで攪乱、破壊されており、棺内に副葬品は遺存していなかった。

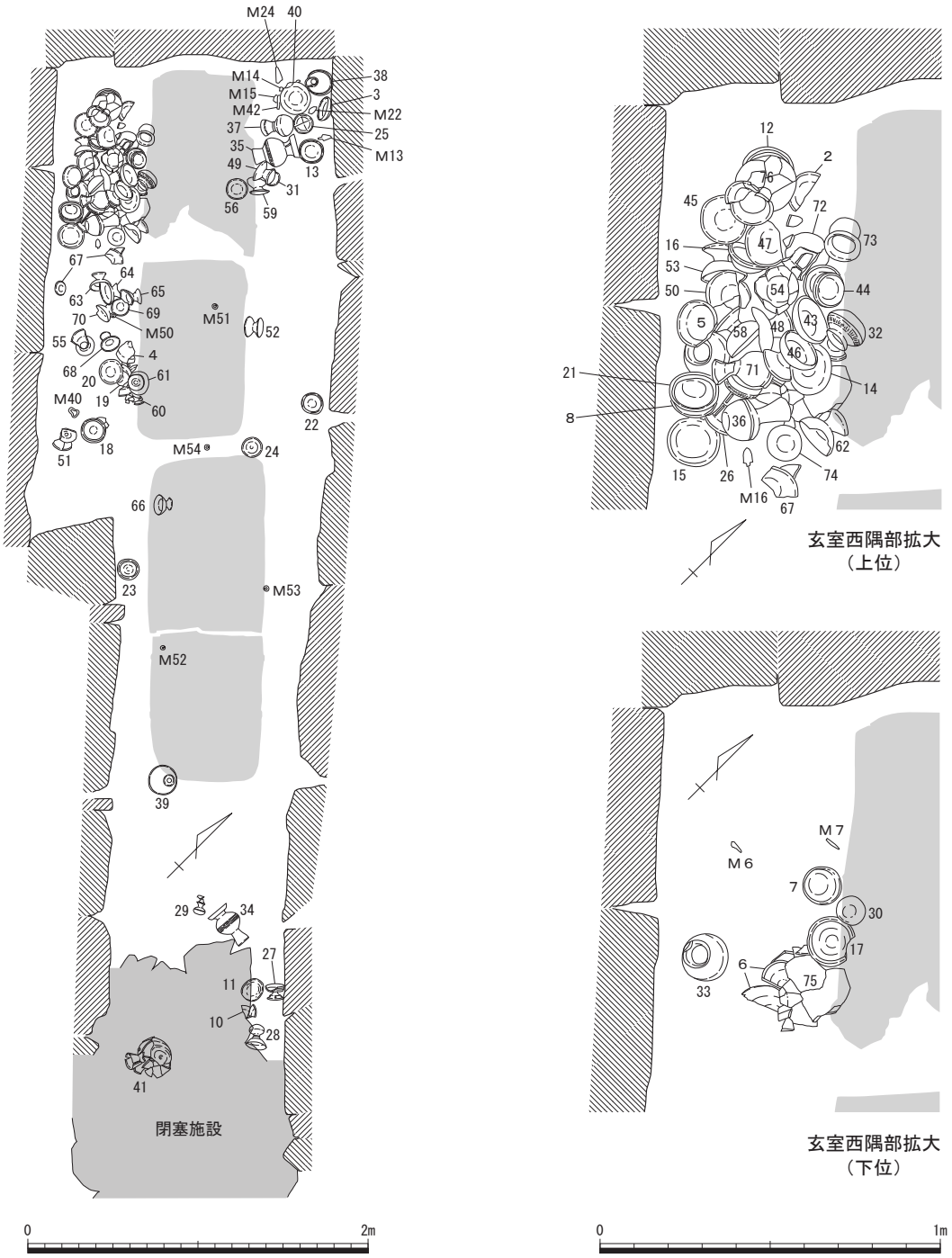
棺外の遺物は、石室床面を中心に、70 個体以上の土器をはじめ多量に出土した（第 22 図）。１号陶棺周



第 20 図　桑山南１号墳石室内陶棺・
棺内遺物出土状況（1/40）



第 21 図　桑山南１号墳石室内棺台石等
出土状況（1/40）



第 22 図　桑山南１号墳石室内遺物出土状況（1/40・1/20）

囲の奥壁側が最も多く、右側壁との間の奥壁際に土器約 10 個体と鉄鏃５点など、左側壁との間の奥壁側に土器約 30 個体と鉄鏃３点など、左側壁との間の袖側に土器約 15 個体と馬具の鞍（M 40）１点などが出土した。また、閉塞施設付近でも須恵器がまとまって出土している。そのうち提瓶（41）１点は閉塞施設の中にあり、そのほか鈴付高杯（27）を含む６個体は閉塞施設のすぐ内側床面で出土した。耳環はいずれも原位置を保っていないが、対になると思われるM 50・M 51 の２点が１号陶棺周辺、M 52・M 53 の２点が２号陶棺の周辺から出土しており、それぞれの陶棺被葬者に伴うものと考えられる。それ以外にも両陶棺の間から１点の耳環（M 54）が出土している。　（尾上）

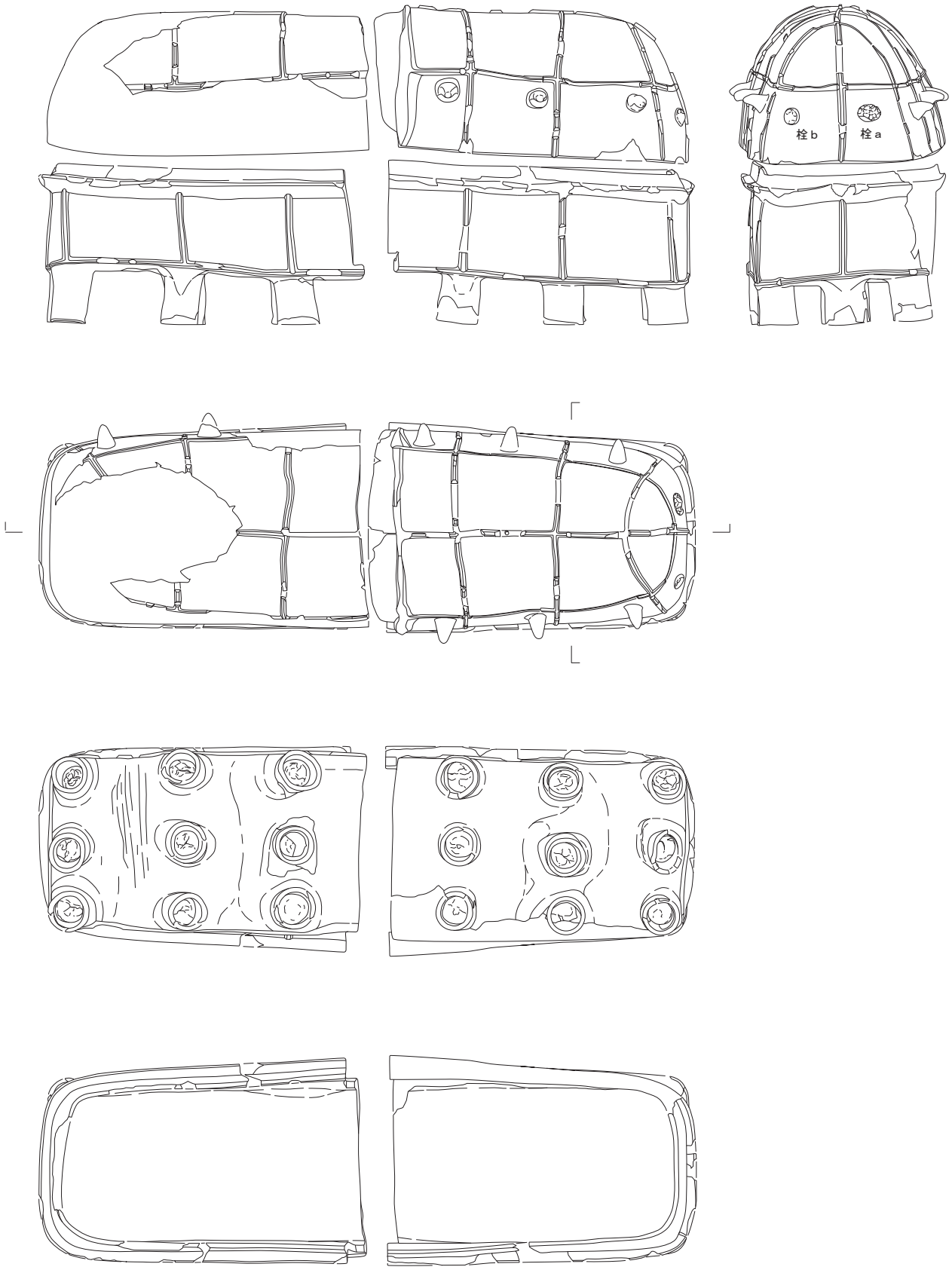
５　石室内出土遺物

１号陶棺（第 23・24 図、写真６、巻頭図版２、図版 41）

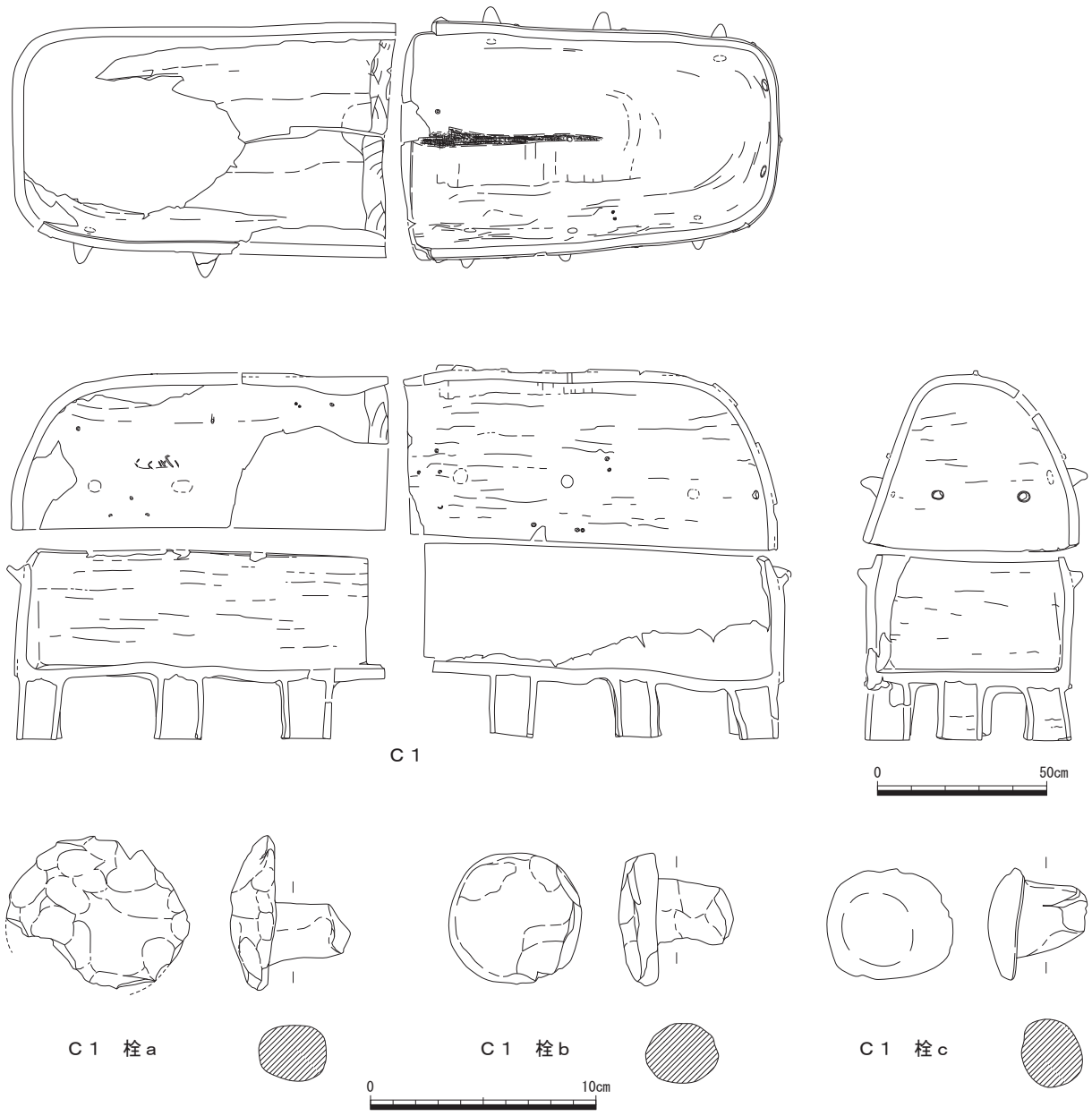
蓋身別造りの土師質亀甲型陶棺（**Ｃ１**）である。全長 223.8cm、最大幅 77.0cm、最大高 97.2cm を測る大型の陶棺で、平面形は中央がわずかに膨らむ隅丸長方形を呈す。脚は３行６列の計 18 本で、色調は赤橙色を呈す。

蓋の長さは奥壁側（図左半）で残存長 109.5cm、羨道側（図右半）で 112.2cm、幅は奥壁側の残存幅で 68.5cm、羨道側が 77.0cm である。高さは奥壁側で 47.0cm、羨道側で 51.3cm を測り、蓋を乗せた時、高さの比率が身と蓋でほぼ同じとなる点はこの陶棺の大きな特徴といえる。左右の蓋の合わせ目には、奥壁側の蓋にかぶせ部、羨道側の蓋に受け部が作り出されており、本来は蓋同士が 10cm ほど重なり合った状態であったと考えられる。かぶせ部の裏面には葉の葉脈の痕が残っており（写真６－１）、想定される葉の大きさは、長さ 15cm 以上、幅 10cm 以上で、葉脈の間隔が最大で４cm ほどあることから、クズのような大型の葉を利用していたことが想定される。蓋の厚さは側面で 2.5 ～ 2.7cm、天井部で 2.0 ～ 3.0cm を測る。蓋全体を格子状にめぐる突帯は幅約 2.0cm、高さ 0.7 ～ 1.5cm で、断面形は頂部がナデ調整によりやや凹んだ台形を呈し、円筒埴輪の突帯とよく似ている。蓋の突帯を付ける順序は、まず中軸の突帯を貼り付け、次に縦突帯、最後に横突帯を付けている。また、横突帯にのみ、突帯貼り付け前にアタリ線が凹線状に描かれている（写真６－２）。蓋には鉤状の突起が付けられており、長側辺側に６つずつ、合計で 12 個付けられていたと想定される。突起の接着部の直径は 6.5 ～ 8.3cm、高さは 8.0 ～ 8.5cm で、蓋に差し込まれて装着されている。羨道側の蓋の小口には直径 3.0 ～ 4.0cm ほどの円形～楕円形を呈する小穴が２か所穿たれており（写真６－３）、この小穴と陶棺周辺から出土したキノコ形の栓の軸部の形状が一致したことから、この場所に栓が装着されていたと考えられる。奥壁側の状況については不明であるが、ほかに栓が１点出土しており、本来は両小口に２つずつ計４か所の小穴と、それに対応するキノコ形の栓が存在していたと考えられる。また、奥壁側の蓋の天井部、中軸の突帯と重なる場所に、直径１cm ほどの穴が穿たれている（写真６－４）。この穴の機能や、中軸の突帯との先後関係については不明である。蓋は内外面ともナデ調整が行われているが、蓋の内面は調整が甘く、粘土帯接合の痕跡が多く残されている。接合痕の幅は２～４cm ほどで、基本的に水平に積み上げられているが、天井部に達すると、接合の痕跡がそれまでと直交する方向に変化している。このことから、蓋は側面と天井部で成形方法が異なっていたことが窺える。また、天井部には主軸に沿って木質の痕跡があり、天井部成形時の「形持たせ」のような役割の木材の存在が想定される。このほか、蓋内面の側面から天井部にかけて、竹管のような素材による直径１cm ほどの未貫通の小穴が複数確認できる（写真６－５）。

身は、長さが奥壁側で 115.0cm、羨道側が 111.8cm で、最大幅はどちらも 72.0cm、上端部までの高さは 52.5 ～ 57.5cm である。厚さは側面が 2.5 ～ 3.5cm、底面が 3.0 ～ 4.0cm で、側面に比べて底面がやや重厚な造りとなっている。身は左右一体で成形した後、中央を切断して分割したと考えられ、側面の切断時には底面の直上でクランクさせている。身上部には断面「⊦」形の蓋受け部があり、側面最上段の粘土帯を薄くして内傾気味に接合した後、上端から４～５cm ほど下に接着部幅７～５cm、高さ５cm 程の粘土を貼り付けることで成形している。突帯は、身の下半、脚部との境目に横突帯が巡り、そこから蓋受け部との間に縦突帯が貼り付けられている。突帯の形状や大きさは蓋と同じで、貼



第 23 図　桑山南１号墳１号陶棺①（1/20）



第 24 図　桑山南１号墳１号陶棺②（1/20・1/3）

り付け順序は蓋受けと横突帯を貼り付けた後に縦突帯を貼り付けている。内外面ともにナデ調整が行われているが、蓋と同様内面の調整が甘く、粘土帯の接合痕がよく残っており、ここから身の側面は幅２～４㎝程度の粘土帯を底面から９～ 10 段ほど積み上げて成形していることが窺える。蓋の内面に多く見られた小穴は、身にはみられない。棺内底面は長さ約 203cm、幅約 52cm を測る。底面を裏側から見ると粘土の接合痕が見える箇所があり、身の中軸に対して直交方向に横断していることがわかる。このことから、底面は長方形の粘土を複数繋ぎ合わせることで成形していることが窺える。

脚は、下端部の直径が 13.5 ～ 15.0cm、高さが 13.0 ～ 19.0cm の円柱形で、やや縦長となる。厚さは 1.0 ～ 2.0cm で、幅 2.0 ～ 4.0cm 程度の粘土の巻き上げによって成形し、外面はハケ調整の後にナデ調整、内面と下端面はナデ調整で仕上げている。底部との接合方法については不明な点が多いが、裏面から脚の内部を観察すると、脚部と底部との接着部に後からドーナツ状に粘土を貼り付けた痕跡が観察で

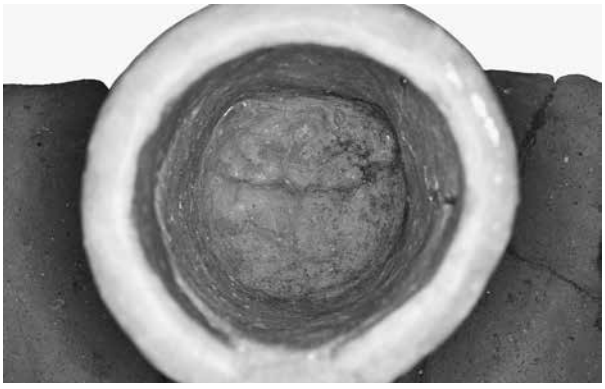
１　蓋かぶせ部裏の葉脈痕

２　蓋小口横突帯のアタリ線

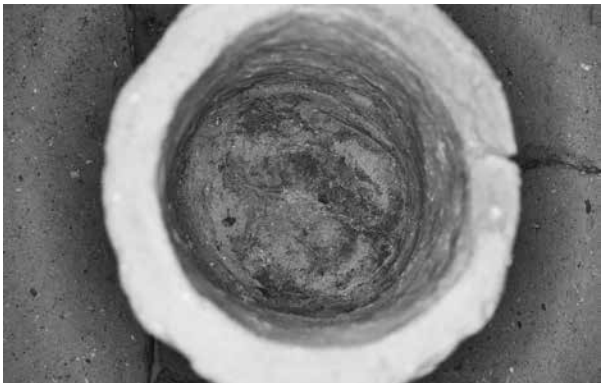
３　蓋小口面の穿孔（栓を外した状態）

４　蓋天井部の小孔

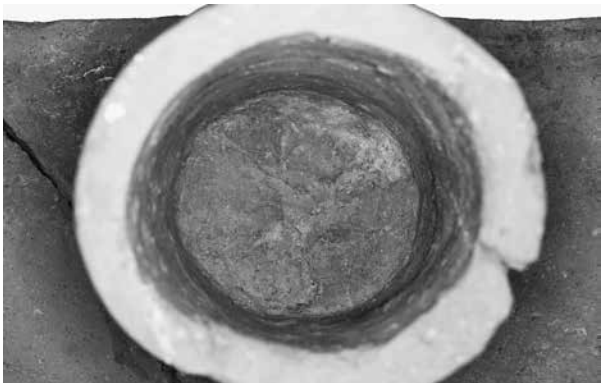
５　蓋内面の竹管状小穴



６　脚内部



７　脚内部



８　脚内部

写真６　桑山南１号墳１号陶棺細部

きる箇所があり（写真６－６～８）、底部の接着は倒立状態で行われたと考えられる。

２号陶棺（第 25・26 図、写真７、巻頭図版３－１、図版 42）

蓋身一体造りの土師質亀甲型陶棺（**Ｃ２**）である。全長 189.8cm、最大幅 67.5cm、最大高 95.8cm を測り、平面形は中央がわずかに膨らむ隅丸長方形を呈す。脚は３行６列だが、２行目中央の脚が省略されており、脚の総数は 16 本となっている。色調は左右で異なっており、奥壁側（図左半）は赤橙色、羨道側（図右半）は浅黄橙色を呈する。

蓋の長さは、奥壁側で 94.0cm、羨道側で 84.5cm となり、奥壁側がやや長い。最大幅は 57.2cm、切断部からの高さは 27.0 ～ 30.0cm である。厚さは側面で 2.3 ～ 2.5cm、天井部で 2.3 ～ 2.8cm を測る。蓋どうしの合わせ目には、羨道側にかぶせ部が設けられているが、受け部は明確ではない。突帯の幅は天井部の突帯と縦突帯が 3.5 ～ 4.5cm、高さ 0.3 ～ 0.5cm で、下端部の横突帯は幅 3.0 ～ 3.5cm、高さ 0.5 ～ 1.0cm となる。蓋には円柱状の突起が長側辺側に４つずつ、小口側に１つずつ付けられており、合計で 10 個の突起があったと想定される。突起先端部の直径は 6.0 ～ 6.5cm、高さは 6.0 ～ 6.5cm で、蓋に差し込まれて装着されている。封じ穴は、小口側の頂部に左右一か所ずつ認められる。蓋の内面には成形時のものと思われる角材の痕のような痕跡が認められるほか、直径５㎜前後の未貫通の小穴が数点ある。調整は内外面とも全面に丁寧なナデ調整が施されている。

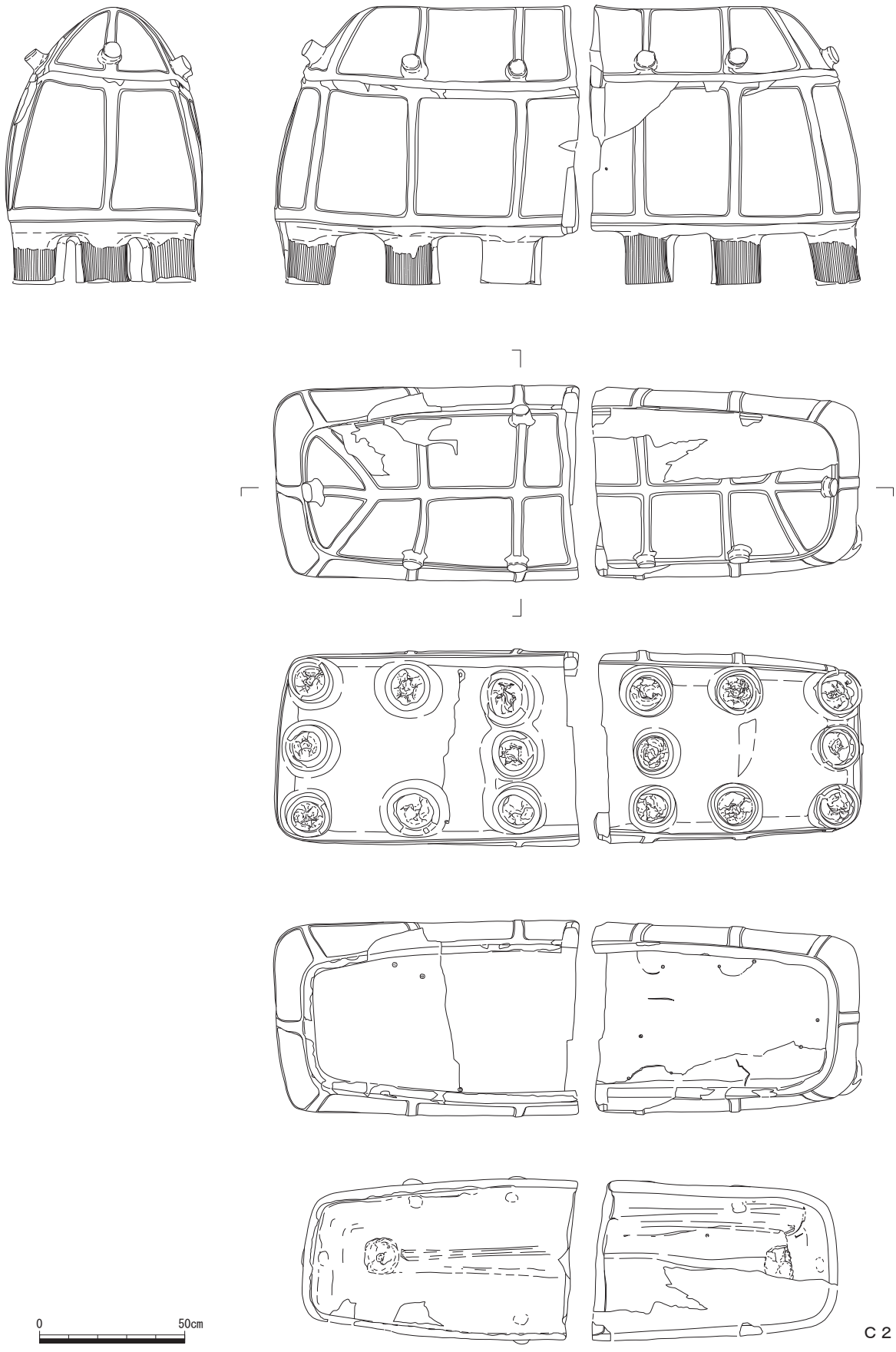
身の長さは、奥壁側が 104.7cm、羨道側が 89.0cm で、奥壁側がやや長い。最大幅は 66.0 ～ 67.0cm、切断部までの高さはどちらも 71.0cm である。厚さは側面、底面とも 2.0 ～ 2.5cm で、蓋身一体造りの土師質亀甲型陶棺としてはやや薄型の印象を受ける。突帯の幅は棺底部の横突帯と縦突帯が 3.5 ～ 4.5cm、高さ 0.3 ～ 0.5cm で、上端部の横突帯は幅 3.0 ～ 3.5cm、高さ 0.5 ～ 1.0cm となる。棺内底面は長さ約 177cm、幅約 53cm を測る。棺内には底面から側面にかけて、竹管のような素材による直径１cm ほどの未貫通の小穴が複数あり、底面の小穴は亀裂によって繋がっているものが多い。また、それとは別に、奥壁側の底面には焼成後に穿たれたと考えられる２つの貫通した小穴が認められ、両者の間にも亀裂が入っている。亀裂と穿孔の前後関係については不明である。棺身を左右に切断する際、両側壁の中央部と棺底面にクランクを設けている。調整は内外面とも全面丁寧なナデ調整であるが、底面裏側には部分的に板状工具で掻いたり、押さえたりしたような痕跡が認められる。

脚は、下端部の直径が 14.8 ～ 18.0cm、高さ 15.0 ～ 18.0cm の円柱形で、直径と高さの比率がほぼ等しい。厚さは 1.0 ～ 2.0cm で、幅 3.0cm 前後の粘土紐の巻き上げもしくは輪積みによって成形し、外面はハケ、内面と下端面はナデ調整で仕上げている。下端面には部分的にワラの踏み痕のような幅 0.8cm ほどの直線的な凹みが認められる。底部との接合方法については詳細な観察ができる破片がなかったが、裏側から脚の内部を見たとき、柔らかい帯状の粘土を内側に折り込み、中央にできた空白に粘土塊を充填したような痕跡が観察できた。脚の内面には底部と接合した後に手を加えたような痕跡は見られない。（藤井翔）

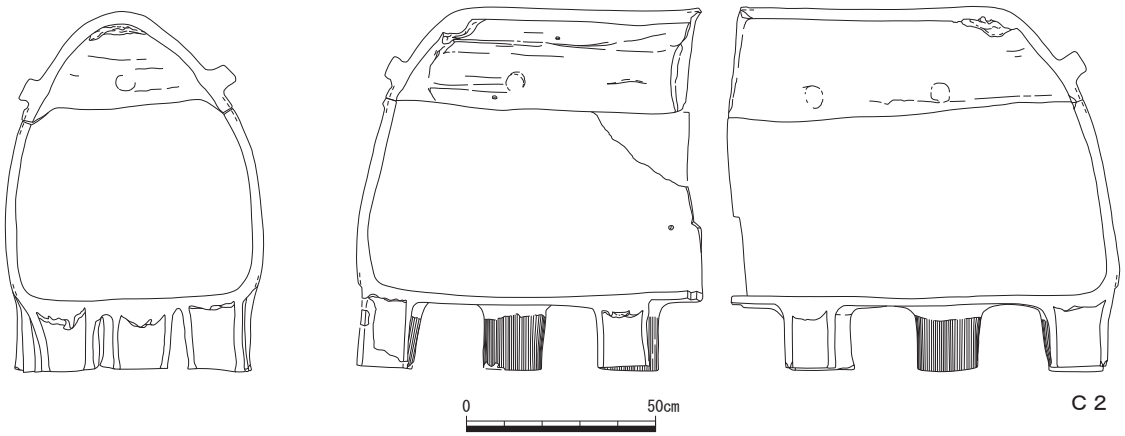
土器（第 27 ～ 32 図、図版 43 ～ 46）

石室内から出土した土器には、図示し得たもので須恵器 42 個体、土師器 34 個体があり、他の古墳に比べ土師器が多い特徴がある。また、古墳時代以外の土器として、２号陶棺内から中世瓦質土器の鍋が１点出土している。

須恵器の杯蓋（**１～９**）は、口径 12.6 ～ 14.6cm、器高 3.9 ～ 5.0cm の幅がある。天井部は丸く仕上げ、回転ヘラケズリを行うものと省略するものとがある。口縁端部には内傾する面をもつもの（**２・**

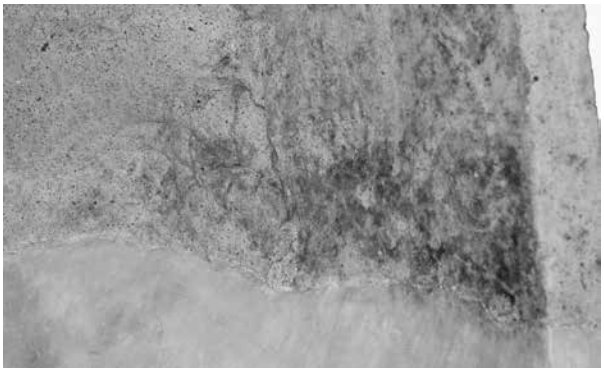


第 25 図　桑山南１号墳２号陶棺①（1/20）

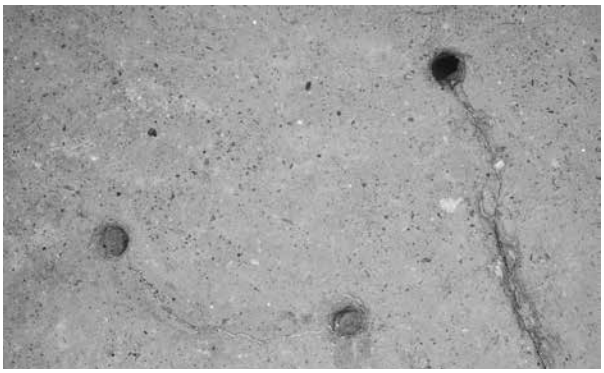


第 26 図　桑山南１号墳２号陶棺②（1/20）

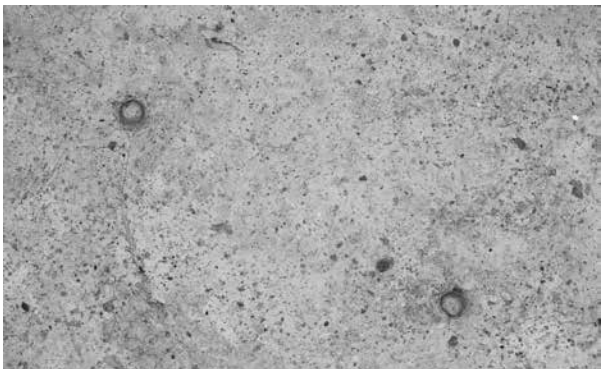
１　封じ穴（蓋内面・図左側）



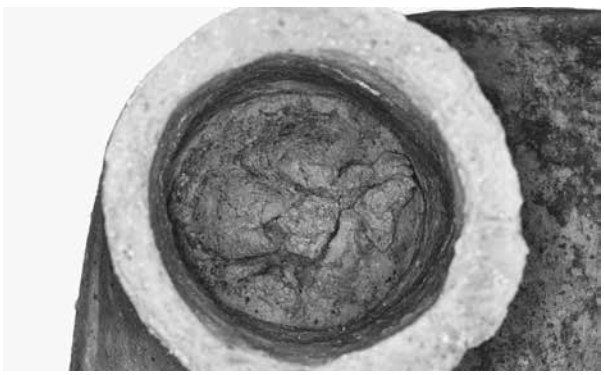
２　封じ穴（蓋内面・図右側）



３　身底面の竹管状小穴と貫通する小穴



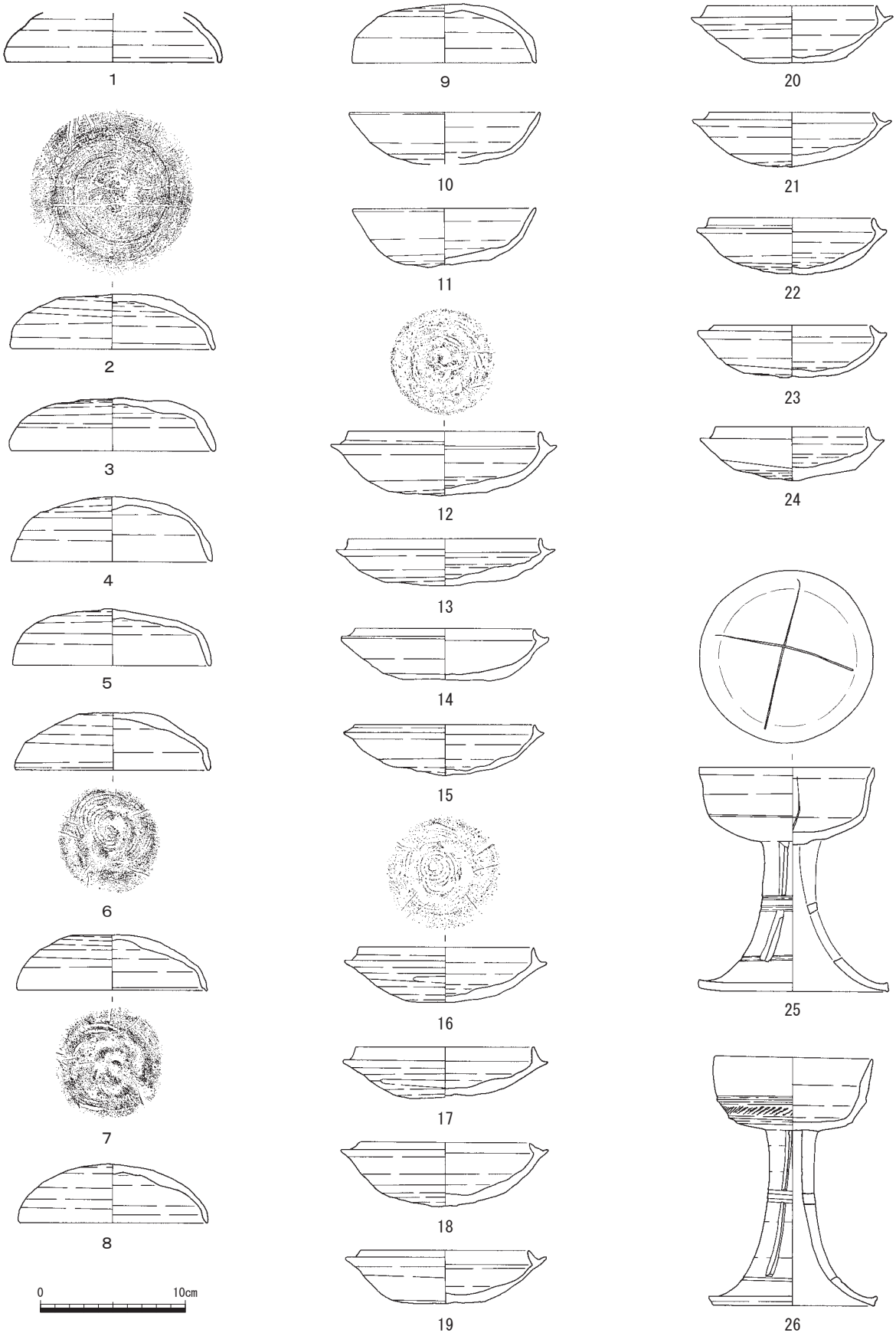
４　身底面の竹管状小穴



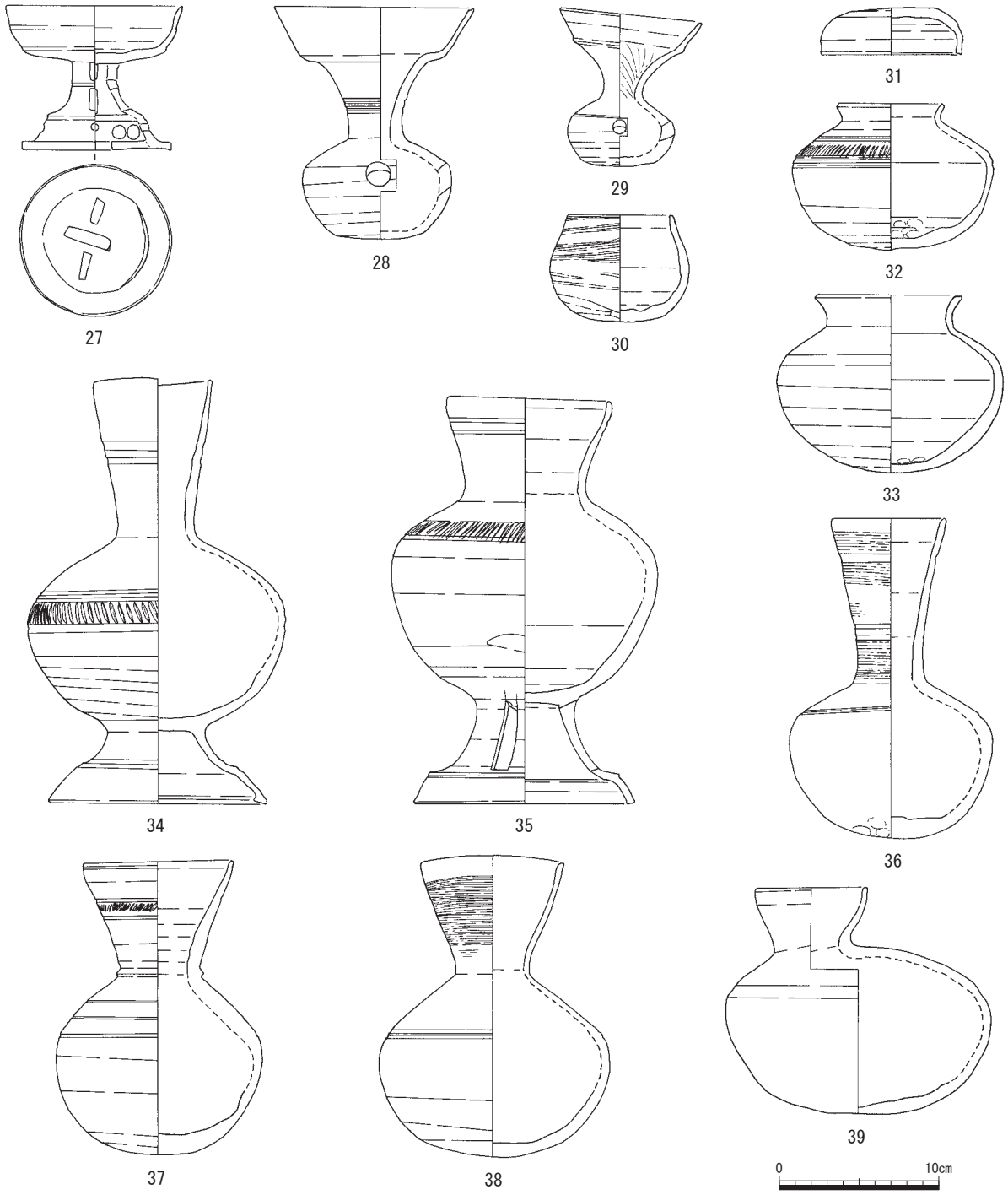
５　脚内部

６　脚内部

写真７　桑山南１号墳２号陶棺細部

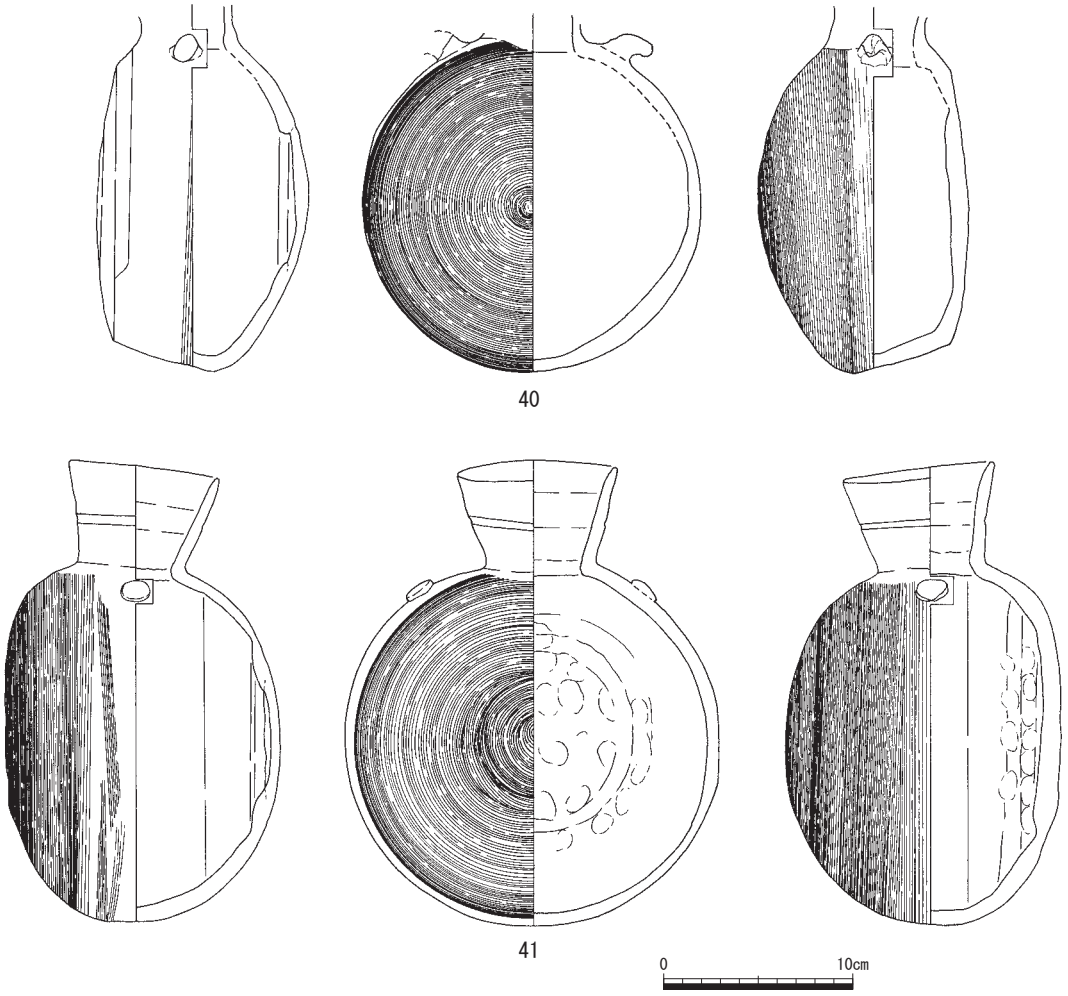


第 27 図　桑山南１号墳石室内出土遺物①（1/4）



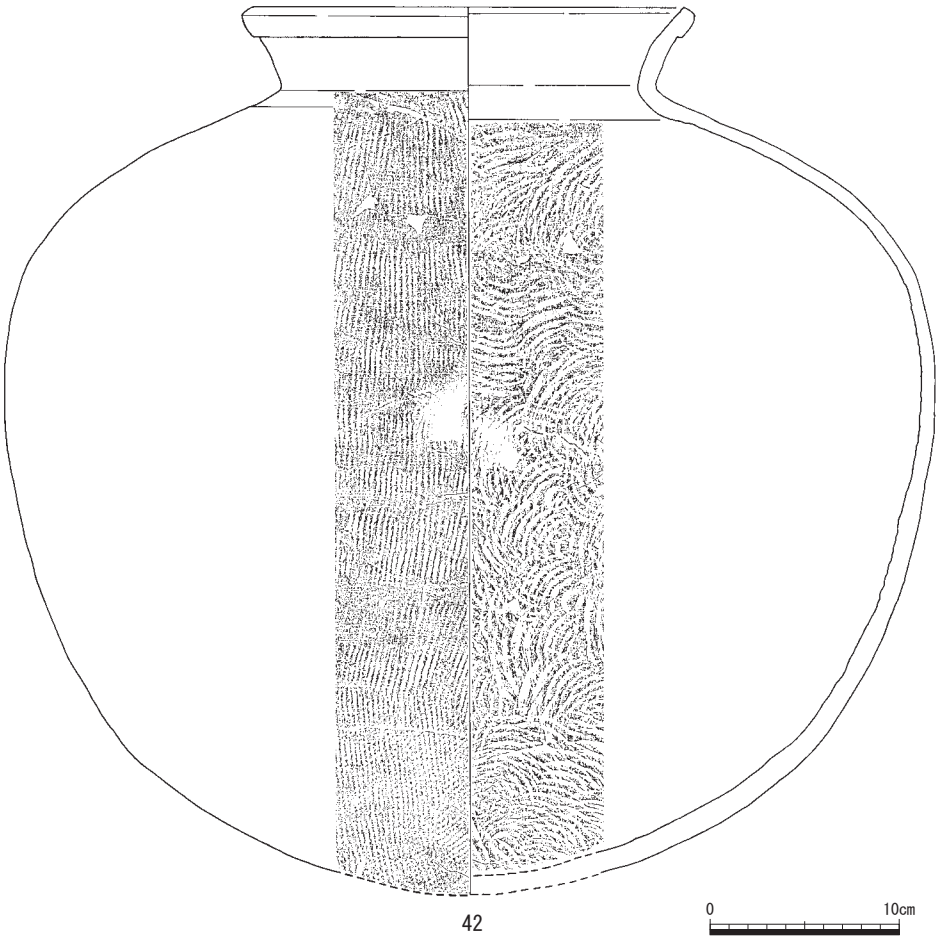
第 28 図　桑山南１号墳石室内出土遺物②（1/4）

７）があるが、大部分は丸くおさめている。また、天井部内面に同心円当て具痕を残すもの（６・７）や、天井部外面に一文字形のヘラ記号をもつもの（２）がある。杯身のうち 10・11 は杯蓋とも考えられる器形であるが、杯蓋に比べ薄手で口縁が直線的に開く。また出土状況をみれば、この２点はいずれも羨道閉塞部から出土しているが、付近にこれに組み合う器種はなく、蓋を伴わない杯身と判断した。口径 12.5 ～ 13.0cm、器高 3.6 ～ 4.1cm で、底部外面の周縁にわずかに回転ヘラケズリを施しているが、底部中央は未調整である。その他の杯身は口縁に立ち上がりをもつもので（12 ～ 24）、法量は口径 10.6 ～ 13.2cm、器高 3.3 ～ 4.6cm の幅がある。底部外面には回転ヘラケズリを行うものと



第 29 図　桑山南１号墳石室内出土遺物③（1/4）

省略するものとがあり、底部内面には同心円当て具痕を残すもの（12・16）がある。高杯のうち、長脚高杯（25・26）はいずれも脚に２段３方向の透かしをもつ。杯部外面は 25 が無文で、26 は下半部に櫛状工具による連続刺突文を施している。また 25 は杯部内面に十字形のヘラ記号を付す。27 は短脚の鈴付高杯である。脚部を３段に分けて、上２段に２方向の透かしを開け、最下段は上下を円板で塞いで中に土製の丸２個を入れ、鈴としている。最下段（鈴部）の側面には径約５㎜の円孔を４方向に開け、底面には長方形の透かしを３つ入れている。瑯は大小２点があり（28・29）、いずれも羨道閉塞部から出土している。30 は小型の椀で、外面上半に粗いカキメを施す。31 は蓋で、胎土・色調・焼成から 32 の短頸壺に組み合うことが明らかである。32 の肩部にはヘラ状工具による連続刺突文が施される。33 はやや大きな短頸壺である。34・35 は台付長頸壺で、いずれも胴部に連続刺突文を施すが、34 がヘラ状工具、35 が櫛状工具によるものである。35 の台は３方向に長方形の透かしをもつ。36 ～ 38 は長頸壺で、36 と 38 は口縁部外面にカキメを施す。37 は口縁部中ほどにヘラ状工具による連続刺突文、口縁部と胴部の境に断面三角形の突帯を廻らす。39 は平瓶である。提瓶は２点出土しており（40・41）、40 が鉤状の把手をもつのに対し 41 は碁石状になる。40 が奥壁部、41 が閉塞部の出土であり、形態差が時期差を反映していると考えられる。42 は石室内上層から出土した甕で、数多くの破片からの復元である。本来は墳丘上に置かれていた可能性がある。



第 30 図　桑山南１号墳石室内出土遺物④（1/4）

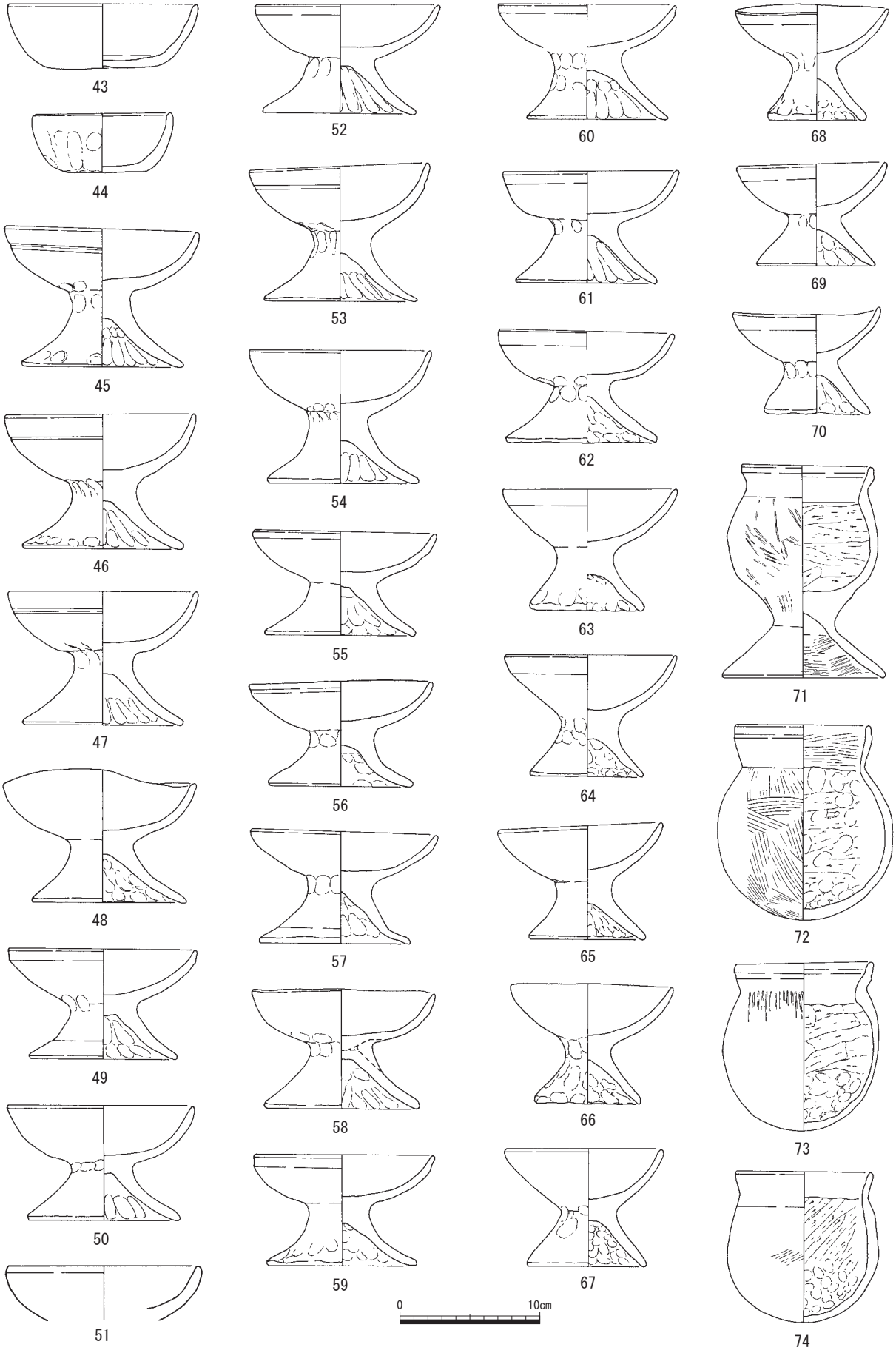
土師器は、椀、高杯、台付鉢、甕がある。椀（43・44）は大小２点のみの出土で、いずれも黒斑をもつ。高杯（45 ～ 70）は最も出土数の多い器種であり、浅い椀形の杯部に「ハ」の字形の脚を貼り付け、外面及び杯部内面はヘラミガキで仕上げている。脚の接合は、断面でその状況が判明する 58 をみると、杯部と、頂部を閉じた円錐形の脚部を別づくりにして接合し、周囲のくびれ部に粘土を補って成形していることが分かる。また、口縁下に１条の凹線ないし沈線を廻らせるもの（45 ～ 47・53・56）があるほか、黒斑をもつもの（53・59）も少数ある。器面には、ほぼすべての高杯が赤色顔料を塗布しており、脚を含めた外面及び杯部内面に塗布するものが大部分であるが、ほかに杯部内外面のみに塗るもの（53・61）、脚部内面まで全面的に塗るもの（56・66・68）がある。台付鉢（71）は、甕形の体部に「ハ」の字形の台を付けるもので、外面及び口縁部内面に赤色顔料を塗布する。甕は、小型のもの（72 ～ 74）とやや大型のもの（75・76）とがあるが、小型品は器形が台付鉢（71）と似ており、外面に赤色顔料を塗布するもの（73・74）もあることから、大型品とは機能が異なるであろう。

古墳時代以外の土器として、中世の瓦質土器鍋（77）がある。２号陶棺内及び周辺から出土しており、遅くとも中世には２号陶棺の蓋が開けられたことが分かるが、その目的などは不明である。

武器（第 33・34 図、巻頭図版４－１、図版 47・48）

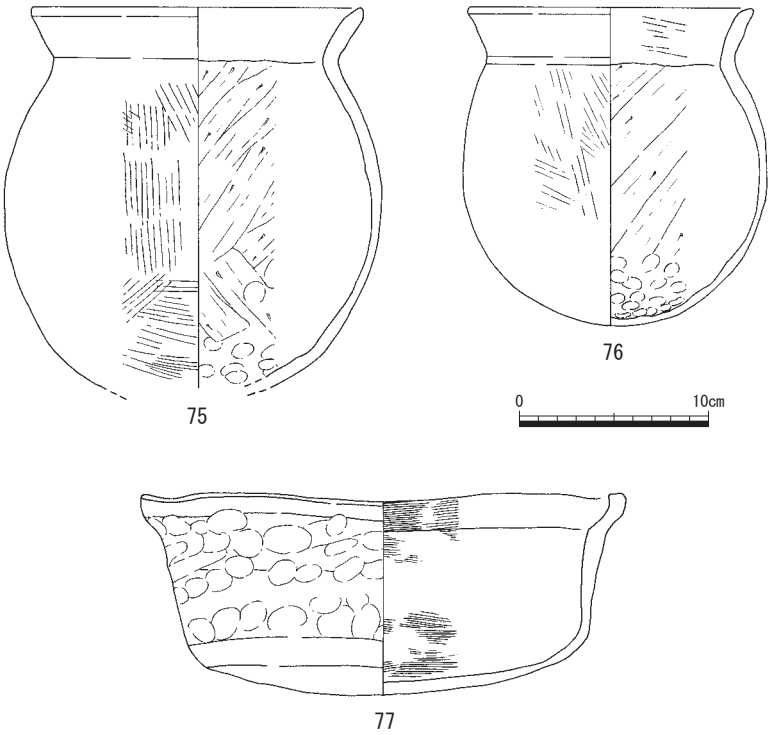
石室内から出土した武器には、象嵌装大刀、鉄鏃、弓飾金具（両頭金具）がある。

象嵌装大刀（Ｍ１～Ｍ３）は２号陶棺の棺床から出土したもので、鉄製の刀身・茎に、鉄地銀象嵌の鍔・鎺・責金具などが付属する。蛍光Ｘ線分析により、象嵌線部分で主に銀（Ag）を、地金部分で鉄（Fe）



第 31 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑤（1/4）

のみを検出している[(3)]。象嵌線の幅は約 0.4㎜である。刀身は保存状態が悪く層状に剥離が進行しており、棺内から多くの断片が出土したが復元は不可能であった。茎は２か所に目釘穴が認められ、表面に木質が遺存している。関は刃側・棟側の両方に段を有し、鎺に覆われるため観察が困難だが、ＣＴスキャン画像[(4)]によれば刃側は図（右上）に破線で示したように２段の関になる可能性がある。鍔は倒卵形で、高さ約 6.1cm、幅約 5.2cm、厚さは錆膨れがあるが本来は 0.4 ～ 0.5cm とみられる。鍔の表裏両面と側面には銀象嵌文様が施されている。表裏は同じ文様構成で、心葉文７つを割り付け、心葉文の内部と外部を多数のゆるやかな弧線で埋める。側面には、３重の半円文を互い違いに組み合わせながら、復元で約 20 個を配す。鎺は、高さ約 3.8cm、幅約 2.7cm、厚さ約 1.3cm の倒卵形で、刃身側の平面部と側面に銀象嵌文様が施される。平面部には、刀身の両側に蕨手ないし渦巻状の「Ｓ」字文が２個ずつ計４個配置される。側面には、鍔と同様の心葉文を５つ割り付け、その間の空間５か所のうち４か所を２重半円文、１か所を５本の弧線で埋めている。柄縁責金具（Ｍ２）は、茎が貫通した状態で出土しており、その状況から本来は鍔に接して装着されたものと推定した。側面には全周に計 12 個の２重半円文が配される。また、これと似た形状の責金具（Ｍ３）が石室内から出土しており、同じ大刀に付属する可能性がある。銀象嵌は施されず、内面に木質が認められる。



第 32 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑥（1/4）

鉄鏃は、鏃身部で計数して 16 本以上を数える。型式は、細根・柳葉式（Ｍ４・Ｍ５）、細根・片刃式（Ｍ７）、平根・柳葉式（Ｍ 13・Ｍ 14・Ｍ 20）、平根・三角形式（Ｍ 15・Ｍ 16・Ｍ 19・Ｍ 21・Ｍ 22）、平根・腸抉柳葉式（Ｍ 23）、平根・方頭式（Ｍ 24）、平根・圭頭式（Ｍ 25・Ｍ 26）があり、バリエーションに富む。また円錐形、中空の小型鉄器があり（Ｍ 31）、有袋鉄鏃と推定した。

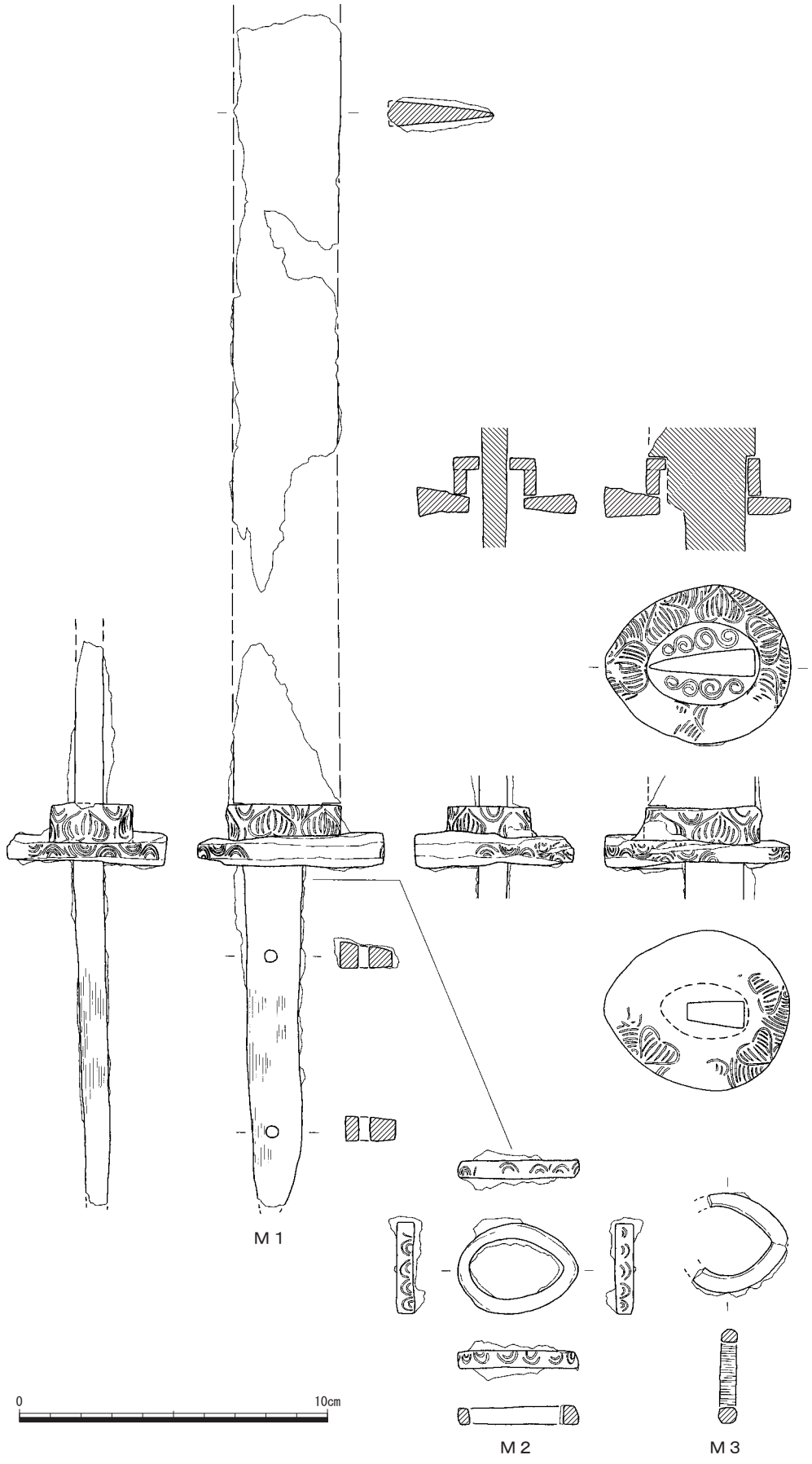
弓飾金具（Ｍ 32・Ｍ 33）は、管状部の両端に花弁状突起を有する。

馬具（第 34 図、図版 48）

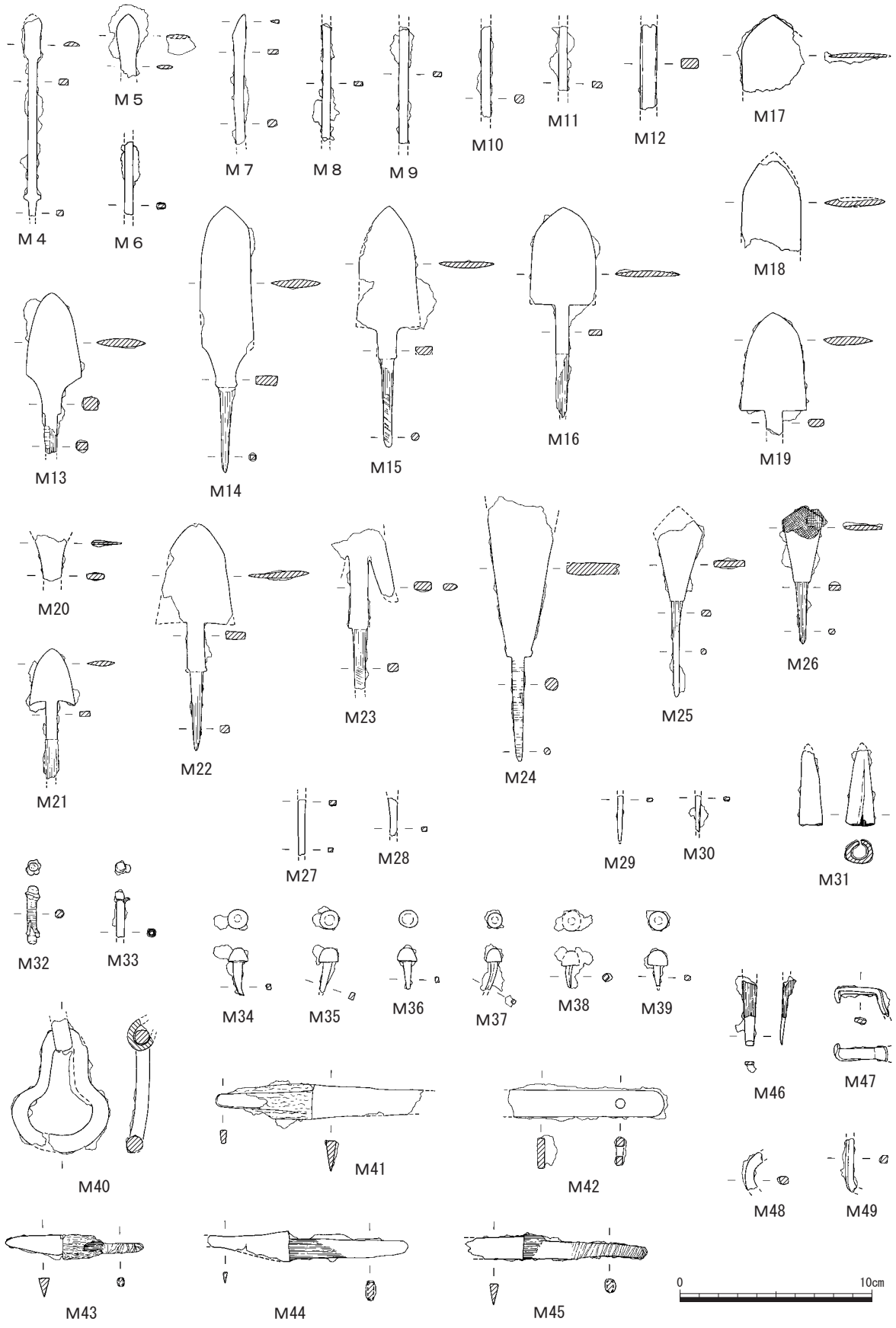
馬具は断片的な出土であり、鞍１点と鋲６点にとどまる。鞍（Ｍ 40）は鉄製で、脚を欠損している。輪部は瓢形をなし、刺金は付属しない。鋲（Ｍ 34 ～Ｍ 39）は鉄製、小型の鋲頭釘で、頭部は半球形をなす。鞍とともに鞍に伴うものであろうか。

工具ほか（第 34 図、図版 48）

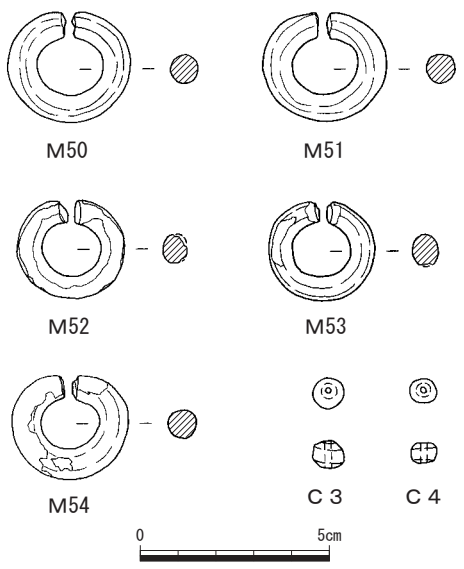
刀子は５点出土している（Ｍ 41 ～Ｍ 45）。Ｍ 41・Ｍ 43 は鹿角製の柄をもつ刀子で、Ｍ 43 は茎に紐又は糸を巻いた痕跡があり、さらに柄の鹿角質との間に木質が認められる。鹿角製の柄を装着する

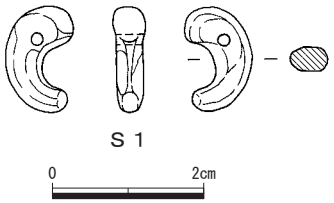


第 33 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑦（1/2）

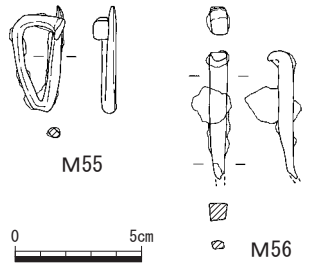


第 34 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑧（1/3）





第 35 図　桑山南１号墳石室内出土遺物⑨（1/2・1/1）



第 36 図　桑山南１号墳周辺出土遺物（1/3）

際、茎との間に薄い木片を挟み固定を図ったものとみられる。M 42 はやや大型の茎の破片で、１か所に目釘穴がある。M 44・M 45 は２号陶棺内から出土したもので、茎に木質が認められ、M 45 は紐又は糸を巻いた痕跡がある。

そのほか用途不明の鉄器として、鑿状鉄器（M 46）、小型の鎹状鉄器（M 47）、屈曲する棒状品（M 48・M 49）がある。鑿状鉄器（M 46）は不明瞭ながら先端に刃が付いているように見え、先端約 1.5㎝を残して木質が付着する。

装身具（第 35 図、巻頭図版４－２、図版 48）

装身具は、耳環５点（M 50 ～M 54）、練玉２点（C３・C４）、滑石製勾玉１点（S １）のみである。耳環はその特徴と出土状況から、M 50 とM 51 が対で１号陶棺に、M 52 とM 53 が対で２号陶棺に伴うものと推定される。M 54 は両陶棺の間で出土し、対になるものが発見されていない。M 50・M 51 は銅地金貼りで、表面の金がほぼ完存する。M 52 は銅地銀貼り、M 53 も不明瞭ながら銅地銀貼りの可能性が考えられる。以上４点は蛍光Ｘ線分析で材質を特定し、またアマルガムを使用していないことが判明している[(5)]。M 54 は保存状態が悪く、銅製で表面は剥落している。練玉（C３・C４）は径６～７㎜ほどの丸玉で、玄室内出土だが詳細な位置は不明である。勾玉（S １）は全長 13.6㎜の小さなもので、１号陶棺の下から出土した。

６　その他の遺物

石室外からの出土遺物として、１号墳の周溝や周辺流土層から出土した鉄釘がある（M 55・M 56）。時期は明らかでないが、１号墳の石室内からは鉄釘が出土していないので、１号墳には直接伴わないものと考えられる。M 55 は２か所で折れ曲がっている。なお、古墳時代以外の遺物については章末にまとめて掲載する。　（尾上）

註

（1）『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

（2）藤田憲司『こうもり塚と江崎古墳』吉備考古ライブラリィ⑨　吉備人出版　2003

（3）・（4）象嵌装大刀の保存処理業務を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託しており、その際に分析等がなされた。

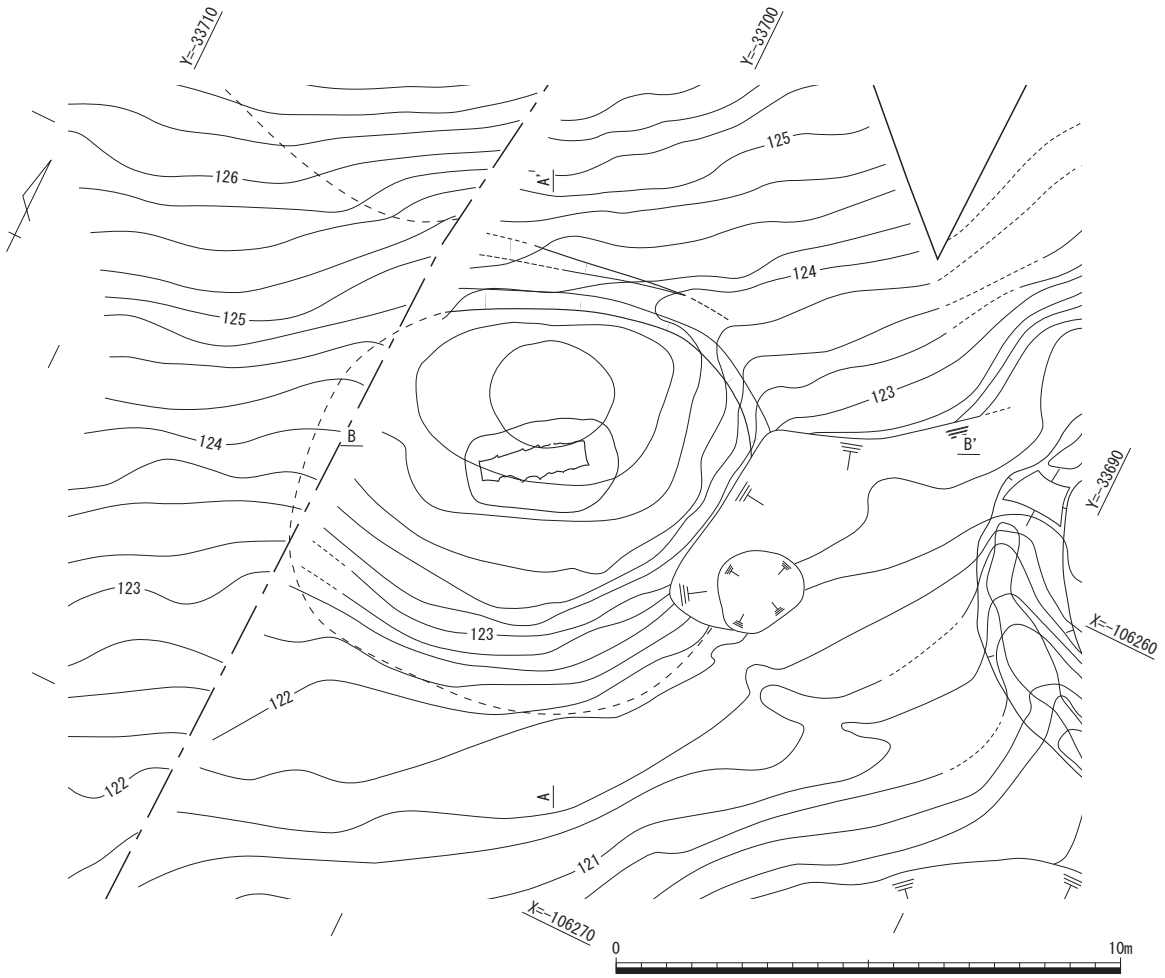
（5）富山大学芸術文化学部長柄毅一教授、くらしき作陽大学澤田秀実教授による蛍光Ｘ線分析の結果。両先生から多くの教示をいただいた。記して謝意を表する。

第３節　桑山南２号墳

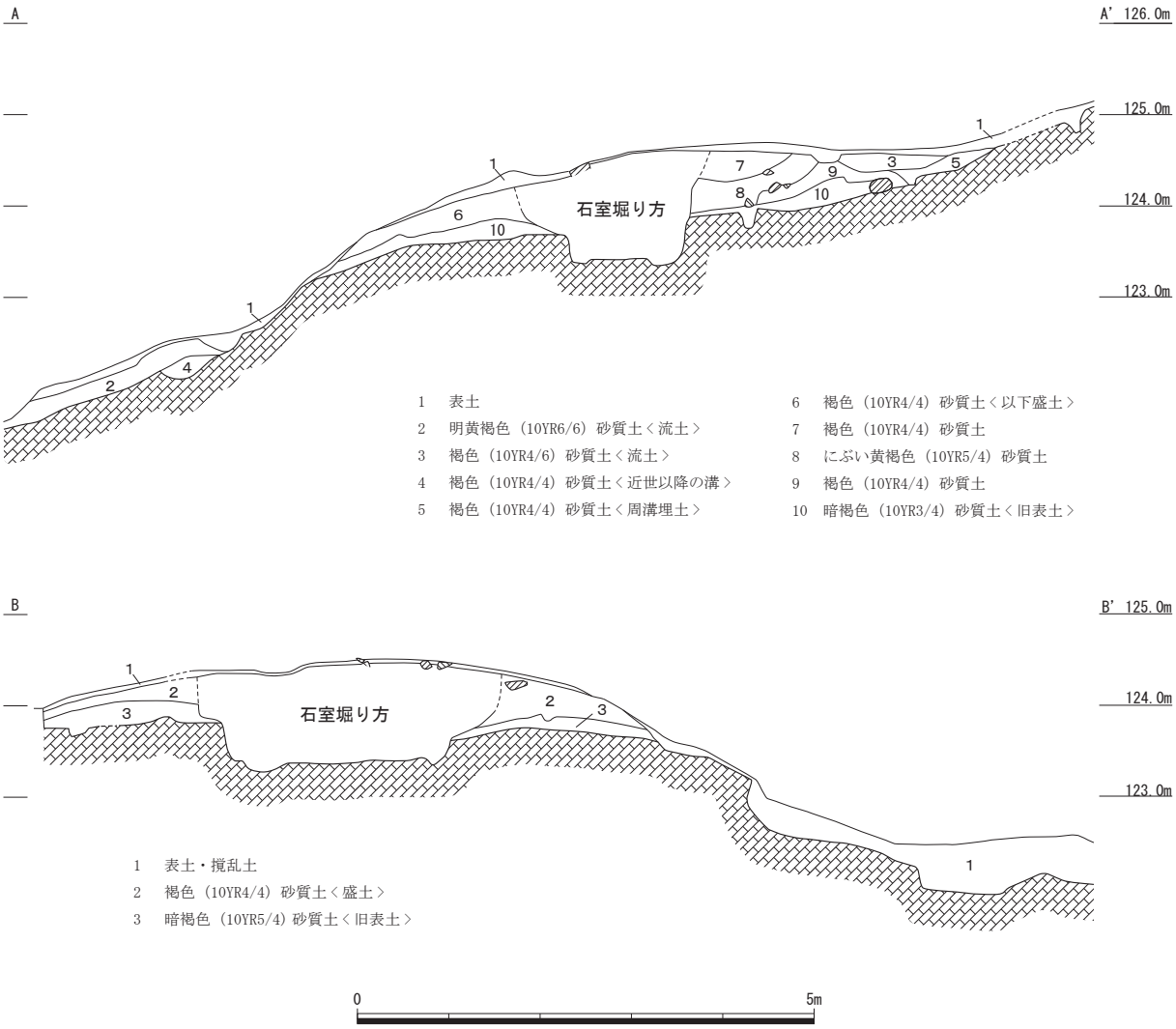
１　墳丘と周溝

２号墳は、１号墳の北西に位置する。墳丘は東側が大きく削平を受けているほか、南東側も林道などにより一部削られていた（第 37 図）。また、西側は調査対象地外にあり、詳細は不明である。北側は比較的良好に残っており、周溝を検出した。周溝は、幅約１ｍ、深さ約 20cm を測るが、掘削は地山の岩盤には及んでおらず、あまり明確でない。また、周溝は墳丘の東側にはまわらず、北側に隣接する４号墳と区画する程度の簡素なものだったと考えられる。以上の状況をふまえて墳丘を復元すれば、径約８～９ｍの円墳になる。残存する墳丘の高さは最大で約 2.5 ｍであるが、墳頂にある竪穴式石室は撹乱を受けており、墳頂部は削平を受けている可能性が高い。なお、周溝埋土からは甕（88）の破片や埴輪（91・92・94・95）が出土している。

墳丘の盛土は、旧表土の上に褐色～黄褐色の土が 50 ～ 60cm ほど残存するのみである（第 38 図、写真８・９）。南側の地山を削り出すことで、盛土が少なくとも高さのある古墳になっている。



第 37 図　桑山南２号墳墳丘（1/150）

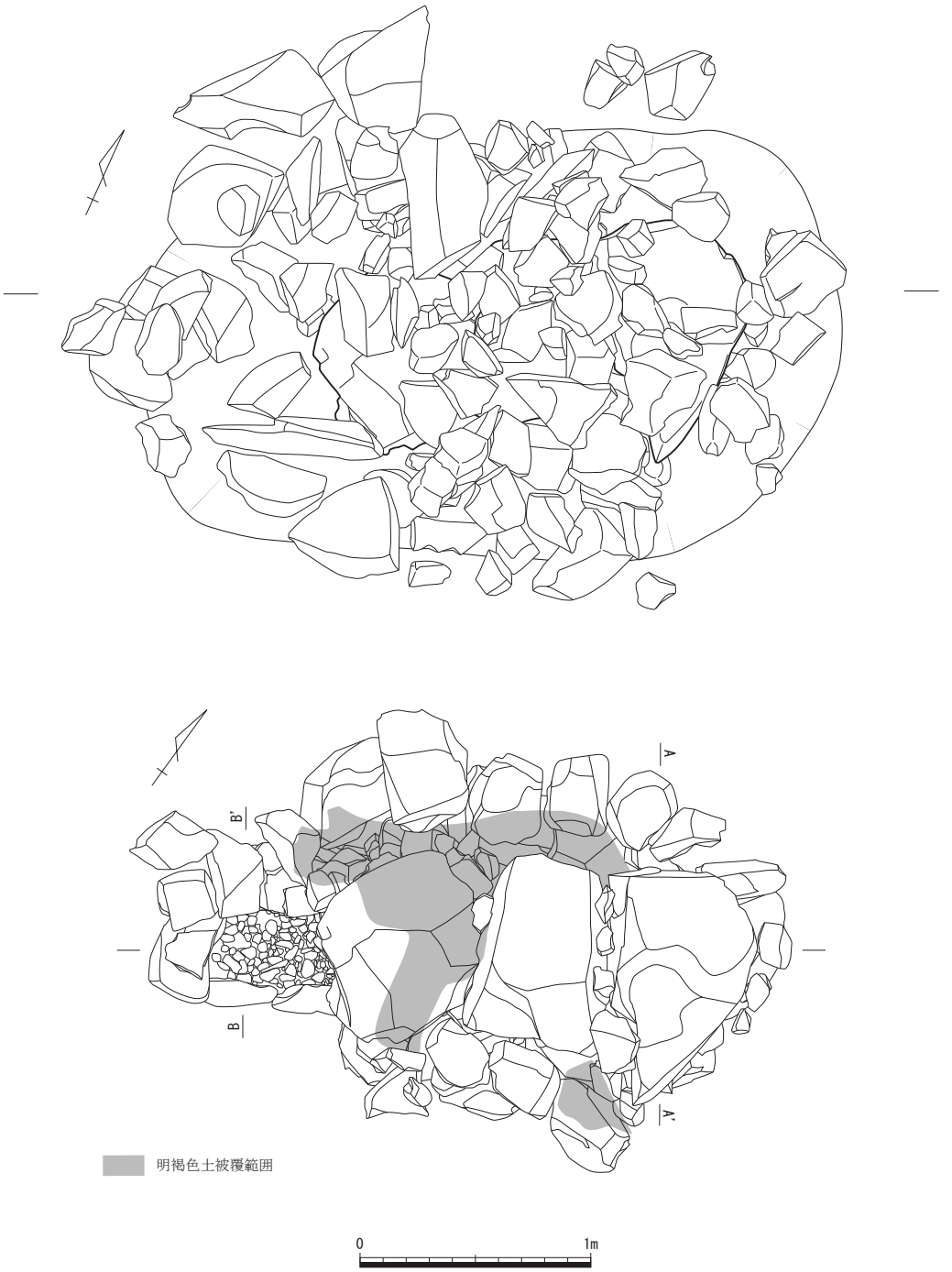


第 38 図　桑山南２号墳墳丘土層断面（1/80）

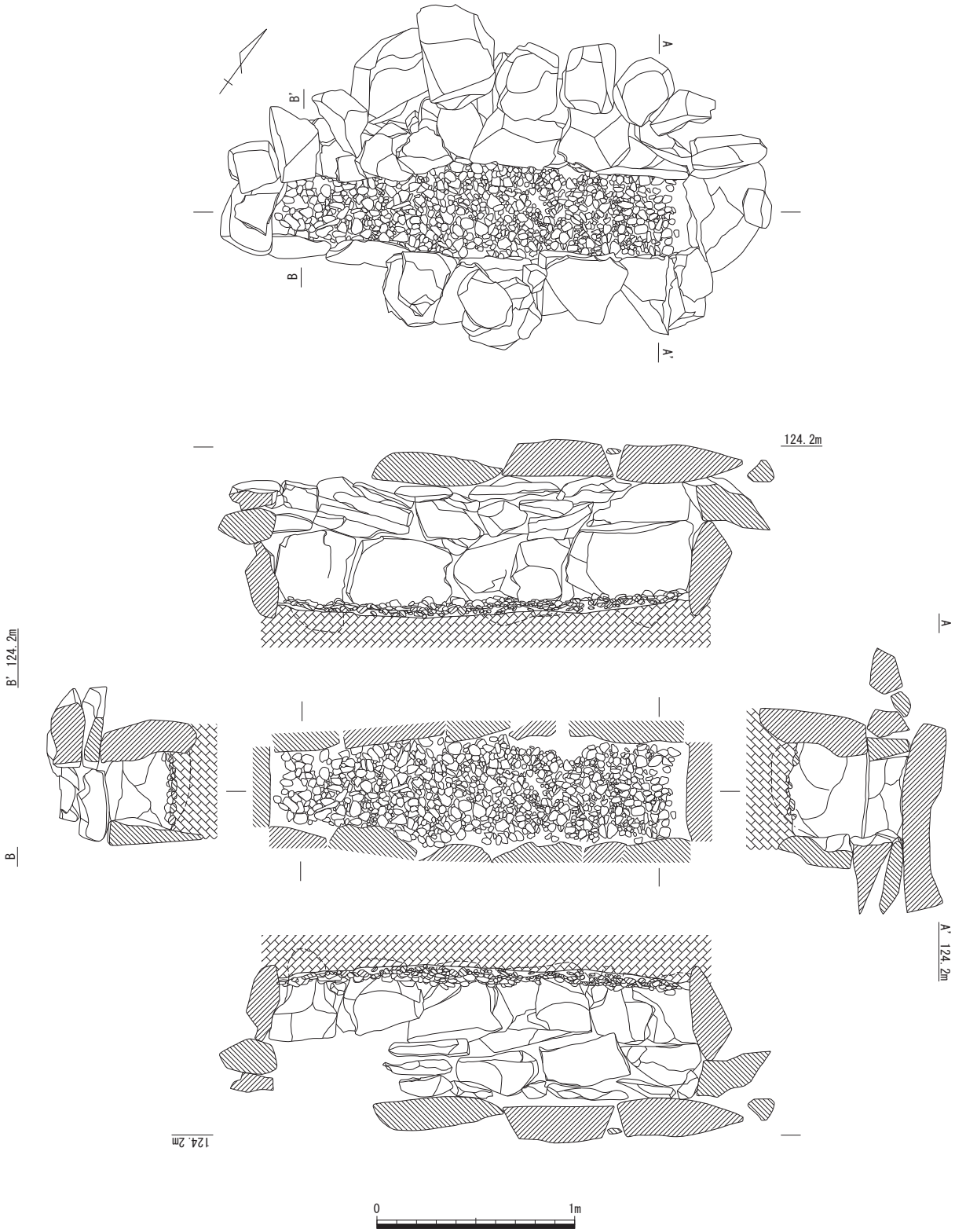
写真８　桑山南２号墳北側墳丘断面（北東から）　写真９　桑山南２号墳南側墳丘断面（南東から）

２　竪穴式石室

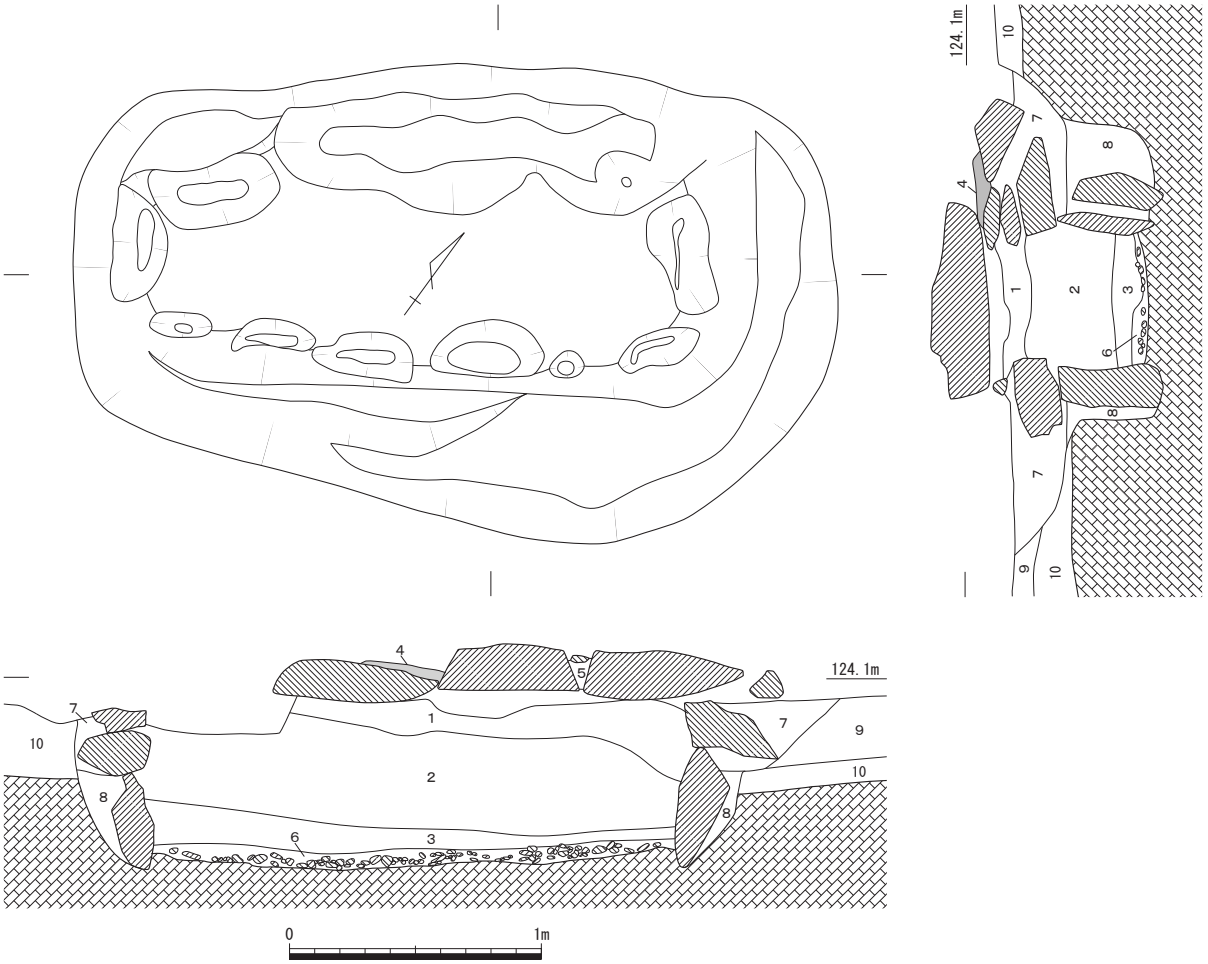
２号墳の主体部は、墳頂部に築かれた竪穴式石室である。表土を除去すると、墳頂部には人頭大の礫が散乱しており、その礫に覆われたような状態で天井石を検出した（第 39 図）。天井石は３石確認したが、南西端の１石は撹乱により取り去られており、天井石を覆う礫もどこまでが築造時の状態かは明確でない。中央から北東側の天井石３石については、石室の閉塞時に石の隙間に貼り付けられたと考えられる明褐色土が残っており、築造時の状態を保っている可能性が高い。なお、この明褐色土



第 39 図　桑山南２号墳石室上面集石・集石除去後の天井石検出状況（1/30）



第 40 図　桑山南２号墳石室（1/30）



第 41 図　桑山南２号墳石室掘り方・土層断面（1/30）

については、蛍光Ｘ線分析により周辺の地山土を同じ成分であることが指摘されている（第５章第１節）。

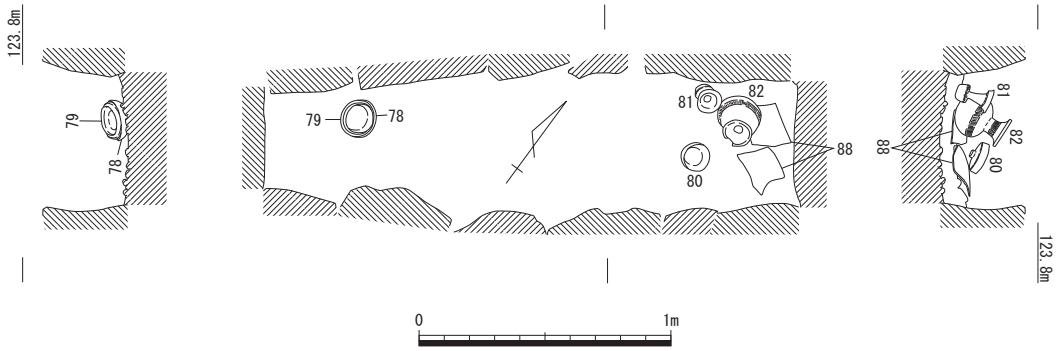
石室の掘り方は、盛土の上から掘り込まれており、まず旧表土付近まで広く掘り窪めた後、石室の大きさや、一段目に据える石の高さに合わせて旧表土や地山をさらに深く掘削する２段階の掘り下げを行っている（第 41 図）。

石室は、南西側の壁の一部が撹乱を受け壊されている。石室主軸はＮ 54° Ｅ、規模は長軸が 2.1 ｍ、短軸が北東端で 0.5 ｍ、南西端が 0.4 ｍ、高さは 0.6 ｍを測る。石室は、まず基底石となる板状の石を立てて据え、裏込め土を充填して固定してから、２段目以降の石をその上に小口積みしていく方法で、２～４段の壁を構築している（第 40 図）。

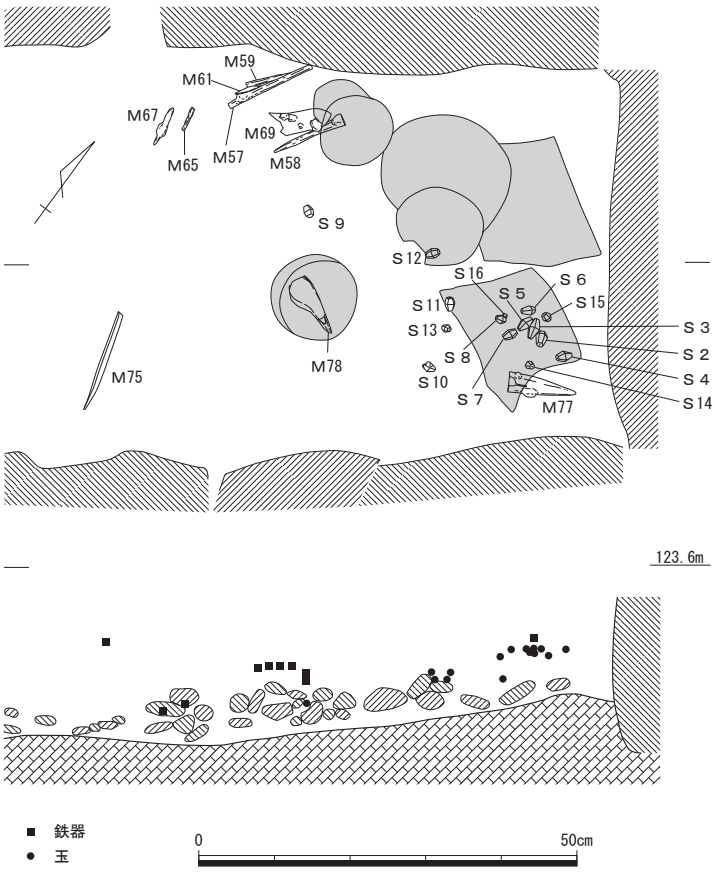
石室内部は撹乱を受けた南西側から褐色土が流入し、空間はほとんどない状態であったが、流入土の下から直径１～５㎝ほどの小円礫を敷き詰めた礫床を検出した。礫はいずれも角のないなめらかな玉石で、付近の河川で採集された川原石と考えられる。

３　石室内遺物出土状況

石室内からは、須恵器・鉄鏃・両頭金具・刀子・鉄鐸・玉類が出土した（第 42・43 図）。先述のように石室の南西側は撹乱を受けているが、北東側までは撹乱が及ばなかった可能性があり、原位置を保つと考えられる遺物が多く出土した。まず注目されるのは、石室北東端に並んで出土した２枚の須恵器の甕の破片（88）で、いずれも外面を上にして伏せた状態で置かれていた。状況から枕としての機能が想定され、被葬者の頭位は北東方向であったことが窺える。甕を枕とすると、被葬者の頭部右側に須恵器の瑞（81）と壺（82）が、右腕側に鉄鏃（Ｍ 57 ～Ｍ 59・Ｍ 61・Ｍ 65・Ｍ 67・Ｍ 69）が、



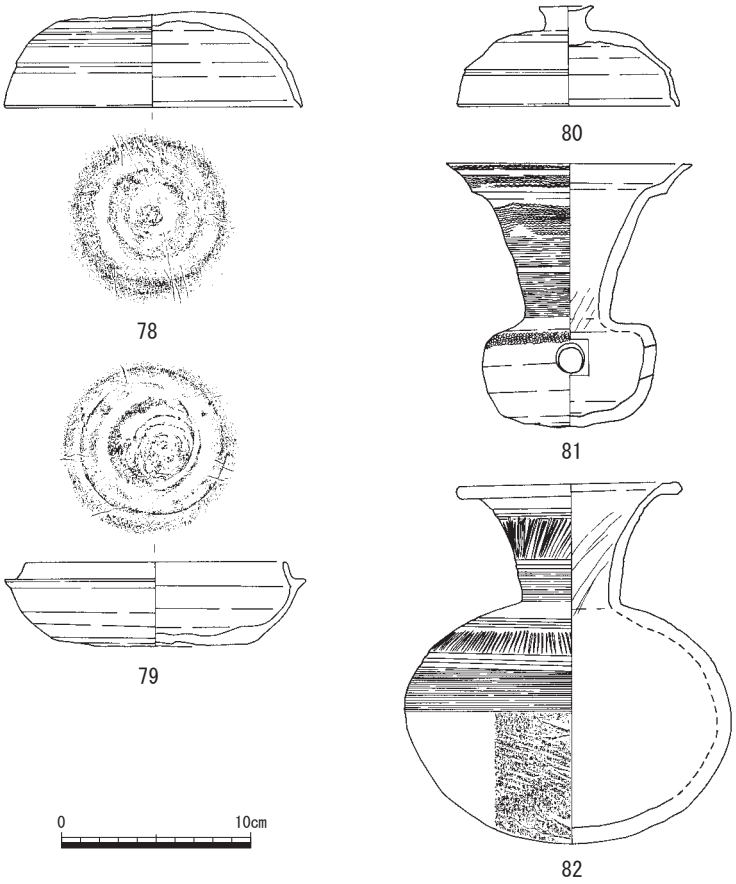
第 42 図　桑山南２号墳石室内土器出土状況（1/30）



第 43 図　桑山南２号墳石室内鉄器・玉類出土状況（1/10）

頸から胸にかけての位置に鉄鐸（Ｍ 78）が、足下右側に杯（78・79）が副葬されていたと考えられる。なお、須恵器の蓋（80）と刀子（Ｍ 75）、鉄鏃（Ｍ 70）は、床面から 10cm 以上高い位置で出土しており、原位置かどうかは不明で、その他の鉄鏃（Ｍ 60・Ｍ 62 ～Ｍ 64・Ｍ 66・Ｍ 68）や両頭金具の出土状況は不明である。

玉類（Ｓ２～Ｓ８・Ｓ 14 ～Ｓ 16）と鉄鐸（Ｍ 77）は、頭部左側の甕の下から出土した。甕の下には明褐色の土が詰まっており、検出時玉は床面からはやや浮いた状態であった。玉の一部（Ｓ９～Ｓ 13）は甕の外側で出土したが、着装状態にあったかは不明。なお、右側の甕の下は精査したが、遺物は何も出土しなかった。



第 44 図　桑山南２号墳石室内出土遺物①（1/4）

４　石室内出土遺物

土器（第 44 図、図版 49 － 1）

石室内からは５点の須恵器が出土した。78 は杯蓋で口径は 15.5cm、79 は杯身で口径は 13.7cm を測る。80 は口径 11.6cm の蓋で、頂部にはつまみが付く。81 の瓶は、口径 12.9cm、高さ 14.0cm で、胴部に刺突文、頸部から口縁部に櫛描波状文が施されている。82 は壺で、口径 11.3cm、高さ 19.2cm、口縁部と肩部の凹線で区画された位置に刺突文が施され、胴部下半外面には平行タタキ目が残る。

武器（第 45 図、図版 49 － 2）

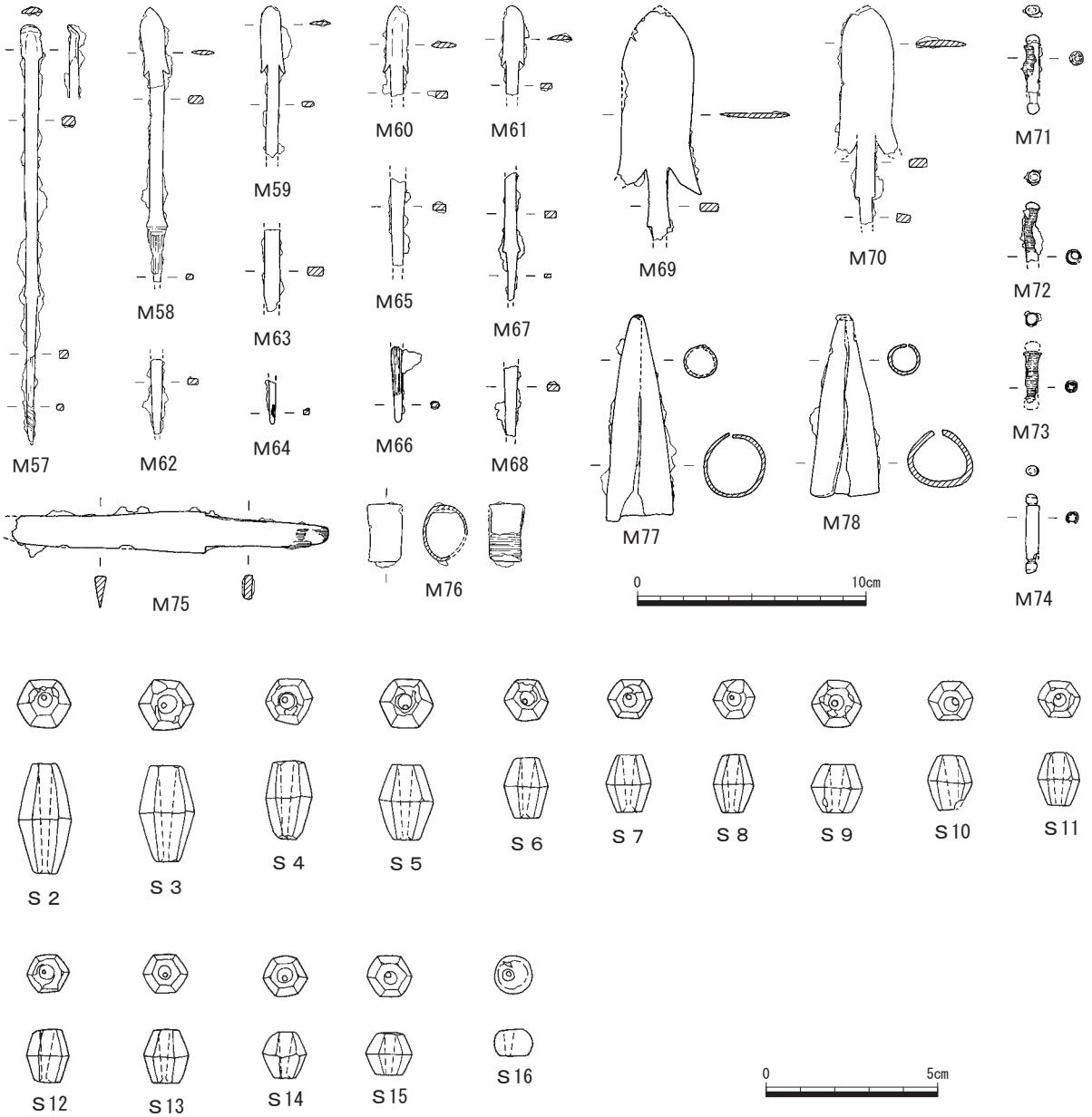
Ｍ 57 ～Ｍ 68 は長頸鏃である。Ｍ 57 は柳葉形の鏃身で、先端が曲がっているが全長は 182㎜を測り、茎部には矢柄の木質や茎糸巻の痕跡が観察できる。Ｍ 58 ～Ｍ 61 は腸抉柳葉形を呈する鏃身部の破片である。Ｍ 69・Ｍ 70 は平根鏃で、いずれも腸抉柳葉形を呈する。Ｍ 71 ～Ｍ 74 は両頭金具である。

工具ほか（第 45 図、巻頭図版３－２、図版 49 － 2）

Ｍ 75 は刀子である。先端が欠損しており、現存長は 138.7 ㎜を測る。Ｍ 76 はＭ 75 に装着されていたと考えられる錐で、内面には木質が遺存している。Ｍ 77・Ｍ 78 は鉄鐸で、約２㎜の厚さのイチョウ形の鉄板を巻いて造られている。鉄板の合わせ目はほぼ重ならず、下部はやや開きぎみとなる。

装身具（第 45 図、巻頭図版４－４）

Ｓ２～Ｓ 15 は水晶製の切子玉である。最大長は 32.1 ～ 12.4㎜とばらつきがあるが、全て片面穿孔である。Ｓ 16 は水晶製の丸玉で、切子玉と同様片面穿孔である。

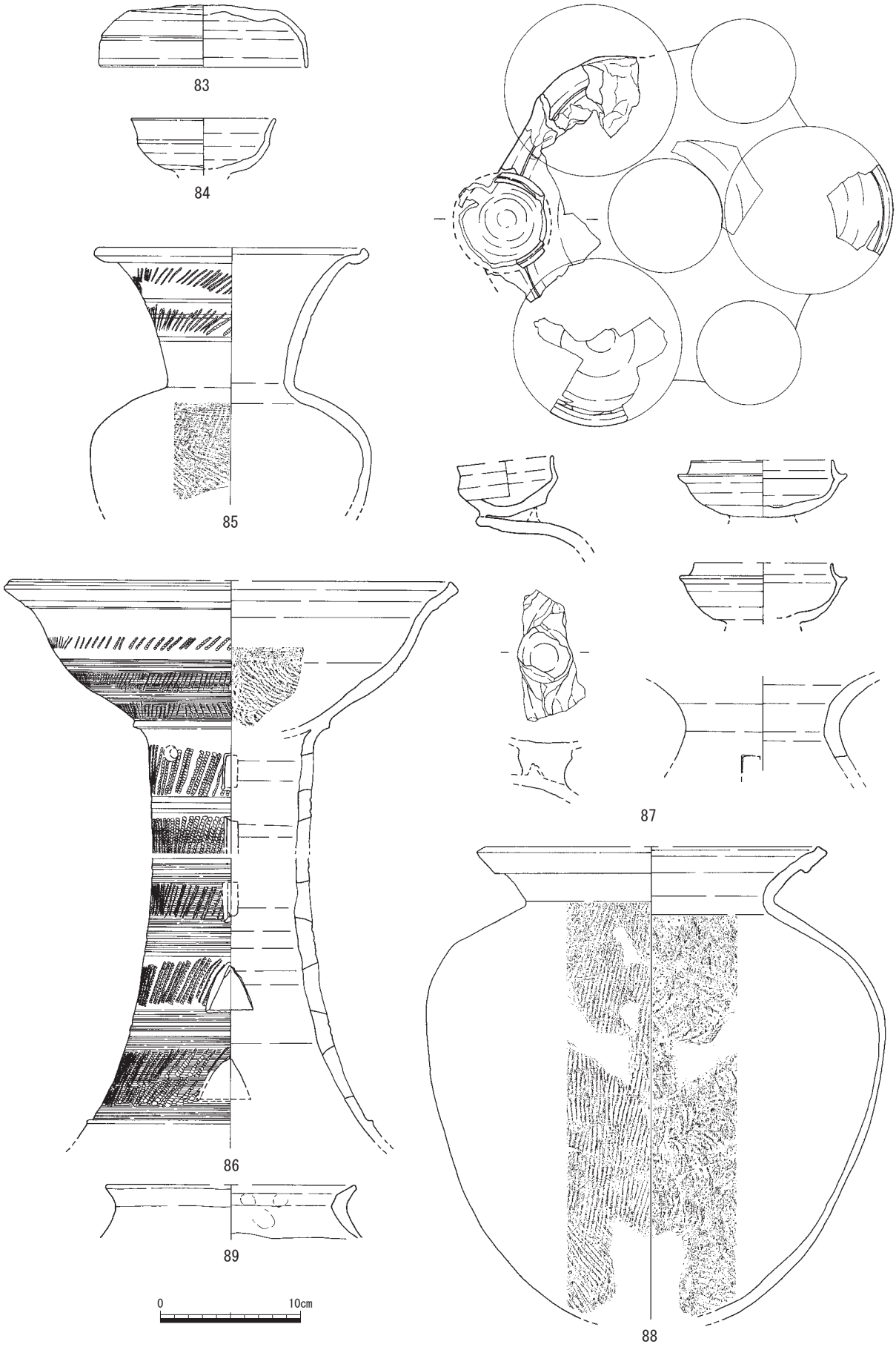


第 45 図　桑山南２号墳石室内出土遺物②（1/3・1/2）

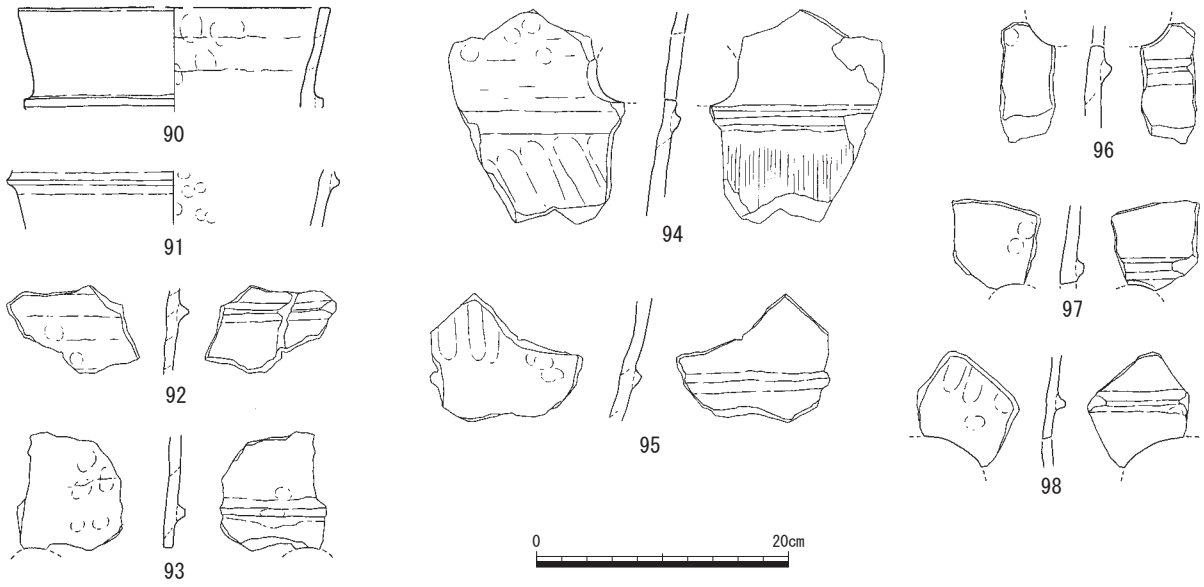
5　その他の遺物

土器（第 46 図、図版 50）

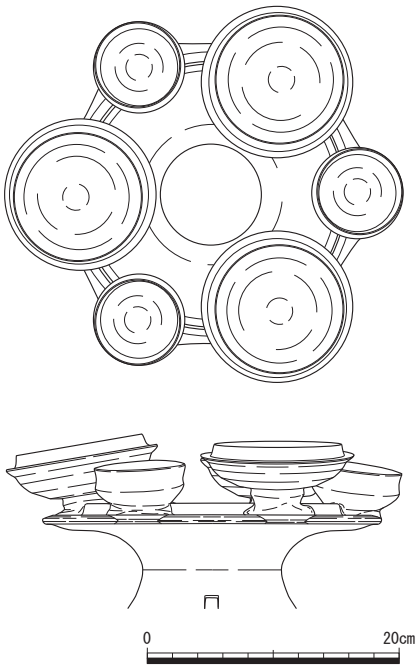
83 ～ **88** は須恵器である。**83** は杯蓋で、石室の流入土や掘り方の埋土からバラバラの状態で出土した。口径は 14.6cm を測る。**84** は高杯の杯部で、**83** と同様石室の流入土や、一部は１号墳の西側流土中から出土した。口径は 10.2cm を測る。**85** は壺で、表土や石室の流入土中から破片が出土した。口縁部には櫛状工具による刺突文が巡り、胴部には平行タタキの上にカキメが観察される。口径は 18.8cm。**86** は器台で、１号墳の周辺や２号墳の南側墳裾付近からバラバラの状態で出土した。出土状況から２号墳から南側の斜面下方に向かって破片が流れたと考えられる。復元口径は 31.3cm、残存高は 40.2cm を測る。脚部は６段と推定され、上３段は長方形、その下２段は三角形の透かし孔が向きをそろえて各段４か所ずつ穿たれており、最上段には円形の孔が位置をずらした場所に穿たれている。



第 46 図　桑山南２号墳周辺出土遺物①（1/4）



第 47 図　桑山南２号墳周辺出土遺物②（1/6）



第 48 図　子持器台想定復元図（1/6）

外面には受け部下半から脚部にかけてカキメが巡り、凹線で各段の区画をした後、櫛状工具による刺突文を巡らせている。受け部下半の内面には同心円状の当て具痕跡が残り、外面にはわずかだが平行のタタキ目が確認できる。**87** は子持器台である。石室の流入土中や南側墳裾周辺から破片が出土した。部分的にしか復元できなかったが、六角形の口縁部の各角に杯と小壺を３つずつ交互に配していたと想定される（第 48 図）。脚部には長方形の透かし孔が穿たれるほか、口縁部やや内側には高さ約 1.5cm の立ち上がりが貼り付けられている。器台の成形後、立ち上がり→小器の順に装飾を貼り付け、最後に口縁部をヘラ状の工具で六角形にカットすることで仕上げられている。**88** は甕である。石室内で破片が枕として使用されていたほか、墓坑埋土中や周溝などからも出土しており、遺体埋葬の直前に破砕された可能性がある。復元口径 23.6cm、残存高 33.7cm を測り、体部外面は平行タタキの上にカキメ、内面には同心円状の当て具痕が残る。**89** は土師器の甕である。復元口径 17.7cm を測り、調整は風化により不明瞭である。

埴輪（第 47 図、図版 50）

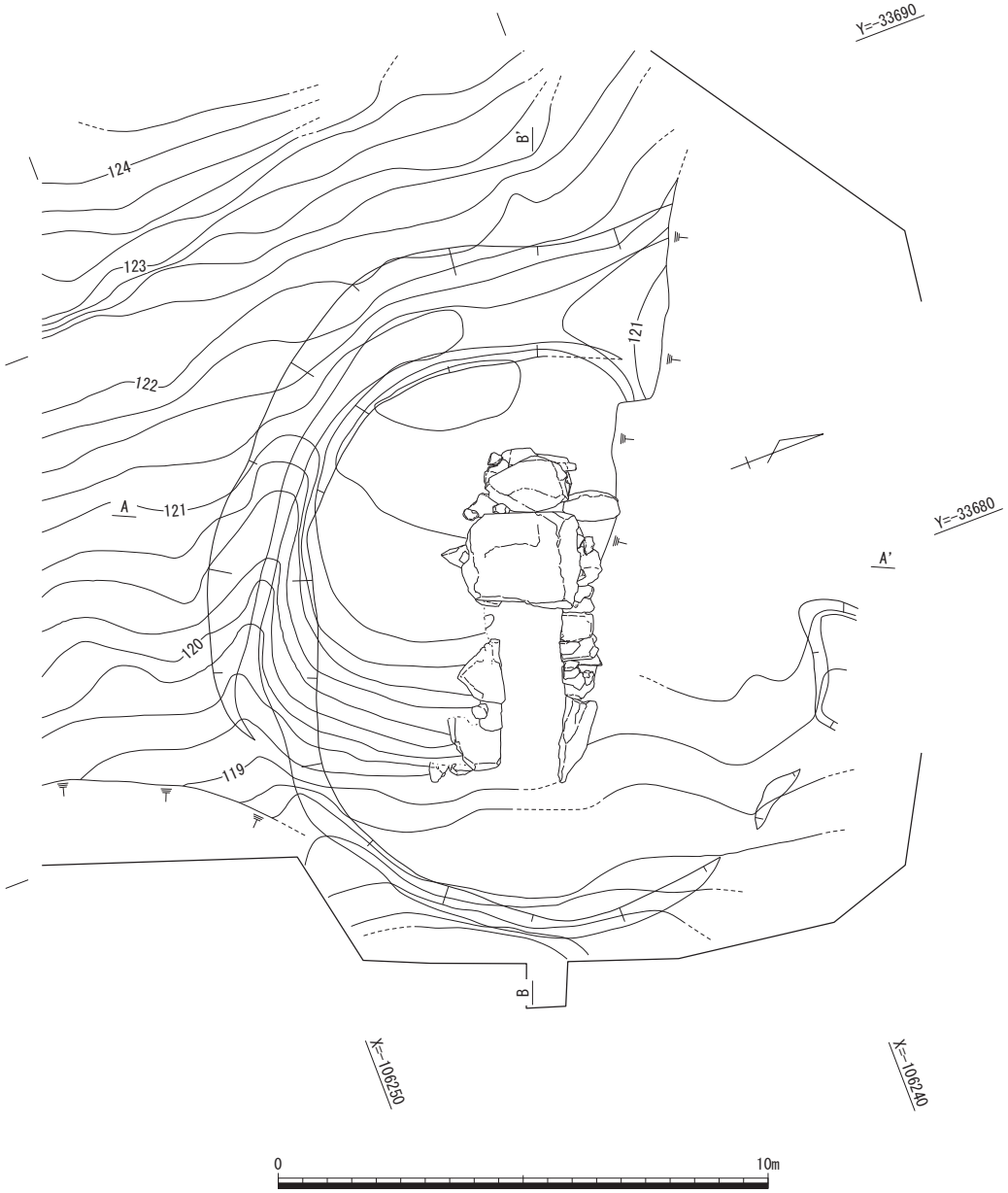
90 ～ **98** は埴輪である。２号墳の周溝や墳裾付近の流土中から出土した。いずれも円筒埴輪と考えられる破片で、円形の透かし孔が穿たれている。突帯は低くつぶれているものが多く、断面形が三角形に近いものもある。風化が激しく調整が不明瞭であるが、一部の破片には外面にタテハケ、内面にユビオサエの跡が残っている。（藤井翔）

第４節　桑山南３号墳

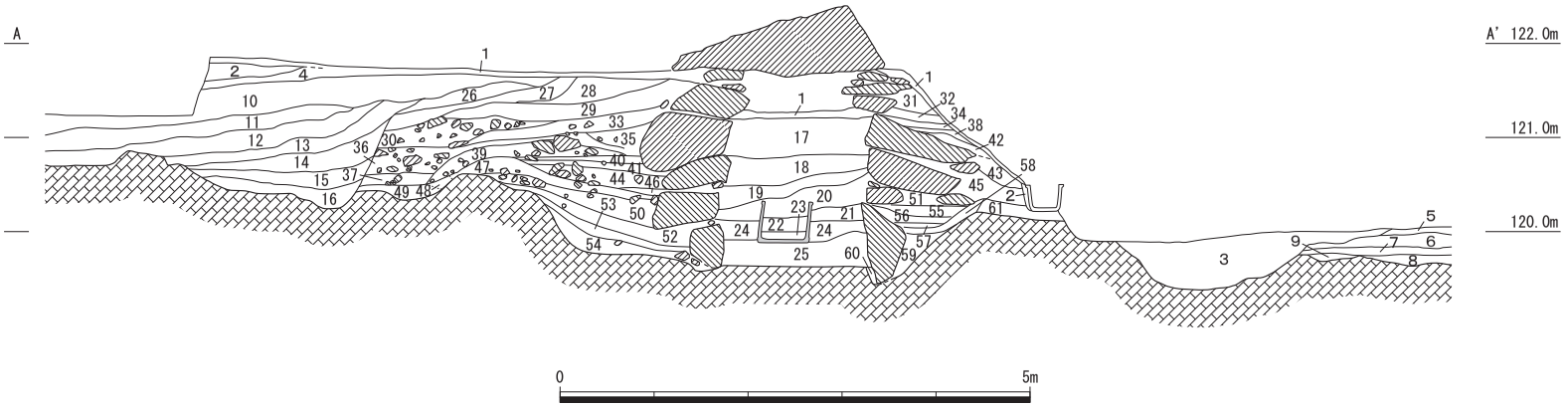
１　墳丘と周溝

３号墳は、古墳群のうち最も北に位置し、東向きの比較的急な斜面部に築かれている。

北に隣接してグラウンドゴルフ場が造成されていたため、墳丘の北半が大きく破壊されていたが、この削平はそれ以前の農地造成に遡るようで、削平面付近に旧水田層を検出している（第 50 図第６・７層）。また、墳丘頂部も平坦に削平されており、横穴式石室の天井石２石が地表に露出し、ゴルフの打ち放し台がつくられていた（第 51 図第３・４層）。さらに墳丘の東面、石室開口部付近も削られ、

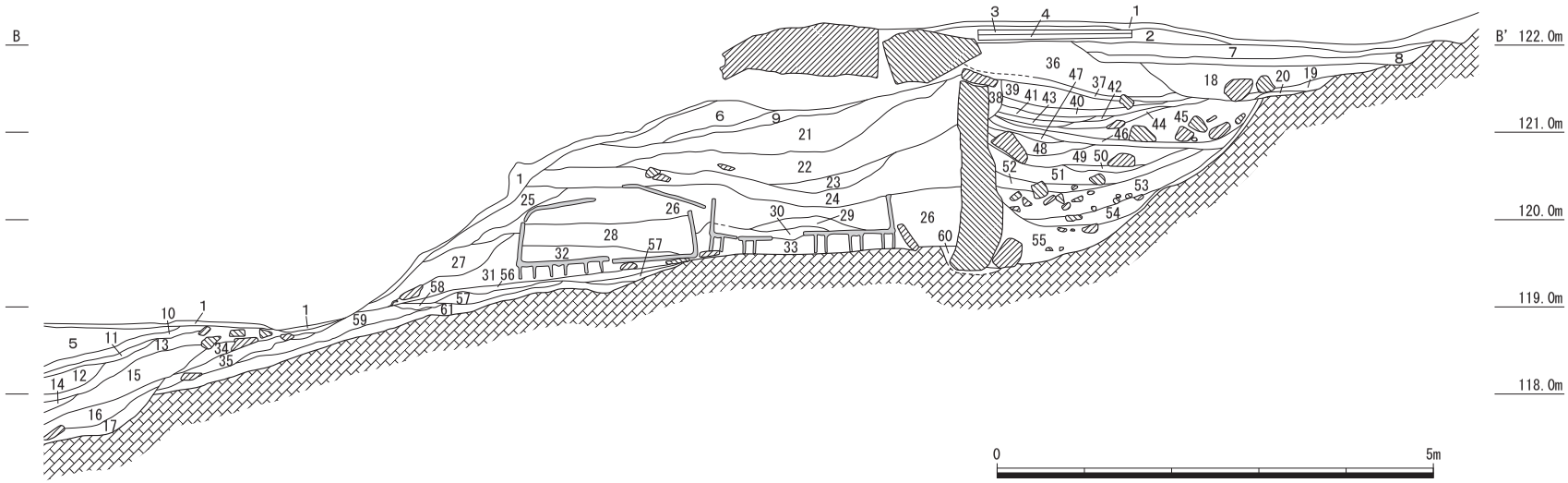


第 49 図　桑山南３号墳墳丘（1/150）



1　表土
2　造成土
3　現代水路堆積土
4　暗褐色（10YR3/3）砂質土
5　褐色（10YR4/6）砂質土
6　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土＜近代～現代の水田層及び床土＞
7　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜近代～現代の水田層及び床土＞
8　褐色（10YR4/4）粘質土＜水田以前の堆積層＞
9　灰褐色（10YR4/1）粘質土＜水田以前の堆積層＞
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜流土＞
11　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜流土＞
12　褐色（10YR4/4）砂質土＜流土＞
13　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜流土＞
14　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
15　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜周溝埋土＞
16　黒褐色（10YR2/3）砂質土（褐色（10YR4/6）砂質土が混じる）＜周溝埋土＞
17　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
18　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
19　褐色（10YR4/4）砂質土
20　暗褐色（10YR3/4）砂質土
21　褐色（10YR4/6）砂質土
22　褐色（10YR4/6）砂質土
23　褐色（10YR4/6）砂質土
24　黒褐色（10YR2/3）粘質土
25　褐色（10YR4/4）砂質土
26　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜以下盛土＞
27　黒褐色（10YR2/3）砂質土
28　黒褐色（10YR4/4）砂質土
29　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
30　褐色（10YR4/4）砂質土（10cm以下の礫を多く含む）
31　褐色（10YR4/4）砂質土
32　暗褐色（10YR3/4）砂質土
33　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
34　黄褐色（10YR5/6）砂質土
35　黄褐色（10YR5/8）砂質土
36　暗褐色（10YR3/4）砂質土
37　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
38　暗褐色（10YR3/4）砂質土
39　黄褐色（10YR5/6）砂質土（20cm以下の礫を含む）
40　暗褐色（10YR3/3）砂質土
41　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
42　褐色（10YR4/6）砂質土
43　褐色（10YR4/4）砂質土（地山礫を含む）
44　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（10cm以上の礫を多く含む）
45　褐色（10YR4/6）砂質土
46　褐色（10YR4/4）砂質土
47　黒褐色（10YR2/2）砂質土
48　黄褐色（10YR5/6）砂質土
49　暗褐色（10YR3/3）砂質土
50　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（８cm以下の礫を多く含む）
51　褐色（10YR4/4）砂質土（５cm程度の地山礫を少し含む）
52　黒褐色（10YR3/1）砂質土
53　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（２cm程の礫を少し含む）
54　暗褐色（10YR3/3）砂質土（２～３cm程の礫を少し含む）
55　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
56　黒褐色（10YR3/1）砂質土
57　褐色（10YR4/6）砂質土
58　黒褐色（10YR2/2）砂質土
59　褐色（10YR4/6）砂質土
60　褐色（10YR4/4）砂質土＜石室側壁掘り方内埋土＞
61　黒褐色（10YR2/2）砂質土＜旧表土＞

第 50 図　桑山南３号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）

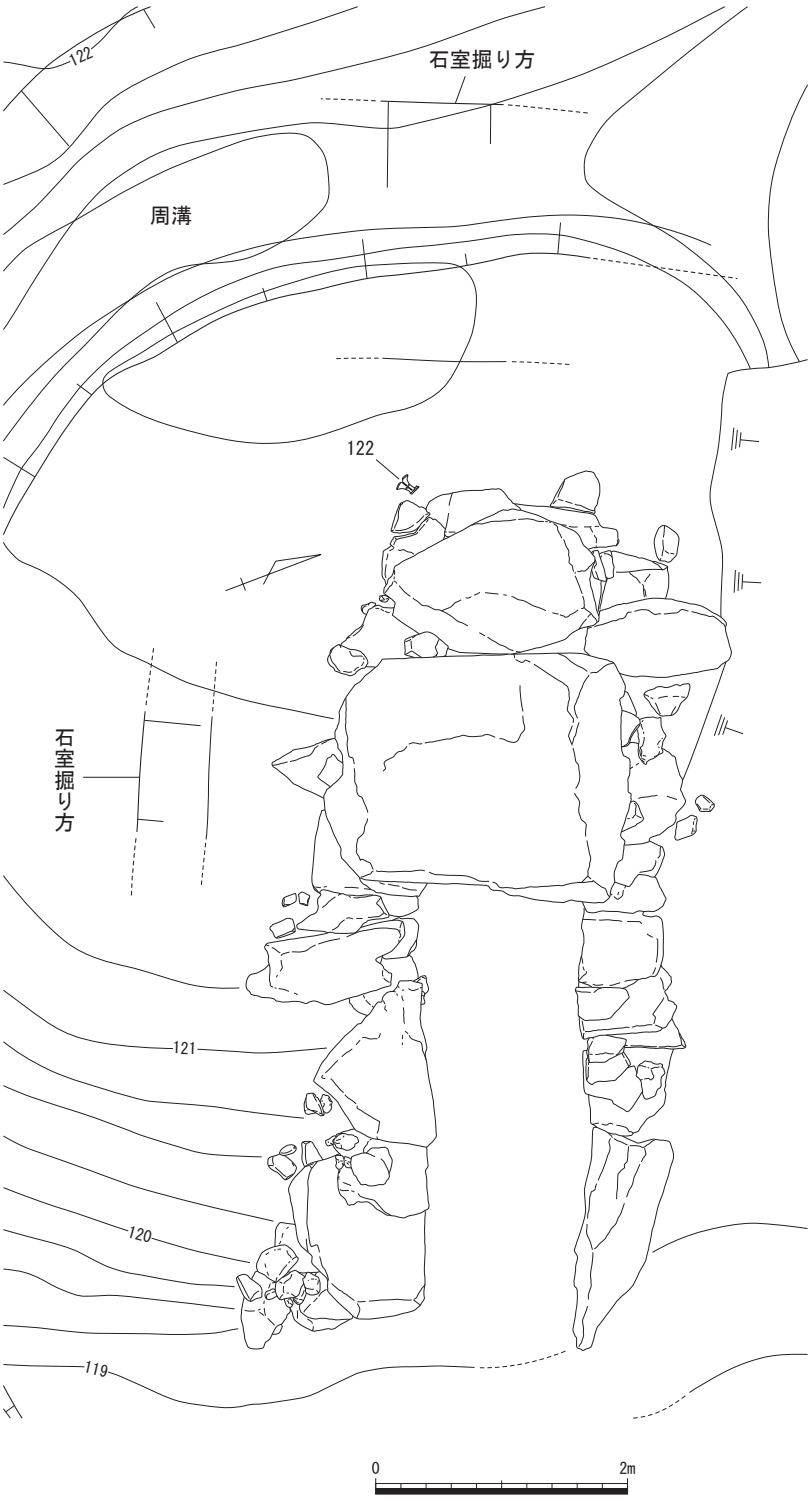


1　表土
2　細砂層
3　コンクリート
4　砕石
5　造成土
6　真砂土
7　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土＜水田層＞
8　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜水田床土＞
9　暗褐色（10YR3/3）砂質土
10　褐色（10YR4/4）砂質土＜流土＞
11　オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質土＜流土＞
12　褐色（10YR4/4）砂質土＜流土＞
13　褐色（10YR4/4）砂質土（50cm大以下の礫を多く含む）＜流土＞
14　褐色（10YR4/6）細砂＜流土＞
15　褐色（10YR4/4）砂質土＜流土＞
16　褐色砂（10YR4/4）質土（15層よりやや暗い）＜流土＞
17　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜流土＞
18　黄褐色（10YR5/6）砂質土（人頭大以下の礫を多く含む）＜周溝埋土＞
19　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
20　黒褐色（10YR2/3）砂質土＜周溝埋土＞
21　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
22　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
23　褐色砂（10YR4/4）質土
24　暗褐色（10YR3/4）砂質土
25　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（地山礫を多く含む）
26　褐色（10YR4/6）砂質土
27　褐色（10YR4/4）砂質土（地山礫を多く含む）
28　暗褐色（10YR3/4）砂質土
29　褐色（10YR4/6）粘質土
30　褐色（10YR4/4）粘質土
31　褐色（10YR4/4）粘質土
32　褐色（10YR4/4）粘質土
33　暗褐色（10YR3/4）砂質土
34　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土＜以下盛土＞
35　暗褐色（10YR3/3）砂質土
36　黄褐色（10YR5/6）砂質土（5cm程度の礫を含む）
37　黒褐色（10YR3/1）砂質土
38　褐色（10YR4/4）砂質土
39　にぶい黄褐色（10YR5/2）砂質土
40　黒褐色（10YR3/2）砂質土
41　褐色（10YR4/6）砂質土
42　黒褐色（10YR3/2）砂質土
43　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（3cm程度の礫を多く含む）
44　黒褐色（10YR3/1）砂質土（2cm程度の礫を多く含む）
45　褐色（10YR4/4）砂質土（20cm以上の礫を多く含む）
46　黒褐色（10YR2/2）砂質土
47　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（2cm程度の礫を含む）
48　黒褐色（10YR3/2）砂質土（2cm程度の礫を含む）
49　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（2cm程度の礫を僅かに含む）
50　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
51　黒褐色（10YR3/1）砂質土（2cm程度の礫を僅かに含む）
52　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
53　褐色（10YR4/4）砂質土（奥壁付近で10cm以上の礫を多く含む）
54　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
55　黒褐色（10YR2/2）砂質土
56　褐色（10YR4/4）砂質土
57　褐色（10YR4/6）粘質土
58　黒褐色（10YR2/3）砂質土
59　褐色（10YR4/4）砂質土（地山及び旧表土層のブロックを含む）
60　褐色（10YR4/4）砂質土＜石室奥壁掘り方内埋土＞
61　黒色（10YR2/1）砂質土＜旧表土＞

第51図　桑山南3号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）

石室の側壁と、陶棺（２号陶棺）の一部が露出していた。

調査の結果、墳丘の南西側およそ 1/3 には周溝が残存しており、東側（石室前面）でも墳端となる段を確認したが、そこから東へ向かって地形が下がっていくため、溝状にはならないものと推定される（第 51 図）。また、削平を受けた北東側でも、周溝の痕跡と思われる浅い窪みが断続的に、弧を描くように認められた。周溝の断面形は、残りのよい部分でおおむね逆台形を呈し、西側で幅約 2.8 m、深さ約 0.4 m を測り（第 51 図第 18 ～ 20 層）、南側では幅約 2.4 m、深さ約 0.6 m で墳丘側が急角度で立ち上がる（第 50 図第 14 ～ 16 層）。また、古墳が急斜面に立地しており、特に西側では地山が東に向かって大きく下降していくため、周溝の墳丘側約半分は盛土によって築成されている状況が確認された（第 51 図）。以上の周溝検出状況などを手がかりに墳丘を復元すれば、東西約 12 m、南北約 11 m の円墳になり、残存する墳丘の高さは約 4.5 m である。



第 52 図　桑山南３号墳石室掘り方・盛土内遺物出土状況（1/60）

墳丘の盛土には礫を多く含んでいたため土層観察が困難であったが、１号墳と同様に、まず横穴式石室の構築と併行してやや小規模な墳丘を築き、その後全体に盛土を行って最終的な墳丘を完成させている状況が窺えた（第 50 図）。

２　横穴式石室

３号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である。調査前、石室内はほぼ埋没し、ごくわ

ずかな空間が東向きに開口していた。

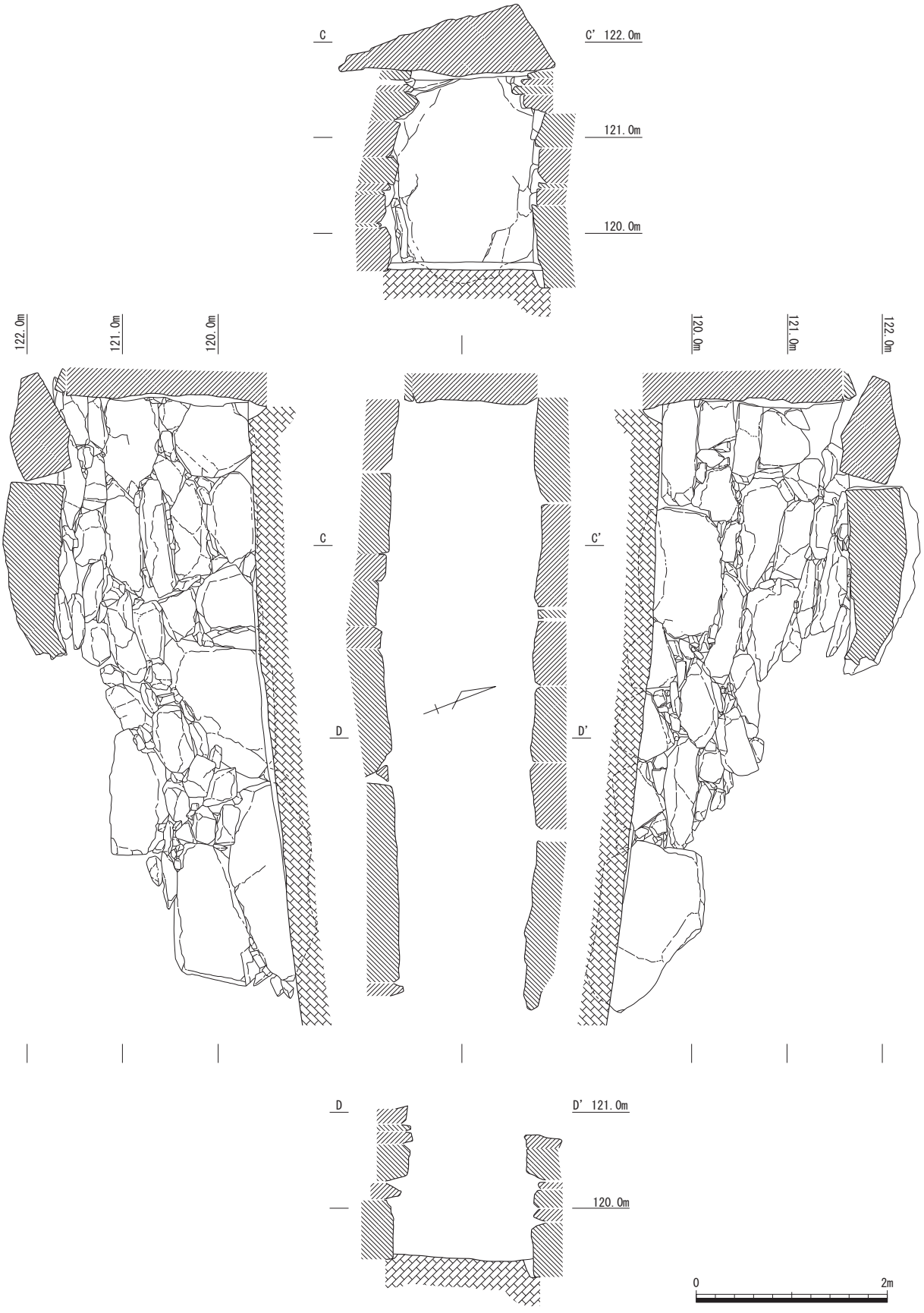
墳丘盛土に先行して、石室構築のための掘り方を穿っている（第 52 図）。調査工程や周辺環境の都合により全面的にこの掘り方を検出するには至っていないが、奥壁部では約３ｍ後方の周溝底部付近から大規模な掘り込みを行っており、その深さは約２ｍに達する。急傾斜地に立地するためであろう。また、石室横断方向（南北）の断面をみると（第 50 図）、左側壁側は裏側に大きく余裕をもって掘り方を穿っているのに対し、右側壁側は狭く、掘り方に沿わせるように側壁を築いているように見える。掘り方内で側壁の位置を決め、基底部を構築するにあたって、右側壁が先行したことを示しているかもしれない。

石室掘り方内の最上層、奥壁上端の裏側部分の盛土内から、須恵器の有蓋高杯（122）１点が出土した。３号墳築造時に意図的に埋納されたものか、それとも偶発的に混入したものか、出土状況からは明確にできなかったが、石室内出土の土器に比べて年代が古いように見受けられ、後者の可能性が高いと思われる。

石室は、無袖式の横穴式石室である（第 53 図）。規模は全長 6.3 ｍ、奥壁幅 1.45 ｍ、最大幅 1.6 ｍ、最大高 2.0 ｍで、おおむね東方向（Ｎ 111° Ｅ）に開口する。天井石は２石が残存しているが、本来はさらに１～２石が架けられていたと考えられる。最も奥の天井石は、周辺の削平によって若干動いており、隣の天井石にもたれかかる状態であったため、調査の初期段階で撤去した。奥壁は垂直に立ちほぼ１石で構成されるが、向かって左下の隙間には板状の石材を詰めている。側壁はやや内傾するものの、持ち送りはあまり顕著でない。左側壁は、奥壁から約 2.5 ｍの場所を境に、奥側と外側でやや石積みの様相が変化する。奥側はおおむね５～６段に石を積み、基底部にやや高さのある石材を用いる。縦目地が通るのが特徴で、３列ほどの単位が認められる。ただし、上端２段分では薄い横長の石材を多用し、かえって横目地の方が目立つ。一方、外側は奥側よりも大型の石材を用いており、不規則でやや乱雑に積み上げられた印象を受ける。この石積みの変化する位置は、１号墳の左側壁において袖石を立て玄門になる位置とほぼ一致する。また、３号墳は無袖化しているが平面形をみるとこの部分が外側に少し張り出しているのが分かる。すなわち、左側壁における石積みの変化と平面形における張り出しは、袖の名残を示しているものと考えられる。右側壁は、前端にひときわ大きな石材を置くほかは石積みに変化がなく一連の石積みとしている。基底部にやや大きな石を並べ、さらに横長の石材を積み上げて、おおむね５～６段積みとしている。

３号墳の石室及び墳丘は、東面（前面）を後世に削平されており、石室が現存部分よりさらに前方に延びていたのかどうか、不明といわざるを得ない。しかしながら、現存する側壁の前端には他と比べてかなり大きな石材を据えており、これが本来の石室前端であった可能性も高い。３号墳の石室は、１号墳の石室との共通点が多く、上述の左側壁の状況に加えて天井高もほぼ一致し、さらに３号墳石室の現存長は、１号墳石室の全長とほぼ一致する。これらのことから、３号墳の石室基底石は前端まで完存していると推定できる。そうすると、石室の前端は、検出された墳端から約３ｍ内側に位置することになる。石室前端と墳端との間（この距離も１号墳と共通）がどのように接続するのか、削平により不明ではあるが、１号墳で認められたような墓道や、より幅の広い前庭部などの施設が想定できよう。

石室開口部付近は削平を受け、閉塞施設は残存していなかったが、周辺の床面上に人頭大程度の礫が散乱しており（図版 25 － 2）、塊石積みの閉塞施設の痕跡であることも想定された。



第 53 図　桑山南３号墳石室（1/60）

３　棺

仕切石（第 54・56 図、図版 21 －５）

石室内の最奥部に、奥壁に平行して板石を立て並べた仕切石が検出された。奥壁から 35 ～ 45cm の位置に板石３枚が立っており、最も南の板石はやや外側に倒れかかった状態で出土した。これ以外に、原位置を保っていないが同様の石材が付近から１点出土しており、本来この仕切石は両側壁に達していて、長さ約 145cm（＝奥壁幅）、幅約 40cm の空間をつくっていたと考えられる。仕切石の高さは約 30cm でほぼそろっている。

この施設の機能としては、副葬品埋納施設、遺体をおさめる埋葬施設などが考えられるが、副葬品は中から鉄鏃数点が出土したに過ぎない。簡易な箱式石棺とも考えられるが、内法長約 145cm とやや小さめで、また南北及び西側壁は石室壁面をそのまま利用しているため、蓋を架けることが難しい。横穴式石室内に箱式石棺を設ける例はしばしば見受けられ、津山市内でも細畝１号墳（本書第４章第２節）、万燈山古墳 (1)、カキ谷Ｂ古墳群１号墳 (2) などがあるが、いずれも石室の壁に接する部分でも石棺の側板を別に設けている。石室壁面をそのまま利用する例としては、倉敷市箭田大塚古墳石室内の３基があり、「組合せ式石棺」とされている (3)。そのうち奥壁部に設けられた１基は、規模は違うが桑山南３号墳と同様の構造である。「棺」と呼び得るものかどうか不明だが、埋葬施設のひとつと捉えておきたい。

陶棺（第 54・55 図、図版 22 ～ 24）

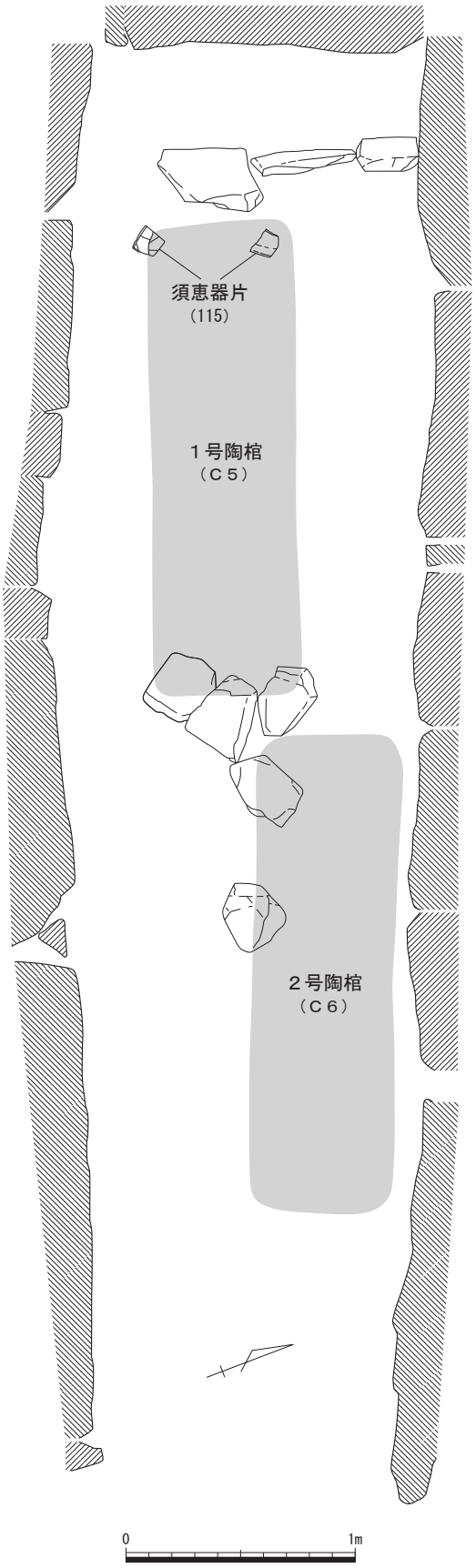
石室内から２基の陶棺が出土しており、いずれも身は原位置を保っていると考えられる。石室奥側におさめられた１号陶棺（**Ｃ５**）は、仕切石から約 20cm 離して石室主軸に平行し、主軸よりわずかに南に寄せて置かれている。蓋は大破して周辺に散乱しており、身も石室外側の半分は崩壊が進んでいた。陶棺両端部の脚下には棺台が配置されており、石室奥側では両隅の脚下に須恵器甕の口縁部破片（**115**）が敷かれ、外側では棺台石３点が脚３本の下に置かれていた。棺を安定させ、また陶棺中央の分割部分がうまく接合するように調整を行ったものとみられる。

１号陶棺の外側には２号陶棺（**Ｃ６**）がおさめられている。１号陶棺との間は約 15cm 空いており、石室主軸に平行し右側壁に寄せて置かれている。右側壁との間は、狭い箇所では５cm ほどしかない。２号陶棺の蓋は、身の上にのった状態で出土しており、特に石室外側の蓋は原位置に近い。身とは若干のずれがあるが、この蓋の小口面（東面）には重機の爪痕のような傷が付いており、周辺の造成、削平の際に当たって動いた可能性がある。奥側の蓋は、身の上から斜めに落ちかかるように出土しており、意図的に蓋が開けられたようであった。２号陶棺の身のうち石室奥側の半分は、底部ないし脚部が焼成不良で柔らかく、取り上げが困難な状態であった。特に南辺の脚は埋葬時から壊れていたようで、棺台石２個を置き身の底部を直接支えていた（図版 24 －２）。

木棺（第 57・64 図）

２号陶棺が右側壁に寄せて置かれているため、２号陶棺の南側には空間が残されている。この部分から石室開口部にかけて鉄釘多数が出土しており（第 57・64 図）、木棺による埋葬が想定される。鉄釘は石室内から計約 30 点出土しているが、この部分に最も集中する。木棺痕跡は検出されなかったが、鉄釘の分布から判断すると、２号陶棺の真横ではなく開口部側にややずれた位置に木棺が安置されたと考えられる。

第 54 図　桑山南３号墳石室内
棺配置状況（1/30）

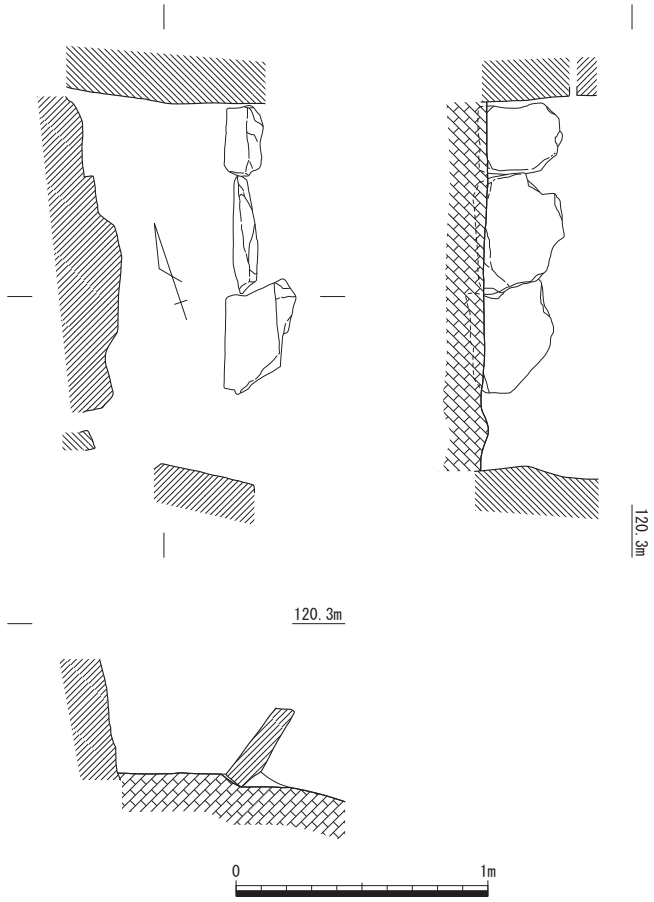


第 55 図　桑山南３号墳石室内棺台
配置状況（1/30）

石室内で棺や埋葬施設の可能性が考えられるものは以上であり、仕切石も含めて計４基となる。したがって、計４人以上が石室内に埋葬されたと推定される。

４　石室内遺物出土状況

棺内の副葬品として、２号陶棺内底面から出土した大刀（M 79）・刀子（M 97）がある（第 57 図）。棺内上層は攪乱を受けていたものの、底部付近には攪乱を受けていない流入土層があり、この２点についてはほぼ原位置を保つものと考えられる。遺体を棺内中央に置き石室奥側に頭を向けていたと仮定すれば、大刀（M 79）は遺体の右脇に置かれ、切先を足元に向け、刃を遺体側、棟を外側にして置かれていたことになり、１号墳２号陶棺内の象嵌装大刀出土状況と共通点が多い。刀子（M 97）も遺体の右側で、足下に近い位置になる。また、このほかにも２号陶棺内から刀子の断片が出土しており（M 99 ～M 101・M 103）、棺内副葬品の可能性がある。一方、１号陶棺内は攪乱が著しく、明確な棺内副葬品は遺存していなかった。



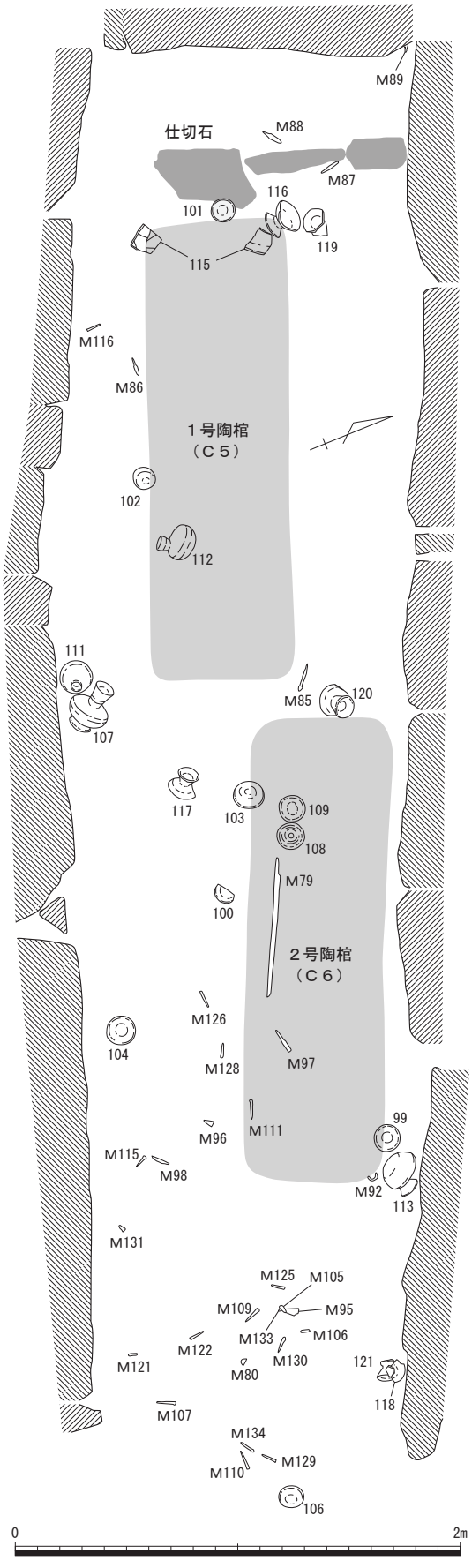
第 56 図　桑山南３号墳石室内仕切石（1/30）

棺外の遺物は、石室床面を中心に土器約 20 個体、鉄鏃７～８点、馬具１点、鉄鐸２点などが出土した（第 57 図）。土器はそれほど集中する箇所はなく石室内に散在しており、陶棺下の脚間からも出土した（108・109・112）。２号陶棺下から出土した須恵器子持器台（108・109）は、器台から剥離した杯部及びその蓋のセットであるが、いずれも口縁を下に向け伏せた状態で並べ置かれていた。鉄鏃は平根鏃４点（M 86 ～M 89）が石室奥の仕切石周辺で出土しており、細根鏃１点（M 85）が２基の陶棺の間で出土している。馬具は鐙１点のみであるが（M 92 ～M 94）、２号陶棺北東隅の脚周辺で出土し、M 92 は脚に踏まれた状態であったことから、２号陶棺埋葬以前の副葬品と考えられる。鉄鐸２点（M 95・M 96）は上述の鉄釘集中部から出土しており、木棺埋葬に伴う可能性がある。この２点は石室床面において 90cm ほど離れて出土している。２号陶棺内の大刀とは別に、鍔・責金具などの刀装具（M 80 ～M 83）が２号陶棺周辺から出土した。耳環２点（M 136・M 137）及びガラス製丸玉（G１～G４）はいずれも原位置を保っていないが、１号陶棺周辺から出土しているものが多い。（尾上）

５　石室内出土遺物

１号陶棺（第 58 図、写真 10、図版 51）

蓋身一体造りの土師質亀甲型陶棺（C５）である。蓋及び羨道側の身は焼成不良のためか遺存状態



第 57 図　桑山南３号墳石室内遺物出土状況（1/30）

が非常に悪く、実測できたのは蓋の一部と奥壁側の身のみである。出土状況から全長を推定すると約 212cm、幅は 65.0cm となる。平面形は隅丸長方形を呈し、脚は３行６列の計 18 本、色調は黄橙色を呈する。

蓋は部分的にしか復元できなかったが、羨道側の蓋の側面と、奥壁側の合わせ部の一部の状態が把握できた。蓋どうしの合わせ目には突帯が貼られており、奥壁側に受け部、羨道側にかぶせ部が設けられている。突帯の幅は縦突帯が 5.0 ～ 6.5cm、高さ 0.8cm、下端部の横突帯が幅 4.0cm、高さが 1.5cm で、いずれも断面は扁平な台形を呈する。貼り付け順序は、横突帯が先、縦突帯が後である。奥壁側の陶棺の状況を見る限り、蓋と身の縦突帯の貼り付け位置は対応していなかった可能性がある。突起は片側側面に２つ付けられていることが確認でき、本来は片側に４個ずつ、小口側に１個ずつ、合計 10 個の突起が付けられていたと想定される。突起先端の直径は 8.0cm、高さ 8.0cm で、蓋に差し込まれて装着されている。封じ穴は、羨道側の蓋の側面上部に確認することができる。調整は内外面とも全面に丁寧なナデ調整が施されている。

奥壁側の身は長さ 105.0cm、最大幅 65.0cm、高さ 71.2cm で、厚さは側面が 3.0 ～ 4.0cm、底面が 2.5 ～ 3.0cm となる。突帯の幅は棺底部の横突帯と縦突帯が 5.0 ～ 7.3cm、高さ 0.5 ～ 0.8cm で、上端部の横突帯は幅 3.5 ～ 5.5cm、高さ 0.8 ～ 1.3cm となる。棺内底面は長さ約 97cm、幅約 52cm を測り、竹管のような素材による直径 10mm 前後の未貫通の小穴が５か所に確認できる（写真 10 － 2）。調整は内外面とも全面に丁寧なナデ調整が施されている。

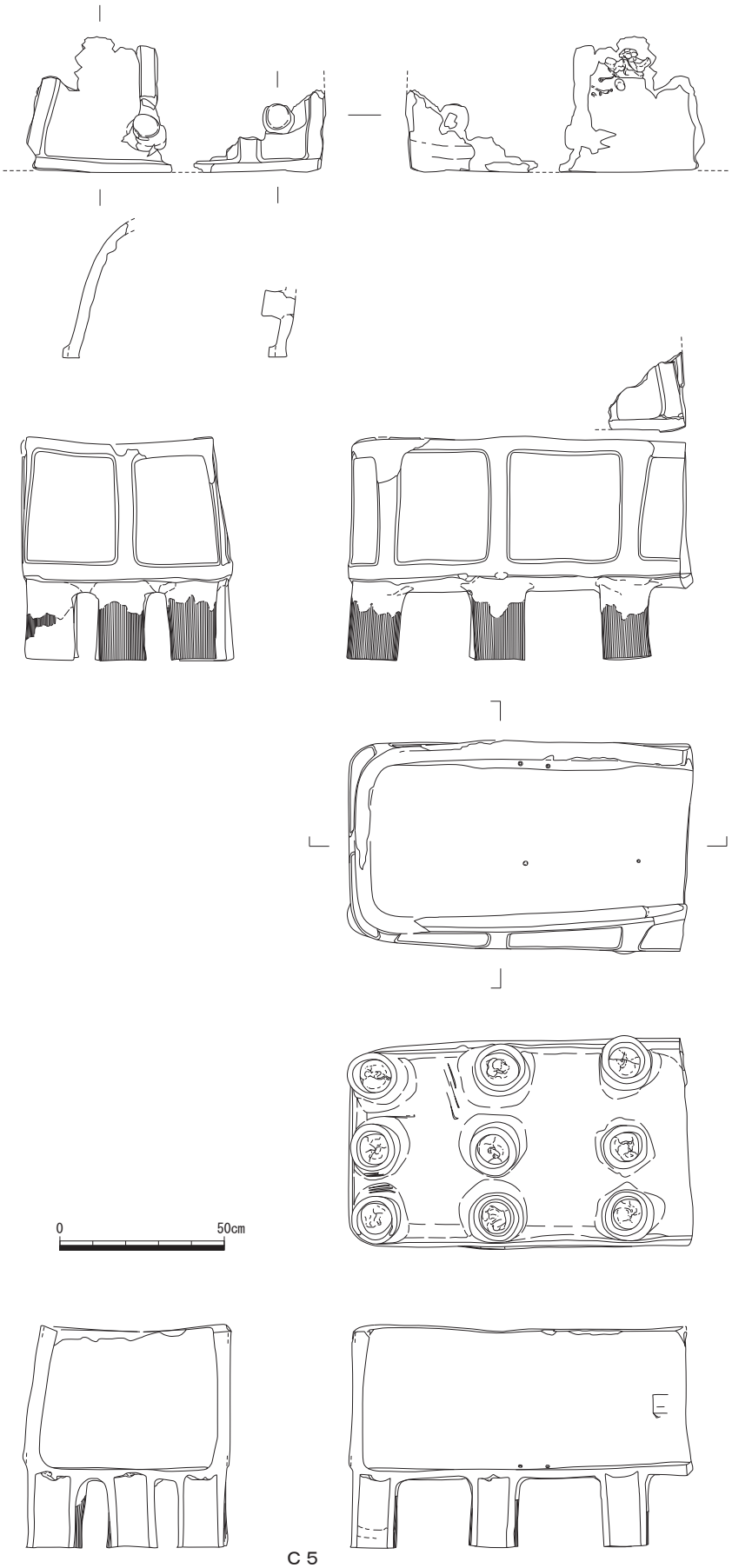
脚は、下端部の直径が 13.8 ～ 15.0cm、高さ 20.5 ～ 22.0cm の円柱形で、直径よりも高さの比率が高く長細い印象を受ける。厚さは 1.8 ～ 2.2cm で、粘土紐を巻き上げることで成形し（写真 10 － 3）、外面はハケ、内面と下端面はナデ調整で仕上げている。底部との接合方法については、裏側から脚の内部を見たとき、柔らかい帯状の粘土を内側に折り込み、

中央にできた空白に粘土塊を充填したような痕跡が観察できた（写真 10 － 4）。脚の内面には底部と接合した後に手を加えたような痕跡は見られず、脚の接合は正立状態で行われた可能性がある。

２号陶棺（第 59・60 図、写真 11、図版 52）

蓋身一体造りの土師質亀甲型陶棺（**Ｃ６**）である。羨道側（図左半）は蓋身とも良好に残っていたが、奥壁側（図右半）の身の底部から脚部にかけては焼成不良のためか遺存状態が非常に悪く、実測することができなかった。全長は約 205cm、幅は 63.2cm、最大高は 102.5cm を測り、平面形は隅丸長方形、脚は２行６列の計 12 本で、色調は黄橙～浅黄橙色を呈する。

蓋の長さは、奥壁側が 99.8cm、羨道側が 103.0cm で、幅は 51.5 ～ 52.5cm、切断部からの高さは 33.4 ～ 34.4cm である。厚さは側面が 3.8cm、天井部は約５cm であるが、９cm 近い厚みになる箇所もある。蓋どうしの合わせ目には、羨道側にかぶせ部、奥壁側に受け部が設けられている。かぶせ部の裏面には葉の葉脈痕が残っており（写真 11 － 1）、想定される葉

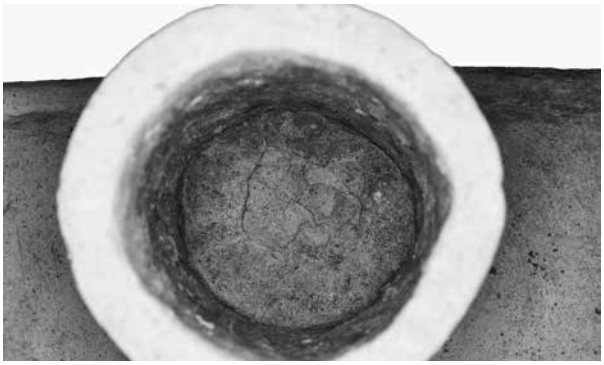


第 58 図　桑山南３号墳１号陶棺（1/20）

１　身上端突帯の貼り付け痕跡

２　身底面の竹管状小穴

３　脚内部粘土紐接合痕



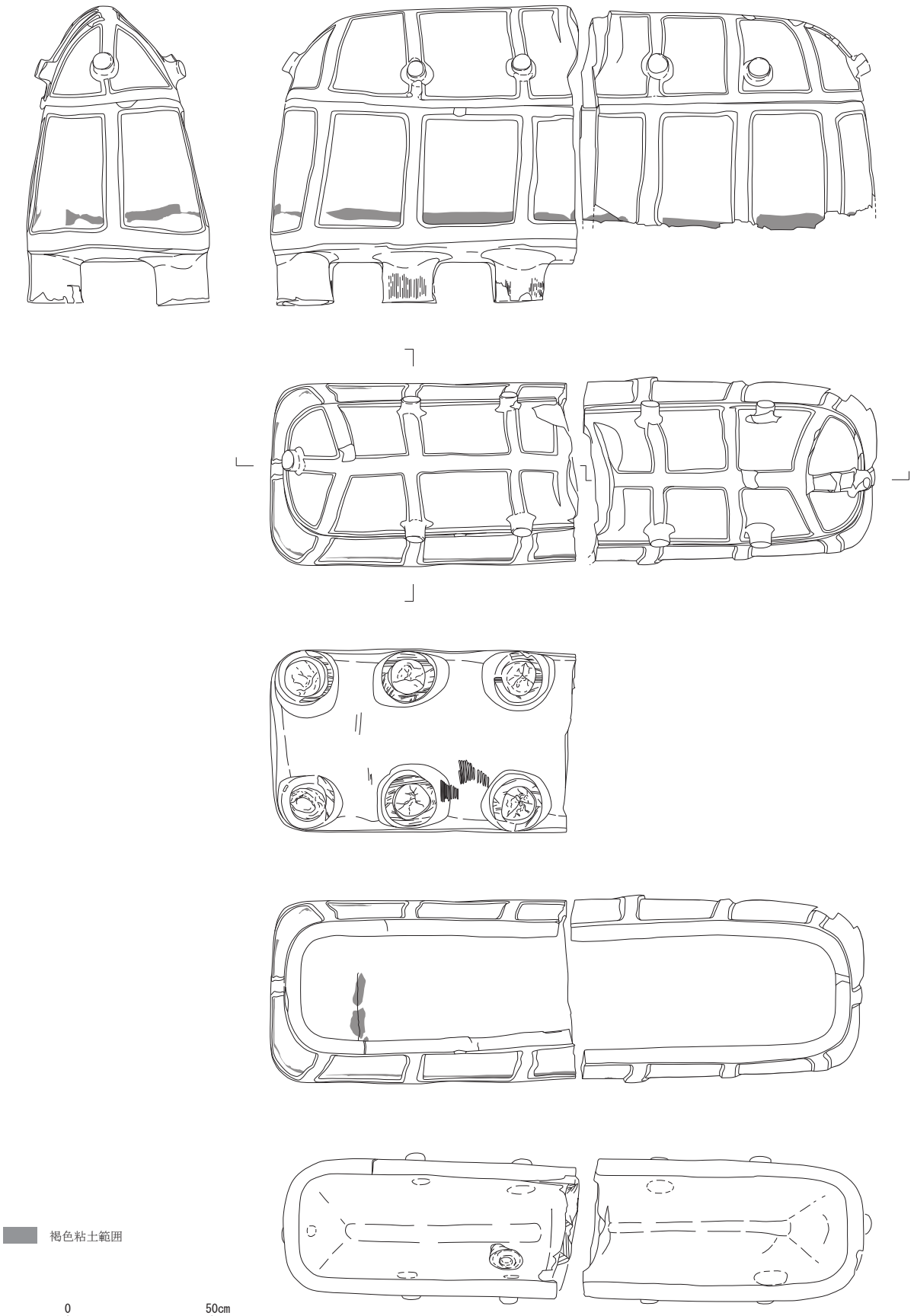
４　脚内部

写真 10　桑山南３号墳１号陶棺細部

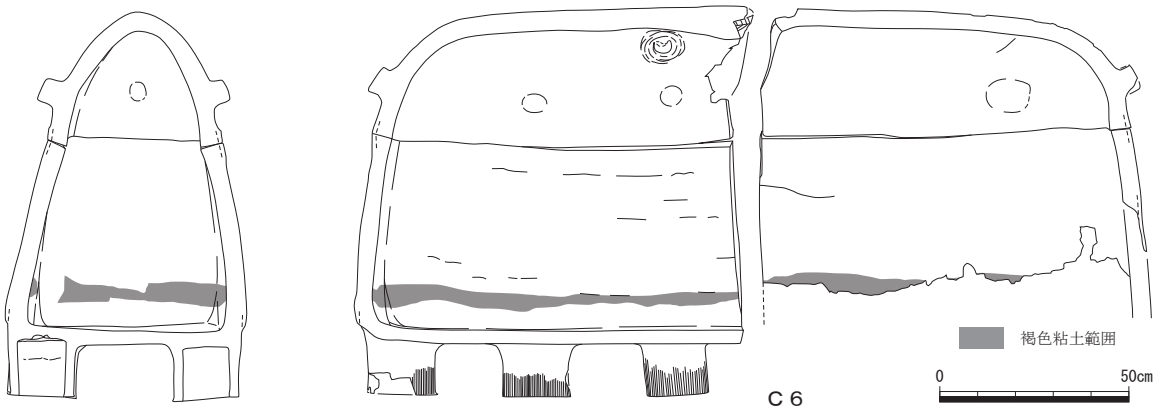
の大きさは、長さ７cm 以上、幅 14cm 以上、葉脈の間隔が 1.5cm ほどであることから、カシワやホオノキのような大型の葉を利用していたことが想定される。突帯の幅は天井部と縦突帯が 5.5 ～ 7.0cm、高さ 0.5 ～ 0.8cm で、下端部の横突帯は幅 3.5 ～ 4.0cm、高さ 1.0 ～ 1.5cm となる。蓋には円柱状の突起が長側辺側に４つずつ、小口側に１つずつ、合計で 10 個付けられている。突起先端部の直径は 6.0 ～ 7.0cm、高さは 6.0 ～ 7.0cm で、蓋に差し込まれて装着されている。封じ穴は、石室外側の蓋の側面に認められる（写真 11 － 2）。調整は内外面とも全面に丁寧なナデ調整が施されている。

身の長さは、奥壁側の残存長が 102.3cm、羨道側が 106.0cm で、幅は 61.5 ～ 63.6cm、切断部までの高さは 68.5cm である。厚さは側面、底面とも 3.3 ～ 4.3cm ある。突帯の幅は棺底部の横突帯と縦突帯が 6.0 ～ 8.5cm、高さ 0.5 ～ 1.0cm で、上端部の横突帯は幅 3.5 ～ 4.0cm、高さ 0.8 ～ 1.0cm となる。奥壁側の棺内底面は長さ 95cm、幅 49cm を測り、１号陶棺に見られたような小穴は見られない。特徴的な点として、身下半の横突帯の直上に、色調の違う箇所が帯状に巡ることが挙げられる（写真 11 － 3）。褐色を呈し、幅６cm 前後で身の下半を全周している。中央の切断部を観察すると、山形に接合されていることがわかり、身側面の成形時、この段だけ他とは異なる種類の粘土を積み上げたため、このような状態になったと考えられる。このほか、石室外側の身の底部には、焼成前の補修痕と考えられる、ヒビに沿って褐色の土を塗ったような痕跡が認められる（写真 11 － 4）。調整は内外面とも丁寧なナデ調整であるが、裏面には部分的に板状工具で押さえたような痕が認められる。

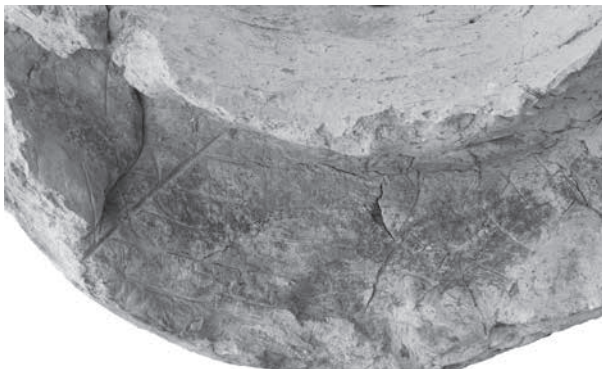
脚は、下端部の直径が 17.4 ～ 18.2cm、高さ 13.2 ～ 15.0cm の円柱形で、高さよりも直径が大きい。厚さは 2.0 ～ 2.5cm で、粘土の巻き上げもしくは輪積みによって成形し、外面はハケ、内面と下端面はナデ調整で仕上げている。下端面にはワラの踏み痕のような幅 0.3 ～ 1.0cm ほどの直線的な凹みが



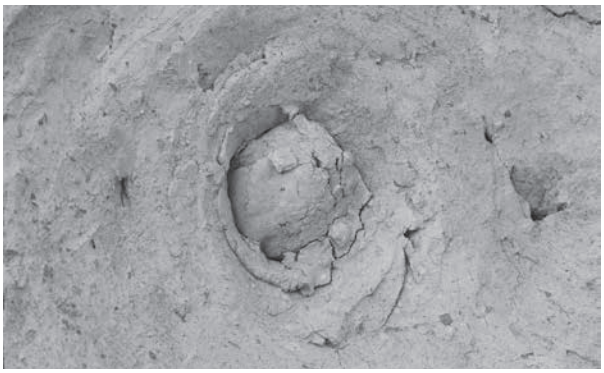
第 59 図　桑山南３号墳２号陶棺①（1/20）



第 60 図　桑山南３号墳２号陶棺②（1/20）

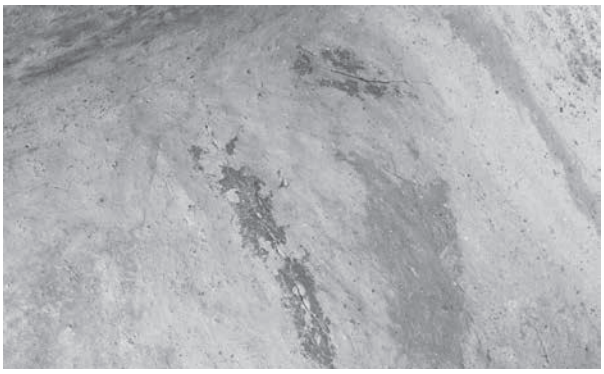


１　蓋かぶせ部裏の葉脈痕



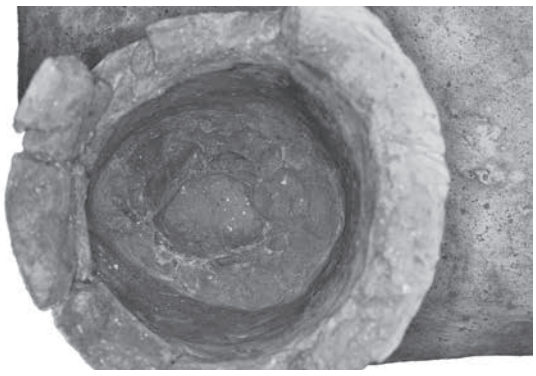
２　封じ穴（蓋内面）

３　色調の異なる粘土帯（身側面）



４　身底部の補修痕

５　脚下端接地面の圧痕



６　脚内部

写真 11　桑山南３号墳２号陶棺細部

線状に多数認められる（写真 11 －５）。底部との接合方法については、裏側から脚の内部を見たとき、柔らかい帯状の粘土を内側に折り込み、中央にできた空白に粘土塊を充填したような痕跡が観察できた（写真 11 －６）。脚の内面には底部と接合した後に手を加えたような痕跡は見られず、脚の接合は正立状態で行われた可能性がある。（藤井翔）

土器（第 61 図、図版 53・54 －１）

石室内から出土した土器には、図示し得たもので須恵器 17 個体、土師器６個体がある。

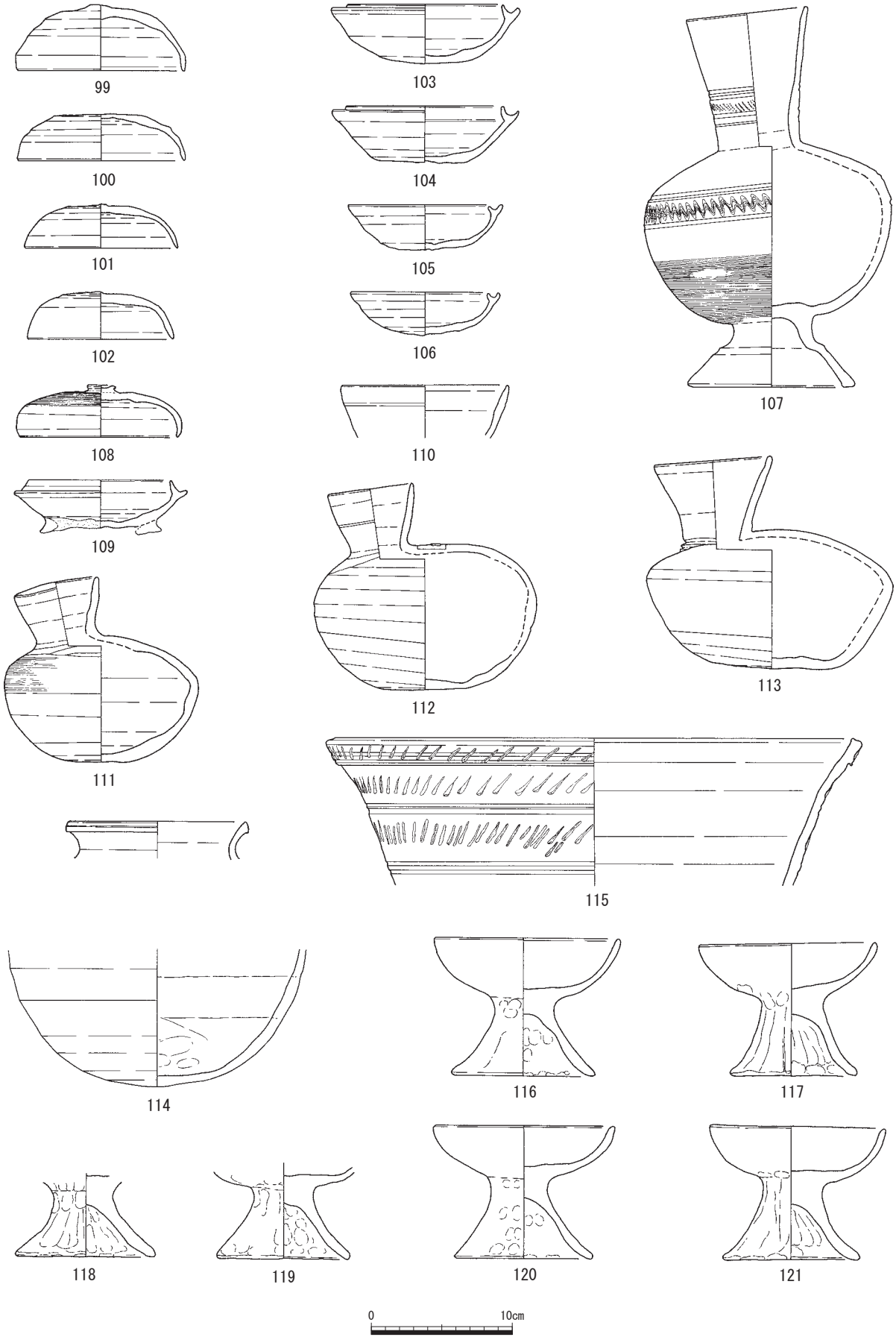
須恵器の杯蓋（99 ～ 102）は、口径 10.3 ～ 11.8cm、器高 3.2 ～ 4.7cm である。天井部を丸く仕上げ、回転ヘラケズリは行わずヘラ切りとし、天井部中央がわずかに突出するものがある（99・101・102）。法量のやや大きい 99・100 と、小さな 101・102 に分けられる。杯身（103 ～ 106）は、口径 9.8 ～ 11.0cm、器高 3.1 ～ 4.3cm で、底部外面は回転ヘラケズリを行わずヘラ切りとしている。法量がやや大きく口縁の立ち上がり部が受け部よりわずかに高くなる 103・104 と、法量が小さく口縁の立ち上がり部と受け部の高さがほとんど変わらない 105・106 に分けられる。杯蓋・杯身ともに４個体ずつ出土し、新旧２型式の個体数も一致するが、セット関係は不明である。107 は台付長頸壺で、口縁部に櫛状工具による連続刺突文、肩部に櫛描波状文、胴部下半にカキメを施す。108・109 は子持器台の杯部が剥離したものとそれに組み合う蓋である。蓋（108）は天井部にカキメを施し、やや小ぶりなつまみを有する。身（109）は底部に剥離した痕跡を残す。上述の出土状況からみて、この部分のみを蓋・身のセットとして使用、副葬したものと考えられる。110 は瓶類の口縁部であろう。111 ～ 113 は平瓶で、111・112 の胴部は丸みが強く、113 は肩が張る形態である。いずれも胴下部には回転ヘラケズリを行い、111 の胴上半にはカキメを施す。112 の胴頂部には楕円形浮文状の貼り付けがあるが、意図的なものかどうか不明である。114 は２号陶棺周辺から出土した壺の口縁及び胴下半部の破片で、同一個体と推定した。115 は１号陶棺の棺台として使用された甕の口縁部で、ヘラ状工具による連続刺突文が３段に施されている。

土師器は、高杯６個体がある（116 ～ 121）。浅い椀形の杯部に「ハ」の字形の脚を貼り付け、外面及び杯部内面はヘラミガキで仕上げている。不明瞭なものもあるが外面と杯部内面には赤色顔料を塗布しており、116 は脚部内面に黒斑をもつ。

武器（第 62 図、図版 54 －３）

石室内から出土した武器には、大刀、刀装具、鉄鏃がある。大刀（M 79）は鉄製で、２号陶棺の棺底から出土したものである。茎には２か所に目釘穴が認められ、茎尻部の目釘穴には鉄製の目釘が遺存している。茎の表面には木質が認められ、柄の前端ラインが観察できる。関は刃側・棟側の両方に段を有するが、その位置に若干の食い違いがある。刀身にも木目が認められ、鞘の木質と思われる。鍔や責金具など金属製の刀装具は認められず、出土状況からみて脱落したとは考えにくいため、本来付属していなかったものと推定される。M 80 ～M 83 は鉄製の刀装具で、M 80 は小型の鍔、M 81 は筒金具、M 82・M 83 は責金具である。M 83 は図の右側縁に錆が付着しておらず、ここに有機質の装具が密着する状態であったと思われる。これらの刀装具はいずれも２号陶棺周辺から出土しており、木棺に伴う副葬品であったかもしれないが、刀身は見つかっていない。

鉄鏃は、鏃身ないし関部で計数して６本以上を数える。型式は、細根・柳葉式（M 85）、平根・柳葉式（M 84・M 86・M 89）、平根・腸抉柳葉式（M 87・M 88）がある。細根鏃のみ茎関に棘状突起を有し、平根鏃はいずれも比較的細身である。



第 61 図　桑山南３号墳石室内出土遺物①（1/4）

馬具（第 62 図、図版 54 －３）

馬具は鐙１点（M 92 ～M 94）が出土したに過ぎない。「U」字形吊手金具の上端部（M 92）と脚部（M 93・M 94）の破片で、接合しないが同一個体と考えられる。付属する兵庫鎖や鉸具は出土していない。脚部（M 93・M 94）はそれぞれ１か所に鋲頭釘が認められるが、上部を欠損しているため全体形は不明である。下端も欠けているが細く尖る形状で、内側に曲げて木製の鐙本体に食い込ませたものと推定される。

１号墳と同様、石室床面の残りが比較的よいものの、馬具については非常に断片的な出土であり、実際に使用可能な馬具のセットが副葬されていたとは考えにくい。

鉄鐸（第 62 図、巻頭図版３－２、図版 54 －３）

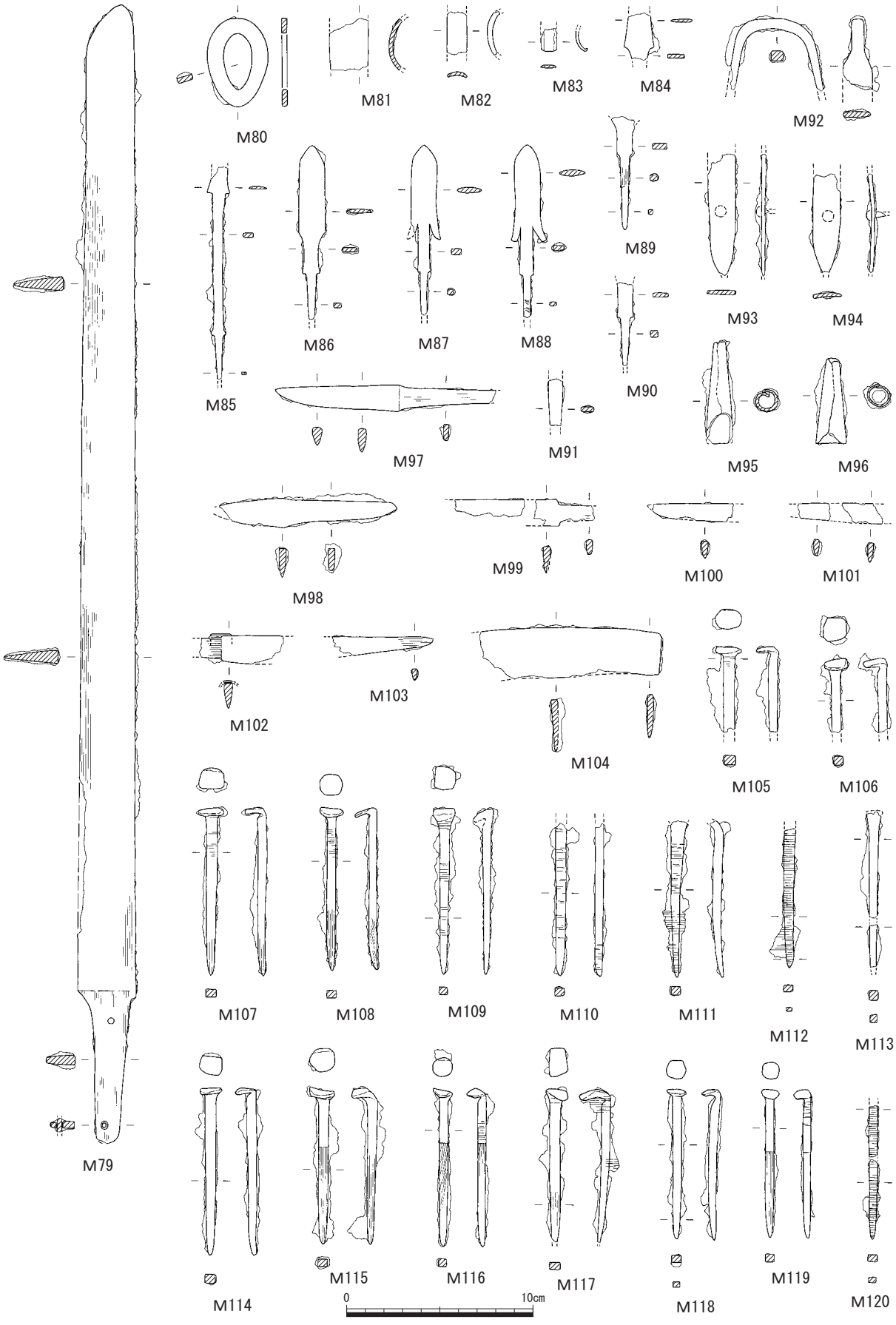
鉄釘の集中部から小型の鉄鐸２点（M 95・M 96）が出土している。M 95 は長さ 5.5cm、下端最大径 1.5cm、M 96 は長さ 4.7cm、下端最大径 1.7cm を測る。薄い鉄板を曲げて細い円錐形につくり、鉄板の合わせ目はわずかに重ね合わせている。頂部は閉じず径数 mm の小孔を残しており、吊り下げるための紐などを通したものと推定される。鐸身内に舌は認められず、遊離して出土しているものもないことから、金属製の舌は付属していないと考えられる。

農工具ほか（第 62・63 図、図版 54 －３）

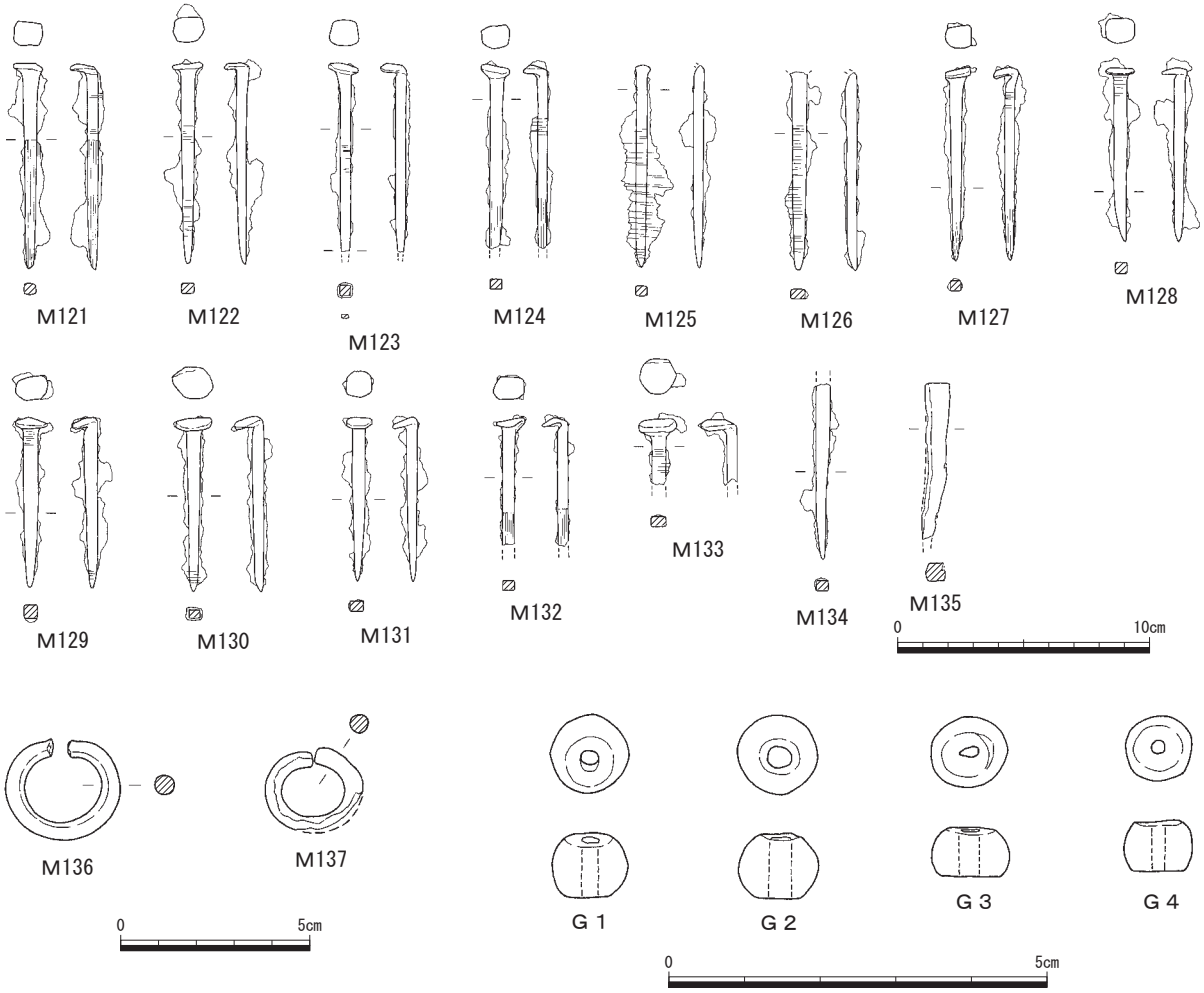
刀子は約５点が出土している（M 97 ～M 103）。茎に柄の木質を残すものが多いが、鹿角質はいずれにおいても認められない。M 97 は２号陶棺の棺底から出土したもので、茎尻を欠損している。M 99 ～M 101 の破片も２号陶棺内から出土している。M 98・M 102 は鉄釘集中部からの出土で、M 102 の関部には鏃の断片がわずかに残る。

農具として、石室開口部付近から出土した鉄鎌（M 104）がある。刃部がわずかに内湾しており曲刃鎌と考えられるが、基部には折り返しをもたない。

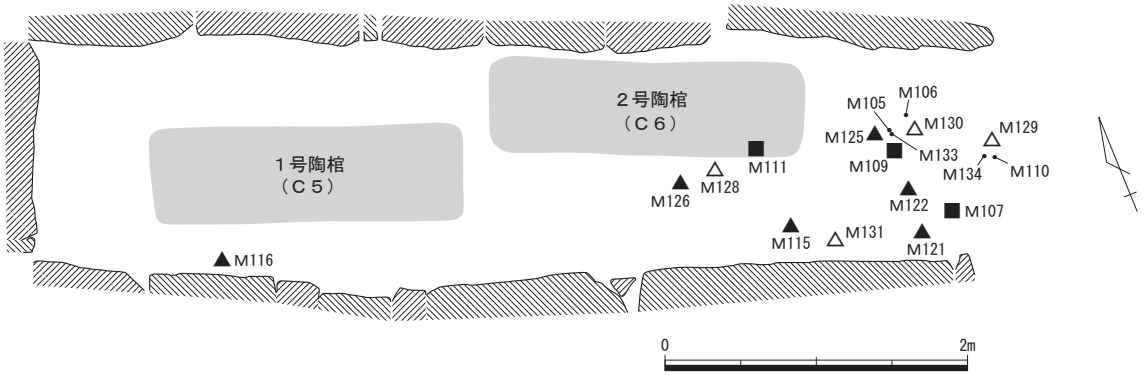
鉄釘は、約 30 点が出土している（M 105 ～M 135）。棺釘として使用されたものと考えられ、大部分の釘に棺材と思われる木質が付着している。木目を観察すると、①上部に横方向、下部に縦方向の木目が付くもの（M 107・M 108・M 116・M 117・M 119・M 121・M 124・M 127）、②全体に横方向の木目が同一面に付くもの（M 109・M 111・M 112・M 120・M 122・M 125・M 126）、③全体に横方向の木目が付くが途中で付着する面が変わるもの（M 110・M 129）に分類でき、①が最も多く③はわずかである。釘の使用された部位を示すものと考えられる。仮に、木棺が「長方形の板材を直方体に組み上げ、側板・小口板ともに木目方向を横位に使い、蓋板・底板とも木棺長軸方向に木目を向けたもの」とするならば、①は側板と小口板との固定に、②は蓋板・底板と側板との固定に、③は蓋板・底板と小口板との固定に用いられたと考えられよう。また、釘の途中で木目や木質の状態が変化する場合、その位置と釘頭部との距離は棺材の厚さを反映している可能性が高い。それが判明するものの数値を挙げれば、2.6cm（M 115）、2.5cm（M 116）、2.8cm（M 119）、2.7cm（M 121）、3.2cm（M 132）となり、厚さ 2.5 ～３cm 程度の木材が使用されたことがわかる。鉄釘の長さは、６世紀から７世紀にかけて次第に短くなっていくことが知られている。３号墳の鉄釘は全長 6.5 ～ 9.0cm の幅があるが、８cm 前後のものが最も多く（7.6 ～ 8.4cm）、より短いもの（6.5 ～ 6.9cm）、より長いもの（8.7 ～ 9.0cm）の３者に分類することができる。しかしながら、石室内の出土状況においてそれら３者の分布に違いはなく（第 64 図）、同一の木棺に使用された鉄釘であることが推測できる。すなわち、釘を用いた木棺による埋葬は１基のみであったと考えられる。



第 62 図　桑山南３号墳石室内出土遺物②（1/3）

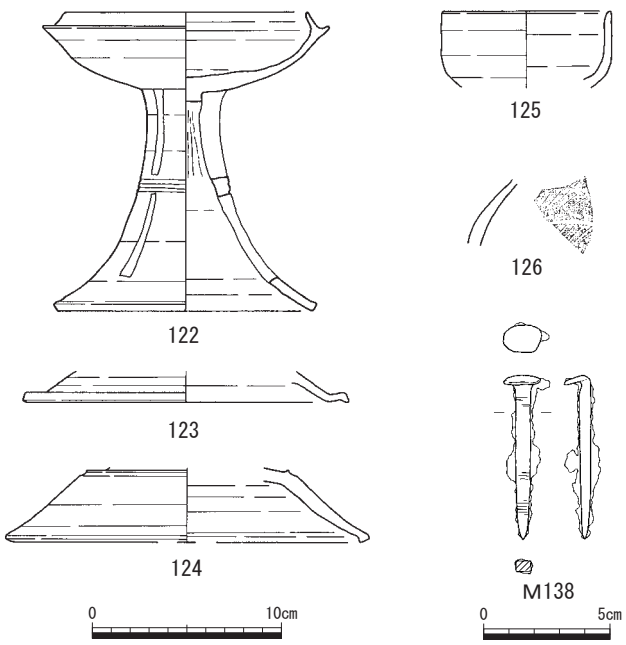


第 63 図　桑山南３号墳石室内出土遺物③（1/3・1/2・1/1）



■ 全長 87 ～ 90㎜　▲ 全長 76 ～ 84㎜　△ 全長 65 ～ 69㎜　・欠損のため全長不明

第 64 図　桑山南３号墳石室内における鉄釘の分布（1/50）



第 65 図　桑山南３号墳墳丘・周辺出土遺物（1/4・1/3）

装身具（第 63 図、巻頭図版４－３）

装身具は、耳環２点（Ｍ 136・Ｍ 137）、ガラス製丸玉４点（Ｇ１～Ｇ４）がある。耳環はいずれも銅地銀貼りと思われる。１号陶棺周辺から出土しており１号陶棺に伴う可能性があるが、２点の大きさが異なるため、対になるものかどうか判然としない。やや大きなＭ 136 は保存状態が比較的よく、表面は黒っぽく光沢をもつ。Ｍ 137 はやや小さく、表面の剥落が著しいが、環の内側には銀貼りが残存している。

ガラス製丸玉はＧ１が１号陶棺北側での出土、その他は出土位置不明である。いずれも青色であるが、Ｇ２・Ｇ３は濃く黒っぽい色調である。

６　その他の遺物

その他の出土遺物として、墳丘や石室周辺から出土した須恵器と鉄釘がある（第 65 図）。122 ～ 126 は須恵器である。122 は上述した石室奥壁裏側の墳丘盛土中出土の有蓋高杯、123 ～ 126 は石室前面や石室周辺から出土したものである。123 は高杯の脚端部、124 は台付壺などの台部と考えられる。126 は壺の口縁で、外面に沈線１条を廻らせその上下にヘラ描斜線文を施している。Ｍ 138 は墳丘南部の盛土下層から出土した鉄釘である。

なお、古墳時代以外の遺物については章末にまとめて掲載する。　（尾上）

註

（１）『万燈山古墳』加茂町文化財保護委員会　1973

（２）『カキ谷Ｂ古墳群１号墳』カキ谷Ｂ古墳群１号墳埋蔵文化財発掘調査委員会　1987

（３）葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅「箭田大塚古墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　1986
奥壁に沿わせて設けられたもので、長さ約３ｍ（＝奥壁幅）、幅約１ｍあり、桑山南３号墳の約２倍（面積約４倍）の大きさである。

第５節　桑山南４号墳

４号墳は、古墳群のうちで最高所に位置し、大部分が調査対象区域外にある（第９図）。調査範囲内において墳端が検出される可能性も考えられたため、２号墳の北側を広範囲に精査したが、明確な墳端や周溝などは検出されなかった。４号墳の下方斜面にあたるため流失したか、あるいは墳丘が調査範囲外でおさまっている可能性が考えられた。　（尾上）

第６節　桑山南５号墳

１　墳丘と周溝

５号墳は、１号墳と３号墳の間に位置し、南東向きの斜面部に築かれている。

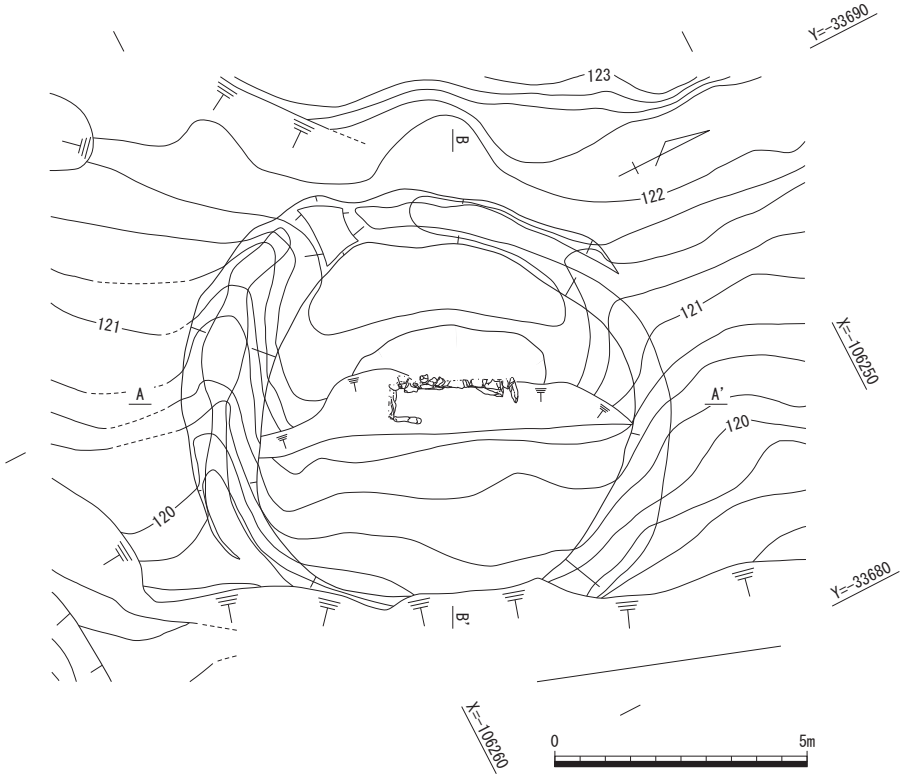
調査前、５号墳はグラウンドゴルフ場に至る舗装路の下に埋没していた（第８図)。周辺は、舗装路の造成以前から農地等のため造成がなされ、墳丘も削平を受けていた。墳頂部を平坦に削平されているほか、墳丘の中心から南東側約半分を高さ約１ｍの段をもって大きく掘削している。これによって石室も約半分が破壊され、南東側墳端付近からさらに１ｍほどの段をつけて掘削されている。

調査の結果､墳丘の西側およそ半分には周溝が残存しており､北東側でも墳端が確認された。周溝は、最も地形の高い西側において一部途切れ、幅１ｍほどを土橋状に掘り残している。１号墳の周溝と共通する構造である。周溝の幅はおよそ１～２ｍで断面形は逆台形を呈し､残りのよい南西側で幅約 2.5ｍ､深さ約１ｍを測る(第67図Ａ－Ａ’断面)。以上の周溝検出状況などを手がかりに墳丘を復元すれば、東西約８ｍ、南北約９ｍの円墳になり、墳丘の残存高は約２ｍである。

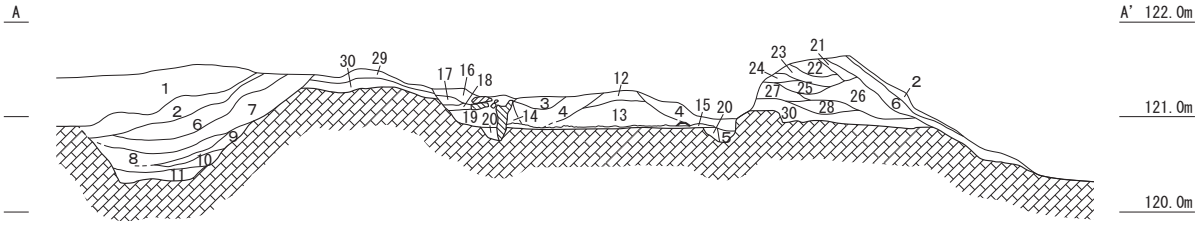
墳丘の盛土は大半が失われていたが、北部では比較的残存しており、褐色土と暗褐色ないし黒褐色土とを互層状に積んでいる状況が窺えた（第 67 図Ａ－Ａ’断面右側)。

２　竪穴式石室

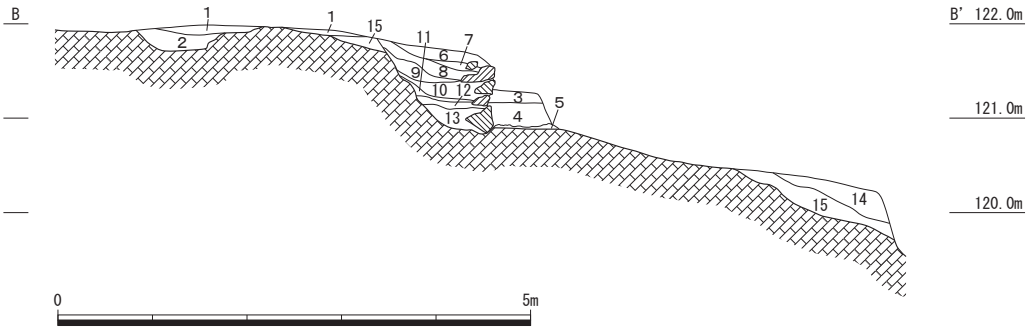
５号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた竪穴式石室である。古墳発見時、石室天井石と壁体



第 66 図　桑山南５号墳墳丘（1/150）

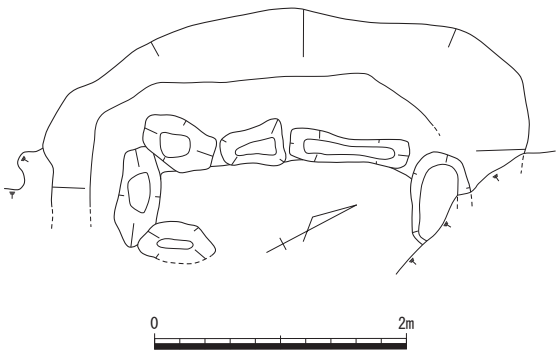


1　造成土
2　表土
3　褐色（10YR4/6）砂質土（1cm 大以下の礫を含む）
4　褐色（10YR4/6）砂質土（3cm 大以下の礫を含む）
5　褐色（10YR4/4）砂質土＜小口石抜き取り痕＞
6　褐色（10YR4/6 砂質土）＜流土＞
7　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
8　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
9　黄褐色（10YR5/6 砂質土）＜周溝埋土＞
10　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
11　黄褐色（2.5Y5/4）砂質土＜周溝埋土＞
12　褐色（10YR4/4）砂質土（礫を含まない）
13　褐色（10YR4/6）砂質土（礫を含まない）
14　褐色（10YR4/6）粘質土（礫を含まない）
15　礫層＜床石＞
16　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜石室掘り方埋土＞
17　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜石室掘り方埋土＞
18　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜石室掘り方埋土＞
19　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜石室掘り方埋土＞
20　褐色（10YR4/6）砂質土＜小口石埋め土＞
21　褐色（10YR4/4）砂質土＜以下盛土＞
22　褐色（10YR4/6）砂質土（3cm 大以下の礫を含む）
23　暗褐色（10YR3/4）砂質土
24　褐色（10YR4/6）砂質土
25　黒褐色（10YR2/2）砂質土
26　褐色（10YR4/6）砂質土
27　褐色（10YR4/6）砂質土（3cm 大以下の礫を含む）
28　暗褐色（10YR3/4）砂質土
29　褐色（10YR4/6）砂質土
30　黒褐色（10YR2/3）砂質土＜旧表土＞



1　造成土
2　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
3　褐色（10YR4/4）砂質土（礫を含まない）
4　褐色（10YR4/6）砂質土（礫を含まない）
5　礫層＜床石＞
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（地山礫を多く含む）＜石室掘り方埋土＞
7　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜石室掘り方埋土＞
8　褐色（10YR4/4）砂質土＜石室掘り方埋土＞
9　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜石室掘り方埋土＞
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山礫を多く含む）＜石室掘り方埋土＞
11　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜石室掘り方埋土＞
12　暗褐色（10YR3/3）砂質土＜石室掘り方埋土＞
13　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜石室掘り方埋土＞
14　褐色（10YR4/6）砂質土＜盛土＞
15　褐色（10YR4/4）砂質土＜旧表土＞

第 67 図　桑山南５号墳墳丘・石室内土層断面（1/80）

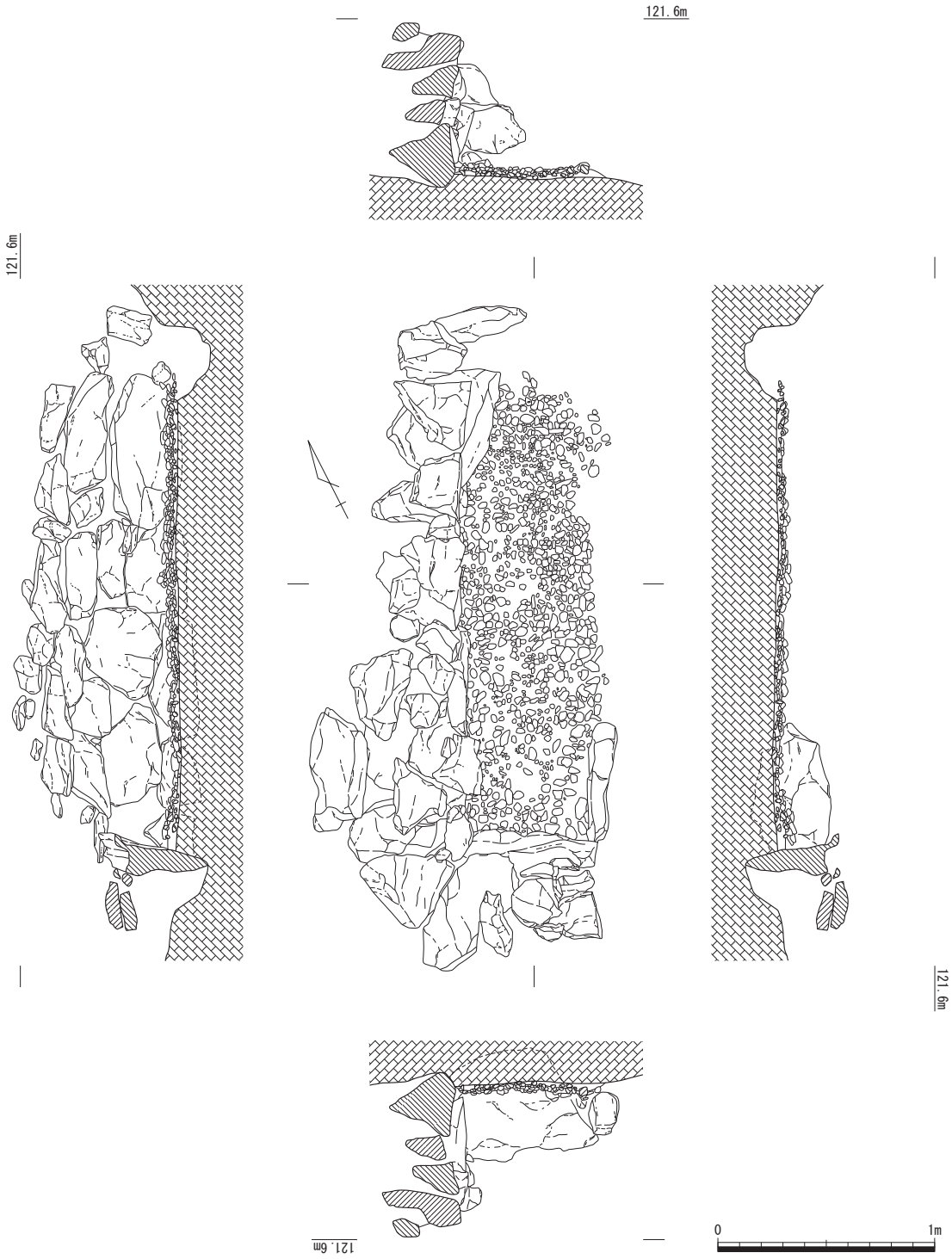


第 68 図　桑山南５号墳石室掘り方（1/60）

の約半分がすでに失われていた。

石室構築のための掘り方は、墳丘盛土上から穿たれている。南東側半分を破壊されているが、掘り方の規模は石室長軸方向で約 3.8 ｍ、残存する深さ約１ｍを測り、底面には石室基底石を据えるための穴が掘られている（第 68 図）。

石室（第 69 図）は、長軸を北東－南西方向に向け（Ｎ 27° Ｅ）、ほぼ周辺地形の等高線に沿う方向



第 69 図　桑山南５号墳石室（1/30）

に築かれている。規模は全長 2.2 m、幅 0.7 m、残存高 0.7 mである。残りのよい北西側の側壁をみると、下半に大きな石材を据え、上半は横長の小型石材を積み上げ、おおむね３～４段積みとしている。側壁の裏込めは大半が土で充填されているが、南半部では石材による控え積みが顕著であった。床面には 10cm 大以下の川原石を一面に敷き礫床としているが、その厚さは薄い。

３　石室内遺物出土状況

石室内には、部分的ではあるが人骨１体分が遺存していたほか、その周囲から須恵器、鉄鏃、刀子が出土した（第 70 図）。人骨は頭部と脚部が認められ、頭部では特に下顎骨がよく残っていた。鑑定の結果、成年でおそらく男性の人骨との結果が報告されている（第５章第２節）。

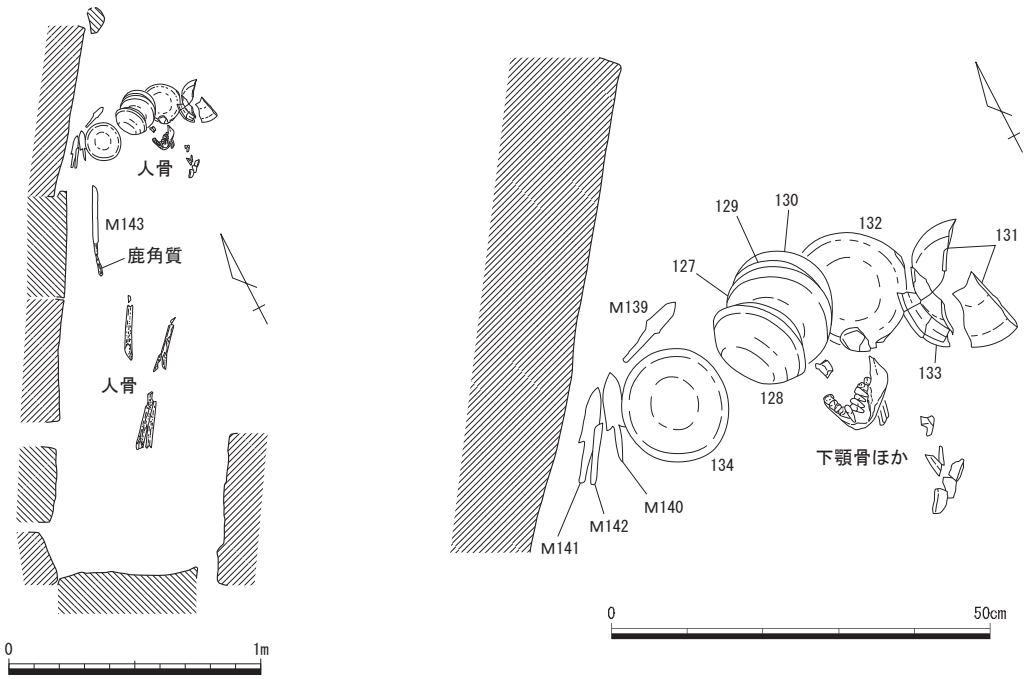
人骨頭部の周囲には須恵器の蓋杯８個体（127 ～ 134）が重なり合いながらすべて伏せた状態で置かれていた。８個体の内訳は蓋３・身５であり、蓋と身がすべて組で副葬されたわけではない。頭骨との位置関係から、その一部は枕として利用された可能性がある。須恵器と側壁との間からは鉄鏃４点（M 139 ～M 142）が出土した。すべて先端を遺体の頭位方向に向けている。鉄鏃のやや南寄り、遺体の胴部右側に、鹿角製の柄をもつ刀子（M 143）１点が置かれていた。遺体に沿わせて切先を頭位方向に、刃を遺体側、棟を外側に向ける。柄の鹿角質は、細かく分解し取り上げが困難であったが、茎部分からさらに南方に続いており、長さ約 15cm の柄が付属するものと考えられた。

ほかに、石室付近から須恵器有蓋高杯の身が１点出土している（135）。詳細な出土位置は不明ながら、これも石室内副葬品の可能性が高い。

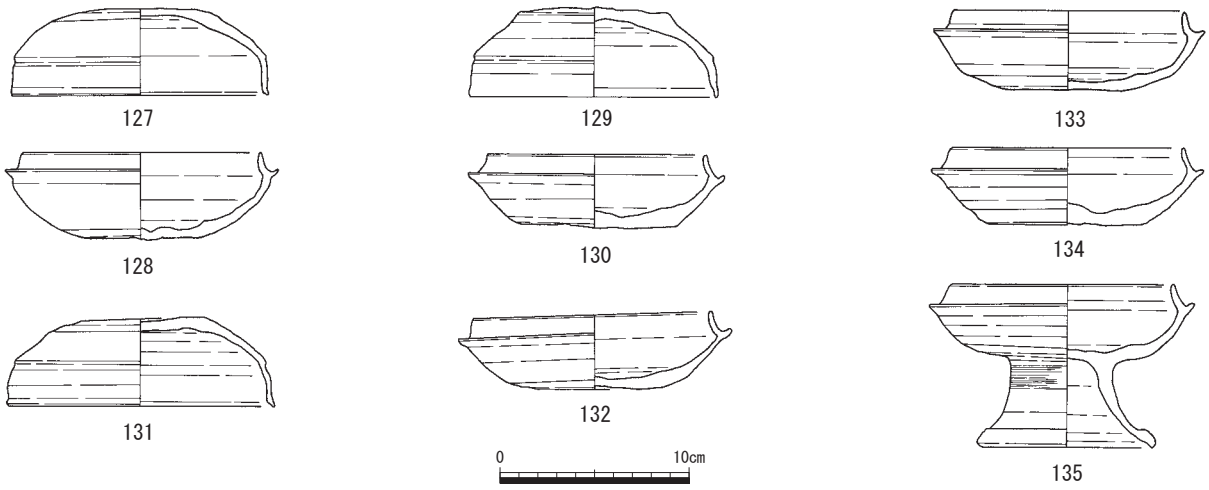
４　石室内出土遺物

土器（第 71 図、図版 55 － 1）

蓋杯（127 ～ 134）は、上述のとおり蓋３点、身５点であるが、口径・色調・焼成などから 127 と



第 70 図　桑山南５号墳石室内遺物出土状況（1/30・1/10）



第 71 図　桑山南５号墳石室内出土遺物①（1/4）

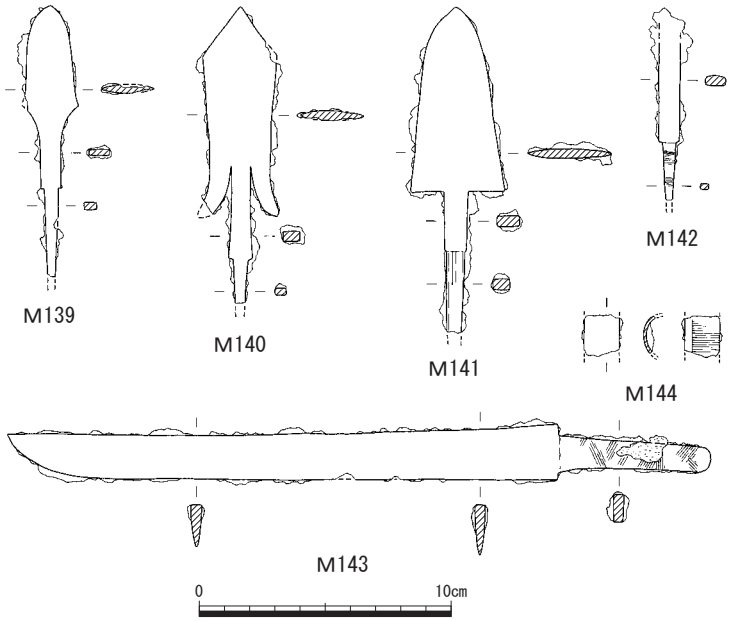
128、129 と 130 が組になる可能性が高い。蓋（127・129・131）は、口径 13.0 ～ 14.0cm、器高 4.6 ～ 4.8cm で、肩に比較的明瞭な段をもって屈曲し、口縁端部にはやや内傾する面をもつ。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。身（128・130・132 ～ 134）は、口径 11.6 ～ 12.5cm、器高 3.9 ～ 4.6cm で、比較的高い立ち上がりをもち、底部外面に回転ヘラケズリを施す。有蓋高杯（135）は重機での掘削中に出土したものである。杯部は上の杯身に類似した特徴をもち、透かしのない脚部を有する。

武器（第 72 図、図版 55 － 2）

武器としては鉄鏃４点がある（M 139 ～M 142）。M 139 は平根・柳葉式、M 140 は平根・腸抉柳葉式、M 141 は平根・三角形式、M 142 は型式不明である。少数ながら多種の平根鏃を組み合わせており、M 140・M 141 は比較的大型の鉄鏃である。

刀子（第 72 図、図版 55 － 2）

M 143 は、全長 27.8cm、刀身長 21.6cm を測る大型の刀子である。関は刃側、棟側の両方に段を有し、目釘穴は不明である。茎の表面には紐ないし糸を巻き、その上に柄の鹿角質が付着する。出土状況から、長さ 15cm 程度の鹿角製柄が付属していたと考えられる。また、刀子の鎺と考えられる破片が石室内から出土している（M 144）。内面に木質が遺存しているが、側縁部で幅約３㎜を残して木質が途切れている。柄の前端部を示す痕跡であろうか。石室内からはM 143 以外に刀子が出土しておらず、これに付属する可能性があるが、鹿角製の柄と、鎺内面に付着する木質との関係が課題として残る。（尾上）



第 72 図　桑山南５号墳石室内出土遺物②（1/3）

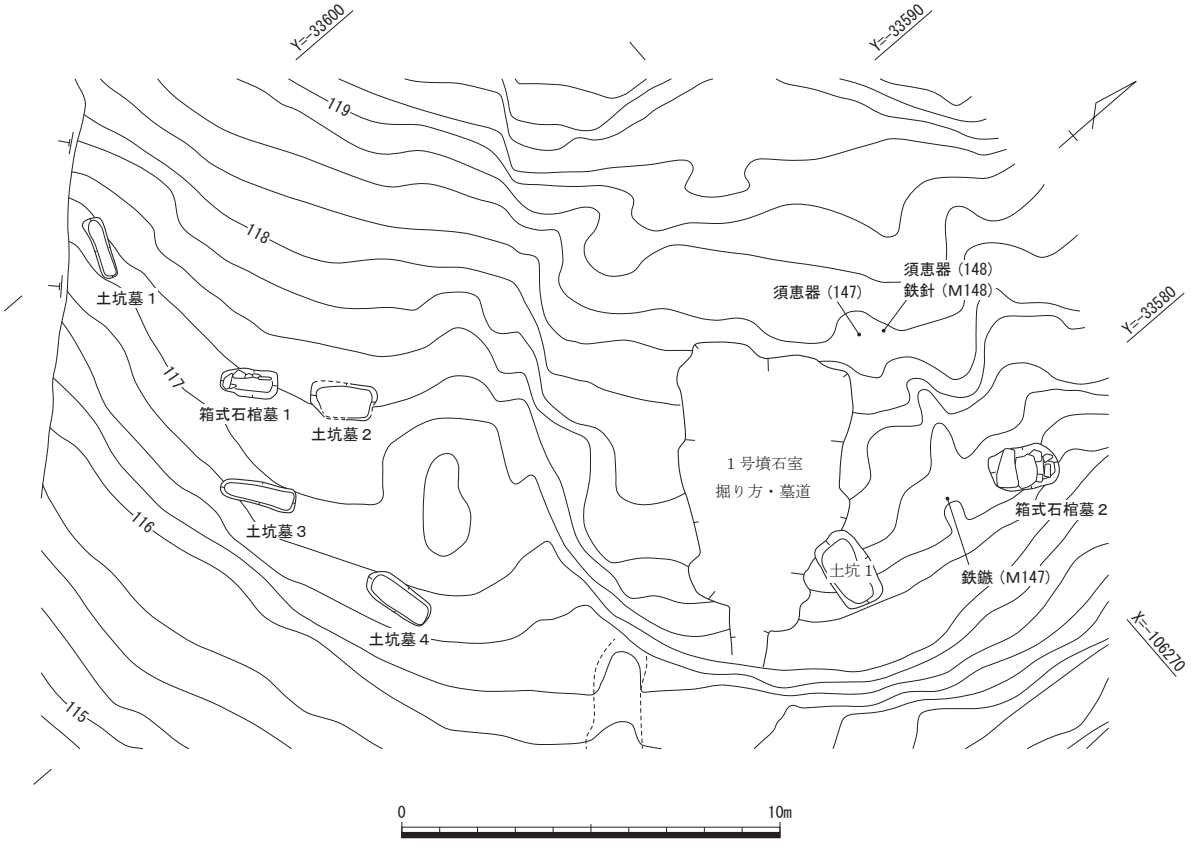
第７節　古墳時代の箱式石棺墓・土坑墓群

１　概　要

１号墳周辺において、古墳時代後期の箱式石棺墓・土坑墓群が検出された（第 73 図）。時期は、出土遺物から６世紀中葉頃と判断され、箱式石棺墓２は１号墳の盛土下にあることから、これらは１号墳の築造に先立って営まれた遺構と考えられる。

その構成は、箱式石棺墓２基、土坑墓４基で、等高線に沿って、標高 116.5 ～ 117.5 m付近に帯状に分布している。１号墳の西側に５基が集中し、そこから北東側に 10 m以上の空白をあけて１基のみが存在する。この空白部分は、１号墳の墳丘及び周溝の範囲と一致することから、その築造によって土坑墓等が破壊された可能性が考えられる。周辺からは同時期の須恵器蓋杯が 13 個体分ほど出土しており（第 81 図）、そのうち蓋（147）・身（148）のセットは１号墳盛土中の近接した位置から出土している（第 73 図、写真 14）。箱式石棺墓や土坑墓に蓋杯を２個セットで副葬あるいは枕とする例が多いことを考えれば、さらに６～７基の箱式石棺墓・土坑墓が存在したかもしれない。

なお、箱式石棺墓２基は内法長が 1.0 ～ 1.1 m、土坑墓４基は 1.5 ～ 1.9 mであり、子供の墓として箱式石棺が多用された可能性がある。（尾上）



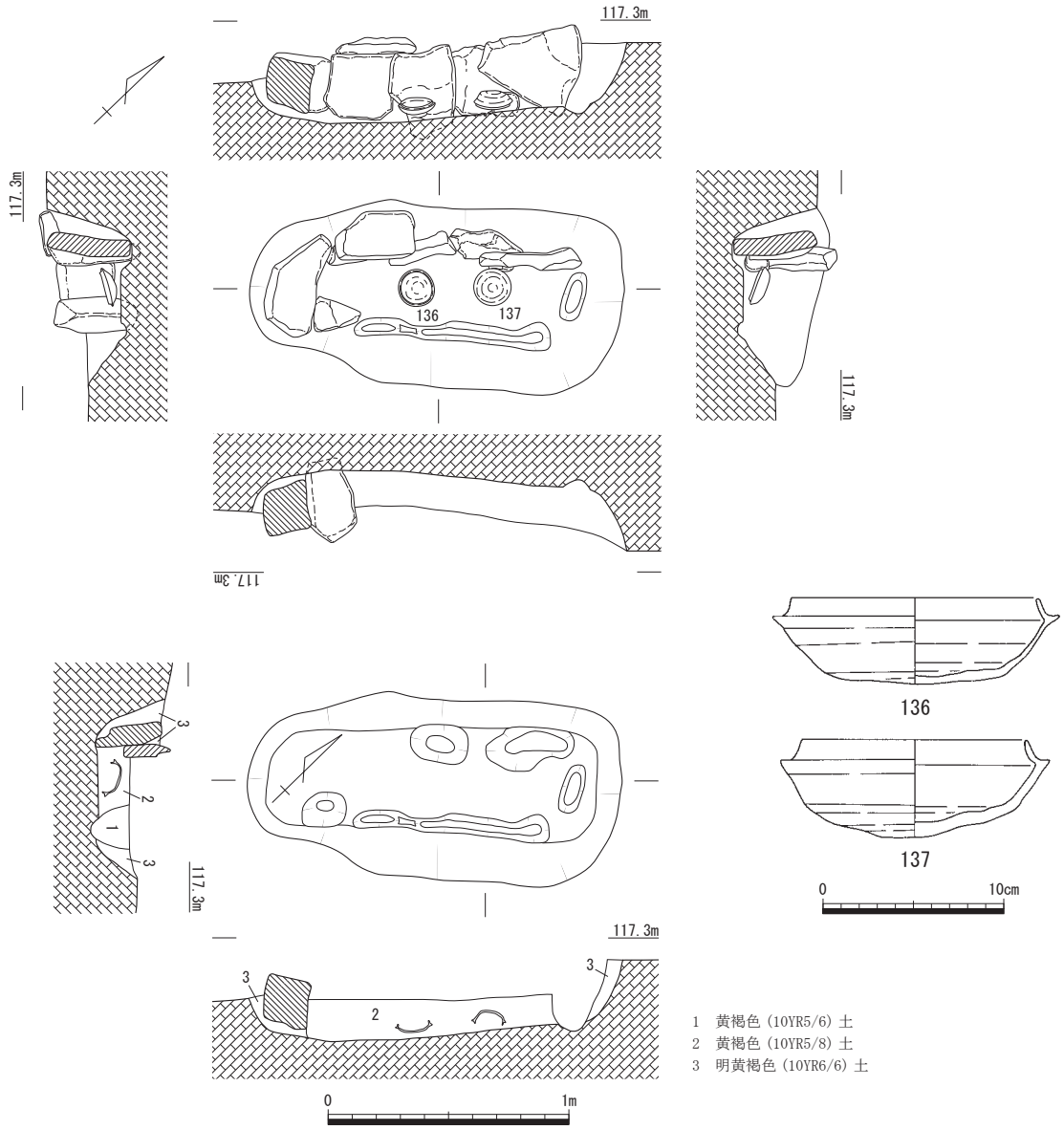
第 73 図　箱式石棺墓・土坑墓群の配置（1/200）
等高線は１号墳盛土撤去後の状況を示す。

２　箱式石棺墓

箱式石棺墓１（第 74 図、図版 32 － 1 ・32 － 2 ・56 － 1）

１号墳の西に位置している箱式石棺墓で、長軸方向が土坑墓２・３とほぼ一致する。石棺は、天井石と北東辺、さらに南東辺北東側の石材が流失していた。南西側小口には厚さ約 20cm の角礫、北西側側壁には厚さ約 10cm の方形～長方形を呈する板石を使用している。石棺の規模は、側壁掘り方から、内法長 104cm、幅 28cm と推測される。石棺掘り方は、長さ 155cm、幅 75cm を測る。

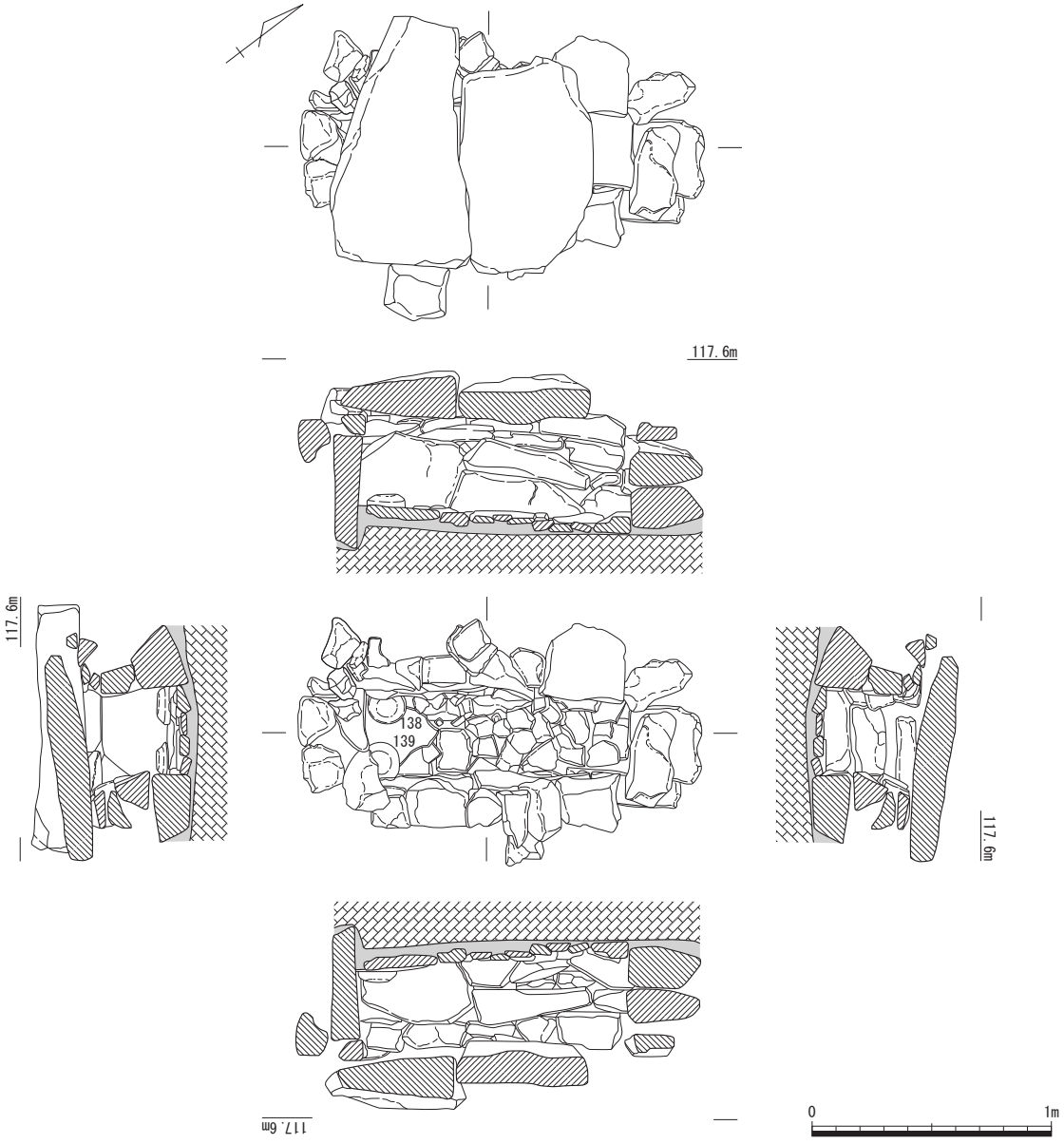
遺物は、床面上から口径 12.4 ～ 13.6cm、器高 4.7 ～ 5.4cm で、口縁部の立ち上がりが高い須恵器杯身が２点（136・137）出土した。137 は、底部中央付近まで回転ヘラケズリが認められる。これらは、その出土位置が石棺の小口側でなく中央部であることと、136 の杯身が伏せられた状態でなかったことから、枕として転用されていたと考えるのは難しい。ただし、石棺小口側に置かれていたものが、２次的にこの出土位置へ移動した可能性もある。



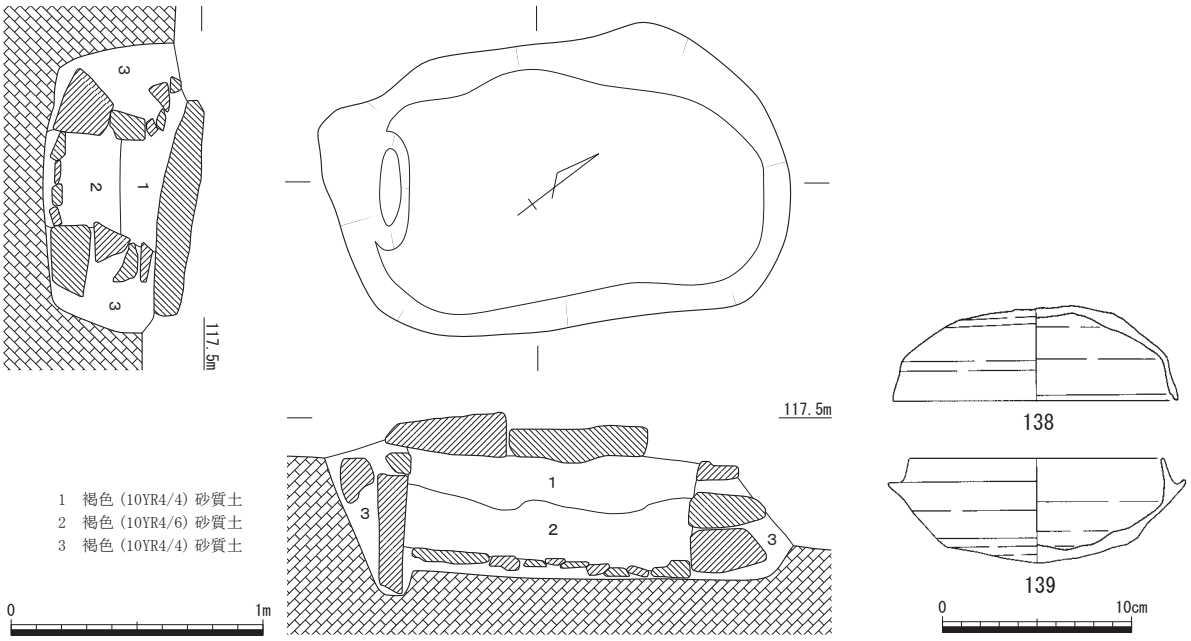
第 74 図　箱式石棺墓１（1/30）・出土遺物（1/4）

箱式石棺墓２（第 75・76 図、写真 12、図版 32 －３・33 －１・56 －１）

箱式石棺墓２は、1 号墳の北東側に位置し、この古墳の墳丘盛土を除去後に検出されたものである。検出時にはすでに北東側の天井石は失われていたが、大きさ約１ｍ、厚さ約 15cm の板石を用いた天井石が２枚残存していた。石棺は、長さ 184cm、幅 114cm、深さ 48cm の隅丸長方形の掘り方を掘削した後、板石を用いて構築しており、その内法は長さ 114cm、幅 37cm を測る。床面には、板石を敷き詰めていた。遺体の頭位は、枕に使用されたと思われる須恵器杯（**138・139**）から南西小口側であったと推定される。頭位を意識して石棺を構築していたようで、側壁は頭位側が基本的に２段積みである一方で、足側がおおむね３段積みである。また頭位側の床面は標高が高く、さらに１辺 30cm 程の正三角形を呈する大きな板石を敷いていた。杯蓋（**138**）は、天井部と口縁部の境界にやや鈍い稜が巡り、口縁端部に内傾する面を有している。杯身（**139**）は、口縁部の立ち上がりが高く、底部半ばまで回転ヘラケズリが認められた。（小嶋）



第 75 図　箱式石棺墓２（1/30）

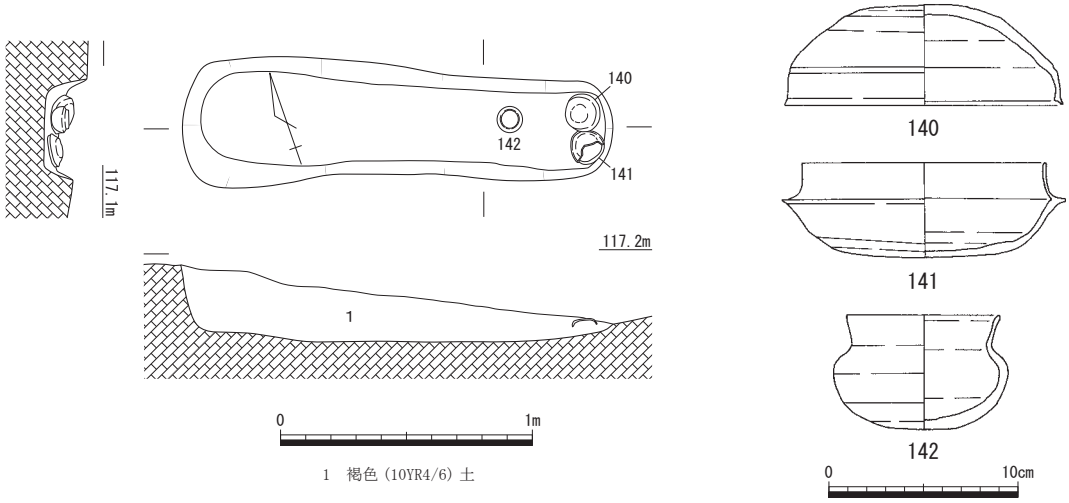


第 76 図　箱式石棺墓２掘り方及び土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）

３　土坑墓

土坑墓１（第 77 図、写真 13、図版 33 － 2 ・33 － 3 、56 － 1 ）

調査区の西端で検出された隅丸長方形を呈する土坑墓で、その規模は長軸 170cm、短軸 52cm、斜面上方側での検出面からの深さ 25cm を測る。ほぼ水平に掘削されていた墓坑底面の北東側小口には、枕として使用されたと思われる須恵器杯身（**141**）・杯蓋（**140**）がいずれも伏せて置かれていた。このことから、遺体は頭部を北東に向けて安置されていたと推測される。天井部と口縁部の境界に凹線が巡る杯蓋は、口縁端部に内傾する面を有して鋭い稜をもつ。杯身は、口縁部の立ち上がりが高く、底部半ばまで回転ヘラケズリが施される。なお、須恵器短頸壺（**142**）の内面底部に赤色土が確認されたため、その土壌を分析している（第５章第１節）。



第 77 図　土坑墓１（1/30）・出土遺物（1/4）

写真 12　箱式石棺墓２須恵器転用枕（北東から）　**写真 13　土坑墓１須恵器転用枕ほか（西から）**

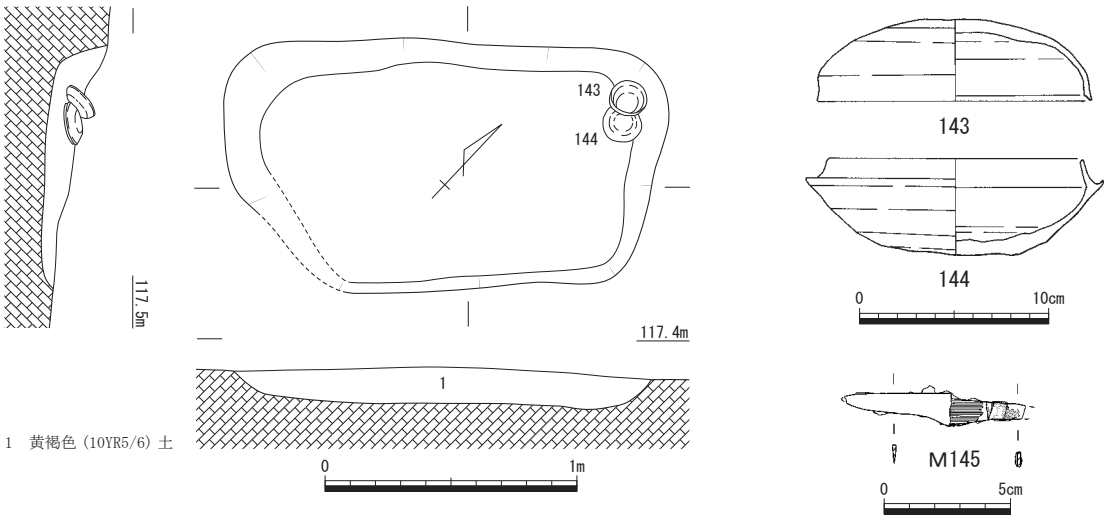
土坑墓２（第 78 図、図版 34 － 1 ・34 － 2 ・56 － 1）

箱式石棺墓１の北東側約１ｍに位置している土坑墓で、その規模は検出面で長さ 176cm、最大幅 101cm を測る。底面はほぼ水平に掘削され、その直上から出土した須恵器杯（**143・144**）から、遺体は北東辺側に頭部を安置していたと思われる。天井部と口縁部の境界をやや強めに屈曲させている杯蓋（**143**）は、口縁端部に内傾する面を有してやや鋭い稜をもつ。杯身（**139**）は、口縁部の立ち上がりが高く、底部半ばまで回転ヘラケズリが認められた。**M 145** の刀子は、北西辺の中央部付近から出土したもので、茎には糸巻状痕跡、柄には木質が認められる。（小嶋）

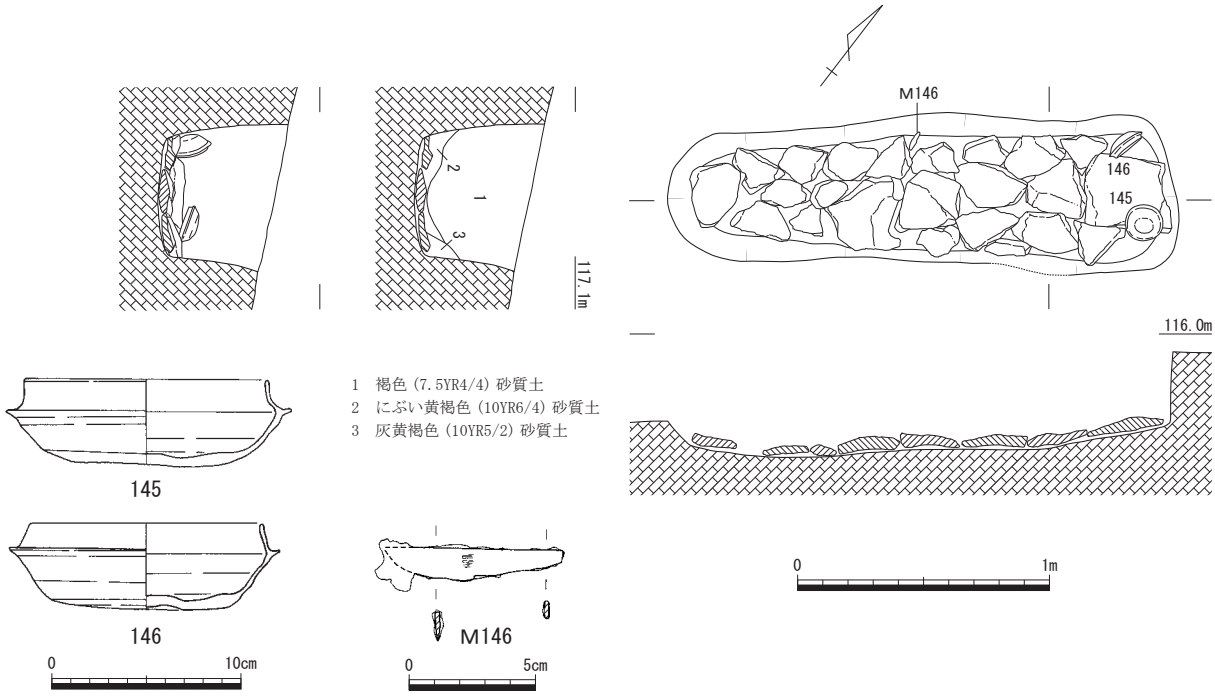
土坑墓３（第 79 図、図版 34 － 3 ・35 － 1 ・56 － 1）

１号墳の南西で検出された土坑墓である。墓坑は、検出面で長さ 203cm、最大幅 62cm、残存する深さ 50cm を測る。平面形は隅丸長方形をなし、頭位と推定される北東側の方が若干幅広く床が高い。床面には不整形な凝灰岩の板石を敷き、遺体頭部と推定される位置には約 30cm 四方のやや大きな石材を使っている。

遺物は、礫床上から須恵器の杯身２点と刀子１点が出土した。須恵器杯身（**145・146**）は、枕に使用されたものと推定されるが、**146** は横向きに立った状態で出土している。口径 12.2 ～ 12.6cm、器高 4.6cm で、いずれも口縁の立ち上がりが高い。刀子（**M 146**）は底部中ほどの北西壁際で出土した。



第 78 図　土坑墓２（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）



第 79 図　土坑墓３（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

遺体右側の腰付近にあたるであろう。刀身が非常に短い刀子である。

土坑墓４（第 80 図、図版 35 －３）

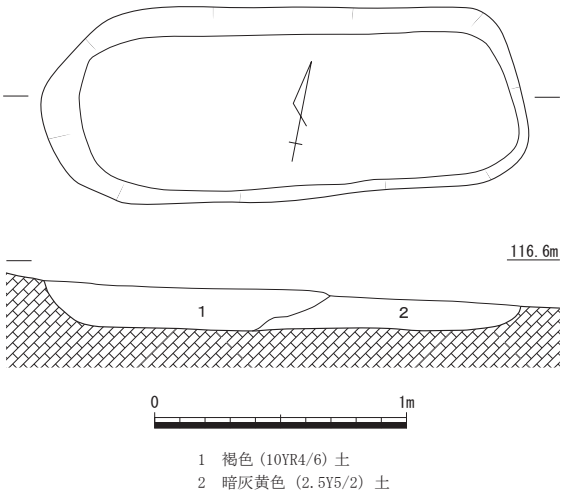
１号墳の南西で検出された土坑墓である。墓坑は、検出面で長さ 194cm、最大幅 78cm、残存する深さ 16cm で、平面形は隅丸長方形をなし、床面はほぼ水平である。遺物は全く出土していないが、検出された位置や墓坑の形状などから、古墳時代の土坑墓と推定している。　（尾上）

４　桑山南１号墳下層遺物

上述したように、箱式石棺墓・土坑墓群と関連すると思われる遺物が、１号墳盛土の中や下層、１号墳周辺から出土している。ここで「１号墳下層遺物」としてまとめて記載する（第 81 図）。

147・148 は１号墳石室北側の盛土下層から出土した杯蓋･杯身である。互いに 70cm ほど離れ、ほぼ同一レベルで出土しており（写真 14）、土器の色調はやや異なるが組で使用された可能性がある。付近に存在した箱式石棺や土坑墓に副葬され、１号墳の築造に伴って破壊、攪乱を受けたものと推定した。**147** は肩部に沈線を廻らせ、口縁端部は内面にわずかな段をもつ。**148** は口縁が垂直に近く立ち上がり端部は丸くおさめる。このような特徴は、箱式石棺墓及び土坑墓出土の須恵器とほぼ共通する。また、**148** の中から針状の鉄器（**M 148**）１点が出土した。

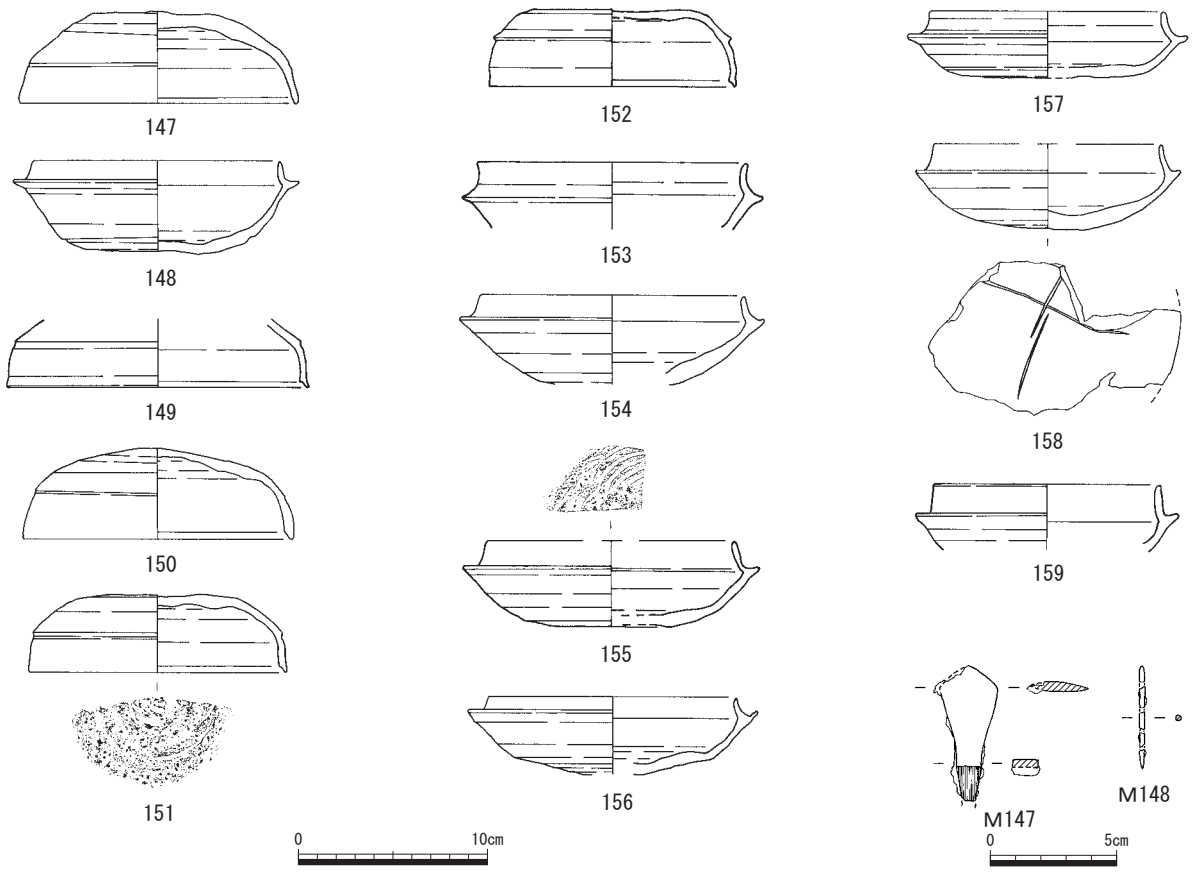
このほか、須恵器の杯蓋４点（**149** ～ **152**）、



第 80 図　土坑墓４（1/30）

杯身７点（153 ～ 159）を図示している。このうち１号墳盛土内から出土したのが 150・154・156・158 で、その他は１号墳の南側を中心とする流土層から出土した。蓋は、口径 12.8 ～ 15.8cm、器高 4.1 ～ 4.8cm で、いずれも肩部に段あるいは沈線を廻らせ、口縁端部には内傾する面をもつ。身は、口径 11.9 ～ 14.1cm、器高 3.5 ～ 4.5cm である。156 は、他に比べて口縁の立ち上がりが低く内傾し、型式的に新しい。１号墳盛土内の出土であるが、１号墳築造時の遺物であるかもしれない。

鉄製品として、上記の鉄針（M 148）に加え、鉄鏃１点（M 147）が出土している。箱式石棺墓２の南側で、１号墳盛土下層から出土した（第 73 図）。平根・圭頭式である。　（尾上）



第 81 図　桑山南１号墳下層遺物（1/4・1/3）

写真 14　須恵器 147・148 出土状況（東から）

写真 15　箱式石棺墓・土坑墓群調査状況（南から）

第８節　その他の遺構・遺物

１　中世の土坑墓群

概要（第９図、図版 36 －３・37 －１）

古墳時代の箱式石棺墓・土坑墓群の南西側、斜面下方に中世のものと思われる計 10 基の土坑墓群が検出された（土坑墓５～ 14)。遺物をほとんど伴わず必ずしも時期が明らかでないが、およそ 11 × ６ｍの範囲に集中していること、古墳時代の土坑墓群とは墓域が離れていることなどから、これら 10 基の土坑墓を同時代のものと考え、土坑墓６に副葬された土器の年代観から中世に営まれた土坑墓群と推定している。

各土坑墓の長軸方向は多様だが、大きく３種類に分けることができる。①地形に関係なく南北を向くもの、②それと直交し東西を向くもの、③方角よりも地形に従い等高線に直交するもの、である。このうち①②が 10 基中７基で大半を占め（土坑墓５・７～９・11 ～ 13)、地形よりも東西南北の方位を優先しているようである。この点で、等高線に沿う古墳時代の箱式石棺墓・土坑墓群とは対照的といえる。埋葬頭位は、枕などの施設を伴わないため不明であるが、南北主軸の土坑墓では床面が水平か、もしくは北側がやや高くなっており、北枕であった可能性が高い。東西主軸の土坑墓は数が少ないため検討が難しい。

土坑墓の規模を比較すると、墓坑の長さが 160cm 以上の大型（土坑墓５・９)、120 ～ 130cm 前後の中型（土坑墓 10 ～ 12)、約 50cm の小型（土坑墓７・８）に分けられる。墓坑規模の違いは、被葬者の体格を反映していると考えられ、さまざまな年齢の人々が葬られた墓域であったといえる。

以下、各土坑墓について記述する。

土坑墓５（第 82 図、図版 37 －２）

土坑墓群の西端で検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸を南北に向ける。検出面での規模は、長さ 160cm、最大幅 77cm、残存する深さ 19cm である。墓坑の壁は垂直に近く立ち、床面は凹凸があるがほぼ水平である。

土坑墓６（第 82 図、図版 37 －３・56 －３）

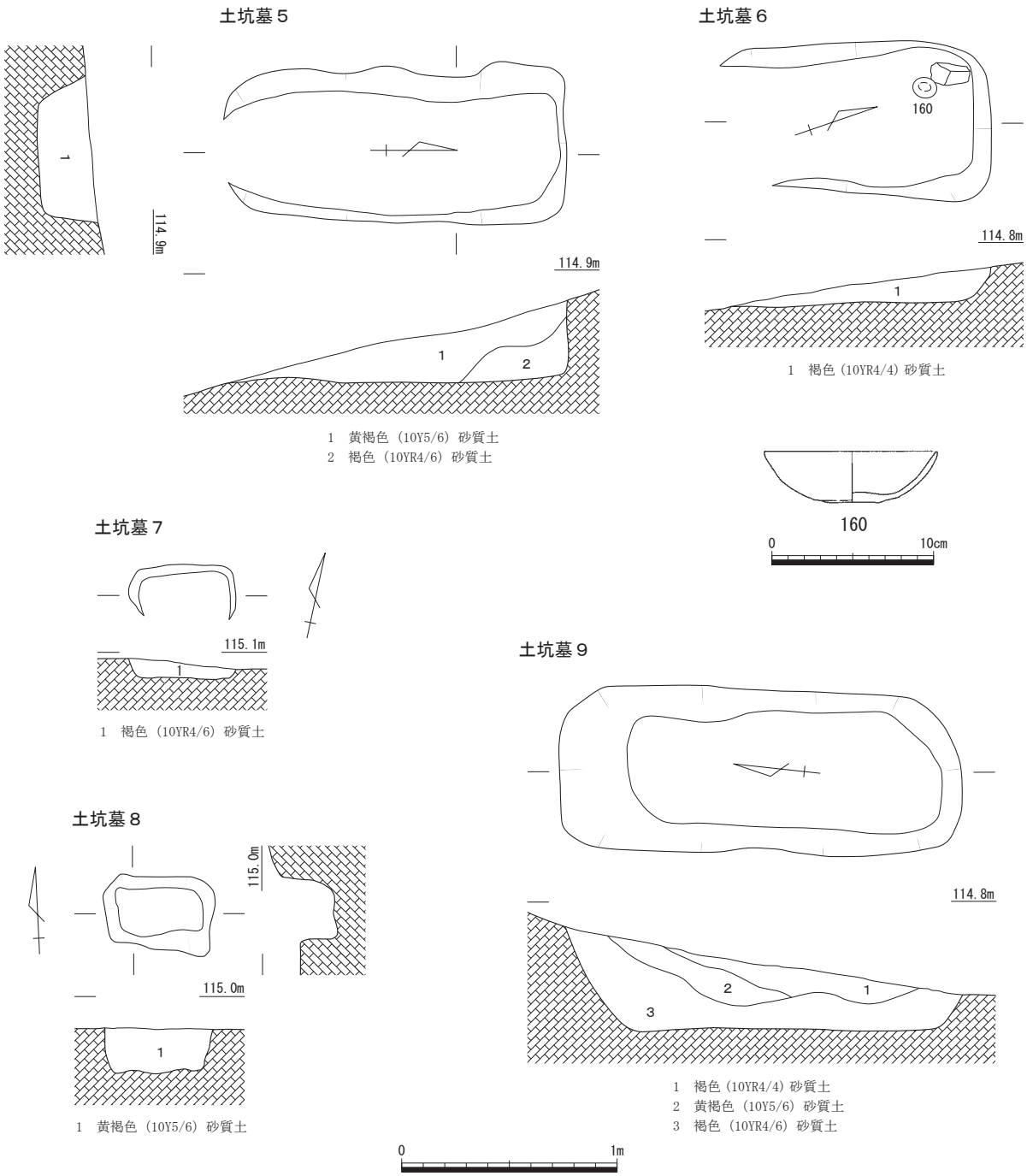
土坑墓５の東隣に検出された。平面形は隅丸長方形と思われるが、南側を流失している。長軸はほぼ南北方向だが若干振れている。検出面での規模は、長さ不明、最大幅 74cm、残存する深さ 16cm であり、床面は北側がやや高い。墓坑内の北隅から角礫１点と土師質土器椀１点が出土した。土師質土器椀（160）は副葬品と考えられ、底部にごくわずかな痕跡程度の貼付高台をもつ。14 世紀代に位置づけられよう。

土坑墓７（第 82 図、図版 38 －１）

土坑墓群の北端で、土坑墓８と並んで検出された小規模な土坑墓である。長軸を東西に向ける。平面形は隅丸長方形と思われるが、南側を流失している。検出面での規模は、長さ 50cm、幅不明、残存する深さ９cm で、床面はほぼ水平である。

土坑墓８（第 82 図、図版 38 －２）

土坑墓群の北端で、土坑墓７の東に検出された小規模な土坑墓である。長軸を東西に向ける。平面

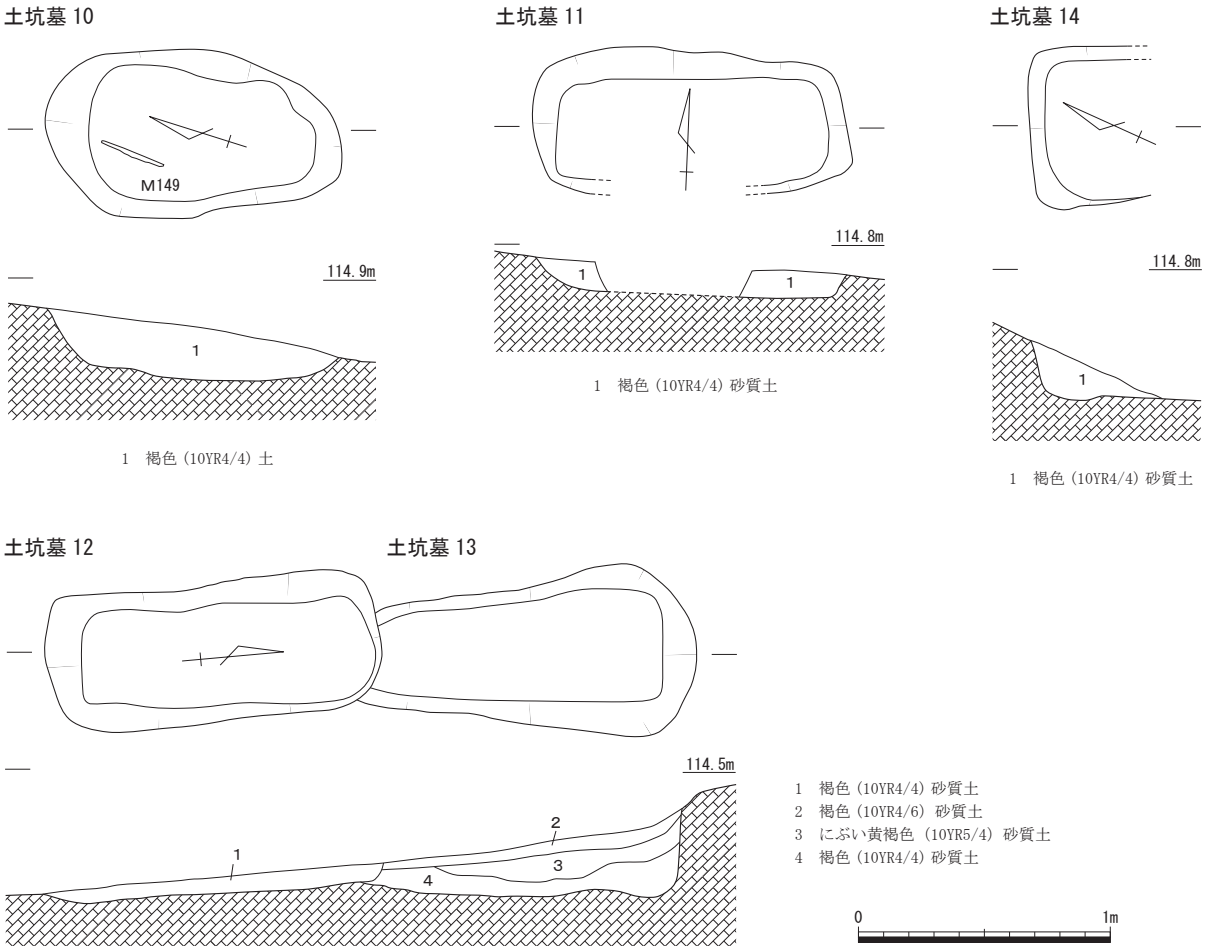


第 82 図　土坑墓５～９（1/30）・土坑墓６出土遺物（1/4）

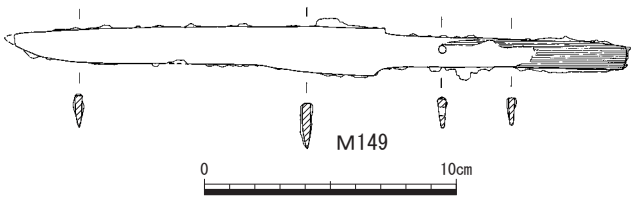
形は隅丸長方形で、検出面での規模は、長さ 50m、最大幅 36cm、残存する深さ 26cm である。平面規模は土坑墓７に類似するが、深く掘り込まれている。地山の岩盤に掘られているためか、やや不整形で床面も凹凸が著しい。

土坑墓９（第 82 図、図版 38 －３）

土坑墓群の中央付近で検出された土坑墓で、深く掘り込まれている。平面形は隅丸長方形で、長軸を南北に向ける。検出面での規模は、長さ 188cm、最大幅 66cm、残存する深さ 48cm で大規模な墓坑だが、壁面が傾斜しているため底面での長さは 135cm である。床面はほぼ水平である。



第 83 図　土坑墓 10 ～ 14（1/30）



第 84 図　土坑墓 10 出土遺物（1/3）

土坑墓 10（第 83・84 図、図版 39 － 1 ・56 － 3）

土坑墓群の中央付近で土坑墓 11 と重複して検出された土坑墓で、土坑墓 11 より新しい。平面形は不整楕円形で、長軸をおおむね南北に向け等高線に直交する。検出面での規模は、長さ 117cm、最大幅 67cm、残存する深さ 21cm で、床面は北側がやや高い。墓坑内北西部から鉄製短刀（**M 149**）１点が出土しており、副葬品と考えられる。茎を北、切先を南に向けて出土した。切先をわずかに欠損するが、全長約 25cm で、茎に１か所の目釘穴が認められる。

土坑墓 11（第 83 図、図版 39 － 2）

土坑墓群の中央付近で土坑墓 10 と重複して検出された土坑墓で、土坑墓 10 より古い。平面形は隅丸長方形で、長軸を東西に向ける。検出面での規模は、長さ 126cm、最大幅 60cm、残存する深さ 10cm で、床面は西側がやや高い。

土坑墓 12（第 83 図、図版 39 － 3）

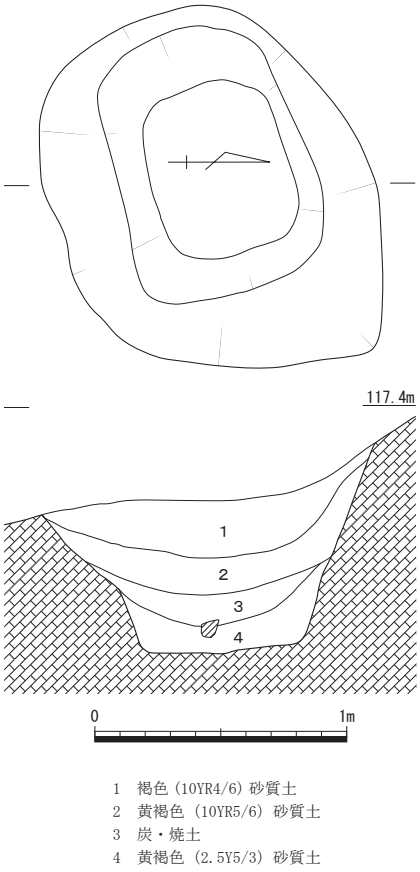
土坑墓群の中央付近で土坑墓 13 と連なりわずかに重複して検出された土坑墓で、土坑墓 13 より新しい。平面形は隅丸長方形で、長軸を南北に向ける。検出面での規模は、長さ 132cm、最大幅 56cm、残存する深さ８cm で、床面は北側がやや高い。

土坑墓 13（第 83 図、図版 40 － 1）

土坑墓群の中央付近で土坑墓 12 と連なりわずかに重複して検出された土坑墓で、土坑墓 12 より古い。平面形は隅丸長方形で、長軸を南北に向ける。検出面での規模は、長さ不明、最大幅 68cm、残存する深さ 35cm で、墓坑の壁は垂直に近く立つ。床面は凹凸があるがほぼ水平である。

土坑墓 14（第 83 図、図版 40 － 2）

土坑墓群の東端で検出された。平面形は隅丸長方形と思われるが、南東側を流失している。長軸を等高線に直交させ、検出面での規模は、長さ不明、最大幅 64cm、残存する深さ 12cm である。（尾上）



1　褐色（10YR4/6）砂質土
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土
3　炭・焼土
4　黄褐色（2.5Y5/3）砂質土

第 85 図　土坑２（1/30）

２　土　坑

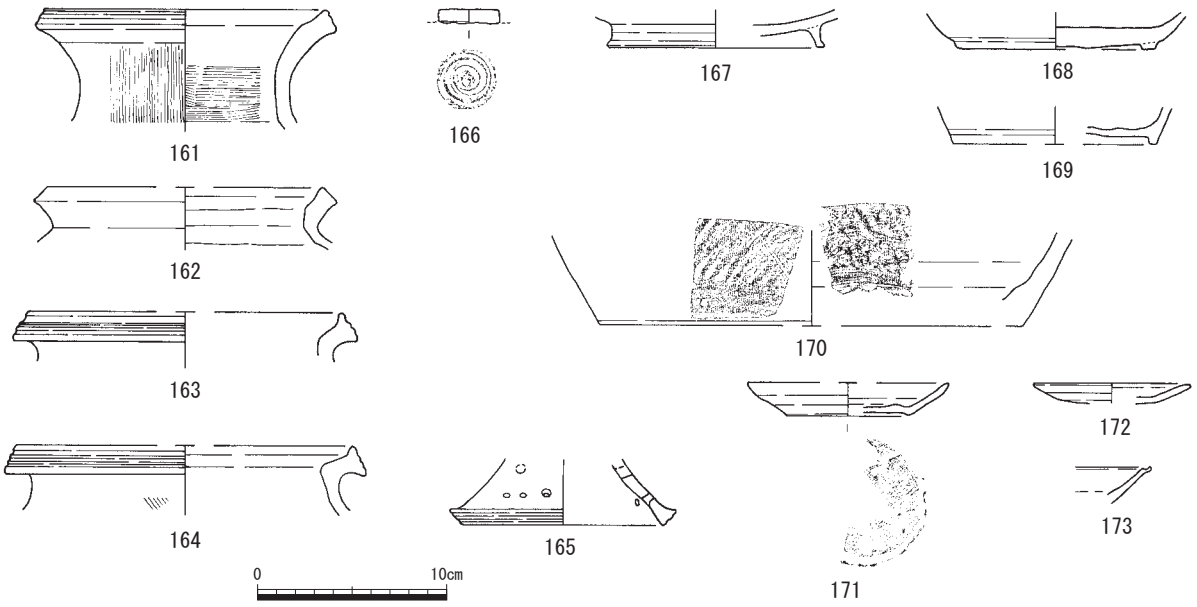
土坑２（第 85 図、図版 40 － 3）

古墳時代の土坑墓群のやや南で検出された。検出面での平面形は不整円形だが、底面では隅丸方形になる。検出面での規模は、長径 148cm、短径 120cm、残存する深さは 80cm である。底部よりやや上には木炭と焼土からなる層が認められた（第３層）。出土遺物はなく、時期･性格ともに不明であるが、埋土の状況から近世以降の土坑と考えられる。（尾上）

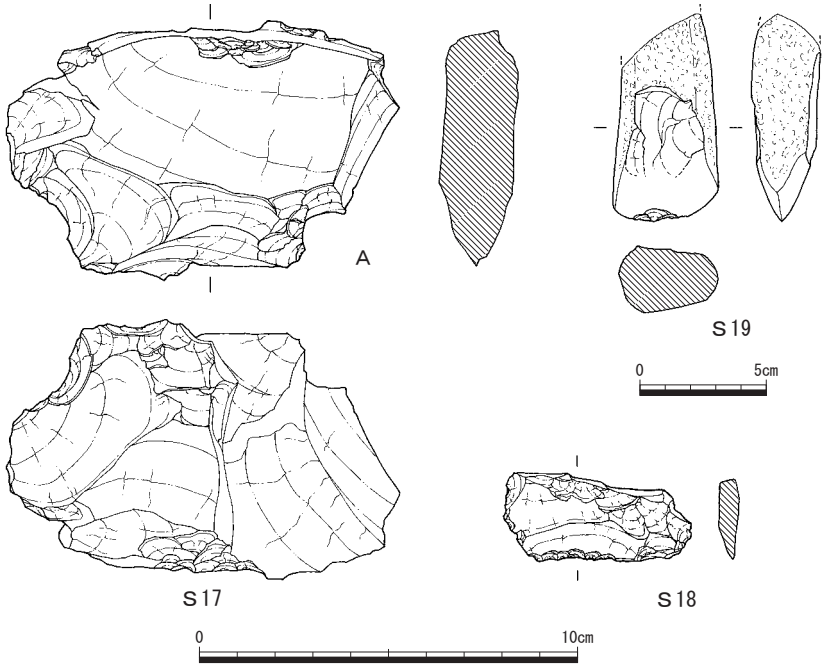
３　遺構に伴わない遺物

桑山南古墳群の調査に伴って出土した、遺構に伴わない古墳時代以外の遺物を示す（第 86・87 図）。

弥生土器は、161 の壺、162 ～ 164 の甕、165 の高杯があり、161 ～ 164 は２号墳周辺、165 は１号墳から出土している。161 は口縁端部と頸部下端に凹線文を施す。163・164 の甕も口縁端部に凹線文を施す。165 の高杯は脚端部に凹線文、その直上に３個１組の円形透かし孔、さらにその上部にも円形透かし孔をもつ。これらの弥生土器はいずれも中期後葉頃に位置づけられる。166 ～ 169 は古代の須恵器であり、３号墳及び５号墳付近で出土している。166 は蓋のつまみで、碁石状の扁平なものである。剥離した面に渦巻き状の型押し文様が施されている。167 ～ 169 は高台付の杯身である。170 ～ 173 は中近世の土器・陶磁器で、いずれも３号墳周辺から出土した。170 は須恵質土器甕の底部に近い破片で、底部は平底になり、胴部内外面に平行タタキ痕が残る。171 は土師質土器の皿で底部は糸切り、口縁外面から内面にかけて煤が付着しており灯明皿と考えられる。172 は備前焼と思われる陶器皿で、外面に重ね焼きの痕跡がある。173 は唐津焼の溝縁皿である。（尾上）



第 86 図　遺構に伴わない遺物①（1/4）



第 87 図　遺構に伴わない遺物②（1/3・1/2）

石器は３点図示した。いずれも流土中から出土しているため、詳細な帰属時期は不明である。しかしながらサヌカイト製石器については、その風化状況から弥生時代のものと思われる。

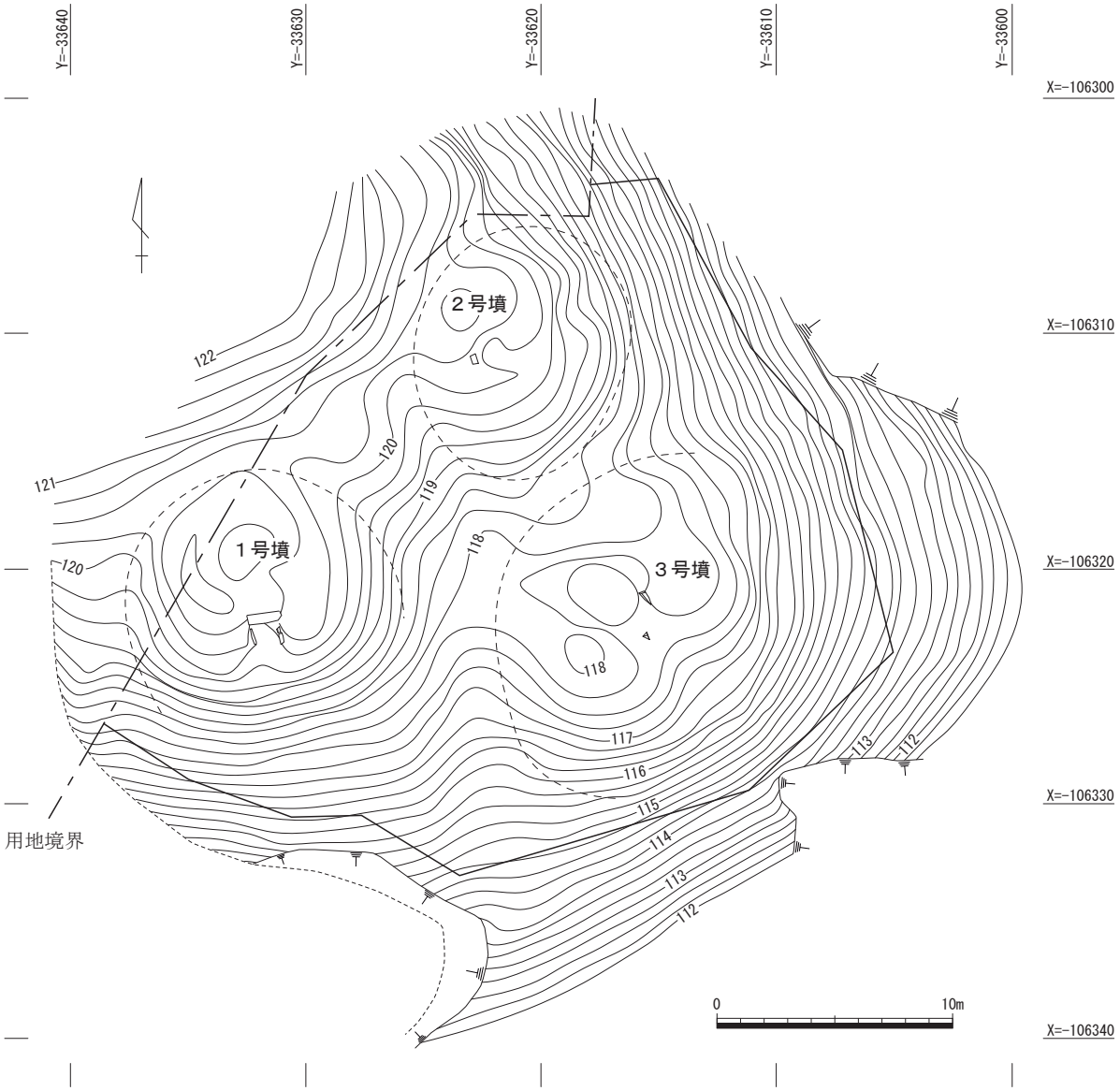
表面（A面）に石核の素材剥離面が残存しているサヌカイト製の石核（S 17）は、原石から板状に分割された大形剥片を素材としている。表面上辺が何らかの理由により折れているが、素材時の大きさは、素材剥離面のリングやフィッシャーの観察から長幅 10cm 以上であったと想定される。剥片剥離は、石核の表裏両面を作業面とし、この作業面を入れ替えつつ石核縁辺から求心状に行っており、その目的剥片は４～５cm 大の横長～不定形剥片と思われる。石核の最終剥片剥離段階の剥離面を観察

すると、打撃した力がスムーズに抜けなくなったようで、剥離された剥片の末端部は階段状剥離を呈していたと推測される。また表面上辺の折れ面を打面、石核表裏両面を作業面として行った剥片剥離では、石理によるものか非常に小さい剥片しか剥離できなかったようである。以上のように、剥片末端部が整った４～５㎝大の目的剥片を得ることが困難となったことから、この石核は廃棄された（以降、残核とする）と思われれる。しかしながらこの残核は、県北地域に限るならば比較的大きくかつ厚みがあるもので、さらにこの残核を２～３分割し、その分割剥片を両極剥離用の石核として用いるならば小形石器の素材剥片を十分獲得可能である。にもかかわらず廃棄されたということは、手元に石核素材が十分確保されていたのか、それとも石核素材や石器（狭義）の入手について何らかの担保があったのか、さらには今後の生活においてサヌカイトを利用する必要がなかったのかなど様々なことを想起させる。板状石核から剥離された横長剥片が素材であるＳ 18 は、剥片端部の調整がスクレイパーエッジとしては薄く細かいものの、対象物を削ぎ取るもしくは掻き取る機能を持っていた石器であろう。基部が欠損した安山岩製の磨製石斧（Ｓ 19）は、刃部のみに研磨が施される。胴部には、整形のための剥離痕や敲打痕が残存している。（小嶋）

第４章　細畝古墳群

第１節　遺跡の概要

細畝古墳群は、桑山南古墳群の南側にあり、狭く深い谷川を挟んで約 50 ｍの距離にある（第７図）。細畝古墳群が立地するのは、尾根の先端頂部、標高約 115 ｍから 120 ｍにかけてで、皿川西岸の現水田面からの比高は約 12 ～ 17 ｍである。非常に狭い尾根で、３基の古墳の墳端付近から急峻な斜面となり、そのまま現水田面あるいは谷川まで下降する。調査前の状況は山林であったが、各古墳の墳丘は比較的明瞭に認めることができた（第 88 図）。

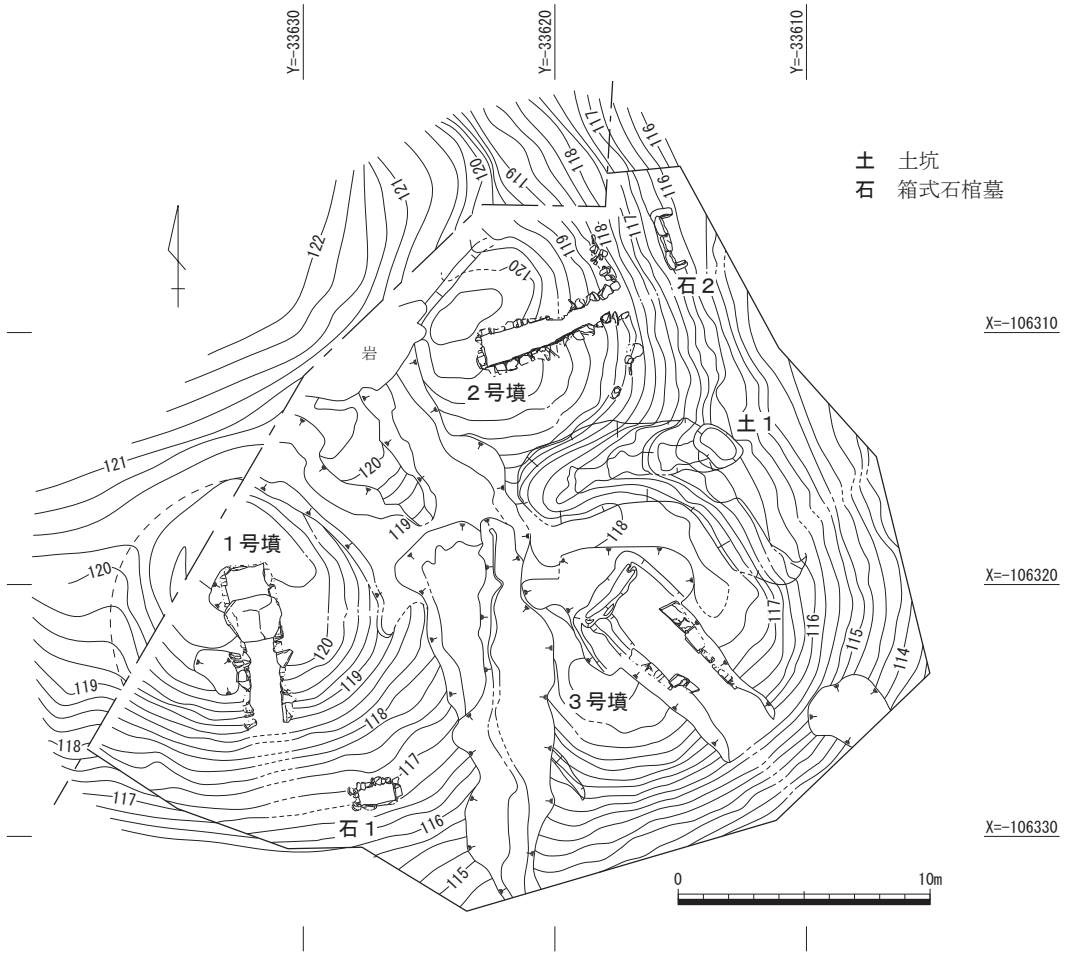


第 88 図　調査前の地形（1/300）

古墳群の構成は、古墳時代後期に属する３基の円墳（１～３号墳）と、１号墳南裾及び２号墳東裾で検出された箱式石棺墓２基（箱式石棺墓１・２）である（第 89 図）。３基の古墳は狭い範囲に密集するように築かれており、２号墳と３号墳は周溝どうしが接し、あるいは共有する部分がある。１号墳は、墳丘北西側が調査対象範囲の外に広がっており、その部分は地形測量以外の調査を行っていないが、地表面からも周溝の痕跡が明瞭に認められる。主体部はいずれも横穴式石室で、古墳どうしが密接するためか、石室の主軸方向は放射状に配され、他の古墳を避けるように開口している。

調査の結果、築造時期は６世紀後半から７世紀前半にかけてで、３号墳、１号墳、２号墳の順に築かれたことが判明した。また、箱式石棺墓は出土遺物に乏しく時期が不明瞭だが、うち１基（箱式石棺墓１）は須恵器から６世紀中葉頃に位置づけられる。さらに、１号墳の墳丘下層などからも６世紀中葉頃の須恵器が出土しており、桑山南古墳群と同様、１号墳築造以前の箱式石棺墓・土坑墓が存在し、１号墳築造時にそれらの一部が破壊された可能性が考えられる。そのほか、時期不明の土坑１基がある（土坑１）。

古墳時代以外の明確な遺構はないが、平安時代に１号墳の石室を再利用した形跡があり、蔵骨器追葬の可能性も考えられる。近世以降にも、１号墳石室の改変がなされているほか、３基の石室石材の採取が大規模に行われたようで、その搬出のためと思われる溝が掘削されている。また、桑山南古墳群に比べ弥生時代の出土遺物は少ない。　（尾上）



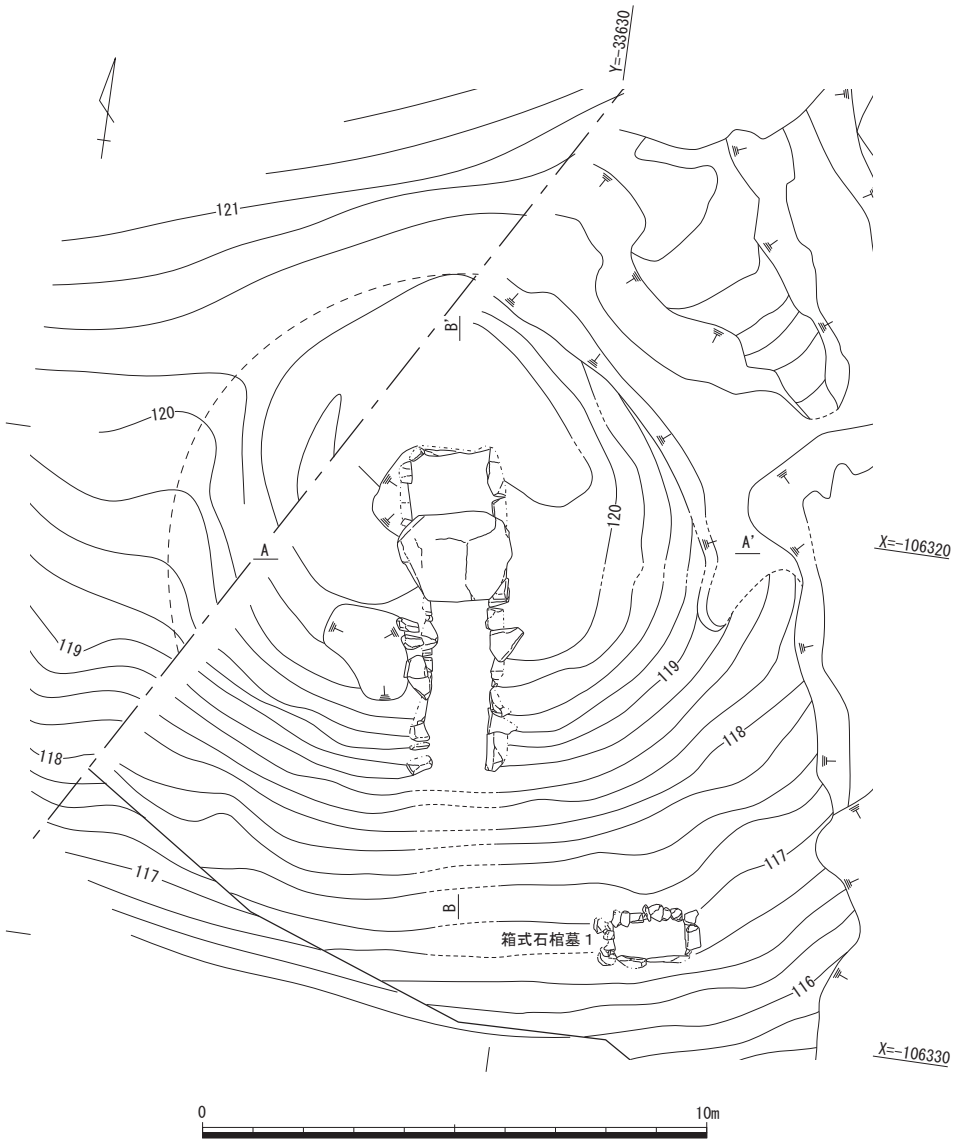
第 89 図　遺構の配置（1/300）

第２節　細畝１号墳

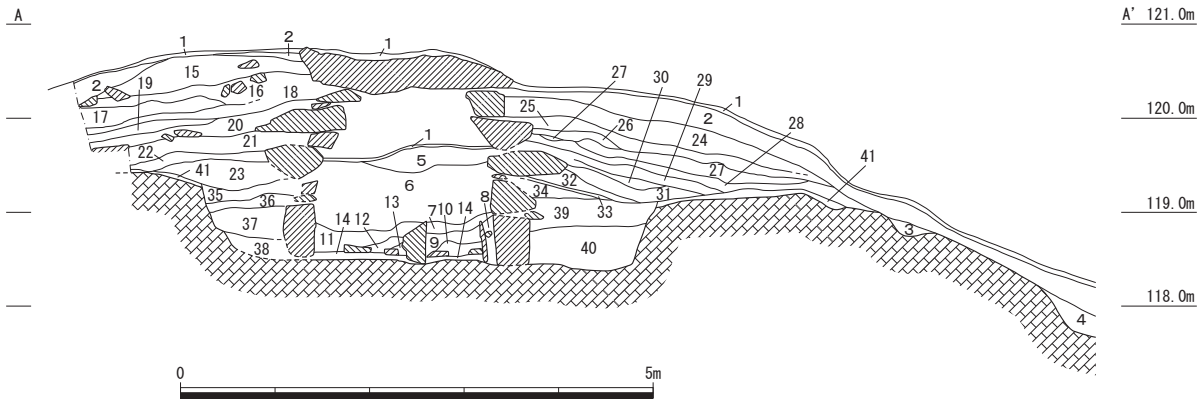
１　墳丘と周溝

１号墳は、密集する３基の古墳のうち西端に位置する。

墳丘は上面を削平され、横穴式石室の天井石１石が地表に露出していたが、墳丘全体の残存状況は比較的よい。墳丘の北東側には、近世以降の採石に関連して掘削されたと考えられる溝が検出され（第７節）、周溝を利用して掘削されたものと考えられるが、周溝は残存していなかった。石室が開口する南側については、後世の攪乱をほとんど受けていないが、比較的急な斜面部にあたるため土砂の流失がみられ、周溝や墳端を明確に捉えることはできなかった。しかしながら、概ね標高 118.5 m付近で傾斜が変換する状況が認められ、このあたりが墳端になるものと推定される。以上のように、い



第 90 図　細畝１号墳墳丘（1/150）



1　表土
2　褐色（10YR4/6）砂質土＜流土＞
3　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜採石関連の溝＞
4　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜採石関連の溝＞
5　褐色（10YR4/6）砂質土
6　黄褐色（10YR5/6）砂質土（目が粗く、しまりが弱い）
7　褐色（10YR4/6）砂質土
8　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（目が細かく、しまりが強い）
9　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土
11　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土（しまりが強い）
12　暗褐色（10YR3/4）砂質土（陶棺片、須恵器片を含む攪乱土）
13　褐色（10YR4/6）砂質土
14　にぶい黄褐色（10YR5/4）細砂
15　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
16　褐色（10YR4/4）砂質土
17　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
18　褐色（10YR4/6）砂質土
19　暗褐色（7.5YR3/4）砂質土
20　黄褐色（10YR5/6）砂質土
21　褐色（7.5YR4/4）砂質土
22　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
23　暗褐色（10YR3/4）砂質土
24　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
25　褐色（10YR4/6）砂質土
26　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
27　褐色（10YR4/4）砂質土
28　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
29　褐色（10YR4/6）砂質土
30　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
31　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
32　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
33　褐色（10YR4/4）砂質土
34　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
35　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
36　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
37　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
38　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
39　褐色（10YR4/6）砂質土
40　黄褐色（10YR5/8）砂質土（真砂土、目が粗くしまりが弱い）
41　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜旧表土＞

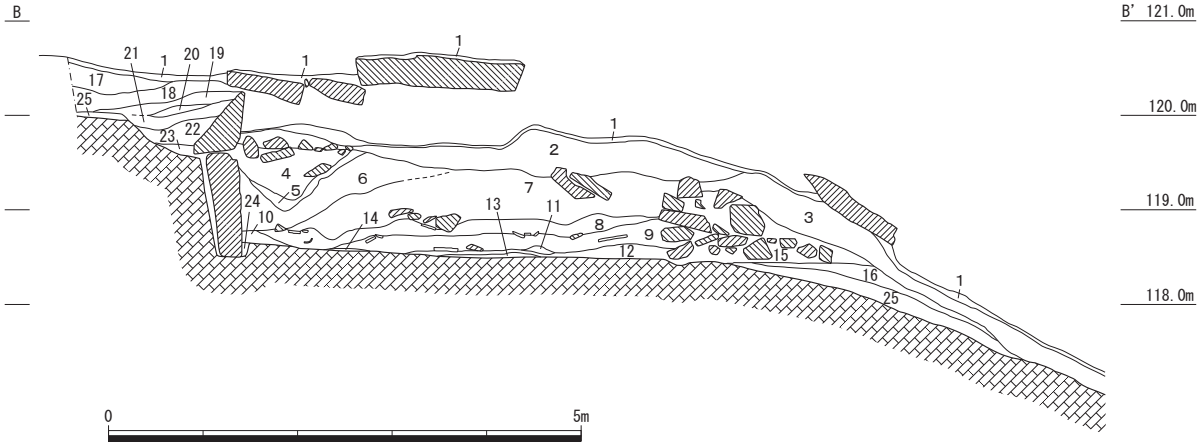
第 91 図　細畝１号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）

ずれの箇所においても周溝や墳端を検出することはできなかったが、調査対象地外（北西側）の状況も考慮し墳丘を復元すれば、径約 10.5 ｍの円墳になる。残存する墳丘の高さは約２ｍである。なお、石室開口部の南東に箱式石棺墓１を検出したが、これは１号墳墳丘外の位置になる。

墳丘の盛土は、横穴式石室の構築と並行して行っている。石室掘り方内をほぼ水平に充填した後、全体に石室から墳端に向かって緩やかに傾斜させながら盛土を行っており、平均して厚さ 10 ～ 20cm

写真 16　細畝１号墳墳丘断面（A-A’ 東半）

写真 17　細畝１号墳石室掘り方（北から）



1　表土
2　褐色（10YR4/6）砂質土
3　褐色（10YR4/4）砂質土
4　褐色（10YR4/6）砂質土
5　黄褐色（10YR5/6）砂質土
6　褐色（7.5YR4/4）砂質土
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土（目が粗く、しまりが弱い）
8　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土（ややしまりが強い）
9　黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫、陶棺片を多く含む）
10　褐色（10YR4/6）と暗褐色（10YR3/4）の混じる粘質土
11　暗褐色（10YR3/3）砂質土
12　黄褐色（10YR5/8）砂質土
13　にぶい黄褐色（10YR5/4）細砂
14　黄褐色（10YR5/4）砂質土（地山に似る）
15　褐色（7.5YR4/4）砂質土
16　褐色（7.5YR4/4）砂質土（ややしまりが強い）
17　褐色（10YR4/6）砂質土
18　褐色（7.5YR4/4）砂質土
19　暗褐色（10YR3/3）砂質土
20　明褐色（7.5YR5/6）砂質土
21　暗褐色（10YR3/4）砂質土
22　褐色（10YR4/6）砂質土
23　暗褐色（10YR3/4）砂質土
24　黄褐色（10YR5/4）砂質土（地山に似る）＜奥壁掘り方内埋土＞
25　褐色（10YR4/6）砂質土＜旧表土＞

第 92 図　細畝１号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）

程度の盛土単位が認められる（第 91 図）。明るい色調の黄褐色土と暗い色調の褐色土を互層状に盛っている状況も観察された。また、桑山南１号墳でみられたような「１次工程」は確認できず、墳丘全体を一度の工程で築成しているようである。

２　横穴式石室

１号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である。調査前、石室内は高さ 40 ～ 50cm の空間を残して大部分が埋没していた。

墳丘盛土に先行して石室構築のための掘り方を穿っているが（第 93 図）、南に向かって地形が傾斜しているため、南側は掘り方が途切れ、逆に盛土を行ってその上に石室を築いている。掘り方の平面形は隅丸長方形で、特に東辺は直線的に延び、北辺と接する角もほぼ直角である。底面も平坦で、全体に整った形状をなしている。また、掘り方の東辺及び西辺は、側壁石積みとの間に比較的広い空間をもつが、北辺は奥壁との間にほとんど空間がなく奥壁をほぼ掘り方に沿わせて立てている。掘り方の深さは奥壁部が最大で約 1.2 ｍである。

石室は無袖式で、やや胴張り状の平面形をなし、奥壁から 1.5 ｍ付近が最大幅となる（第 94 図）。規模は全長 6.5 ｍ、奥壁幅 1.8 ｍ、最大幅 1.9 ｍ、開口部幅 1.1 ｍ、最大高 1.75 ｍで、南方向（N 169° E）に開口する。奥壁の壁面は石室中軸に対して傾斜しているため、右側壁の方が長いが、上記石室全長は中軸部分での計測値である。右側壁の長さは 6.6 ｍ、左側壁の長さは 6.3 ｍである。石室前端は若干流失している可能性も否定できないが、右側壁の前端に大型の石材が置かれていること

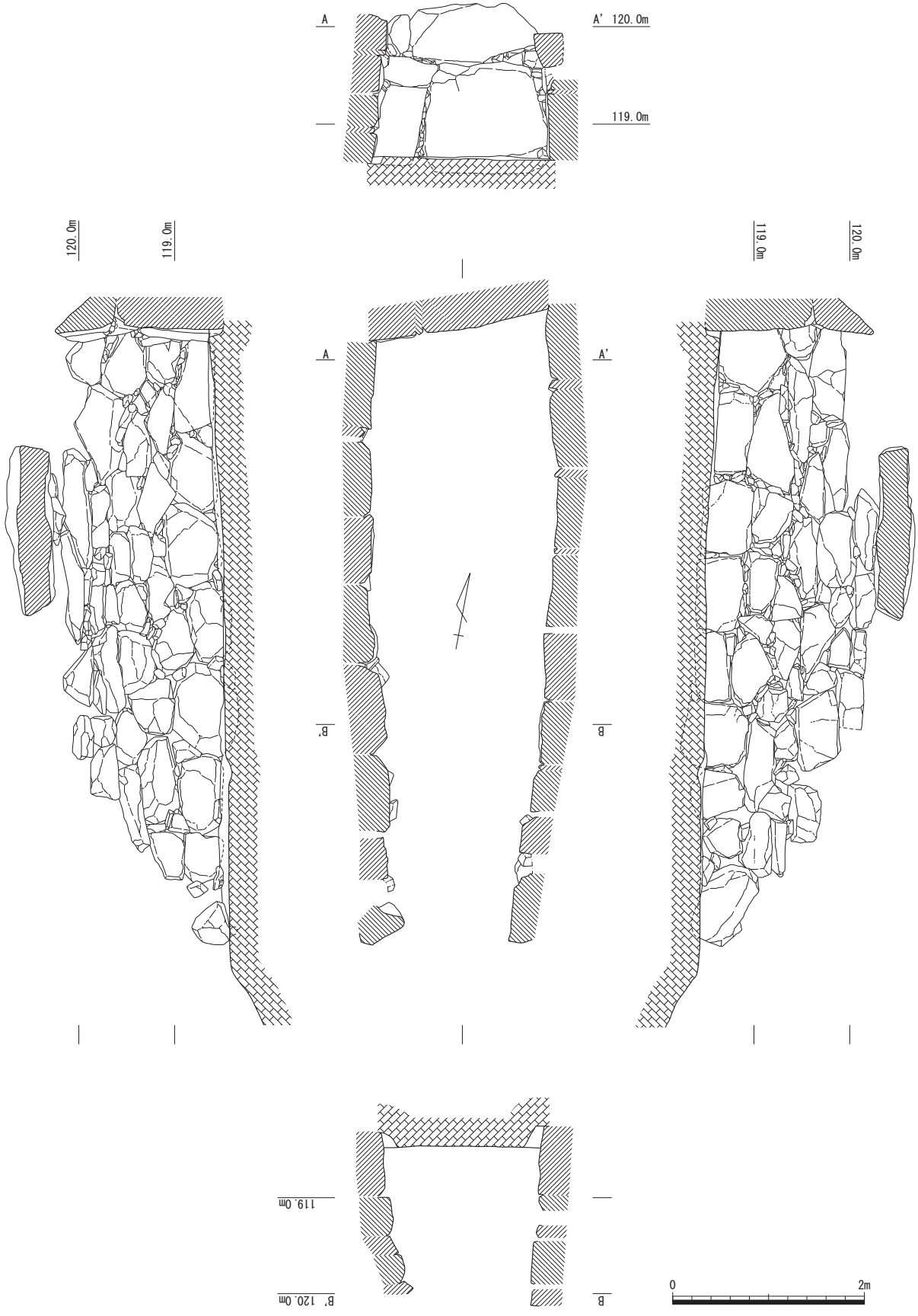
第 93 図　細畝１号墳石室掘り方（1/60）

や、周辺の土層状況等から、石室基底部はほぼ完存している可能性が高い。天井石は１石のみが原位置に残存しており、石室高が判明する。ほかに、石室前端付近の表土上に天井石と思われる大型の転落石が１点認められた（第 92 図）。本来の天井石の数は不明だが、３～４石と推定される。なお、原位置を保つ天井石と奥壁との間に小型の天井石２枚が架けられていたが（第 92 図）、これは後で述べるように、後世の改変である。奥壁は、２段積みでほぼ垂直に立つが、上段の石材をわずかに内傾させている。奥壁下段は左右２列に分かれ、幅の狭い左列はさらに上下２段積みとなっている。上段はほぼ１石で構成され、横長の石材を使用し、左端に小型の石材を詰めている。側壁の断面形は、箇所によって異なるが下半が垂直に近く、上半の傾斜が強い傾向があり、奥壁と同様の断面形といえる。左側壁は、概ね４～５段に石を積み、基底部にやや大きな石材を用いる。上部は比較的小型もしくは横長の石材が多く、横目地が通る。右側壁も同様で、概ね４～５段に石を積み基底部にやや大きな石材を用いるが、左側壁よりも基底石が長方形に近く、上部の石材も整然と並ぶ印象で、横目地がよく通る傾向が強い。

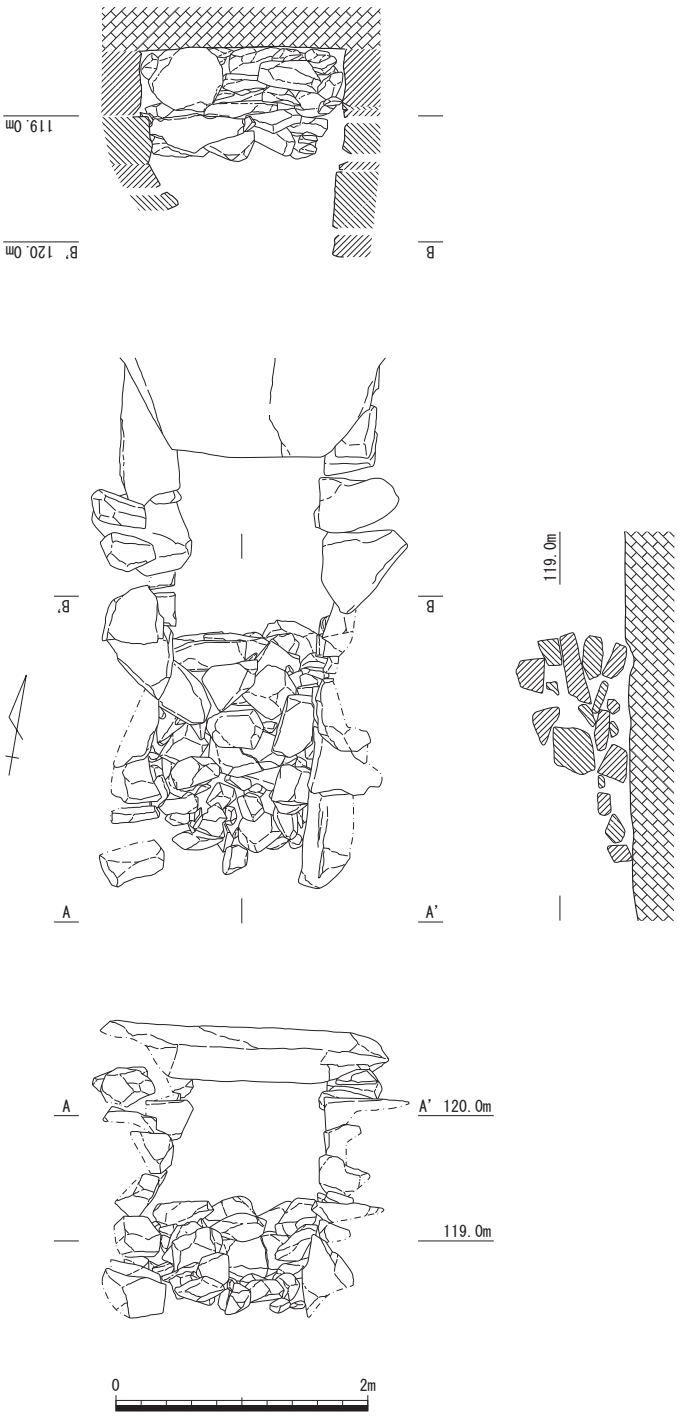
閉塞（第 95 図）は、石室前端から内側約２ｍの範囲に、70cm 大以下の塊石を積み上げた施設が確認された。奥行き約 1.8 ｍ、高さ約 90cm が残存している。石室中軸での断面形は直角三角形状で、北面（石室内側）はほぼ垂直な壁をつくるように丁寧に積み上げているのに対し、南面（外側）は崩

写真 18　細畝１号墳石室右側壁（南西から）

写真 19　細畝１号墳石室閉塞施設（北から）



第 94 図　細畝１号墳石室（1/60）



第 95 図　細畝１号墳石室閉塞施設（1/60）

れている可能性も高いが、緩やかな傾斜で乱雑な石積みとなっている。

３　棺

石室内におさめられた棺として、陶棺と箱式石棺各１基が検出された（第 96 図）。

石室奥に陶棺（**Ｃ１**）の脚部のみ 10 本が床面上に並び立った状態で出土しており、原位置を保っていると判断された。脚の下には、棺台石などは認められなかった。この 10 本の脚は、３行８列の脚をもつ陶棺のほぼ半身分（２本を欠失）と考えられ、これらと石室の壁体及び箱式石棺との位置関係から、陶棺全体の位置が推測できた。図示したように、石室主軸に対して約 45° 斜めに向けた状態に復元される。できるだけ陶棺を石室奥に詰めておさめようとしたが、奥壁に平行させて置くには石室幅が狭く、このような状態になったものと思われる。また、原位置を保っていた 10 本の脚と接合する身部は、横転して箱式石棺の上にのった状態で出土しており（図版 61 － 1）、後世に石室内が大きく攪乱されたことが分かる。身の反対側はほとんど復元できず、蓋もわずかな部分の復元に留まっており、多くの破片が失われているようである。

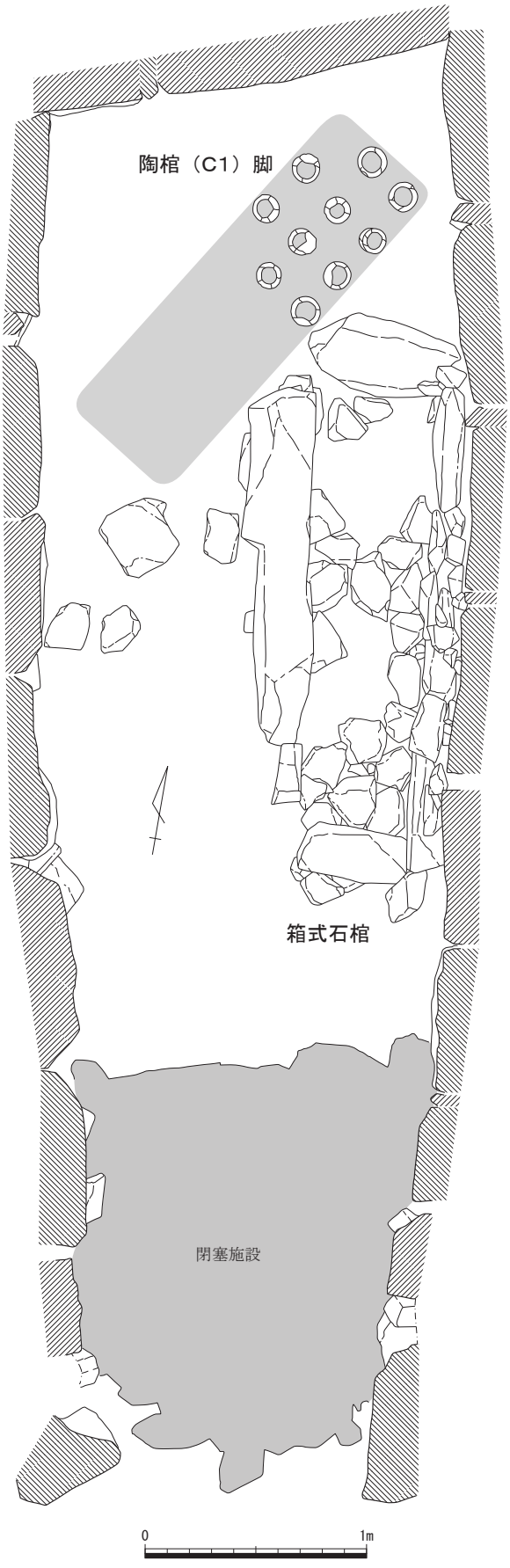
箱式石棺は、陶棺の南側で、石室右側壁に沿わせて設置されている。北西隅部はほぼ陶棺と接する位置にあり、やはり可能な限り石室奥に詰めて配置しようとした形跡が窺える。箱式石棺の規模は、内法で長さ 195cm、最大幅 60cm で、幅は南側が 50cm でやや狭い（第 97 図）。高さは小口板、側板とも 35cm 前後で揃っている。南北の小口は１枚石で、北小口の石は北側にやや倒れかかり側板との間に隙間を生じているが、本来は垂直に近く立っていたと考えられる。側板は東西で様相が異なる。石室側壁に沿わせる東側板は、比較的小型の薄い板石４枚を立て並べており、石室側壁とのわずかな空間に小さな石を詰め込んでいる。それに対し西側板は、長さ 160cm の長い重厚

な石材を北小口に寄せて据え、南小口との間にできた空隙を小型の板石を立てて埋めている。西側板は石室床面に独立して立てねばならず、より安定させるために大型の石材を用いたものと考えられる。石室床面には、これらの小口及び側板石材を据え付けるため若干の穴が掘られているが（第 98 図）、布堀状に全周するものではなく石材の形状に合わせて断続的に掘削している。また、南小口石の裏側底部や西側板の底部には、部分的に礫数点を詰め込んでより安定を図っている状況が確認された。箱式石棺内床面には、厚さ数 cm の置き土をした後、20 ～ 30cm 大の不整形な板石を敷き詰めているが、一部は攪乱により失われている。床面の高さは北側が約４cm 高く、幅も北側の方が広いことから、埋葬頭位は北であったと考えられる。箱式石棺の蓋は残存しておらず不明である。

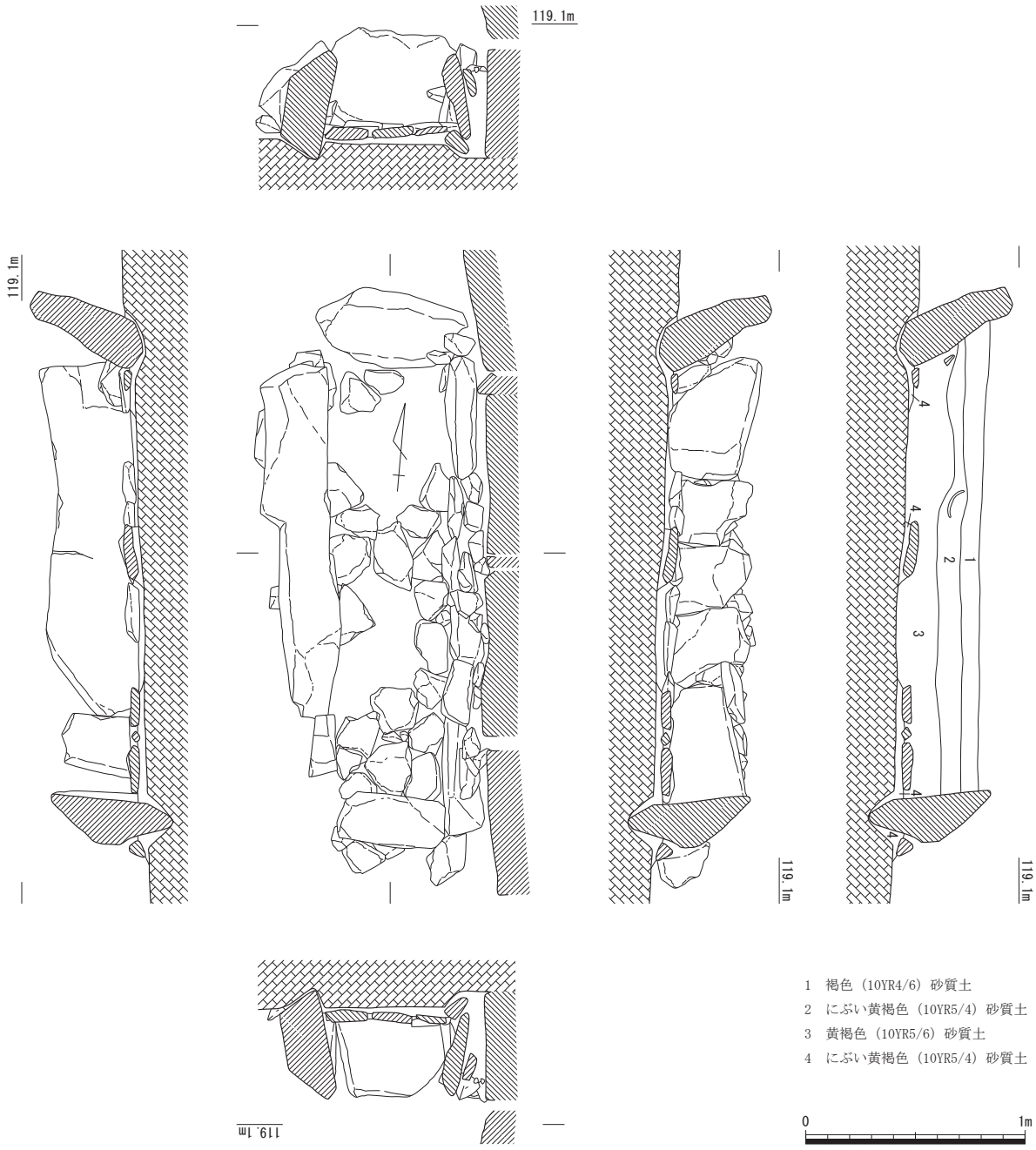
箱式石棺が石室右側壁に寄せられているため、その西側には比較的広い空間が残されている。木棺の存在も想定しながら調査を行ったが、床面近くまで攪乱を受けていたこともあり、木棺痕跡などは確認できなかった。また、箱式石棺の西側に上面が平坦な石材４点が検出されており、木棺などの台石の可能性も考えられたが、南側に対応するものがみられず、性格不明である。石室内からは鉄釘も出土しておらず、陶棺と箱式石棺の２棺のみを想定しておきたい。後述するように石室内から出土した耳環は計３点で、２人分の可能性がある。

４　石室内遺物出土状況

陶棺、箱式石棺ともに底面まで攪乱を受けていたため、棺内の副葬品は必ずしも明らかでない。しかしながら、推定される陶棺原位置の石室床面直上からは多数の玉類が散乱して出土しており（第99・100図）、陶棺被葬者に着装されていたものが落下している可能性が高い。箱式石棺内の出土遺物も攪乱土中のものが多



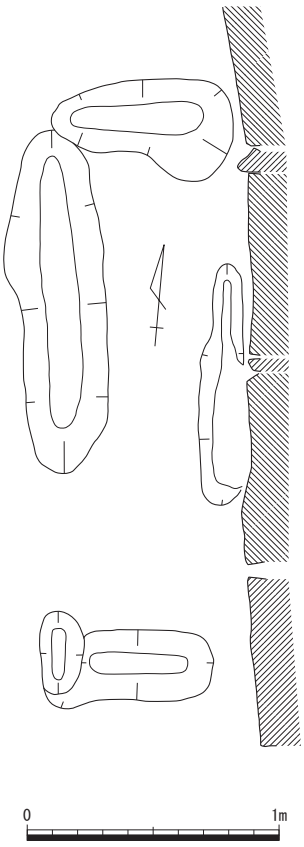
第 96 図　細畝１号墳石室内棺配置状況（1/30）



第 97 図　細畝１号墳石室内箱式石棺（1/30）

いが、土師器杯（34）１点は石棺床面に近いレベルでの出土であり、棺内副葬品の可能性もある。また、箱式石棺内から刀子の破片２点（M18・M19）が出土しているが、攪乱のため棺内副葬品かどうかは分からない。耳環は、石室内から計３点が出土しており、そのうち２点（M24・M25）が陶棺付近からの出土、１点（M23）が箱式石棺内からの出土である。出土状況からすればM24・M25が陶棺に、M23が箱式石棺に伴うとも考えられるが、耳環の形態や材質の特徴をみると、むしろM23・M24が対になると思われる。石室内が攪乱を受けているため、耳環と棺との対応関係は明らかでない。

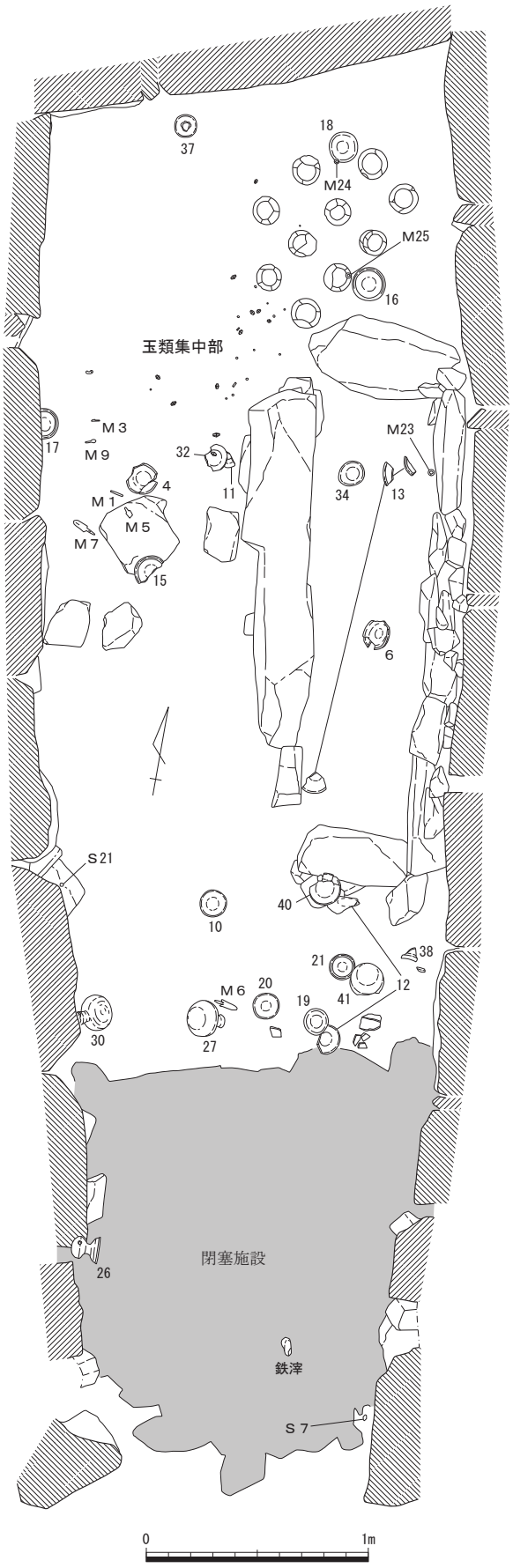
棺外の遺物は、石室床面付近を中心に、約 40 個体の土器のほか、鉄鏃などの鉄器が出土した（第



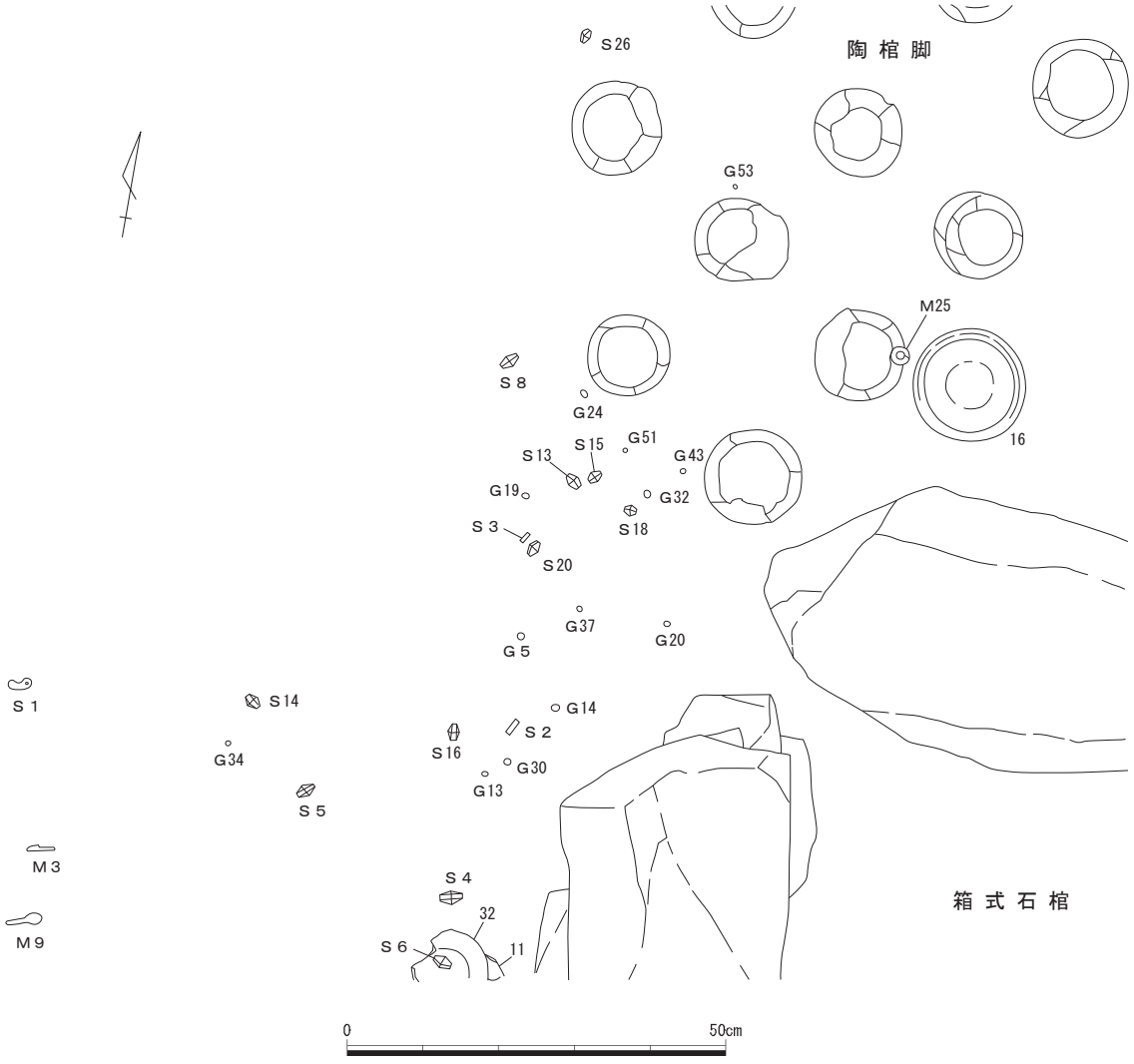
第 98 図　　細畝１号墳石室内箱式石棺
石材据え付け穴（1/30）

99 図）。箱式石棺の西側に一定程度集中する箇所があり、須恵器蓋杯（**４・11・15・17**）、土師器杯（**32**）、鉄鏃（**Ｍ１・Ｍ３・Ｍ５・Ｍ７・Ｍ９**）などがまとまっている。また、閉塞施設の内側部分は攪乱をあまり受けておらず、床面から土器がまとまって出土した。須恵器は蓋杯（**10・12・19 ～ 21**）などがあり、石室内出土土器の中でも最も新しい時期を示している。また、閉塞施設では、須恵器瑞（**26**）、水晶製切子玉（**Ｓ７**）、鉄滓１点が出土している。鉄滓は閉塞施設の上で出土しており、古墳に伴うものかどうか不明である。

そのほか、閉塞施設と箱式石棺の間から古代の土器（**40・41**）が出土しており、後述するように石室の再利用と考えられる。古墳時代の土器に比べて 10 ～ 20cm 高い位置で出土しており、石室内の土砂堆積を示している。　　（尾上）



第 99 図　細畝１号墳石室内遺物出土状況（1/30）



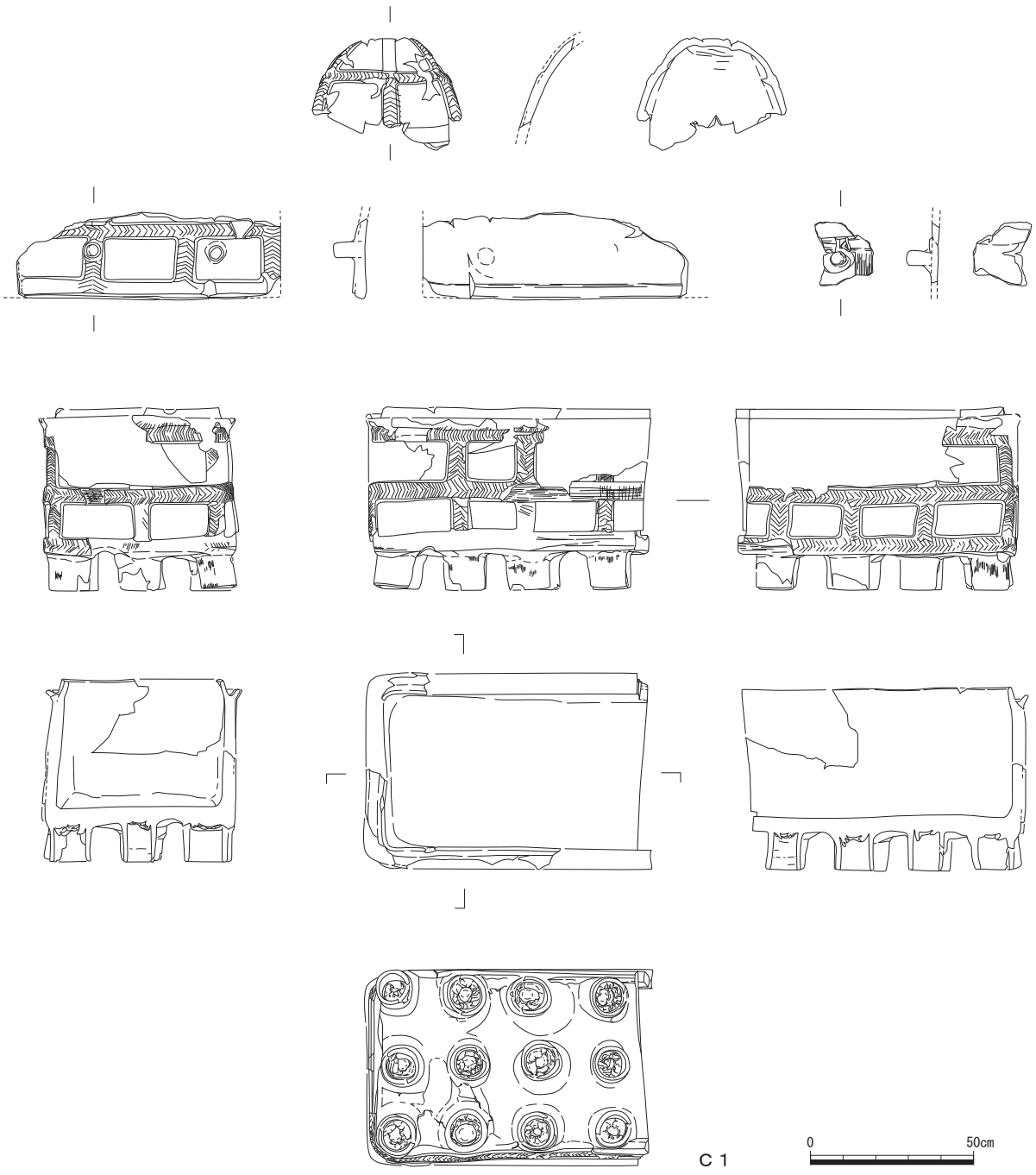
第 100 図　細畝１号墳石室内遺物出土状況＜玉類集中部拡大＞（1/10）

５　石室内出土遺物

陶棺（第 101 図、写真 20、図版 77）

蓋身別造りの土師質亀甲型陶棺（**Ｃ１**）である。損壊が激しいものの、奥壁側と考えられる身と、蓋の一部を復元することができた。平面形は隅丸長方形を呈し、脚は推定３行８列の計 24 本、色調は浅黄橙色を呈する。

蓋は最大の破片で残存長 81.0cm、高さ 27.0cm を測る。側面の一部で、厚さは 2.0 ～ 3.5cm、粘土を積み上げることで成形している。格子状に巡らされた突帯は、幅が縦横ともに 4.5 ～ 6.5cm、高さが 0.7 ～ 1.3cm で、断面は扁平な台形を呈する。突帯の貼り付け順序は基本的に横が先、縦が後であるが、蓋同士の合わせ部の突帯の先後関係は不明である。最下段の横突帯以外の突帯には隙間なく「く」字状の文様が巡らされており、施文順序は蓋同士の合わせ部は縦優位、それ以外は横優位となっている。「く」字の向きは、基本的に横突帯は右方向、縦突帯は上方向であるが、蓋同士の合わせ目の縦突帯には一部下方向の文様が認められる。蓋の側面には円柱状の突起が２つ認められるが、小口側に突起が付けられていた痕跡はなく、元は片側４つずつ、計８個の突起が付けられていたことが想定さ



第 101 図　細畝１号墳陶棺（1/20）

れる。突起は基本的に差し込みによって装着されているが（写真 20 － 1）、貼り付けによって装着されているものもあり（写真 20 － 2 ～ 4）、一様ではない。調整は内外面とも全面に丁寧なナデ調整が施されている。

身は長さ 85.8cm、幅 61.0cm、上端部までの高さ 56.0cm を測る。身の長さを単純に２倍して全長を推定すると約 172cm となり、陶棺としては小型といえる。厚さは側面が 3.0 ～ 3.8cm、底面が 4.5 ～ 5.0cm で、側面に比べて底面が重厚な造りとなっている。身は左右一体で成形した後、中央を切断して分割したと考えられ、側面の切断時には底面の直上でクランクさせている。身上部には断面「⊦」形の蓋

１　差し込み突起内面

２　貼り付け突起

３　貼り付け突起接合面（蓋側）

４　貼り付け突起接合面（突起側）

５　突帯貼り付け部のカキメ（突帯剥落部分）

６　突帯上の文様

７　脚内部

８　脚内部

写真 20　細畝１号墳陶棺細部

受け部があり、側面最上段の粘土帯を薄くして若干内傾ぎみに接合した後、上端から４～５㎝ほど下に接着部幅４～５㎝、高さ４～５㎝程の粘土を貼り付けることで成形していると考えられる。突帯は、蓋と同様格子状に貼り付けられており、幅は5.0～7.3cm、高さ0.8～1.0cmを測る。突帯の貼り付け順序は横が先、縦が後で、最上段の横突帯は蓋受け部の成形後に貼り付けられている。突帯を貼り付ける位置には、あらかじめ不規則に沈線状のカキメを付けていることが観察される（写真20－５）。身の突帯にも「く」字状の文様が隙間なく施されており、施文順序は貼り付け順序と同様に横が先、縦が後である(写真20－６)。「く」字の方向は、横突帯は下２段が同じ方向で、最上段だけ逆方向になっているが、縦突帯は隣同士で互い違いのもの、同じ方向のものが両方あり、規則性がない。棺底面は長さ約77cm、幅約47cmを測る。調整は、内外面ともにナデ調整で仕上げられている。

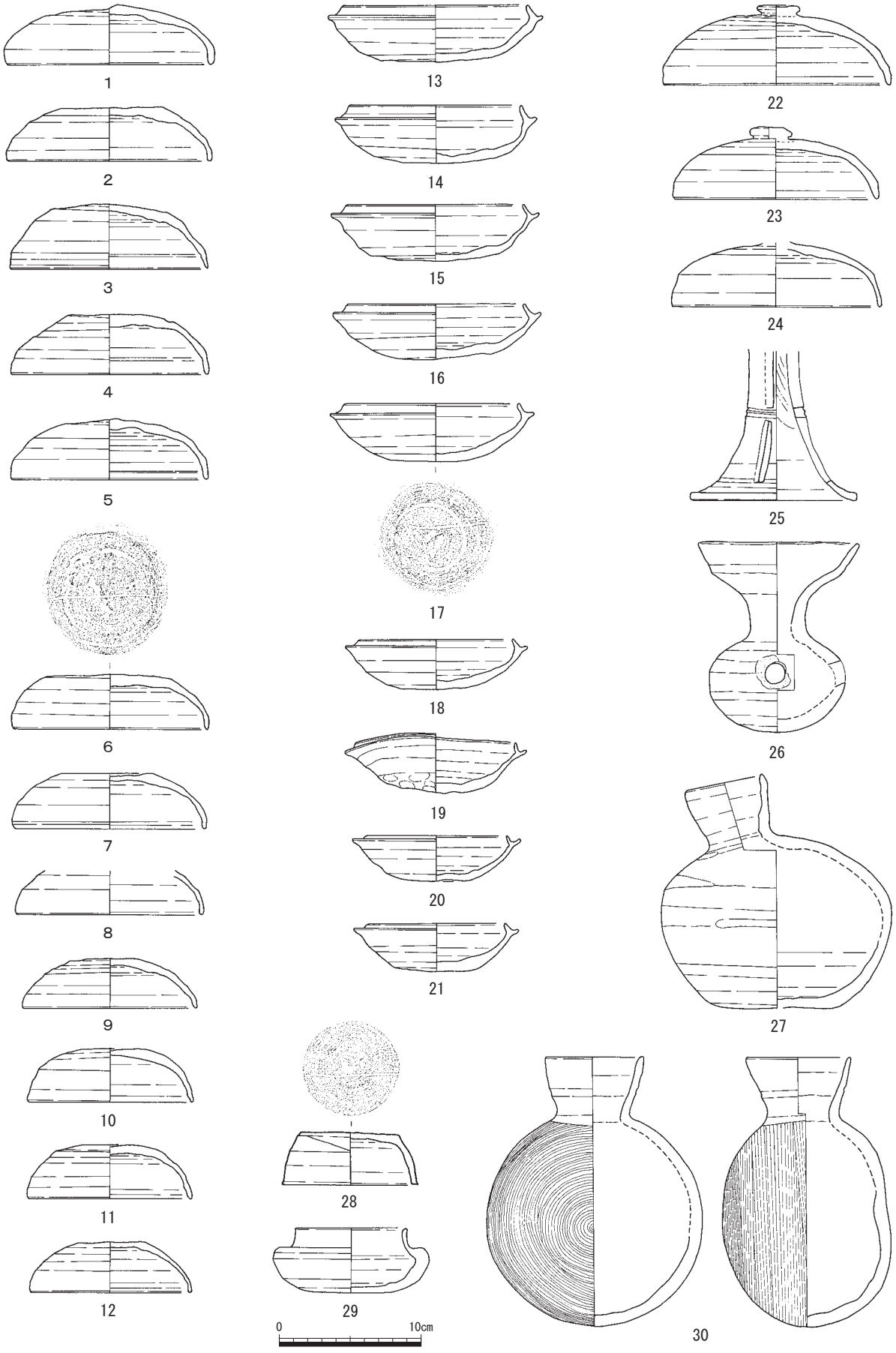
脚は、下端部の直径が10.0～12.0cm、高さが10.5～12.5cmの円柱形で、直径と高さの比率がほぼ同じとなる。厚さは1.0～2.0cmで、粘土紐の巻き上げによって成形し、外面はハケ調整の後にナデ調整、内面と下端面はナデ調整で仕上げている。底部との接合方法について、裏面から脚の内部を観察すると、柔らかい帯状の粘土を内側に折り込み、中央にできた空白に粘土塊を充填したような痕跡が観察できた（写真20－７・８）。脚の内面には底部と接合した後に手を加えたような痕跡は見られず、脚の接合は正立状態で行われた可能性がある。なお、中央に充填された粘土塊には、細かい布目が付くものがある。（藤井翔）

土器（第102・103図、図版78・79）

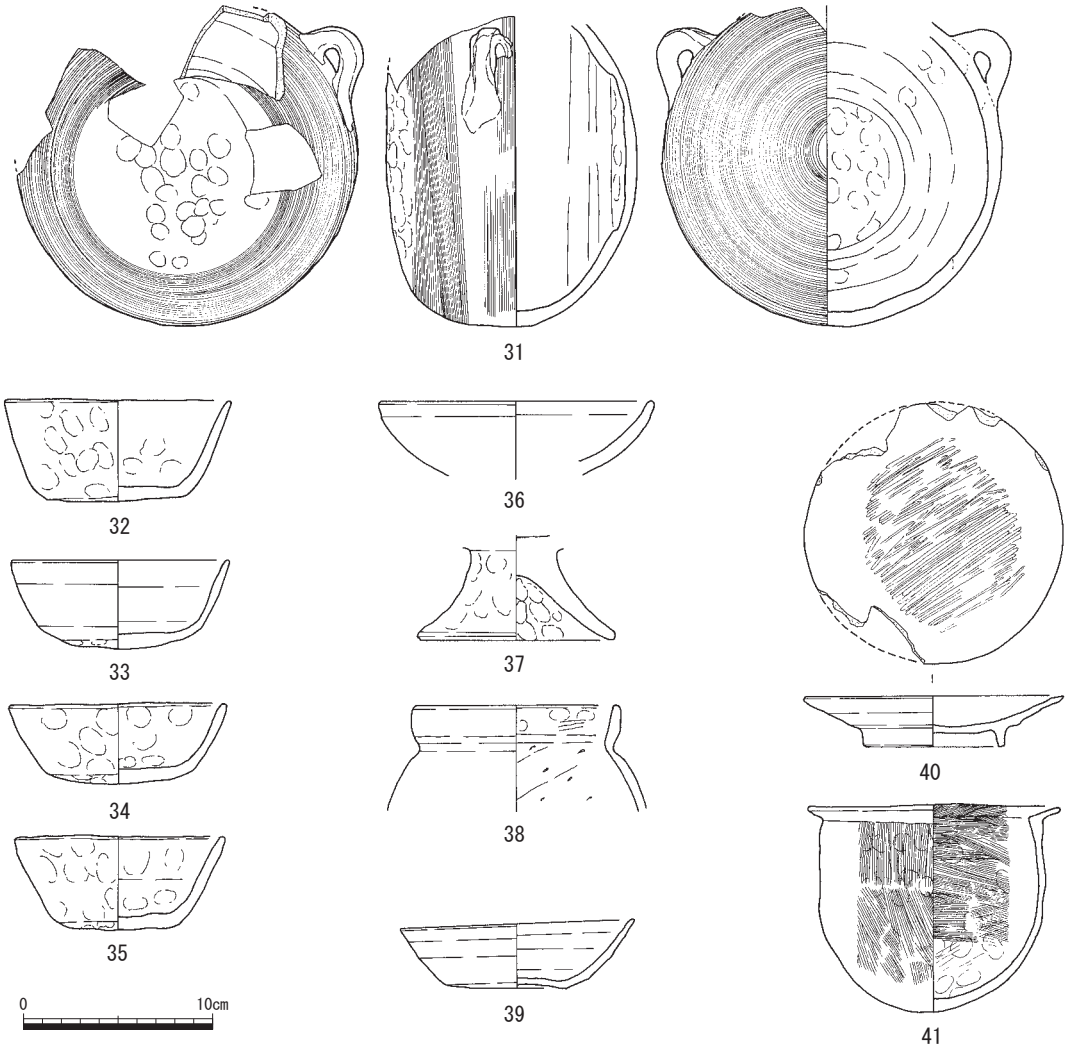
石室内から出土した土器には、図示し得たもので須恵器31個体、土師器10個体があり、土師器のうち３個体は古代における石室再利用に伴うものである。

須恵器の杯蓋(１～12)は、口径11.2～14.4cm、器高3.3～4.6cmの幅がある。天井部は丸く仕上げ、回転ヘラケズリを行うものと省略するものとがある。口縁端部はいずれも丸くおさめるが、５は口縁内面に細い沈線を廻らせている。また、天井部内面に同心円当て具痕を明瞭に残すものはなく、天井部外面に一文字形のヘラ記号をもつもの（６）がある。杯身(13～21)は、口径9.5～12.9cm、器高3.3～4.3cmの幅がある。底部外面には回転ヘラケズリを行うものと省略するものとがあり、底部内面に同心円当て具痕を明瞭に残すものはない。底部外面に一文字形のヘラ記号をもつもの（17）があり、同様のヘラ記号をもつ杯蓋（６）と胎土・焼成・法量が類似するため、組になるものと考えられる。高杯は有蓋高杯の蓋と、脚部破片がある。蓋（22～24）はいずれも天井部が丸く扁平なつまみを付し、口縁端部も丸くおさめる。法量は口径14.2～15.8cmで、杯蓋よりも大きい。脚（25）は長脚高杯で２段３方向の透かしをもつ。26は壺で、穿孔の周縁外面に剥離がみられる。使用痕であろうか。27は平瓶で、高さのある丸い体部をもち、底面には細い植物繊維の圧痕を残す。28は蓋で、平坦な天井部外面に一文字状のヘラ記号を刻む。29は28と組み合う可能性のある短頸壺である。28・29ともに小さな破片の接合復元で攪乱を受けているが、いくらかの破片は石室奥の西半から出土している。提瓶は２点出土している（30・31）。30は肩に把手や突起をもたず、口縁に１条の凹線を廻らせる。31は輪状の把手をもつもので、石室内攪乱層から出土した。図左側面（成形時の底面）にはユビオサエが顕著で、全体に丁寧なつくりである。

古墳時代の土師器は、杯、高杯、甕がある。杯（32～35）は同形態のもの４個体で、32は口縁部に黒斑をもつ。34は箱式石棺内から出土したものである。高杯は杯部（36）と脚部（37）の破片がある。内外面に赤色顔料を塗布しており、37は脚内面にも塗っている。甕（38）は小型品で、外面は風



第 102 図　細畝１号墳石室内出土遺物①（1/4）



第 103 図　細畝１号墳石室内出土遺物②（1/4）

化して不明だが口縁部内面に赤色顔料を塗布している。

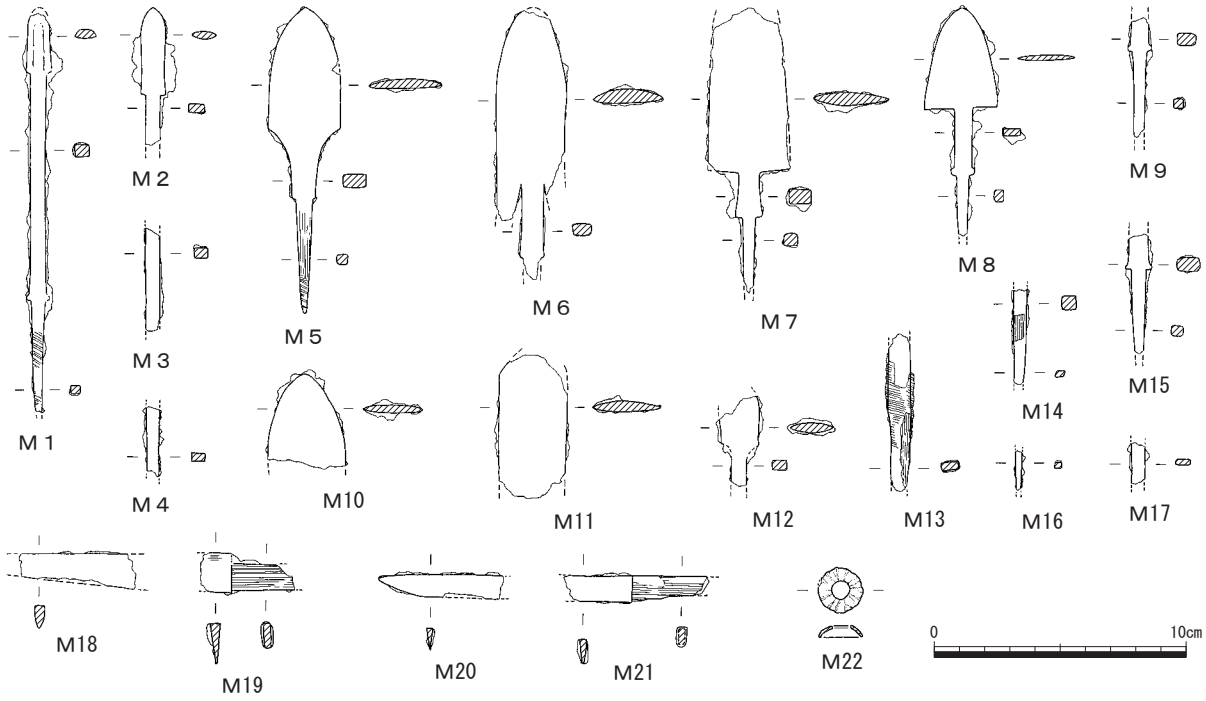
古墳時代以外の土器として、古代の土師器３点がある。39 の杯は石室内攪乱層出土で、小片多数からの復元である。内外面に赤色顔料を塗布している可能性がある。皿（40）と甕（41）は閉塞施設と箱式石棺の間から出土した。40 は内面黒色土器の高台付皿で、内面に一定方向のヘラミガキが認められる。41 は小型の甕で、内外面をハケで調整し、外面には煤が付着する。これら古代の土器は９世紀代に位置づけられる。

武器（第 104 図、図版 80 － 1）

石室内から出土した武器は鉄鏃のみである。鏃身部で計数して９本を数える。型式は、細根・柳葉式（Ｍ１・Ｍ２）、平根・柳葉式（Ｍ５）、平根・腸抉柳葉式（Ｍ６）、平根・三角形式（Ｍ７・Ｍ８）がある。Ｍ 12 は細根・柳葉式の可能性があるが、錆化が著しく鏃身の外形が不明瞭である。Ｍ１の鏃身は切刃造であることが分かる。茎関には棘状突起をもつものがあり（Ｍ１・Ｍ８・Ｍ９・Ｍ 15）、Ｍ７の頸部は茎関に向かって広がる形状をなす。茎には、糸巻きの痕跡（Ｍ１・Ｍ５・Ｍ 13）と矢柄の木質（Ｍ５・Ｍ 13・Ｍ 14）が残るものがある。

工具ほか（第 104 図、図版 80 － 1）

刀子は４点出土している（Ｍ 18 ～Ｍ 21）。Ｍ 18・Ｍ 19 の２点は箱式石棺内からの出土であり、同



第 104 図　細畝１号墳石室内出土遺物③（1/3）

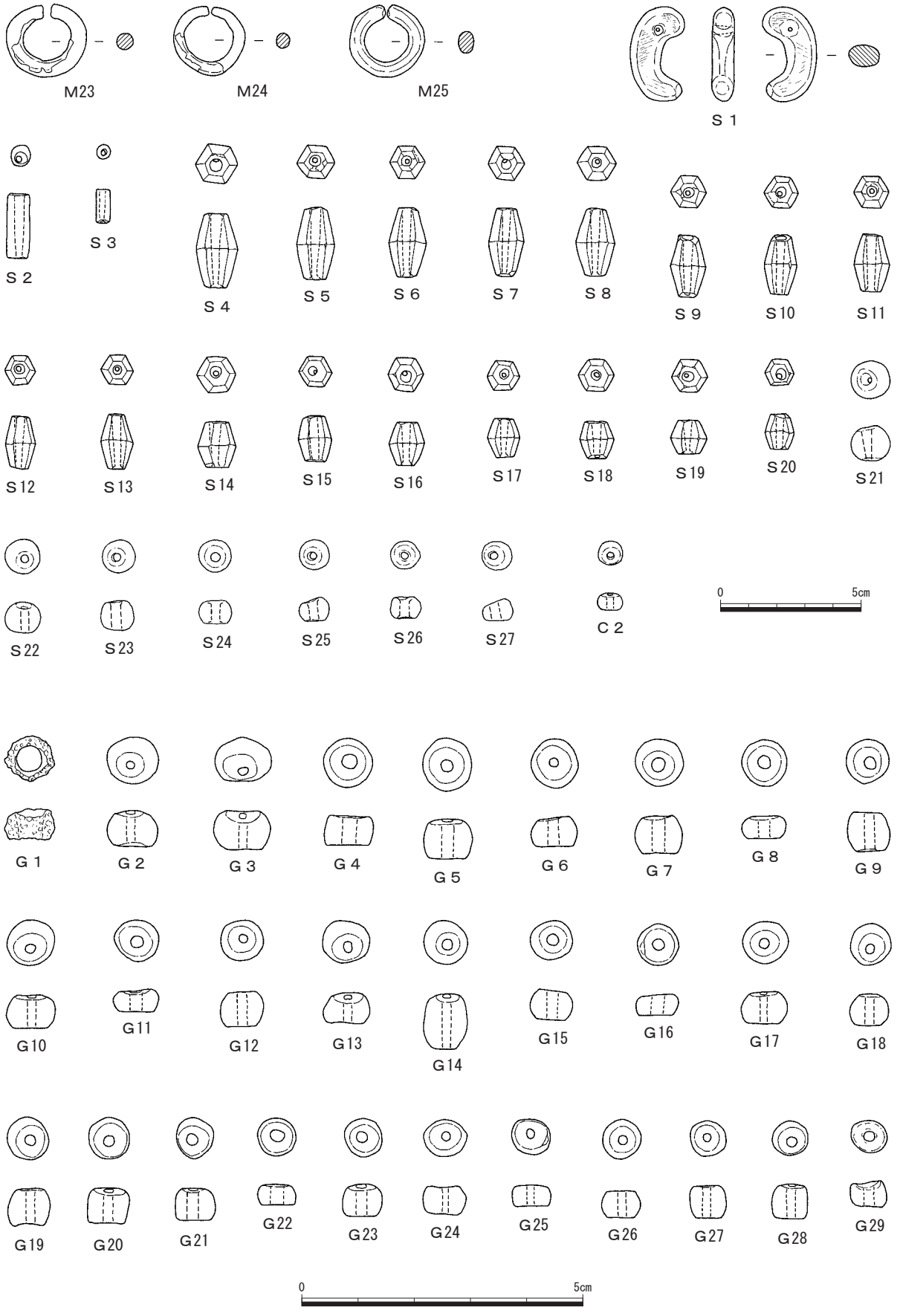
一個体で箱式石棺に伴う可能性もある。一方、M 20・M 21 の２点はいずれも攪乱層だが石室奥の東半から出土しており、陶棺に伴うかもしれない。M 19・M 21 は関の周辺で、柄の木質が残存する。M 19 は刀身の一部にも木質が認められ、M 21 も図裏面の刀身部に木質が付着している。M 18・M 20 は刀身の破片である。

そのほか用途不明の金属製品として、座金状の銅製品（M 22）がある。径 18㎜、高さ５㎜ の笠形で、中央に径７㎜ の孔を開けている。表面には凹凸がつくり出されているが、剥離しており詳細不明である。石室内出土だが、古墳に伴わない後世のものかと思われる。

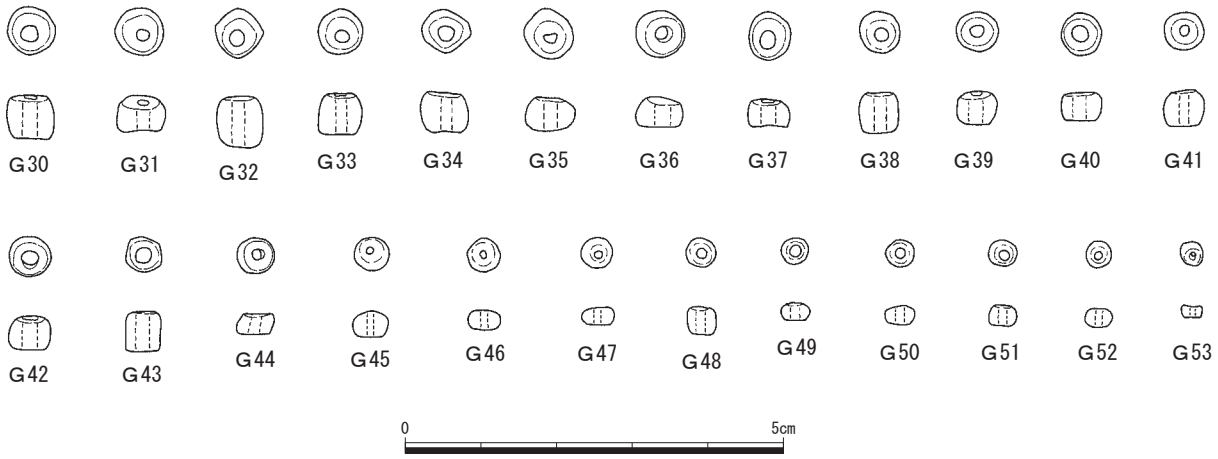
装身具（第 105・106 図、巻頭図版７、図版 80 － １）

装身具は、耳環３点のほか、瑪瑙製勾玉１点、碧玉製管玉２点、水晶製切子玉 17 点、瑪瑙製丸玉１点、蛇紋岩様石材(1)製の丸玉６点、練玉１点、ガラス製丸玉ないし小玉 53 点があり、種類・数ともに豊富である。玉類の総数は 81 点を数え、そのほとんどが陶棺の推定原位置付近から出土しており、陶棺被葬者に伴う可能性が高い。

耳環は、上記のとおりM 23 とM 24 が形態的特徴から対になると推定されるが、いずれも保存状態が悪く、銅製で表面は剥落している。M 25 は対になるものが発見されていないが、銅地金貼りで断面が楕円形を呈する。瑪瑙製勾玉（Ｓ１）は、全長 34㎜、厚さ８㎜ で表裏両面に研磨痕が観察でき、片面穿孔である。碧玉製管玉は、太く長いもの（Ｓ２）と細く短いもの（Ｓ３）の２点で、いずれも片面穿孔である。水晶製切子玉 17 点（Ｓ４～Ｓ 20）もすべて片面穿孔で、長さは 12㎜ から 27㎜ まで変化が大きい。瑪瑙製丸玉（Ｓ 21）は１点のみの出土であり、径 14㎜ のほぼ球形で穿孔部のみ平坦になっている。蛇紋岩様石材の丸玉（Ｓ 22 ～Ｓ 27）は、径 10 ～ 12㎜ でやや扁平な球形をなし、様々な色調のものがある。練玉（Ｃ２）は１点のみの出土で、径約８㎜、高さ約３㎜ である。ガラス製丸玉ないし小玉（Ｇ１～Ｇ 53）は、最大で径約 10㎜、最小で径約３㎜ まで幅があり、中間的な大きさのものもあって丸玉と小玉を明瞭に分けることはできない。高さはＧ 14 が最も高く９㎜、Ｇ 53 が最



第 105 図　細畝１号墳石室内出土遺物④（1/2・1/1）



第 106 図　細畝１号墳石室内出土遺物⑤（1/1）

も低く１㎜を測る。側面形も様々で、球形に近い**G 18** や嚢形に近い**G 14**、ほぼ円筒形で丸みの少ない**G 43** などがある。**G 32** は平面形が四角形に近く角柱状をなす。色調は、ブルー系が大半で濃淡の変化があり、**G 29**・**G 35** の２点のみレモンイエローである。また、**G 1** は鉛ガラスでエメラルドグリーンを呈し、表面は風化して凹凸が激しい。

６　その他の遺物

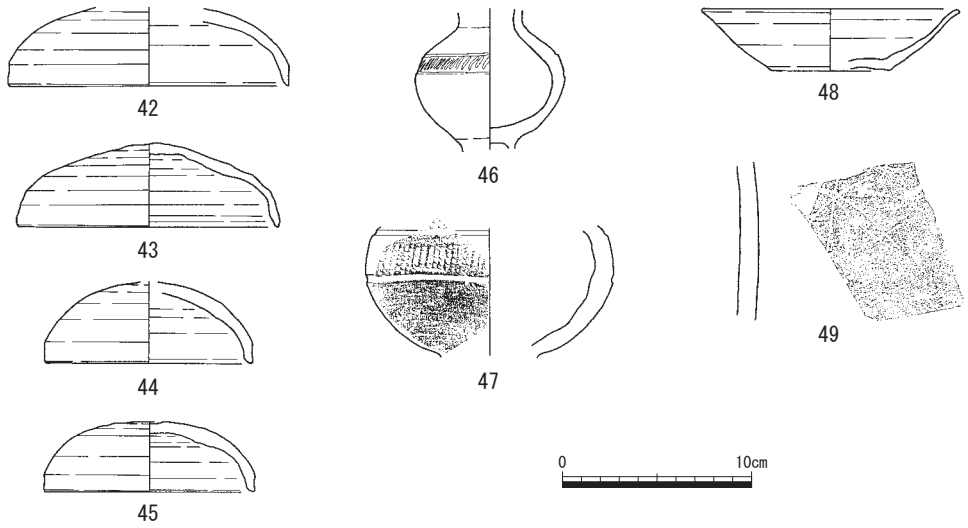
石室外からの出土遺物として、１号墳周辺の流土層から出土した土器類がある（第 107 図）。古墳に伴うとみられる須恵器（**42** ～ **47**）のほかに、古代の土師器杯（**48**）と中世以降の備前焼甕片（**49**）がある。**42** ～ **45** は須恵器杯蓋で、**42** ～ **44** が１号墳石室開口部前面、**45** が閉塞施設外側出土であり、いずれも１号墳石室内の副葬遺物であった可能性がある。口径 10.8 ～ 14.8cm、器高 3.7 ～ 4.5cm で、**42** は石室内出土の杯蓋より大きく、有蓋高杯の蓋であるかもしれない。**46**・**47** は須恵器の台付壺とみられる破片で、**46** は１号墳南東墳裾部、**47** は１号墳墳頂部からの出土である。**46** は小型品で、肩部に刺突文帯をもつ。**47** は櫛状工具による刺突文帯を上下２段に廻らせている。**48** は墳丘上部で出土した土師器杯で、石室内出土の９世紀代の土器（**39** ～ **41**）とほぼ同時期のものであろう。**49** は１号墳と２号墳の間の表土層から出土した備前焼の甕片で、外面に線刻文様がある。

７　石室の再利用

後世において、１号墳の石室を再利用した形跡が確認されている。一つは石室内出土の古代の土器であり、もう一つは近世以降と思われる横穴式石室の改変である。

古代の土器

個々の土器についてはすでに記述したが、１号墳石室内の閉塞施設と箱式石棺の間から、黒色土器皿（**40**）と土師器甕（**41**）が、ほぼ同じレベルで約 45cm 離れて出土している（第 99 図）。皿は上向き、甕は伏せた状態で出土しているが、出土位置が近いことと両者の口径が近似することなどから、皿が甕の蓋として使用された可能性がある。土器の内部に遺存するものはなかったが、火葬蔵骨器の可能性も考えられる。時期は９世紀代と推定され、石室内攪乱土や石室外から出土した土師器杯（第 103 図 **39**・第 107 図 **48**）もこれに関連するものと思われる。横穴式石室内に火葬蔵骨器を追葬する事例は、



第 107 図　細畝１号墳周辺出土遺物（1/4）

津山市内の釜田２号墳、荒神古墳などでも知られており、いずれも人骨片が出土している[(2)]。細畝１号墳では人骨片が認められず、蔵骨器と解釈するには根拠が薄いが、可能性を指摘しておきたい。

石室の改変（第 108 図、図版 64 －２・64 －３）

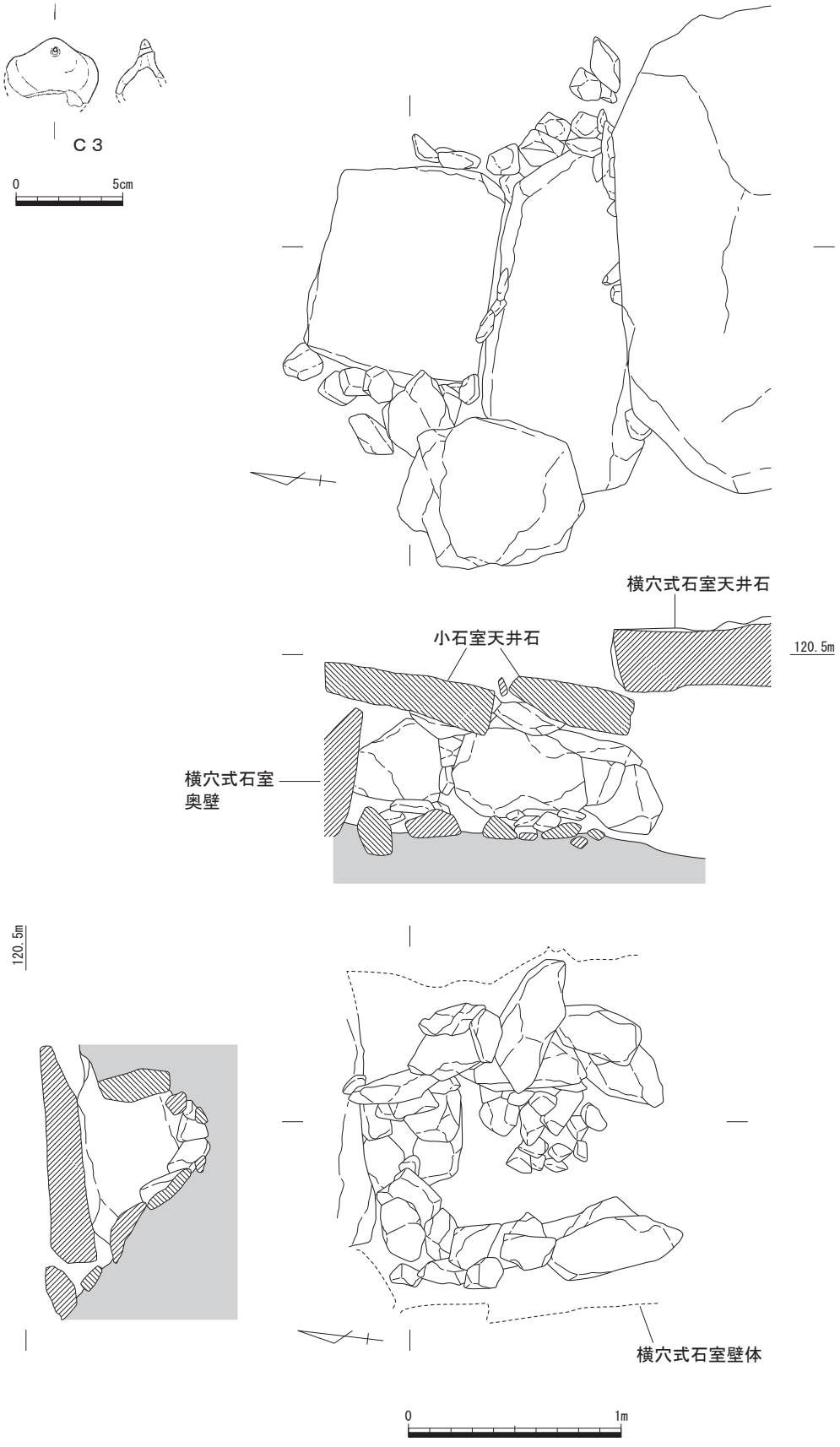
横穴式石室の調査過程で、石室最奥部に小規模な石組み（小石室）が造り付けられている状況が確認された。横穴式石室の奥壁上部をそのまま利用し、側壁の内側に新たに石を積んで壁をつくり、そこに２枚の小さな天井石を架けている。こうして設けられた小石室は、内法幅約 60cm、高さ約 50cm で、長さは南側が途切れているため不明である。床には小礫を敷いている状況が一部で認められ、側壁は 60cm 以下の板石を立て並べていたが、西壁は崩れかかっていた。調査当初は、奥に石槨を造り付ける特異な構造の横穴式石室かと思われたが、小石室の裏側に本来の石室壁体が検出されたこと、石室内が１m近く埋没した上に床や壁面がつくられていることなどから、後世の改変であると判断した。時期や目的は不明だが、石室内の土層状況などから近世以降の改変と推測される。なお、内部から土鈴（**C３**）１点が出土しているが、この小石室に伴うものかどうか明らかでない。　（尾上）

註

（１）主に県北部に分布するこの材質の玉類について、今井堯・近藤義郎は「岡山県真庭郡西部は蛇紋岩の露頭がみられることで著名であるが、郡内の落合・久世両町の群集墳期の古墳から、蛇紋岩製の丸玉・小玉や紡錘車が発見されている。」としてその地域性と在地生産を指摘した。現在でも「蛇紋岩」と呼ばれることが多いが、実際には何種類かの類似する岩石を含んでいるようであり、見た目にも多様である（巻頭図版７）。このたび、細畝１号墳出土の６点中２点（S 24・S 27）の石材鑑定を岡山大学鈴木茂之氏に依頼した結果、次のとおり教示を得た。S 24 は「断層岩」。圧砕花崗岩が破砕したもので、真庭市勝山～津山市北部に産出する。S 27 は「方解石」。砂礫が方解石で充填されたもので、新見市～真庭市西部の石灰岩地帯に産出する。本書では研究史も考慮しこれらを一括して「蛇紋岩様石材」としているが、正確な岩石名は上記鑑定結果のとおりである。なお、当センター米田克彦氏から様々な教示を得た。

今井堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本』第４巻　中国・四国　角川書店　1970

（２）『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査委員会　1980



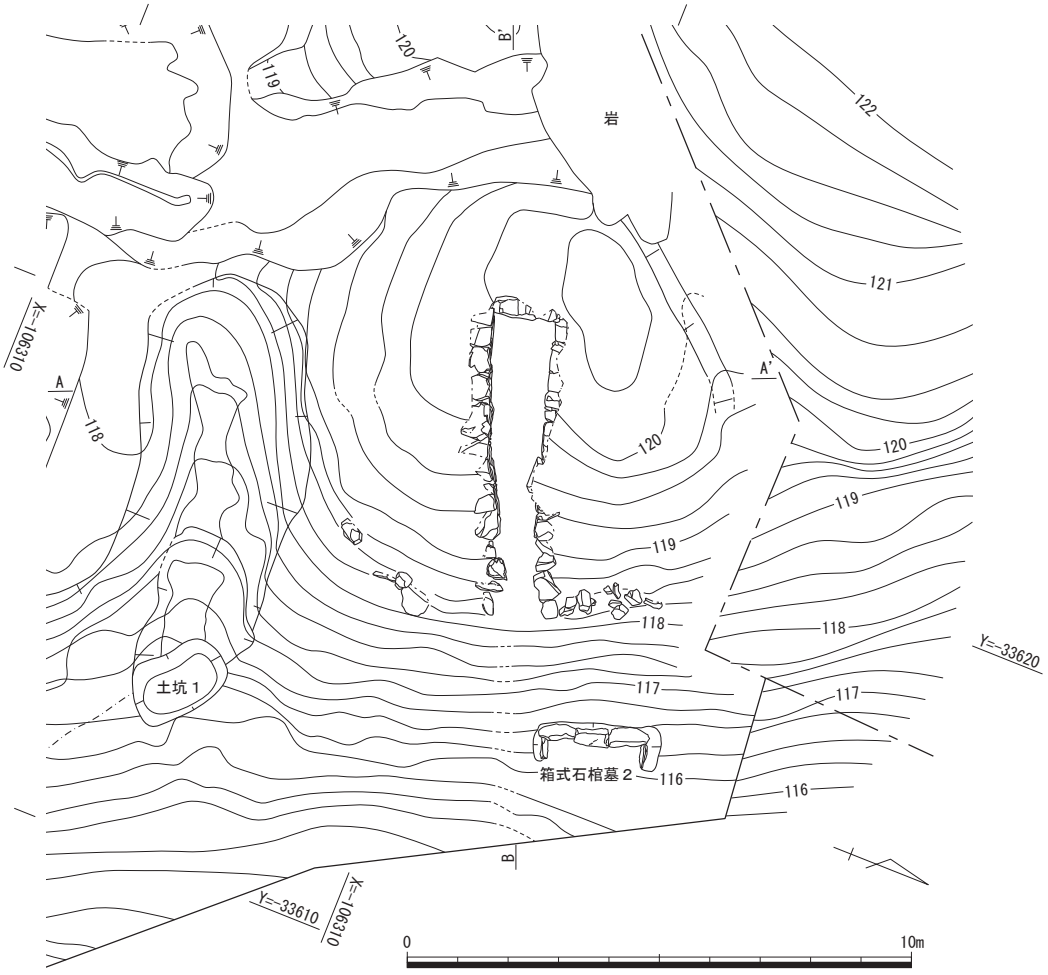
第 108 図　細畝１号墳石室内に設けられた小石室（1/30）・出土遺物（1/3）

第３節　細畝２号墳

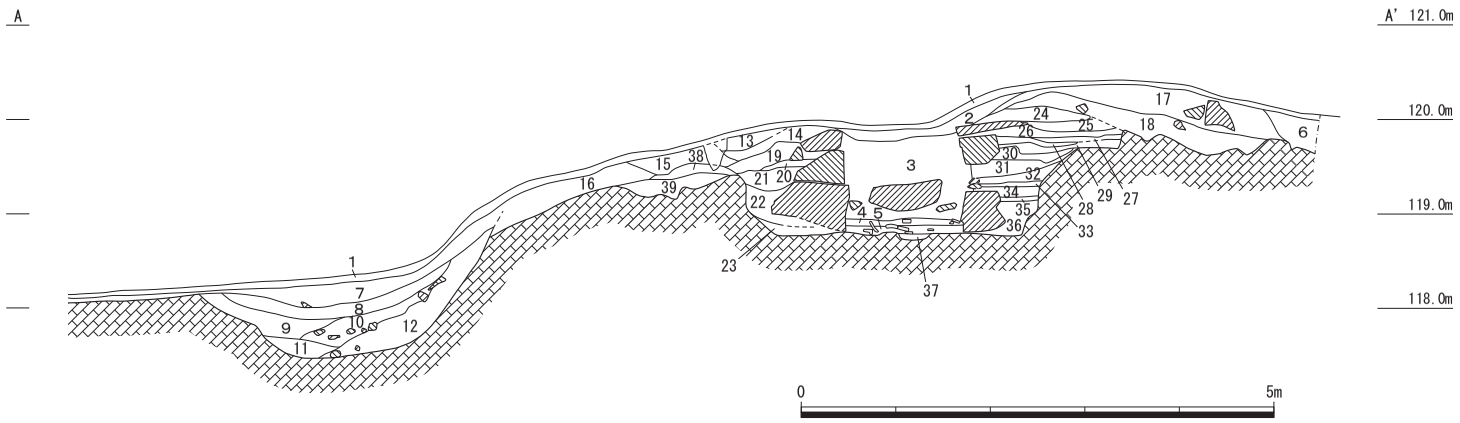
１　墳丘と周溝

２号墳は１号墳の北東に位置する（第 109 図）。墳丘は上端を削平されていた上、天井石はそのほとんどが運び去られており、わずかに一石が石室の北側にずらされた状態で残っていた。また、墳丘の西側は天井石を運び出す際に掘削されたと考えられる溝状の撹乱によって破壊されており、奥壁西側は表土直下すぐに地山が露出するような状態であった。

周溝は、墳丘の北西側で検出した。外側の肩が調査区外になるため幅は不明であるが、深さは約 30cm で、地山の岩盤までは掘削しない、簡素なものだったと考えられる。周溝の埋土からは２個体分の横瓶の破片が出土している。墳丘の南側には、先に築造されたと考えられる３号墳の周溝があり、これを共有することで南側の区画としていた可能性がある。石室開口部がある東側では外護列石を検出した（第 112 図）。しかし、後世の撹乱や、転落などによってその多くは失われたと考えられ、石組はあまり明瞭ではなく、石の並びも不均一である。以上の周溝や外護列石の検出状況から墳丘を復元すると、径約９ｍの円墳となり、残存する墳丘の高さは約２ｍである。墳丘の盛土は、石室の北

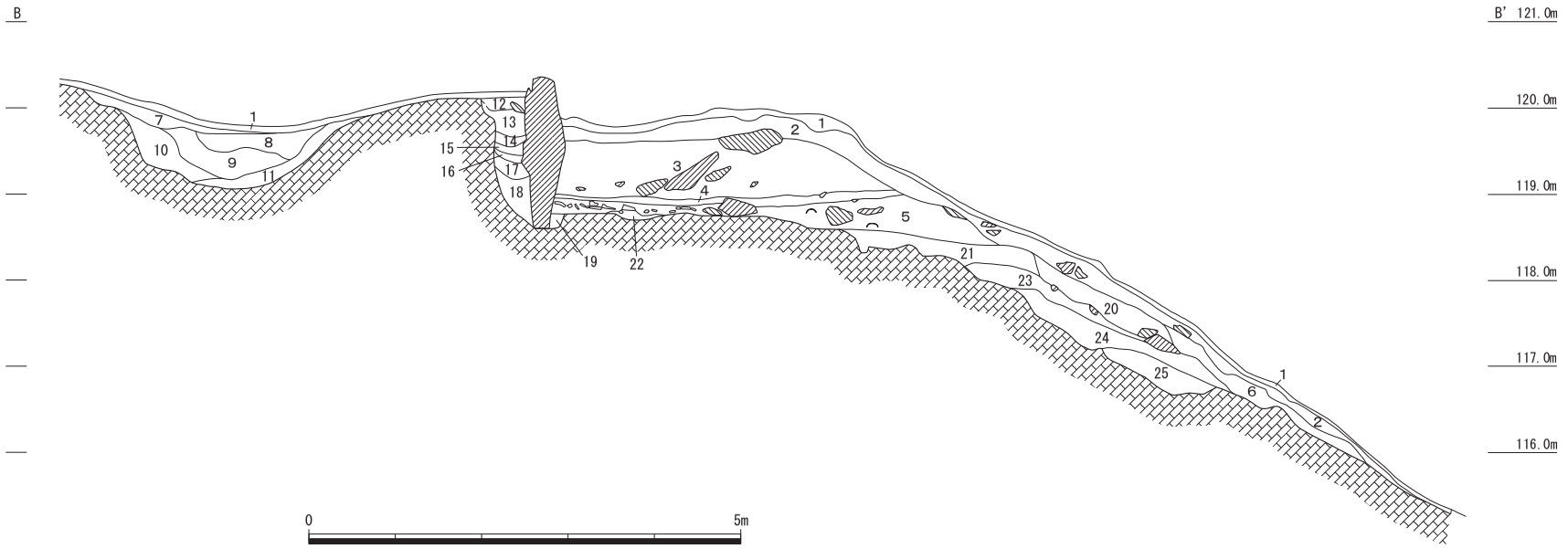


第 109 図　細畝２号墳墳丘（1/150）



1　表土
2　明黄褐色（10YR7/6）砂質土
3　にぶい黄褐色（10YR7/4）砂質土（石室石材を多く含む）
4　褐灰色（10YR5/1）砂質土
5　黄褐色（10YR5/6）砂質土
6　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
7　褐色（10YR4/6）砂質土＜3号墳周溝埋土＞
8　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜3号墳周溝埋土＞
9　黄褐色（10YR4/6）砂質土＜3号墳周溝埋土＞
10　褐色（10YR4/6）砂質土（礫多く含む）＜3号墳周溝埋土＞
11　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜3号墳周溝埋土＞
12　明褐色（7.5YR5/6）砂質土＜3号墳周溝埋土＞
13　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多い）＜以下盛土＞
14　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（小礫多い）
15　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多い）
16　黄褐色（10YR5/6）砂質土
17　黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫含む）
18　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
19　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多い）
20　明黄褐色（10YR6/6）砂質土（小礫多い）
21　黄褐色（10YR5/6）砂質土（19層と同じ）
22　褐色（10YR4/6）砂質土（小礫多い、締まり弱い）
23　黄褐色（10YR5/6）砂質土（締まり弱い）
24　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多い、締まり弱い）
25　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（小礫多い、締まり弱い）
26　黄褐色（10YR5/6）砂質土（24層と同じ）
27　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（25層と同じ）
28　黄褐色（10YR5/6）砂質土（24層と同じ）
29　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（25層と同じ）
30　黄褐色（10YR5/6）砂質土（24層と同じ）
31　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（25層と同じ）
32　黄褐色（10YR5/6）砂質土（24層と同じ）
33　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（25層と同じ）
34　黄褐色（10YR5/6）砂質土（24層と同じ）
35　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（25層と同じ）
36　褐色（10YR4/6）砂質土（締まり非常に弱い）
37　黄褐色（10YR5/6）砂質土
38　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
39　褐色（10YR4/4）砂質土＜旧表土＞

第 110 図　細畝２号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）

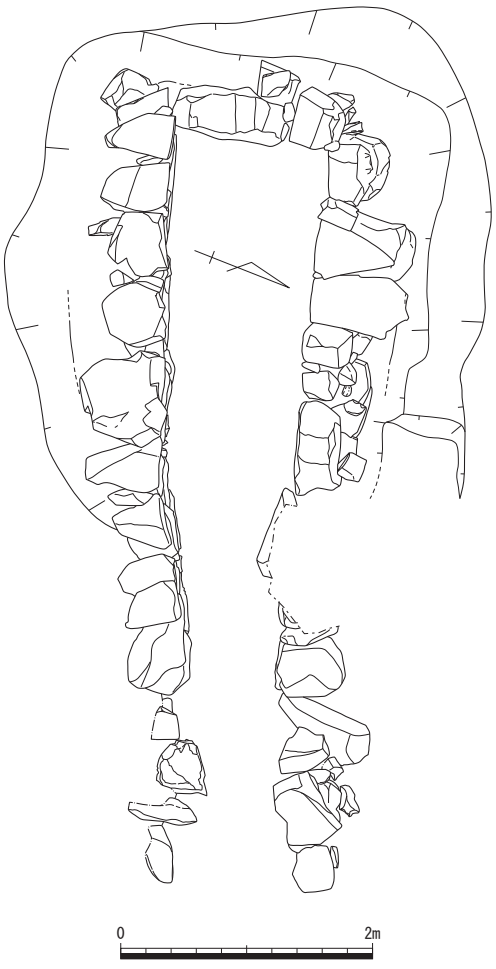


1　表土
2　明黄褐色（10YR7/6）砂質土
3　にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土（石室石材を多く含む）
4　褐灰色（10YR5/1）砂質土
5　黄褐色（10YR5/6）砂質土
6　褐色（10YR4/6）砂質土＜流土＞
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜撹乱＞
8　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜撹乱＞
9　褐色（10YR4/6）砂質土＜撹乱＞
10　褐色（10YR4/4）砂質土＜撹乱＞
11　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜撹乱＞
12　明黄褐色（10YR6/6）砂質土＜以下石室掘り方内埋土＞
13　暗褐色（10YR3/4）砂質土
14　黄褐色（10YR5/6）砂質土（暗褐色土含む）
15　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
16　黄褐色（10YR5/6）砂質土（14層と同じ）
17　明黄褐色（10YR6/6）砂質土（15層と同じ）
18　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多い）
19　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
20　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜以下盛土＞
21　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多い、暗褐色土含む、締まり強い）
22　暗褐色（10YR3/3）砂質土
23　暗褐色（10YR3/4）砂質土
24　褐色（10YR4/4）砂質土
25　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜旧表土＞

第111図　細畝２号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）

第 112 図　細畝２号墳墳丘・外護列石立面〈東面〉(1/60)

側と南側でやや様相が異なる（第 110 図）。石室の北側は横穴式石室の構築と並行して小規模な墳丘を築き、その後石室を覆う土を盛り上げて（第 17・18 層）完成させていると考えられるのに対して、南側は石室側壁を３段目まで構築した後（第 19 層）、石室を覆う土を盛り上げる前に、３号墳の周溝に沿って土手状に土を盛り上げ（第 16 層）、さらにその内側に土を充填する（第 15 層）、という手順をふんでいる。石室の南北でこのような盛土の違いが生じることになった理由は不明であるが、南側については既に掘削されていた３号墳の周溝の肩ぎりぎりから盛土を行おうとした結果、このような工夫が必要になった可能性が考えられる。



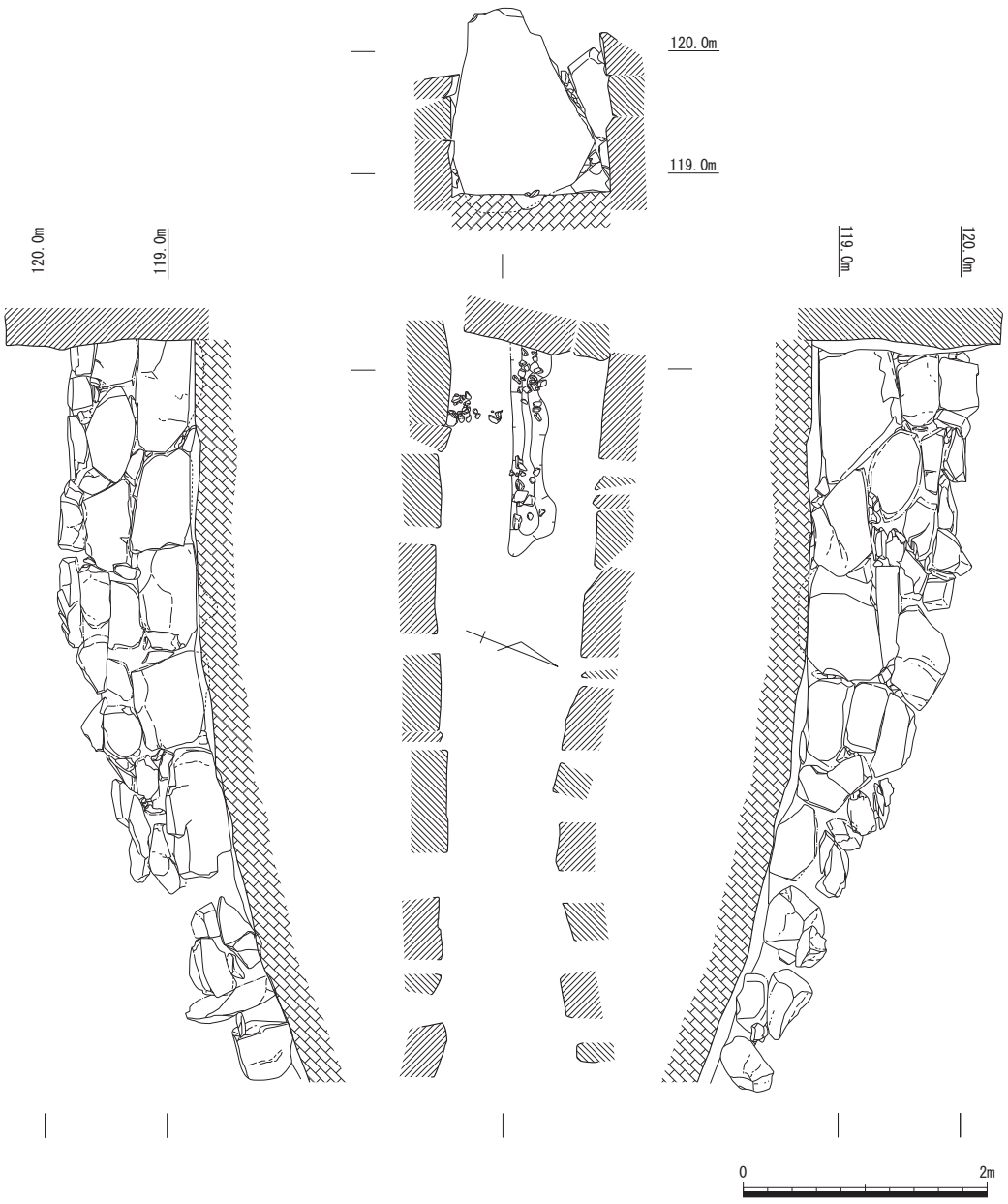
第 113 図　細畝２号墳石室掘り方 (1/60)

２　横穴式石室

２号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である。先述の通り、石室の天井石は持ち去られており、調査前は奥壁の一部が見えているだけで、ほぼ埋没しているような状態であった。

盛土に先行して石室構築のための掘り方を穿っており（第 113 図）、地山の岩盤を掘削した掘り方の深さは最も深い奥壁側で約 1.5 mに達する。しかし、羨道側に向かって地形がゆるやかに傾斜しているため、掘り方は石室中央付近で収束しており、その先は自然の斜面の上に盛土をし、その上に石室を構築している。地山と盛土の境は、石室のほぼ中央、奥壁から約 3.3 mの地点にあたる。

石室は、無袖式である。規模は全長 6.05 m、最大幅 1.25 m、最も幅の狭い場所で 0.86 m、奥壁の高さ 1.55 m、開口部幅 1.12 mで、北東方向（N 68° E）に開口する。奥壁の壁面は石室中軸に対して傾斜しているため、図左側の壁の方が長いが、上記石室全長は



第 114 図　細畝２号墳石室（1/60）

中軸部分での計測値である。奥壁は、不整台形を呈する大型の一枚岩を垂直に立て、隙間に大小の礫を詰めることで構築している。側壁は、左右とも３～４段で構築されるが、図の右側壁に比べて左側壁が 20 ～ 30 ㎝ほど低く、左側壁は最上段が失われている可能性がある。壁は、奥壁から 3.3 ｍの地点まで、すなわち、床が地山の岩盤となる箇所までは使用される石材も大型で、石積みもしっかりしているが、床が盛土の箇所になると、石材は小型化し、壁も低く、不安定となっている。右側壁は石室中央部でやや内側に張り出し、その部分で石室が狭くなっている。片袖式の「袖」を意識した造りにも見えるが、この張り出しの直上には後世の石取りの際に置き去られたと考えられる天井石が乗っており、その影響を受けて石が動いている可能性もある。石室開口部のすぐ北側に外護列石があることから、石室は前端部まで完存していること、この古墳には墓道はなかったことがわかる。なお、閉塞と判断できる礫の集積は確認していない。

３　棺

石室内に納められていたと考えられる棺としては、陶棺と木棺がある。陶棺は後述するように粉々に破砕された状態で出土し（第 115 図）、破片の数も一個体分に満たず、そもそも棺として配置されていたのかも不明な状態であった。石室内からは 19 本の鉄釘が出土しており、陶棺のほかに木棺の存在を推定できるが、その配置を明らかにできるような状態ではなかった。

４　石室内遺物出土状況

石室内からは、陶棺や須恵器、武器、鉄製品、玉類が出土した（第 115 図）。陶棺は玄室の奥壁側から中央にかけて出土した。大きいもので 40 ～ 50cm、小さいものだと数 cm 四方の破片になっており、焼成不良のためか部分的に土くれのようにもろくなっている破片も多くみられた。破片は一個体分に満たず、出土状況も自然に崩壊したようには見えないことから、後世に意図的に破砕されたか、焼成の悪さを考えると当初から棺として機能していなかった可能性も想定できる。須恵器は、石室の中央部と、奥壁に近い位置の２か所でまとまって出土した。奥壁側の須恵器は全て陶棺の破片の下から出土したのに対し、石室中央の須恵器の一部（55）は陶棺とほぼ同じかやや高いレベルで出土している。この出土状況が最終的な埋葬時の状態を保持しているのか、撹乱の結果なのかは不明である。武器は、鉄鏃（Ｍ 26）が石室開口部付近で出土した。鉄製品は釘が 19 本出土しており、出土状況がわかる 10 本は撹乱のためか玄室内に散らばった状態であった。このほか、鑷子状鉄製品（Ｍ 29）や刀子（Ｍ 30）が陶棺の下から出土している。玉類は、勾玉（Ｓ 28）が石室中央の礫の直上から出土したほか、ガラス小玉（Ｇ 55・Ｇ 56・Ｇ 58）は玄室の床面付近から出土している。

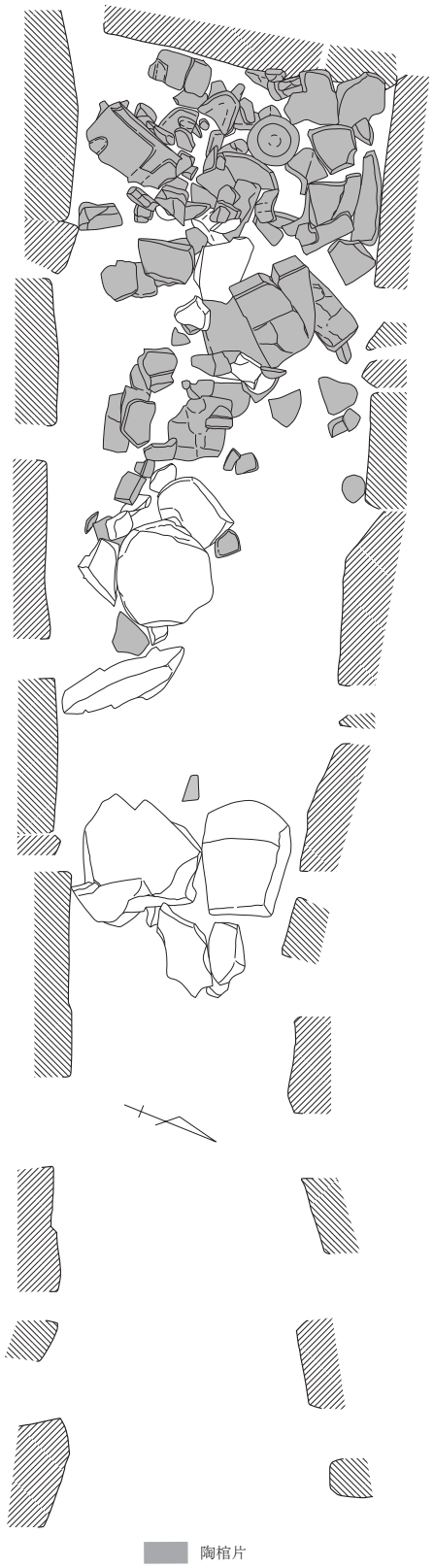
５　石室内出土遺物

陶棺（第 116 図、図版 80 － ３）

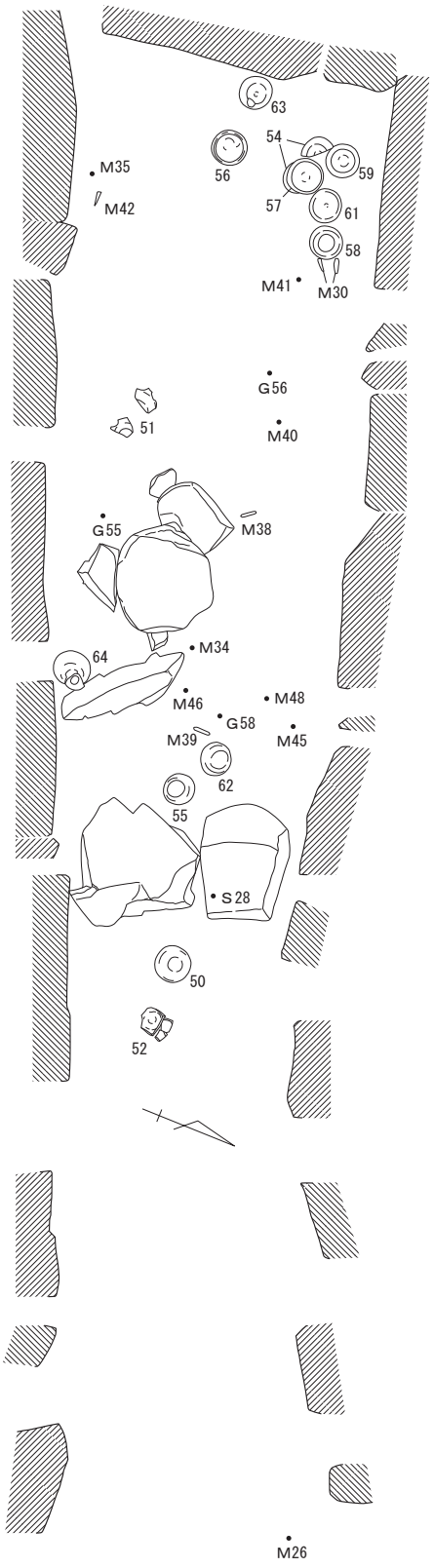
蓋身一体造りの土師質亀甲型陶棺（Ｃ４）と思われる。遺存状態は非常に悪く、部分的にしか実測することができなかった。色調は橙色を呈す。

蓋は、残存長 45.5cm、高さ 13.8cm、厚さ 3.0 ～ 3.5cm を測る。下端部の蓋同士の合わせ目から側面にかけての破片で、受け部や被せ部の有無は不明である。特徴的なのは、蓋同士の合わせ目から約 45cm にかけて縦突帯が貼り付けられていた形跡がない点で、合わせ目付近には縦突帯がなかった、あるいは、縦突帯は下端部まで達するものではなかった可能性がある。突起は１点出土しており、直径・高さ共に 6.2cm の円柱形で、蓋に差し込まれて装着されていたと考えられる。調整は、内外面共に丁寧なナデ調整である。

身は、上端部の合わせ目付近から側面にかけての破片と、上端部の小口付近から側面にかけての破片を実測することができた。上端部合わせ目付近の破片は残存長 45.0cm、高さ 37.3cm、厚さ 3.0 ～ 3.5cm を測る。合わせ目から約 23cm のところに幅 6.0cm、高さ 0.7cm の縦突帯が貼り付けられているが、上端部まで達しておらず、上端部横突帯から５cm ほど下で丸く収束している。小口付近の破片は、残存長 50.0cm、高さ 20.5cm、厚さ 3.0 ～ 3.5cm を測る。上端部横突帯に連結する幅 6.0 ～ 7.0cm、高さ 0.5 ～ 0.8cm の縦突帯が認められ、身の縦突帯と横突帯の連結は場所によって異なっていたことがわかる。身の調整は、内外面共に丁寧なナデ調整である。



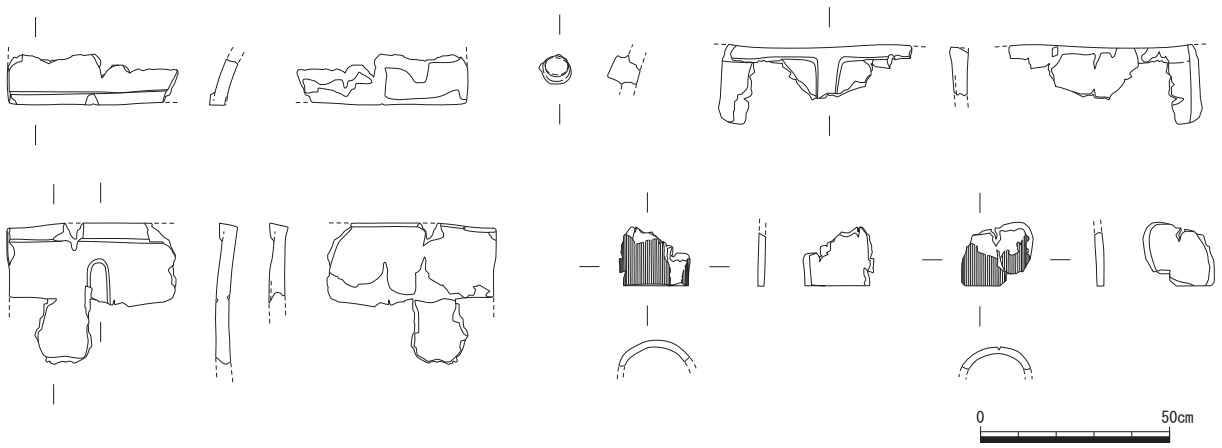
陶棺（Ｃ４）



その他の遺物

0　1m

第 115 図　細畝２号墳石室内遺物出土状況（1/30）



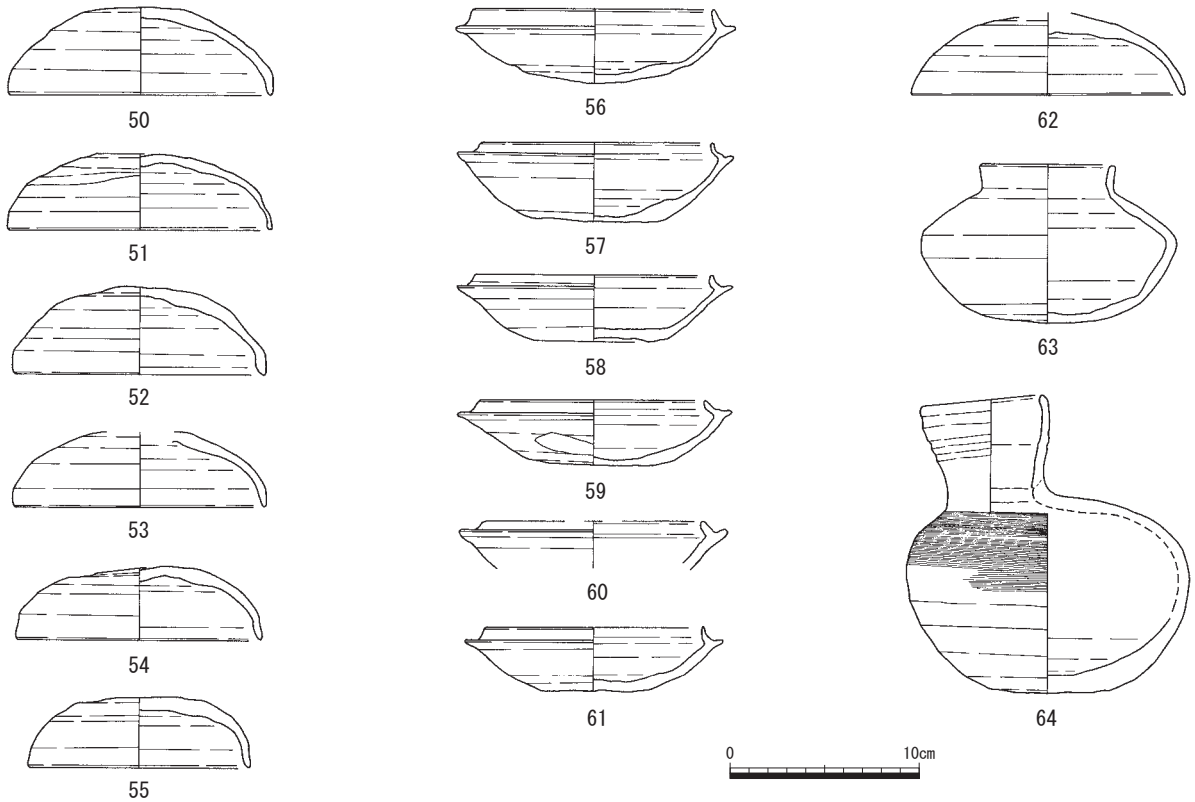
第 116 図　細畝２号墳陶棺（1/20）

脚は、２点実測した。残存径は 18 ～ 19cm、高さ約 14cm、厚さ 1.8cm で、粘土の巻き上げもしくは環積みによって成形し、外面はハケ、内面と下端面はナデ調整で仕上げている。下端面には、ワラを踏んだような幅３㎜程の直線的な凹みが認められる。底部との接合方法は不明である。

この陶棺の身の破片の一部から、混和材として入れられたと考えられる管状の草木が、炭化した状態で見つかった。分析の結果、草木の種類はススキ類などの C4 植物に属する大型のイネ科草木類であることが明らかになっている。また、この草木の放射性炭素年代測定を行った結果、７世紀前半から中頃（calAD603 ～ 657）の値が出ている（第５章第３節）。

土器（第 117 図、図版 81 － 1）

石室内からは 15 点の須恵器が出土した。**50 ～ 55** は蓋杯である。口径は 11.6 ～ 13.8cm で、天井部



第 117 図　細畝２号墳石室内出土遺物①（1/4）

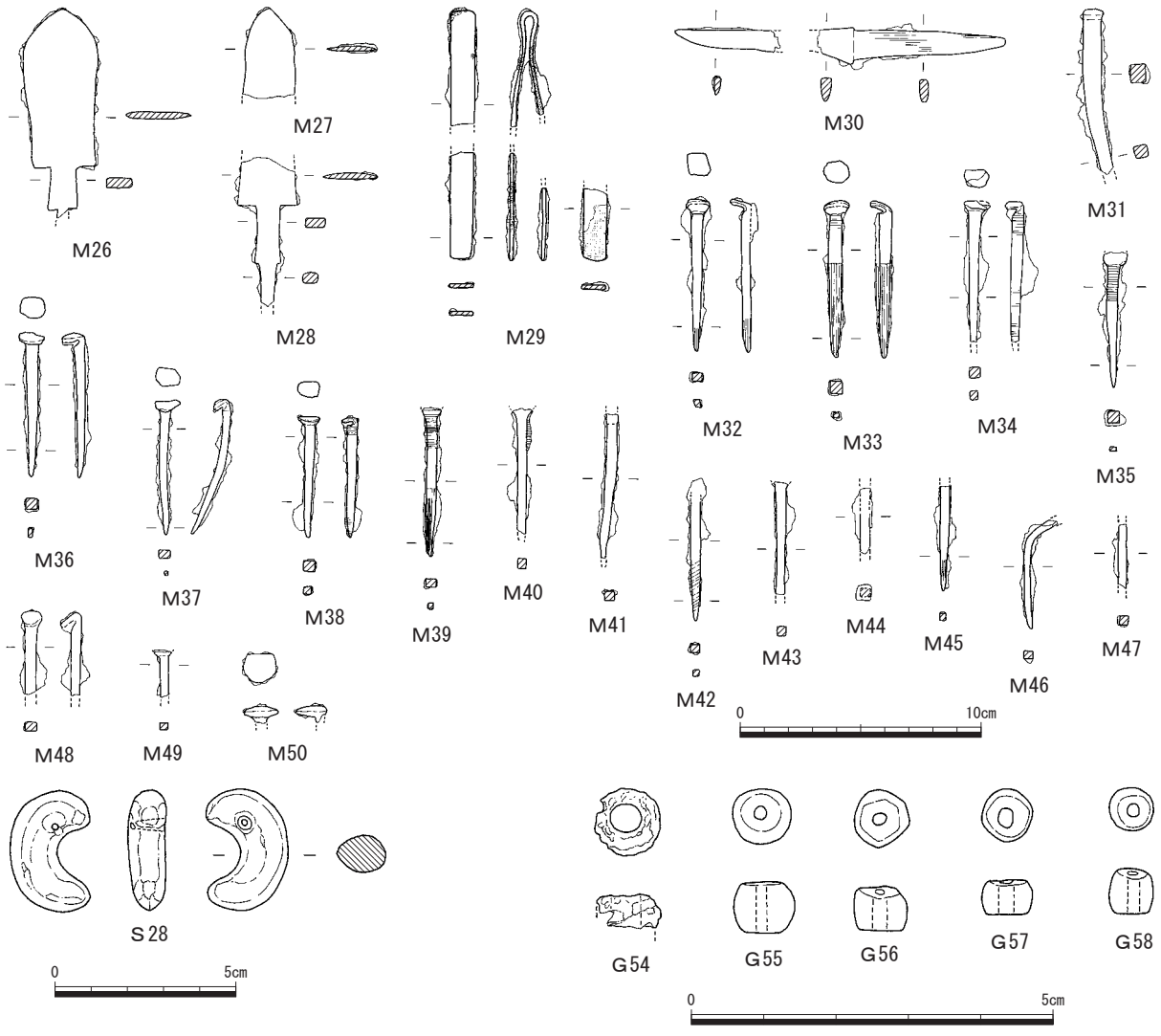
に回転ヘラケズリを施すものは少ない。56 ～ 61 は杯身である。口径は 11.5 ～ 12.6cm、杯蓋と同様回転ヘラケズリが省略された資料が目立つ。62 は有蓋高杯の蓋である。つまみ部を欠損しており、天井部には回転ヘラケズリの跡が認められる。口径は 14.4cm。63 は短頸壺である。口径 7.0cm、高さ 8.5cm を測り、底部外面には回転ヘラケズリの跡が認められる。64 は平瓶である。口径 6.3cm、底径 6.2cm、高さ 15.8cm を測り、外面の胴部上半にはカキメ、下半には回転ヘラケズリの跡が認められる。

武器（第 118 図、図版 81 － 2）

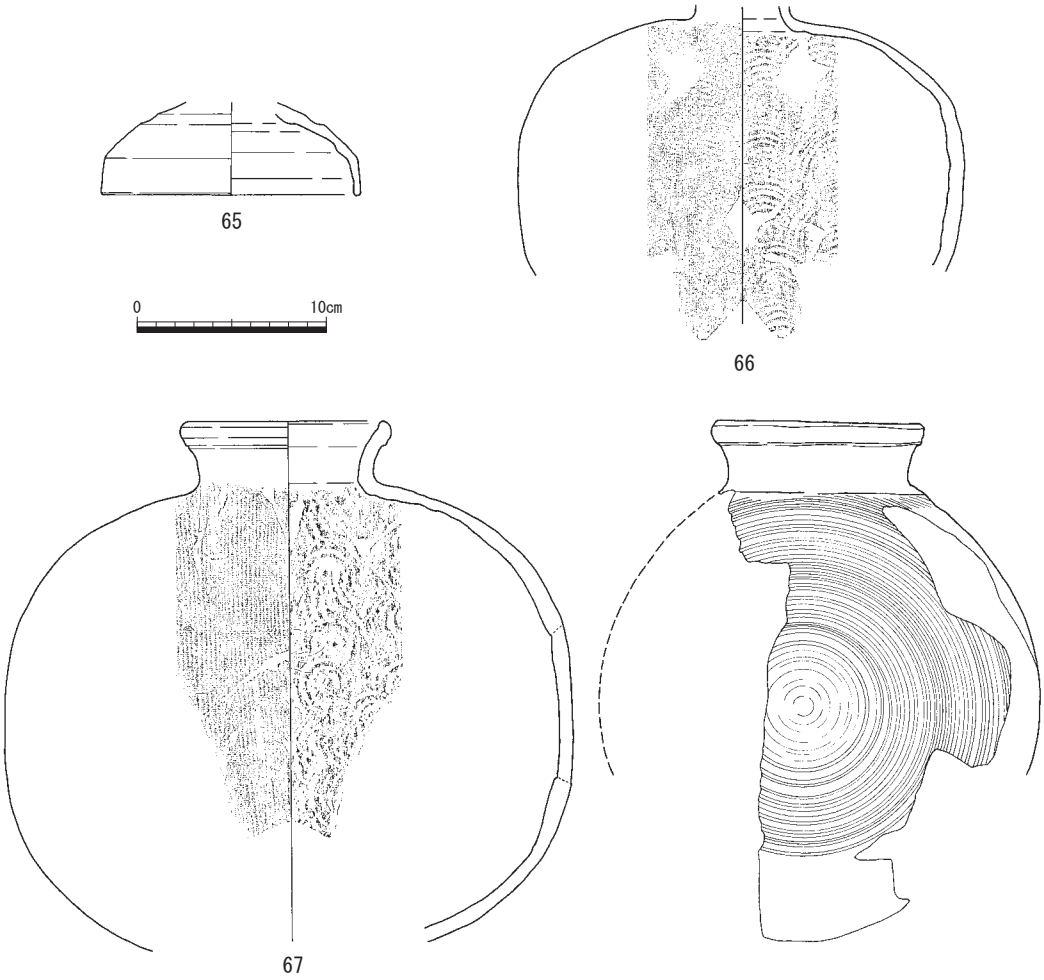
２号墳から出土した武器は鉄鏃がある。M 26 は平根・三角形式で、茎部を欠損しているが残存長は 86.8㎜、鏃身長は 66.3㎜、鏃身幅は 25.7㎜を測る。M 27・M 28 は、接合しないが同一個体の可能性がある。平根・三角形式で、茎部を欠損している。残存長はそれぞれ 37.6㎜と 61.9㎜である。

工具ほか（第 118 図、図版 81 － 2）

M 29 は鑷子状鉄製品である。接合しない３つの破片であるが、同一個体と考えられる。長さ 20cm 前後、幅 10 ～ 11㎜、厚さ 2.1 ～ 2.5㎜の鉄の板を折り曲げて作られており、どの破片にも布目が付着している。M 30 は刀子である。接合しないが、隣接して出土したことや刃幅などから同一個体と



第 118 図　細畝２号墳石室内出土遺物②（1/3・1/2・1/1）



第 119 図　細畝２号墳墳丘・周溝出土遺物（1/4）

判断した。柄には木質が遺存する。M 31 ～M 50 は釘である。最大のもので残存長 69.5㎜、全長が判明する最小のものは 50.5㎜を測る。全体として 55 ～ 65㎜の幅に収まるものが多い。頭部は全てＬ字に折り曲げられている。

装身具（第 118 図、巻頭図版８－１）

S 28 は碧玉製の勾玉である。長さ 33.3㎜、幅 22.2㎜、最大厚は 10.6㎝を測る。紐孔は片面穿孔で、色調はスプルースグリーンを呈する。G 54 ～G 58 はガラス製の小玉である。長さは 4.6 ～ 7.0㎜、幅は 6.3 ～ 9.2㎜を測る。色調は、G 54 がエメラルドグリーンを呈するほかはブルーを基調とする。

６　その他の遺物

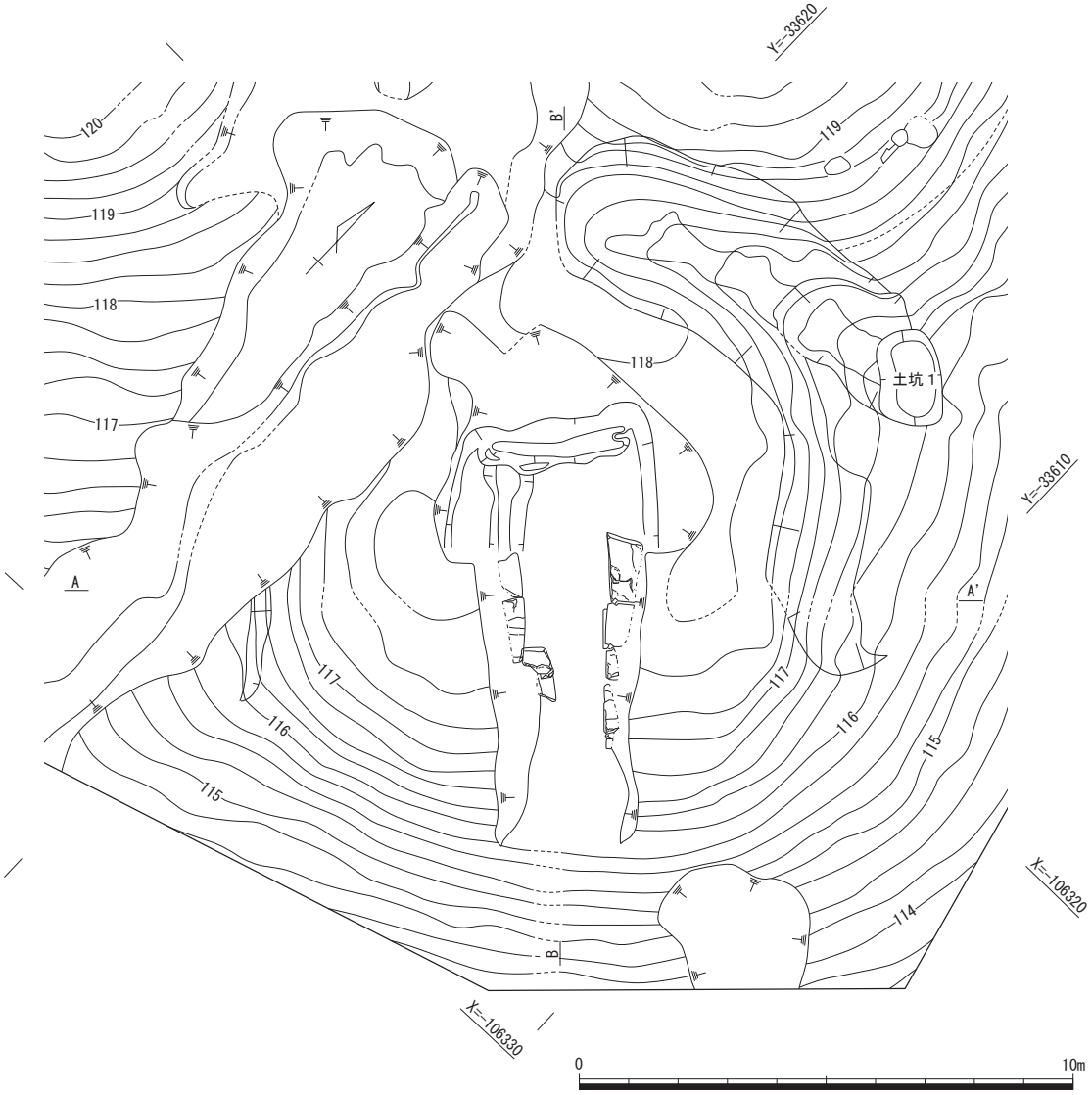
石室外から出土した遺物として、３点の須恵器がある（第 119 図）。65 は墳丘北側の流土中から出土した蓋で、口径は 13.4㎝、天井部を欠き、回転ヘラケズリ等の調整は見られない。66・67 は墳丘の北側～北西側の流土や周溝埋土中から出土した横瓶である。66 は口縁部と底部を欠き、外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。67 は口径 10.3㎝を測り、外面には平行タタキの後カキメ、内面には同心円状の当て具痕が残る。（藤井翔）

第４節　細畝３号墳

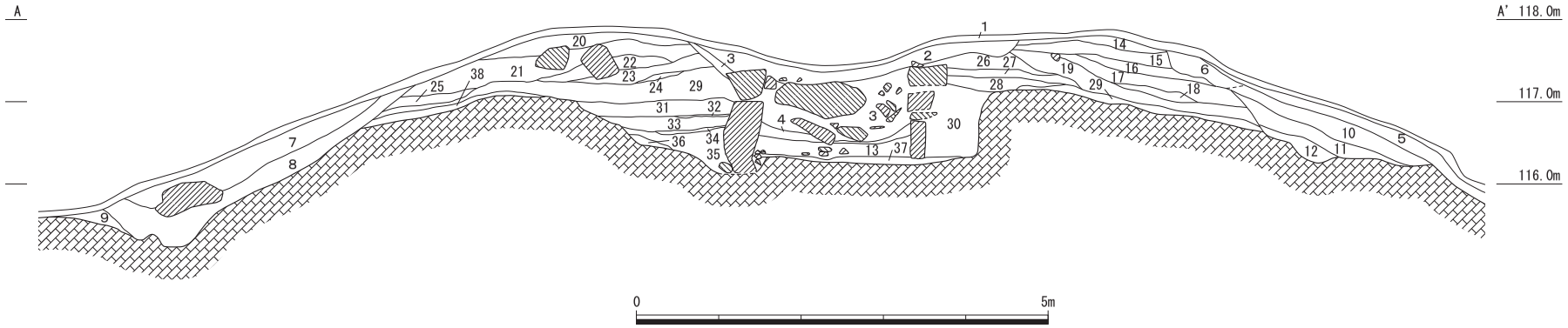
１　墳丘と周溝

３号墳は、古墳群が立地する尾根上のうちもっとも先端部に築かれている（第 89 図）。

墳丘は、近世以降の石材採取に伴う搬出路と思われる溝によって、その西側が大きく損壊している（第４章第７節）。また石材採取に付随して石室石材も抜き取られているようで、墳頂部及び石室奥壁側が大規模に掘削されていた（第 120 図）。さらに石室開口部側は、自然流出等により盛土が若干流出しているようである。周溝は、先に述べた溝によって墳丘西側ではその痕跡を留めていないが、やや良好に残存していた墳丘北～東側の様子から、半円形を呈していたと思われる。ただし、石室奥壁側の背後については尾根筋を断ち切らず、現状で幅約 20㎝を測る掘り残しが認められた。周溝の計測値は、この掘り残し部から北東側約２ｍの地点で幅約 3.3 ｍ、深さ 0.4 ｍを測り、その地点での断

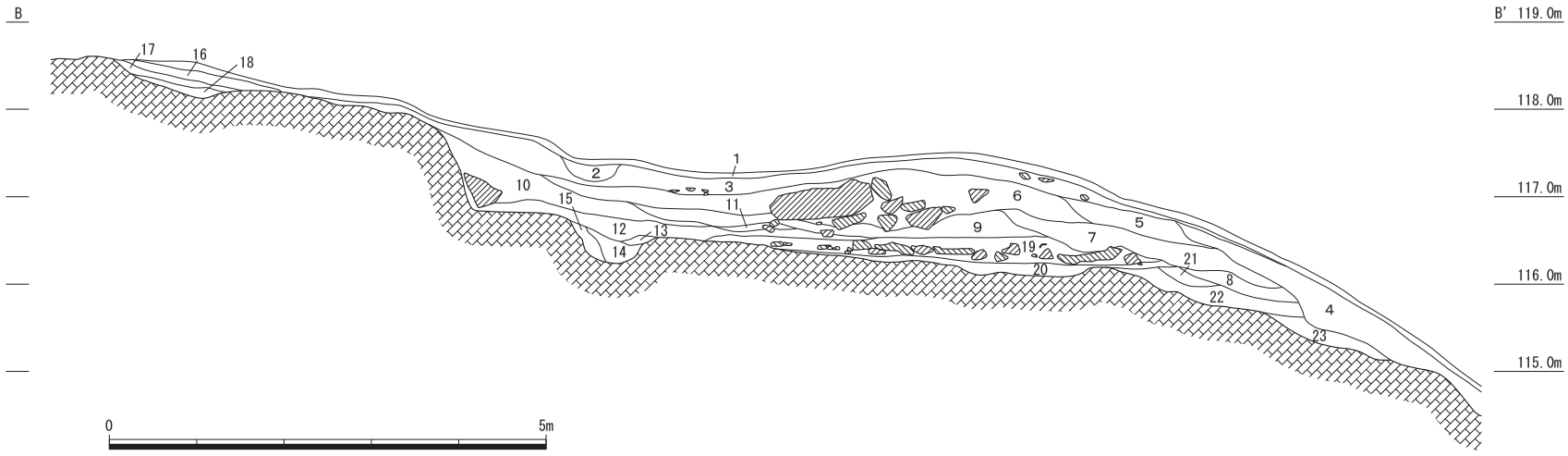


第 120 図　細畝３号墳墳丘（1/150）



1　表土
2　暗黄褐色（10YR7/6）砂質土
3　にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土
4　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
5　黄褐色（10YR5/8）砂質土（小礫含む）＜流土＞
6　暗黄褐色（10YR7/6）砂質土＜攪乱＞
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多く含む）＜攪乱＞
8　褐色（10YR4/6）砂質土＜攪乱＞
9　黄褐色（10YR5/8）砂質土（小礫多く含む）＜攪乱＞
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫含む）＜流土＞
11　褐色（19YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
12　褐色（10YR4/0）砂質土＜周溝埋土＞
13　褐色（10YR4/6）砂質土
14　褐色（10YR4/4）砂質土＜以下盛土＞
15　黄褐色（10YR5/6）砂質土
16　褐色（7.5YR4/6）砂質土
17　褐色（10YR4/6）砂質土
18　暗褐色（10YR3/4）砂質土
19　黄褐色（10YR5/6）砂質土
20　褐色（10YR4/6）砂質土
21　明褐色（7.5YR5/6）砂質土
22　褐色砂（7.5YR4/6）質土（しまりが弱い）
23　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
24　黄褐色（10YR5/6）砂質土（しまりが弱い）
25　褐色（10YR4/4）砂質土
26　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
27　黄褐色（10YR5/6）砂質土
28　褐色（10YR4/4）砂質土
29　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土
30　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（目が細かくしまりが強い）
31　褐色（10YR4/6）砂質土（しまりが強い）
32　黄褐色（10YR5/6）砂質土
33　暗褐色（10YR3/4）砂質土
34　褐色（10YR4/6）砂質土
35　黄褐色（10YR5/6）砂質土（目が粗くしまりが弱い）
36　褐色（10YR4/6）砂質土
37　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫多く含む）＜石室床面整地土＞
38　褐色（10YR4/4）砂質土＜旧表土＞

第 121 図　細畝３号墳墳丘・石室内土層断面①（1/80）



1　表土
2　黒褐色（10YR3/1）砂質土（炭含む、下面被熱痕跡）
3　暗黄褐色（10YR7/6）砂質土
4　橙色（7.5YR7/6）砂質土
5　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
6　にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土（崩落した石室石材を多く含む）
7　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
8　褐色（10YR4/6）砂質土
9　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
10　黄橙色（7.5YR7/8）砂質土（小礫含む）
11　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
12　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土（小礫含む）
13　褐色（10YR4/4）砂質土
14　黄褐色（10YR5/6）砂質土
15　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
16　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜周溝埋土＞
17　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜周溝埋土＞
18　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
19　褐色（10YR4/6）砂質土
20　黄褐色（10YR5/6）砂質土（小礫を多く含む）＜石室床面整地土＞
21　明褐色（10YR5/6）砂質土
22　褐色（10YR4/4）砂質土
23　褐色（10YR4/6）砂質土＜旧表土＞

第122図　細畝３号墳墳丘・石室内土層断面②（1/80）

写真 21　細畝３号墳周溝断面（東から）

写真 22　細畝３号墳墳丘西側盛土断面（南から）

面形は台形を呈している（写真 21）。墳丘の規模や形態は、周溝の検出状況等を手がかりに復元すれば、径約 13 ｍの円墳となる。墳丘の高さについては、石室開口部側の墳端が特定できなかったため不明であるが、石室床面の標高を手がかりとして求めると現状で約 2.0 ｍであり、築造時は抜き取られた天井石の厚さや盛土等を加味すると、2.5 ｍ以上と想定される。

墳丘の築造工程については、大きく２工程に分けることができた。第１工程として、石室構築予定地付近の整地・造成（旧表土の除去や地山の掘削）を第 120 図Ａ－Ａ’付近から斜面上方部にかけて行い（第 121 図第 38 層の旧表土層は、南西側に下がる斜面部であったため、残存しているのであろう）、その後石室掘り方の掘削を行う。第２工程として、横穴式石室の構築と併行してやや小規模な墳丘を天井石の高さまで築き（第 121 図第 26 ～ 28 層など）、その後全体に盛土を行って（第 121 図第 14 ～ 19 層など）墳丘を完成させている。盛土は、旧表土由来の暗褐色系の土と地山由来の黄褐色系の土をおおむね互層となるように積み上げていた。

２　横穴式石室

３号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である（第 123 図）。調査前の状況は、天井石がすでになく、石室内に土砂が厚く堆積していた。この堆積土中には、側壁を構成していたと思われる人頭大以上の角礫を多く含み、さらには天井石であったかもしれない１ｍ大以上の扁平な巨石が認められた（第 122 図第 6 層に含まれる礫、写真 23）。これらの礫や土を除去すると、石材の抜き取りによって玄門付近の両側壁しか残存していない大きく破壊された石室が現れる。

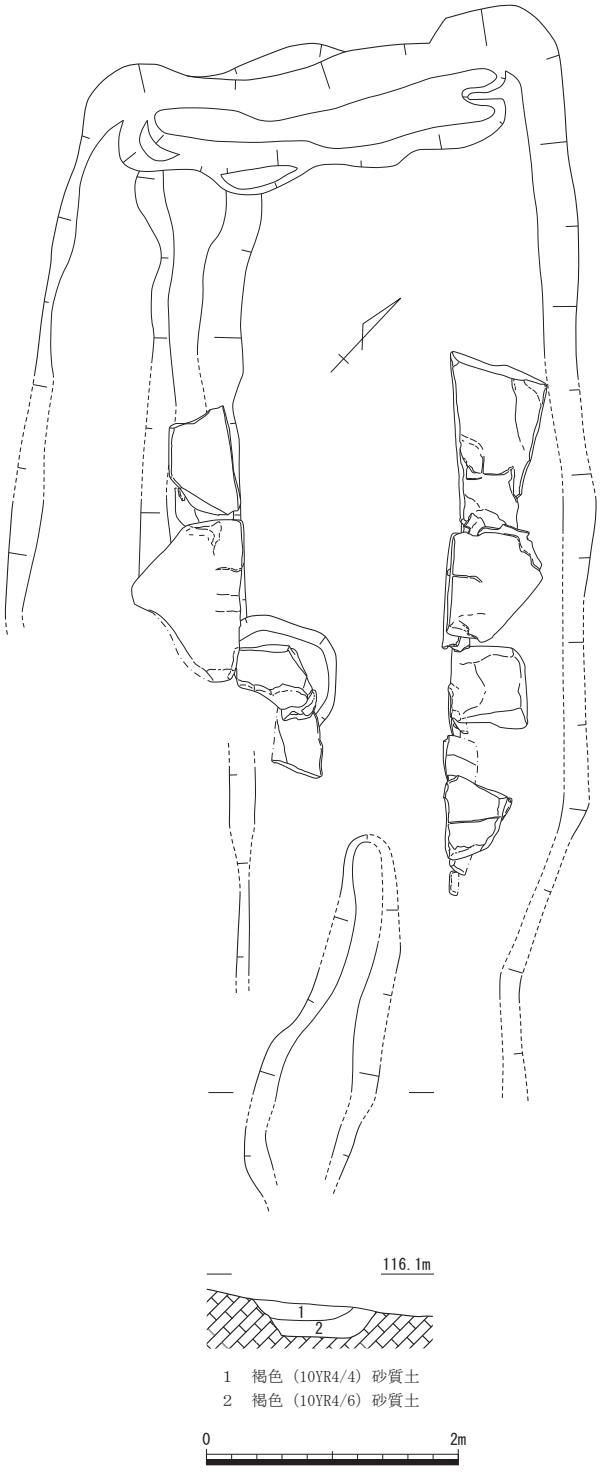
写真 23　細畝３号墳玄室内土層堆積状況（南東から）

写真 24　細畝３号墳石室奥壁掘り方及び石材搬出のための奥壁背後の掘削面（南西から）
足元の平坦面が石材抜き取り時の掘削面

石室掘り方は、石材搬出路作成に伴う掘削によって奥壁背後が大規模に削平されていた（第 120・122 図、写真 24）が、奥壁石材を据えるために掘削されたと思われる幅約１ｍの溝が残存していたことにより、その形態や大きさが推測できる。その平面形は、奥壁及び右側壁部分が直線的に、左側壁部分は袖部付近の墳丘盛土を除去していないため確証はないが鍵型に屈曲しているものと想定され、おおむね構築する石室に合わせた形状であったと思われる。その幅は、玄室部分で約 4.7 ｍ、羨道部分で約 2.9 ｍを測り、深さは奥壁部分で約 1.1 ｍ、開口部付近で 0.2 ｍである。掘り方底面の高さは開口部に向かって徐々に低くなっている。

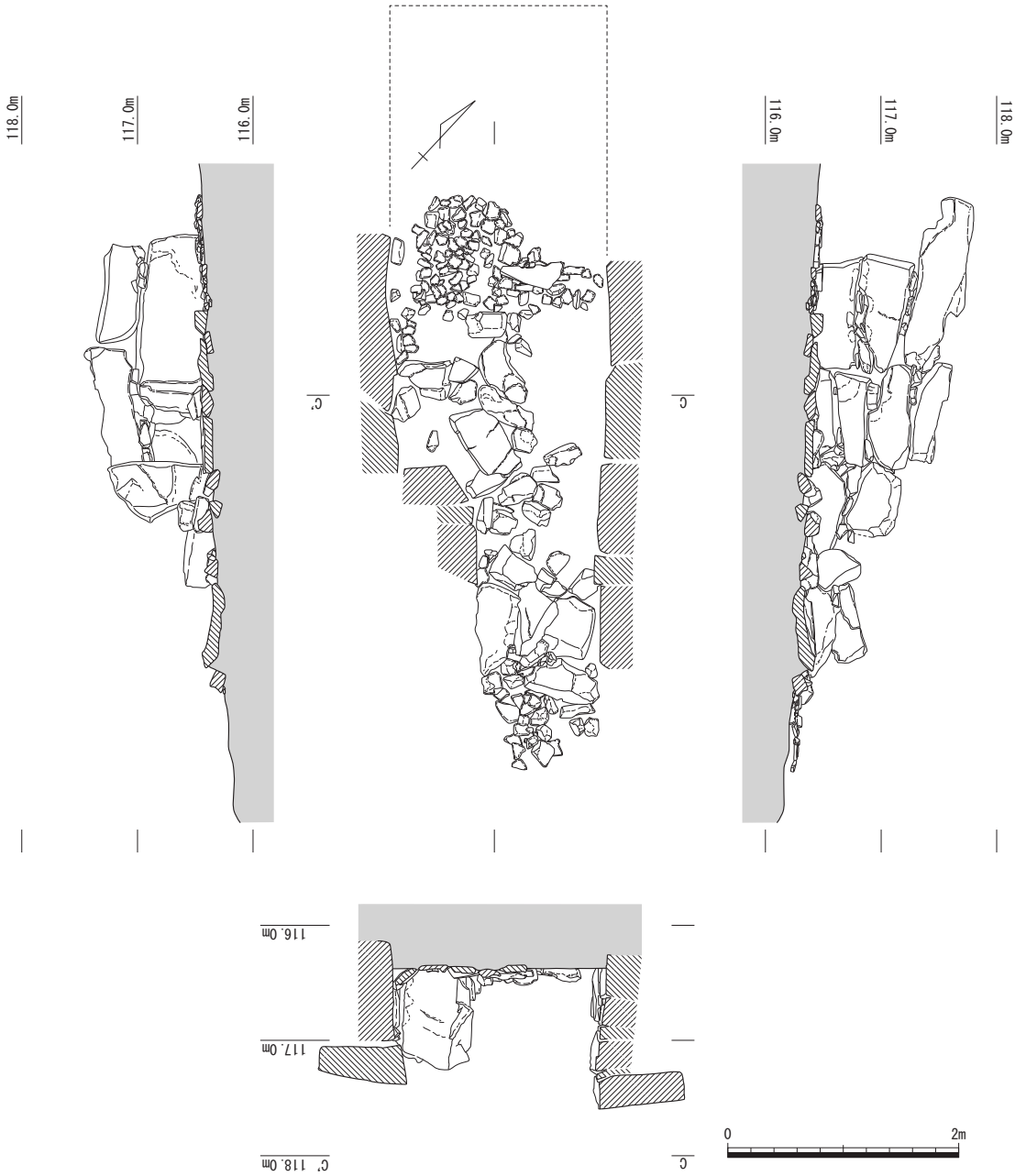
石室は左側に袖をもつ片袖式で、南東方向（N 136° E）に開口している。その規模は現状で、長さ 4.9 ｍ、玄室最大幅 1.9 ｍ、羨道最大幅 1.1 ｍ、高さ 1.3 ｍを測る。構築時の規模は、奥壁石材を据えるための掘り方などを手がかりとして推測すると、石室長が 6.7 ｍ以上、玄室長が約４ｍとなる（第 124 図の破線部分）。石の積み方は、両側壁とも横目地が通るように積まれているが、右側壁の玄門付近は、縦目地が通っているようにもみえる。左側壁の袖部には、50㎝四方で高さ約 80㎝の立柱石を立てている。

床面には礫が敷かれ、礫床としているが、玄門から奥壁側約 1.2 ｍ付近を境として、使用石材やその敷き方が異なっていた。奥壁側では 10㎝大の平滑な川原石を密に置き、さらにそれらの上面が水平面となるように敷いていたが、袖部から羨道部にかけては地山由来と想定される人頭大から 40㎝大の角礫をやや乱雑に置いており、その上面は水平面を形成していない。この差異の理由は明らかでないが、後者は有機質材の側板を固定するための石材であったものが含まれているかもし



第 123 図　細畝３号墳石室掘り方・墓道（1/60）

写真 25　細畝３号墳墓道（南東から）



第 124 図　細畝３号墳石室（1/60）

れない。

墓道は、開口部付近の礫敷きを取り除いた後に確認され、その最大幅は約１ｍである。

閉塞の状況は攪乱により不明であるものの、石室開口部付近に認められる拳大の礫が閉塞石であった可能性が指摘できる。

３　石室内遺物出土状況

撹乱を受けていない流入土（第 122 図 19 層）を除去すると、石室床面から土器、鉄器、玉類などが多量に出土した（第 125 図）。これらの出土場所は、玄門から約１～２ｍ奥壁側の左側壁付近（以下Ａ地区と呼ぶ）、同じく右側壁付近（同Ｂ地区）、袖部付近（同Ｃ地区）、羨道部の右側壁付近（同Ｄ地区）の４か所に大きく分かれており、各地区で出土遺物の種類や器種が異なっている。Ａ地区は

土器類がほぼすべて須恵器蓋杯であり、その中でも口径が 12cm 以上の杯身（80･82･87）が奥壁側（Ａ－１）、口径 12cm 未満の杯身（89 ～ 93）が玄門側（Ａ－２）から出土している。また出土位置が判明しているすべての刀子が、この地区からである。その他の鉄器としては、同一個体と想定される錆膨れにより層状に剥離した鉄片の出土状況から、左側壁際に大刀（Ｍ 51）が置かれていたと推測される。Ｂ地区では相対的に古い型式の須恵器蓋杯や高杯が重なり合って出土しており、それらの上から鉄鏃（Ｍ 62・Ｍ 63）、下から轡（Ｍ 69）や鉸具（Ｍ 67）などの馬具が検出された。さらに出土位置がおさえられたガラス小玉の大多数は、この地区及びその南東側からの出土である。Ｃ地区は、須恵器壺（111）、提瓶（115・117）、平瓶（118）、甕（109）、土師器壺（129）などの貯蔵器種でほぼ占められていた。Ｄ地区は、土師器の出土点数が多い。

出土した６点の耳環は、羨道攪乱土に含まれていたＭ 89 以外、すべて礫床もしくは床面相当面上から検出した。これらは形態的特徴等から、Ｍ 85 とＭ 86、Ｍ 87 とＭ 89 が対と想定される。よって被葬者は、少なくとも４人であったと推測される。なおＭ 88 は、追葬時における遺物の片付け等の行為によって大きく移動した可能性が高い。

このように多数の遺物が検出されているが、棺に関係する遺物の出土は皆無である。そのため、遺体は直葬していたか、釘などを使用しない有機質材による棺に納められていたと思われる。特にＢ地区奥壁側の敷石上には、棺台石と推測される 50 × 20cm 大の扁平な石が認められることから、有機質材による棺の使用を想定しても良いであろう。

さて、遺物や礫床等の検出状況から棺配置もしくは遺体の埋葬位置を考えてみたい。まず、石材搬出に伴う攪乱により対となる棺台石が確認できないものの、Ｂ地区で検出した棺台石から、この棺台石より奥壁側に棺が配置されていたと思われる。また、玄室幅を考えるとＡ地区より奥壁側にも棺もしくは遺体が安置されていた可能性が高い。さらにＭ 85・Ｍ 86 の耳環が２次的に大きく移動していないと仮定するならば、Ａ－２地区より玄門側の遺物出土空白地帯も候補となろう。特にこの場所については、Ａ－２地区出土の須恵器の型式が相対的に新しいことから、最終追葬時の埋葬場所とも想定できる。あとこれと近接するが、玄門付近で検出された人頭大以上の礫が有機質材の棺側板を固定する役割を持っていたと仮定するならば、ガラス小玉が多く出土したＢ地区南東側の敷石空白域も候補地として挙げられる。

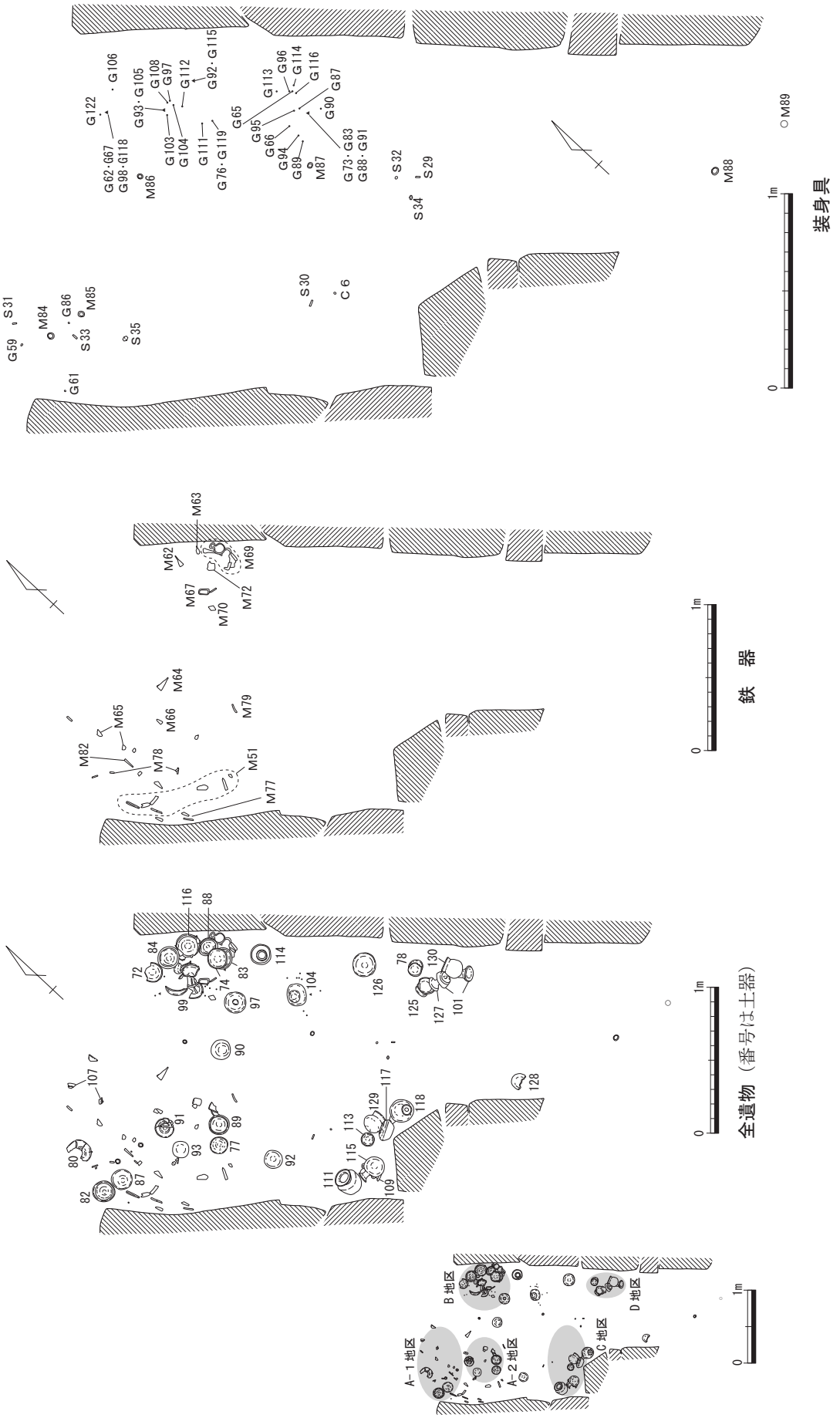
なお、石室内攪乱土（第 120 図第３・４層など）に包含されていた土器片には、墳丘の表土及び流土中から出土したものと接合する例が多々あり、なかには完形品近くまで復元できたものもある。これらは墳丘上祭祀のものが石室内に落ち込んだというよりは、石室内に副葬されていたものが石材抜き取り時に墳丘上に掻き出されたものと思われることから、石室内出土遺物として取り扱った。

４　石室内出土遺物

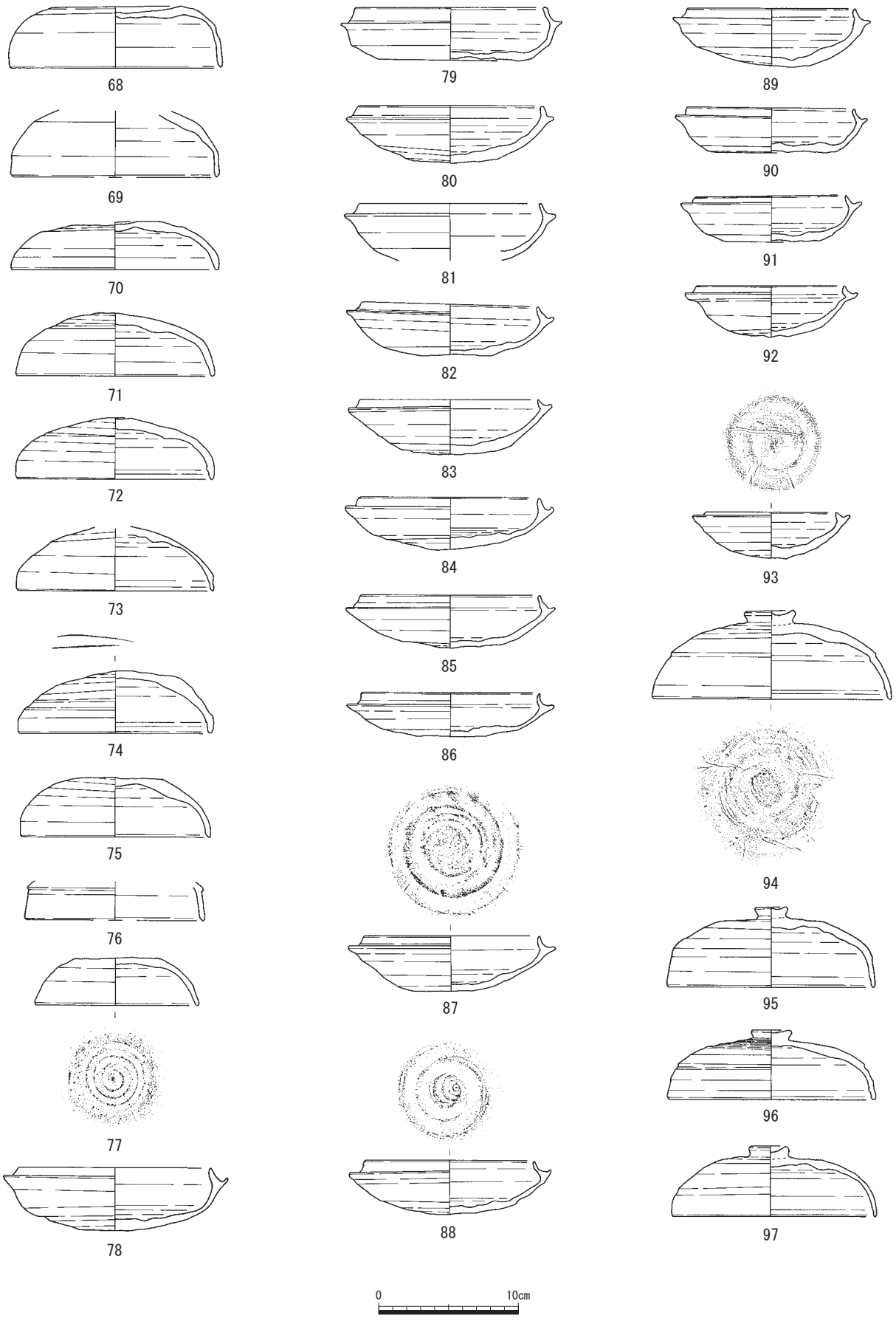
土器（第 126 ～ 129 図、巻頭図版６－２、図版 82 ～ 85 －１）

石室内から出土した土器には、図示し得たもので須恵器 57 個体、土師器６個体がある。これらのうち床面上から出土したものは、須恵器 29 個体、土師器５個体であり、その他は先に述べたとおり攪乱土中に包含されていたものである。

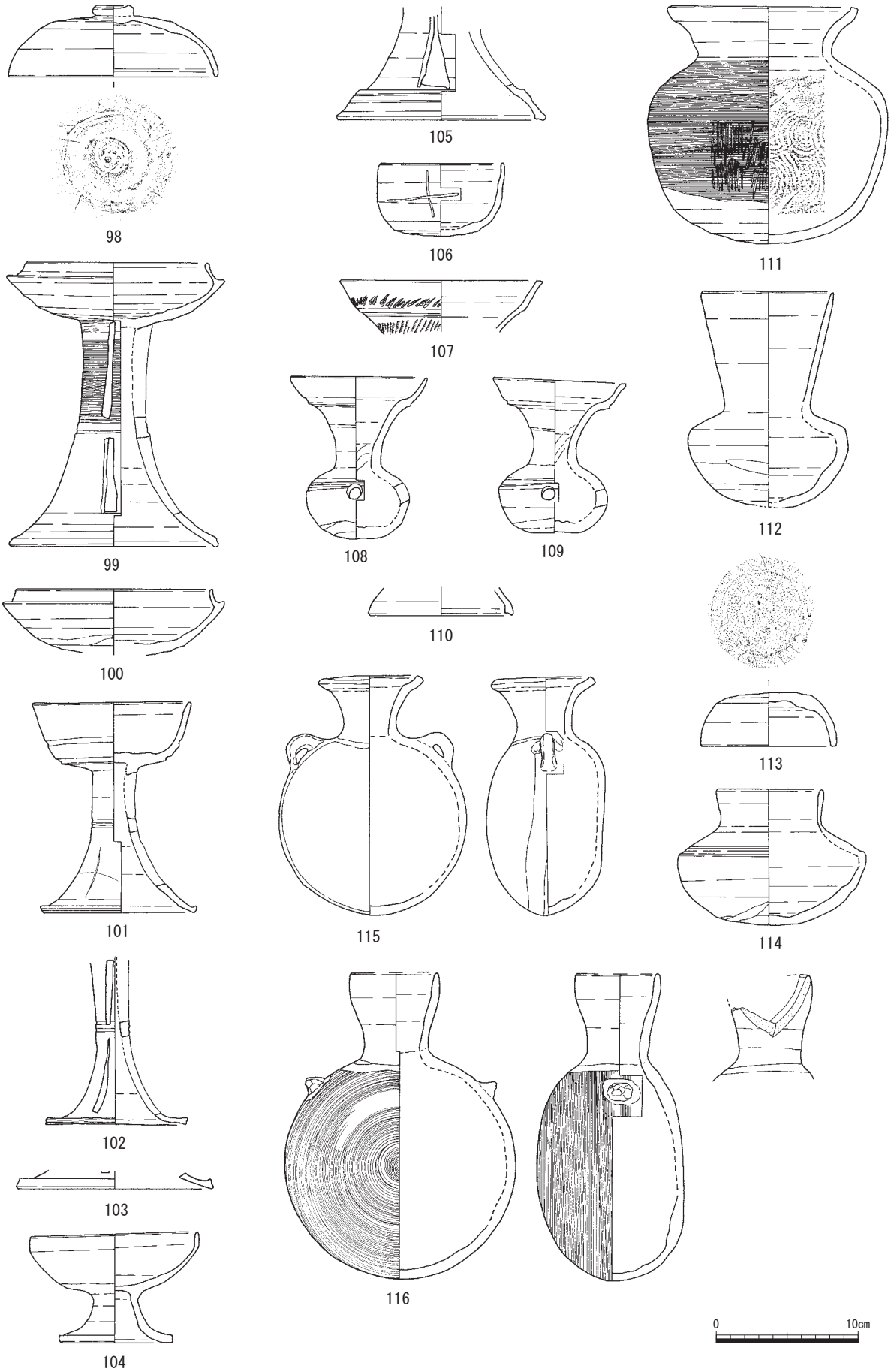
須恵器の杯蓋（68 ～ 77）は、その大きさが口径 11.6 ～ 15.0cm、器高 3.5 ～ 4.6cm と幅がある。天井部は 68 以外すべて丸く仕上げ、その調整は、回転ヘラケズリやヘラ切り後にナデ調整を施してい



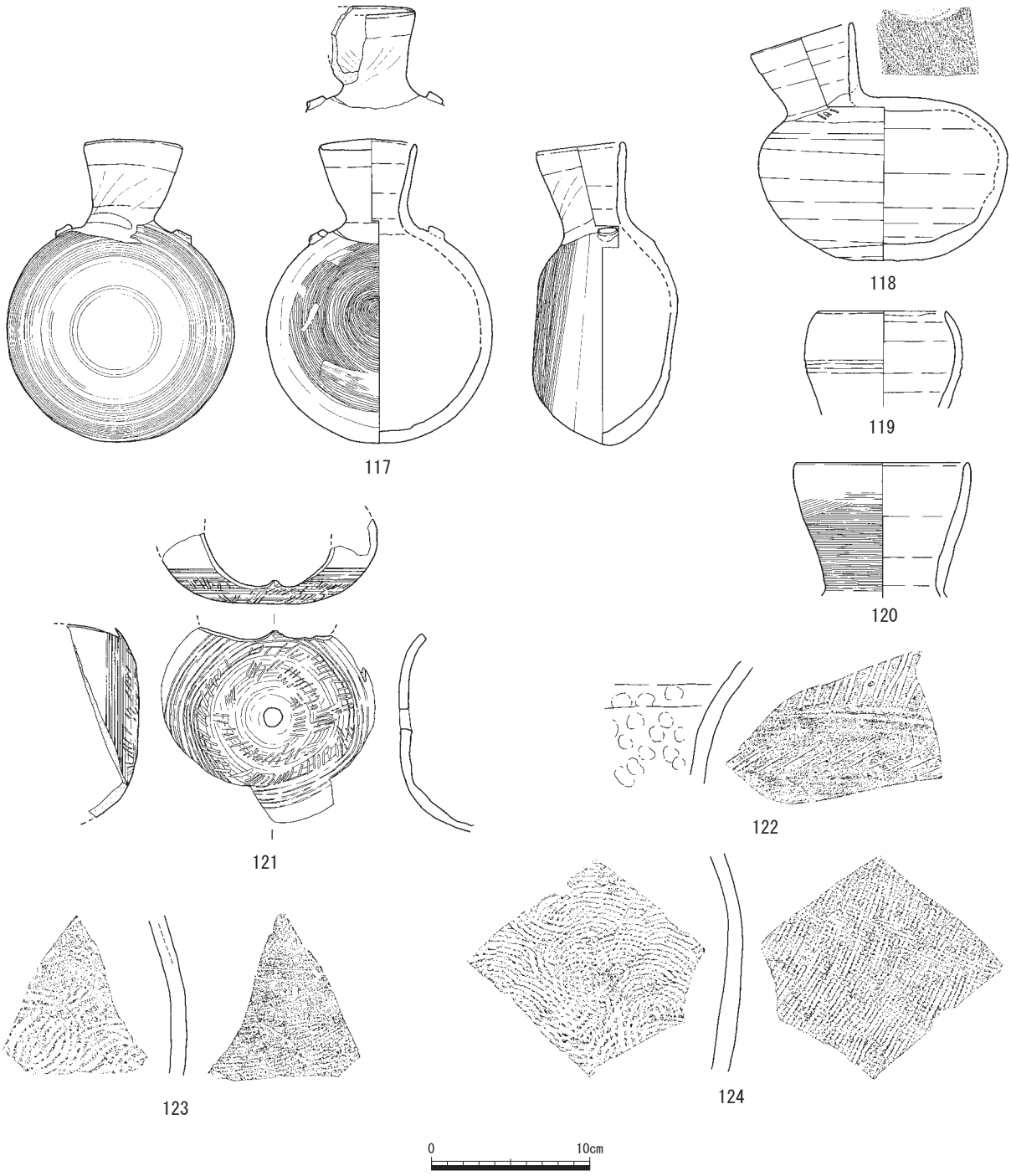
第 125 図　細畝３号墳石室内遺物出土状況（1/40・1/30）



第 126 図　細畝３号墳石室内出土遺物①（1/4）

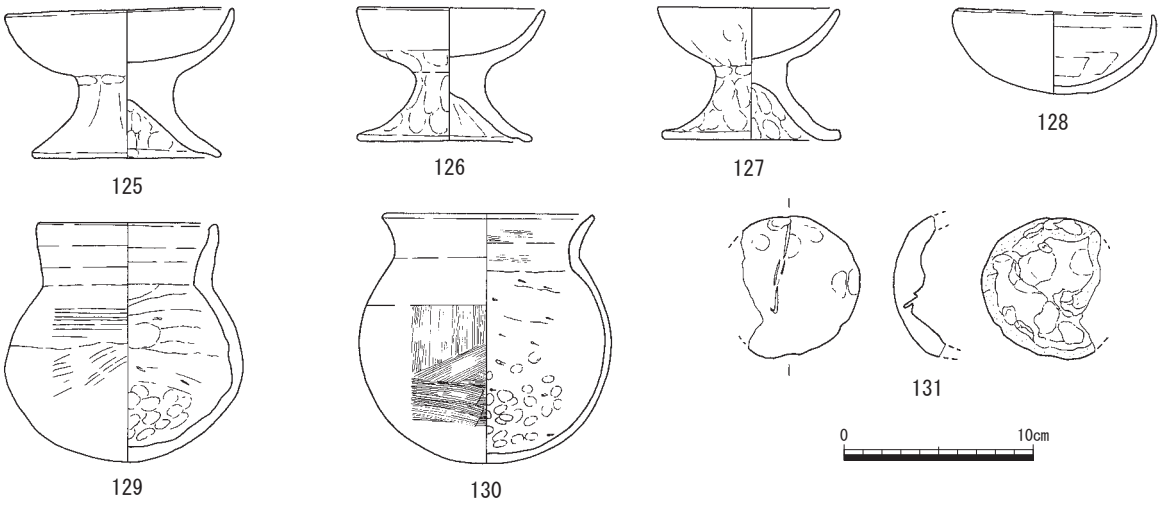


第 127 図　細畝３号墳石室内出土遺物②（1/4）



第 128 図　細畝３号墳石室内出土遺物③（1/4）

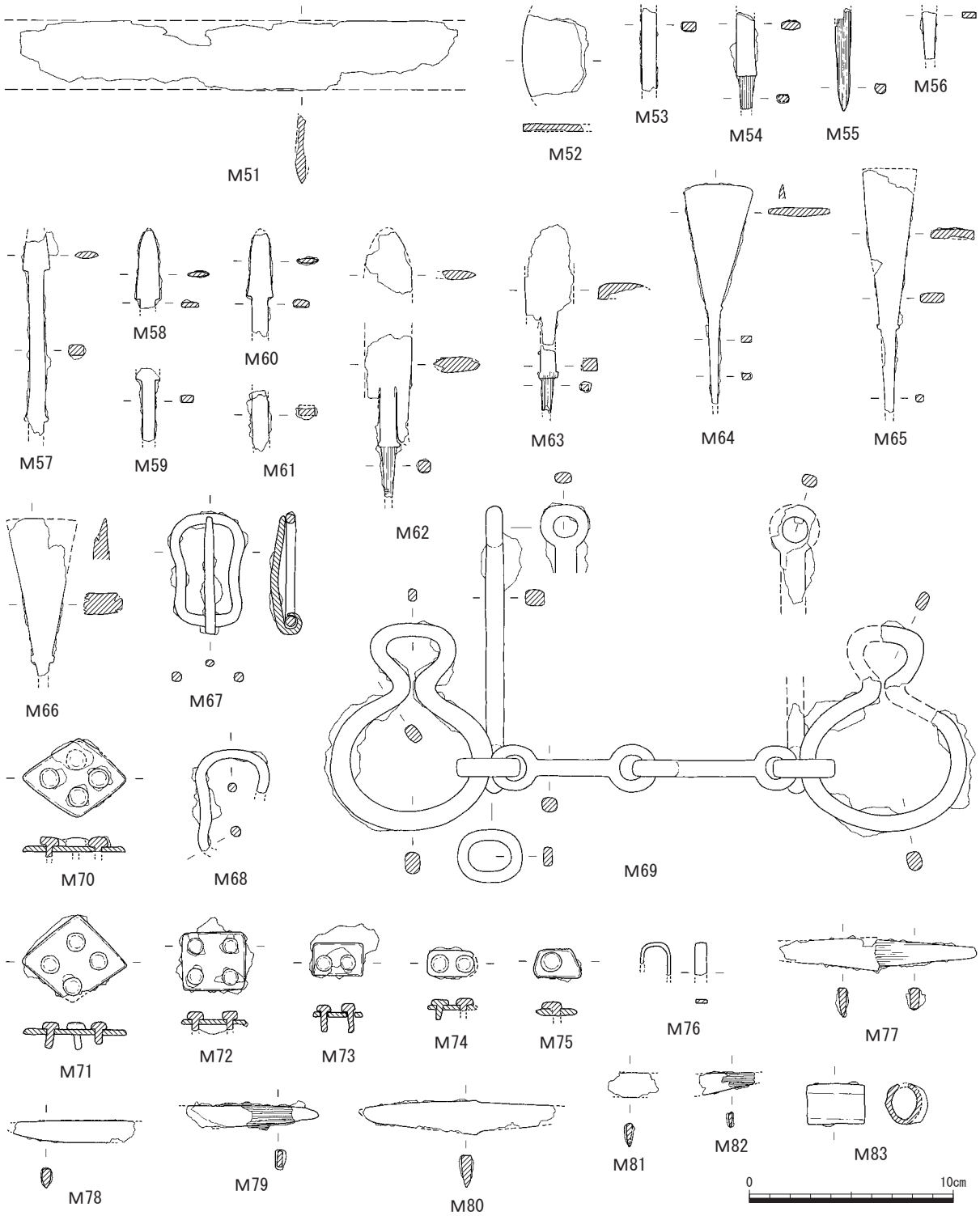
る。天井部内面に同心円の当て具痕が残されているもの（77）もある。天井部と口縁部の境界は、にぶい稜を作出している 76 以外、凹線や稜が認められない。口縁端部は丸くおさめるもの（68 ～ 71・75・77）、内面に浅い凹線状の窪みが巡るもの（72 ～ 74）、やや内傾する面を有するもの（76）がある。口縁部が 1/6 程度残存している 76 は、左側壁側の石室掘り方埋土と考えられる土に包含されていたことから、本墳築造以前に存在していた墳墓に伴うものかもしれない。杯身（78 ～ 93）は、口径 9.3 ～ 13.6cm、器高 3.2 ～ 4.6cm と大きさに幅がある。これらの底部外面の調整は、回転ヘラケズリもしくはヘラ切り後ナデ調整である。また底部内面に同心円当て具痕や一文字形のヘラ記号が認められる



第 129 図　細畝３号墳石室内出土遺物④（1/4）

ものもある。胎土・焼成・技法等が類似している 68 と 79、70 と 80、72 と 84、73 と 87、75 と 89 は、杯身と杯蓋の組と想定される。高杯には、有蓋と無蓋がある。有蓋高杯蓋はいずれも天井部が丸く、扁平なつまみを付している。これらには、天井部外面にカキメを施すもの（96）、天井部内面に当て具痕を残すもの（94・98）、天井部と口縁部の境界ににぶい稜（94）もしくは凹線状の窪みを巡らすもの（96・97）、口縁部内面に凹線状の窪みが巡るもの（94・96 ～ 98）がある。有蓋高杯は２点（99・100）出土している。２段３方向の透かしを持つ 99 の脚は、太い基部から裾部に向かって大きく広がり、上段にはカキメを巡らしている。無蓋高杯には、長脚（101 ～ 103）と短脚（104）がある。杯部外面に凹線を巡らし、口縁部と底部の境界に段がつく 101 は、２段２方向の透かしが施されている脚で、さらに脚下段部に十字形のヘラ記号が認められる。脚部内面に絞り痕が認められる 102 は、２段３方向の透かしを持つ。105 は脚付壺の脚部で、３方向に三角形の透かしが施される。106 は、体部に十字形のヘラ記号が描かれている。瓶は３点（107 ～ 109）出土し、いずれも口縁部と頸部の境に段を有する。また 107 は、外面に刺突文が施される。110 はいずれかの器種の台部と思われるが、135 の有蓋高杯のような脚部の可能性もある。壺（111）は、胴部外面に平行タタキを施した後カキメを巡らし、底部付近に回転ヘラケズリが施されている。112 は直口壺、113・114 は組となる蓋と短頸壺で、蓋（113）の天井部には一文字形のヘラ記号が認められる。短頸壺（114）は、大きく張り出した肩部に２条の凹線が巡る。提瓶は３点出土している。口縁部が外反する 115 は、環状の耳を持ち、外面を回転ヘラケズリやナデ調整で成形する。口縁部を意図的に欠いていると思われる 116・117 は、やや内湾する口縁部を持ち、体部両側の耳は鉤形や碁石状を呈する。平瓶（118）は、体部上面がやや扁平であるものの全体的に丸みをおびた形態で、頸部に３本線のヘラ記号が認められる。119・120 は瓶類の口縁部である。石室攪乱土から出土した特殊扁壺（121）は、柄が無く胴部中央に孔があいている形態で、山田氏分類[(1)]のⅠ類「無柄特殊扁壺」にあたる。提瓶と同様なつくりの胴部に「８」字形の切り込みを入れて口縁部とし、胴部中央に径 1.2cm 程の孔を外面から穿つ。外面の施文は、カキメを巡らした後、クシ状工具で刺突文を施す。内外面には、自然釉が付着している。甕の頸部である 122 の外面には、ヘラ描きによる斜線と櫛状工具による刺突文が施される。

土師器は、高杯、椀、壺、甕などが出土している。高杯（125 ～ 127）はいずれもＤ地区で検出されたもので、外面のみ（125）もしくは外面及び杯部内面（126・127）に赤色顔料が塗布されていた。

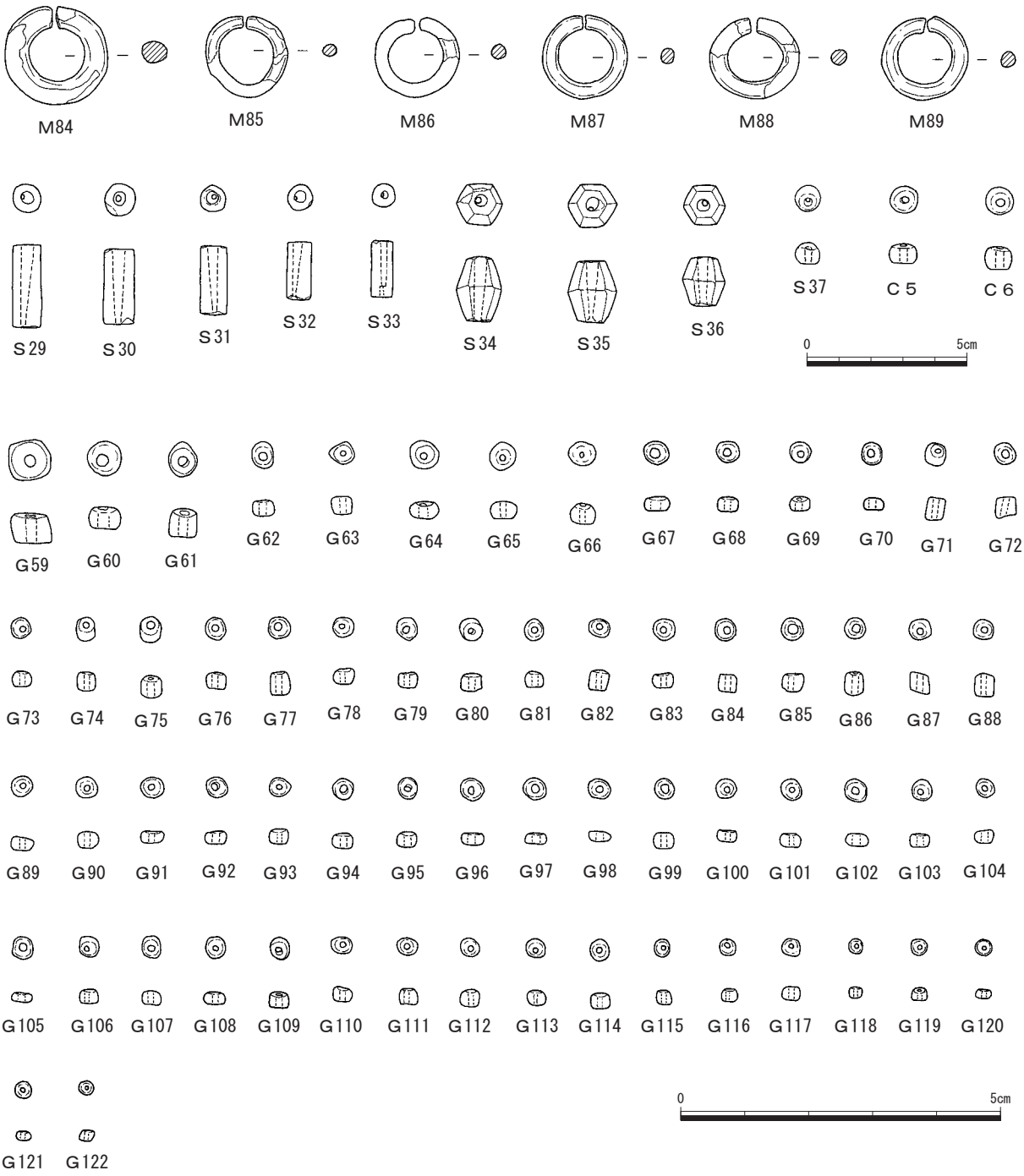


第 130 図　細畝３号墳石室内出土遺物⑤（1/3）

129 は丸底の直口壺で、外面には粗いハケメを施している。

武器（第 130 図、図版 85 － 2）

石室内から出土した武器には、大刀や鉄鏃などがある。大刀（M 51）は錆膨れによって層状に剥離していた破片が多数接合したもので、接合した破片以外にも同一個体と思われる破片が多数出土している。しかしながらこれらの接合は困難であり、大刀の全体形を復原できなかった。M 52 は、鉄製の鍔の破片である。主にＡ地区及びＢ地区から出土した鉄鏃（M 53 ～M 66）は、錆膨れによる層状

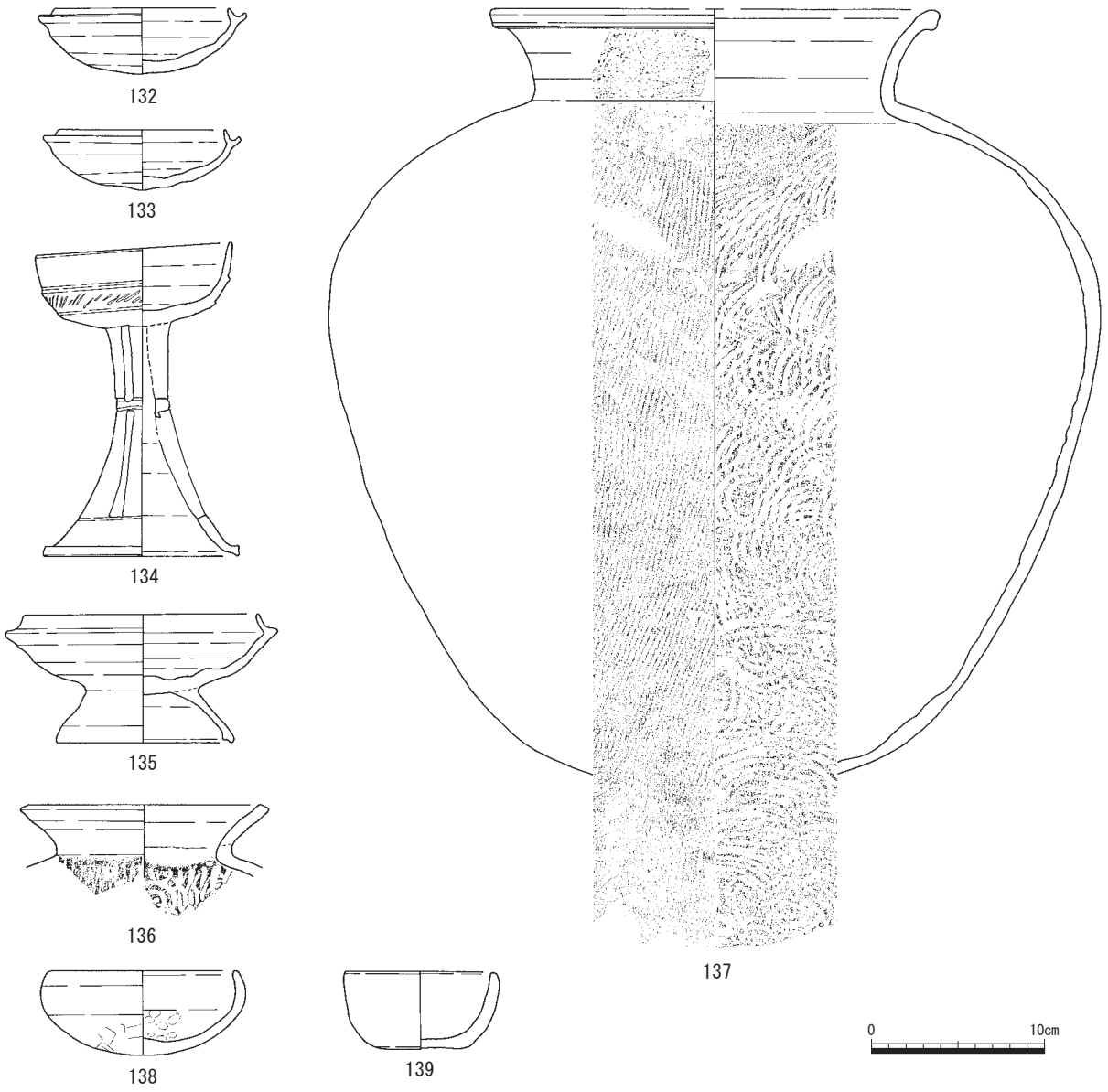


第 131 図　細畝３号墳石室内出土遺物⑥（1/2・1/1）

剥離が激しく、保存状態が不良のものが多い。型式は細根・柳葉式（M 57 ～M 60）、平根・腸抉柳葉式（M 62・M 63）、平根・方頭式（M 64 ～M 66）があり、平根鏃にはいずれも茎関に棘状突起を有していた。茎には、糸巻きの痕跡（M 62）と矢柄の木質（M 54・M 55・M 62・M 63）が残るものがある。

馬具（第 130 図、図版 85 －２）

図示した馬具は、ほぼすべてＢ地区から出土した。M 67 の鋲具は、中央部がくびれた隅丸長方形を呈する輪部に刺金を巻き付けたものである。M 68 は、M 67 と対になるものであろう。M 71・M 76 が銹着していたM 69 は瓢形環状鏡板付轡で、遊環を用いて鏡板・銜・引手を連結している。平面



第 132 図　細畝３号墳周溝・周辺出土遺物①（1/4）

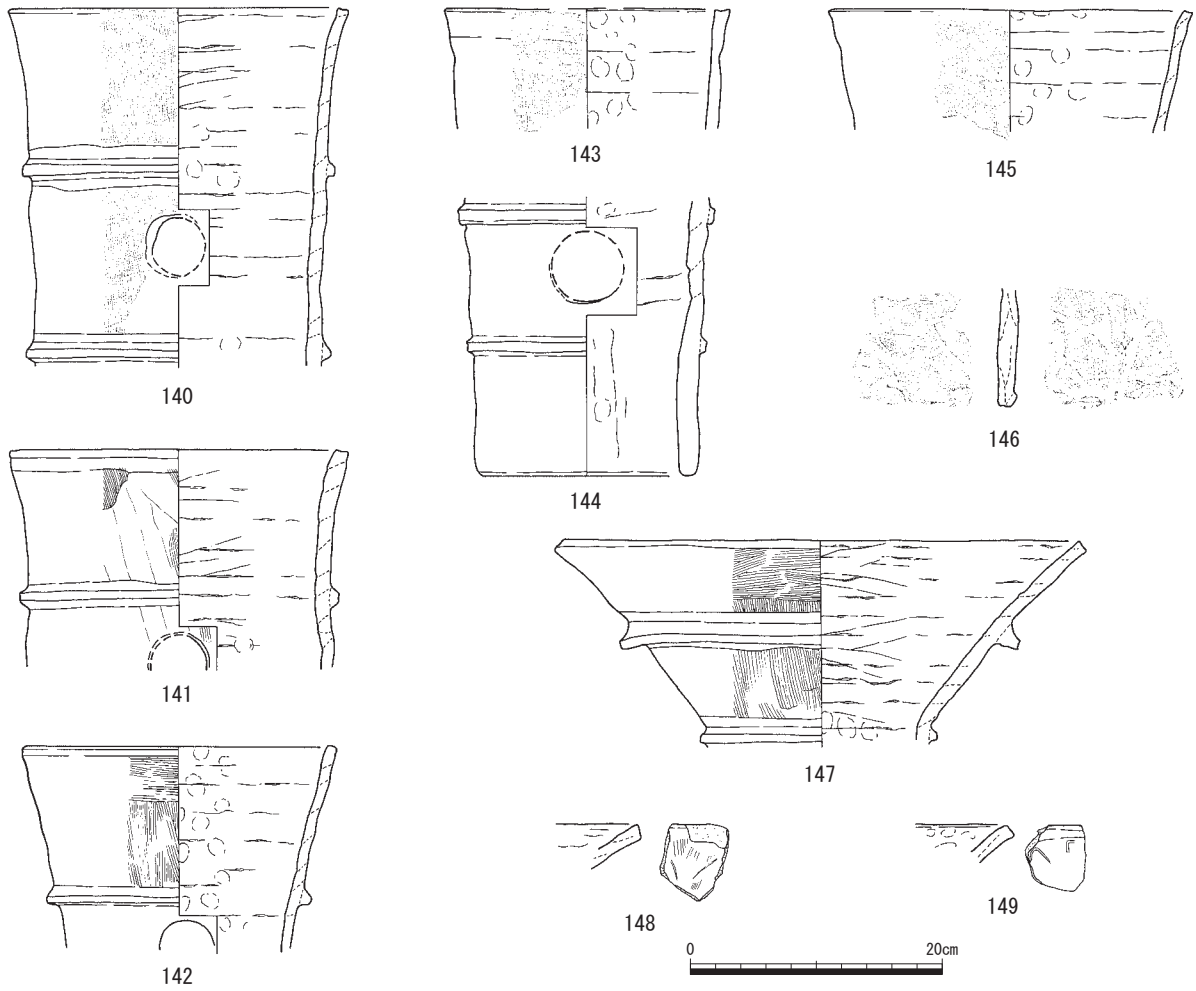
形態が菱形・正方形・長方形を呈した留金具（M 70 ～M 75）には、頭部が扁平な鋲が残存している。M 76 は扁平な板材を「U」字形に折り曲げたもので、その機能・用途等は不明である。

工具（第 130 図、図版 85 － 2）

刀子が６点（M 77 ～M 82）とこれら刀子のいずれかに用いられていたものと思われる鎚（M 83）が出土している。刀子には、柄に木質が残存しているもの（M 77・M 79・M 82）が認められる。鎚の内面には、木質が残存していた。

装身具（第 131 図、巻頭図版８－２、図版 86 － 1）

装身具は、耳環、管玉、切子玉、丸玉、小玉が出土している。耳環（M 84 ～M 89）はいずれも銅地銀貼りである。M 85・M 86・M 88 は遺存状態が悪く、銀貼りの剥落が激しい。管玉（S 29 ～S 33）はすべて碧玉製で、S 29 ～S 33 が片面穿孔、S 33 が両面穿孔である。S 31 には、面取り状の研磨痕が残っている。水晶製の切子玉（S 34 ～S 36）は片面穿孔で、下部に割れ円錐が観察できるものもある。丸玉には水晶製（S 36）と粘土製（C５・C６）がある。小玉（G 59 ～G 119）はす



第 133 図　細畝３号墳周溝・周辺出土遺物②（1/6）

べてガラス製である。G 59 ～ G 61 は径５㎜以上で、濃い青色の色調を呈する。径５㎜未満の小玉の色調は、おおむね濃い青、淡い青、淡い緑、濃い赤の系統に分類できる。

５　その他の遺物

石室外からの出土遺物として、周溝や周辺流土から出土した土器や埴輪がある（第 132・133 図）。132・133 の須恵器杯身は、隣接して検出されたもので、北側周溝の底面近くで出土した。134 は長脚２段３方向透かしの無蓋高杯で、杯部下半にヘラ状工具による刺突文が巡る。短脚の有蓋高杯 135 は、墳丘の流土中から出土している。須恵器大甕 137 は、その破片の多くが３号墳の北側周溝の埋土中であるが、２号墳の墳丘上からも数点の破片が出土していることから、２号墳の墳丘上に置かれていたかもしれない。円筒埴輪（140 ～ 146）の外面調整はタテハケを主としているが、口縁部にヨコハケが施されている 142 も認められる。148・149 は 147 とは別個体の朝顔形埴輪で、口縁部に波状を呈する線刻が描かれている。（小嶋）

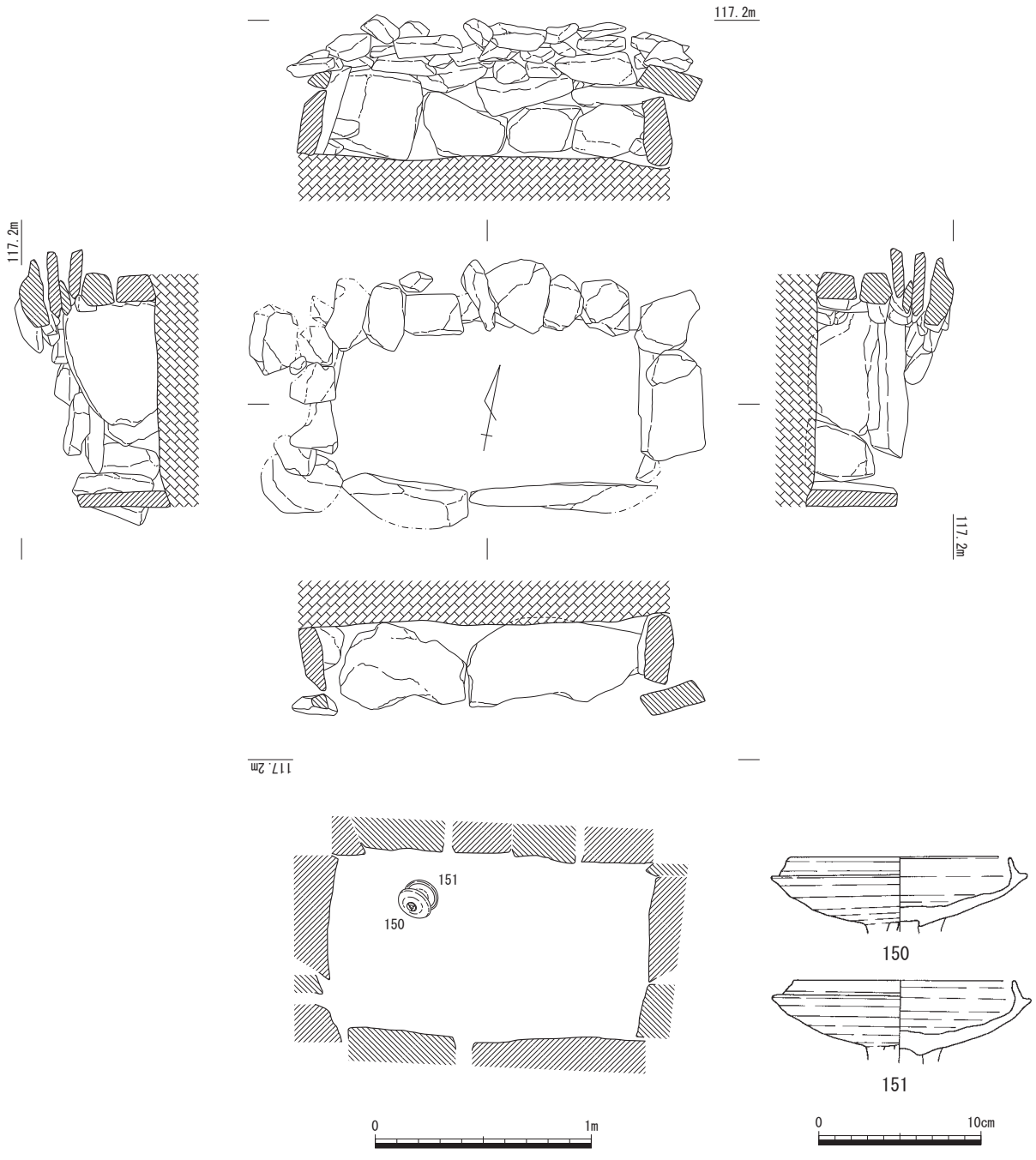
註

（１）山田邦和『須恵器生産の研究』学生社　1998

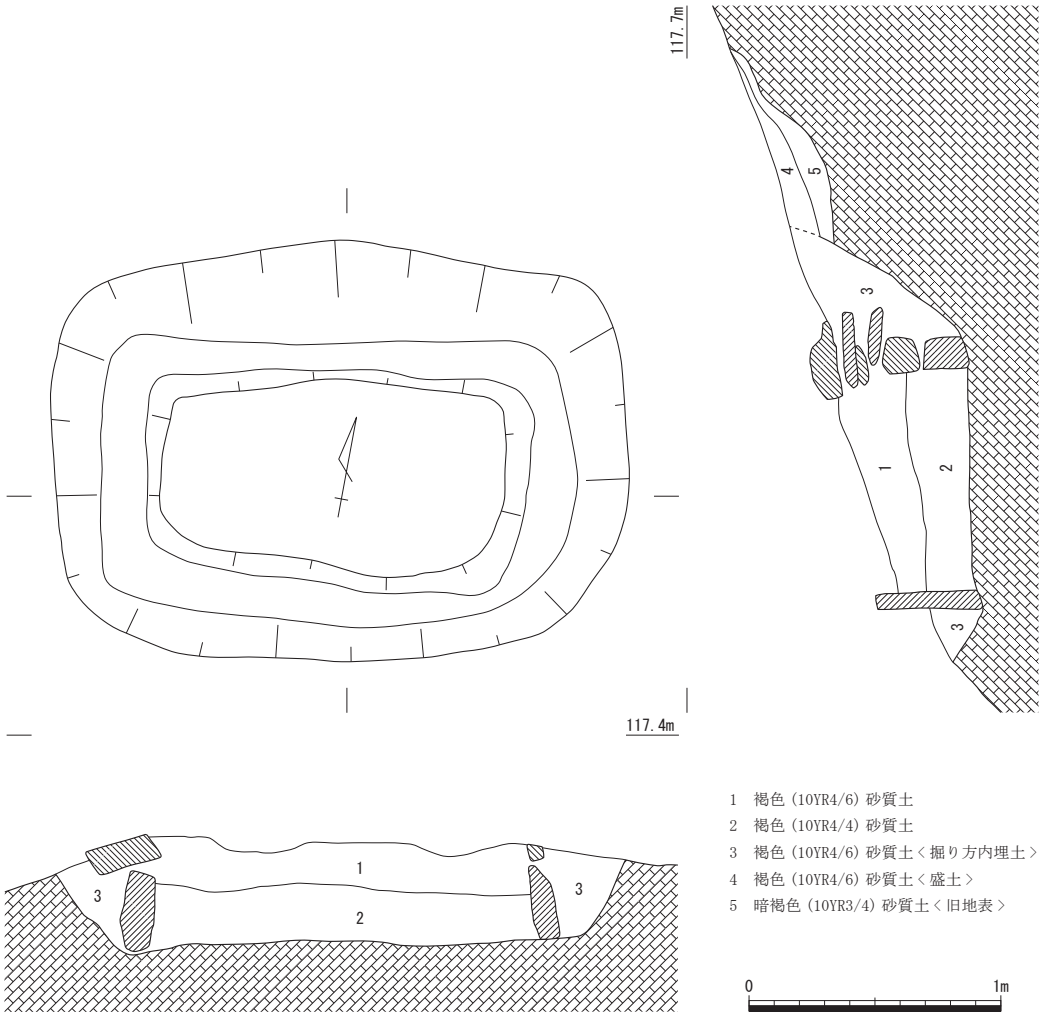
第５節　箱式石棺墓

箱式石棺墓１（第 134・135 図、図版 75・86 －３）

１号墳の南東で検出された箱式石棺墓で、１号墳の墳丘とは重ならない位置にある。主軸をほぼ東西に向け、規模は内法で長さ 149cm、最大幅 87cm、残存する深さ 62cm を測る。四辺の壁は、いずれも基底部に大きな石を腰石状に立て、上部に薄い小型石材を内傾させながら小口積みにする。南壁は上部を流失している。床面は西側がやや高く、西に頭を向けて埋葬されたと考えられる。



第 134 図　箱式石棺墓１（1/30）・出土遺物（1/4）



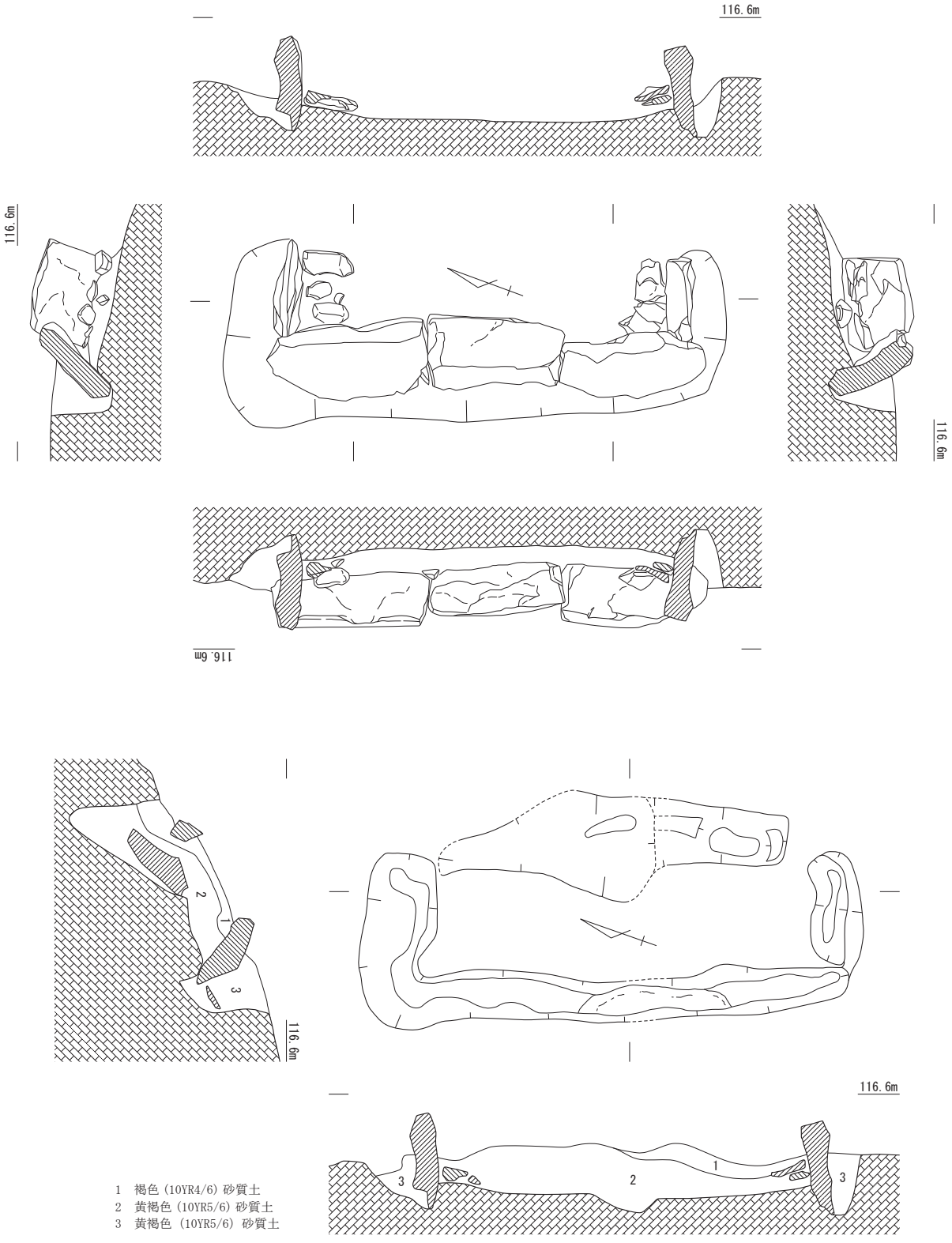
第 135 図　箱式石棺墓１掘り方・土層断面（1/30）

石棺構築のための掘り方は隅丸長方形の平面で、底部四周にごく浅い溝を掘って基底石を据えている。掘り方外の南北土層断面をみると、流失が著しいが、北側に旧地表及び盛土と考えられる層がわずかに認められ(第135図４・５層)、それを切り込んで掘り方を穿っているようである。小規模な墳丘を伴っていた可能性があり、周辺地形をみても箱式石棺の北側に若干の隆起が認められる（第 90 図)。周溝の検出にも努めたが、確認されなかった。

石棺内の遺物は、床面上で須恵器有蓋高杯の杯部のみを折り取ったものが２点、合わせ口にして出土した（**150･151**)。６世紀中葉頃のものとみられ、１号墳の築造に先行するであろう。　　（尾上）

箱式石棺墓２（第 136 図、図版 76 － 1 ・76 － 2）

２号墳の東側に位置する。調査前にはすでに天井石と東側の石は取り去られており、西側の石も石棺内側に大きく傾いた状態で、かなり激しく撹乱を受けていた。規模は長軸が 188cm、短軸は推定 50cm、高さは40cmを測る。石棺内からは両小口で礫を検出した。北側の礫は角が丸い川原石なのに対し、南側の礫は石棺の壁体と同じ角張った凝灰岩である。これらの礫が原位置を保つのか、撹乱時に混入したかは不明であるが、仮に原位置を保つとすれば枕としての機能が想定される。この石棺に伴う遺物は出土していない。　　（藤井翔）



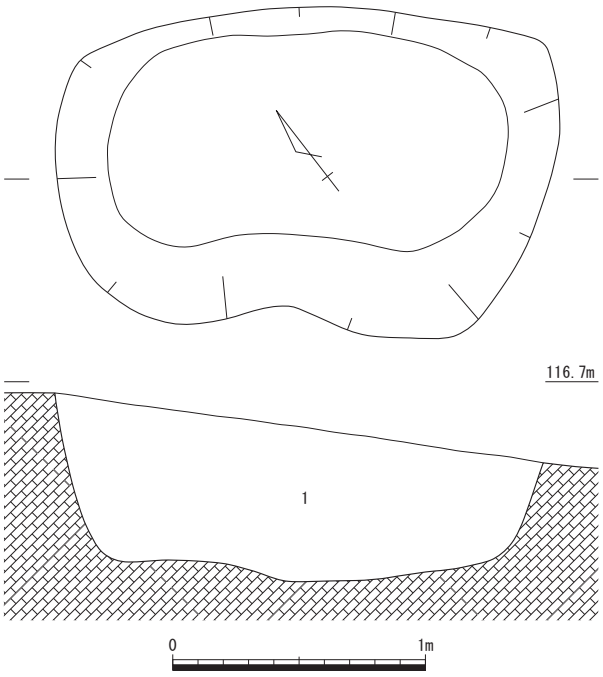
第 136 図　箱式石棺墓２（1/30）

第６節　その他の遺構・遺物

１　土坑

土坑１（第 137 図、図版 76 － ３）

３号墳北側の周溝底部で検出された土坑である。土層観察から、３号墳周溝よりも古いものであることが判明している。検出面での長さ 194cm、最大幅 130cm、残存する深さ 64cm で、平面形はやや歪んだ隅丸長方形をなす。床面は凹凸があるがほぼ水平である。３号墳築造に先行する土坑墓の可能性も考えたが、遺物は全く出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



1　黄褐色（10YR5/8）砂質土
（緑灰色・明黄褐色の地山ブロック土を含む）

第 137 図　土坑１（1/30）

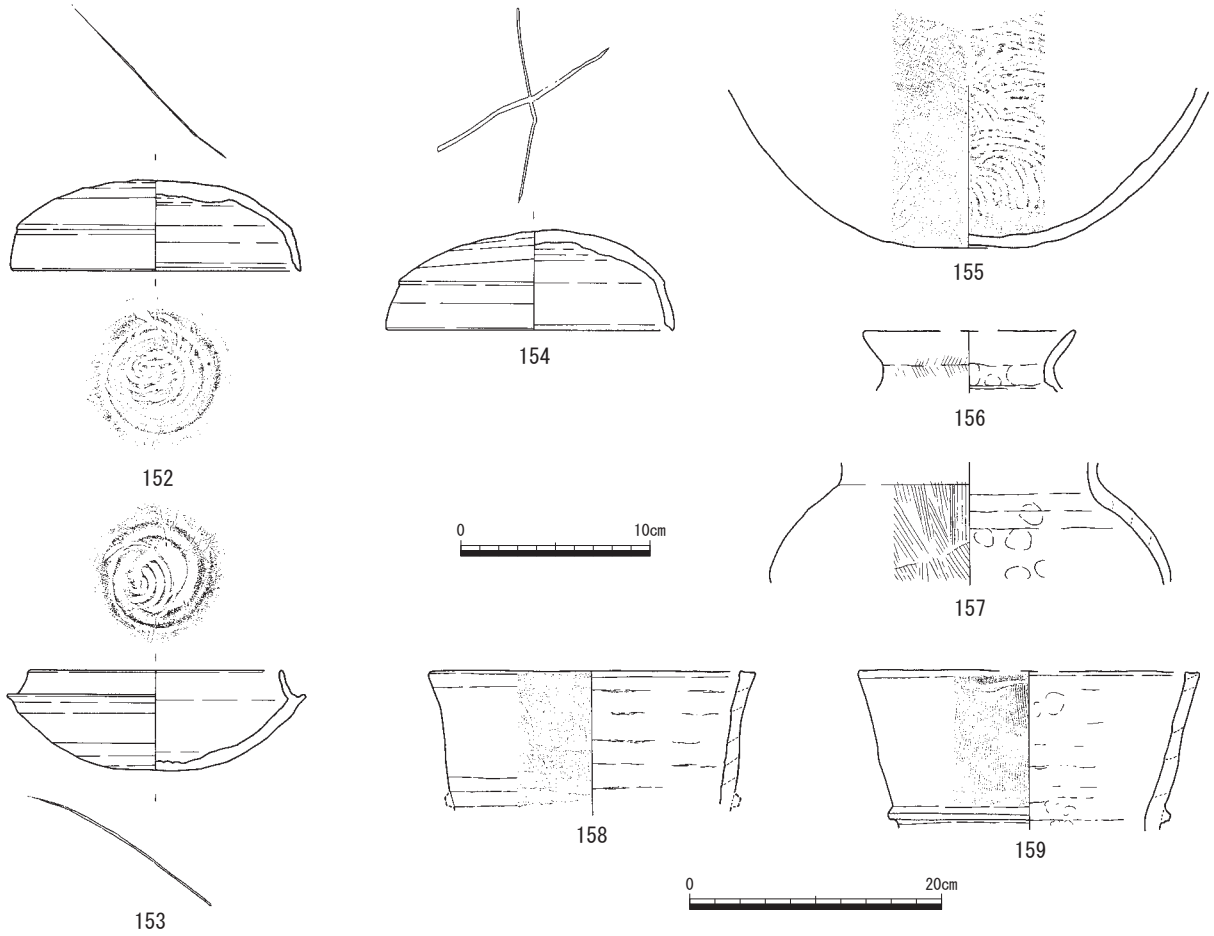
２　細畝１号墳下層遺物

１号墳の盛土や横穴式石室掘り方内を掘削する過程で、石室内出土遺物よりも古い時期を示す土器や、埴輪片が多数出土した。「１号墳下層遺物」として報告する（第 138 図）。

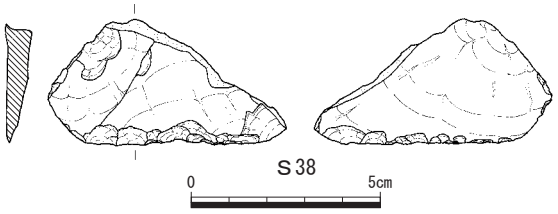
須恵器は蓋杯が多い。**152・154** は杯蓋で、口径 15.1 ～ 15.2cm、器高 4.8 ～ 5.3cm を測る。外面の肩部に段をもち、口縁端部には内傾する明瞭な面ないし段をもつ。天井部外面には、**152** は浅く不鮮明な一文字状のヘラ記号、**154** は十字状のヘラ記号がある。天井部内面には、**152** が同心円当て具痕を残すのに対し、**154** は仕上げナデを行っている。**153** は杯身で、口径 13.3cm、器高 5.4cm を測り、底部外面に浅く不鮮明な一文字状のヘラ記号が認められる。**152** の蓋と **153** の身は、内面中央の同心円当て具痕、外面のヘラ記号、胎土・色調・焼成など共通点が多く、組になるものと考えられる。**155** は須恵器甕底部付近の破片である。**156・157** は土師器甕で、小型の **156** は外面から口縁部内面にかけて赤色顔料が塗布されている。**158・159** は円筒埴輪口縁部の破片で、外面はタテハケ、内面はナデ調整である。口縁端部はほぼ水平でやや内湾する面をなし、突帯は断面台形で幅狭い。これらの特徴は３号墳出土埴輪に類似する。

これらの遺物の解釈であるが、須恵器の蓋杯は細畝古墳群３基のいずれの古墳よりも明らかに古い特徴を示している。周辺に別の古墳もみられないことから、桑山南古墳群と同様、付近に存在した箱式石棺墓や土坑墓に伴うもので、１号墳の築造に伴って破壊、攪乱を受け混入したものと推定しておきたい。箱式石棺墓１・２はそれら墓群の一部であった可能性がある。一方、円筒埴輪については、箱式石棺や土坑墓に伴う可能性は考えにくい。１号墳よりも古い３号墳が埴輪を伴っており、埴輪の特徴も似ていることから、３号墳に樹立された埴輪の一部が、１号墳築造時に混入したものと考えられる。

（尾上）



第 138 図　細畝１号墳下層遺物（1/6・1/4）



第 139 図　遺構に伴わない遺物（1/2）

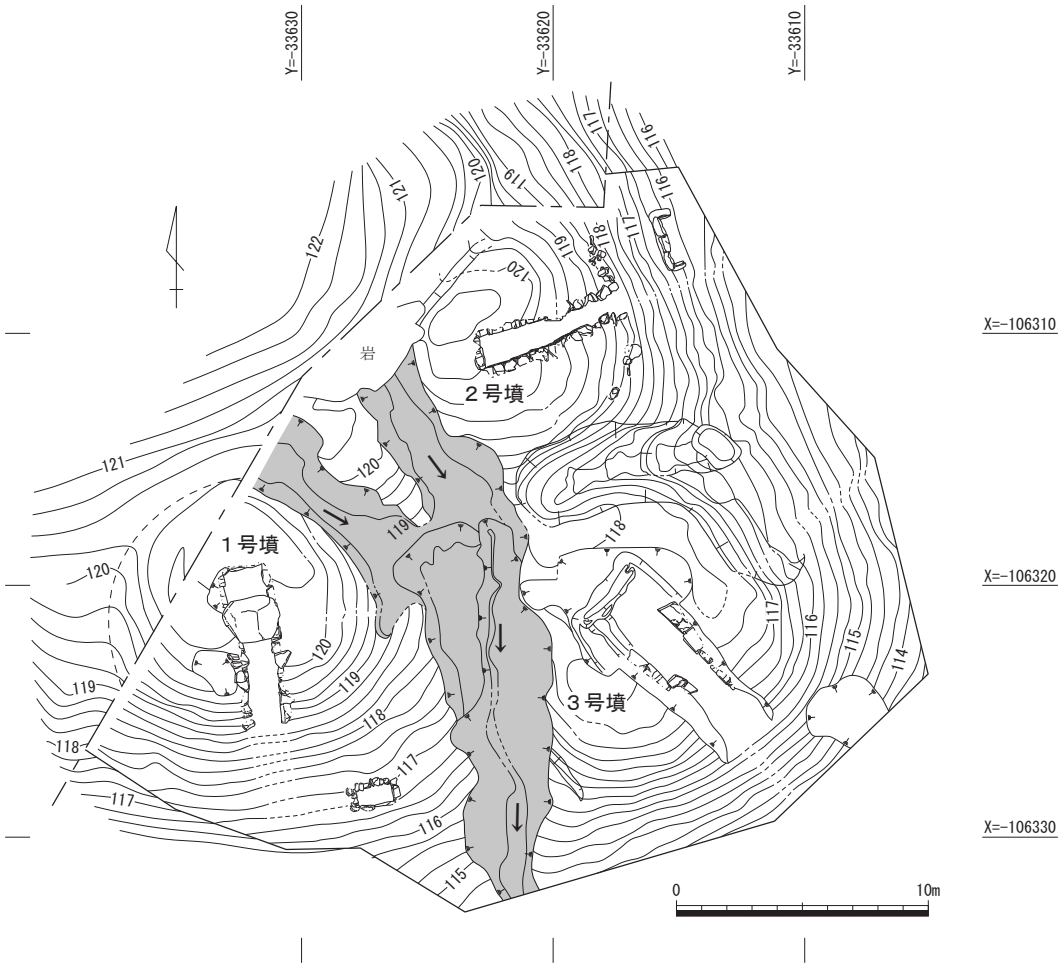
３　その他の遺物

流土及び墳丘盛土からは土器小片や石器が出土しているが、図化できたのは、平面三角形を呈するサヌカイト製のスクレイパー（S 38）のみである。その素材は、180°の打面転移を行いつつ剥片剥離をしていた石核から剥離された不定形剥片で、背面右側縁に原礫面が認められる。剥片末端部に施されたスクレイパーエッジは、背面側からの調整で剥片の形を整えた後、腹面側から緩やかな角度の調整で形成していた。サヌカイトの風化状況をみる限り、帰属時期は弥生時代と考えられる。（小嶋）

第７節　石室石材の再利用

１号墳と２・３号墳との間に、「Y」字形に走る溝が検出された（第 140 図）。地形に合わせて北から南に降っている。１号墳墳丘の東縁、２号墳墳丘の西縁、３号墳墳丘の西縁に沿っており、当初は各古墳の周溝の可能性を考えた。しかし、溝の中から矢穴をもつ石材が多数出土することから（写真 26）、後世に石室石材を採取した際の搬出路であろうと推定した。３基の古墳の天井石はほとんどが持ち去られ、３号墳は奥壁を含めて玄室の奥半分を失っており、大規模な採石が行われたようである。石材の利用目的ははっきりしないが、周辺の河川や池の堤体などに使われた可能性のほか、石材が津山城石垣と同じ凝灰岩（通称「津山石」）であることから、津山城石垣に利用された可能性もある。　（尾上）

写真 26　矢穴のある石材



第 140 図　石室石材搬出溝（1/300）

第５章　自然科学的分析

第１節　桑山南古墳群・桑山古墳群 (1) 出土赤色土の自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

１　はじめに

津山市高尾 1582 他に所在する桑山古墳群・桑山南古墳群の発掘調査で出土した赤色土について、蛍光Ｘ線分析を行い、顔料の種類を検討した。

２　試料と方法

分析対象は、桑山古墳群・桑山南古墳群より出土した赤色土である（第３表、写真 27)。また、比較試料として､古墳周辺の斜面で採集した赤色土も分析対象とした(試料 No. ５､６)。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極微量採取して、分析試料とした。

第３表　分析対象

試料 No.	遺跡名	出土地区	出土遺構	重量 (g)	時期	備考
1	桑山南古墳群	H29 調査範囲	土坑墓 1	—	古墳時代後期	須恵器小壺底部、長さ 12mm ×幅 0.5mm 程度の亀裂内に付着
2	桑山南古墳群	H30 調査範囲	2 号墳主体部	16.66	古墳時代後期	蓋石に付着したものを一部採集
3	桑山南古墳群	H30 調査範囲	2 号墳墳頂	2.20	古墳時代後期	須恵器片に付着したものを一部採集
4	桑山古墳群	H30 調査範囲	2 号墳石室	19.21	古墳時代後期	石室壁面に付着したものを一部採集
5	—	古墳周辺	—	4.48	—	赤土サンプル① 古墳周辺の斜面で採集
6	—	古墳周辺	—	5.11	—	赤土サンプル② 古墳周辺の斜面で採集

分析装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大 50kV･1mA のロジウムターゲット、Ｘ線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光Ｘ線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は､50kV､0.94mA(自動設定による)､ビーム径 100 μ m､測定時間 500s に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光Ｘ線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色土の粒子形状を確認した。

３　結　果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第141図・第142図に示す。分析の結果、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、リン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）等が検出された。

生物顕微鏡観察により得られた画像を写真28に示す。赤色パイプ状の粒子は観察されなかった。

４　考　察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe203、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬，2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約１μｍのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田，1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬，1998)。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料からは、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。一方で鉄が検出されているため、赤い発色は鉄によるものと推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。パイプ状粒子は観察されず、いわゆるパイプ状ベンガラではなかった（写真28)。いずれも鉄の含有量はそれほど多くなく、鉄化合物以外の不純物を多く含んでいるといえる。肉眼的には、色調は褐色がかっており、赤みはそれほど強くないが、顕微鏡観察においては、褐色のやや大きい粒子に、赤褐色の細かい粒子が混ざっている様子が観察された。

化学組成や顕微鏡観察でみられる特徴が非常によく似ており、６点が同一材料である可能性も十分に考えられる。

５　おわりに

遺跡より出土した赤色土を分析した結果、６点いずれも鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。いずれもよく似た特徴を持ち、鉄含有量はそれほど多くなく、不純物を多く含む。

引用文献

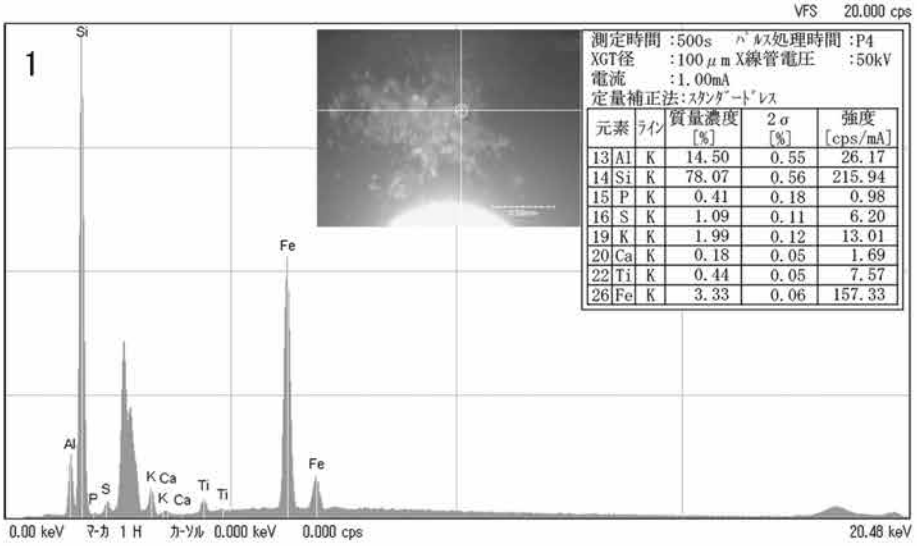
成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤彩土器―．考古学ジャーナル，438，10-14，ニューサイエンス社.

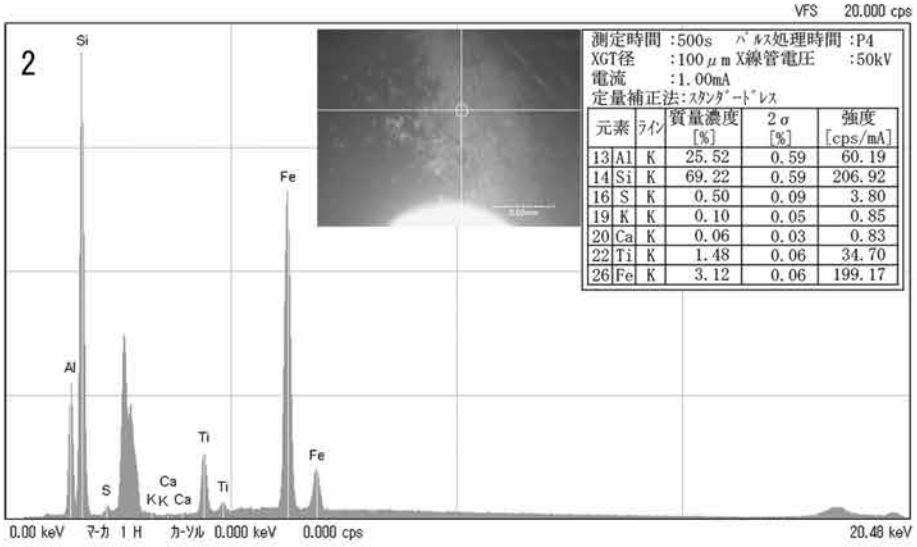
成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要，26，13-61，宮内庁正倉院事務所.

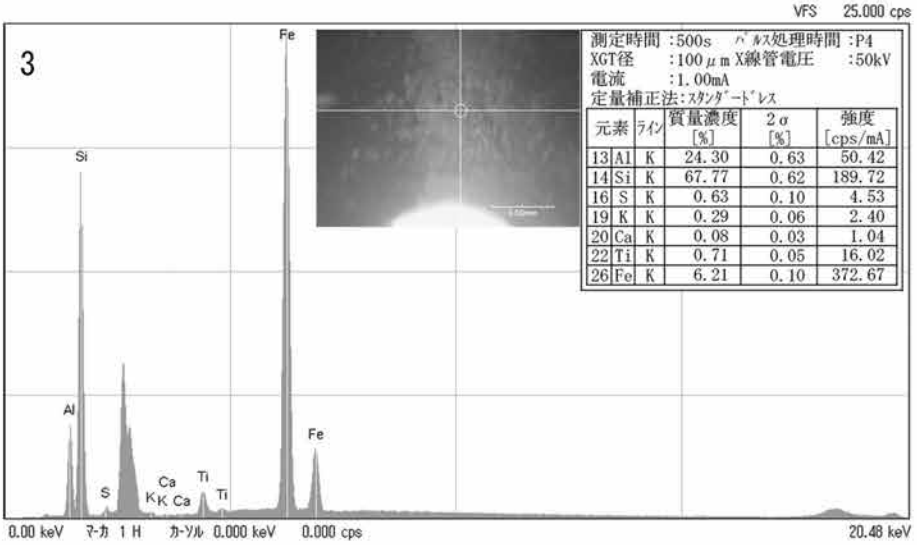
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集，38-39.

註

（１）桑山古墳群の発掘調査成果は本書に収載していない。次年度刊行の報告書に収載予定である。

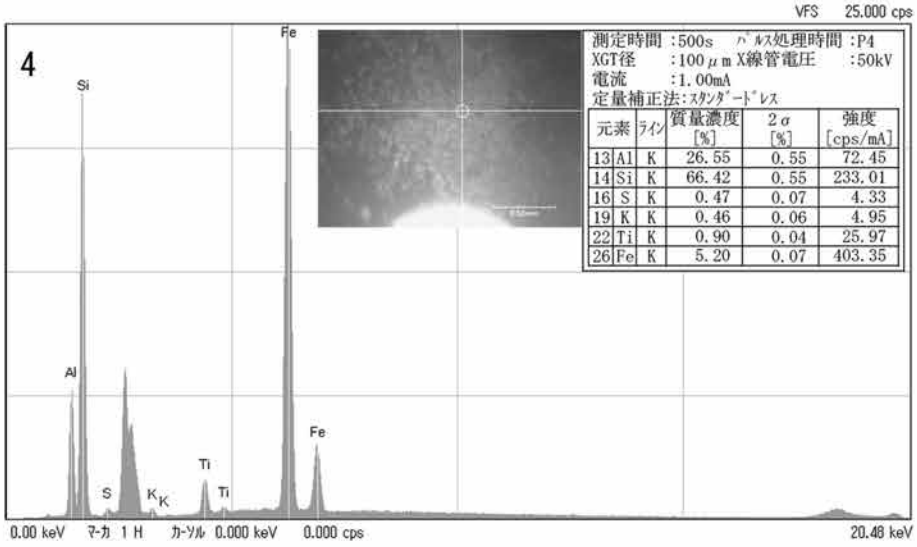


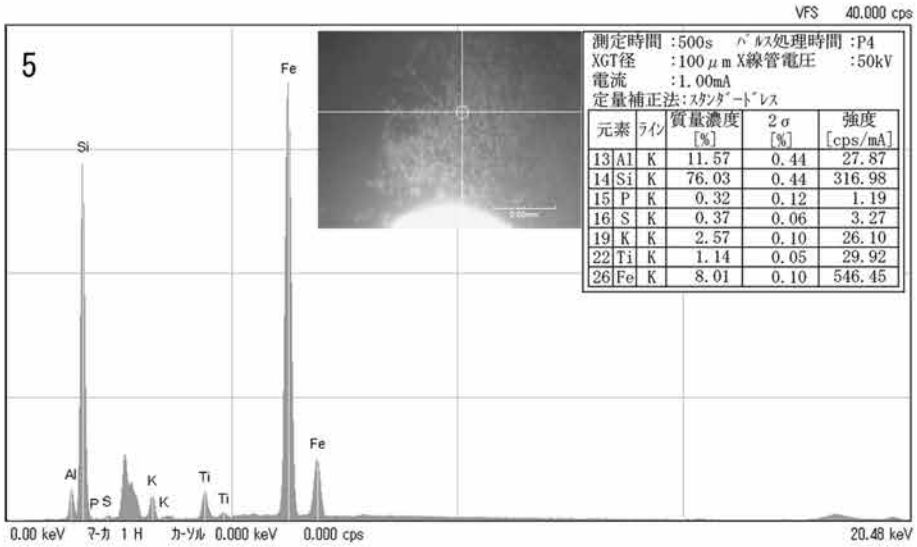


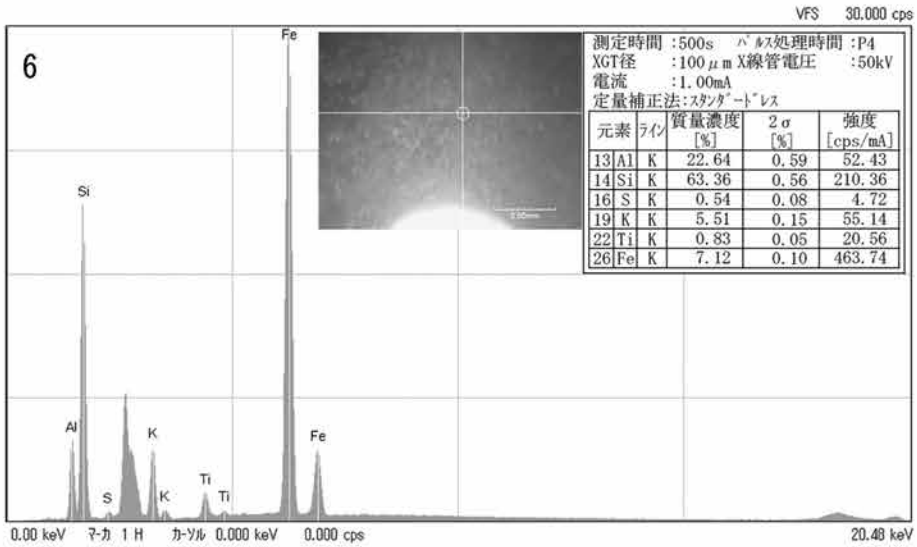


第 141 図　赤色土の蛍光Ｘ線分析結果①

1 試料 No.1　2 試料 No.2　3 試料 No.3







第 142 図　赤色土の蛍光Ｘ線分析結果②

4 試料 No.4　5 試料 No.5　6 試料 No.6

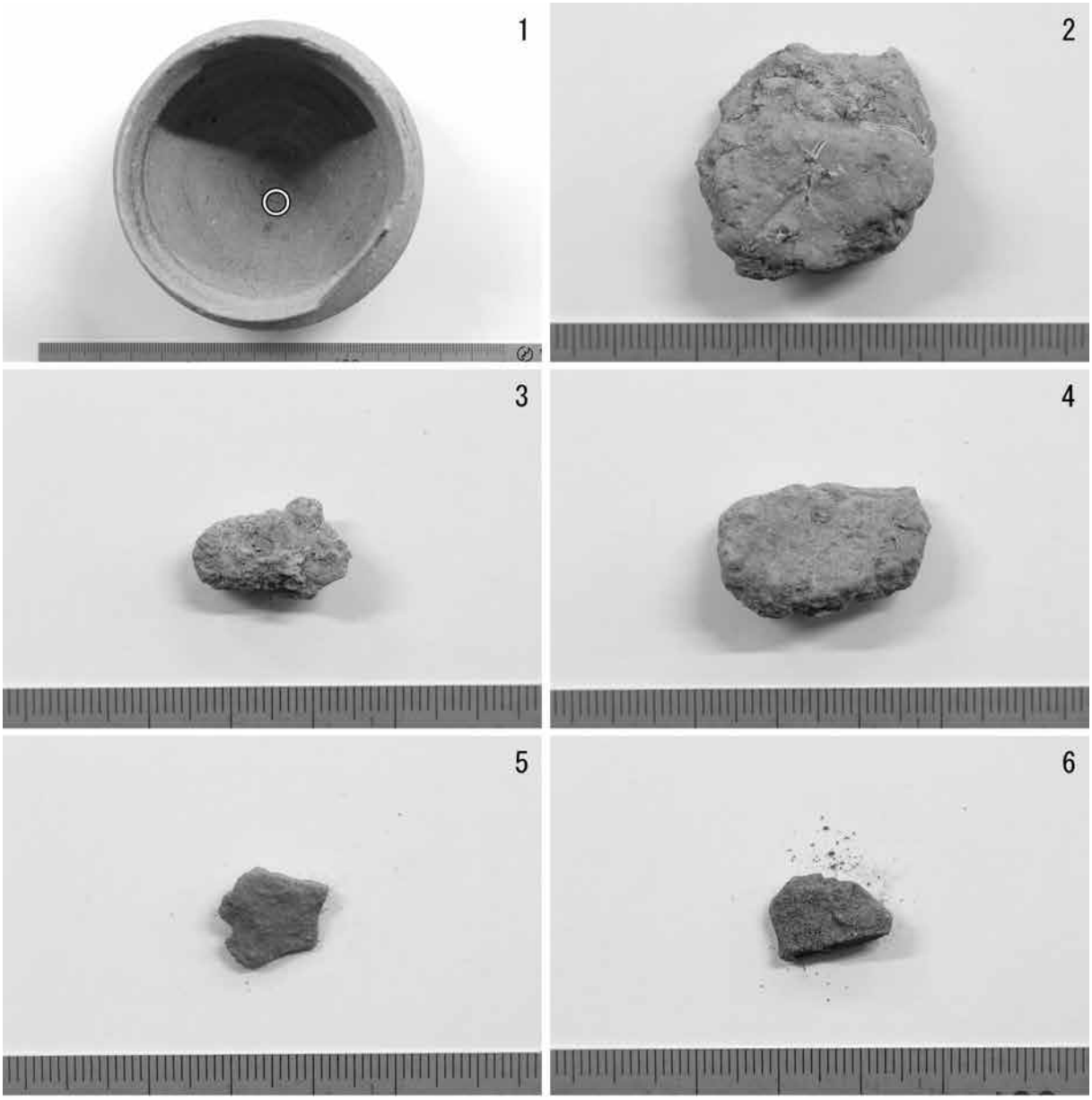


写真 27　分析対象試料写真

1 試料 No. 1（○は試料採取位置）　2 試料 No. 2　3 試料 No. 3　4 試料 No. 4　5 試料 No. 5　6 試料 No. 6

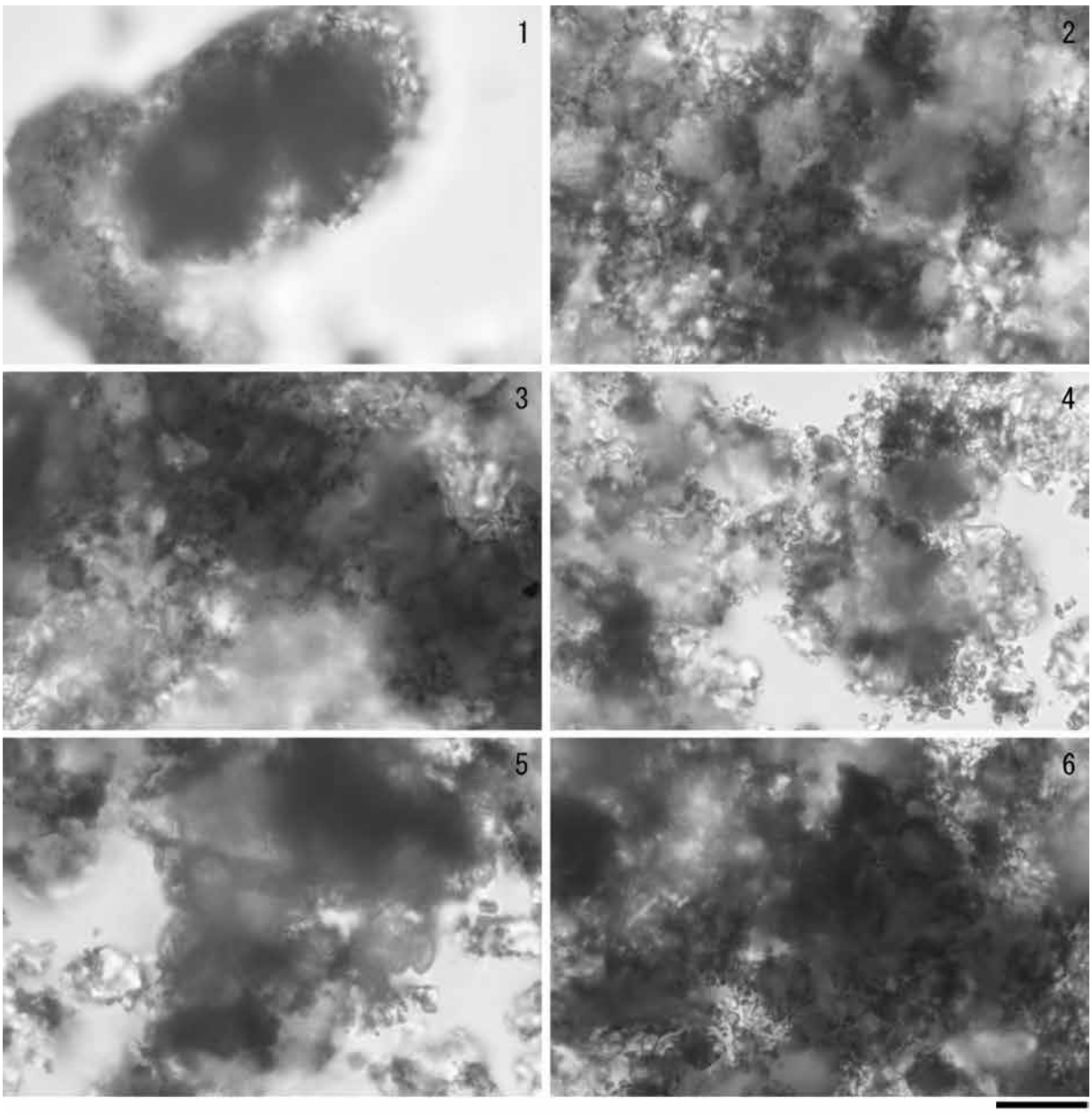


写真 28　赤色土の生物顕微鏡写真（スケール：10 μ m）

1 試料 No.1　2 試料 No.2　3 試料 No.3　4 試料 No.4　5 試料 No.5　6 試料 No.6

第２節　桑山南５号墳出土人骨の観察結果の報告

岡山大学文明動態学研究所　鈴木真太郎
岡山大学文学部　若山　聡良

本節は桑山南５号墳出土（岡山県古代吉備文化財センター 2020）の人骨を、肉眼および実体顕微鏡で観察した骨学的所見の記述である。観察は発掘を担当した岡山県古代吉備文化財センターから人骨資料を借り受けた令和２年８月から同年 12 月にかけて、岡山大学社会文化科学研究科（当時）鈴木真太郎研究室において、鈴木真太郎と同学文学部所属若山聡良が行った。

１　人骨への技術的な介入

人骨資料を借り受けた際、資料はビニールの小袋に分けられており、それぞれのビニール袋には数字（Ｂ１～Ｂ 22）あるいは石室内における出土地点が記載されていた（第 147 図）。今回の鑑定ではこの出土コンテクストによる分類を最優先し、通常骨学的に推奨される部位ごとの再分類は行わなかった。現在も全ての資料は出土時の状況に応じた当時の分類を維持している。

また全ての資料はすでに十分な清掃がなされた状況にあった。そのため骨資料の水を用いた清掃は行っていない。歯牙資料についてのみ、エナメル質に付着した土を適切に取り除き、表面の詳細な観察を行うため、70％アルコールと精製水を混ぜた溶液で湿らせた柔らかい歯ブラシで清掃を行った。接着剤等を用いた修復や復元は一切行なっていない。

２　被葬者数

遺存が確認されている骨資料、歯牙資料の中で重複は確認されず、単一の個体である可能性が高い。

３　基礎的ライフデータの取得

基礎的ライフデータ（性別及び死亡時年齢）の取得はあらゆる考古人骨研究の基礎となるステップである。人はその所属する社会において性別や年齢の影響を受けながらその社会的な役割を果たしていくことが知られている（Díaz-Andreu et al.2005）。骨学鑑定においては主に以下の手順で基礎的ライフデータを取得することができる。

性別は寛骨（Phenice 1969）や頭蓋骨の形態学的特徴の観察によって同定することができる（cf. Buikstra & Ubelaker 1994; White et al. 2011; Bass 2005）。長骨の計測によって判別する場合もあるが（eg.Black 1978）、集団間の差異が大きく、運用は難しいとされている。

成年の場合の死亡時年齢も同様に寛骨に見られる恥骨結合面（Todd 1920; Suchey et al. 1984, 1986）や腸骨耳状痕の変化（Lovejoy et al. 1985）、歯牙の損耗（Brothwell 1981; Lovejoy 1985）、頭蓋骨縫合線の接合状況（Meindl & Lovejoy 1985）、肋骨の胸骨側関節面の変化（Iscan et al. 1984a, 1984b）、等を観察することによって得ることができる。さまざまな骨を切り出し切片とし、偏光顕微鏡下で精度の高い死亡時年齢を算出する組織形態学的手法（Gocha et al. 2019）も存在する

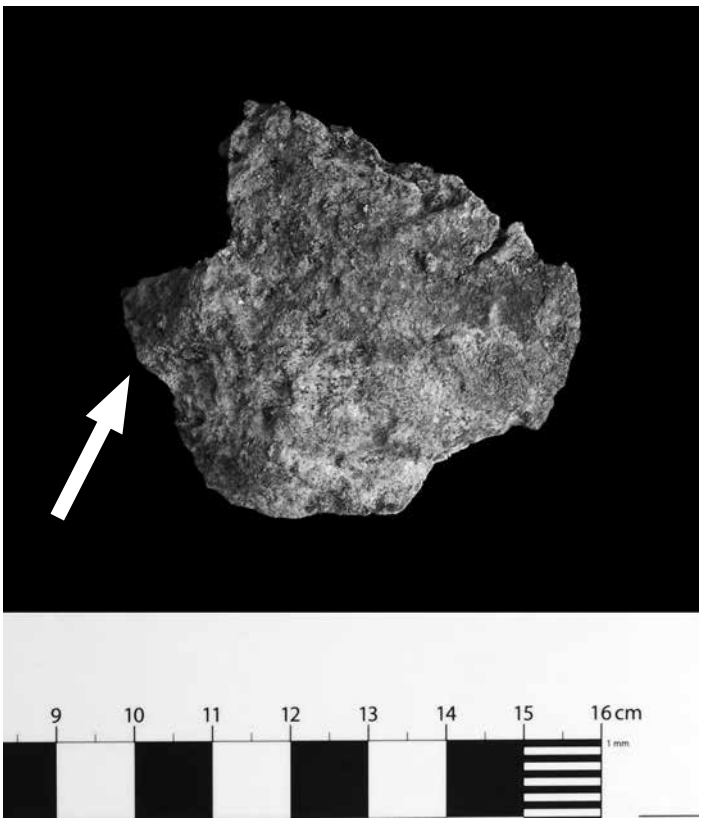


写真 29　後頭骨外後頭隆起（撮影　鈴木）

写真 30　下顎骨体下部（撮影　鈴木）

が、適用は多くの場合で未だ一般的とは言えない。

未成年の死亡時年齢は歯牙の放出状況（Ubelaker 1999）や骨端骨幹の接合状況（Lagunas 2000）、あるいは長骨骨幹の長さの計測（cf. Schaefer et al. 2009）によっても取得が可能である。

性別：おそらく男性

本人骨資料では遺存状態により性別の同定を行うための十分な所見を得ることはできなかった。寛骨は遺存しておらず、頭蓋骨の遺存状態も優れない。B 15 に含まれていた後頭骨片に認められた外後頭隆起の若干の発達（写真 29）と、B 22 に含まれていた下顎骨体下部の若干の発達（写真 30）が数少ない所見ではあるが、両者ともに性別を確定するほど信頼のおける所見とは言えず、「おそらく」男性という判別が適切である。長骨断片が多数遺存しているが、骨膜周辺は激しく損傷しており（写真 31）、定量的な判別を行うことは適切ではない。

死亡時年齢：成年、おそらく 35 歳以下

遺存している骨片の大きさ、歯牙の状態から成年個体であることが確認できる。歯牙の損耗状況から咬耗を総体的に考慮すると老年の個体であるとは考えづらく、35 歳以下程度の比較的若い年齢が考えられる。しかし、その他の指標となりうる部位の遺存状況に優れないため、これ以上の詳細な死亡時年齢の推定はできなかった。

4　骨資料の評価結果

骨資料は極めて遺存状態が悪く（写真 31）、病変の評価や形態学的な指標の計測を行うことはできなかった。

写真 31　右大腿骨骨幹（撮影　鈴木）

５　歯牙資料の評価基準

歯牙資料の評価には以下の基準（cf. Schultz 1988）を用いた。

歯牙う蝕

う蝕に関しては以下の判断基準（第４表）に基づいて、「う蝕の発生なし」を意味する 0.0 から「う蝕によるエナメル質全体、あるいは歯牙の完全な喪失」を意味する 4.0 までの段階に分けて定性的な評価を行った。

第４表　歯牙う蝕の評価基準

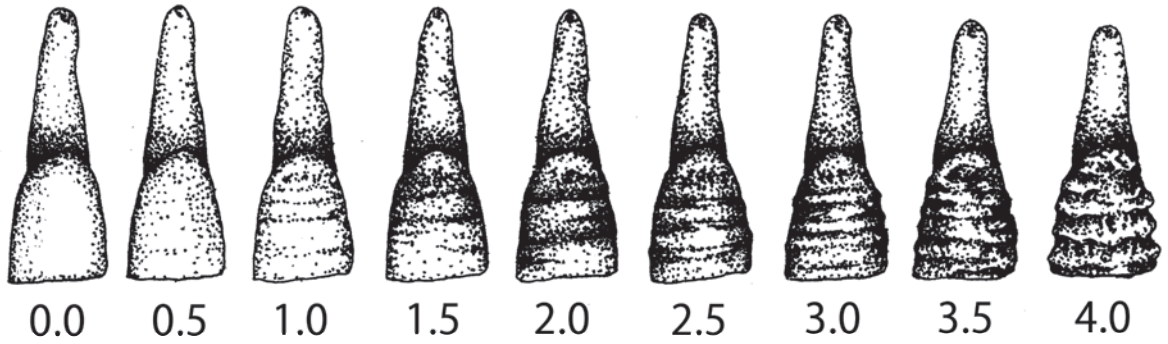
評価	う蝕発現基準	その他の特徴
0.0	一切のう蝕が認められない	なし
0.5	色調の異常 １㎜以下のエナメル質のう蝕	なし
1.0	１㎜から２㎜程度のエナメル質のう蝕	なし
1.5	２㎜から３㎜程度のエナメル質及び象牙質のう蝕	歯槽に変化
2.0	３㎜を超えるエナメル質及び象牙質のう蝕 ただし、う蝕部分は歯牙全体の 1/4 を超えていない	歯槽に変化、う蝕部以外の破損
2.5	歯牙全体の 1/4 程度がう蝕	歯槽に変化、う蝕部以外の破損
3.0	歯牙全体の 1/4 以上がう蝕	歯槽に変化、う蝕部以外の破損、歯髄腔の拡張、周辺歯牙への影響
4.0	エナメル質の完全なう蝕	歯牙の喪失、歯槽の閉塞

エナメル質減形成

エナメル質減形成は以下の判断基準（第５表、第 143 図）に基づき、「一切の減形成が認められない」0.0 から、「減形成に由来するエナメル質全体の深刻な形態異常」を意味する 4.0 まで段階に分けて定性的な評価を行なった。

第５表　エナメル質減形成の評価基準

評価	発現している減形成	発現部位	減形成による形態的な異常
0.0	なし	なし	なし
0.5	軽微な点、浅い溝状	部分的	なし
1.0	軽微な点、浅い波状	部分的	なし
1.5	軽微あるいは目に付く点 角度のある深い波状	部分的	なし
2.0	目に付く点 角度のある深い波状	エナメル質の 1/3 程度 口唇面に限定	減形成発現部位周辺での軽微な形態異常
2.5	目に付く点 角度のある深い波状	エナメル質の 1/3 程度 歯冠全面に発生	減形成発現部位周辺での軽微な形態異常
3.0	目に付く点 角度のある深い波状	エナメル質の 2/3 程度 歯冠全面に発生	口唇面
3.5	目に付く点 角度のある深い波状	歯冠全体	口唇面から外周
4.0	目に付く点 角度のある深い波状	歯冠全体	エナメル質全体の深刻な形態的異常



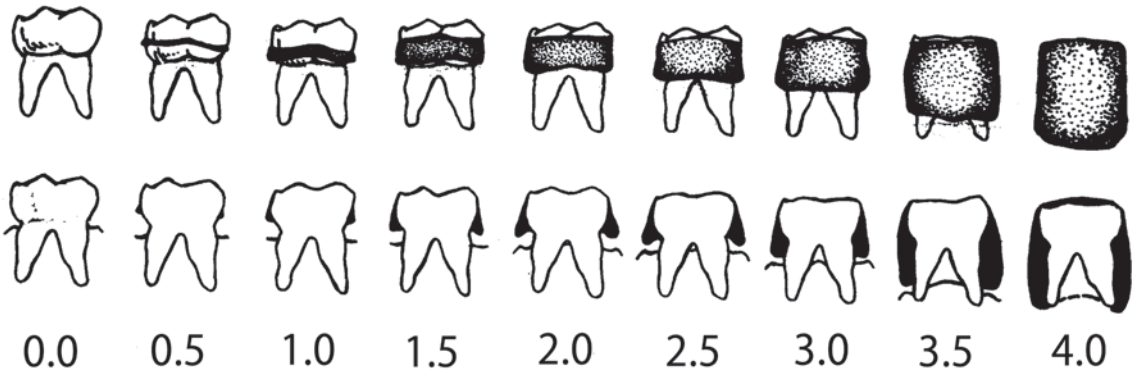
第 143 図　エナメル質減形成評価の基準（V.Tiesler 提供）

歯石

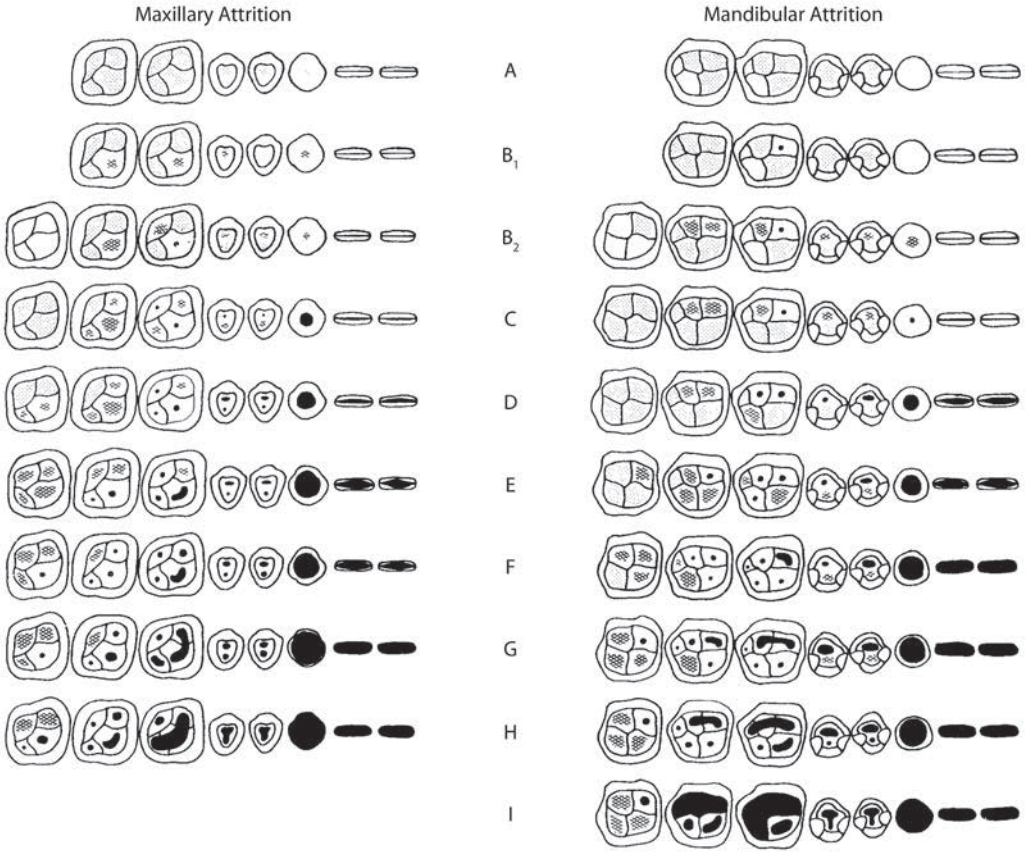
歯石の付着は第 144 図の評価基準に従い、「歯石の付着が一切認められない」0.0 から「歯牙全体が歯石で完全に覆われている」状態を指す 4.0 までの段階に分けて定性的評価を行なった。

歯牙損耗

歯牙の損耗については切歯、犬歯、小臼歯と、大臼歯を分けて記録を行った。前者は第 145 図（Lovejoy 1985）の評価基準を用いて遺存している歯牙を 1 点ずつ 9 あるいは 10 段階に分けて定性的な評価を行ない、大臼歯も第 146 図（Brothwell 1981）の評価基準を用いて 1 点ずつ 0.0 から 4.0 の段階に分けて定性的に評価した。これは大臼歯を同基準に基づいて評価し、食料事情を解釈した筆者の先行研究（鈴木 2018）と将来的な比較研究の可能性を考慮したためである。



第 144 図　歯石付着の評価基準（V.Tiesler 提供）



第 145 図　切歯、犬歯、小臼歯における損耗の評価基準（Lovejoy 1985）

第 146 図　大臼歯における損耗の評価基準（Brothwell 1981 より鈴木改定）

６　歯牙資料の評価結果

歯牙資料の評価結果を以下の第６表にまとめた。

第６表　桑山南５号墳出土の人骨における歯牙資料

RM^3	RM^2	RM^1	RP^2	RP^1	RC^1	RI^2	RI^1	LI^1	LI^2	LC^1	LP^1	LP^2	LM^1	LM^2	LM^3	歯種
有		有			有											生破
0.5		2.25	B_1	D	C		D									損耗
0.0		0.25	0.25	0.0	0.0		0.5									歯石
-		-	0.5	0.75	1.0		0.75									減形
2.0		2.5	2.0	2.0	0.0		0.0									う蝕
人頭		石床	石床	石床	石床		人頭									取上
	B21	B20	B19	B18	歯出	歯出	歯出	B2	B3	B4	B5	B6	B16	B17		取上
	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0?	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		う蝕
	0.0	0.0	0.0	0.25	1.5	1.5	0.75	0.5	1.0	2.0	0.25	0.5	0.25	0.5		減形
	0.25	0.25	0.0	0.0	0.0	0.25	0.0	1.25	0.25	0.25	0.25	0.25	0.75	0.75		歯石
	1.0	2.25	B_1	B_2	D	D	D	C	D	E	B_1	B_2	1.0	0.5		損耗
	有			有		有			有		有	有	有	有		生破
RM_3	RM_2	RM_1	RP_2	RP_1	RC_1	RI_2	RI_1	LI_1	LI_2	LC_1	LP_1	LP_2	LM_1	LM_2	LM_3	歯種

略語表記
取上＝発掘現場における取り上げ位置記録情報、減形＝エナメル質減形成
生破＝生前のものと思われるエナメル質の破損
石床＝石室内床面付近／２枚重ね杯の近く
歯出＝石室内床面付近／歯出土地付近
人頭＝室内人骨頭部付近
R＝右側歯列、L＝左側歯列、I＝切歯、C＝犬歯、P＝小臼歯、M＝大臼歯
上付き数字＝上顎歯列、下付き数字＝下顎歯列

７　分類毎の詳細な遺存状況

Ｂ１　肩甲骨あるいは後頭骨と思われる骨片が１点である。

Ｂ２　左下顎の中切歯である。歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 0.5、歯石の付着が 1.25、損耗がＣとそれぞれ評価された。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のものである。

Ｂ３　左下顎の側切歯である。歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 1.0、歯石の付着が 0.25、歯の損耗がＤ、とそれぞれ評価された。生前のものと思われる 0.2 × 0.3 ㎜程度のエナメル質の破損が唇面遠心側にみられた。他にも数カ所エナメル質が破損しているが、これらは死後のものである。唇面には黒い変色も認められた。

Ｂ４　左下顎の犬歯である。歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 2.0、歯石の付着が 0.25、歯の損耗がＥ、とそれぞれ評価された。前面には黒い変色が見られた。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のものである。

Ｂ５　左下顎の第一小臼歯である。歯冠・歯根共に一定の遺存状態にある。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 0.25、歯石が 0.25、歯の損耗がＢ１とそれぞれ評価された。Ｂ３と同様、生前のものと思われる 1.0 × 1.2 ㎜程度のエナメル質の破損が咬合面近心側に認められた。頬面に若干の黒い変色が見られている。

Ｂ６　左下顎の第二小臼歯である。歯冠・歯根共に一定の遺存状態にある。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 0.5、歯石の付着が 0.25、歯の損耗がＢ２とそれぞれ評価された。同様に生前のものと思われる 0.8 × 1.5 ㎜程度のエナメル質の破損が頬面近心側に認められた。Ｂ５同様、頬面に若干の黒い変色が見られた。頬面が特に摩耗しており、個体特有の噛み合わせに由来する可能性が考えられる。

Ｂ７　鎖骨と思われる骨片１点、下顎骨と思われる骨片１点である。

Ｂ８　右肩甲と思われる骨片１点である。

Ｂ９　尺骨か腓骨と思われる骨片１点である。

Ｂ10　上腕骨と思われる骨片４点である。他にも３点の同定不能な骨片が含まれている。

Ｂ11　右大腿骨である。骨幹がほぼ完全な形で遺存している。他にも同骨片が９点遺存しているが、接合は不可能である。出土時の図面と照合することで前外側面が上向きの状態にあり、南に遠位部、北に近位部が位置していたことが確認されている。

Ｂ12　大腿骨の骨片である。遠位骨幹片と中央骨幹片が遺存しており、他にも同骨片が10点遺存している。膝窩面がＢ11のものと対称であるため、左大腿骨であると推定される。前面が上向きに出土したことが報告されている。

Ｂ13　右頸骨である。骨幹部の3/4程度が遺存している。他にも同骨片が６点遺存している。正確な計測はできないが、扁平の度合いは高くないと思われる。出土時の図面と照合することで外側面が上向きの状態にあり、南に遠位部、北に近位部が位置していたことが確認されている。

Ｂ14　左頸骨である。骨幹近位側の2/3程度が遺存している。他にも同骨片が７点遺存していた。出土時の図面と照合することで後外側面が上向きの状態にあり、南に遠位部、北に近位部が位置していたことが確認されている。

Ｂ15　後頭骨片１点、頭蓋骨片４点、環椎片もしくは胸椎片と思われる骨片２点が遺存している。後頭骨片の外後頭隆起の発達が若干大きいことが確認できた。

Ｂ16　左下顎の第一大臼歯である。歯冠・歯根共に一定の遺存状態にある。う蝕が0.0、エナメル質減形成が0.25、歯石の付着が0.75、歯の損耗が1.0とそれぞれ評価された。生前のものと思われる1.6×2.9㎜程度のエナメル質の破損がプロトコニド付近に認められた。頬面全体に黒い変色が見られている。

Ｂ17　左下顎の第二大臼歯である。歯冠・歯根共に遺存状態は良好である。う蝕が0.0、エナメル質減形成が0.5、歯石が0.75、歯の損耗が0.5とそれぞれ評価された。Ｂ16と同様に生前のものと思われる1.1×3.0㎜程度のエナメル質の破損が咬合面近心側に認められた。咬合面に黒い変色が見られる。

Ｂ18　右下顎の第一小臼歯である。歯冠の遺存状態は良好だが、歯根の遺存状態に優れない。う蝕が0.0、エナメル質減形成が0.25、歯石の付着0.0、歯の損耗がＢ２とそれぞれ評価された。生前のものと思われる1.0×1.1㎜程度のエナメル質の破損が頬面に認められた

Ｂ19　右下顎の第二小臼歯である。Ｂ18と同じく歯冠の遺存状態は良好だが、歯根の遺存状態に優れない。う蝕が0.0、エナメル質減形成が0.0、歯石の付着が0.0、歯の損耗がＢ１とそれぞれ評価された。舌面に若干の黒い変色が見られている。

Ｂ20　右下顎の第一大臼歯である。歯冠は最悪の遺存状態にあり、歯根も遺存状態に優れない。う蝕が1.5（2.0×3.2㎜程度、咬合面）、エナメル質減形成が0.0、歯石の付着が0.25、歯の損耗が2.25とそれぞれ評価された。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のものである。

Ｂ21　右下顎の第二大臼歯である。歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が0.0、エナメル質減形成が0.0、歯石の付着が0.25、歯の損耗が1.0とそれぞれ評価された。生前のものと思われる1.1×1.6㎜程度のエナメル質の破損が咬合面遠心側に認められた。

Ｂ22　下顎骨片５点が遺存している。他にも同骨と思われる骨片が10点遺存している。下顎体下部に発達が認められる。

「石室内床面付近／２枚重ね杯の近く」　４点の歯牙資料が含まれている。歯冠や歯根の形状から右上顎の犬歯、第一小臼歯、第二小臼歯、第一大臼歯である。

右上顎犬歯：歯冠は一定の遺存状態にあるが、歯根は遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 1.0、歯石の付着が 0.0、歯の損耗がＣとそれぞれ評価された。生前ものと思われる 0.9 × 1.8 ㎜程度のエナメル質の破損が咬合面遠心側に認められた。

右上顎第一小臼歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 2.0（1.5 × 6.1 ㎜程度、遠心側セメントエナメル境）、エナメル質減形成が 0.75、歯石の付着が 0.0、歯の損耗がＤとそれぞれ評価された。頬面に黒い変色が認められている。

右上顎第二小臼歯：歯冠・歯根共に一定の遺存状態にある。う蝕が 2.0（1.4 × 7.1 ㎜程度、遠心側セメントエナメル境）、エナメル質減形成が 0.5、歯石の付着が 0.25、歯の損耗がＢ１とそれぞれ評価された。頬面に黒い変色が見られた。

右上顎第一大臼歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 2.5（1.0 × 6.0 ㎜程度、近心側セメントエナメル境、及び 1.8 × 6.1 ㎜程度、遠心側セメントエナメル境）、歯石の付着が 0.25、歯の損耗が 2.25 とそれぞれ評価された。エナメル質減形成は歯冠の遺存状態から適切に評価することができなかった。生前のものと思われる 0.8 × 1.2 ㎜程度のエナメル質の破損がパラコーン付近に認められた。

「石室内床面付近／歯出土地付近」　３点の歯牙資料が含まれている。歯冠や歯根の形状から、右下顎の中切歯、側切歯、犬歯である。

右下顎中切歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。エナメル質減形成が 0.75、歯の損耗がＤ、歯石の付着が 0.0 とそれぞれ評価された。う蝕は 2.0（3.3 × 3.8 ㎜程度、近心側セメントエナメル境）と評価されているが、組織の損耗が激しいため暫定的な所見である。唇面に黒い変色が見られている。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のものである。

右下顎側切歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 1.5、歯石の付着が 0.25、歯の損耗がＤとそれぞれ評価された。生前のものと思われる 0.3 × 0.8 ㎜程度のエナメル質の破損が咬合面遠心側に認められた。

右下顎犬歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 1.5、歯石の付着が 0.0、歯の損耗がＤとそれぞれ評価された。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のものである。

「石室内人骨頭部付近」　頬骨片と思われるもの１点、上顎骨片と思われるもの１点、側頭骨片と思われるもの１点、他に同定不能の小骨片が 28 点遺存している。鉄器の錆と思われるものが１点骨片と混同されていた。２点の歯牙資料も含まれており、歯冠や歯根の形状から、右上顎の中切歯と第三大臼歯である。

右上顎中切歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 0.0、エナメル質減形成が 0.75、歯石の付着が 0.5、歯の損耗がＤとそれぞれ評価された。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のもの

である。

右上顎第三大臼歯：歯冠・歯根共に遺存状態に優れない。う蝕が 2.0（1.5 × 4.1 ㎜程度、遠心側セメントエナメル境）、歯石の付着は 0.0、歯の損耗が 0.5 とそれぞれ評価された。遺存状態により適切なエナメル質減形成の評価ができなかった。生前のものと思われる 1.4 × 1.8 ㎜程度のエナメル質の破損が咬合面遠心側に認められた。数カ所エナメル質が破損しているが、死後のものである。

「埋土水洗」　上顎骨片１点、長骨片２点が遺存している。

８　注目すべき論点

エナメル質減形成について

特に出現頻度が高くエナメル質減形成を評価する際の指標とされる前歯（切歯及び犬歯）が８点遺存しているが、その内７点にエナメル質減形成が認められている（写真 32）。エナメル質減形成は 100 以上ともいわれる非常に多様な外的ストレスで発生するため、具体的な原因論を追及することはできないが、幼少時に栄養失調や感染症、胃腸炎など、なんらかのストレスエピソードが複数回あったことが考えられる（Goodman & Armelagos 1985; Goodman et al. 1987）。一方で、定住農耕を基本とする人間集団でのエナメル質減形成の発生率は 100％近いともいわれており（Méndez et al. 2009）、この所見で本個体の社会階層等を議論、たとえば、副葬品や埋葬コンテクストから考えられる高い身分とストレスから乳幼児を守る文化的バッファについての議論など、を試みることは適切ではない。

う蝕、歯石、損耗を総合した食性の復元

う蝕罹患率、歯石の付着状況、損耗の状況は食性の復元に有効な指標であることが知られている（鈴

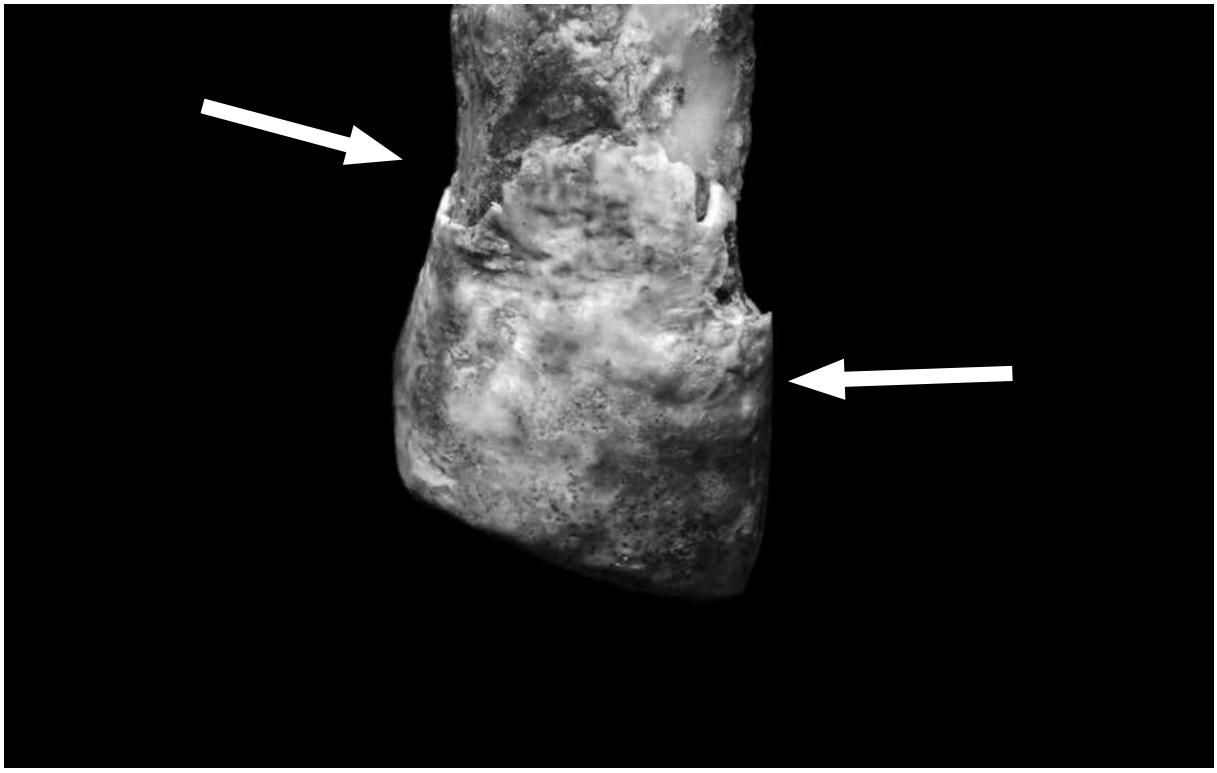


写真 32　左下顎犬歯のエナメル質減形成　（撮影　鈴木）

木2018)。しかし、1個体の評価結果のみでこれらの指標から個体の食性を議論するのは適切ではなく、本報告には食性の議論は含めないものとする。今後、サンプル数を増やし、グループ間での差異を検討することで議論を深めていく。

歯牙の遺存状況について、左上顎歯列全体の欠如

遺存状況に優れない本個体ではあるが、歯牙は比較的良好な遺存状態にある。その中で左上顎の歯列だけが完全に欠落しているのは特筆に値する所見である（第6表)。人体の腐敗過程とその後の溶解の過程の研究(Duday 1997, 2009; Stodder 2019)によれば、歯牙、特にエナメル質は人体の最硬物質であり、多様な環境下で最も優れた遺存状態を示すべき部位である。単体としての歯牙ではなく、特定の歯列全体が欠落するというこの状況は自然の過程の一つとしては考えにくく、肉体の腐敗後に墓が開けられ、左上顎歯列だけが持ち出されたという可能性を考慮するのが一般的である。

一方で、その他の人骨資料の遺存状況は一般的に知られている短骨、扁平骨、不規則骨、長骨と溶解していくパターンに照らし合わせて自然である。また出土時の図面、取り上げ番号と今回の鑑定で同定された人骨資料を照合してみても、その分布には正しい解剖学的位置関係がうかがえ、墓を開けるという介入が行われた可能性を見出すことはできない。

上記の所見を総合すると、墓が開けられたというよりは、石室の一部が崩壊したり、あるいは副葬品が倒れたりすることで、右上顎歯列に相当する部位のみが押し潰されるような形になってしまい、結果として特定の歯列だけがその他の歯列よりもさらに損傷が進んだ、と考えることが最も妥当な解釈であるように思われる。発掘時の出土状況を示した図面の下顎骨付近にも「須恵器集中部」という記述があり、これらの須恵器が倒れ、右上顎歯列周辺を押しつぶして損傷を進めたという解釈の蓋然性は高いように考えられる。

生前のものと思われるエナメル質の破損

遺存状態に優れないため、エナメル質の破損が埋葬後に起きた自然損壊である可能性も否定しきれない。しかし、本個体では鋭い角を残した破損と角が摩耗し丸くなった破損が識別できており、角が摩耗した破損に関しては、やはり生前に破損したものと考えることが妥当であると思われる。エナメル質は破損したばかりの場合、鋭利な角を残して破損するが、破損後も長期にわたって咀しゃく等に使用され続けていれば、角は徐々に摩耗し、丸くなっていく。

生前のものと思われる破損は遺存している歯列全体で見られており局地的ではないため、特定のエピソード（たとえば暴力等）に由来するものではなく、硬い食物（調理が不十分な肉類等、あるいは脱穀等の調理技術が未発達な状態で処理された穀類等）を摂取していた、というような日常的な生活スタイルに起因する可能性が考えられる。

あるいは次項で述べるなんらかの文化的な活動に由来する可能性も考えられるが、いずれにせよ地域性に則した更なる検討が必要である。

右側歯列に頻出するう蝕と進んだ損耗

エナメル質の損耗状況とう蝕の罹患状況が左右歯列で大幅に異なっているのも興味深い所見である(第6表)。遺存状況が異なるので単純な比較はできないが、右側歯列は上下合わせて13点中5ないし6点がう蝕（写真33）を示しており（38%ないし46%)、左歯列では7点歯牙が遺存している中でう蝕を示す歯牙が1点もない（0%)。極めて対照的である。

また損耗についても、右の第一大臼歯が上下ともに大幅な象牙質の露出を示す2.25（写真34）と

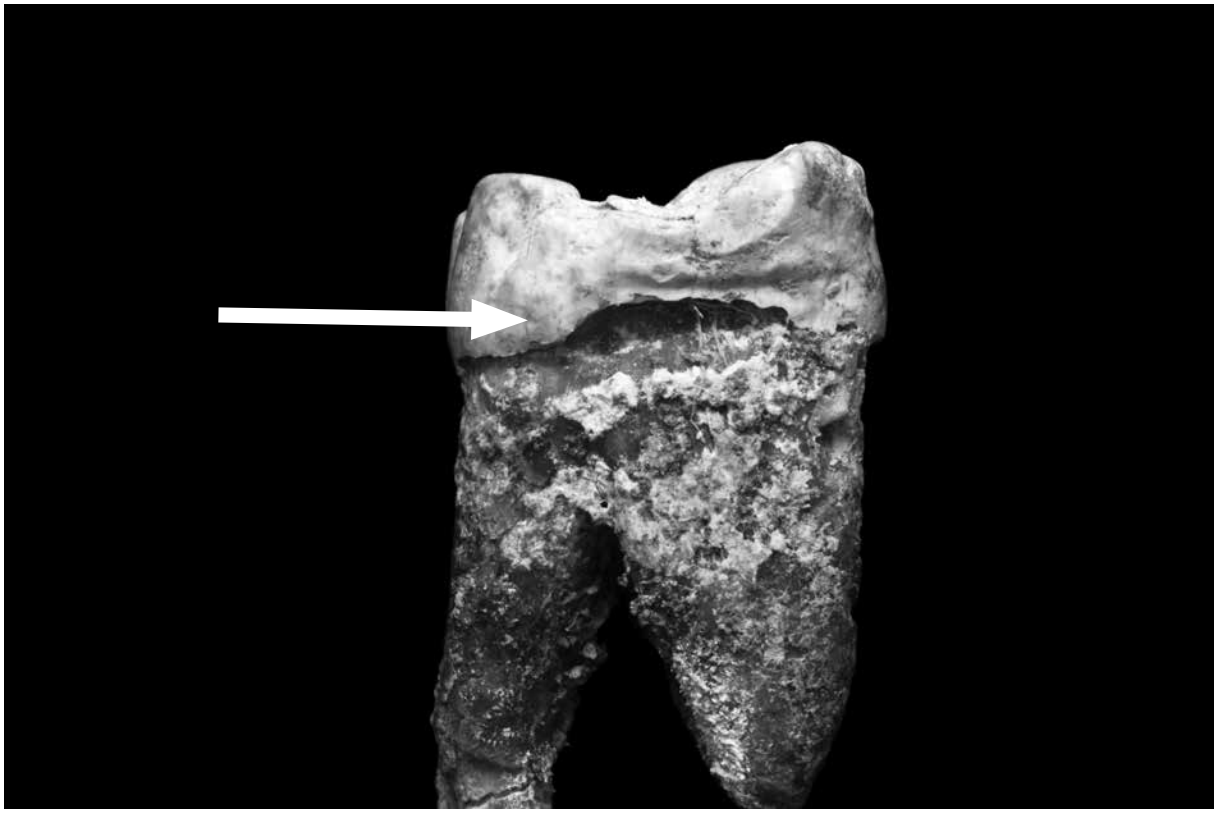


写真 33　右上顎第一小臼歯セメントエナメル境上のう蝕（撮影　鈴木）

いう評価なのに対し、左下顎第一大臼歯はまだあまり象牙質の露出が見られない 1.0（写真 35）という評価である。

う蝕の歯列と損耗の歯列が異なっている場合には、う蝕の痛みによってう蝕のない歯列を中心に咀しゃくを行うことでう蝕のない一方の歯列の損耗だけが進むことも考えられるが、本個体ではう蝕の歯列と損耗の歯列は一致している。そのためＢ６で見られた頬面の特異な摩耗が示すような個体特有の噛み合わせの異常か、あるいは右の歯列を用いてなんらかの文化的な作業を行なっていった可能性を考えるのが妥当である。古代においては皮を歯で噛んで鞣す等の事例が知られており（馬場 2017）、こういった仮説を考えることで、整合性の高い解釈も得られる。例えば右奥歯を皮を鞣す等の行為に

写真 34　右上顎第一大臼歯の損耗（撮影 鈴木）

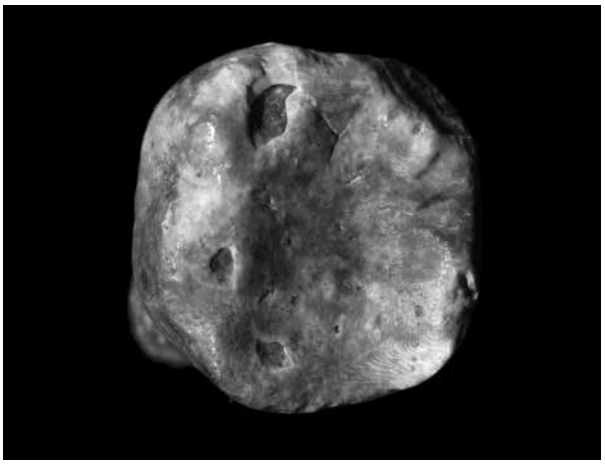


写真 35　左下顎第一大臼歯の損耗（撮影 鈴木）

活用していたとすれば、右奥歯列のみエナメル質が損耗し、そうして歯肉が後退すれば、セメントエナメル境上のう蝕が特に発生しやすくなると考えられる。実際右小臼歯と大臼歯で確認された５つのう蝕の内、４つがセメントエナメル境上のう蝕である。また食料ではない硬い素材を常態的に口に含むということは、さらに生前のエナメル質破損にも整合性の高い解釈を与える。

しかし、これらは全て暫定的な解釈であり、古墳時代の吉備地方という時代性、地域性に即した更なる検討、解釈が必要なのは言うまでもない。

左右脛骨の出土状況

骨資料の遺存状態に優れない本個体ではあるが、左右脛骨の出土状況は極めて興味深い。岡山県古代吉備文化財センターによる丁寧な発掘と精緻な記録によって、左右の脛骨（B 13、B 14）が骨間縁を上方に見せて出土したことがわかっており、これは遺体の埋葬時、外側から内側へ向かう力が常にかけられており、体が内側に向けて収縮した状態であったことを意味している。通常伸展位にある人体が充填物のない空間で腐敗した場合、脛骨は前縁が上方を向いた解剖学的な位置関係にあることが多く、腐敗の過程で動きがある場合でも、やはり前縁ないし腓骨に引きずられるように外転方向へ向かいやや内側面側を上方に向けていることが一般的である。

片方の脛骨のみが外側を示しているならば側位で埋葬された可能性も考えられるが、両側の脛骨が骨間縁を見せており､左右の大腿骨（B 11､B 12）も前面を示していたことからも､その可能性は低い。たとえば木棺など狭いスペースに体を押し込める形で埋葬した、あるいはサラシのようなもので遺体を巻いていた、と考えることが、左右脛骨の外側から後面を示すという出土状況の説明として最も妥当なものであると考えられる。しかし、前項の議論と同様、全て暫定的な解釈であり、時代性、地域性に即した更なる検討、解釈が必要である。

９　今後の展望

今後は今回の肉眼での鑑定結果を踏まえ、安定同位体を用いた食性復元や移民動態の研究、長骨片の組織形態学分析を用いた詳細な死亡時年齢の検討、歯石含有物の顕微鏡下分析等を進めていく。

引用文献

岡山県古代吉備文化財センター 2020「桑山古墳群の発掘調査」『考古学研究』67(3)：85-87.

馬場悠男 2017「縄文人に学ぶ　～顎の退縮による障害を防ぐには～」『日健医誌』26(2)：55-58.

鈴木真太郎 2018「古代糧食文化復元のための生物考古学：マヤ文明黎明期におけるグアテマラ南海岸地方からの展望」『金沢大学考古学紀要』39：81-93.

Bass, William M.　2005 *Human Osteology: A Laboratory and Field Manual, 5th. edit.* Special Publication No. 2 of the Missouri Archaeological Society, Columbia, Missouri.

Black, Thomas K. III　1978 A new Method for Assessing the Sex of Fragmentary Skeletal Remains: Femoral Shaft Circumference. *American Journal of Physical Anthropology* 24: 21-28.

Brothwell, Don R.　1981 *Digging up bones, 3rd edit.* Cornell University Press, Ithaca, New York.

Buikstra, Jane E., and Douglas H. Ubelaker　1994 *Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains.* Arkansas Archaeological Survey Research Series no. 44, Arkansas Archeological Survey, Fayetteville, Arkansas.

Díaz-Andreu, Margarita, Sam Lucy, Staša Babić, and David N. Edwards (edit)　2005 *The Archaeology of Identity. Approaches to Gender, Age, Status, Ethnicity and Religion.* Routledge, New York.

Duday, Henry　1997 Antropología biológica “de campo”, tafonomía y arqueología de la muerte. In *El cuerpo humano y su tratamiento mortuorio,* edited by Elsa Malvido, Gregory Pereira, and Vera Tiesler, pp. 91-126. Colección Científica, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México D.F.

Duday, Henri　2009 *The Archaeology of the Dead. Lectures in Archaeothanatology.* Oxbow Books, Oxford.

Gocha, Timothy P., Alexander G. Robling, and Sam D. Stout　2019 Histomorphometry of Human Cortical Bone: Applications to Age Estimation. In *Biological Anthropology of the Human Skeleton, 3rd. edit.*, edited by M. Anne Katzenberg, and Anne L. Grauer, pp. 145-187, John Wiley & Sons Inc., New Jersey.

Goodman, Alan H., and George J. Armelagos　1985 Factors Affecting the Distribution of Enamel Hypoplasia within the Human Permanent Dentition. *American Journal of Physical Anthropology* 68:479-493.

Goodman, Alan H., Lindsay H. Allen, Gabriela P. Hernández, Alicia Amador, Luis V. Arriola, Adolfo Chávez, and Gretel H. Pelto　1987 Prevalecence and Age at Development of Enamel Hypoplasias in Mexican Children. *American Journal of Physical Anthropology* 72:7-19.

Iscan, Mehmet Yasar, Susan R. Loth, and R.K. Wright　1984a Age Estimation from the Rib by Phase Analysis: White Females. *Journal of Forensic Sciences* 30:853-863.

Iscan, Mehmet Yasar, Susan R. Loth, and R.K. Wright　1984b Age Estimation from the Rib by Phase Analysis: White Males. *Journal of Forensic Sciences* 29:1094-1104.

Lagunas Rodríguez, Zaid　2000 *Manual de osteología antropológica, vol. I. Principios de anatomía ósea y dental.* Colección Científica, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico City.

Lovejoy, C. Owen　1985 Dental Wear in the Libben Population: Its Functional Pattern and Role in the Determination of Adult Skeletal Age at Death. *American Journal of Physical Anthropology* 68:47-56.

Lovejoy, C. Owen, Richard S. Meindl, Thomas R. Pryzbeck, and Robert P. Mensforth　1985 Chronological Metamorphosis of the Auricular Surface of the Ilium. A New Method for the Determination of Adult Skeletal Age at Death. *American Journal of Physical Anthropology* 68:15-28.

Meindl, Richard S., and C. Owen Lovejoy　1985 Ectocranial Suture Closure: A revised Method for the Determinationof Skeletal Age at Death based on the Lateral-Anterior Sutures. *American Journal of Physical Anthropology* 68:57-66.

Méndez Collí, Christian Angélica, Thelma Sierra Sosa, Vera Tiesler, and Andrea Cucina　2009 Linear Enamel Hypoplasia at Xcambó, Yucatán, During the Maya Classic Period: An Evaluation of Coastal Marshland Impact on Ancient Human Populations. *HOMO* 60:343-358.

Phenice, T. W.　1969 A Newly Developed Visual Method of Sexing in the Os Pubis. *American Journal of Physical Anthropology* 30:297-301.

Schaefer, Maureen, Sue Black, and Louise Scheuer　2009 *Juvenile Osteology. A Laboratory and Field Manual. Academic Press,* Amsterdam.

Stodder, Ann L.W.　2019 Taphonomy and the Nature of Archaeological Assemblages. In *Biological Anthropology of the Human Skeleton, 3rd edit.*, edited by M. Anne Katzenberg, and Anne L. Grauer, pp.

73-115. John Wiley & Sons, Inc., Hoboken.

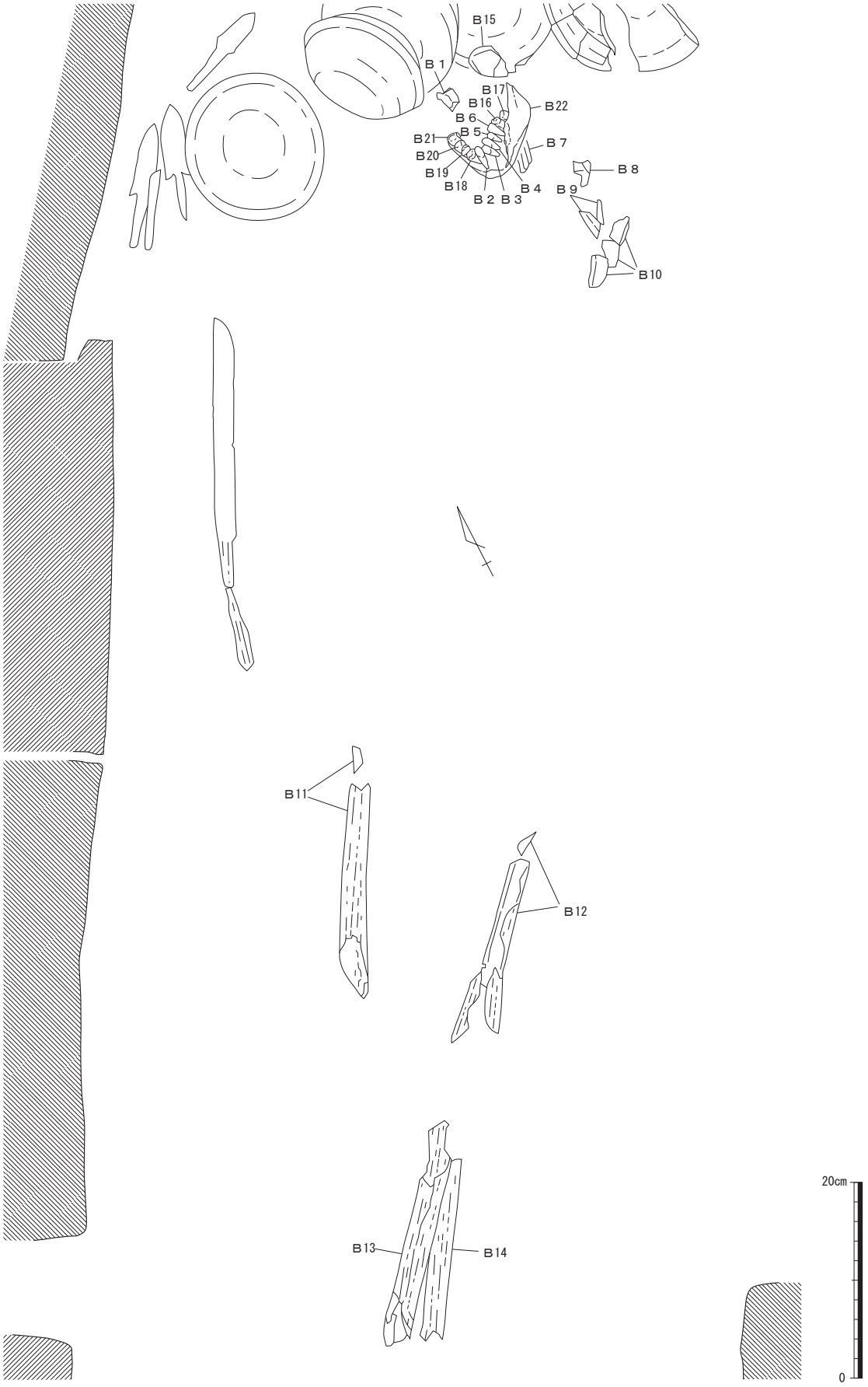
Suchey, Judy M., Patricia A. Owings, Dean V. Wiseley, and Thomas T. Noguchi　1984 Skeletal Aging of Unidentified Persons. In *Human Identification: Case Studies in Forensic Anthropology*, edited by T.A. Rathburn, and Jane E. Buikstra, pp. 278-297. Charles C. Thomas, Springfield.

Suchey, Judy M., Dean V. Wiseley, and Darryl Katz　1986 Evaluation of the Todd and McKern-Stewart Methods for Aging the Male Os Pubis. In *Forensic Osteology: Advances in the Identification of Human Remains,* edited by Kathleen J. Reichs, pp. 36-67. Charles C. Thomas, Springfield, Illinois.

Todd, T. Wingate　1920 Age changes in the pubic bone. *American Journal of Physical Anthropology* 3(3):285-335.

Ubelaker, Douglas H.　1999 *Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation, 3rd. edit.* Taraxacum, Washington, DC.

White, Tim D., Michael T. Black, and Pieter A. Folkens　2011 *Human Osteology, 3rd. edit.* Academic Press, San Diego.



第 147 図　人骨出土状況（1/6）

第３節　細畝２号墳出土陶棺胎土中炭化物の植物同定及び年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、細畝２号墳（岡山県津山市高尾細畝所在）から出土した陶棺胎土中の炭化物を対象として、同定と放射性炭素年代測定を実施し、製作年代や製作方法に関する情報を得る。

１　試　料

分析試料は、細畝２号墳陶棺胎土中に確認された、直径３㎜、長さ１cm 程度の炭化物１点である。

２　分析方法

（１）植物同定

写真撮影後、胎土中の炭化物片を取り出す。試料は脆弱で、ピンセットで軽く触れるだけで容易に細片に分解した。分解した炭化物片をピンセットで回収したところ､約 0.1g 程度の炭化植物片を得た。このうち、大部分は年代測定用試料に用い、細片の末端を切り取って電子顕微鏡観察用試料とした。

（２）放射性炭素年代測定

炭化植物片を塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に１mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、14C の計数、13C 濃度(13C/12C)、14C 濃度（14C/12C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ 13C は試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは､OxCal4.4（Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

３　結　果

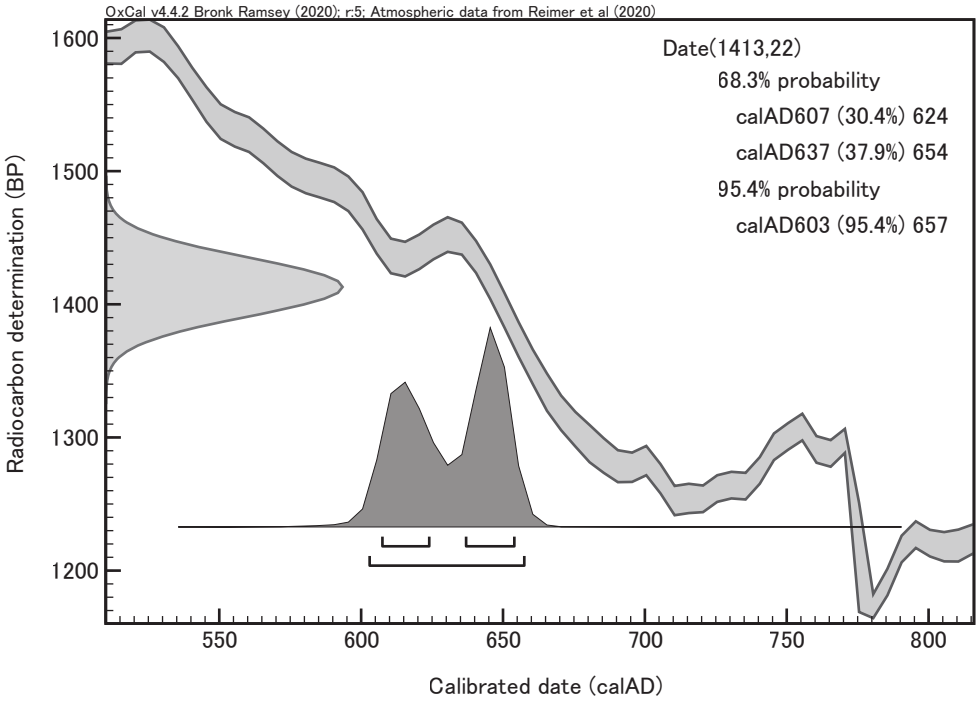
（１）植物同定

結果を第７表に示す。炭化植物片は、イネ科草本類に同定された。以下に形態的特徴を記す。

第７表　炭化植物同定・放射性炭素年代測定結果

試料	性状	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ ^{13}C (‰)	暦年較正年代				Code No.	
					年代値			確率％		
陶棺片	炭化物 イネ科 草本類	AAA (1M)	1415 ± 20 (1413 ± 22)	−16.48 ± 0.32	σ	cal AD 607 − cal AD 624	1343 − 1327 calBP	30.4	PLD−42133	pal−12861
						cal AD 637 − cal AD 654	1314 − 1297 calBP	37.9		
					2 σ	cal AD 603 − cal AD 657	1348 − 1293 calBP	95.4		

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5) 暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用
6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7) 較正データーセットは、IntCal20 を使用。
8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9) 統計的に真の値が入る確率は、σ が 68.2%、2 σ が 95.4% である



第 148 図　暦年較正結果

・イネ科草本類（Gramineae）

断面は直径３㎜超の円柱状で、中心部は中空。葉鞘は残っていない。小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。

タケ類に比べて繊維細胞が薄いため、草本類と考えられる。中心に近い部分では維管束も大きく繊維細胞も薄いが、茎周辺部の維管束は小型で、繊維細胞の密度が高く、細胞壁も厚い。このように維管束が組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

（２）放射性炭素年代測定

結果を第７表、第 148 図に示す。炭化物は保存状態が良く、定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラファイトは得られている。同位体補正を行った値は、1,415 ± 20BP を示す。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、その後訂正された半減期（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することによって､暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いる。２σの値は、calAD603 ～ 657 である。

４　考　察

陶棺胎土中の炭化植物は、イネ科の草本類に同定された。また、測定年代では６世紀中頃、暦年代では７世紀前半を示した。古墳時代後期から終末期とされる古墳の築造時期と調和的である。

なお、イネ科の草本類は、断面観察結果からこれ以上の細分は難しいが、年代測定で得られたδ13C の値から、C4 植物であることが明らかとなった。C4 植物は、生育条件が厳しい場所でも効率よく光合成を行うために進化した植物群で、温暖で乾燥した地域に生育するイネ科やカヤツリグサ科等の一部にみられる。日本の草地でよくみられるものに、ススキ類やエノコログサ属、ヒエ属、キビ属がある。今回の炭化植物片は径が太いことから、ススキ類など C4 植物に属する大型のイネ科草本類に由来すると考えられる。

本分析調査で対象とした炭化植物は陶棺胎土中に混入していたものであるが、これがスサのような効果を目的として人為的に混入されたものであるか、偶然混じったものかは不明である。今後、類例を集成し、陶棺製作に関わる植物の利用について検討する必要がある。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33..

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

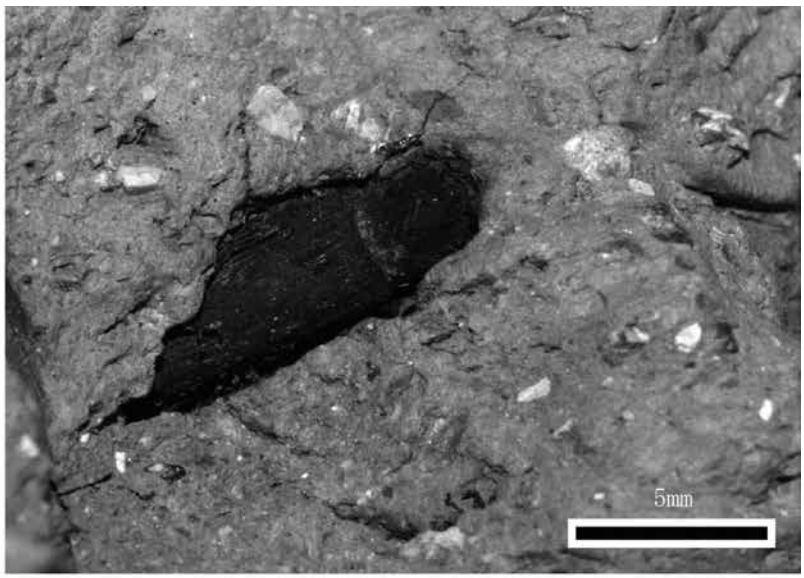


写真 36　陶棺胎土中炭化物

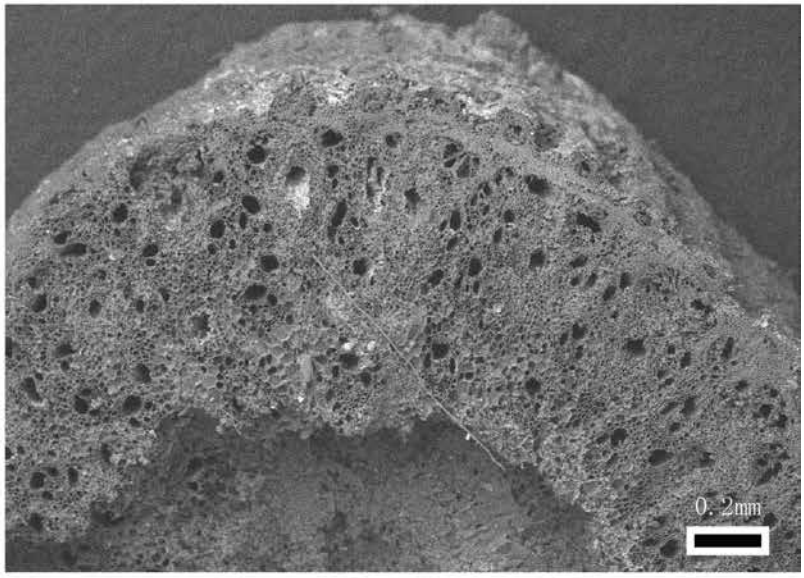


写真 37　陶棺胎土中炭化物の
電子顕微鏡写真①

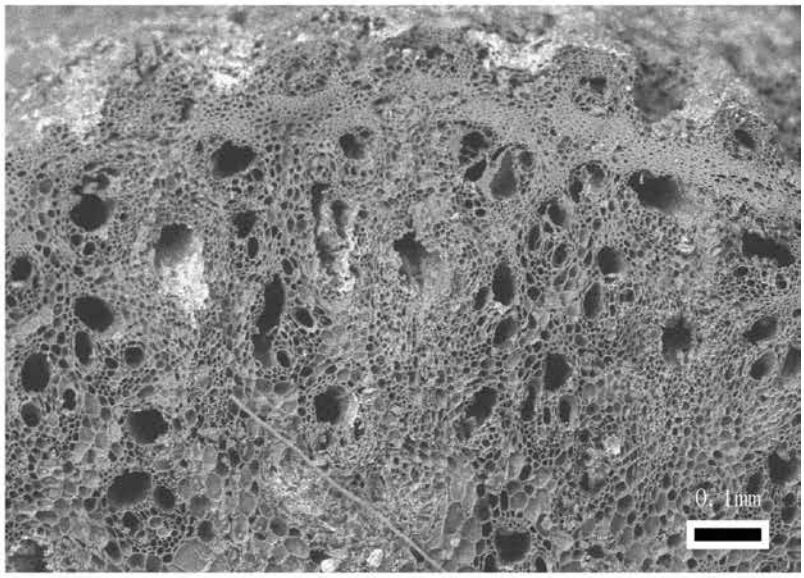


写真 38　陶棺胎土中炭化物の
電子顕微鏡写真②

第４節　桑山南古墳群・細畝古墳群出土遺物の胎土分析

岡山理科大学　白石　純

１　はじめに

桑山南古墳群および細畝古墳群から出土した陶棺、埴輪、須恵器の自然科学的な胎土分析を行い、陶棺・須恵器の生産地や胎土的特徴について検討した。胎土分析は蛍光Ｘ線分析法と肉眼観察（マイクロスコープで土器表面の砂粒を観察）で実施した。

２　分析方法・試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で胎土の元素濃度を、またマイクロスコープでは土器表面の砂粒観察を行った。

蛍光Ｘ線分析法は、胎土の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した陶棺、須恵器の差異について検討する方法である。測定した元素は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5、Rb_2O、SrO、ZrO_2 の 13 元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：エレメントアナライザー　JSX-3203EV（日本電子）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径 3mm、電流 1.00mA、電圧 30 k V、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JB-1a（玄武岩）の 3 試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料:分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100 ～ 200 ﾒｯｼｭ）にしたものを加圧成形機で約 10 ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。また、マイクロスコープでは 10 ～ 30 倍で土器表面を観察し、砂粒構成について調べた。

分析試料は、第８表に示している桑山南古墳群と細畝古墳群から出土した陶棺 12 点、埴輪 12 点、須恵器 34 点、土師器 2 点の合計 60 点である。

３　分析結果

この分析では CaO（酸化カルシウム）、K_2O（酸化カリウム）、Rb_2O（ルビジウム）、SrO（ストロンチウム）の 4 元素で散布図を作成し検討した。

陶棺の分析について

桑山南１・３号墳、細畝１・２号墳出土の陶棺 12 点について検討した。

第 149 図（K_2O-CaO 散布図）、第 150 図（Rb_2O-SrO 散布図）は桑山南１・３号墳出土陶棺の分析結果である。

第 149 図から桑山南１・３号墳の陶棺は、１号墳陶棺（１～４）と３号墳２号陶棺（59、60）と１号墳陶棺（5 ～ 8）、３号墳１号陶棺（57、58）の 3 つに分類できる。そして、第 150 図でもほぼ同様の結果となった。この３つに分類された結果から１～４と 59、60 は、CaO と SrO 濃度が他の陶棺に比べ多く、明確に識別できる。また、５～８、57、58 は、第 149 図では、カキ谷Ｂと的場２号墳出土の陶棺と近似した胎土であった。

次に、マイクロスコープによる表面観察では、１～４と 59、60 の陶棺には石英（２㎜以下）、片岩（１㎜前後）、角閃石（0.5㎜以下）が観察された。また、５～８、57、58 の陶棺には、石英（２㎜以下）、雲母（１㎜以下）、花崗岩の岩片などが観察された。このように、CaO と SrO の濃度が多い陶棺には角閃石が含まれることがわかり、これまでの津山市内の陶棺にはみられない胎土であることがわかった。

次に細畝１・２号墳出土陶棺（53、54、55、56）の分析結果を第 151・152 図に示す。すると４点の陶棺は、ほぼ１つにまとまる傾向で、桑山南の５～８、57、58 の陶棺に近い胎土であった。

埴輪の分析について

第 153 図（K_2O-CaO 散布図）、第 154 図（Rb_2O-SrO 散布図）で検討した。

その結果、いずれの散布図でも桑山１号墳、細畝１・３号墳出土の埴輪は津山市内出土の埴輪胎土と類似していることが推定された。なお、津山市内出土埴輪の胎土分析試料が少ないことからどの地域の埴輪に類似しているのかは明確にならなかった。

須恵器の分析について

桑山南古墳群出土須恵器の産地推定では第 155 図（K_2O-CaO 散布図）、第 156 図（Rb_2O-SrO 散布図）で検討した。

分析した須恵器試料は試料番号 11 ～ 20、50、51、52 の須恵器と 21・22 の土師器である。

その結果、18、19、20 以外はほぼ一つにまとまる傾向にあった。そして、今回は生産地として津山市内の小屋谷窯、柳谷窯、箱王谷窯と大阪府陶邑窯（６世紀末）と比較した。すると、第 156 図では、18、20 が小屋谷窯、柳谷窯と陶邑窯が重なる領域に入り、19 は単独で分布した。それ以外の須恵器はほぼ一つにまとまるが、生産地ははっきりしない。ただ、このまとまる領域に土師器（21、22）が入っている。

細畝古墳群出土須恵器の産地推定では、第 157 図（K_2O-CaO 散布図）、第 158 図（Rb_2O-SrO 散布図）で検討した。

その結果、試料番号 23、24、26、32、33 は在地（地元）か陶邑産に推定された。また 25、27、28、29、30、31、34、35、36、37、38、40、41、42、43 はほぼ一つにまとまる。なお、39 は単独で分布した。そして、桑山南古墳群出土の土師器（21・22）は、細畝古墳群出土の須恵器に近い胎土であることもわかった。

４　まとめ

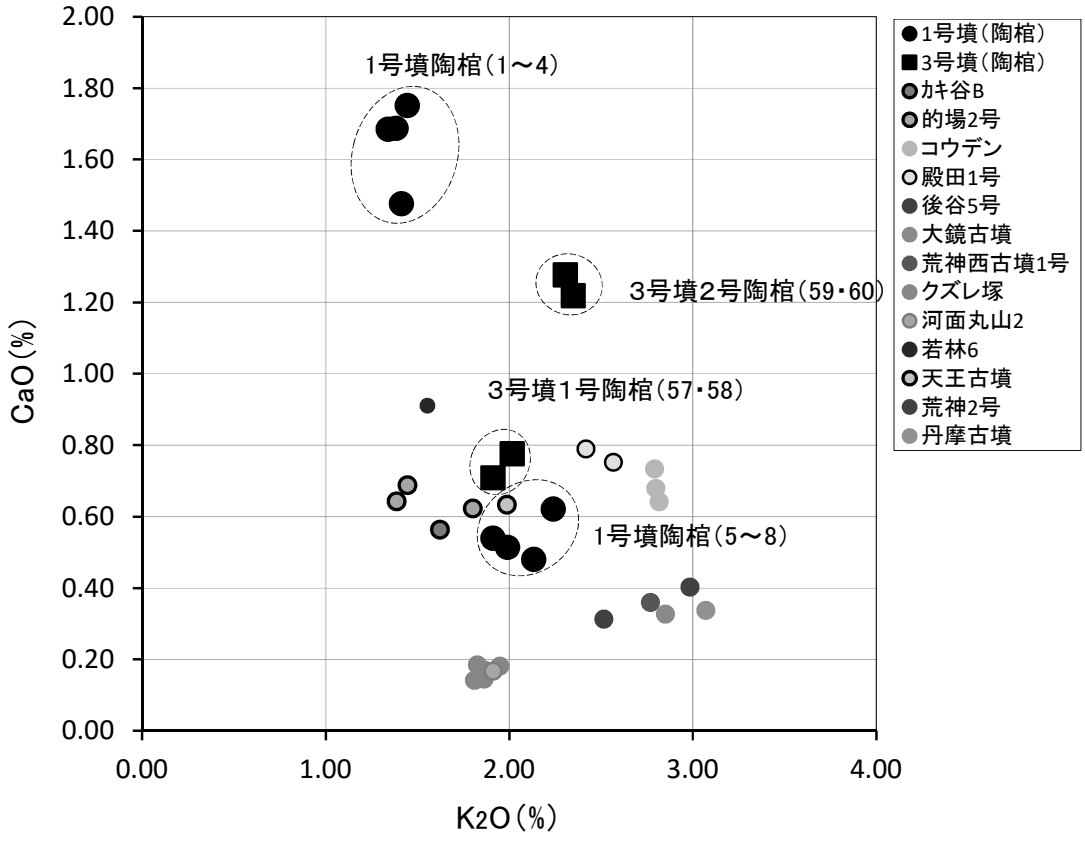
桑山南古墳群出土遺物の陶棺、埴輪、須恵器の胎土分析を行い、以下のことが推定された。

（１）陶棺の分析では、桑山南１・３号墳出土の陶棺が３つの胎土に分類できた。１～４と 59、60 は、CaO と SrO 濃度が多く含まれ、砂粒観察では角閃石や片岩（結晶片岩も含まれている）が含まれ、胎土に特徴があった。したがってこれらの岩石、鉱物が含まれている地域の粘土を使用していると推定される。また、桑山南１・３号墳出土の陶棺は、これまで分析した津山市内の陶棺にはみられない胎土で、新たな生産地が想定される。砂粒構成から想定される地域としては、桑山南古墳群が立地する西南側周辺に生産地がある可能性がある。また、細畝１・２号墳の陶棺は、桑山南のもう一つのグループの陶棺に近い胎土であったが、これらの陶棺もカキ谷Ｂ・的場２号墳の陶棺とも胎土が一致しない。

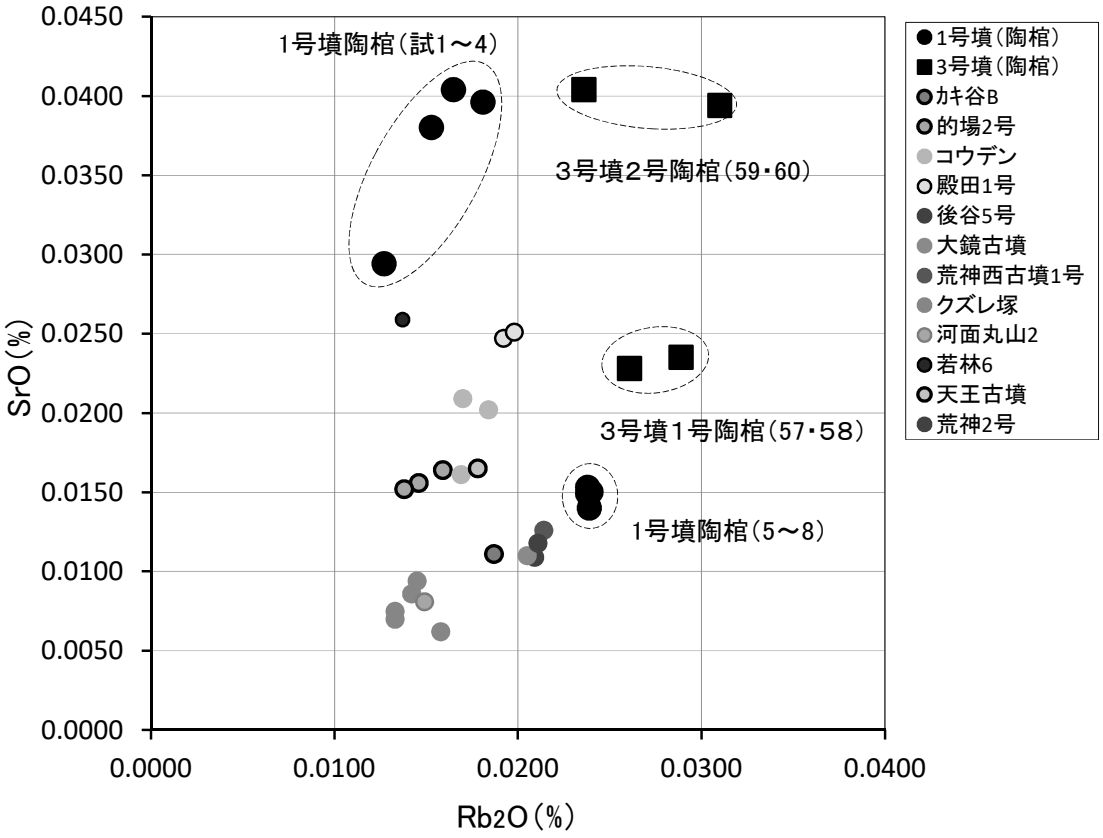
以上、今回分析した陶棺は、これまで分析した津山市内の陶棺とは胎土が異なり、新たな生産地を考える必要がある。

（２）埴輪の分析では、２点の埴輪とも津山市内の埴輪と胎土が類似していた。

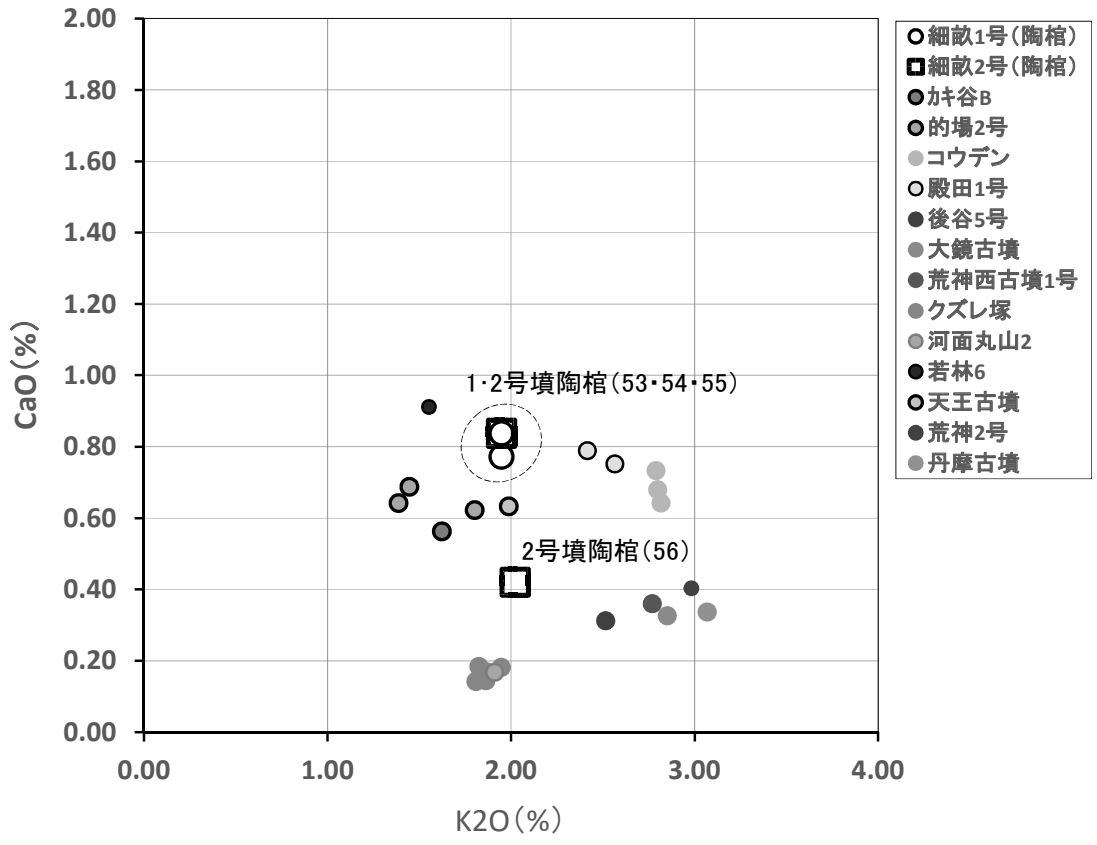
（３）須恵器の分析では、桑山南古墳群、細畝古墳群とも複数の胎土にわかれた。桑山南の 18～20、細畝の 23、24、26、32、33 は在地（地元）か陶邑産に推定される。また、両古墳群には、やや広いまとまりをする須恵器グループがあり、両方のグループとも同じ胎土であることから、新たな生産地を考える必要がある。なお、19 と 39 の須恵器も胎土が類似している。



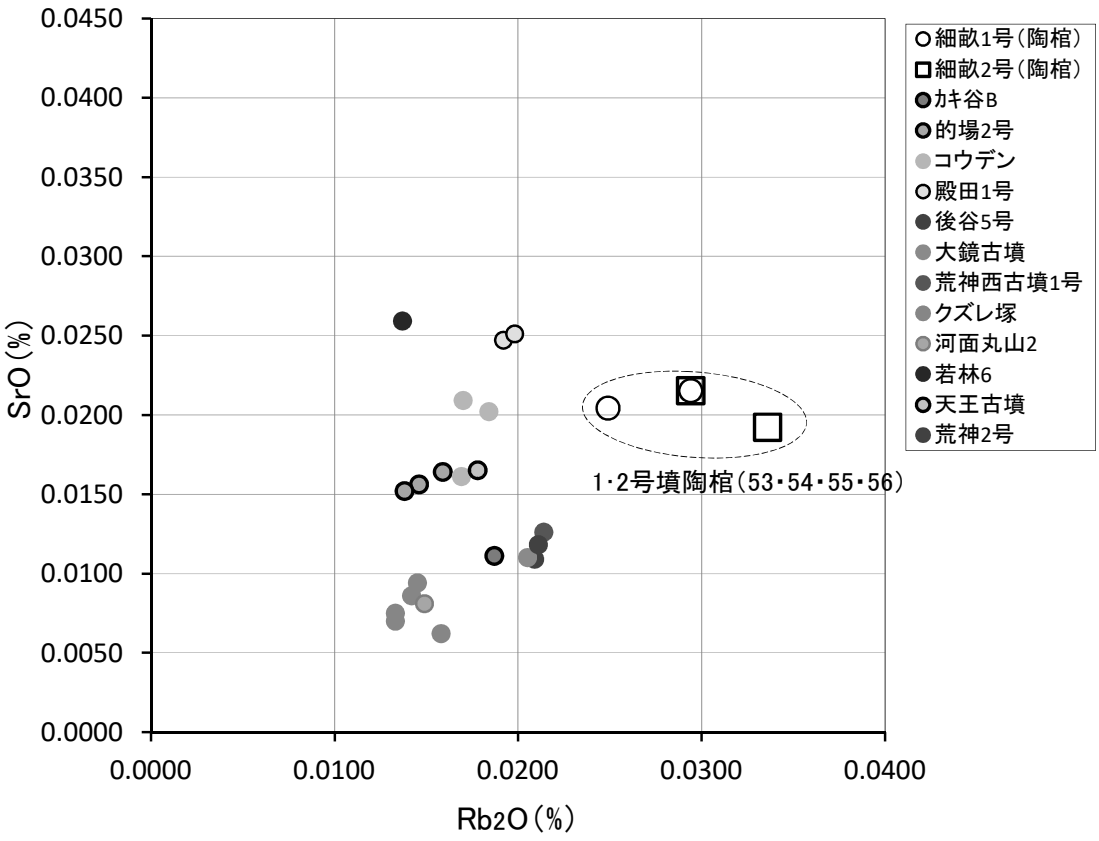
第 149 図　桑山南１・３号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較①



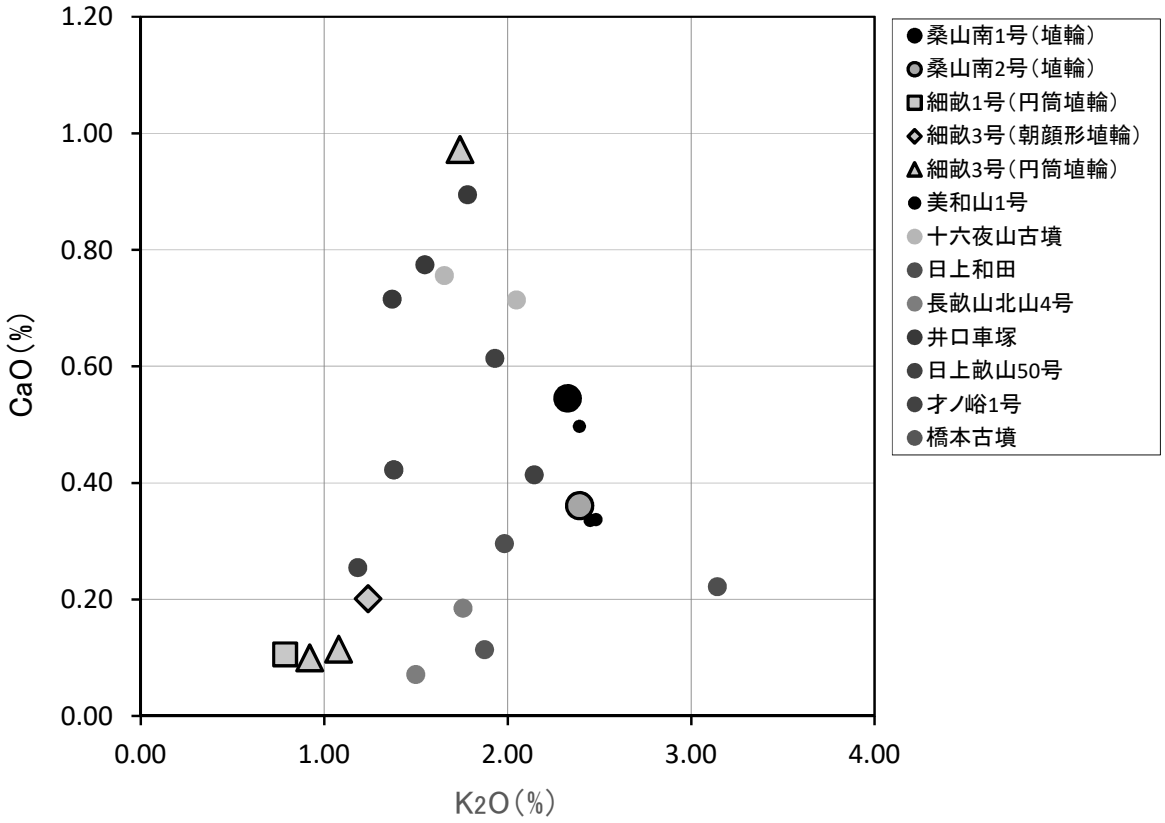
第 150 図　桑山南１・３号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較②



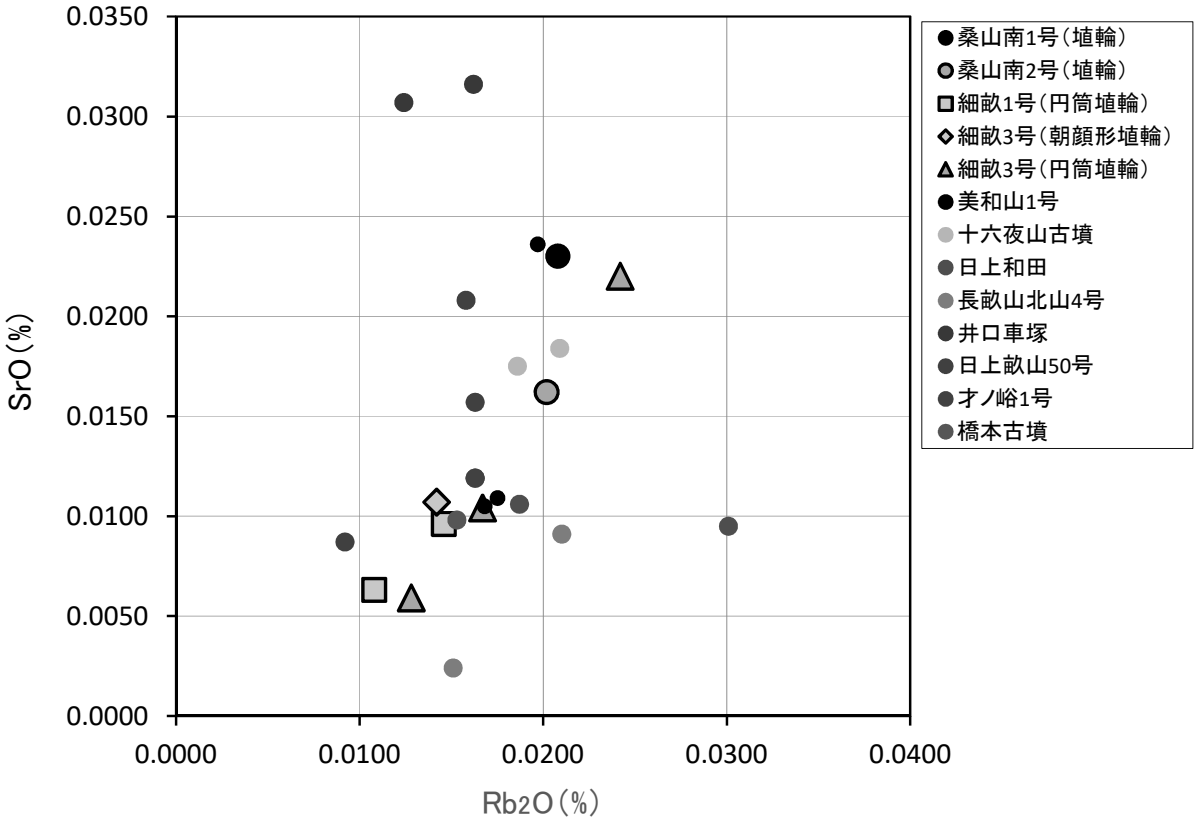
第 151 図　細畝１・２号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較①



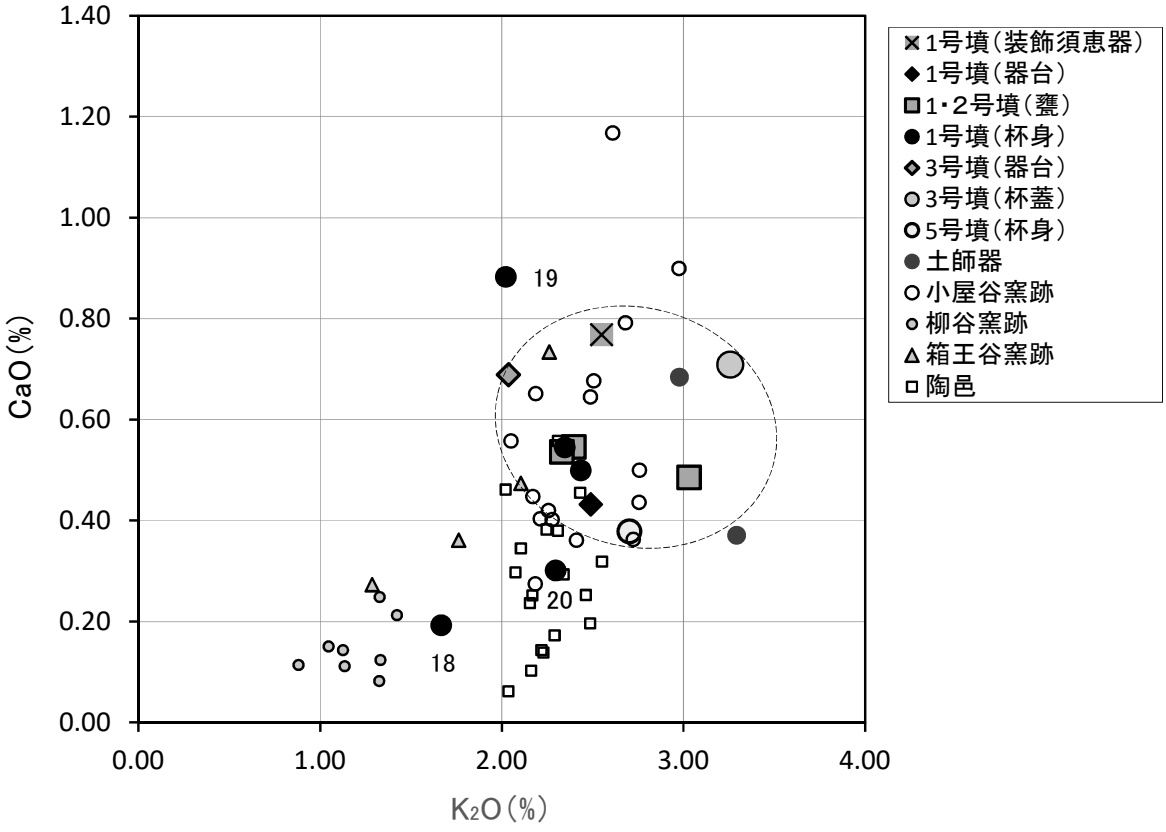
第 152 図　細畝１・２号墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較②



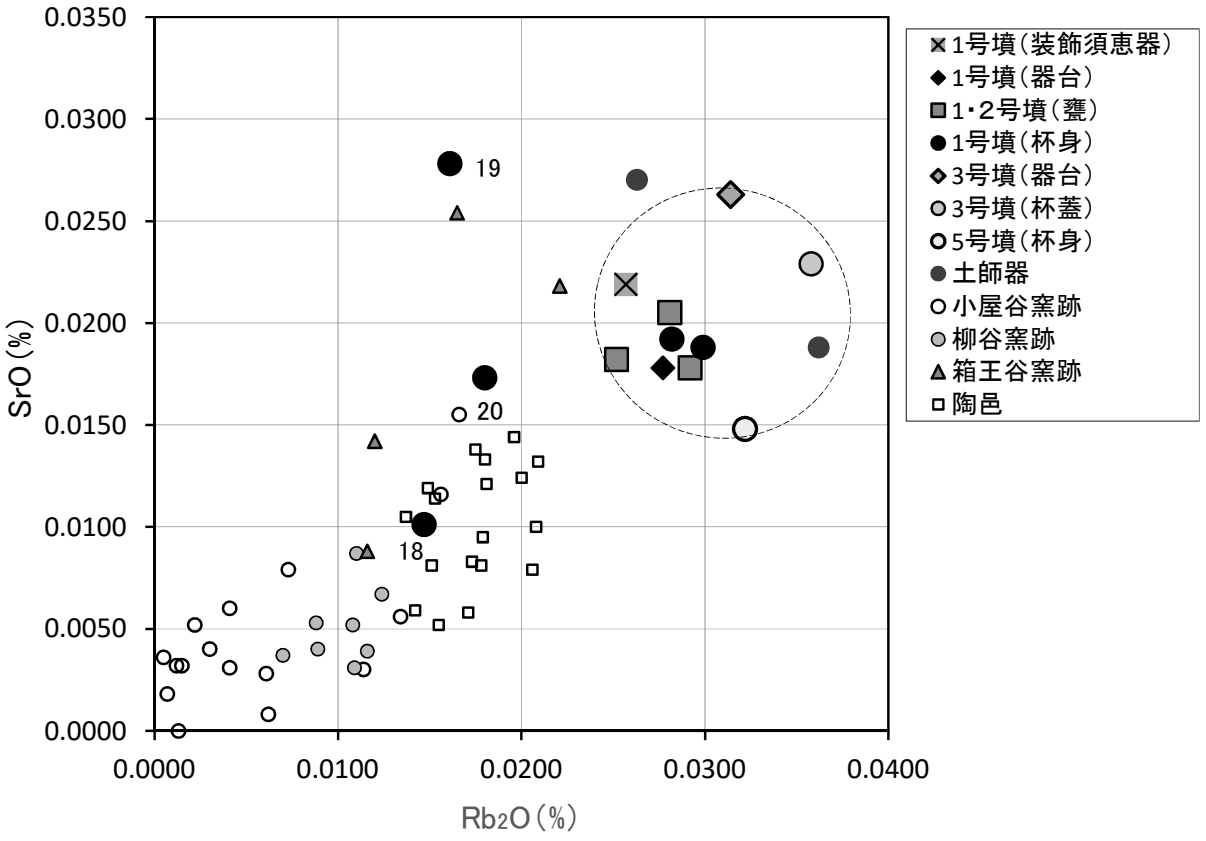
第 153 図　桑山南１号墳、細畝１・３号墳出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較①



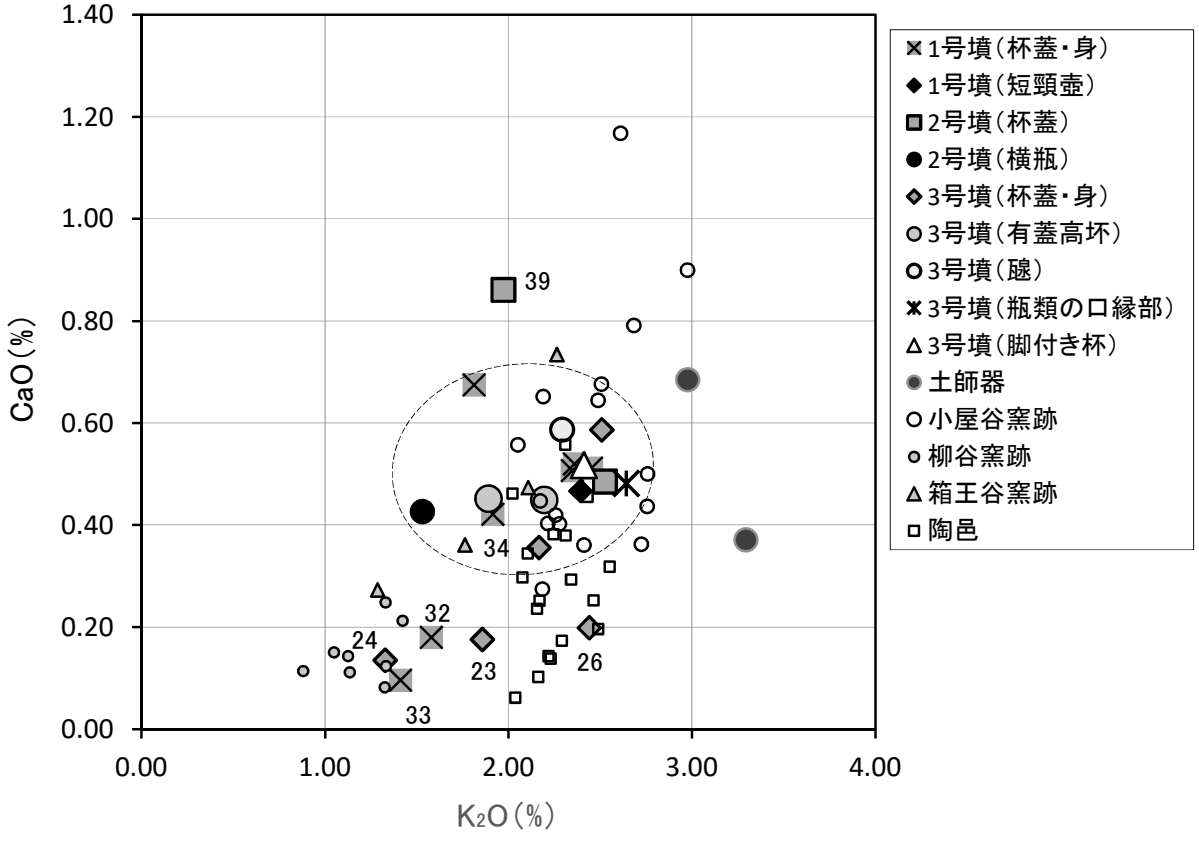
第 154 図　桑山南１号墳、細畝１・３号墳出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較②



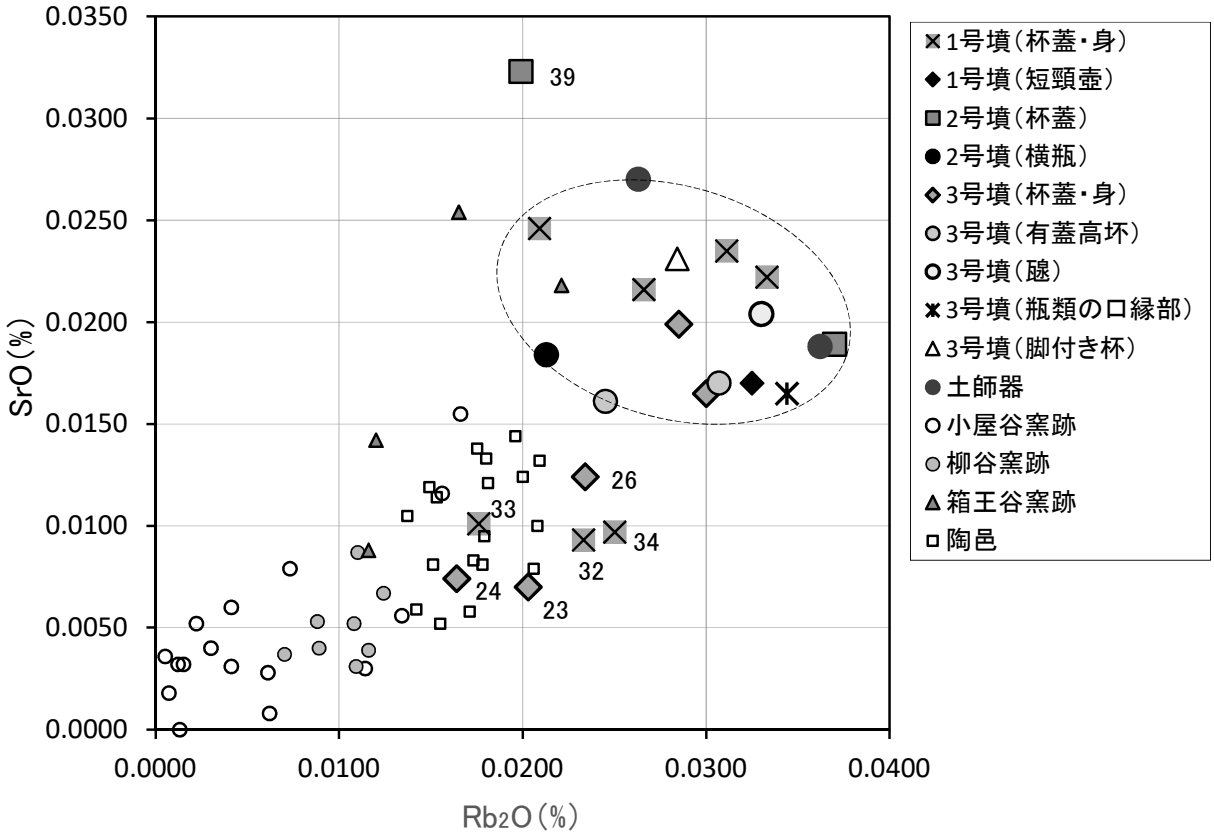
第 155 図　桑山南古墳群出土須恵器の産地推定①



第 156 図　桑山南古墳群出土須恵器の産地推定②



第 157 図　細畝古墳群出土須恵器の産地推定①



第 158 図　細畝古墳群出土須恵器の産地推定②

第８表　桑山南古墳群・細畝古墳群出土須恵器の胎土分析結果（%）

試料番号	遺跡名	出土遺構	器種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Rb_2O	SrO	ZrO_2	掲載番号
1	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	67.75	1.40	17.40	8.77	0.05	0.79	1.48	0.49	1.41	0.36	0.013	0.029	0.043	桑-C1
2	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	62.59	1.31	16.46	10.65	0.04	0.78	1.69	0.47	1.38	4.53	0.017	0.040	0.040	桑-C1
3	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	64.36	1.50	18.79	10.30	0.05	0.82	1.75	0.45	1.45	0.43	0.018	0.040	0.050	桑-C1
4	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	64.46	1.42	19.05	10.24	0.05	0.81	1.68	0.64	1.34	0.21	0.015	0.038	0.053	桑-C1
5	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	63.10	1.56	21.88	9.08	0.05	0.74	0.48	0.79	2.13	0.10	0.024	0.015	0.049	桑-C2
6	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	62.26	1.73	20.99	10.95	0.02	0.37	0.54	0.80	1.91	0.32	0.024	0.015	0.058	桑-C2
7	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	66.12	1.39	19.83	8.22	0.04	0.59	0.62	0.68	2.24	0.18	0.024	0.014	0.044	桑-C2
8	桑山南古墳群	1号墳　石室内	陶棺	64.47	1.56	19.93	9.98	0.05	0.44	0.51	0.47	1.99	0.52	0.024	0.015	0.050	桑-C2
9	桑山南古墳群	1号墳　表・流土	円筒埴輪	62.34	1.20	25.72	7.17	0.03	0.06	0.54	0.31	2.33	0.19	0.021	0.023	0.064	
10	桑山南古墳群	2号墳　周溝	円筒埴輪	56.53	1.44	28.49	10.09	0.01	0.00	0.36	0.41	2.39	0.16	0.020	0.016	0.080	
11	桑山南古墳群	1号墳　表・流土	須恵器　子持器台	64.04	1.37	24.75	5.75	0.04	0.00	0.77	0.54	2.55	0.09	0.026	0.022	0.065	桑-87
12	桑山南古墳群	1号墳　流土	須恵器　器台	62.54	1.30	27.27	5.48	0.02	0.00	0.43	0.26	2.49	0.10	0.028	0.018	0.056	桑-86
13	桑山南古墳群	1号墳　石室内	須恵器　甕	62.35	1.34	23.80	8.90	0.04	0.05	0.55	0.27	2.40	0.21	0.029	0.018	0.060	桑-42
14	桑山南古墳群	2号墳　表・流土	須恵器　甕	62.62	1.24	26.06	6.11	0.02	0.11	0.48	0.08	3.03	0.13	0.028	0.021	0.050	桑-88
15	桑山南古墳群	2号墳　石室内	須恵器　壺	64.09	1.38	25.36	5.60	0.03	0.00	0.54	0.40	2.33	0.18	0.025	0.018	0.059	桑-85
16	桑山南古墳群	1号墳　盛土中	須恵器　杯身	60.51	1.40	29.51	5.03	0.02	0.05	0.54	0.39	2.35	0.09	0.028	0.019	0.048	桑-156
17	桑山南古墳群	1号墳　盛土中	須恵器　杯蓋	61.03	1.42	29.10	5.21	0.02	0.05	0.50	0.07	2.44	0.05	0.030	0.019	0.056	桑-149
18	桑山南古墳群	1号墳　盛土中	須恵器　杯身	65.08	1.15	21.20	10.19	0.01	0.00	0.19	0.29	1.67	0.12	0.015	0.010	0.065	桑-157
19	桑山南古墳群	1号墳　盛土中	須恵器　杯蓋	68.59	1.19	17.87	8.25	0.06	0.28	0.88	0.64	2.02	0.11	0.016	0.028	0.050	桑-152
20	桑山南古墳群	1号墳　盛土中	須恵器　杯身	64.92	0.99	22.06	8.57	0.01	0.00	0.30	0.69	2.30	0.06	0.018	0.017	0.065	桑-148
21	桑山南古墳群	1号墳　石室内	土師器	68.99	1.16	18.93	6.31	0.03	0.00	0.68	0.49	2.98	0.32	0.026	0.027	0.057	
22	桑山南古墳群	1号墳　石室内	土師器　甕	67.20	1.19	19.23	7.87	0.01	0.00	0.37	0.47	3.29	0.26	0.036	0.019	0.057	
23	細畝古墳群	3号墳　裏込め土	須恵器　杯蓋	69.87	1.14	18.39	7.75	0.01	0.00	0.18	0.49	1.86	0.21	0.020	0.007	0.072	細-76
24	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　杯身	67.31	1.72	21.52	7.62	0.02	0.00	0.14	0.03	1.33	0.21	0.016	0.007	0.086	細-85
25	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　杯身	65.29	1.22	23.01	6.16	0.02	0.51	0.59	0.39	2.51	0.21	0.029	0.020	0.048	細-86
26	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　杯蓋	64.89	1.39	19.39	10.63	0.00	0.00	0.20	0.08	2.44	0.87	0.023	0.012	0.075	細-69
27	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　瓶類	61.81	1.36	21.59	11.88	0.04	0.05	0.45	0.27	2.20	0.23	0.031	0.017	0.073	細-119
28	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　有蓋高杯蓋	64.26	1.16	21.38	10.34	0.03	0.12	0.45	0.07	1.89	0.20	0.025	0.016	0.065	細-96
29	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　鼈	56.98	1.38	21.97	15.86	0.06	0.05	0.59	0.51	2.29	0.20	0.033	0.020	0.065	細-107
30	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　高杯	59.16	1.45	22.15	13.21	0.02	0.00	0.48	0.57	2.64	0.20	0.034	0.017	0.074	細-101
31	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　短頸壺	60.45	1.49	28.14	6.42	0.02	0.04	0.47	0.32	2.39	0.15	0.033	0.017	0.062	細-29
32	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　杯蓋	63.25	1.82	23.12	9.50	0.03	0.00	0.18	0.08	1.58	0.33	0.023	0.009	0.081	細-7
33	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　杯蓋	67.46	1.69	22.33	6.65	0.02	0.01	0.10	0.10	1.41	0.14	0.018	0.010	0.075	細-2
34	細畝古墳群	1号墳　流土	須恵器　杯蓋	65.95	1.29	22.07	7.96	0.03	0.00	0.42	0.08	1.91	0.17	0.025	0.010	0.065	細-43
35	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　杯蓋	66.24	1.24	21.49	7.45	0.02	0.30	0.68	0.48	1.81	0.19	0.021	0.025	0.060	細-6
36	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　杯蓋	63.10	1.44	22.56	8.60	0.05	0.50	0.51	0.58	2.35	0.20	0.027	0.022	0.066	細-1
37	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　杯身	59.52	1.54	29.24	5.97	0.02	0.00	0.51	0.43	2.45	0.21	0.033	0.022	0.064	細-15
38	細畝古墳群	1号墳　石室内	須恵器　杯身	59.07	1.53	24.32	11.49	0.03	0.04	0.52	0.28	2.36	0.22	0.031	0.024	0.077	細-14
39	細畝古墳群	2号墳　石室内	須恵器　杯蓋	63.76	1.53	22.76	8.31	0.04	0.14	0.86	0.30	1.97	0.23	0.020	0.032	0.058	細-52
40	細畝古墳群	2号墳　石室内	須恵器　杯蓋	59.78	1.60	26.91	8.23	0.03	0.00	0.48	0.16	2.53	0.16	0.037	0.019	0.067	細-51
41	細畝古墳群	2号墳　周溝	須恵器　横瓶	59.60	1.74	28.91	7.41	0.02	0.00	0.43	0.08	1.53	0.17	0.021	0.018	0.076	細-67
42	細畝古墳群	3号墳　周溝	須恵器　有蓋高杯	60.71	1.69	25.02	9.11	0.03	0.01	0.52	0.17	2.41	0.20	0.028	0.023	0.079	細-135
43	細畝古墳群	3号墳　石室内	須恵器　杯身	57.93	1.55	23.63	13.75	0.03	0.10	0.36	0.20	2.17	0.16	0.030	0.017	0.080	細-81
44	細畝古墳群	3号墳　石室内	朝顔形埴輪	68.94	1.79	19.07	8.08	0.00	0.25	0.20	0.07	1.24	0.24	0.014	0.011	0.084	細-148
45	細畝古墳群	3号墳　石室内	円筒埴輪	70.89	1.81	17.38	8.18	0.01	0.14	0.11	0.00	1.08	0.27	0.017	0.010	0.092	細-143
46	細畝古墳群	3号墳　周溝	円筒埴輪	67.74	1.91	19.45	9.25	0.01	0.32	0.10	0.00	0.92	0.18	0.013	0.006	0.096	細-140
47	細畝古墳群	3号墳　周溝	円筒埴輪	55.41	2.09	26.80	11.60	0.05	0.47	0.97	0.52	1.74	0.22	0.024	0.022	0.076	細-142
48	細畝古墳群	1号墳　盛土中	円筒埴輪	68.84	1.90	18.66	8.97	0.01	0.36	0.11	0.05	0.79	0.22	0.011	0.006	0.089	
49	細畝古墳群	1号墳　裏込め土	円筒埴輪	68.75	1.86	18.47	8.98	0.01	0.28	0.13	0.00	1.19	0.21	0.015	0.010	0.098	
50	桑山南古墳群	3号墳　石室内	須恵器　壺	57.99	1.46	23.74	12.91	0.04	0.11	0.69	0.73	2.04	0.16	0.031	0.026	0.071	桑-114
51	桑山南古墳群	3号墳　石室内	須恵器　杯蓋	62.85	1.33	22.59	8.47	0.03	0.03	0.71	0.47	3.26	0.15	0.036	0.023	0.064	桑-99
52	桑山南古墳群	5号墳　石室内	須恵器　杯身	66.63	1.46	21.60	6.48	0.02	0.02	0.38	0.34	2.70	0.26	0.032	0.015	0.073	桑-132
53	細畝古墳群	1号墳　石室内	陶棺	63.54	2.02	20.38	9.59	0.04	0.50	0.77	0.33	1.95	0.76	0.025	0.020	0.077	細-C1
54	細畝古墳群	1号墳　石室内	陶棺	63.96	2.03	19.89	9.51	0.04	0.65	0.84	0.49	1.95	0.52	0.029	0.022	0.077	細-C1
55	細畝古墳群	2号墳　石室内	陶棺	63.96	2.03	19.89	9.51	0.04	0.65	0.84	0.49	1.95	0.52	0.029	0.022	0.077	細-C4
56	細畝古墳群	2号墳　石室内	陶棺	58.55	1.92	22.02	13.76	0.03	0.42	0.42	0.45	2.02	0.29	0.034	0.019	0.063	細-C4
57	桑山南古墳群	3号墳　石室内	陶棺	60.89	1.98	23.63	9.61	0.02	0.30	0.78	0.33	2.02	0.32	0.029	0.024	0.068	桑-C5
58	桑山南古墳群	3号墳　石室内	陶棺	61.45	1.79	23.09	10.03	0.03	0.27	0.71	0.36	1.91	0.24	0.026	0.023	0.062	桑-C5
59	桑山南古墳群	3号墳　石室内	陶棺	58.76	1.57	24.68	10.34	0.04	0.27	1.28	0.38	2.31	0.24	0.031	0.039	0.070	桑-C6
60	桑山南古墳群	3号墳　石室内	陶棺	60.84	1.55	24.82	7.67	0.05	0.17	1.22	0.87	2.35	0.31	0.024	0.040	0.069	桑-C6

第６章　総　括

第１節　古墳群の構成と形成過程

今回、桑山南古墳群で５基、細畝古墳群で３基、計８基の古墳を調査した（第９表）。このうち桑山南４号墳は大部分が調査対象地外にあるが、民間開発に伴って津山市が発掘調査を行っている[1]。桑山南古墳群は、竪穴式石室墳３基、横穴式石室墳２基、細畝古墳群は横穴式石室墳３基から構成される。そのほかに、古墳時代の墓として桑山南古墳群で箱式石棺墓２基と土坑墓４基、細畝古墳群でも箱式石棺墓２基を検出している。本節ではこれらを総括し、墳墓群の構成と形成過程、階層性の問題などについてまとめておく。

１　出土須恵器の型式

出土須恵器の年代及び主にそれから導かれる各遺構の年代観については、その基準を統一するため、前章までの記述ではほとんど触れておらず、ここでまとめて検討する。この時期の須恵器は、杯や高杯を中心として小型化や製作技法の粗雑化が進行することがよく知られている。これを踏まえ、桑山

第９表　桑山南古墳群・細畝古墳群一覧

古墳名	標高（ｍ）	墳丘		石室				棺			埋葬人数※２	埴輪	主な副葬品　※３							
		墳形	規模（ｍ）	種別	主軸開口	規模（ｍ）※１		陶棺	石棺	棺釘			刀	鏃	弓	馬具	耳環	玉類	刀子	特記遺物
桑山南１号墳	116.5 ～ 119	円	14	横穴式	N134°E	全長 幅 高さ	6.5 1.7 2.0	2			3+		1	15	○	鞍	5	3	○	銀象嵌装大刀 鈴付高杯
桑山南２号墳	122 ～ 124.5	円	8～9	竪穴式	N54°E	全長 幅 高さ	2.1 0.5 0.6				1+	○		7	○			15	○	子持器台 鉄鐸
桑山南３号墳	118 ～ 122	円	12	横穴式	N111°E	全長 幅 高さ	6.3 1.6 2.0	2	1	○	4+		1	6		鐙	2	4	○	子持器台 鉄鐸
桑山南４号墳	126 ～ 128	円	10	竪穴式		全長 幅 高さ	3.0 1.0							○		○		○		皮袋形瓶
桑山南５号墳	119.5 ～ 121.5	円	8～9	竪穴式	N27°E	全長 幅 高さ	2.2 0.7 0.7				1+			4					○	
細畝１号墳	118.5 ～ 120.5	円	10.5	横穴式	N169°E	全長 幅 高さ	6.5 1.9 1.75	1	1		2+			9			3	81	○	
細畝２号墳	118 ～ 120	円	9	横穴式	N68°E	全長 幅 高さ	6.05 1.25 1.55	1		○	2+			2				6	○	鑷子
細畝３号墳	116 ～ 118	円	13	横穴式	N136°E	全長 幅 高さ	4.9 1.9 1.3				4+	○	1	9		轡ほか	6	75	○	特殊扁壺

※１　全長・幅・高さともに内法で現存最大値を示し、下線はほぼ完存とみられる数値
※２　確認できる棺数と耳環数から推定した最低数を示す。
※３　鉄製品は破片も多く個体数を特定しがたい。刀と鏃の数量は推定の概数である。

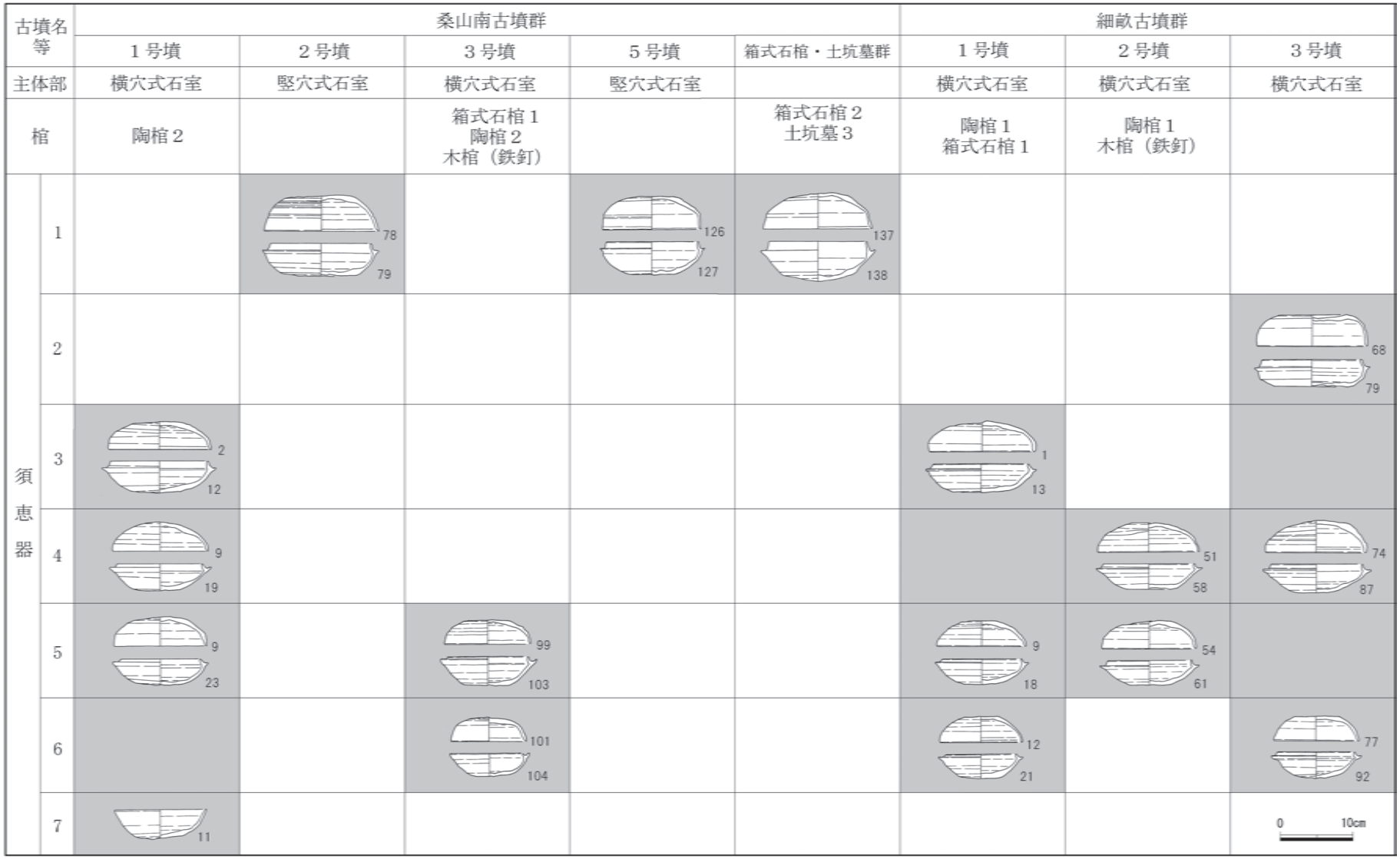
南・細畝古墳群出土須恵器の型式について検討したい。

蓋杯は、杯身の口縁に立ち上がりを有する器種（奈文研分類[2]杯Ｈ）について、形態・技法上の特徴から６類に分類することができる（第159図）。１類は、身の口径が13.5cm前後で口縁の立ち上がりが高い。組み合う蓋は、肩に段や沈線をもって屈曲するものが多く、口縁端部には内傾する明瞭な面をもつ。蓋・身ともに外面に回転ヘラケズリが広範囲に施される。２類は、口径は１類と変わらないが、身の口縁の立ち上がりがやや低くなり内傾する。蓋は肩部の段や沈線がほぼ消失して丸くなり、口縁端部の面も不明瞭になる。蓋・身ともに外面には回転ヘラケズリが施される。３類は、法量が縮小し身の口径12～13cm前後で、口縁の立ち上がりはさらに低くなる。蓋・身ともに浅く丸い形態になる。外面には回転ヘラケズリが施されるが、その範囲は縮小している。４類は、口径は３類と大差ないが器高がやや低くなる傾向がある。外面の回転ヘラケズリには省略傾向がみえ、蓋・身とも中央部にヘラケズリが及ばずその周縁にのみドーナツ状に認められるものが多い。５類は、法量がやや縮小し身の口径10～11.5cm前後になる。外面の回転ヘラケズリは施されないものが大半を占める。６類は、さらに小型化して身の口径が９～10cm前後になり、杯類の法量が最も縮小する段階と思われる。回転ヘラケズリは認められない。

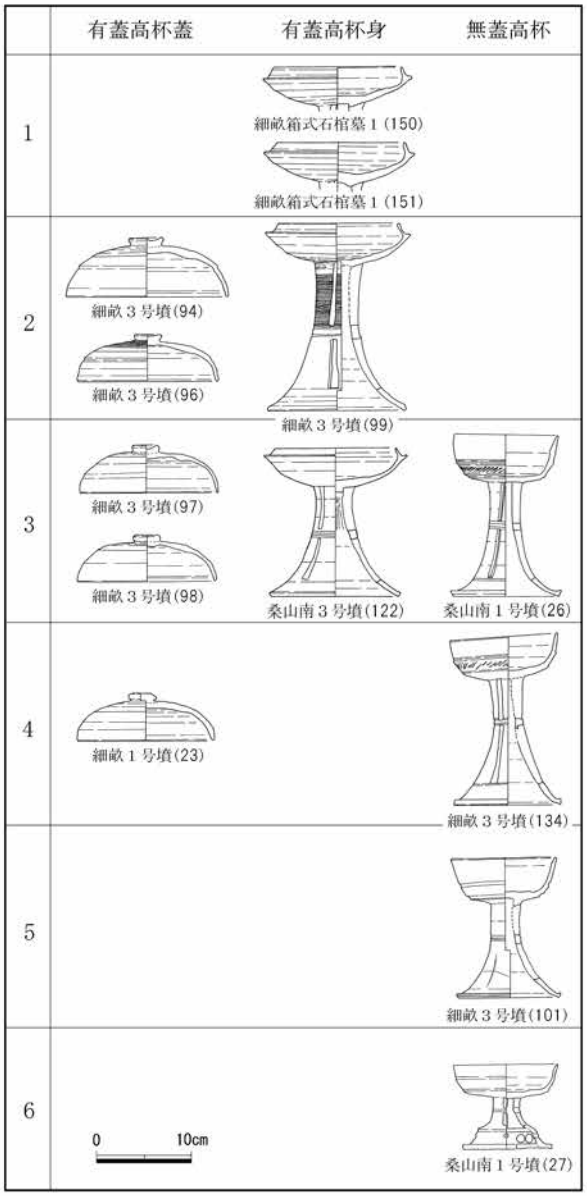
これら以外に、上記杯蓋と類似するが、口縁がやや直線的に開く器種がある。桑山南１号墳の石室内閉塞施設付近から２点のみ出土しており、付近にこれに組み合う可能性のある身または蓋がみられない。蓋を伴わない杯身である可能性が高く、これを７類とする。類似する器種は周辺地域でも出土例があり、鏡野町久田原２号墳[3]で３点、勝央町湯ヶ迫古墳[4]でも３点出土しているが、いずれも組み合う蓋は出土していない。桑山南１号墳における出土位置から、石室内で最も新しい杯の可能性が考えられ、身に立ち上がりをもつ蓋杯（奈文研分類杯Ｈ）に後出し、蓋につまみとかえりをもつ蓋杯（同杯Ｇ）が出現する直前段階に位置づけられよう。ただし、６類の杯蓋よりも口径がやや大きく、底部周縁には回転ヘラケズリがわずかに認められる。資料数が少なく明確ではないが、６類などに並行する可能性も考えられる。

以上の分類は一般的に知られている型式変化の方向と一致するものであり、概ね年代差を示すと考えられる。陶邑古窯跡群における型式との対応関係を示せば、１類がＴＫ10、２類がＴＫ43、３類がＴＫ209古段階、４類がＴＫ209新段階、５・６・７類がTK217に相当するであろう。以下、１～６類を１～６期と読み替え、７類についても６類に近い年代を想定し６期に含めておく。推定される実年代は、１期が６世紀中葉頃、２期が６世紀後半頃、３期が６世紀末葉頃、４期が７世紀前葉頃、５期が７世紀前半～中葉頃、６期が７世紀中葉頃と考えられる。

次に高杯について検討する（第160図）。この作業の目的のひとつは、有蓋高杯の杯部のみを副葬した細畝古墳群箱式石棺墓１の年代を決めることにある。まず有蓋高杯の蓋についてであるが、形態的特徴から次の３者に分類できる。ａ類（細畝**94・96**）は、口径14.7～16.9cmと大きく、肩部に明瞭な段ないし凹線を有し、口縁端部の内面に内湾する面や凹線を廻らせる。ｂ類（細畝**97・98**）は、口径約14.5cmで、肩部の段が消失しているが、口縁端部内面には凹線を廻らせる。ｃ類（細畝**23**）は、口径14.2cmとやや小ぶりで、肩部に段はなく丸みをもち、口縁端部も丸くおさめる。これらは、杯蓋と同様の型式変化を想定しａ類、ｂ類、ｃ類の年代順と考えられるが、有蓋高杯は蓋杯よりも古い形態を残す傾向がある。ａ類は、杯蓋の１類に類似する形態だが、細畝３号墳からの出土であるため１期までは遡り得ず、細畝３号墳の最も古い蓋杯に並行するものとして２期をあてる。ｂ類、ｃ類



第159図　須恵器蓋杯の型式と古墳群の消長（1/8）



第 160 図　須恵器高杯の編年（1/8）

は、不明確ながらａ類より新しい３期、４期をそれぞれにあてておく。次に、有蓋高杯の身について検討する。細畝３号墳出土の 99 は、脚部上段にカキメを施すのが特徴的である。同じく細畝３号墳出土の蓋でカキメをもち口径が近い 96 が組になると考えられるので、２期に位置づけ得る。桑山南 122 は、細畝 99 と口径は大差ないものの、口縁の立ち上がりがより低く、杯部下面の回転ヘラケズリの範囲も縮小し後出的であることから、３期に位置づける。同じく３期とした蓋（細畝 97・98）の口径とも整合的である。細畝 150・151 は有蓋高杯の脚部を折り取ったものであるが、２期とした細畝 99 よりも口径、口縁立ち上がりともに大きく、回転ヘラケズリの範囲も広いことから、１期に遡り得る。

無蓋の長脚２段透かし高杯は、次の３者に分類できる。ⅰ類（桑山南 26）は、杯部下半に文様帯を廻らせ櫛状工具による連続刺突文が施される。脚部は３方向に２段透かしをもち、透かしに挟まれた中央部と透かし下端に凹線を廻らせる。ⅱ類（細畝 134）はⅰ類と似るが、杯部下半の刺突文が櫛状工具ではなくヘラ状工具で、脚部透かし下端の凹線が不明瞭になっており、透かしの穿孔も粗雑で後出的である。ⅲ類（細畝 101）は、杯部下半の刺突文が消失し文様帯を画した凹線のみが残る。脚部の透かしは２段だが２方向となり、透かし下端の凹線はなくなっている。これらは型式的変化からⅰ類、ⅱ類、ⅲ類の順に推移し、その後に短脚高杯（桑山南 27）が位置づけられる。桑山南 27 は、短脚化が進みながらも２段２方向の透かしを維持しているが、鈴付という特殊な器種であることによるものであろう。無蓋高杯のうち最も古いⅰ類（桑山南 26）は桑山南１号墳の初葬に伴うと推定して３期にあて、最も新しい短脚高杯（桑山南 27）は出土状況から杯７類に伴うので６期にあてる。その間に位置するⅱ類（細畝 134）、ⅲ類（細畝 101）は、機械的ではあるが４期、５期にそれぞれあてておく。

２　古墳群の消長

前項の須恵器型式の検討から、古墳群の消長を確認する（第 159 図）。桑山南古墳群では、１期に２号墳と５号墳が築かれ、同時期に箱式石棺墓・土坑墓群が営まれる。本事業では調査対象外となった４号墳もほぼこの時期であろう。２期に築かれた墳墓はなく、３期になると１号墳が築かれ６期ま

で追葬がなされている。４期に築造された古墳はないが、１号墳への追葬が認められる。５期には３号墳が築かれ６期まで追葬が行われる。

細畝古墳群では、１期に属する古墳はないが、箱式石棺墓１が築かれており、１号墳下層出土須恵器もこの時期であることから、桑山南古墳群と同様の箱式石棺墓・土坑墓群が営まれていた可能性がある。２期になると３号墳が築かれ６期まで追葬が確認できる。３期には１号墳が築かれこれも６期まで追葬がなされている。４期には２号墳が築かれ５期まで追葬がなされる。

桑山南・細畝古墳群全体でみると、まず１期に墳墓群の造営が始まる。古墳の主体部として竪穴式石室が採用されており（桑山南２・４・５号墳)、古墳の周辺には箱式石棺墓・土坑墓群が営まれる。続く２期には横穴式石室が導入され（細畝３号墳)、以後の古墳は主体部として例外なく横穴式石室を採用している。また、２期以降に属する箱式石棺墓や土坑墓は確認されていない。古墳の築造は５期（桑山南３号墳）まで続き、その後は各古墳に追葬がなされるものの、新たに古墳が築かれることはなかった。追葬は６期までで７世紀後半に降る遺物は確認できず、６期に古墳群の利用が終わったとみられる。

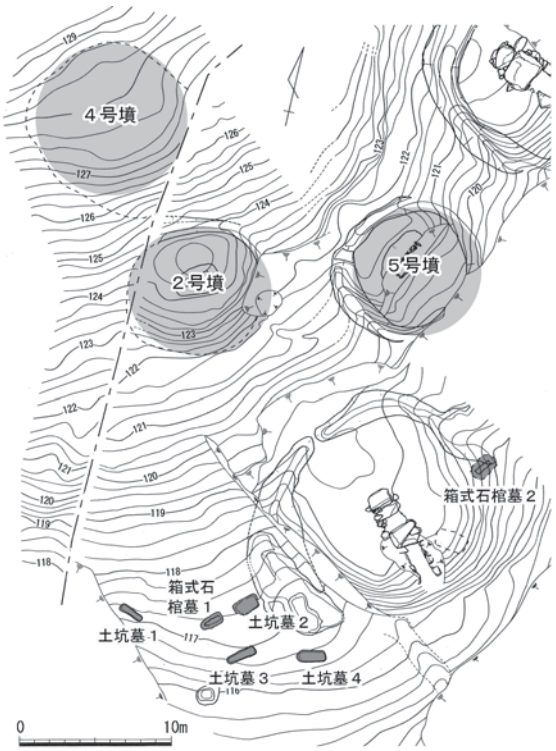
なお、佐良山古墳群全体では、皿川対岸の寺山Ａ１号墳[5]が１期よりもやや古い須恵器を出土しており、寺山古墳群に隣接する門の山１号墳[6]は副葬遺物がないが、箱式石棺をもつ方墳であることから中期に遡ると思われる。しかしながら、多くの古墳が調査された門の山古墳群[7]では、大部分の古墳が１期に属し、群集墳としての佐良山古墳群は概ね１期すなわち６世紀中葉頃から造営が開始されたと予想される。一方、桑山南・細畝古墳群において古墳の新規築造が終了する５期より新しい古墳については、調査例がなく不詳である。退化型の陶棺を出土した西の岡古墳[8]など小型の横穴式石室墳がその可能性をもつが、築造数はかなり減少しているものとみられる。

３　１期の桑山南古墳群にみられる階層性

１期の桑山南古墳群では、３基の古墳（２・４・５号墳）に加え、計６基からなる箱式石棺墓・土坑墓群が検出されており、これらの墳墓には階層性が明瞭に認められる。墳丘をもつ古墳と、墳丘をもたない箱式石棺墓・土坑墓との差は歴然としているが、古墳の中でも墳丘・石室の規模や副葬品の内容に差異がみられる。階層性の観点から、これらの墳墓を３者に分類する（第 10 表)。Ⅰ類は４号墳が該当する。墳丘直径約 10 ｍでそれほど大きくはないが、竪穴式石室は長さ約３ｍ、幅約１ｍと

第 10 表　桑山南古墳群における１期の墳墓

墳墓名	墳丘規模	埋葬施設		副葬品					分類
		種類	長さ	馬具	玉類	鉄鏃	刀子	土器	
４号墳	10 ｍ	竪穴式石室	3.0 ｍ	○	○	○		○	Ⅰ類
２号墳	８～９ｍ	竪穴式石室	2.1 ｍ		○	○	○	○	Ⅱ類
５号墳	８～９ｍ	竪穴式石室	2.1 ｍ			○	○	○	
土坑墓３	－	土坑墓	2.0 ｍ				○	○	Ⅲ類
土坑墓２	－	土坑墓	1.8 ｍ				○	○	
土坑墓１	－	土坑墓	1.7 ｍ					○	
土坑墓４	－	土坑墓	1.9 ｍ						
箱式石棺墓１	－	箱式石棺	1.0 ｍ					○	
箱式石棺墓２	－	箱式石棺	1.1 ｍ					○	



第 161 図　１期の桑山南古墳群（1/500）
※　網掛けが当該期の遺構

大きく、副葬品では馬具、玉類、鉄鏃などがある。Ⅱ類は２号墳と５号墳が該当する。墳丘直径８～９ｍでⅠ類よりわずかに小さいものの大差はない。竪穴式石室の規模は長さ約２ｍ、幅約 0.5 ～ 0.7 ｍでⅠ類との差が大きく、副葬品では馬具が欠落する。Ⅲ類は墳丘を伴わない箱式石棺墓及び土坑墓で、副葬品では玉類や鉄鏃を欠き、土器のほかには小型の刀子を伴う場合がある程度である。

なお、箱式石棺墓は土坑墓に比べて規模が小さく内法長約１ｍであり、成人遺体を伸展状態でおさめることが難しい。子供用の埋葬施設として箱式石棺が多用された状況が窺える。

上記Ⅰ類～Ⅲ類の墳墓は、立地の面でも階層差をもっている（第 161 図）。Ⅰ類の４号墳が立地するのは標高 128 ｍ付近で、群中で最も高い位置にある。Ⅱ類の２号墳と５号墳はそれより一段下がった標高 121 ～ 124 ｍ付近に立地する。Ⅲ類の箱式石棺墓・土坑墓群はさらに斜面を降った標高 117 ｍ付近で等高線に沿って広がっている。

このように、当古墳群で横穴式石室導入以前にあたる１期には、同一の墓域、尾根上において、各階層の墳墓がその形態や位置を分けながら営まれている状況が認められる。細畝古墳群における１期の状況は不明瞭だが、墳丘を伴う古墳（Ⅰ・Ⅱ類）は認められず、箱式石棺墓１が当期にあたるので、Ⅲ類墳墓のみが営まれた可能性が考えられる。

横穴式石室が導入される２期以降になると、調査区内において明確なⅢ類墳墓がみられなくなり、墳墓形態は墳丘をもつ横穴式石室墳に収斂される。その原因については２つの可能性が考えられる。すなわち、①Ⅲ類墳墓に葬られていた階層の人々も横穴式石室に追葬されるようになった可能性と、②それとは逆に、Ⅲ類墳墓の被葬者層がこの墓域から排除されていった可能性である。推測の域を出ないが、桑山南古墳群において想定される総被葬者数や、１期と、横穴式石室墳が造営・使用された２～６期との時間幅の差などを考慮すれば、②の可能性が高いように思われる。仮にそうであるとすれば、墳墓からみる限り、古墳に葬られた者（Ⅰ・Ⅱ類被葬者）とそうでない者（Ⅲ類被葬者）との社会的地位の差が、横穴式石室導入期以降、さらに拡大していったといえるかもしれない。

一方、墳丘をもつⅠ類とⅡ類の古墳の差異は、２期以降、群内でそれほど顕著には表れなくなる。横穴式石室の規模は、桑山南・細畝古墳群のすべてが全長６～ 6.5 ｍの間におさまり、比較的均質な印象を受ける（9）。それでも、墳丘規模は桑山南１号墳と細畝３号墳がやや大きく径 13 ～ 14 ｍを測り、両者とも尾根の先端に立地するほか、前者に象嵌装大刀、後者に馬具一式が副葬されている点は、階層差として認め得る。群集墳の階層性は、墳丘規模よりも石室規模の比較から議論される場合が多いが、同規模の横穴式石室からなる群集墳の場合、墳丘規模のわずかな差にも階層差が表現されている

可能性がある。さらに、各古墳において古墳の築造契機となった初葬者と追葬者との間にも、何らかの社会的位置の違いが存在したであろう(10)。追葬が盛んに行われるようになって一古墳に埋葬された人数が増したことにより、古墳間の階層差がみえにくくなっているのかもしれない。ほかにも、同一石室内におさめられた木棺、箱式石棺、陶棺という棺の材質の違いが何を意味するのかなど未解決の問題があり、横穴式石室墳における階層性について多くの課題を残している。　（尾上）

註

（１）『桑山南４号墳現地見学会資料』津山市産業文化部文化課文化財保護係　2020
『津山市史だより』第 16 号　津山市史編さん室　2020
仁木康治「岡山県津山市桑山南４号墳の発掘調査概要」『中四研だより』第 46 号　中国四国前方後円墳研究会　2020
以下、その成果に基づき記述するが、報告書が未刊のため断片的な情報である。

（２）『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　奈良国立文化財研究所　1978　ほか

（３）「久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184　国土交通省苫田ダム工事事務所・岡山県教育委員会　2004

（４）「湯ヶ迫古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117　岡山県教育委員会　1997

（５）河本清「美作津山市寺山Ａ１号墳」『古代吉備』第６集　古代吉備研究会　1969

（６）近藤義郎・中島壽雄『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952

（７）「門の山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 46 集　佐良山門の山古墳群発掘調査委員会・津山市教育委員会　1992
「門の山古墳群発掘調査報告２」『年報津山弥生の里』第 25 号　津山弥生の里文化財センター　2018

（８）註６

（９）佐良山古墳群全体に目を向ければ、これより上位に位置づけられる古墳として、カキ谷Ｂ古墳群１号墳（石室全長 8.8 m）、高野山根２号墳（9.5 m）、剣戸 13 号墳（剣戸塚西塚・9.7 m）、剣戸 14 号墳（剣戸塚東塚・9.8 m）などが存在し、桑山南・細畝古墳群との差は大きい。
『カキ谷Ｂ古墳群１号墳』カキ谷Ｂ古墳群１号墳埋蔵文化財発掘調査委員会　1987
内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備』第 13 集　古代吉備研究会　1991
安川豊史「剣戸塚西塚・東塚」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県　1986
平井泰明「剣戸古墳群」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020

（10）桑山南１号墳において象嵌装大刀を副葬していたのは追葬棺であり、同３号墳においても追葬棺に鉄製大刀がおさめられていた。初葬者と追葬者との関係は、単純に上下関係と言い切れない面がある。

第２節　横穴式石室の変遷と特徴

今回、桑山南古墳群で２基、細畝古墳群で３基、計５基の横穴式石室を調査した。このうち細畝３号墳は最も古いものであるが、石材採取によって大破し全体を知ることができない。その他４基の石室は、上部を失っているものもあるが基底部はほぼ完存し、全形を窺うことができる。

本節では、津山市周辺地域（美作中部）における横穴式石室の変遷の中にこれらの石室を位置づけ、その特徴について考察したい。

１　美作中部地域における大型石室の変遷

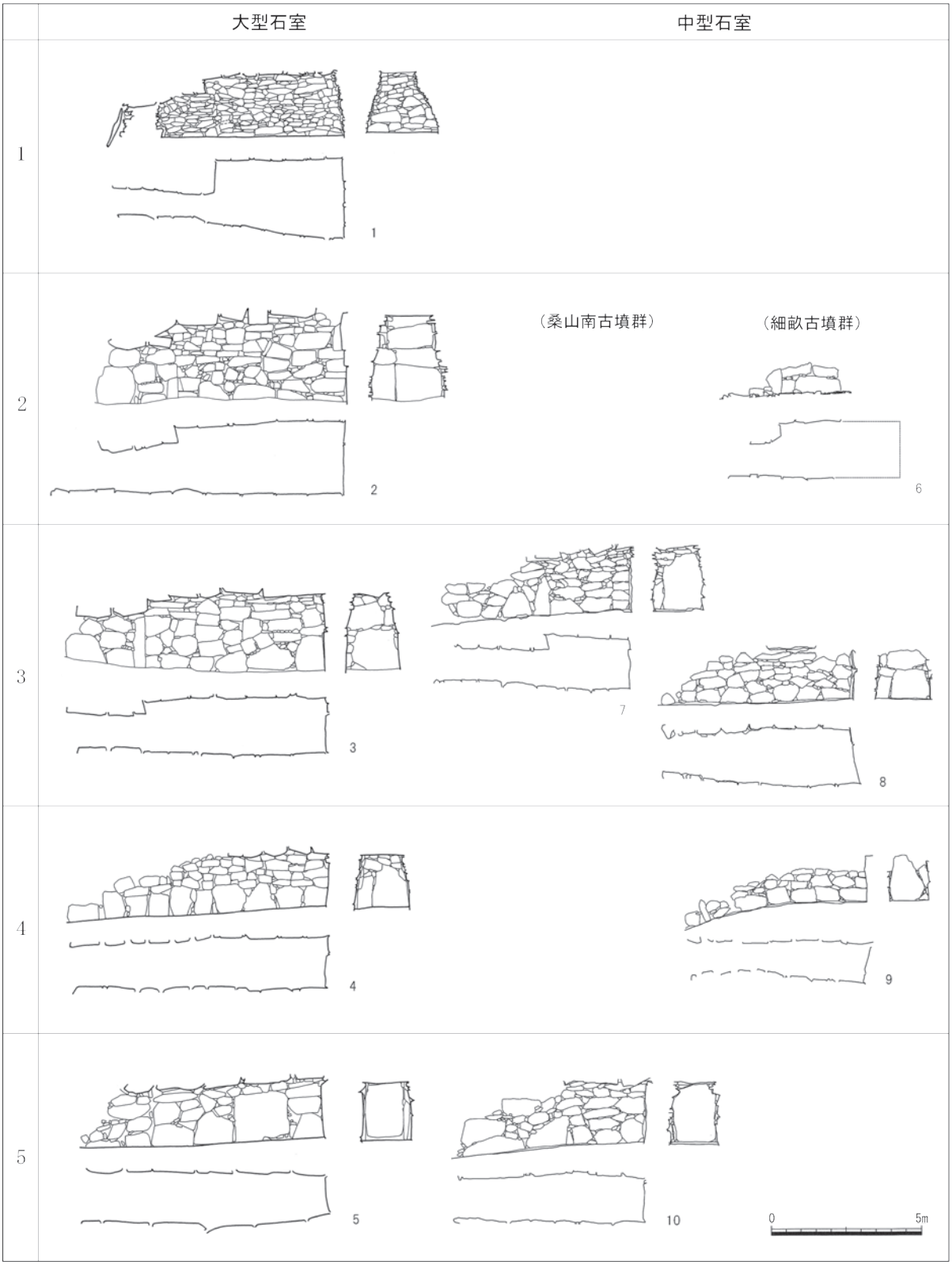
美作中部では、概ね全長８～９ｍ以上の横穴式石室が大型として捉えられ、津山市万燈山古墳(1)、鏡野町井上大塚古墳(2)など大きいものでは 11 ～ 12 ｍに達するものがある。桑山南・細畝古墳群の横穴式石室は、すべて全長 6.0 ～ 6.5 ｍの間におさまり、中型に位置づけることができる。

まず、大型石室の変遷についてみると、周辺他地域における変化の方向と同じく、使用石材の大型化、特に奥壁の１石化、袖幅の縮小と無袖化などを認めることができる。当地域における横穴式石室導入期にあたる１期(前節の須恵器編年に従う。以下同じ)に位置づけられる津山市中宮１号墳(3)は、小型石材多数を小口積みにし、袖幅が大きく羨道が狭いなど古い石室の特徴をもっている。２期にあたると推定される美咲町越尾古墳(4)は、使用石材がやや大型化し、奥壁は４段積みとなる。羨道幅が広くなり袖幅は縮小している。３期と考えられる鏡野町法明寺古墳(5)では、奥壁が２段積みとなる。４期の津山市室尾石生谷口古墳(6)では無袖化し、奥壁は上部に間詰め状の石材がみられるが概ね１段となっている。側壁は基底石が大型化して腰石状をなす。５期の津山市コウデン２号墳(7)では奥壁が完全な１石になり、側壁石材もさらに大型化している。このようにみると、無袖化と奥壁の１段（１石）化がなされている点で、３期から４期にかけて大きな画期が認められ、これ以降、美作地域では一部の首長墓を除いて袖をもつ石室はみられなくなる。なお、以上のうち中宮１号墳、室尾石生谷口古墳、コウデン２号墳の３基は発掘調査がなされ出土遺物から年代的な位置づけが可能であるが、越尾古墳と法明寺古墳は出土遺物の詳細が不明であり(8)、石室の型式的特徴のみから位置づけた。

また、当地域における横穴式石室の地域色として、①玄室が長く羨道が短い、②側壁に比較的小型の石材を積む傾向が新しい段階まで残る、③首長墓は一貫して片袖式の形態をとる、といった点が指摘されており(9)、地域の傾向として概ね追認できる。①については、特に大型石室において玄室長６ｍ前後、羨道長３ｍ前後、すなわち両者の比率が２：１程度のものが多数みられる（越尾古墳・法明寺古墳など）。③については、美作地域では両袖式がほとんどみられない。首長墓に限らず片袖式が基本で中でも左片袖式が卓越し、３～４期に無袖化する(10)。

２　桑山南・細畝古墳群石室の編年的位置づけ

中型石室に相当する桑山南・細畝古墳群の石室は、前節でみたように、１期に該当するものはなく、２期に細畝３号墳、３期に桑山南１号墳と細畝１号墳、４期に細畝２号墳、５期に桑山南３号墳が築かれている。これらの石室についても、上記大型石室と同様の変化が窺える。大型石室において、３期から４期にかけて無袖化と奥壁の１段（１石）化が進むことを確認したが、桑山南・細畝古墳群で



1 津山市中宮１号墳　2 美咲町越尾古墳　3 鏡野町法明寺古墳　4 津山市室尾石生谷口古墳　5 津山市コウデン２号墳
6 細畝３号墳　7 桑山南１号墳　8 細畝１号墳　9 細畝２号墳　10 桑山南３号墳

第 162 図　美作中部における横穴式石室の変遷（1/200）

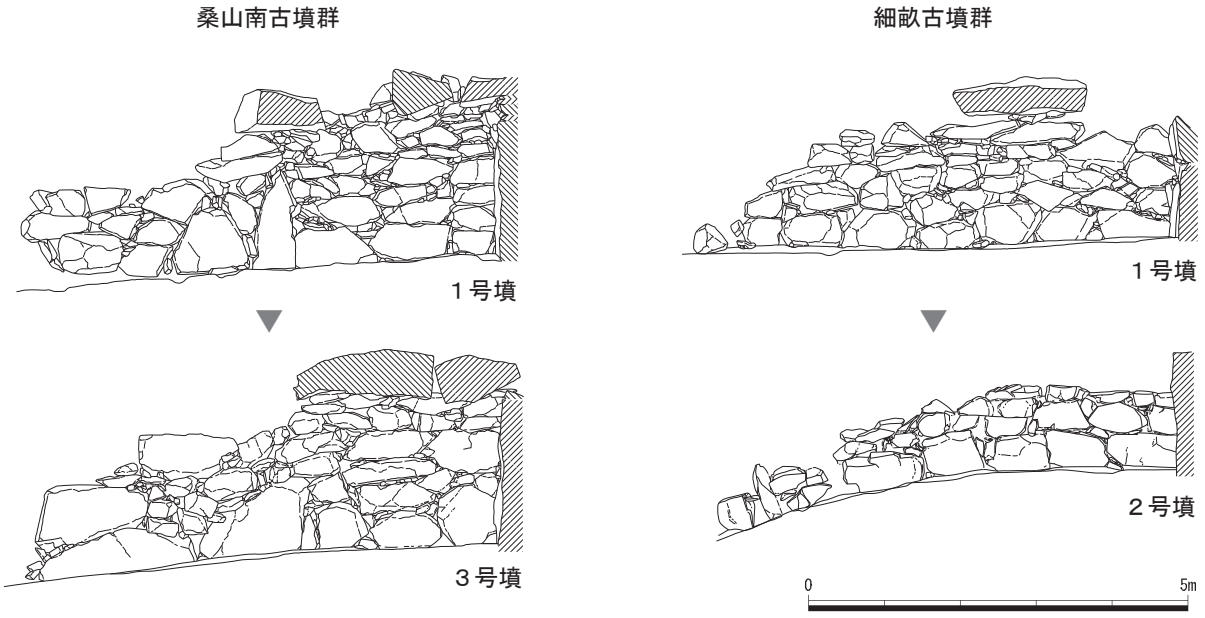
は３期がその転換期にあたっている。桑山南１号墳ではいまだ袖を維持しているが、奥壁は周縁に間詰め状の石材を入れるもののほぼ１段化している。逆に、細畝１号墳では無袖化している一方、奥壁は２段積みである。無袖化と奥壁１段化が進む過渡期にあって、新旧の要素が異なる形で取り入れられていった状況を示しているといえよう。次の４期には細畝古墳群でも奥壁の１段化がなされていると考えられ（２号墳)、５期には桑山南３号墳が無袖式で、奥壁は間詰め状の石材もほとんど入らない１石になっている。

以上のように、桑山南・細畝古墳群の石室は、周辺地域の大型石室と連動した変化をみせているが、その中で、無袖化と奥壁１段化が進む過渡期（３期）においては、桑山南古墳群と細畝古墳群でやや異なる状況が窺えた。細畝１号墳は、周辺地域でもいち早く無袖化した石室と考えられる。

３　桑山南古墳群と細畝古墳群の石室の比較

桑山南・細畝両支群の石室を比較すると、支群間で側壁の石積み等に相違点がみられ、各支群内では時期を超えて共通する特徴が認められる（第 163 図)。桑山南１号墳の石室は、片袖式で袖部に玄門立柱石を立てるが、それを境に玄室と羨道で側壁の石積みが異なっている。玄室の側壁は縦目地が通るのが特徴的で、縦に３列ほどの単位が認められる。一方、羨道の側壁には玄室よりもやや大きい石材を用い、乱雑に積まれたような印象を受ける。このような特徴は、無袖化した桑山南３号墳にも継承されている。１号墳と同様に左側壁をみると、奥半部と外半部で石積みが変化している。奥半部は縦目地が通り、縦に３列ほどの単位が認められ、上端に積まれた小型石材のみ２段分の横目地が通る。外半部は奥半部よりも大型の石材を乱雑に積んでいる。袖を失った３号墳においても奥半部と外半部で石積みが変化しており、さらに１・３号墳両石室の全長及び全高、石積みが変化する部分の位置までほぼ一致している。３号墳において側壁石積みが変化する位置は、平面でみてもやや屈曲して外側に張り出しており、袖の名残を留めていると考えられる。

これらに対し、細畝１号墳の石室側壁は、前端から奥まで一連の石積みとなっており途中で変化し



第 163 図　支群で異なる石室の特徴（1/100）

ない。基底部にやや大きな石材を据えるがその高さを揃え、全体に横目地がよく通る。このような特徴は細畝２号墳に継承されている。奥壁が１段とみられる点や側壁基底石がブロック状に整った形態になる点は新しい要素であるが、側壁は全体にわたって横目地がよく通り、細畝１号墳と類似する。さらに、細畝２号墳は天井石が残存しないが、奥壁がほぼ１石であるとすると石室の高さは細畝１号墳（1.75ｍ）に近く、桑山南１・３号墳（2.0ｍ）より低い。

以上のようにみてくると、桑山南・細畝両支群間で、側壁の積み方すなわち石室の構築方法や、石室高などに違いがあり、その違いが時期を超えて継承されていることが分かる。特に桑山南１号墳と３号墳は、出土須恵器の検討から築造時期に半世紀近い差が想定され、その間に無袖化もなされているが、それでも側壁の積み方や石室全長、全高などが酷似する。また、上述のように無袖化及び奥壁の１段化という流れへの対応の仕方にも、両支群間で相違がみられた。このような相違が認められるということは、支群間で石室を構築した工人（集団）が異なっているとともに、支群と工人（集団）との関係が、少なくとも半世紀近くにわたって固定、継続されていたことを示唆している。さらに推測を重ねれば、石室を構築する工人（集団）が異なるということは、そこに葬られた人々も、異なる集団であったと考えられる。桑山南・細畝両支群は、狭い谷を挟んで約50ｍという近い距離にあるが、こうした至近距離で隣り合う支群及び被葬者集団どうしの関係を探る上で、重要な資料になるものと思われる。（尾上）

註

（１）『万燈山古墳』岡山県苫田郡加茂町文化財保護委員会　1974
豊島雪絵「万燈山古墳」『新修津山市史』資料編　考古　2020

（２）土居徹「井上大塚古墳（まかべ13号墳・井上火の釜）」『鏡野町史』考古資料編　2000

（３）近藤義郎「中宮第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市　1952

（４）正岡睦夫「久米郡中央町越尾古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』４　岡山県教育委員会　1974
正岡睦夫「越尾古墳」『中央町誌』資料編　美咲町　2020

（５）安川豊史「法明寺古墳（法明寺火の釜）」『鏡野町史』考古資料編　2000

（６）「室尾石生谷口古墳ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』133　岡山県教育委員会　1998

（７）『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

（８）越尾古墳は、東京国立博物館の目録によれば、1915年に耕地整理に伴って「銅環１、管玉、杯３、高杯７、埦２、脚付埦１、脚付長頸壺１」が出土し地元保管とされるが、現在その所在は確認できないという。法明寺古墳も「冑、直刀、馬具（鉄轡）、須恵器」などが出土し、石室内には陶棺２基以上があったとされるが、陶棺破片が現存するにすぎない。
本村豪章「古墳時代の基礎研究稿―資料篇（Ⅰ）―」『東京国立博物館紀要』第16号　東京国立博物館　1981
光井清三郎「美作考古界」『考古界』第２篇第７号　考古学会　1902
註４・５文献

（９）内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備』第13集　1991

（10）尾上元規「吉備における横穴式石室の展開と地域性」『横穴式石室の研究』同成社　2020

第３節　陶棺について

桑山南・細畝古墳群からは、計６基の陶棺が出土した。これだけの数の陶棺が発掘調査で一度に出土したことに加え、桑山南１号墳１号陶棺や細畝１号墳陶棺など、美作地域では類例の少ない型式の陶棺が出土したことの意義は大きいと言える。ここでは、陶棺に関する近年の研究動向と今回の調査成果を照らし合わせ、各陶棺の位置づけを行いたい。

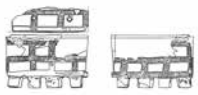
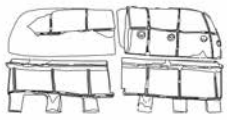
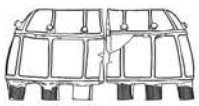
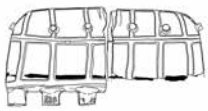
１　桑山南・細畝古墳群出土陶棺の分類と時期

今回出土した陶棺は外見や製作技法の特徴から大きくⅠ～Ⅳ類に分類できる（第 164 図）。以下にその概要を示す。

Ⅰ類　―　蓋・身別造りの土師質亀甲形で、格子状にめぐる幅広の突帯と文様を施す点を特徴とする。細畝１号墳陶棺。

Ⅱ類　―　蓋・身別造りの土師質亀甲形で、細い突帯と鉤状の突起を特徴とする。桑山南１号墳１号陶棺。

Ⅲ類　―　蓋・身一体造りの土師質亀甲形で、蓋に円柱状の突起が合計 10 個付く点を特徴とする。身の中央切断部のクランクの有無によってⅢａ類とⅢｂ類に細別され、Ⅲｂ類にはさらに

本稿分類	時期	他文献との対応					
		間壁1983	杉山1987	光本2001	横田2003	宮岡2010	鐘方2018
Ⅰ類  細畝１号墳	３期	土師質亀甲・特帯型	A₂	畑グループ	２段階	畑タイプ	備前A系
Ⅱ類  桑山南１号墳１号	３期	土師質亀甲・畿内型	A₃	弥上グループ	３段階	弥上タイプ	備前B系
Ⅲa類  桑山南１号墳２号	４・５期	土師質亀甲・岡山型	B～E	寺田グループ	４段階・クズレ塚類	クズレ塚タイプ	美作４突起系
Ⅲb類  桑山南３号墳１・２号	５～６期						
Ⅳ類 細畝２号墳	４・５期		―	―	―	―	―

第 164 図　桑山南古墳群・細畝古墳群出土陶棺の分類と研究史との対応（1/80）

脚３列タイプと脚２列タイプが認められる。桑山南１号墳２号陶棺、桑山南３号墳１・２号陶棺。

Ⅳ類　―　蓋・身一体造りの土師質亀甲形で、身の縦突帯に上端まで達しないものがある点を特徴とする。細畝２号墳陶棺。

Ⅰ・Ⅱ類は、間壁葭子氏の分類で「特帯型」や「畿内型」とされた一群で(1)、岡山では古式の陶棺として知られる。Ⅲ・Ⅳ類は身厚で蓋身一体造りを特徴とする「岡山型」の一群で、Ⅲ類は研究者によって名称が異なるものの蓋の突起数が10個となる点を特徴として区分される一群である。Ⅳ類は、従来の分類にはない特徴を有しており、今後の資料の増加が期待される。

次に、各陶棺の埋葬時期について整理する。共伴須恵器の型式ついては、本章第１節に従う。

桑山南１号墳からは陶棺以外に棺にあたる施設や鉄釘等は出土していない。出土した須恵器は３・４・５期及び７期である。奥壁側の１号陶棺（Ⅱ類）を初葬と考えると、時期は３期と言える。羨道側の２号陶棺（Ⅲａ類脚３列タイプ）は４・５・７期のいずれかに伴うと考えられるが、７期の須恵器は閉塞部から２点出土したのみで、追葬を考慮すると、４・５期のどちらかに伴う可能性が高い。

桑山南３号墳からは陶棺２基のほか、棺として箱式石棺と木棺に伴うと考えられる鉄釘が出土している。出土した須恵器は５期と６期である。検出状況から、箱式石棺→１号陶棺→２号陶棺・木棺の順で埋葬されたと考えられ、あまり時間差なく埋葬された可能性は否定できないが、１号陶棺（Ⅲｂ類脚３行タイプ）は５期、２号陶棺（Ⅲｂ類脚２列タイプ）は６期に伴うと考えられる。

細畝１号墳は陶棺１基のほか、棺として箱式石棺がある。陶棺（Ⅰ類）は奥壁に近い位置に据えられており、初葬と考えられる。出土した須恵器は３～５期で、陶棺は３期に伴う可能性が高い。

細畝２号墳からは陶棺１基のほか、木棺に伴うと考えられる鉄釘が出土している。出土した須恵器は４期と５期だが、石室内は撹乱が激しく、陶棺（Ⅳ類）がどちらに伴うかは判断できない。

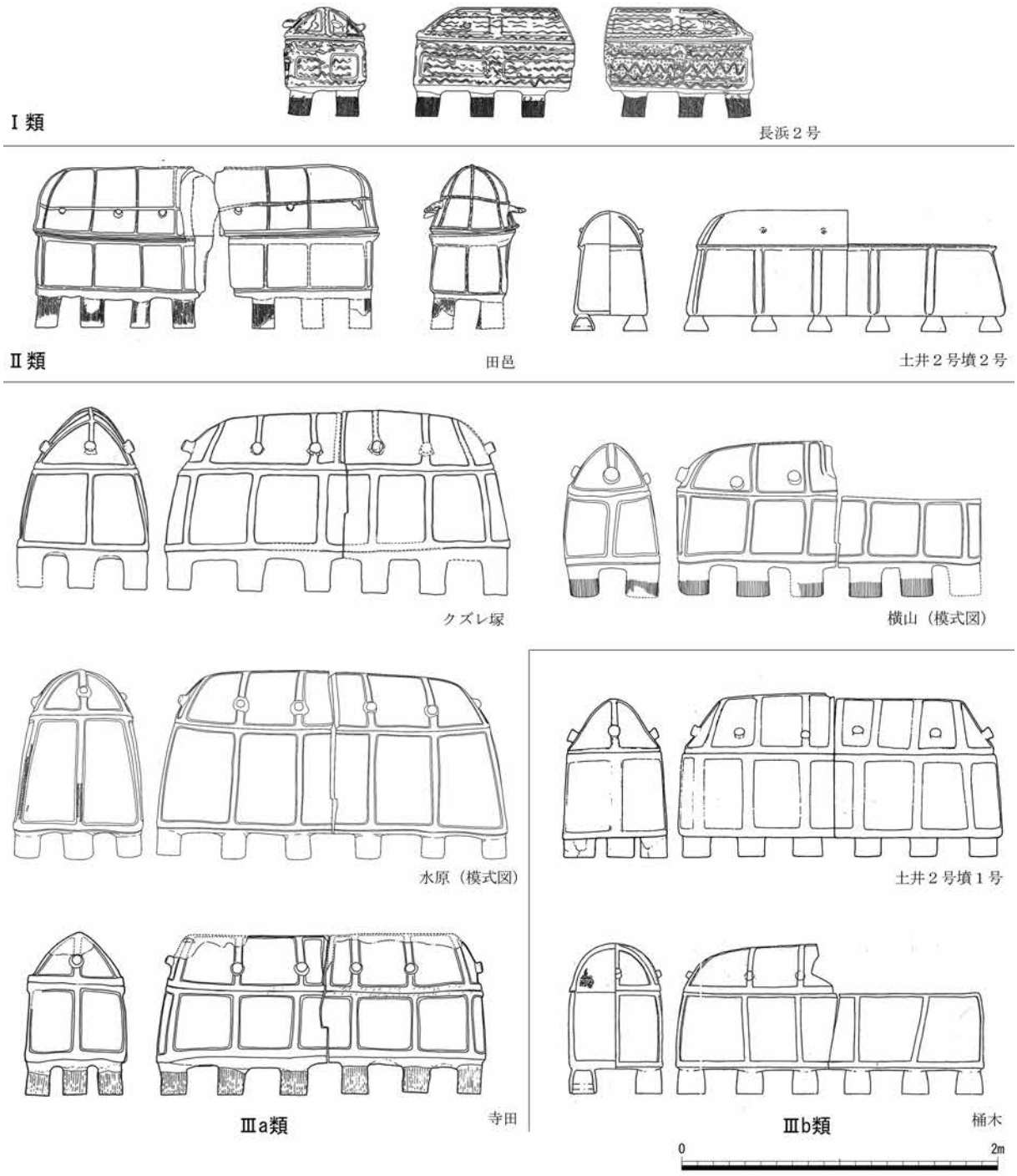
以上の検討に従い、陶棺の分類と時期の対応を整理すると、Ⅰ類とⅡ類が３期、Ⅲａ類とⅢｂ類脚３列タイプ及びⅣ類が４～５期、Ⅲｂ類脚２列タイプが６期に対応すると言える。

２　美作における同類陶棺と相対的な位置づけ

次に、美作で出土した陶棺の内、先の分類に該当する資料を取り上げ、共伴須恵器や型式を比較することで桑山南・細畝古墳群出土陶棺の編年的な位置づけを行う。なお、相対的な関係を明確にするため、本稿では共伴土器が判明し、かつ全体の形状がわかる資料を重点的に取り上げている。

Ⅰ類と同型式の陶棺は、鏡野町長浜２号墳から出土している(2)（第165図）。長浜２号墳出土須恵器は３～４期相当であるが、３期の須恵器は１点しかなく、陶棺は４期に伴うと考えられている(3)。細畝１号墳出土陶棺と比較すると、太型の突帯を格子状に配し、文様をほどこすという点では共通している。しかし、脚が２列６行である点や、身に蓋受けがない点、突起が鉤状になる点、施文が突帯以外の場所にも施されている点、相対的に脚が大きくて長く、明瞭なハケメが残る点などが細畝１号墳陶棺とは異なっており、むしろ後述する備前南部のⅠ類陶棺との共通点が多い。よって、細畝１号墳１号陶棺と長浜２号墳陶棺を同一系譜として扱えるかは疑問が残るが、現状では共伴須恵器に基づいて細畝１号墳陶棺→長浜２号墳陶棺という順序を想定しておく。なお、美作では３期を遡るⅠ類陶棺は出土しておらず、細畝１号墳陶棺は美作における出現期の陶棺と評価できる。

Ⅱ類と同型式の陶棺は、津山市田邑古墳(4)から出土している。また、北房町土井２号墳２号陶棺(5)



第 165 図　美作出土のⅠ～Ⅲ類陶棺（1/40）

も、突帯や鉤の形状に違いはあるものの、蓋受けを有することや突帯の配置から、同型式として取り上げる(6)（第 165 図）。田邑古墳の出土須恵器は４・５期で、４期が主体となる。陶棺を桑山南１号墳１号陶棺と比較すると、外見的な特徴として、脚数の減少、突起の矮小化、蓋小口側の孔・栓の省略、棺幅の縮小が指摘でき、細部では脚のハケ後ナデ調整が省略されている点を指摘できる。全体として製作工程が簡略化されていると言え、共伴須恵器の年代差と型式学的な変化は整合的である。土井２号墳２号陶棺は、追葬が多く共伴須恵器を絞り込めないが、ロクロ成形脚を持つなど製作に須恵器系技術が導入されていることが指摘されており(7)、７期以降に下る可能性が高い。以上の点から、

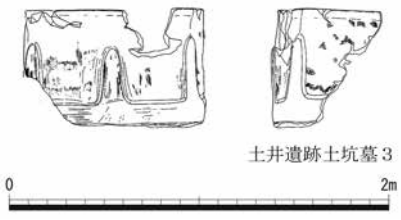
Ⅱ類については桑山南１号墳１号陶棺→田邑陶棺→土井２号墳２号陶棺という順序を想定することができる。なお、美作では３期を遡るⅡ類陶棺は出土しておらず、桑山南１号墳１号陶棺は細畝１号墳陶棺と並んで、美作における出現期の陶棺と評価できる。

Ⅲａ類と同型式の陶棺は、津山市クズレ塚古墳[8]、津山市水原（黒姫塚）古墳[9]、津山市寺田古墳[10]、伝津山市横山出土陶棺[11]などがある（第165図）。クズレ塚古墳の出土須恵器は３～５期である。陶棺が初葬と想定され、時期は３期に遡る可能性が高い。水原古墳からは３～５期の須恵器が出土している[12]。出土状況や追葬の有無が判然としないが、外見の特徴や、長軸220cm・高さ120cmを越える大型棺である点などがクズレ塚陶棺と類似しており、水原陶棺も３期に遡る可能性が想定される。寺田古墳からは３・４期の須恵器が出土している。陶棺以前に木棺の埋葬が想定されており、陶棺の時期は４期に下る可能性が高い。津山市横山出土陶棺の共伴須恵器は不明である。型式的に見ると、クズレ塚陶棺は、脚部がナデ調整で仕上げられており、先のⅠ・Ⅱ類の例から、ハケメを残す桑山南１号墳２号陶棺や寺田陶棺より古くなる可能性が高い。寺田陶棺は、桑山南１号墳２号陶棺と同様に中央の脚が省略されているという特徴を持つ。両者は大きさや製作技法上の特徴が類似しており、同じ時期に同一工人によって製作された可能性も想定され、桑山南１号墳２号陶棺についても４期に比定できる可能性が高い。横山陶棺については中央切断部のクランクの有無を除けば脚が２列化している点などで６期の桑山南３号墳２号陶棺と類似しており、ほぼ同時期であると考えられる。以上の点から、Ⅲａ類についてはクズレ塚・水原陶棺→寺田・桑山南１号墳２号陶棺→横山陶棺という順序を想定することができる。

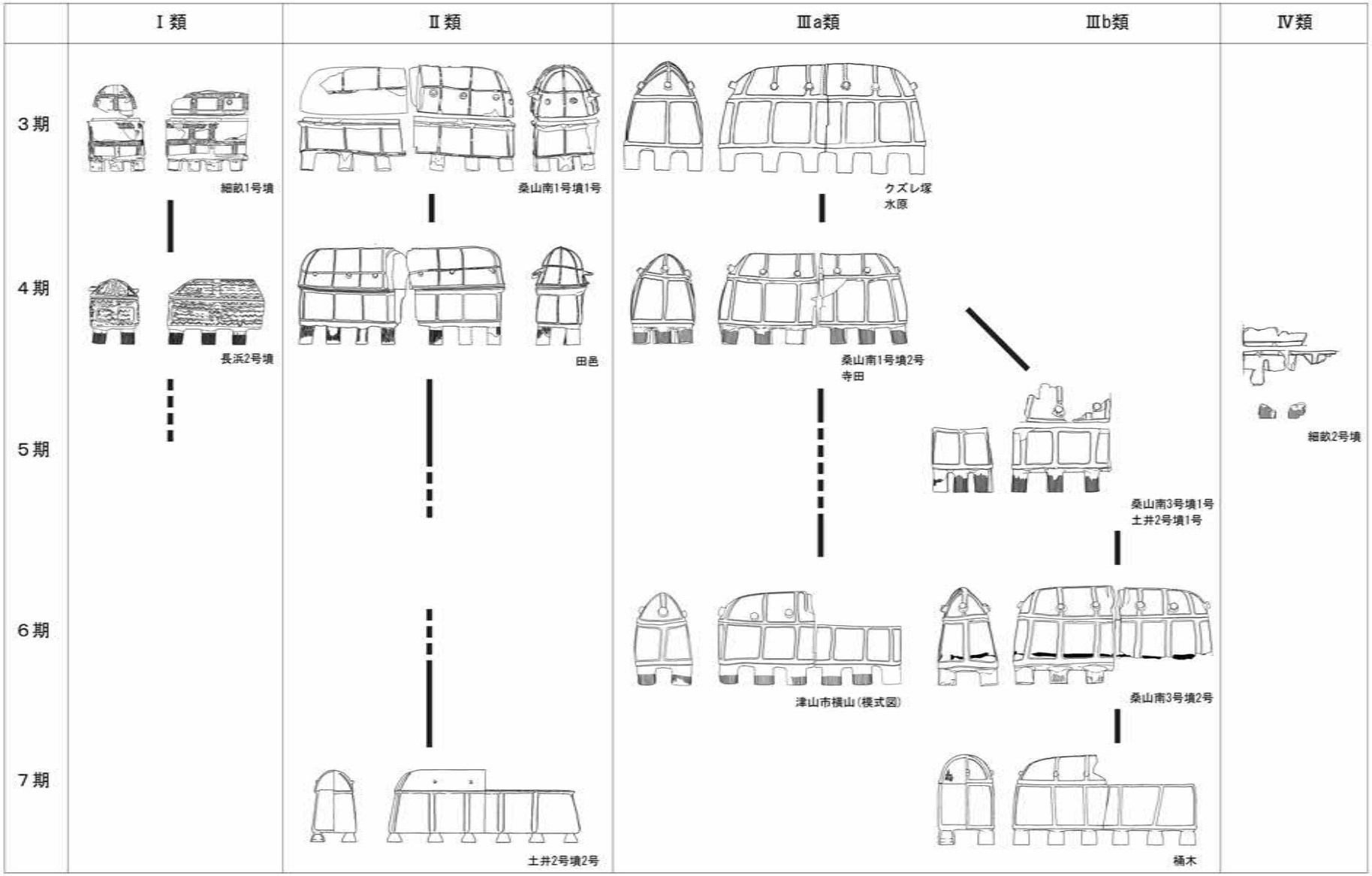
Ⅲｂ類と同型式の陶棺は、北房町土井２号墳１号陶棺[13]や美作市桶木古墳[14]から出土している（第165図）。土井２号墳１号陶棺は追葬が多く共伴須恵器が絞り込めないが、５期の桑山南３号墳１号陶棺と特徴が類似しており、同時期である可能性が高い。桶木陶棺は、ろくろ成形やタタキ技法など、製作において須恵器系技術の導入が指摘されており[15]、桑山南３号墳２号陶棺より後出であることは間違いない。よって、Ⅲｂ類については、桑山南３号墳１号陶棺・土井２号墳１号陶棺→桑山南３号墳２号陶棺→桶木陶棺という順序を想定することができる。桑山南３号墳の調査成果から、このタイプの陶棺で脚が２列化する画期は５期と６期の間に想定でき、これはⅢａ類についても同様と考えられる。なお、現状では桑山南３号墳１号陶棺や土井２号墳１号陶棺より古いと考えられるⅢｂ類の陶棺は出土しておらず、このタイプはⅢａ類からの派生系統である可能性が指摘できる。

次にⅣ類について、現状では美作で同様の陶棺の例はない。備前南部の赤磐市土井遺跡[16]から同様の特徴を持つ陶棺が出土しているが（第166図）、共伴する須恵器がなく、細畝２号墳陶棺が破片であることから型式的な検討も難しい。よって、現状では４・５期に属する特殊な型式の陶棺として理解するに留めておく。

以上の検討結果をまとめたのが第167図である。今回取り上げなかった型式の資料を含めても、美作全体で３期を遡る陶棺の例はなく、今回出土した桑山南１号墳１号陶棺や細畝１号墳陶棺は美作における導入期の陶棺と評価できる。また、Ⅰ類とⅡ類の陶棺については、年代差を想定する意見[17][18]と併存していたとする意見[19][20]があるが、今回の調査では両者の共伴土器に年代差は想定できず、Ⅰ・



第166図　Ⅳ類陶棺の類例（1/40）



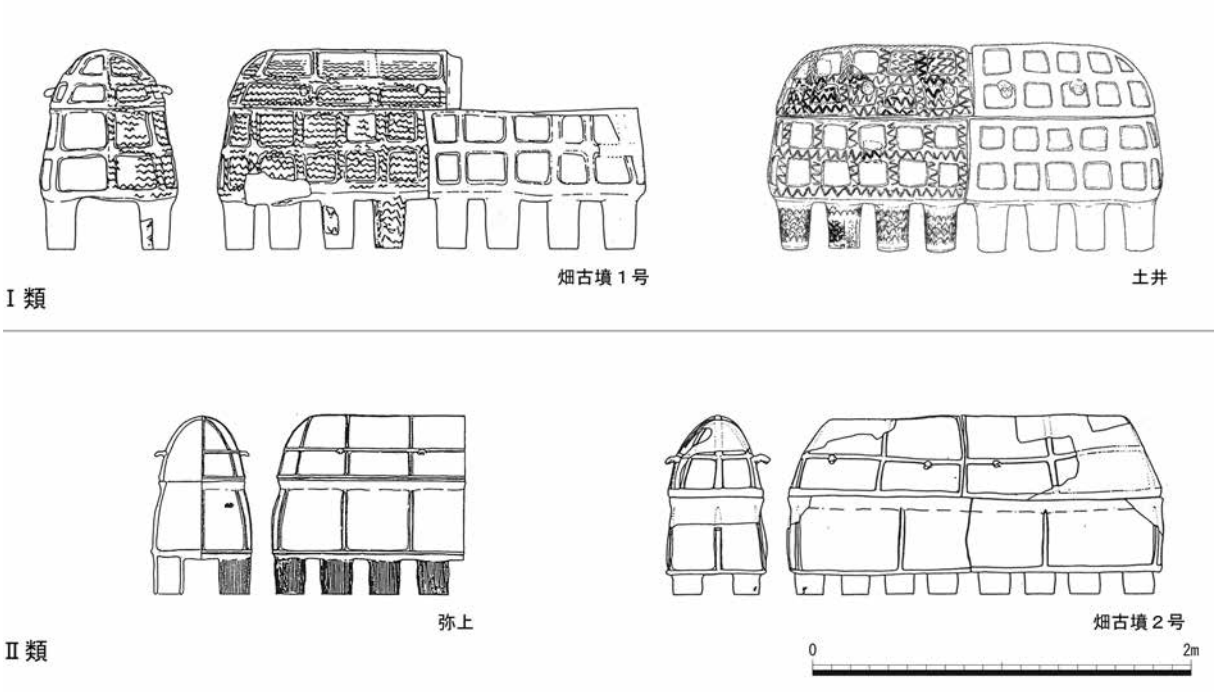
第167図　美作におけるⅠ～Ⅳ類陶棺の変遷（1/60）

Ⅱ類陶棺は併存していた可能性が高まったと言える。さらに、Ⅰ・Ⅱ類陶棺より遅れて出現すると考えられてきた蓋身一体造りのⅢ類陶棺についても、共伴須恵器の検討から美作ではⅠ・Ⅱ類とほぼ同時に出現し、細部を変化させながら一定期間製作され続けていると考えられた。美作におけるⅢ類陶棺の出現が陶棺の導入期に遡ることは以前にも指摘されているが[21]、Ⅰ・Ⅱ類陶棺もほぼ同時期に出現していたことが明らかになった点は今回の調査成果と言える。

３　美作におけるⅠ・Ⅱ類陶棺の系譜

前項で、今回出土した細畝１号墳陶棺と桑山南１号墳１号陶棺を美作におけるⅠ類・Ⅱ類陶棺の出現期の資料と位置づけた。以下では、その系譜を探るため、同型式の陶棺が多く出土している岡山南部との比較検討を行う。

まず、Ⅰ類陶棺について検討する。吉備南部でⅠ類に分類される陶棺は、赤磐市畑古墳１号陶棺[22]と赤磐市土井遺跡１号窯跡出土陶棺[23]がある[24]（第 168 図）。畑１号陶棺と細畝１号墳陶棺を比較すると、太型の突帯を格子状に配し、文様をほどこすという点では共通している。しかし、畑古墳１号陶棺は脚が２列である点や、身に蓋受けがない点、突起が鉤状になる点、施文が突帯以外の場所にも施されている点、蓋同士の合わせ目部分に受け分が造り出されている点などで細畝１号墳陶棺とは大きく異なっている。土井遺跡１号窯跡出土陶棺は、蓋の文様の一部が細畝１号墳陶棺と類似するが、突起の形状や施文位置などは畑古墳１号陶棺に近く、やはり細畝１号墳陶棺とは相違点が多い。先述のように、これら備前南部のⅠ類陶棺は、鏡野町長浜２号墳とは類似性が高く、その祖型になったと考えることは可能である。しかし、今回出土した細畝１号墳陶棺との関係については、型式的な相違点が多いことからも、現状ではその先後関係を明らかにすることは難しい。吉備の陶棺の伝播元と考えられる畿内においても、陶棺は時期が下るにつれて脚数を減少させていく方向に型式変化していくことが指摘されており[25]、２列脚の畑古墳出土陶棺の年代がどこまで遡るかについては詳細な検討

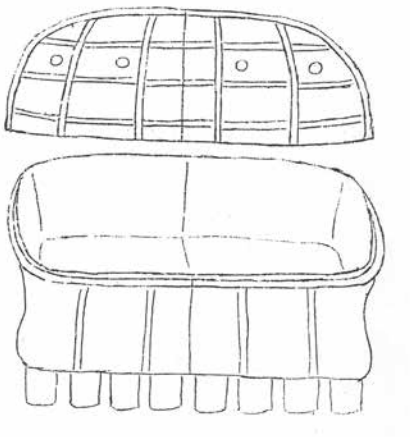


第 168 図　岡山南部出土Ⅰ・Ⅱ類陶棺（1/40）

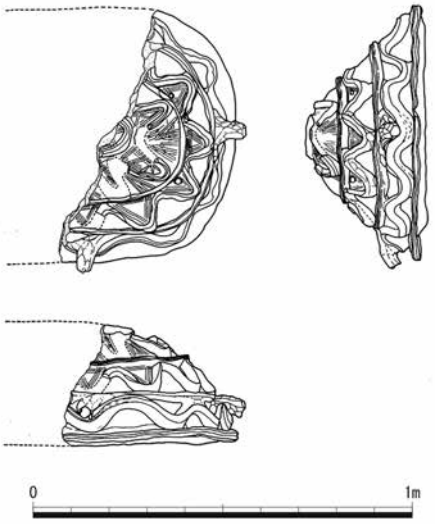
が必要と考える。

次に、Ⅱ類陶棺について検討する。吉備南部でⅡ類に分類される陶棺には、赤磐市弥上古墳出土陶棺[26]、畑古墳２号陶棺[27]がある（第168図）。このうち、弥上古墳出土陶棺は、岡山におけるⅡ類陶棺の標識として扱われてきた資料である。しかし、桑山南１号墳２号陶棺と比較すると、脚が２列である点や、身に蓋受けがない点、蓋の突起が少ない点、蓋の合わせ目に受け部やかぶせ部が造り出されていない点など、異なる点が多く、弥上陶棺を桑山南１号墳１号陶棺の祖型と位置づけることは難しい。

ここで注目されるのが、備前市六地蔵北古墳出土陶棺[28]と、備中南部の総社市こうもり塚古墳出土陶棺[29]である。六地蔵北古墳出土陶棺については、現物は失われており、簡単なスケッチが残るだけだが（第169図）、脚数が３列８行となる点や蓋を３段に区画する点などが、畿内でＭＴ 85 ～ＴＫ 43 型式段階に比定される赤田１期以前の陶棺と類似することが指摘されており[30]、備前南部では最古の陶棺になる可能性が高い。身の構造を見ると、突帯の特徴や蓋受けを有する点などが桑山南１号墳１号陶棺とよく似ており、その祖型と位置づけられる可能性は十分にある。また、この六地蔵北古墳陶棺と時期的に並行すると考えられるこうもり塚古墳出土陶棺（第170図）は、全体の形状は異なるものの、蓋に鉤状の突起を有する点や、蓋の小口側に２つの穴が空けられている点などが桑山南１号墳１号陶棺と共通している。直接の祖型となる未知の陶棺が存在する可能性は否定できないが、現状では桑山南１号墳１号陶棺は六地蔵北古墳陶棺及びこうもり塚古墳陶棺の双方から影響を受けつつ、脚数や突起数などに美作の独自性が付加された結果として成立した可能性を指摘しておきたい。



第169図　六地蔵北古墳出土陶棺（縮尺不明）

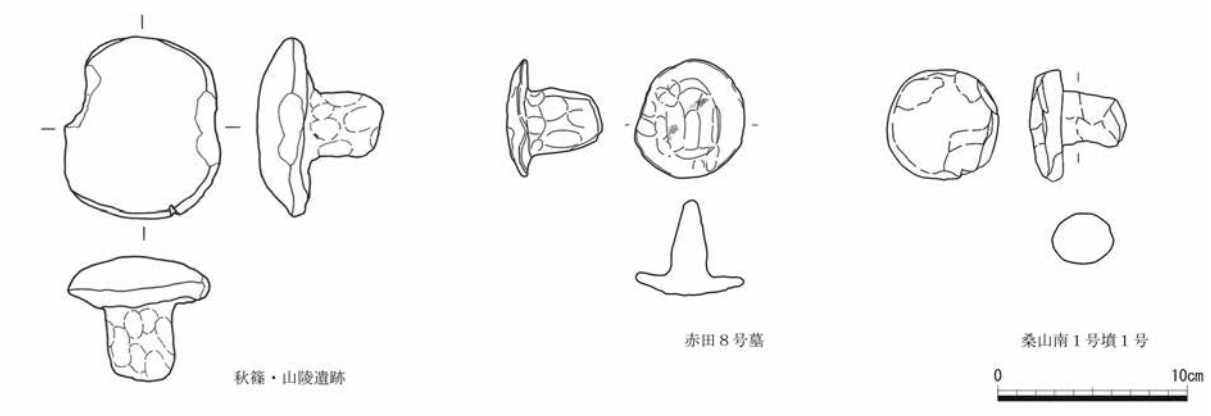


第170図　こうもり塚古墳出土陶棺（1/20）

４　桑山南１号墳１号陶棺に伴うキノコ形陶栓について

桑山南１号墳１号陶棺の周辺からは特徴的なキノコ形の陶栓が出土した。調査時、蓋はバラバラの状態で、陶栓も着装状態ではなかったが、形状や大きさからこれらは蓋の小口に空けられた小孔に装着されていたと考えられる。調査では３点しか出土しなかったが、本来は両小口側に２つずつ、計４つの陶栓が装着されていたと想定される。

このキノコ形の陶栓の類例は、畿内の、いわゆる「北大和系」と称される、奈良盆地北部の陶棺の一群に伴って見つかっている（第171図）。大型と小型の二者があり、前者から後者への変化が想定されている[31]。桑山南１号墳１号陶棺のキノコ形陶栓は小型の赤田８号墓例に類似する。しかし、



第 171 図　キノコ形陶栓の類例（1/40）

赤田８号墓陶棺の時期はＴＫ 217 型式相当の赤田３期とされており、桑山南１号墳１号陶棺の方が古い。陶栓の小型化がどの段階で生じたかは現状では不明だが、桑山南１号墳１号陶棺の陶栓は北大和系の陶棺の製作技術に系譜を持つことは確かであると言える [32]。

５　脚の接合方法について

桑山南･細畝古墳群出土陶棺の脚の接合方法は、脚内部の観察から大まかに３種類に分けられる（写真 39）。

Ａ：脚内面の接合部に沿って、輪状に粘土帯を貼り付けるもの

Ｂ：脚の内部中央に上から粘土塊を押し込んだような痕跡を残し、内部中央が下方向に盛り上がるもの

Ｃ：１・２どちらの手法も用いられていないもの。

接合方法Ａが観察されるのは、桑山南１号墳１号陶棺のみである。接合方法Ｂは、細畝１号墳陶棺、桑山南１号墳２号陶棺、桑山南３号墳１号陶棺で認められる [33]。接合方法Ｃは桑山南３号墳２号陶棺で認められる。今回、断面を観察できる良好な破片がなく、具体的な接合方法までは明らかにしえなかったが、接合方法Ｂは型式を越えて技法が共通している可能性があり、注目される [34]。（藤井翔）

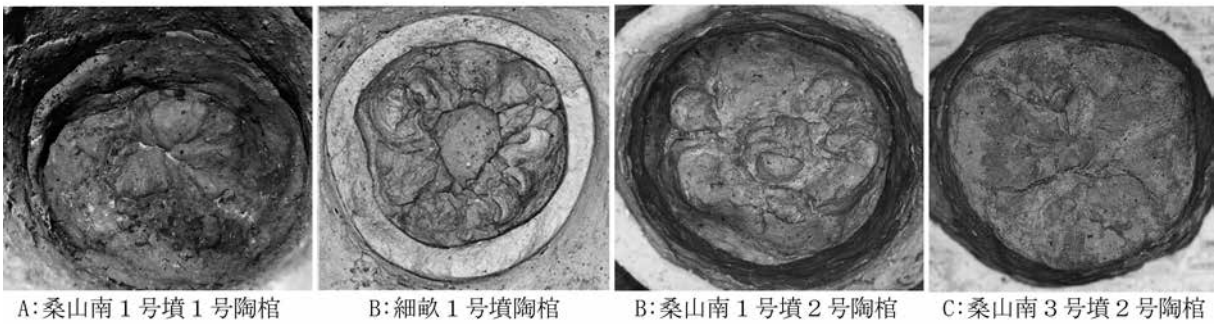


写真 39　桑山南古墳群・細畝古墳群における脚の接合方法３種

註

（１）間壁葭子「岡山の陶棺―白猪屯倉への一私見」『岡山の歴史と文化』 福武書店　1983

（２）このほか、破片資料として柵原町飯岡丸山古墳出土例などがある。

（３）立石盛詞「鏡野町山城長浜２号墳出土陶棺について」『古代吉備』第 24 集　古代吉備研究会　2003

（４）豊島雪絵「下田邑二子古墳（田邑古墳）」『津山市史』資料編考古　津山市　2020

（５）「土井２号古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』29　岡山県教育委員会　1979　なお、土井２号墳が位置する北房町は厳密には美作には含まれないが、便宜上取り上げる。

（６）このほか、破片資料として津山市若林６号墳出土例などがある。

（７）杉山尚人「陶棺の研究」『考古学研究』第 33 巻第４号　考古学研究会　1987

（８）「崩れ塚古墳群　クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 31 集　津山市教育委員会　1990

（９）東京国立博物館所蔵

(10)「寺田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 22 集　津山市　1986

(11) 岡山県立博物館所蔵

(12)『須恵器集成Ⅲ』西日本編　東京国立博物館　1998

(13) 註５

(14) 註７

(15) 註７

(16)「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会　2005

(17) 註７

(18) 横田美香「吉備地域の土師質亀甲陶棺」『古代吉備』第 24 集　古代吉備研究会　2003

(19) 註３

(20) 鐘方正樹「吉備地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪」『埴輪論叢』第８号　埴輪検討会　2018

(21) 註 20

(22) 註７

(23) 註 16

(24) このほか、破片資料として赤磐市可真丸山古墳出土例などがある。

(25) 鐘方正樹「近畿地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪」『埴輪論叢』第７号　埴輪検討会　2017

(26) 註７

(27) 註７

(28) 快舟散史「考古行脚」『吉備考古』第 27 号　吉備考古会　1935

(29)「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35　岡山県教育委員会　1979
近藤義郎「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編　総社市　1987

(30) 註 20

(31) 鐘方正樹「第２節　陶棺」『赤田横穴墓群・赤田１号墳』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第４冊　奈良市教育委員会　2016

(32) ただし、北大和系の陶棺では陶栓は主に長側辺側の孔に装着されており、桑山南１号墳１号陶棺のような小口側に２箇所装着するのは独自の特徴と言える。

(33) 接合方法Ｂは、村上幸雄氏らによって示された陶棺の脚の接合方法に類似するが、脚を内側に折り曲げた

痕跡がない点や、脚内面の接着部が底部外面よりも高い位置にくる点などに相違が認められる。
村上幸雄・橋本惣司「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第 26 巻第２号　考古学研究会 1979

(34) 脚の裏側が報告されている資料や著者が実見した範囲では、接合方法Ｂは美作通有の円柱形突起を有する蓋身一体造りの土師質亀甲形陶棺で多く見られ、さらに土師質切妻家形陶棺の一部でも見られる。

図・写真出典

第 164 図:光本　順「６・７世紀における陶棺の変容とその特質―定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて―」『定東塚・西塚古墳』 岡山大学考古学研究室　2001、宮岡昌宣「吉備の陶棺」『広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室年報ＸＸⅣ　考古学研究室紀要第２号』 広島大学考古学研究室　2010、註１、註７、註 18、註 20 を基に著者作成

第 165 図：長浜２号は註３、田邑は註４、桶木は註７より引用。水原陶棺は国立文化財機構所蔵品総合検索システム（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-34375?locale=ja）の写真及び計測値を元に著者作成。横山出土陶棺は岡山県立博物館所蔵の写真と計測値を元に著者作成、他は各報告書から引用

第 166 図：報告書から引用

第 167 図：第２図の出典と同じ、一部著者改変

第 168 図：畑１号・２号・弥上は註７、土井は註 16 から引用、一部著者改変

第 169 図：註 28

第 170 図：註 29

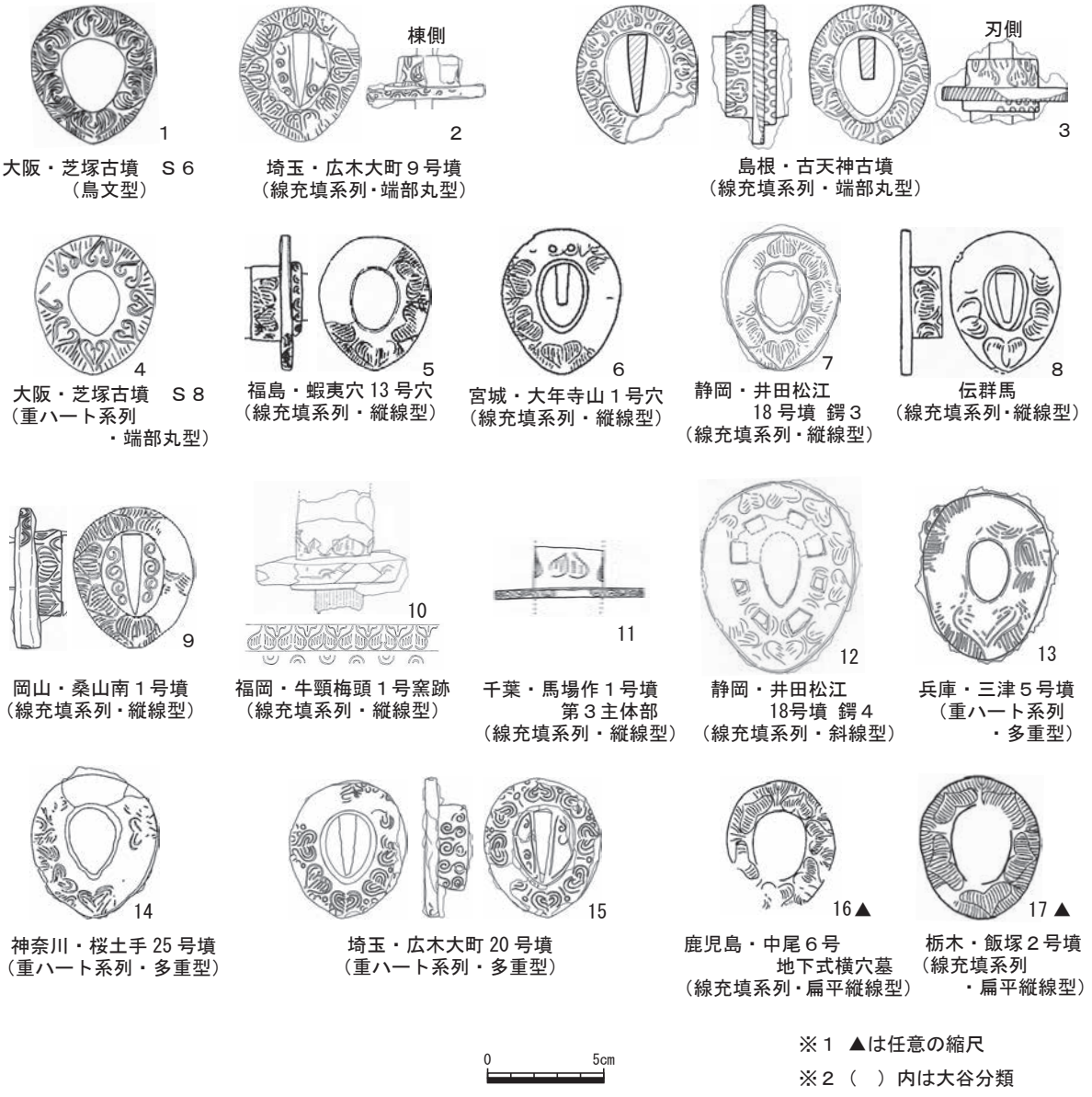
第 171 図：秋篠・山陵遺跡例は「秋篠・山陵遺跡」『奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書』第 17 集 1998、赤田８号墓例は「赤田横穴墓群・赤田１号墳」『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』第４冊　奈良市教育委員会　2016 から引用

写真 39：著者撮影

第４節　特徴的な副葬品

１　象嵌装大刀

桑山南１号墳から出土した鍔と鎺には銀象嵌で心葉文（ハート形文）が描かれている。心葉文は両翼を広げた鳳凰文の両翼の輪郭線が結合し頭部などの表現が消失することで出現した文様と考えられている[(1)]。大谷晃二はこの変遷を検討し、鳳凰の頭部を表現する鳥文型から内部を線で充填する線充填系列と輪郭線と相似形の線を充填する重ハート系列に分岐することを指摘した[(2)]。また、線充填系列は、外形線の端部を丸く巻き込む端部丸型から単純なハート型に変化するとした。さらに単純なハート型は、中を埋める線の向きから縦線型と斜線型の２種類に分かれ、さらに各々が扁平に変化し、扁平縦線型・扁平斜線型をへて扁平一線型へと変化することも指摘した。重ハート系列に関しては、



※１　▲は任意の縮尺
※２（　）内は大谷分類

第 172 図　桑山南１号墳と関係する鍔と鎺（1/3）

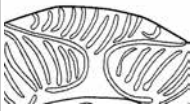
端部丸型から外形が通常なハート形の多重型をへて、外形が扁平な扁平多重型へ変化することを想定している。本項では、心葉文の間に描かれている樹枝状表現の分析を行なった上で、この大谷分類を用い、縦線型を中心とした他の類例との比較を試みる（第 172 図）。

樹枝状表現の種類

樹枝状表現は、管見した中では６種類が確認された（第 173 図）。心葉文の間に幹となる直線を配置し両側に内湾する弧線を充填している幹中心型（第 172 図１・５～７・13・16・17）が多くを占める。他には心葉文の間に直線を配置し、両側を短い直線で埋めた直線中心型（第 172 図４）、心葉文の間の外縁に直線を内部に入れたU字や二重半円文を配置しそれを中心に樹枝状表現するU字中心型（第 172 図３・９の鏃・10・14）、心葉文の間を弧線で埋めている弧線充填型（第 172 図２・９の鍔）、心葉文の間に円を描き、それを中心に線をいれ樹枝状表現を施す円中心型（第 172 図 15）、心葉文の間の外縁に半円文や二重半円文を描き、その外周に心葉文を囲むような弧線を配置する囲繞型（第 172 図８の鏃・12）がある。

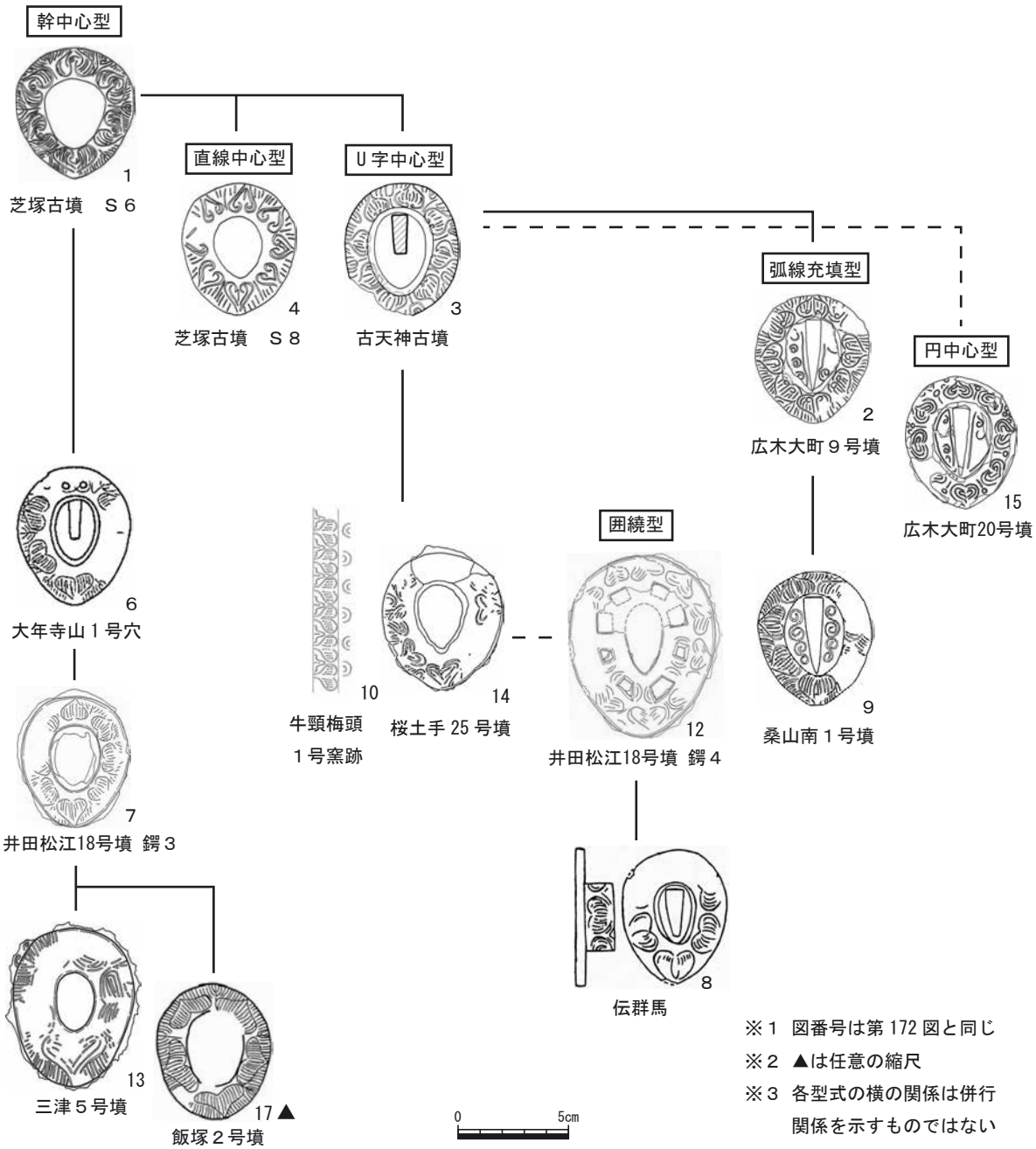
樹枝状表現の変遷

次に各型式がどのような変遷を経て、出現したのかを考察する（第 174 図）。鳳凰の頭部が残る芝塚古墳Ｓ６（第 172 図１）では幹中心型が採用されており、この分類でもっとも古い型式であることがわかる。ここから、枝部分にあたる弧線を直線に置き換えて簡略化した直線中心型と、枝表現をU字と幹に接さない弧線に簡略化することでU字中心型が派生したと推察できる。またこの型式のU字を二本の弧線に分割したものから弧線充填型が生み出されたと考えられる[(3)]。その後、弧線充填型は中心の短い直線を中心に内湾する弧線を配置する構成から、中心線を失くし一定方向の弧線を間に充填する構成に変化していく。U字中心型は周囲の枝や幹の表現を無くしていき、U字（または二重半円文）を中心に構成する文様へと変遷していく。円中心型については、明確な変化の痕跡を見いだせないが、U字中心型がU字中心の文様構成に変化する中で、この部分を円に置き換え、それを中心に幹と枝を表現することで登場したと考えられる。囲繞型も変遷をたどることは困難であるが、外縁に半円文（または二重半円文）を配置する点、幹や枝状の表現がなくなっている点から考えると、U字周りの表現がなくなったU字中心型から分派したものではないだろうか。また伝群馬の鏃(第 172 図 8)

幹中心型	直線中心型	U字中心型	弧線充填型	円中心型	囲繞型
1	4	3	 9	15	12
心葉文の間に幹となる直線を配置し両側に内湾する弧線を充填し樹枝状にしているもの	心葉文の間に直線を配置し、両側を短い直線で埋めたもの	心葉文の間の外縁に直線を入れたU字や二重半円文を配置しそれを中心に弧線などを周囲に入れ、樹枝状にするもの	心葉文の間に弧線を充填するもの	心葉文の間に円を配置し、それを中心に上下に線をいれて樹枝状表現にしたものもの	心葉文の間の外縁に半円文や二重半円文を配置し、その外周に心葉文を囲むような弧線を入れたもの

※１　図番号は第 172 図と同じ　※２縮尺は任意

第 173 図　樹枝状表現の種類



第 174 図　樹枝状表現の変遷（1/3）

をみると半円が囲繞する弧線と並行するような形に変化しているようである。伝群馬の鍔では樹枝状表現がないことを考えると囲繞型が簡略化されることで樹枝状表現がなくなる型式が派生したかもしれない。最後に幹中心型の変遷について考察を試みたい。野中仁は広木大町９号墳の鍔（第 172 図２）の心葉文の割り付けについて検討を行い、心葉文は上下と左右にほぼ対象になる４単位を割り付け、その間を埋めるように残り４単位の心葉文を割り付けたと想定している[(4)]。心葉文の配置を見ると、幹中心型以外の型式の古い段階のものでは野中が指摘している上下左右が対象になる割り付けが確認できる。一方でそれらより古い幹中心型の芝塚古墳Ｓ６では、上下に対になる心葉文を配置しているものの左右には見られない。しかし、その代わりに樹枝状表現が左右で対になるように配置されており、これが左右の心葉文と同じ働きをしていたと考えられる[(5)]。このことを踏まえて、他の幹中心

型の樹枝状表現を見てみると、①左右の割り付けが樹枝状表現のもの（第 172 図５・６）と②心葉文であるもの（第 172 図７・13)、③左右に割り付けが認められず上下の割り付けが心葉文（刃側）と樹枝状表現（棟側）になるもの（第 172 図 16・17）がある。①②は大谷分類の縦線型に分類できるものがあり、③は扁平縦線型に分類できることから、③が後出であると考えられる。①と②の関係については、縦線型より古い鳥文型で①を採用していることから、①が先行すると考えられる。これらのことから幹中心型は当初は左右の割り付けを樹枝状表現で行っていたが、他の型式の影響をうけて左右も心葉文で割り付けを行うようになり、最終的には、心葉文の数を減らしながら、上下左右の割り付けを維持するものと、割り付けを上下の心葉文と樹枝状表現で行うものに分かれていくと考えられる。

樹枝状表現の変化の意味

樹枝状表現を観察すると、桑山南１号墳の鏃（第 172 図９）では一部がU字中心型でなく弧線充填型になっており、広木大町 20 号墳の鍔（第 172 図 15）では、心葉文の間を円と半円で充填している部分が、古天神古墳の鍔（第 172 図３）の両面の樹枝状表現と、芝塚古墳Ｓ６（第 172 図１）の棟側の心葉文の右側の樹枝状表現が他と異なっており、同じ資料の中で樹枝状表現が違うものが複数あることが指摘できる。また古天神古墳の鍔の樹枝状表現は、U字の直下に直線という意図を持っていたと想像されるが、直線が曲線になりU字の真下から外れているものなどが認められ、芝塚古墳Ｓ８（第 172 図４）では心葉文間の直線は配置の間隔が一定でないなど、文様の描き方が杜撰な印象を受ける。以上のことから樹枝状表現の特徴として、①多種多様な表現方法、②同一資料内での表現方法が混在、③杜撰な描き方の事例の存在、を挙げることができる。このことから樹枝状表現は、製作時には、明確な図案を持った文様を描こうという意図より、心葉文の間の隙間を埋める意図が強いものであったと推定できる[(6)]。また樹枝状表現の型式が同一資料で混在する例を踏まえると、各型式の違いは制作した工房の違いのような大きな集団を示すのではなく、同一工房内でのグループ（または工人個人）の違いのような小さな集団（または個人）を示すものと思われる[(7)]。このようなことから、樹枝状表現の変化は、制作の簡略化と完成した作品の見栄えが両立するように試行錯誤した工人個人や工人小集団の趣向を表している可能性がある。また１つの製品の中で型式が変化する事例が見られることなどを踏まえると、樹枝状表現の各型式の時間差は非常に小さなものであり、「時期差」というよりは「同一工人が製品を作った順番」程度のものであった可能性さえ考えられるものである。

その視点から桑山南１号墳の象嵌装大刀（第 172 図９）の位置づけを考える。樹枝状表現と耳に描かれた文様から考える[(8)]と広木大町９号墳の象嵌装大刀（第 172 図２）に後出するものと考えられる。広木大町９号墳の鏃（第 172 図２右）の側面の樹枝状表現にU字中心型が採用されていること、堰板に桑山南１号墳の文様に似た渦巻き文が施されることからも強い類似性を感じさせる。また桑山南１号墳の鏃に描かれた二重半円文と直下に直線を配置するU字中心型の樹枝状表現は、古天神古墳出土の鍔（第 172 図３中央右）の刃側の右側で見られる表現と類似している。これらのことからこれら３振の大刀は近しい集団で造られたと考えることができる[(9)]特に桑山南１号墳と広木大町９号墳の大刀は極めて強い類似性から、同じ工人が制作した可能性までも感じさせる。

心葉文からみた位置づけ

続いて主文様である心葉文から桑山南１号墳の銀象嵌大刀の位置づけを考える。桑山南１号墳の心葉文は、大谷分類にあてはめると線充填系列の縦線型に分類することができる。この縦線型での位置

づけを文様の割り付けの比較から考えたい。縦線型には、①左右の割り付けを樹枝状表現で行うもの（第172図５・６）と②左右割り付けが心葉文であるもの（第172図７）と③左右への割り付けは行わず、おそらく上下に心葉文を割り付けるもの（第172図８）、そして④刃側には心葉文を配置するものの棟部と左右には明確な割り付けが認められないもの（第172図９）がある。上述した樹枝状表現の幹中心型の変遷と、縦線型の次段階に位置づけられている扁平縦線型（第172図16・17）の割り付けに使った心葉文は刃側のみである事実を踏まえると、①→②→③→④の順番での出現が考えられ、桑山南１号墳の鍔は縦線型の中でも扁平縦線型に近い新しい段階のものであると考えられる。

象嵌装大刀の佩用者の性格

象嵌装大刀は大和政権下で作られ、政権を担う地方の有力者に賜与されたものと考えられている(10)。またそれは政治的・軍事的な意図を示している可能性も指摘されており(11)、分布状況から意図的に配布されたと考えられている(12)。岡山県下の象嵌鍔の分布状況からは、古代山陽道に沿って分布していることが指摘され、比較的小さな領域の有力者層が畿内の王権および周辺氏族との関わりをもち佩用にいたったと想定されている(13)。心葉文を持つ象嵌装大刀についても、東北地方から九州まで幅広い範囲で出土しており、かつ製作者の裁量が大きいと考えられる樹枝状表現で共通のものが認められることから、各地で在地生産されたとは考えがたく、限られた場所で生産されたものが各地へもたらされたと思われる。このことから、桑山南１号墳の象嵌装大刀の佩用者は、先学の研究成果のとおり畿内政権と親密な関係を持っていた当地域の有力者であったと考えるのが妥当であろう。またこの佩用者は、初葬者ではなく、追葬者であることも特徴である。岡山県下では追葬に伴って副葬された象嵌装大刀が奥田古墳(14)と平瀬２号墳(15)から見つかっている。また愛知県・静岡県の事例では中核的な古墳から出土した象嵌装大刀が追葬段階で副葬された可能性が指摘されており(16)、追葬者が象嵌装大刀を佩用した事例は少なくないようである。西日本では６世紀中頃から国造制が施行されており、国造の義務の中には一族の男子を舎人や靫負として出仕させるものがあったとされている(17)。象嵌装大刀を佩用した追葬者の中には、初葬者の一族の一員として王権に出仕した際に象嵌装大刀を拝領した人物が含まれている可能性もあるかもしれない。　（藤井雅）

註

（１）橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会　1993

（２）大谷晃二「３　古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会　2018

（３）弧線充填型の広木大町９号墳の鍔（第172図２）を観察すると、右側中央に配置された心葉文の下の樹枝状表現はU字中心型を採用している。またU字中心型の古天神古墳の鏃の一部（第172図３右）に弧線充填型が見られる。これらの事例は、U字中心型から弧線充填型への変化を示唆している。

（４）瀧瀬芳之・野中　仁「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』第１２号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1996

（５）樹枝状表現の上下に配置された心葉文は、樹枝状表現からつめて配置されているようで、上部の心葉文とその左右の心葉文は他の部分よりも間がやや大きくなっている。幹中心型以外の型式は、樹枝状表現を簡略化した型式であり、その中で左右の割り付けの基準が樹枝状表現から心葉文に変わっていったと考えられる。

（６）伝群馬の鍔（第 172 図８）や馬場作１号墳の鏃（第 172 図 11）のように樹枝状表現自体ないものの存在もこの考えを補強するものかもしれない。ただし、中尾６号地下式横穴墓（第 172 図 16）や飯塚２号墳（第 172 図 17）の事例のように幹中心型では新しい段階でも緻密な表現がされ続ける。幹中心型を採用した工人に関しては、この図案を描こうという意図を持ち続けていたと考えられる。

（７）広木大町 20 号墳の鍔（第 172 図 15）の心葉文では、重ハート系列多重型に混じって線充填系端部丸型が１つ採用されており、心葉文の違いも同じような規模の集団の違いを示している可能性もあるだろう。

（８）瀧瀬芳之は鍔の耳の象嵌を分類し、広木大町９号墳で見られるような波状Ｃ字状文から桑山南１号墳で見られるものに似る交互重半円文に変化することを指摘している。瀧瀬註４文献

（９）広木大町 20 号墳の鏃（第 172 図 15）をみると桑山南１号墳の堰板に描かれた「Ｓ字状文」と似た文様が描かれており、この大刀とも何らかの関係性あった可能性がある。

（10）西山要一「古墳時代の象嵌－刀装具について―」『考古学雑誌』第 72 巻第１号　日本考古学会　1986

（11）瀧瀬註４文献
豊島直博「古墳時代後期における直刀の生産と流通－近畿地方を中心に－」『考古学研究』第 48 巻第２号　考古学研究会　2001

（12）西澤正晴「遠江・駿河における鉄製板鍔の変遷と展開」『研究紀要』第９号（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002

（13）有賀祐史「岡山県における象嵌鍔について―赤磐市岩田６号墳出土鉄製板鍔の保存処理を経て―」『古代吉備』第 31 号　古代吉備研究会　2020

（14）「奥田古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999

（15）「平瀬古墳群」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査７』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 83 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993

（16）大谷宏治「７．象嵌装大刀の拵えについて」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告第 120 集　豊橋市教育委員会　2012

（17）篠川　賢『日本古代の歴史２　飛鳥と古代国家』吉川弘文館　2013

図出典

１・４：『高安古墳群　芝塚古墳』（財）八尾市文化財調査研究会報告 38　（財）八尾市文化財調査研究会　1993 第 36 図、**２・15**：註４第４・５図、**３**：『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会　2018　第 26 図、**５**：『蝦夷穴横穴墓群―　12・13 号横穴出土遺物報告―』郡山市教育委員会　2004　第２図、**６**：『大年寺山横穴群』宮城県教育委員会　1990　第８図、**７・12**：『静岡県指定史跡　井田松江古墳群―調査整備事業報告書―』戸田村教育委員会　2000　第 36 図、**８**：註 10 第４図、**９**：本書第 33 図、**10**：『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第 60 集　大野城市教育委員会　2007　第 14 図、**11**：『笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅳ―馬場作古墳群第１～５号墳―』木更津市教育委員会　2011　第 11 図、**13**：豊島註 11 文献図２、**14**：『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査（第二次）』桜土手古墳群第二次発掘調査団　2000　第 27 図、**16・17**：註２第 65 図

２　鑷子状鉄製品

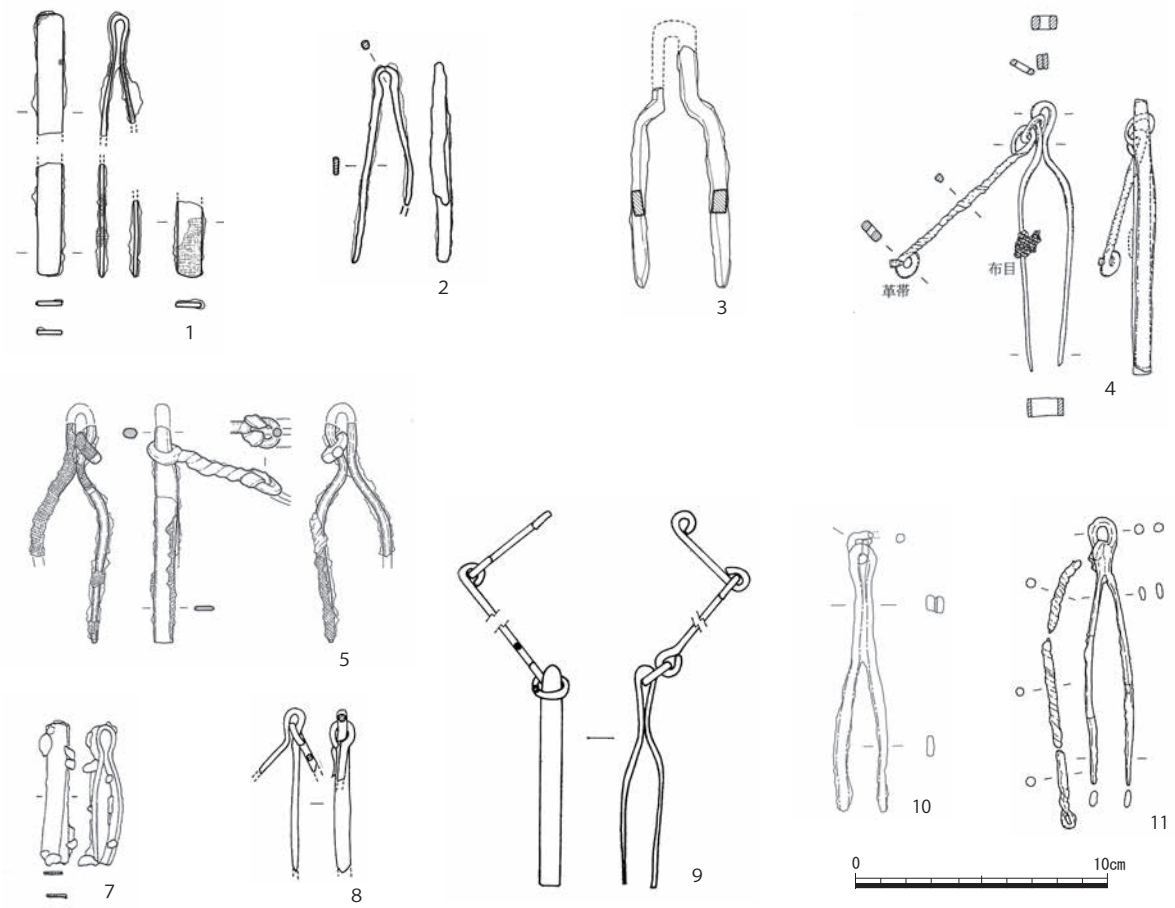
細畝２号墳から、両脚部が一部欠損している鑷子状鉄製品[(10)]が出土している（第118図M 29）。この鉄製品は「毛抜形鉄器」、「ピンセット形鉄器」などと呼ばれ、その基本的な形態は、幅0.５～1cm、厚さ0.３～0.5cmの扁平な板の中央部を環状に折り曲げた頭部、その下側で両側の板が接する頸部、内湾に曲げられた肩部、脚部、先端部[(11)]からなる。その機能・用途については、「鑷子」、「毛抜き」、「腰佩品」、「刀剣類の吊金具」など諸説があり、一致した見解が得られていない。弥生時代から10世紀までの全国集成を行った吉田氏[(12)]によると、この鉄製品は全国で182点の出土があり、その出土地点は北部九州や関東地方で多く、中・四国及び近畿地方では少ない。

第175図、第11表は中国地方及び兵庫県から出土した５世紀から８世紀の鑷子状鉄製品である[(13)]。管見にふれた限りでは11点確認され、その形態は宇野氏分類[(14)]のⅡａ型式（10点）とⅢ形式（１点）に分かれる。このうちⅡａ型式には遊環もしくは棒状鉄製品が頭部に連結しているもの（第175図４・５・８～11）としていないもの（第175図１～３、７）があり、後者の時期が６世紀後半以降に限られることは興味深い。出土遺跡は、竪穴住居廃棄後に流れ込んだ流土に鍛冶関係遺物が包含していた門遺跡と、大和王権との関係のうえに成り立っていると想定され、海上路に伴った拠点祭祀が行われた可能性が指摘されている木戸原遺跡が集落跡で、それ以外は墳墓からである。これら墳墓は、その墳丘規模に限定した場合、周辺のものと顕著な差を読み取ることが難しいものが多い。しかしながら共伴遺物や埋葬されている棺の形態等をみると、因幡地域における一連の地域首長墳系譜に位置づけられ[(15)]、組合式箱式石棺が埋葬されていたと想定されている小畑８号墳、横口をあけていない刳抜式家形石棺内に卓越した副葬品が納められていた上島古墳、複数の主体部をもち鉄製農工具などが副葬されていた火山４号墳などは周辺の古墳と何らかの階層差を指摘できそうである。

さて鑷子状鉄製品は、朝鮮半島で類例が多く出土していることから渡来系遺物として評価されており[(16)]、そうであれば被葬者等の出自を示唆する可能性がある遺物と考えられる。しかし今回挙げた

第11表　中国地方及び兵庫県出土の鑷子状鉄製品

No.	遺跡名	所在地	出土遺構等	時期	主な共伴遺物	備考	出典
1	細畝２号墳	岡山県 津山市	横穴式石室 （無袖）	７世紀前葉～ 中葉	刀子、鉛ガラス小玉	円墳（径約９ｍ）	本書
2	茂浦３号墳	岡山県 倉敷市	横穴式石室 （無袖）	６世紀後半	鉄鏃、刀子、ガラス小玉	円墳（径約16ｍ）	註１
3	小畑８号墳	鳥取県 岩美郡岩美町	横穴式石室 （片袖）	６世紀末～ ７世紀前葉	鉄鏃、刀子、鉄釘、耳環	円墳（径約11ｍ）、組合式箱式石棺？内出土	註２
4	六重城南１号墳	島根県 雲南市	周溝	５世紀後葉	鉇、錐、曲刃鎌、袋状鉄斧、刀子、鉄鐸	円墳（径約5.３ｍ）、主体部及び墳丘消失	註３
5	上島古墳	島根県 出雲市	家形石棺	６世紀前半	大刀、金銅製護拳帯飾金具、鹿角装刀子、五鈴鏡、鈴釧、銀環	円墳（径約21ｍ）、埋葬施設は竪穴式石室と直葬の家形石棺	註４
6	下川原横穴墓	島根県 邑智郡邑南町	横穴墓	６世紀後半～ ７世紀前葉	大刀、靭金具、刀子		註５
7	門遺跡	島根県 飯石郡頓原町	竪穴住居	７世紀～ ８世紀	流入土から鍛冶関連遺物	竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落跡、鍛冶関係遺物出土	註６
8	朝田２号円形周溝墓	山口県 山口市	箱式石棺	５世紀中葉	鉄針、滑石製有孔円盤・小玉	周溝内径東西約7.５ｍ	註７
9	朝田１号横穴墓	山口県 山口市	横穴墓	６世紀前半	鉄鏃、鍛造有肩鉄斧、刀子	南北11ｍ、東西10ｍの墳丘を構築	註７
10	火山４号墳	兵庫県 丹波市	木棺 （割竹形？）	５世紀後半	剣、鉄鏃、鉄斧、鑿、鎌、刀子	円墳（径９ｍ）、３基の墓坑を確認	註８
11	木戸原遺跡	兵庫県 南あわじ市	土坑	５世紀代	滑石製臼玉	出土遺構周辺から、滑石製品が多く出土	註９



第 175 図　中国地方及び兵庫県出土の鑷子状鉄製品（1/3）

（番号は第 11 表に対応する。）

遺跡のうち渡来人との関わりが指摘できそうなのは、近接する遺構から韓式系土器、滑石製品、小型で薄い鉄鋌などが出土した木戸原遺跡のみであり、その他の遺跡については他の渡来系の要素が認められることも少ないため、渡来人との関係を推測することは困難であろう。しかし本墳が所在する美作地域では、津山市観音山周辺 (17) と旧久米町の糘山周辺 (18) の遺跡からいわゆる渡来系遺物とされる遺物が多く確認されており、このことから渡来系の鍛冶集団との関わりが指摘され (19)、また本墳とは築造時期が異なるものの、近接する桑山南２号墳と３号墳からは鉄鐸が、高尾北ヤシキ古墳からは筒形土製品（煙突）(20) が出土している。このように当地域に多く見られる渡来系の要素から、本墳被葬者は渡来人との何らかの関わりがあったと想定しておきたい。ただ一方では、小畑８号墳や上島古墳などにみられた周辺古墳との副葬品の差異から推測される階層差から、この鉄製品を入手できる階層や集団に被葬者が属していた可能性もある。今後はより広い視点から、検討する必要があろう。

（小嶋）

註

（１）「茂浦古墳群」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第５集　倉敷市埋蔵文化財センター　1996

（２）『小畑古墳群第８号墳発掘調査報告書』岩美町教育委員会　1980

（３）「六重城南遺跡・瀧坂遺跡・鉄穴内遺跡」『中国横断道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

第 16 集　島根県教育委員会　2009

（４）「上島古墳出土遺物の再調査報告」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 17 集　出雲市教育委員会　2007

（５）寺脇隆彦・中田健一・大谷晃二「石見町下川原墳墓群の調査」『島根考古だより』第 48　島根考古学会　1995

（６）「門遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』３　島根県教育委員会　1996

（７）「朝田墳墓群Ⅰ　付木崎遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』第 32 集　山口県教育委員会　1976

（８）「火山古墳群・火山城跡・火山遺跡」『兵庫県文化財調査報告』283 冊　兵庫県教育委員会　2005

（９）「木戸原遺跡（２・３次調査）」『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　南あわじ市教育委員会　2009

(10) この鉄製品を扱った主な論文には、以下のものがある

宍戸信悟「厚木市上依知一号墳出土の毛抜き形鉄器について」『神奈川考古』第 19 号　神奈川考古同人会　1984

宇野慎敏「鑷子考」『末永先生米壽記念献呈論文集』乾　末永先生米壽記念会　1985

鈴木一有「（３）鑷子状鉄製品」『五ヶ山Ｂ２号墳』浅羽町教育委員会　1999

吉田和彦「「毛抜形鉄器」の機能・用途認定に向けての基礎的研究（１）」『史学論叢』第 31 号　別府大学史学研究会　2000

諫早直人「日本最古の馬具をめぐってー鑷子状鉄製品と初期の轡ー」『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』2012

(11) 宇野註 10 文献による部位名称

(12) 吉田註 10 文献

(13) 下川原横穴墓については、遺物実測図が公表されていないため掲載していない。

(14) 宇野註 10 文献

(15) 濱隆造「小畑古墳群における横穴式石室の検討」『調査研究紀要』２　鳥取県埋蔵文化財センター　2008

(16) 鈴木註 10 文献

(17) 主な遺跡は次のとおりである。

「築瀬古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 13 集　津山市教育委員会　1983

「崩レ塚古墳群　クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 31 集　津山市教育委員会　1990

「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 45 集　津山市教育委員会　1992

坂本心平「長畝山２号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第３号　津山市教育委員会　1996

「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 58 集　津山市教育委員会　1997

「的場古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 70 集　津山市教育委員会　2001

(18)『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

(19) 亀田修一「鉄と渡来人ー古墳時代の吉備を対象としてー」『福岡大学総合研究所報』第 240 号　福岡大学総合研究所　2000

(20) 岡山県古代吉備文化財センターホームページ（令和３年３月 30 日閲覧）

３　鉄　鐸

岡山県内出土例と分布

古墳時代の鉄鐸は、近年の集成[6]及びその後の発見等を加え、日本列島で50遺跡を超える出土例が明らかになっている。それでも比較的稀少な遺物といえ、早野浩二が作成した分布図[7]によれば、愛知県、近畿地方、岡山県、福岡県、宮崎県などに集中する傾向がある。長野県などは古代の出土例が多いが、古墳時代のものは現状では少ない。

第 176 図　岡山県内鉄鐸出土遺跡の分布
（番号は第 12 表に対応する。）

岡山県内では７遺跡から計 31 点が出土している（第 12 表）。杉遺跡例は包含層からの出土で、所属時期は６世紀後半から中世までの可能性があるというが、県内では古代・中世に属する鉄鐸は出土しておらず、杉遺跡例も６～７世紀の可能性が高いと考えられる。また、７遺跡中５遺跡が県北東部の美作地域に分布しており（第 176 図）、さらに点数でみれば県内 31 点中の 26 点、80％以上が美作地域にあるということになる。このうち５世紀中葉の西吉田北１号墳出土の鉄鐸は日本列島内でも初現期の例とされ[8]、その後、６世紀中葉の桑山南２号墳及び小池谷１号墳、７世紀中葉の桑山南３号墳と続く。このように、美作では他地域に先駆けて鉄鐸を導入したばかりでなく、それを使った祭祀が 200 年近く継承されており、注目すべき地域といえる。

また、県内出土例に限っていえば、単独で出土するものはなくいずれも複数が組になっている[9]。特に小池谷１号墳では計 15 点の鉄鐸がまとまって出土しており、１古墳からの出土数としては国内最多であろう。

第 12 表　岡山県内出土の鉄鐸

	遺跡名	所在地	出土遺構	点数	舌	時期	出典
1	桑山南２号墳	津山市高尾	竪穴式石室	2	×	６世紀中葉	本書（第 45 図M 77・M 78）
2	桑山南３号墳	津山市高尾	横穴式石室	2	×	７世紀中葉	本書（第 62 図M 95・M 96）
3	西吉田北１号墳	津山市西吉田	箱式石棺か	2	○	５世紀中葉	註１
4	小池谷１号墳	勝田郡勝央町黒土	木棺直葬	15	○×	６世紀中葉	註２
5	杉遺跡	苫田郡鏡野町杉	包含層	5	○	６世紀後半～中世	註３
6	土井遺跡	赤磐市可真下	土坑墓	3	×	６世紀後半	註４
7	一国山１号墳	岡山市北区下足守	周溝及び周辺	2	×	５世紀後半	註５

構造・機能・使用方法

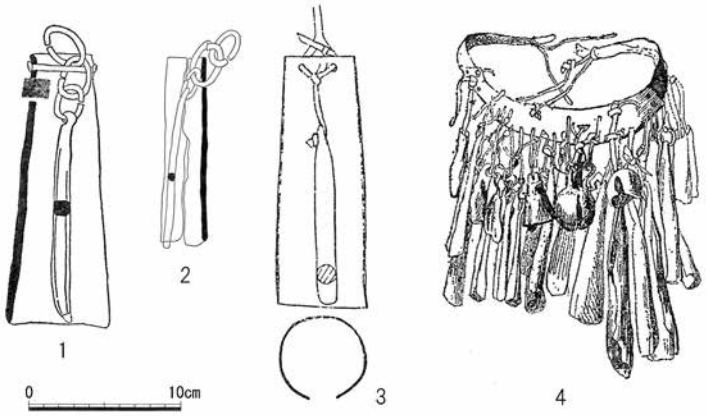
鉄鐸の機能としては、鉄製の舌を伴う例があることから、揺り動かして音響を発する鳴りものであることが明らかである。舌が認められない例も多いが、愛媛県東宮山古墳出土の馬鐸[10]に鹿角製の舌が伴うことなどを考えれば、鹿角など有機質の舌も想定することができる。あるいは、上述のように鉄鐸は複数を組にして出土する場合が多く、舌がなくとも鐸身どうしがぶつかり合って音を発することができたであろう。

上記の機能を想定した場合、次に鉄鐸を何に、いかにして吊り下げたかが問題となる。大場磐雄、藤森栄一らが紹介した信濃地方の神社に伝わる鉄鐸[11]は、「神代鉾」などと呼ばれる鉾の身の下に６個１組で吊り下げられ、社殿の前に立て鳴らすなどしたという（第 177 図１・２）。このような使用方法は、『古語拾遺』の天石窟条に登場する「着鐸之矛」を想起させるものである[12]。一方、鳥居龍蔵が引用した北東アジアの事例[13]では、シャーマンが身に付けた腰帯に、多数の鐸が文字通り鈴なりに吊り下げられており、中には球形の鈴や小銅鐸様の形態のものもみえる（第 177 図４）。藤森が紹介したシベリア、台湾の鉄鐸[14]も腰に下げたとされており（第 177 図３）、信濃地方の神社例とは使用方法が異なる。これらの事例から、鉄鐸を使用する祭祀は日本列島だけでなく中国大陸などにも広がっており、鉾などの長柄の先に吊り下げる例や、腰帯など身に付ける例があることが分かる。また、いずれにおいても鉄鐸は１点でなく複数を組にして使用している。

古墳時代の鉄鐸が何に取り付けられていたのかを具体的に示す資料はないが、鉄鉾と共伴する例はほとんどなく、「神代鉾」のような使用方法は想定しにくい。また、韓国出土の鉄鐸では布や皮の痕跡があり埋葬施設の中央から出土する事例から、腰に着装していたことが想定されており[15]、上記海外の民俗例に近い。

次に、銅鐸のような鈕をもたない鉄鐸を、どのように吊り下げたかである。諏訪神社の鉄鐸は、鐸身上端部の対面方向に一対の小孔を開けて閂状の横棒を通し、それに２～３連の小環を繋ぎ、上端で鐸身を、下端で舌を吊る（第 177 図１）。一方、小野神社・矢彦神社の鉄鐸は閂状の横棒がなく、鐸身上端部に開けた１か所の小孔に直接小環を取り付ける点でやや簡略である[16]（第 177 図２）。また台湾例は、鐸身の上端部片面に２個の小孔を開け、革紐を通して鐸身を吊りさらに革紐の先端を下に伸ばして鉄製の舌を垂下している（第 177 図３）。

古墳時代の鉄鐸には、民俗例でみられるような鐸身上部の小孔はみられないが、円錐形の鐸身頂部を閉じず、径数㎜の小孔を残しているものが多い。この孔に革紐などを通し内部で結び目をつくれば、鐸身を吊ることが可能であろう。舌を垂下する場合は結んだ紐の先端をさらに下方に伸ばして取り付けることができたと思われ、上記台湾例が参考になる。古墳時代の出土例で舌が完存するものは、舌上端を蕨手状に曲げる場合が多く、紐の先端に結び目をつくるなどすれば固定が可能であったと思われる。

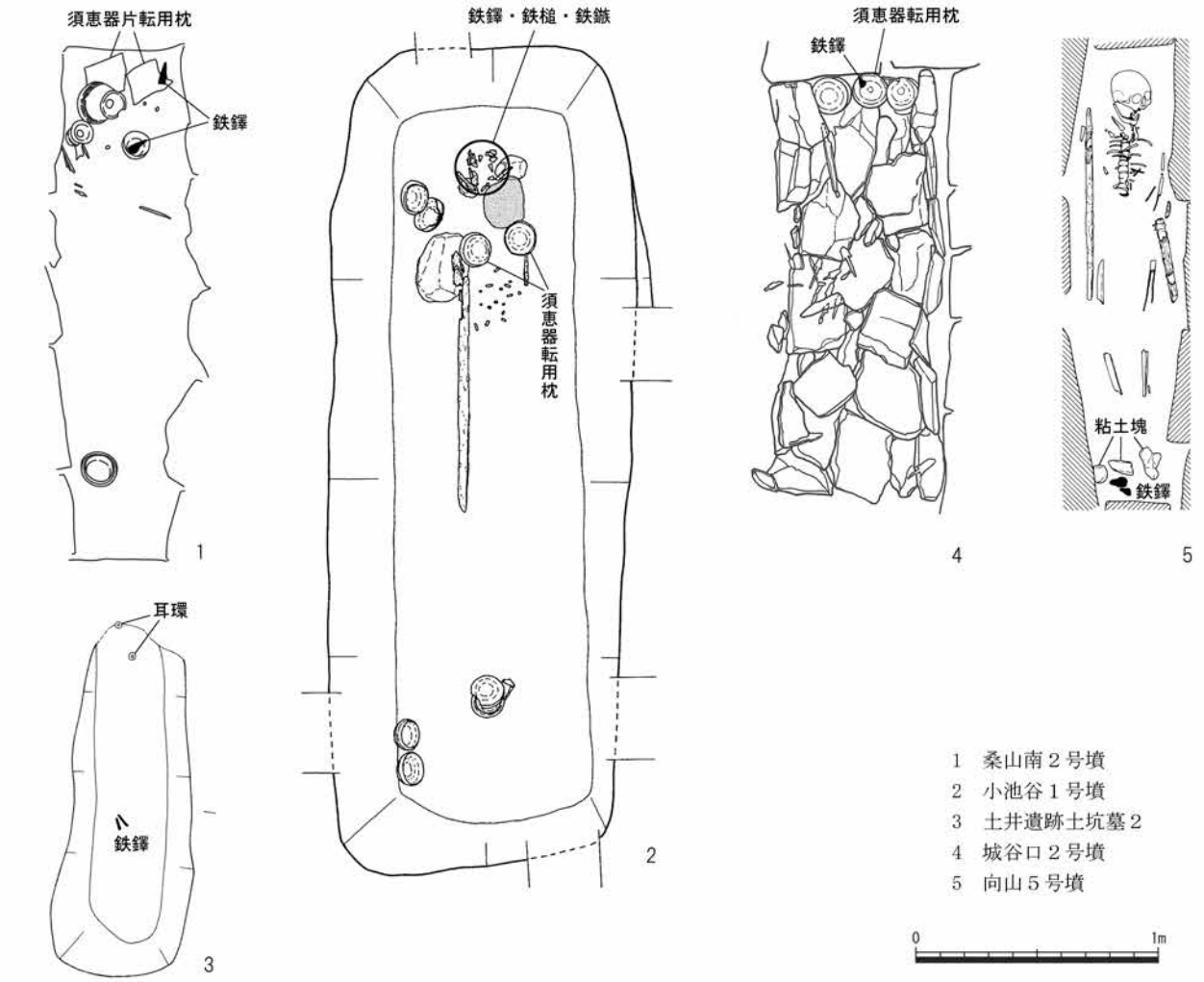


1　諏訪神社　　2　小野神社　　3　台湾　　4　ツングース族（縮尺不同）

第 177 図　鉄鐸の民俗例（1/5）

出土状況の検討

古墳時代の鉄鐸の使用方法をさらに検討するため、出土状況を確認しておきたい。埋葬主体部内における副葬状況が明確で、特に遺体との位置関係が推測できる県内の事例として、桑山南２号墳、小池谷１号墳、土井遺跡土坑墓２が挙げられる（第 178 図）。桑山南２号墳では、竪穴式石室内床面の遺体頭部（須恵器片転用枕）付近から鉄鐸２点が出土しており、うち１点は玉類とともに枕の下から出土している（第 43 図、第 178 図１）。追葬を想定しない限り、鉄鐸は枕及び遺体を安置する前に石室内におさめられたことになり、遺体に装着された状態は想定しにくい。小池谷１号墳でも、木棺直葬の主体部内の遺体頭部（須恵器転用枕）上方に、鉄鏃・鉄鎚とともに多数の鉄鐸がおさめられていた（第 178 図２）。中には入れ子にして重ねているものがあり、この場合も装着状態ではなく一括埋納された状況を示している[17]。一方、土井遺跡土坑墓２では、墓坑内の端部で耳環２点、中ほどで鉄鐸３点が出土している（第 178 図３）。鉄鐸外面に衣服の布目などは認められないが、いかにも遺体の腰元に装着されたような位置であり、アジア各地の民俗事例や韓国出土例に通じるものがある。県外の例をみると、京都府城谷口２号墳[18]では、横穴式石室袖部に設けられた屍床上で遺体頭蓋骨の下、須恵器転用枕の上から鉄鐸１点が出土しており（第 178 図４）、桑山南２号墳や小池谷１号墳に近い状況といえる。兵庫県向山５号墳第１主体部[19]では、箱式石棺内に熟年男性の人骨が遺存し



第 178 図　鉄鐸の出土状況（1/30）

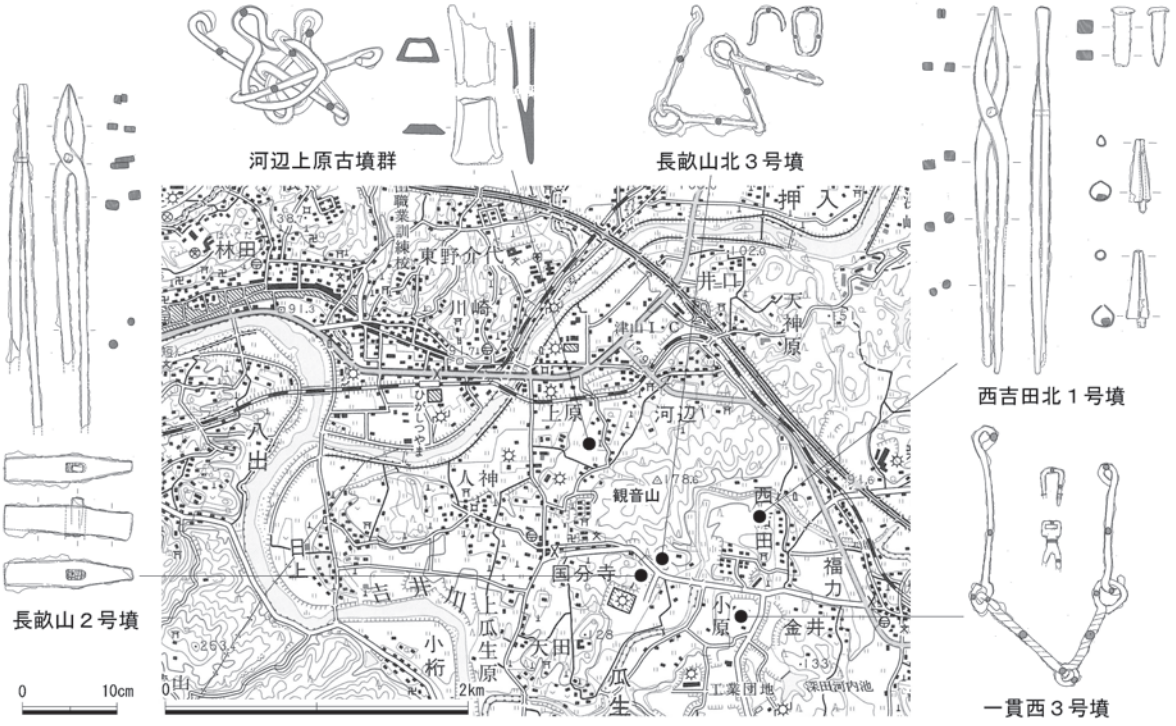
ており、遺体の足下に粘土塊３個を並べて遺体とは隔てられた位置に鉄鐸２点が副葬されている（第178図５）。これも遺体とは分離された事例である。

以上のように、鉄鐸は遺体に装着せず、分離した状態で副葬されたと考えられる例が多い。しかしながら、副葬位置は遺体からそれほど離れず近い位置にあり、頭部に近接して置く例も多く、本来は身につけて使用する祭具であった可能性がある。その中で、土井遺跡土坑墓２では遺体の腰元への装着も推測できた。これらの事例から古墳時代の鉄鐸は、アジア各地の民俗例にみられるように腰帯などに装着された可能性も含みながら、墳墓への副葬にあたっては遺体とは分離し、遺体近くに一括しておさめられる場合が多かったという状況を想定しておきたい。

鉄鐸及び副葬古墳の性格

鉄鐸は、朝鮮半島での出土例も多いことから渡来系遺物とされ、かつ鍛冶具を伴う事例があることから鍛冶工人に関わる遺物であるとの指摘がある[20]。鉄鐸と鍛冶具の共伴は、日本列島では西吉田北１号墳と福岡県カクチガ浦３号墳[21]で知られ、小池谷１号墳の鉄鎚も鍛冶具の可能性がある。鍛冶具との共伴が印象的ではあるが、鉄鐸出土例全体からみればわずかであり、地域や時期を超えて両者を結びつけることが可能かどうか、検討が必要であろう[22]。

日本列島での初現例とされる５世紀中葉の西吉田北１号墳の鉄鐸は、鉄鉗・鑿と共伴し、周辺の遺跡からも鍛冶関係遺物が多く出土することから、この地域に鍛冶集団が定着していたと考えられている[23]。西吉田北１号墳は標高約180ｍの観音山東麓に位置するが、この観音山周辺には鍛冶関係や渡来系遺物を出土する遺跡が多く分布している（第179図）。５世紀後半の長畝山２号墳[24]で鍛冶具と鍛冶滓、５世紀後半の長畝山北古墳群[25]で鍛冶滓、６世紀前半の河辺上原古墳群[26]で鍛冶滓や鉄塊などの鍛冶関係遺物が出土しているほか、一貫西３号墳[27]と長畝山北３号墳で鑷鬱、河辺上原３



第179図　津山市観音山周辺出土の鉄製品（1/50,000・鉄器1/8）

号墳で梯形鋳造鉄斧、一貫西古墳群の南東に位置する大畑遺跡土坑墓[28]で６世紀前半頃の陶質土器が出土しており、渡来系鍛冶工人集団の存在を明瞭に示している。このことから、少なくとも美作地域においては、鉄鐸の導入が鍛冶工人集団の渡来と鍛冶技術の移入に伴ってなされたことが認められるであろう。ただし、このことが鉄鐸と鍛冶工人との関係を示すのか、渡来人との関係を示すのか、両者なのかは判断が難しい。

観音山から東約７㎞に位置し、鉄鐸15点に加えて鉄鎚を出土した小池谷１号墳は６世紀中葉に位置づけられ、この鉄鎚を鍛冶具とみてよければ、この段階でも鉄鐸と鍛冶工人との関係が維持されていると考えられる。小池谷古墳群では鉄鐸以外に渡来系遺物はみえず、渡来人よりも鍛冶工人との関係を示している。一方、小池谷１号墳とほぼ同時期の桑山南２号墳では、明確な渡来系遺物や鍛冶関係遺物は認められず、さらに約１世紀降る桑山南３号墳も同様である[29]。

このように美作地域では、５世紀中葉に鍛冶工人の渡来、鍛冶技術の移入に伴って鉄鐸及びそれを使用する祭祀が導入されたが、６世紀を通じて次第に渡来人との関係、鍛冶工人との関係が薄れていき、鉄鐸祭祀のみが少なくとも７世紀中葉まで継続されたとみることができる。ただし、これは鉄鐸出土遺跡の多い美作地域で窺える傾向であり、他地域ではまた異なる状況が想定されるかもしれない。５～７世紀を通じて稀少な副葬品であることには注意が必要で、地域ごと、時期ごとにその位置づけを検討していく必要があろう。（尾上）

註

（１）「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集　津山市教育委員会　1997

（２）「小池谷古墳群」『勝央町文化財調査報告』10　勝央町教育委員会　2010

（３）「杉遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告』４　奥津町教育委員会　2000

（４）「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会　2007

（５）『一国山古墳群』岡山市教育委員会　2006

（６）早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」『愛知県埋蔵文化財センター　研究紀要』第９号　2008
米田克彦「六重城南１号墳出土の鉄製品について」『六重城南遺跡』国土交通省松江国道事務所・島根県教育委員会　2009

（７）早野註６文献

（８）行田裕美「鉄鐸について」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集　1997
内山敏行「土坑墓出土の鉄鐸」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第299集　2006
早野註６文献、米田註６文献　ほか

（９）岡山市一国山古墳群では、１号墳周溝から１点、１号墳周辺から１点が出土しているが、本来は２点１組で主体部（箱式石棺）内におさめられていた可能性がある。

(10) 清喜裕二・横田真吾・土屋隆史「妻鳥陵墓参考地墳丘外形調査および出土品調査報告」『書陵部紀要』第68号［陵墓篇］宮内庁書陵部　2017

(11) 大場磐雄「小野神社蔵鉄鐸」『考古学雑誌』23-4　1933
藤森栄一「鉄鐸　その古代史上の意義―諏訪神社の考古学的研究（四）―」『信濃』13-9　1962
藤森栄一『銅鐸』学生社　1964

(12) 藤森註11文献

(13) 鳥居龍蔵『人類学上より見たる我上代の文化』叢文閣　1925

(14) 藤森栄一「外地将来の鉄鐸資料」『信濃』18-4　1966

(15) 金東淑「嶺南地方의６～７世紀代墳墓出土鐵鐸에관한研究」『慶北大學校考古人類學科 20 周年記念論叢』慶北大學校人文大學考古人類學科　2000

(16) 大場報告では小野神社の鉄鐸も閂状の横棒が使用されており、藤森報告と食い違いがある（註 11)。

(17) 香川県雄山古墳群Ⅳ区 SD01 出土例でも、３点の鉄鐸のうち２点が入れ子になっている。出土した溝状遺構の性格は不明であるが、複数の鉄鐸を保管する場合のひとつの形態を示している可能性がある。
『雄山古墳群』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　2000

(18)「城谷口古墳群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 125 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　2007

(19)『向山古墳群』兵庫県文化財調査報告第 191 冊　兵庫県教育委員会　1999

(20) 亀田修一「鉄と渡来人―古墳時代の吉備を対象として―」『福岡大学総合研究所報』第 240 号（総合科学編第３号）　福岡大学総合研究所　2000
村上恭通『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店　2007　ほか

(21)「カクチガ浦遺跡群」『那賀川町文化財調査報告書』第 23 集　那賀川町教育委員会　1990

(22) 宮崎県内出土の鉄鐸について検討した甲斐貴充は、「宮崎県域において（中略）渡来系鍛冶工人と鉄鐸保有者との関係を論じるのは難しい」とする。
甲斐貴充「古墳時代宮崎県出土の鉄鐸資料」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第６号　宮崎県立西都原考古博物館　2013

(23) 坂本心平「鍛冶具について」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 58 集　津山市教育委員会　1997
早野註６文献

(24) 坂本心平「長畝山２号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第３号　津山弥生の里文化財センター　1996

(25)「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 45 集　津山市教育委員会　1992

(26)「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 54 集　河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会　1994

(27)「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 33 集　津山市土地開発公社・津山市教育委員会　1990

(28)「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 47 集　津山市土地開発公社・津山市教育委員会　1993

(29) 桑山南古墳群の近隣では、７世紀以降の鍛冶炉や横口付製炭窯などが発見されているが、この時期の美作では製鉄・鍛冶関係遺跡が各所にみられるため、必ずしも桑山南古墳群の鉄鐸と結びつける必要はない。

４　特殊須恵器

特殊な器種の須恵器として、桑山南２号墳・同３号墳から子持器台、桑山南１号墳から鈴付高杯、細畝３号墳から特殊扁壺が出土している。これ以外にも佐良山古墳群周辺では、子持壺、三足壺、皮袋形瓶、鳥形瓶などが出土しており、特殊須恵器が集中する地域といえる（第 13 表、第 180 図）。以下、県内での出土状況を概観しその性格や生産・流通状況について考えてみたい。

岡山県内での出土状況

子持壺（配像壺・子持配像壺を含む）は、特殊須恵器の中でも出土数が多く、県内で約 30 例が知られている。全国的な分布は、近畿地方を中心に東海以西に広くみられるが、中でも胴部に鍔状突帯をめぐらせる長脚の子持配像壺は「吉備型」とも呼ばれ[6]、岡山県に集中する。県内では備前地域が半数以上を占め、瀬戸内市邑久窯跡群などとの関係がうかがえる。窯跡出土例としては、瀬戸内市比丘尼岩下窯跡[7]のほか、倉敷市寒田窯跡群４号[8]がある。

子持器台も比較的出土数が多く、子持壺と同様、東海以西に広く分布する。県内では約 20 例が知られているが、子持壺のような偏在性は明瞭でない。窯跡出土例として寒田窯跡群４号がある。

鈴付高杯は、県内で４遺跡６点の出土が確認できる。桑山南１号墳例は脚底部を円板で塞ぎ鈴とするのに対し、桑山５号墳例は脚上部を膨らませて鈴としており違いがある。津山市長畝山２号墳[9]例は前者であり、赤磐市斎富２号墳[10]出土例３点のうち２点が前者、１点が後者である。

特殊扁壺は、細畝３号墳のほか、県内では岡山市百間川原尾島遺跡[11]、寒田窯跡群４号の例がある。細畝３号墳、百間川原尾島遺跡例は、胴部中央に円孔を穿ち口縁の側面観が山形をなすが（山田邦和の「特殊扁壺Ⅰ類」[12]）、寒田窯跡群４号例は棒状の把手を付し口縁が隅丸方形をなす（同「Ⅱ類」）。Ⅰ類が東日本、Ⅱ類が西日本に分布すると指摘されるが[13]、岡山県下では両者が混在する。

三足壺は、コウデン２号墳が県内唯一の出土例であり、全国でも 10 数例が知られるのみで[14]希少な器種である。三足の容器は百済などに例があるが、直接的な関係があるかは不明である。

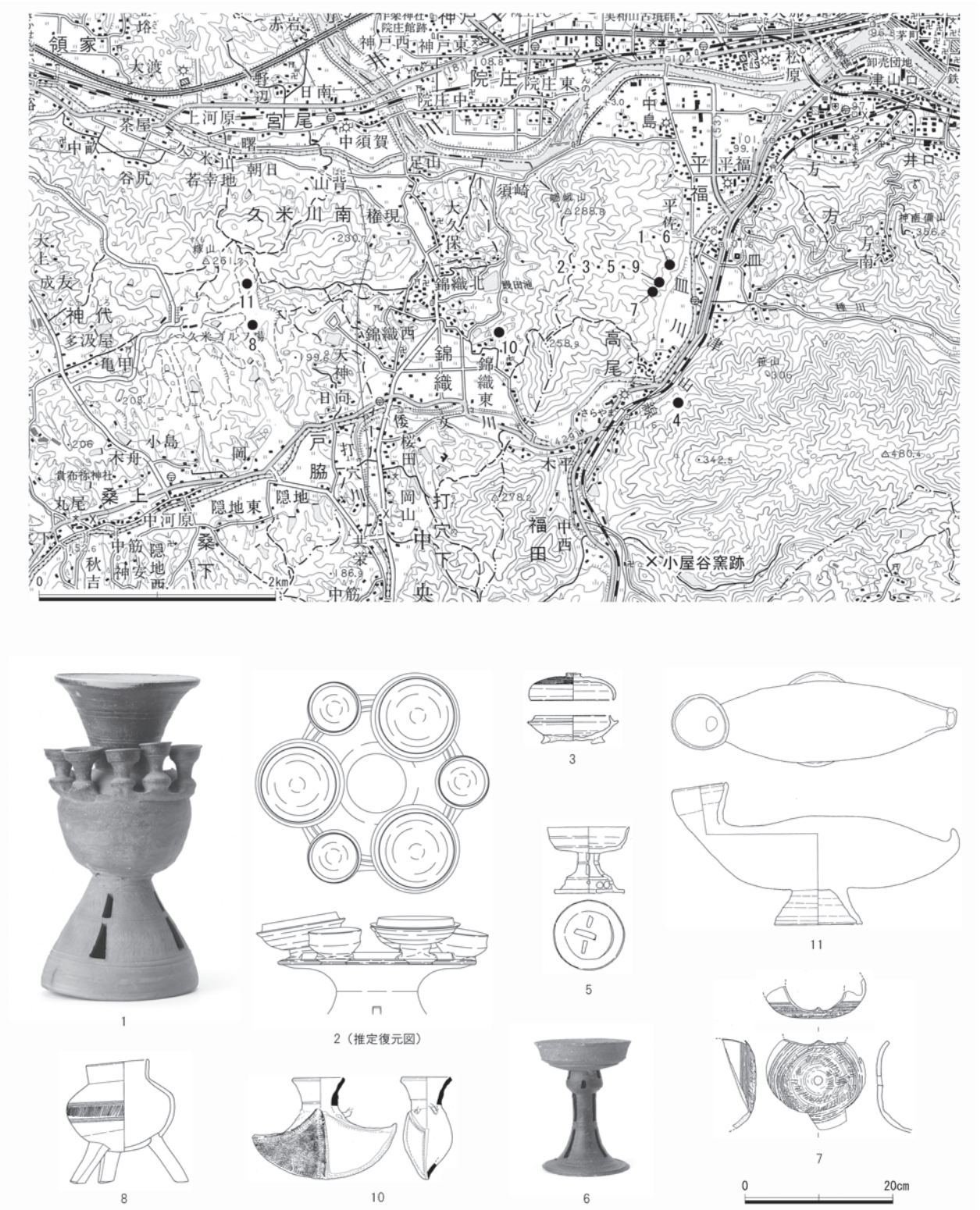
皮袋形瓶は、桑山南４号墳、松ヶ崎（峪）古墳のほかに、赤磐市岩田６号墳[15]、同市西畑６号墳[16]、

第 13 表　佐良山古墳群周辺の特殊須恵器

	種　別	古墳名・地名	所在地	出土遺構	出典・参考文献
1	子持壺	桑山５号墳	津山市平福	横穴式石室内	註１
2	子持器台	桑山南２号墳	津山市高尾	墳丘周辺	本書（第 46 図 87）
3		桑山南３号墳	津山市高尾	横穴式石室内	本書（第 61 図 108・109）
4		ズリ谷１号墳	津山市高尾	横穴式石室入口外方	註２
5	鈴付高杯	桑山南１号墳	津山市高尾	横穴式石室内	本書（第 28 図 27）
6		桑山５号墳	津山市平福	横穴式石室内	註１
7	特殊扁壺	細畝３号墳	津山市高尾	横穴式石室内	本書（第 128 図 121）
8	三足壺	コウデン２号墳	津山市久米川南	横穴式石室内	註３
9	皮袋形瓶	桑山南４号墳	津山市高尾	竪穴式石室	註４
10		松ヶ崎（峪）古墳	久米郡美咲町錦織	横穴式石室	註５
11	鳥形瓶	糠山４号墳	津山市久米川南	横穴式石室内	註３

総社市（旧清音村）内[17]で出土しており、出土数が少ないわりに各地に点在する。

鳥形瓶は、県内では糠山４号墳のほか岡山市南区宮浦出土品[18]がある。胴部が細長い平瓶形で口縁を頭部に見立てる糠山４号墳例は、広島県北部から鳥取県の出土例に類似し、その影響が考えられ



第 180 図　佐良山古墳群周辺の特殊須恵器（1/8）と分布（1/50,000）

番号は第 13 表に対応する。

る。

そのほか、県内出土の特殊器種としては、赤磐市斎富遺跡[19]出土の角杯などがある。

特殊須恵器出土古墳の性格と生産・流通

以上の特殊須恵器のうち比較的出土数の多い子持壺と子持器台について、出土古墳の性格を検討する。出土古墳が特定できその内容が判明するものとしては、総社市こうもり塚古墳[20]（墳長約 100 mの前方後円墳）、倉敷市二万大塚古墳[21]（墳長約 38 mの前方後円墳）、同市箭田大塚古墳[22]（墳径約 50 mの円墳）、岡山市八幡大塚２号墳[23]（墳径約 35 mの円墳）、同市塚段古墳[24]（墳長約 30 mの前方後円墳）、赤磐市可真丸山古墳[25]（墳長約 33 mの前方後円墳）などがある。前方後円墳や大型円墳が目立ち、首長墓に供えられた特別な器種といえる。しかし、その一方で小型古墳からの出土も知られている。墳丘規模 15 m以下の小墳の例を挙げれば、桑山南２号墳、同３号墳、桑山５号墳、ズリ谷１号墳、真庭市木谷 11 号墳[26]となり、いずれも美作地域で、大部分が佐良山古墳群に含まれる。これらの小墳は、装飾須恵器の生産地に近い、あるいは生産に関わる集団による造墓の可能性が考えられよう。佐良山古墳群の近隣では、小屋谷窯跡[27]などの須恵器窯が知られている。

邑久窯跡群の所在する瀬戸内市域でも子持壺・子持器台の出土例が多い。出土古墳や出土状況の不明なものが大部分だが、美作と同様、小型古墳に伴う可能性をもつものもあり、邑久窯跡群に含まれる比丘尼岩下窯跡では子持壺が出土している。また、備中の玉島陶窯跡群に含まれる寒田窯跡群４号では、子持壺・子持器台・特殊扁壺といった多器種の特殊須恵器が出土している。

特殊須恵器は、稀少な存在であることから他地域からの搬入品と考えられることもあるが、子持壺・子持器台などは窯跡を含め比較的出土数が多く、その他の器種についても寒田窯跡群４号の例などから、在地で生産されたものも多いとみられる。これらは生産地周辺で消費されるとともに、子持壺・子持器台などの大型品は、首長墓への供献品として地域外に供給されることも多かったであろう。

今回、桑山南・細畝古墳群から出土した須恵器 34 点の胎土分析を行った（第５章第４節）。その成果によれば、これらは大きく３つのグループに分けられるという。第１のグループ（８点）は津山市内の小屋谷窯・柳谷窯・箱王谷窯や大阪府陶邑窯と類似し、第２のグループ（２点）と第３のグループ（24点）は生産地不明という。特殊須恵器は、その希少性から破壊分析の対象として適さない面があり、今回分析を行ったのも破砕状態で出土した桑山南２号墳の子持器台１点のみである（第 46 図 87、第 180 図２）。分析の結果、この子持器台は第３のグループに属し生産地不明とされているが、最も個体数の多いグループであり、周辺地域での製作品と考えてよいのではなかろうか。位置が最も近い小屋谷窯とは異なる胎土であるが、小屋谷窯は発掘調査がなされておらず、胎土分析が行われているのも窯跡全体からすれば断片的な資料といえる。今後の分析資料の蓄積に期待したい。

佐良山古墳群の位置

最後に、これらの特殊須恵器が佐良山古墳群周辺に集中して出土している点について、再度注目しておく必要がある。周辺の窯跡の状況が不明瞭であるものの、以上の検討から、佐良山古墳群の性格、造営背景のひとつとして、特殊器種を含む須恵器生産を加えることができるかもしれない。さらに、器種・器形が多彩であり、そうした情報が他地域から伝達されやすい環境にあったという評価もできる。例えば、近畿地方以東に偏在するとされる特殊扁壺Ⅰ類が細畝３号墳から出土していることは、近畿地方以東の地域との交流を示す可能性がある。また、糠山４号墳の鳥形瓶は中国地方山間部さらに山陰地域とのつながりを、子持壺などは吉井川を介した邑久地域との関係を示すであろう。畿内と

山陰を結ぶ出雲道や、吉備南部につながる吉井川水系など、複数の交通路が結節する要衝に位置することが、その背景として考えられる。（尾上）

註

（1）「横穴式石室から装飾須恵器が出土」『所報吉備』第69号　岡山県古代吉備文化財センター　2020

（2）『津山市史』第1巻　原始・古代　津山市　1972

（3）『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

（4）『桑山南4号墳現地見学会資料』津山市産業文化部文化財課文化財保護係　2020
仁木康治「岡山県津山市桑山南4号墳の発掘調査概要」『中四研だより』第46号　中国四国前方後円墳研究会　2020

（5）東京国立博物館『東京国立博物館所蔵須恵器集成Ⅲ（西日本篇）』1998
中野雅美「松ヶ崎（峪）古墳」『中央町誌』資料編　美咲町　2020

（6）山田邦和『須恵器生産の研究』学生社　1998

（7）池田浩「比丘尼岩下窯跡」『長船町史』史料編（上）考古　1998

（8）「寒田窯跡群4号」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集　倉敷埋蔵文化財センター　2003

（9）坂本心平「長畝山2号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第3号　津山弥生の里文化財センター　1996

(10)「斎富古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　日本道路公団広島建設局備前工事事務所・岡山県教育委員会　1995

(11)「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1994

(12)（13）註6

(14) 愛知県陶磁資料館『古代の造形美　装飾須恵器展』1995

(15)『岩田古墳群』岡山県山陽町教育委員会　1976

(16) 荒木誠一『改修赤磐郡誌　皇紀二千六百年記念出版』岡山県赤磐郡教育会　1940

(17) 吉備考古館所蔵

(18) 註14

(19)「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1996

(20)「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35　岡山県教育委員会　1979

(21) 新納泉・三浦孝章編『二万大塚古墳』二万大塚古墳発掘調査団　2018

(22)『箭田大塚古墳』真備町教育委員会　1984

(23) 鎌木義昌・亀田修一「八幡大塚2号墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986

(24)『塚段古墳・坂口古墳』岡山市教育委員会　2016

(25) 岡本明郎「可真丸山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986

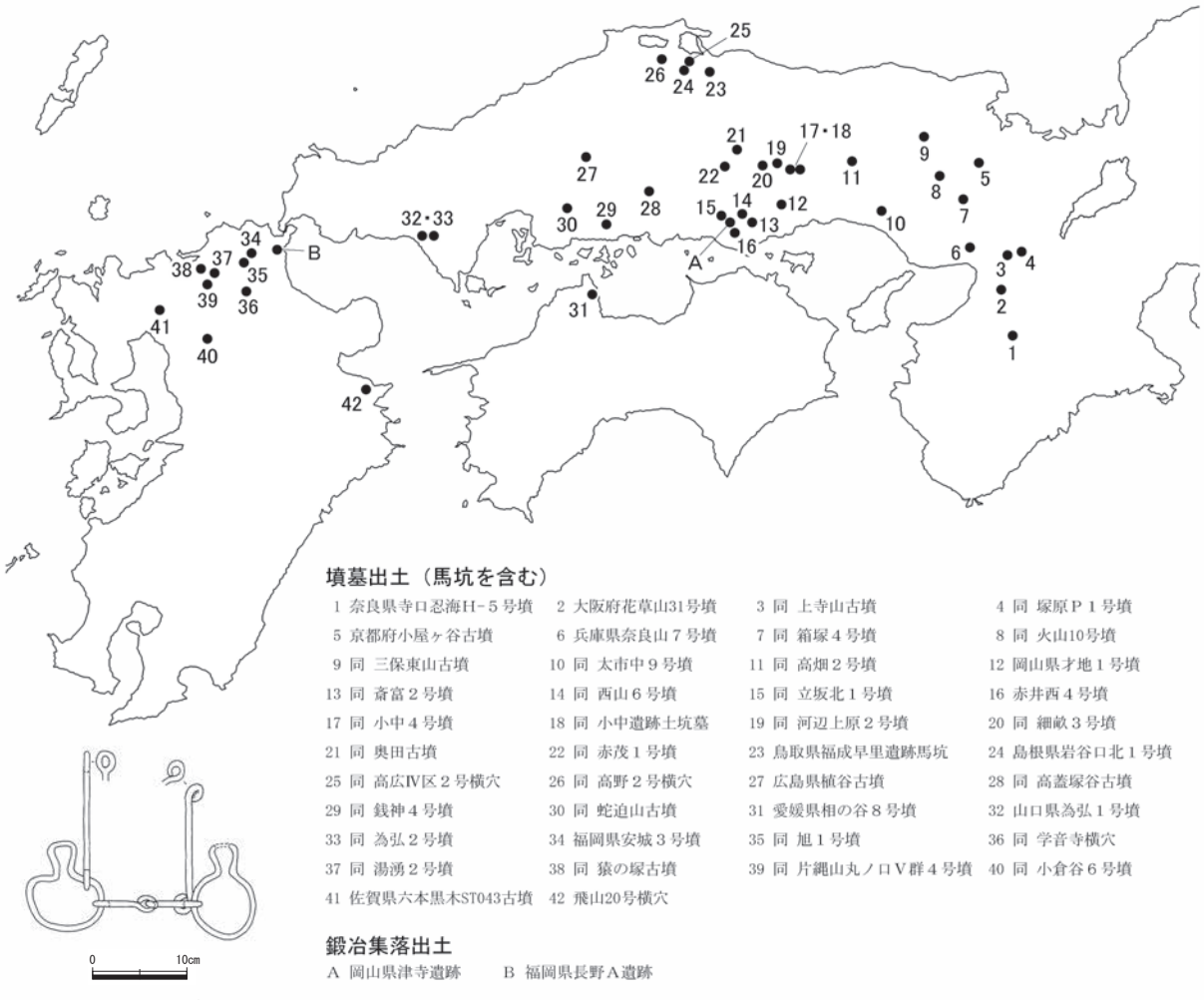
(26)「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会　1995

(27) 小郷利幸「小屋谷窯跡」『新修津山市史』資料編　考古　津山市　2020

５　瓢形円環轡

細畝３号墳から、「瓢形円環轡」、「瓢形環状鏡板付轡」などと呼ばれる鉄製轡が出土している（第130図M 69）。この轡は６世紀中葉から７世紀前半頃にみられるが、分布が特徴的である。関東から九州まで比較的広域に分布するなかで、岡山県に集中することが指摘されている[1]。近年の発見例も含め西日本における分布をあらためて確認すると（第181図）、瀬戸内海北岸から北部九州にかけて広く分布し、その中でも岡山県や福岡県に集中しており、畿内地域が分布の中心にならないという特徴が窺える。また、出雲東部を除く山陰地域や、四国、九州中・南部では分布が非常に希薄である。このような偏在性から、通常の馬具とは異なる生産体制と流通経路が想定される。銜や引手の端環を蕨手状におさめるものが多くみられるなど比較的簡略な製作技法による轡であることも考慮すれば、分布の集中する地域で在地生産が行われた可能性も考えられる[2]。

鍛冶集落遺跡から出土した瓢形円環轡の例として、岡山県津寺遺跡[3]と福岡県長野Ａ遺跡[4]がある。津寺遺跡（高田調査区）は、６世紀後半から７世紀前半にかけて集落規模が拡大し、大半の竪穴建物から鉄滓が出土する。遺物では鞴羽口や鍛に加え、鉄鏃や農工具が出土している。瓢形円環轡



墳墓出土（馬坑を含む）

1 奈良県寺口忍海H－５号墳	2 大阪府花草山31号墳	3 同 上寺山古墳	4 同 塚原Ｐ１号墳
5 京都府小屋ヶ谷古墳	6 兵庫県奈良山７号墳	7 同 箱塚４号墳	8 同 火山10号墳
9 同 三保東山古墳	10 同 太市中９号墳	11 同 高畑２号墳	12 岡山県才地１号墳
13 同 斎富２号墳	14 同 西山６号墳	15 同 立坂北１号墳	16 赤井西４号墳
17 同 小中４号墳	18 同 小中遺跡土坑墓	19 同 河辺上原２号墳	20 同 細畝３号墳
21 同 奥田古墳	22 同 赤茂１号墳	23 鳥取県福成早里遺跡馬坑	24 島根県岩谷口北１号墳
25 同 高広Ⅳ区２号横穴	26 同 高野２号横穴	27 広島県植谷古墳	28 同 高蓋塚谷古墳
29 同 銭神４号墳	30 同 蛇迫山古墳	31 愛媛県相の谷８号墳	32 山口県為弘１号墳
33 同 為弘２号墳	34 福岡県安城３号墳	35 同 旭１号墳	36 同 学音寺横穴
37 同 湯湧２号墳	38 同 猿の塚古墳	39 同 片縄山丸ノ口Ⅴ群４号墳	40 同 小倉谷６号墳
41 佐賀県六本黒木ST043古墳	42 飛山20号横穴		

鍛冶集落出土

Ａ 岡山県津寺遺跡　　Ｂ 福岡県長野Ａ遺跡

17 小中４号墳（1/8）

第181図　瓢形円環轡の分布

が出土したのは鍛冶集落からやや離れた流路内であるが、集落遺跡から馬具が出土すること自体が稀であり、鍛冶工房との関連も窺わせる。長野Ａ遺跡（Ⅲ区）は、５世紀前半から７世紀前半にかけての集落遺跡で、多くの鞴羽口や鉄滓が出土している。瓢形円環轡は包含層からの出土である。以上の２遺跡は、第181図でみた瓢形円環轡の集中地域に該当しており、こうした地方の鍛冶集落で轡の製作がなされた可能性がある。

岡山県内では、津寺遺跡の所在する県南部だけでなく、北東部の美作地域にも瓢形円環轡の出土例が多い（第181図17～21）。本節の「３　鉄鐸」の項で検討したように、津山市の観音山周辺には５世紀中葉以降、渡来系鍛冶工人集団が定着していたと推定され、それを示す遺跡群のうち河辺上原２号墳(5)で瓢形円環轡が出土している（第179図）。また、鉄鐸と鉄鎚を出土した小池谷１号墳(6)の近隣でも、小中４号墳及び小中遺跡３区№.４土坑墓(7)で瓢形円環轡が出土している。これらの事例から美作地域も製作地の候補のひとつになり得るだろう。出雲東部に少数ながら集中する資料は、地理的に最も近い美作の製品であろうか。現状では、各地の瓢形円環轡に地域的な特徴を読み取ることが困難であり、流通の状況については今後の課題である。

以上のように、瓢形円環轡は分布が集中する岡山や福岡などにおける在地生産が推定される。しかしながら、瓢形円環轡は東日本も含め少数ながらかなり広範に分布しており、その大部分がこれらの地域で製作されたものとは考えにくい。広域流通品を模倣して、一部が吉備や北部九州など複数の地域で生産された状況を想定しておきたい。瓢形円環轡が多くみられる６世紀後半から７世紀前半には、津寺遺跡や窪木薬師遺跡(8)などの鍛冶集落が大規模化している。鉄鏃の地域性が顕在化するのもこの時期であり(9)、地方における鉄器生産の盛行を示すものと考えられる。　（尾上）

註

（1）尾上元規「壺鐙と瓢形円環轡について」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会　2002
大谷宏治「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』№.40　2008

（2）註１文献で、尾上は地域的な偏りをもちながらも一地域に限定して分布する状況ではないことから、吉備における生産を断定しなかった。一方、大谷は「瓢形円環轡の大部分は、吉備で生産された」と想定している。その後の出土例の増加などを踏まえ、筆者も吉備などでの在地生産を考えるようになったが、吉備に限定できる状況ではないとみている。

（3）「津寺遺跡２」・「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98・116　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1995・1997

（4）「長野Ａ遺跡３」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第55集　（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1987

（5）「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第54集　河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会　1994

（6）「小池谷古墳群」『勝央町文化財調査報告』10　勝央町教育委員会　2010

（7）「小中古墳群・小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』７　岡山県教育委員会　1975

（8）「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　岡山県教育委員会　1993

（9）尾上元規「古墳時代鉄鏃の地域性形成過程」『古代吉備』第17集　古代吉備研究会　1995

遺構一覧表

凡　例

1　古墳以外の遺構について示した。古墳については、第６章第１節の「第９表　桑山南・細畝古墳群一覧」を参照されたい。

2　遺構の規模は、箱式石棺墓は石棺の内法、土坑墓・土坑は掘り方上端で計測し、深さは現存最大値を示す。

3　削平・流失等により本来の規模が分からない項目には「－」を示した。

4　「旧遺構番号」は調査時点でのものであり、出土遺物への注記、遺構図面（調査原図）などはこれにしたがっている。

桑山南古墳群　箱式石棺墓一覧

遺構名	蓋石残存	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考	旧遺構番号
箱式石棺墓１	無	104	28	27	116.87	古墳時代後期	須恵器（枕か）	No.17
箱式石棺墓２	有	114	37	40	116.92	古墳時代後期	須恵器（枕）、礫床	No.22

桑山南古墳群　土坑墓一覧

遺構名	平面形	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考	旧遺構番号
土坑墓１	隅丸長方形	170	52	25	116.84	古墳時代後期	須恵器（枕含む）、須恵器内赤色土を分析（第５章）	No.18
土坑墓２	隅丸長方形	176	101	14	117.13	古墳時代後期	須恵器（枕か）、刀子	No.5
土坑墓３	隅丸長方形	203	62	50	116.41	古墳時代後期	須恵器（枕）、刀子、礫床	No.1
土坑墓４	隅丸長方形	194	78	16	116.32	古墳時代後期か		No.19
土坑墓５	隅丸長方形	160	77	19	114.40	中世		No.7
土坑墓６	隅丸長方形	－	74	16	114.70	14 世紀	土師質土器椀	No.11
土坑墓７	隅丸長方形	50	－	9	114.85	中世		No.10
土坑墓８	隅丸長方形	50	36	26	114.80	中世		No.6
土坑墓９	隅丸長方形	188	66	48	114.20	中世		No.16
土坑墓 10	楕円形	117	67	21	114.49	中世	短刀	No.8
土坑墓 11	隅丸長方形	126	60	10	114.59	中世		No.12
土坑墓 12	隅丸長方形	132	56	8	113.98	中世		No.14
土坑墓 13	隅丸長方形	－	68	35	114.00	中世		No.13
土坑墓 14	隅丸長方形	－	64	12	113.68	中世		No.15

桑山南古墳群　土坑一覧

遺構名	平面形	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考	旧遺構番号
土坑１	隅丸長方形	200	122	24	116.86	古墳時代後期	１号墳盛土中	No.21
土坑２	不整円形 底部隅丸方形	148	120	80	115.32	近世以降		No.9

細畝古墳群　箱式石棺墓一覧

遺構名	蓋石残存	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考	旧遺構番号
箱式石棺墓１	無	149	87	62	116.56	古墳時代後期	須恵器	No.1
箱式石棺墓２	無	188	－	40	116.08		両端に枕石	No.2

細畝古墳群　土坑一覧

遺構名	平面形	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考	旧遺構番号
土坑１	隅丸長方形	194	130	64	115.91			No.3

遺物観察表

凡　例

土器・埴輪

1　「計測値」のうち、「口径」と「底径（脚径）」は実測値または復元値を表し、「（数値）」はその残存率が約 1/6 以下のものの復元値であることを示す。また、「器高」の「（数値）」は残存最大値を表す。

2　「状態」の「完形」及び「ほぼ完形」は、接合・復元も含めた状態を示す。

3　「色調」は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

金属製品・玉類・土製品・石器

1　「計測値」のうち、「（数値）」は残存値を示す。

2　金属製品については、「鉄刀・刀子」、「鉄鏃」、「その他金属製品」の３表を示した。

3　鉄刀・刀子については、刀身などを「鉄刀・刀子」表に、付属装具を「その他金属製品」表に分けて掲載した。

4　鉄刀・刀子及び鉄鏃の計測部位と各部名称、鉄鏃の「分類」は次頁のとおりである。

5　金属製品の「重量」は、クリーニング後、含浸処理前の数値である。

6　玉類及び土製品の「色調」は、上記（土器・埴輪－３）のほか、『新版色の手帖』（永田泰弘監修 2002　小学館）による。

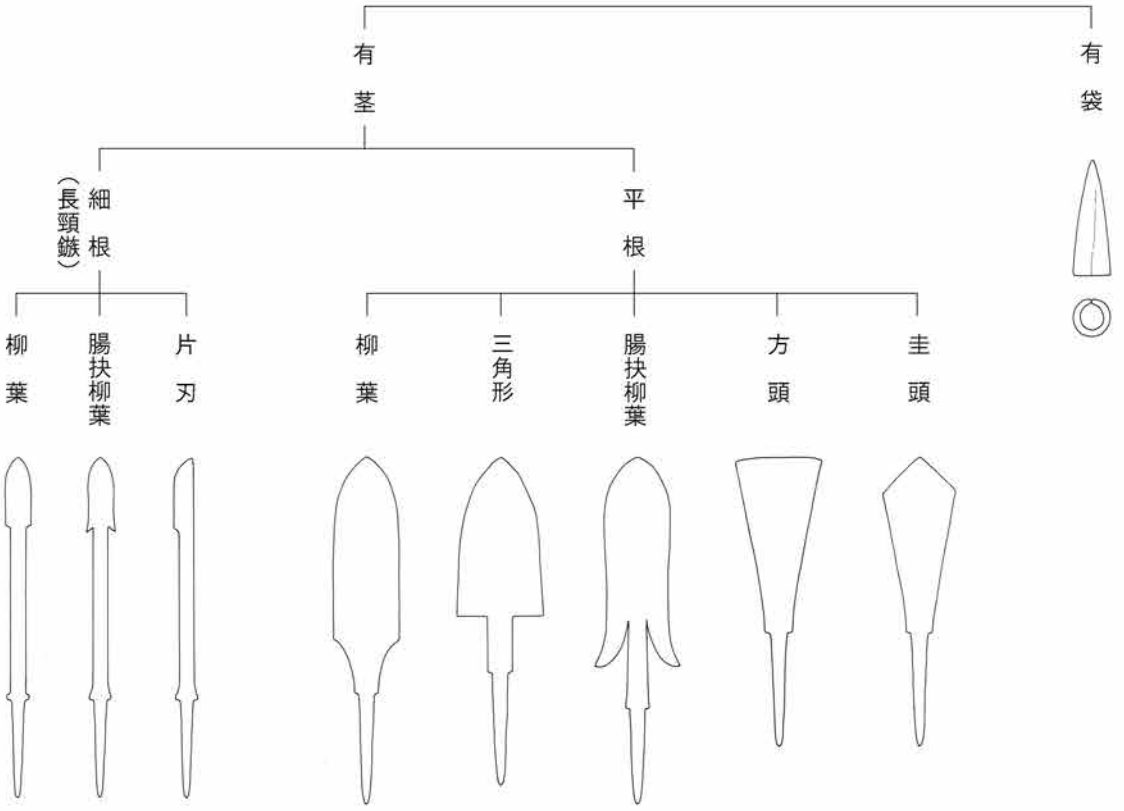
陶棺

1　「身」・「蓋」の「左」・「右」は、本書掲載実測図における左右を表す。

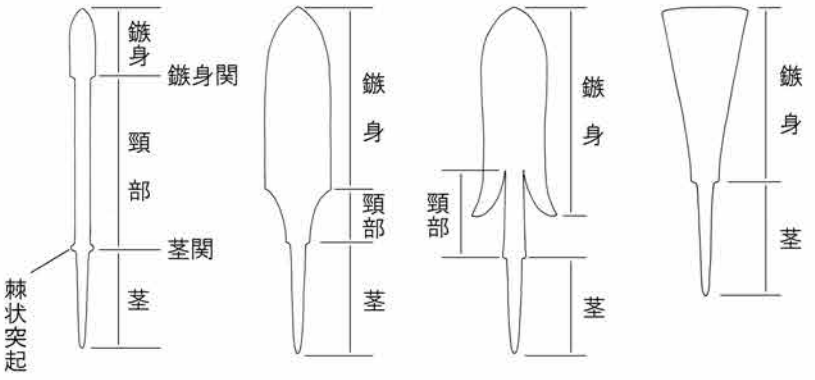
2　各部計測値のうち、「（数値）」は残存最大値を示すが、欠損部分が大きい場合は空欄としている。

3　「色調」は、上記（土器・埴輪－３）による。

鉄刀・刀子の計測部位と部分名称



鉄鏃の分類（本書に関連するもの）



鉄鏃の計測部位と部分名称

鉄鏃茎と矢柄の構造

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
1	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.6		(3.5)	暗灰（N4/） 暗赤灰（7.5R4/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
2	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9		3.9	灰白（N7/）	4mm程の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部にヘラ記号
3	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9		3.7	黒（5YR2/1） 灰黄（2.5Y6/2）	6mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	不良	完形	
4	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9		4.5	灰白（2.5YR8/1） 浅黄橙（7.5YR8/4）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ
5	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.6		3.9	黄灰（2.5Y4/1） 浅黄（2.5YR7/3） 灰白（2.5Y7/1）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ
6	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.3		5.0	灰（N5/）	2.0mm以下砂粒（長石）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部内面に当て具痕
7	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	12.9		4.9	灰（N5/）	2.0mm以下砂粒（長石）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部内面に当て具痕
8	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	12.9		4.1	灰（N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	
9	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	12.6		4.1	黄灰（2.5Y6/1） 灰（N6/）	2.0mm以下砂粒（長石）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ
10	1号墳石室内	須恵器	杯身	13.0		(3.6)	灰（N6/）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部周縁にわずかに回転ヘラケズリ
11	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.5		4.1	灰（5Y6/1） 灰（N6/・N5/）	2.5mm以下の砂粒（長石）	良好	ほぼ完形	底部周縁にわずかに回転ヘラケズリ
12	1号墳石室内	須恵器	杯身	13.1		4.5	灰白（5Y8/1）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ 内面底部に当て具痕
13	1号墳石室内	須恵器	杯身	13.2		3.3	灰（N5/） 灰白（7.5Y7/1・2.5Y8/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
14	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.4		4.6	浅黄橙（10YR8/4） 灰白（2.5Y8/2）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ
15	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.4		3.5	淡黄（2.5Y8/4） 灰黄（2.5Y7/2）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	不良	完形	底面回転ヘラケズリ
16	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.0		4.3	灰（N5/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 内面底部に当て具痕
17	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.1		3.6	灰（N4/） 灰褐（5YR4/2）	4mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
18	1号墳石室内	須恵器	杯身	11.6		4.4	灰白（5Y8/1） 浅黄橙（7.5YR8/6）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ
19	1号墳石室内	須恵器	杯身	11.6		3.7	灰白（2.5YR8/1）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良	完形	底部回転ヘラケズリ

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
20	1号墳石室内	須恵器	杯身	11.8		4.0	灰（N6/） 灰白（10YR7/1）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ
21	1号墳石室内	須恵器	杯身	11.2		3.8	灰（7.5Y6/1） 灰白（7.5Y7/1）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ
22	1号墳石室内	須恵器	杯身	11.3		4.0	灰（N6/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
23	1号墳石室内	須恵器	杯身	10.8		3.6	灰（10Y6/1・N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
24	1号墳石室内	須恵器	杯身	10.6		3.8	灰白（N7/） 暗灰（N3/）	1mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
25	1号墳石室内	須恵器	高杯	11.9	12.9	15.5	にぶい黄橙（10YR7/4） 灰白（10YR8/1）	2.0mm以下の砂粒（長石）	やや不良	完形	杯部内面にヘラ記号 2段3方向の透かし
26	1号墳石室内	須恵器	高杯	10.8	11.1	17.2	灰（N6/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	杯部下半に櫛状工具による列点文 2段3方向の透かし
27	1号墳石室内	須恵器	鈴付高杯	11.0	9.2	9.1	赤褐（2.5YR4/6）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良	ほぼ完形	2段2方向の透かし 脚下段内部に土製丸2個を入れ鈴とする
28	1号墳石室内	須恵器	瓶	12.0	5.4	14.5	灰（N6/）	2.0mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	胴部下半回転ヘラケズリ 頸部に凹線2条
29	1号墳石室内	須恵器	瓶	8.9			灰（N6/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		胴部下半回転ヘラケズリ、底部ナデ 胴上部に沈線1条
30	1号墳石室内	須恵器	椀	6.6	5.5	6.7	灰（N6/・N5/）	2.0mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	外面上半カキメ 底部外面ヘラケズリ
31	1号墳石室内	須恵器	蓋	8.7		3.0	灰（N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 口縁端部に面をもつ。 32とセット
32	1号墳石室内	須恵器	短頸壺	6.4		9.1	灰（N5/）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 肩部に刺突文 31とセット
33	1号墳石室内	須恵器	短頸壺	18.9		11.2	灰（N6/）	2.0mm以下の砂粒（長石）	良好		胴部下半回転ヘラケズリ
34	1号墳石室内	須恵器	台付長頸壺	7.2	13.4	26.7	灰（N6/）	2.0mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	胴部下半回転ヘラケズリ 胴部に刺突文
35	1号墳石室内	須恵器	台付長頸壺	9.9	13.6	25.6	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		胴部外面にカキメ 肩部に刺突文 台は3方向に透かし
36	1号墳石室内	須恵器	長頸壺	7.0		20.0	灰白（7.5Y7/1）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	口縁部外面カキメ 胴部下半回転ヘラケズリ、底部に重ね焼き痕
37	1号墳石室内	須恵器	長頸壺	9.4		18.4	灰（N5/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	口縁部に刺突文 口縁部下端に断面三角形突帯
38	1号墳石室内	須恵器	長頸壺	8.8 ～ 5.0		18.8	灰（N4/）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	口縁部が楕円形に歪む 口縁部外面カキメ 胴部下半ヘラケズリ

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
39	1号墳石室内	須恵器	平瓶	6.8	3.2	14.1	青灰（5PB6/1） 赤灰（2.5YR5/1）	2.0mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	外面ナデ
40	1号墳石室内	須恵器	提瓶			（19.3）	灰（5Y4/1）	2.0mm以下の砂粒（長石）	良好		胴部外面カキメ 鈎状の把手
41	1号墳石室内	須恵器	提瓶	8.4		24.5	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	口縁部外面に1条の凹線 胴部外面カキメ 把手は碁石状
42	1号墳石室内	須恵器	甕	22.6			灰（N5/）	6.5mm程の砂粒	良好		外面に格子目タタキ
43	1号墳石室内	土師器	椀	13.4	7.8	4.6	橙（5YR6/6・6/8）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	黒斑あり
44	1号墳石室内	土師器	椀	9.6	5.6	4.4	にぶい橙（7.5YR7/4）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	黒斑あり
45	1号墳石室内	土師器	高杯	13.6	11.4	8.1	橙（5YR6/8）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		杯部外面に1条の沈線 外面・杯部内面に赤色顔料
46	1号墳石室内	土師器	高杯	13.3	11.2	9.7	橙（5YR7/8・6/8）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		杯部外面に1条の沈線 外面・杯部内面に赤色顔料
47	1号墳石室内	土師器	高杯	13.4	11.0	9.6	橙（5YR6/6）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		杯部外面に1条の凹線 外面・杯部内面に赤色顔料
48	1号墳石室内	土師器	高杯	13.6	10.7	9.5～8.5	橙（5YR6/8）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	口縁部に大きな歪み 外面・杯部内面に赤色顔料
49	1号墳石室内	土師器	高杯	13.2	10.3	7.9	浅黄橙（7.5YR8/4）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料
50	1号墳石室内	土師器	高杯	13.2	10.6	8.2	橙（2.5YR6/8）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
51	1号墳石室内	土師器	高杯	13.5		（3.9）	橙（2.5YR6/8）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面風化
52	1号墳石室内	土師器	高杯	13.0	10.8	7.9	浅黄橙（7.5YR8/6）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	杯部内面ヘラミガキ 外面・杯部内面に赤色顔料
53	1号墳石室内	土師器	高杯	12.6	10.3	10.0	橙（2.5YR6/8）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		杯部内外面に赤色顔料 黒斑あり
54	1号墳石室内	土師器	高杯	12.8	10.5	9.5	橙（5YR7/8）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
55	1号墳石室内	土師器	高杯	12.9	10.6	7.5	にぶい黄橙（10YR7/4）	4.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
56	1号墳石室内	土師器	高杯	13.0	9.9	7.6	にぶい黄橙（10YR7/4）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	口縁外面に1条の凹線 内外面に赤色顔料
57	1号墳石室内	土師器	高杯	13.0	10.6	7.8~8.2	橙（7.5YR7/5）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
58	1号墳石室内	土師器	高杯	12.9	10.8	8.6	橙（5YR6/8） 黄橙（7.5YR7/8）	4mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好	ほぼ完形	外面・杯部内面に赤色顔料
59	1号墳石室内	土師器	高杯	12.6	10.2	7.9	にぶい橙（7.5YR7/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料 黒斑あり
60	1号墳石室内	土師器	高杯	12.6	9.9	（8.2）	橙（5YR7/6） 浅黄橙（7.5YR8/6）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
61	1号墳石室内	土師器	高杯	12.4	9.9	8.1	橙（5YR7/8）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	
62	1号墳石室内	土師器	高杯	12.1	10.5	8.1	橙（7.5YR6/6）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
63	1号墳石室内	土師器	高杯	12.2	7.5	8.7	にぶい橙（7.5YR7/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料
64	1号墳石室内	土師器	高杯	12.1	7.9	8.7	橙（5YR7/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料
65	1号墳石室内	土師器	高杯	11.5	8.0	7.8 ～ 8.4	にぶい橙（7.5YR7/4）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
66	1号墳石室内	土師器	高杯	11.4	7.3	8.5	にぶい黄橙（10YR7/4）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好	完形	内外面に赤色顔料
67	1号墳石室内	土師器	高杯	11.0	8.2	8.4	にぶい橙（7.5YR7/4）	3.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
68	1号墳石室内	土師器	高杯	10.8	6.8	7.3	にぶい黄橙（10YR7/4）	3.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	完形	口縁部に歪みあり 内外面に赤色顔料
69	1号墳石室内	土師器	高杯	10.5	8.2	7.4	橙（7.5YR7/6）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料
70	1号墳石室内	土師器	高杯	10.4	7.4	7.7	橙（7.5YR7/6）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
71	1号墳石室内	土師器	台付鉢	9.0	11.3	15.3	にぶい橙（7.5YR7/4）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面・口縁部内面に赤色顔料 黒斑あり
72	1号墳石室内	土師器	甕	9.3		13.9	にぶい橙（7.5YR7/4） 橙（5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	口縁外面に浅い段 黒斑あり
73	1号墳石室内	土師器	甕	9.5		12.0	橙（5YR6/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	外面に赤色顔料 口縁外面に浅い凹線
74	1号墳石室内	土師器	甕	9.6		10.7	にぶい黄橙（10YR7/4）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面にハケメ 内面上半・外面に赤色顔料
75	1号墳石室内	土師器	甕	17.2		（20.2）	橙（5YR6/6）	4mm以下の砂粒（長石、石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面ハケメ、ナデ 内面ヘラケズリ、ユビオサエ、黒斑あり
76	1号墳石室内	土師器	甕	14.8		16.8	橙（5YR6/6）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面ハケメ、ナデ 内面ヘラケズリ、ナデ、ユビオサエ、黒斑あり

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
77	1号墳石室内	瓦質	鍋	25.4	20.9	10.6	灰白（2.5Y8/1） オリーブ黒（7.5Y3/1）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面ナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ 内面ハケメ
78	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	15.5		5.1	灰白（5Y8/1）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 79とセット
79	2号墳石室内	須恵器	杯身	13.7		4.5	灰白（5Y7/1）	4mm以下の砂粒（長石・黒っぽい砂粒）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 内面底部に当て具痕 78とセット
80	2号墳石室内	須恵器	蓋	11.6		5.4	灰（N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	口縁端部に内傾する面をもつ。 天井部回転ヘラケズリ
81	2号墳石室内	須恵器	甕	12.9		14.0	灰（N4/）	5mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	口縁外面に櫛描波状文 肩に櫛状工具による刺突文
82	2号墳石室内	須恵器	壺	11.3		19.2	灰白（N7/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	口縁と肩に刺突文 胴部下半外面に平行タタキ目を残す。
83	2号墳石室周辺	須恵器	杯蓋	14.6		4.4	灰（N5/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
84	2号墳石室周辺	須恵器	高杯	10.2		(4.1)	灰（N6/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯部底部回転ヘラケズリ
85	2号墳周辺	須恵器	壺	18.8		(13.9)	灰（N6/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		口縁部に櫛状工具による刺突文、胴部は平行タタキの上にカキメ
86	2号墳周辺	須恵器	器台	(31.3)		(40.2)	灰（N6/）	6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		脚部6段と推定 長方形・三角形・円形透かしを配す。
87	2号墳石室周辺	須恵器	子持器台				灰（N7/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		器台上に杯3・小壺3を配するものと推定 脚部に方形透かし
88	2号墳石室内・周辺	須恵器	甕	(23.6)		(33.7)	灰白（N7/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に平行タタキ後カキメ 内面に当て具痕
89	2号墳周辺	土師器	甕	(17.7)		(3.8)	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面風化 内面ナデ、ユビオサエ
90	2号墳周辺	埴輪	円筒	(22.3)		(8.2)	明黄褐（10YR7/6）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ
91	2号墳周辺	埴輪	円筒			(4.2)	にぶい黄橙（10YR7/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ
92	2号墳周辺	埴輪	円筒			(6.7)	明黄褐（10YR7/6）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		内外面風化、調整不明
93	2号墳周辺	埴輪	円筒			(8.9)	にぶい黄橙（10YR7/4）	6.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
94	2号墳周辺	埴輪	円筒			(16.9)	明黄褐（10YR7/6） にぶい黄橙（10YR7/4）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面タテハケ 内面ナデ 円形透かし
95	2号墳周辺	埴輪	円筒			(9.7)	橙（7.5YR7/6） にぶい褐（7.5YR6/3）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
96	2号墳周辺	埴輪	円筒			(8.1)	黄橙（10Y8/6） 浅黄（2.5Y7/3）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
97	2号墳周辺	埴輪	円筒			(7.1)	にぶい黄橙（10YR7/4）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
98	2号墳周辺	埴輪	円筒			(8.7)	にぶい黄橙（10YR7/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面風化、調整不明 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
99	3号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.7		4.7	灰白（2.5Y7/1） 褐灰（10YR6/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	
100	3号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.8		3.3	灰（N5/・N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
101	3号墳石室内	須恵器	杯蓋	10.8		3.2	灰（10Y5/1・6/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
102	3号墳石室内	須恵器	杯蓋	10.3		3.4	灰（N5/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
103	3号墳石室内	須恵器	杯身	9.8		4.3	灰白（N7/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
104	3号墳石室内	須恵器	杯身	11.0		4.1	灰白（N7/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
105	3号墳石室内	須恵器	杯身	10.8		3.2	灰白（10YR7/1）	1mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
106	3号墳石室内	須恵器	杯身	10.4		3.1	灰白（5Y7/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
107	3号墳石室内	須恵器	台付長頸壺	8.4	11.4	27.0	灰（5Y6/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	口縁部に櫛状工具による刺突文、肩部に櫛描波状文、外面下半にカキメ
108	3号墳石室内	須恵器	子持器台	11.2		3.7	黄灰（2.5Y6/1） 灰白（N7/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	天井部にカキメ 109とセット
109	3号墳石室内	須恵器	子持器台	10.0		(3.8)	灰白（N7/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯部のみ剥落 108とセット
110	3号墳石室内	須恵器	瓶類	11.7		(3.8)	灰（N5/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ
111	3号墳石室内	須恵器	平瓶	6.0	5.3	13.2	灰白（N7/） 灰（N5/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母	良好	完形	底面回転ヘラケズリ 胴部上半外面にカキメ
112	3号墳石室内	須恵器	平瓶	6.0	6.1	14.7	灰（N5/） 灰白（7.5Y8/1）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	胴部頂中央1か所に円形浮文状貼付け、胴部下半回転ヘラケズリ
113	3号墳石室内	須恵器	平瓶	8.2	6.8	15.2	灰（N4/・N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	胴下部回転ヘラケズリ 底部オサエ、ナデ 口縁接合部に沈線
114	3号墳石室内	須恵器	壺	12.4		(15.3)	灰白（N7/） 灰褐（7.5YR6/2）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		2号陶棺周辺出土 底部外面ヘラケズリ

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
115	３号墳石室内	須恵器	甕	36.6		(10.5)	暗灰（N3/）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		１号陶棺棺台として使用された破片、口縁部にヘラ状工具による刺突文帯３段
116	３号墳石室内	土師器	高杯	12.9	9.8	9.8	明赤褐（2.5YR5/6） 明褐（7.5YR5/6）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	外面に赤色顔料 黒斑あり
117	３号墳石室内	土師器	高杯	12.4	8.7	9.5	橙（5YR7/6）	4mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料
118	３号墳石室内	土師器	高杯		9.6	(5.8)	橙（5YR6/6）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
119	３号墳石室内	土師器	高杯		9.2	(6.6)	橙（5YR6/6）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
120	３号墳石室内	土師器	高杯	12.5	9.4	9.4	橙（5YR6/6）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面に赤色顔料
121	３号墳石室内	土師器	高杯	12.3	9.3	9.7	橙（7.5YR6/6）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面に赤色顔料
122	３号墳墳丘盛土内	須恵器	有蓋高杯	(12.8)	13.8	15.8	灰（N6/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		脚部２段３方透かし
123	３号墳石室周辺	須恵器	高杯		17.0	1.7	灰（N5/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ
124	３号墳石室周辺	須恵器	台		(18.2)	(3.9)	黄灰（2.5Y5/1） 灰褐（7.5YR5/2）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ
125	３号墳石室前面	須恵器	椀カ	8.8		(4.1)	灰（N6/）	2mm 以下の砂粒（黒色砂粒）	良好		内外面ヨコナデ
126	３号墳石室周辺	須恵器	壺			(3.5)	灰褐（7.5YR5/2）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に沈線１条、その上下にヘラ描斜線文
127	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.6		4.6	灰（N6/）	4mm 程の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 128 とセット
128	５号墳石室内	須恵器	杯身	12.5		4.6	灰褐（5YR5/2） 灰（N5/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 127 とセット
129	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.0		4.8	灰（N6/）	3mm 程の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後カキメ・ナデ 130 とセット
130	５号墳石室内	須恵器	杯身	11.6	8.1	3.9	灰（N5/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラケズリ後ナデ 129 とセット
131	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.0		4.8	灰（N4/）	4mm 程の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
132	５号墳石室内	須恵器	杯身	12.5		4.0	黒（N1.5/） 灰（N4/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
133	５号墳石室内	須恵器	杯身	12.2		4.2	灰（N6/）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
134	５号墳石室内	須恵器	杯身	12.2		4.1	灰（N6/・N5/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
135	５号墳石室付近	須恵器	有蓋高杯	11.7	9.0	8.7	灰褐（7.5YR5/2） 灰（N6/）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	重機掘削時に発見 杯部底面回転ヘラケズリ 脚部にカキメ
136	箱式石棺墓１	須恵器	杯身	13.6		4.7	灰（N5/・N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
137	箱式石棺墓１	須恵器	杯身	12.4		5.4	灰（N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
138	箱式石棺墓２	須恵器	杯蓋	14.8		5.0	灰白（10YR8/2） 浅黄橙（10YR8/4）	2.0mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ 139 とセット
139	箱式石棺墓２	須恵器	杯身	13.4		5.5	浅黄橙（7.5YR8/3）	2.0mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ 138 とセット
140	土坑墓１	須恵器	杯蓋	14.6		5.3	灰褐（7.5YR6/2） 灰（N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 141 とセット
141	土坑墓１	須恵器	杯身	12.8		4.9	灰白（10YR8/2）	2.0mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ 140 とセット
142	土坑墓１	須恵器	短頸壺	8.0		6.0	灰（N6/）	3.0mm 以下の砂粒（長石）	良好		底部回転ヘラケズリ 底部内面に赤色土（第５章第１節参照）
143	土坑墓２	須恵器	杯蓋	14.5		4.4	灰褐（7.5YR6/2） 灰（N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石）	良好		天井部回転ヘラケズリ後ナデ 144 とセット
144	土坑墓２	須恵器	杯身	13.4		5.1	灰（N4/・N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石）	良好		底部回転ヘラケズリ 143 とセット
145	土坑墓３	須恵器	杯身	12.6		4.6	灰（N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石）	良好		底部回転ヘラケズリ
146	土坑墓３	須恵器	杯身	12.2		4.6	灰（N6/）	2.0mm 以下の砂粒（長石）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
147	１号墳盛土内	須恵器	杯蓋	14.6		4.8	赤褐（10R5/4）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 148 とセット
148	１号墳盛土内	須恵器	杯身	13.0		4.9	黄灰（2.5Y6/1） 灰（N5/）	2.0mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 147 とセット
149	１号墳南側流土	須恵器	杯蓋	15.8		(3.6)	灰（N6/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
150	１号墳盛土内	須恵器	杯蓋	14.2		4.8	灰（N5/）	2.0mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
151	１号墳南側	須恵器	杯蓋	13.6		4.1	灰白（5Y7/1） 灰（N6/）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ 天井部内面に当て具痕
152	１号墳流土	須恵器	杯蓋	12.8		4.1	灰（N7/）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
153	1号墳流土	須恵器	杯身	14.1		(3.5)	灰（7.5Y6/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
154	1号墳盛土内	須恵器	杯身	13.8		(4.7)	灰（5Y4/1） にぶい赤褐（2.5Y5/4）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
155	1号墳流土	須恵器	杯身	(13.0)	(6.5)	(4.5)	灰（N6/）	1mm以下の砂粒（長石）	良好		底部回転ヘラケズリ 底部内面に当て具痕
156	1号墳盛土内	須恵器	杯身	13.0		(4.1)	灰（5Y4/1）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
157	1号墳流土	須恵器	杯身	12.3	7.9	3.5	灰（N6/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
158	1号墳盛土内	須恵器	杯身	(12.0)		4.5	灰（N6/）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ 底部にヘラ記号
159	1号墳流土	須恵器	杯身	11.9		(3.5)	灰（N6/） 灰白（7.5Y7/1）	1mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
160	土坑墓6	土師器	椀	10.7	3.8	3.1	にぶい黄橙（10YR7/4）	2.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		ごくわずかな貼付高台
161	2号墳盛土内	弥生土器	壺	14.8		(6.3)	橙（5YR6/8）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		口縁部に2条の凹線 頸部下半に凹線文 頸部内外面ハケメ
162	2号墳表土	弥生土器	甕	(14.6)		(3.3)	にぶい黄橙（10YR6/3） にぶい橙（7.5YR6/4）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		内外面ヨコナデ
163	2号墳流土	弥生土器	甕	(16.5)		(2.7)	橙（5YR6/8）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁部に3条の凹線 内外面ヨコナデ
164	2号墳盛土内	弥生土器	甕	(17.6)		(3.7)	浅黄橙（10YR8/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・金雲母）	良好		口縁部に3条の凹線 口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ハケメ
165	1号墳表土	弥生土器	高杯		10.6	(3.4)	橙（7.5YR6/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		脚端部に2条の凹線 円形の透かし
166	5号墳流土	須恵器	蓋			0.8	灰黄褐（10YR5/2） にぶい黄橙（10YR6/3）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		扁平な碁石状のつまみ 貼付面に同心円状の文様
167	3号墳表土	須恵器	杯身		11.3（高台）	(2.0)	灰（N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 貼付高台
168	5号墳流土	須恵器	杯身		9.2（高台）	(2.0)	灰（N7/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 貼付高台 全体に摩滅
169	3号墳表土	須恵器	杯身		10.8（高台）	(2.0)	灰（N5/）	1mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 貼付高台
170	3号墳流土	須恵器	甕		(5.0)	(22.3)	灰（N5/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面平行タタキ後ナデ
171	3号墳流土	土師器	皿	(10.5)	6.4	1.8	にぶい黄橙（10YR7/3）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		底部糸切り 口縁部に煤付着 灯明皿

桑山南古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
172	３号墳流土	陶器	皿	8.2	4.5	1.1	にぶい赤褐（5YR5/4）	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
173	３号墳流土	陶器	皿			(2.0)	釉薬：灰白（5Y7/1） 素地：灰白（7.5Y7/1）	精良	堅緻		唐津焼溝縁皿 17 世紀前半

桑山南古墳群　鉄刀・刀子

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
M１	１号墳石室内	大刀	(180.7)	(180.7)	35		90.69	鉄	刀身部 錆により層状に剥離し、保存状態不良
			(182.0)	(51.5)	(34.0)	(130.5)		鉄地銀象嵌	関～茎部 鎺・鍔・柄縁責金具に銀象嵌文様（刀装具は別表に記載） 茎に目釘穴２か所
M41	１号墳石室内	刀子	(107.2)	(56.1)	17.1	51.1	22.97	鉄	１号陶棺下出土 柄の鹿角質残存
M42	１号墳石室内	刀子	(82.6)			(82.6)	24.45	鉄	目釘穴１か所あり
M43	１号墳石室内	刀子	71.6	29.0	10.8	42.9	5.77	鉄	柄の鹿角質と茎の間に木質あり 茎に紐ないし糸巻状痕跡が残存
M44	１号墳石室内	短刀	(104.0)	(41.7)	15.8	62.3	13.77	鉄	２号陶棺内出土 柄の木質残存
M45	１号墳石室内	刀子	(94.3)	(41.2)	12	53.1	11.42	鉄	２号陶棺内出土 柄の木質残存 茎に紐ないし糸巻状痕跡が残存
M75	２号墳石室内	刀子	(138.7)	(84.7)	18.8	54.0	30.03	鉄	柄の木質がわずかに残存 鎺（M76）が付属
M79	３号墳石室内	大刀	609.0	527.6	29.0	81.4	471.85	鉄	２号陶棺棺内副葬 切先から茎尻までほぼ完存 柄及び鞘の木質残存、目釘穴２か所あり、内１か所は鉄製目釘が残存
M97	３号墳石室内	刀子	(118.9)	66.5	14.2	(52.4)	11.76	鉄	２号陶棺棺内副葬 柄の木質がわずかに残存
M98	３号墳石室内	刀子	(95.3)	(34.0)	14.6	61.5	16.95	鉄	
M99	３号墳石室内	刀子	(70.3)	(50.3)	14.2	(20.0)	6.48	鉄	２号陶棺内出土 同一個体と思われる２片 計測値（全長・刃部長・重量）は合計値 柄の木質がわずかに残存
M100	３号墳石室内	刀子	(43.7)	(43.7)	10.0		3.01	鉄	２号陶棺内出土
M101	３号墳石室内	刀子	(38.9)	(17.4)	(10.9)		2.83	鉄	２号陶棺内出土 同一個体と思われる２片 計測値（全長・刃部長・重量）は合計値
M102	３号墳石室内	刀子	(45.0)	(33.0)	(14.5)	(12.0)	7.75	鉄	石室内外半部出土 鎺片がわずかに残存 柄の木質残存

桑山南古墳群　鉄刀・刀子

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
M103	３号墳石室内	刀子	(54.5)			(54.5)	3.72	鉄	２号陶棺内出土 柄の木質がわずかに残存
M143	５号墳石室内	刀子	278.4	216.0	21.4	62.4	80.43	鉄	柄の鹿角質残存（取り上げ・復元不可能であったが、出土状態で長さ約 15cm の鹿角製柄が付属） 茎の紐ないし糸巻残存、目釘穴不明 鞘（M144）が付属か
M145	土坑墓２	刀子	(71.1)	(41.9)	12.8	30.2	5.25	鉄	柄の木質残存 茎に糸巻状痕跡が残存
M146	土坑墓３	刀子	(67.3)	(34.5)	12.5	32.7	8.73	鉄	柄の木質がわずかに残存
M149	土坑墓10	短刀	(240.7)	(145.1)	18.8	(95.6)	37.56	鉄	柄の木質残存 目釘穴１か所あり

桑山南古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M４	１号墳石室内	鏃	(103.3)	(21.9)	10.1	73.4	(7.8)	6.90	細根・柳葉	２号陶棺下出土 茎関に棘状突起あり
M５	１号墳石室内	鏃	(33.0)	18.1	12.4	(14.9)		4.18	細根・柳葉	鏃身破片 錆に覆われ外形不明瞭
M６	１号墳石室内	鏃	(38.0)			(38.0)		2.42	細根	頸部破片
M７	１号墳石室内	鏃	(68.2)	12.2	7.5	(56.0)		3.80	細根・片刃	鏃身関は不明瞭 先端のわずかな部分に刃を付ける。
M８	１号墳石室内	鏃	(60.4)			(60.4)		2.63	細根	頸部破片
M９	１号墳石室内	鏃	(60.1)			(60.1)		3.20	細根	玄室右奥部出土 頸部破片
M10	１号墳石室内	鏃	(47.5)			(47.5)		3.35	細根	２号陶棺下出土 頸部破片
M11	１号墳石室内	鏃	(33.6)			(33.6)		2.18	細根	頸部破片
M12	１号墳石室内	鏃	(43.6)			(43.6)		5.75	細根	頸部破片
M13	１号墳石室内	鏃	83.3	42.3	28.7	19.0	(21.1)	19.65	平根・柳葉	矢柄口巻・木質残存
M14	１号墳石室内	鏃	138.0	72.8	27.7	21.1	44.3	21.74	平根・柳葉	矢柄木質残存
M15	１号墳石室内	鏃	125.0	55.9	33.6	20.1	45.9	48.83	平根・三角形	矢柄木質・茎糸巻残存

桑山南古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M16	1号墳石室内	鏃	(109.1)	50.6	34.3	20.9	(37.1)	19.95	平根・三角形	矢柄木質残存
M17	1号墳石室内	鏃	(39.3)	(39.3)	(32.9)			9.80	平根	
M18	1号墳石室内	鏃	(47.0)	(47.0)	30.3			9.09	平根	玄室右奥部出土
M19	1号墳石室内	鏃	(63.2)	50.3	(34.9)	13.1		13.55	平根・三角形	
M20	1号墳石室内	鏃	(23.8)	(23.8)	(16.0)			2.54	平根・柳葉	
M21	1号墳石室内	鏃	(67.4)	29.8	22.3	18.9	(20.7)	7.34	平根・三角形	矢柄木質残存
M22	1号墳石室内	鏃	(116.7)	(53.1)	(37.3)	25.2	40.1	17.67	平根・三角形	矢柄木質残存 茎関に棘状突起あり
M23	1号墳石室内	鏃	(82.8)	(36.1)	(31.8)	36.8	(31.4)	13.19	平根・腸抉柳葉	矢柄木質・茎糸巻残存 保存状態悪く全体に剥離が進んでいる。
M24	1号墳石室内	鏃	(136.6)	(82.1)	(34.2)		54.5	35.04	平根・方頭又は圭頭	矢柄口巻・木質残存 茎関に棘状突起あり 保存状態悪く全体に剥離が進んでいる。
M25	1号墳石室内	鏃	(91.2)	(42.6)	(24.0)		48.6	10.21	平根・圭頭	矢柄木質残存
M26	1号墳石室内	鏃	70.3	38.7	20.6		31.6	7.08	平根・圭頭	鏃身に布目残存 矢柄木質残存
M27	1号墳石室内	鏃	(28.8)				(28.8)	0.91	不明	茎破片
M28	1号墳石室内	鏃	(19.7)				(19.7)	0.62	不明	茎破片
M29	1号墳石室内	鏃	(23.7)				(23.7)	0.74	不明	茎破片
M30	1号墳石室内	鏃	(19.1)				(19.1)	0.65	不明	茎破片
M31	1号墳石室内	鏃	(39.5)	(39.5)	(15.5)			8.50	有袋	袋内面に木質残存 先端欠損 鉄板の合わせ目を残す
M57	2号墳石室内	鏃	(182.0)	14.5	9.3	104.3	(64.0)	16.55	細根・柳葉	鏃身切刃造 鏃身先端が屈曲している 矢柄木質・茎糸巻残存
M58	2号墳石室内	鏃	(120.2)	26.4	12.4	69.8	(24.3)	9.39	細根・腸抉柳葉	鏃身の下で折れた状態で銹着 矢柄口巻・木質残存
M59	2号墳石室内	鏃	(66.6)	28.7	10.9	(41.5)		4.75	細根・腸抉柳葉	

桑山南古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M60	２号墳石室内	鏃	(39.5)	29.9	11.3	(13.6)		3.14	細根・腸抉柳葉	鏃身切刃造
M61	２号墳石室内	鏃	(39.7)	25.6	9.7	(13.6)		2.66	細根・腸抉柳葉	
M62	２号墳石室内	鏃	(32.5)				(32.5)	1.89	不明	茎破片
M63	２号墳石室内	鏃	(60.5)			(60.5)		4.06	細根	頸部破片
M64	２号墳石室内	鏃	(19.5)				(19.5)	0.41	不明	茎破片 矢柄木質がわずかに残存
M65	２号墳石室内	鏃	(37.4)			(37.4)		2.29	細根	頸部破片
M66	２号墳石室内	鏃	(32.9)				(32.9)	2.03	不明	茎破片 矢柄木質残存
M67	２号墳石室内	鏃	(55.6)			(34.0)	(21.6)	3.42	細根	頸部～茎破片
M68	２号墳石室内	鏃	(31.0)				(31.0)	1.89	不明	茎破片
M69	２号墳石室内	鏃	(99.8)	79.4	(36.2)	27.4	(4.9)	24.17	平根・腸抉柳葉	
M70	２号墳石室内	鏃	(94.1)	(63.0)	(26.7)	15.0	19.0	18.72	平根・腸抉柳葉	石室床面から浮いた状態で出土
M84	３号墳石室内	鏃	(22.4)	(15.6)	16.0	(6.8)	－	2.33	平根・柳葉	
M85	３号墳石室内	鏃	(112.4)	(13.0)	11.5	75.8	(23.6)	7.65	平根・柳葉	茎関に棘状突起あり
M86	３号墳石室内	鏃	(93.3)	46.3	14.2	22.5	(24.5)	8.06	平根・柳葉	
M87	３号墳石室内	鏃	(91.5)	51.3	16.0	25.6	(23.2)	7.26	平根・腸抉柳葉	
M88	３号墳石室内	鏃	(92.5)	52.1	19.8	24.2	(22.5)	7.91	平根・腸抉柳葉	茎糸巻残存
M89	３号墳石室内	鏃	(60.8)			(20.2)	40.6	3.30	平根・柳葉	矢柄木質残存
M90	３号墳石室内	鏃	(44.8)			(19.3)	(25.5)	2.42	平根	奥壁部仕切石内出土
M91	３号墳石室内	鏃	(25.0)			(25.0)		2.12	不明	１号陶棺内出土 頸部破片

桑山南古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M139	５号墳石室内	鏃	(107.8)	40.6	(21.6)	32.6	(34.5)	10.28	平根・柳葉	
M140	５号墳石室内	鏃	(117.5)	83.5	(29.0)	36.5	(18.0)	22.88	平根・腸抉柳葉	鏃身先端が角張った形状
M141	５号墳石室内	鏃	(129.9)	73.9	34.7	20.2	(35.8)	36.61	平根・三角形	矢柄木質残存
M142	５号墳石室内	鏃	(76.1)			(52.3)	(23.8)	7.25	不明	頸部～茎破片 上端部は錆のため不明 茎糸巻残存
M147	１号墳墳丘盛土内	鏃	(53.2)	37.2	22.1		(15.1)	6.81	平根・圭頭	矢柄木質残存

桑山南古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（g）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M１	１号墳石室内	鍔	60.5	51.8	11.5		鉄地銀象嵌	表裏及び耳に銀象嵌文様 錆膨れ・亀裂のため変形、本来の厚さは４～5㎜
		鑢	37.5	27.0	12.5		鉄地銀象嵌	全面に銀象嵌文様 楕円形板に筒部を接合
M２	１号墳石室内	柄縁責金具	39.0	31.0	5.5		鉄地銀象嵌	M１に付属、M１茎が貫通する状態で出土 外面に銀象嵌文様
M３	１号墳石室内	責金具	(33.0)	32.0	5.1	5.81	鉄	形態からM１に付属と推定 内面に木質残存
M32	１号墳石室内	両頭金具	30.7	7.9	7.7	1.66	鉄	弓飾金具 弓木質残存、直交方向の木目 筒部両端に花弁状突起あり
M33	１号墳石室内	両頭金具	(24.6)	8.2	4.5	1.32	鉄	弓飾金具 筒部両端に花弁状突起あり（大部分を欠損）
M34	１号墳石室内	鋲	25.0	10.9	10.9	2.84	鉄	鋲頭釘 頭部は高さをもつ半球形
M35	１号墳石室内	鋲	23.3	10.0	12.4	2.32	鉄	鋲頭釘 頭部は高さをもつ半球形
M36	１号墳石室内	鋲	21.9	10.5	9.1	1.99	鉄	鋲頭釘 頭部は高さをもつ半球形
M37	１号墳石室内	鋲	(22.0)	8.0	8.0	1.99	鉄	鋲頭釘 頭部は高さをもつ半球形
M38	１号墳石室内	鋲	(21.5)	20.6	(9.9)	2.90	鉄	鋲頭釘 頭部は高さをもつ半球形
M39	１号墳石室内	鋲	(20.05)	10.3	10.1	1.82	鉄	鋲頭釘 頭部は高さをもつ半球形

桑山南古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M40	1号墳石室内	鞍	(70.3)	50.8	(9.9)	27.53	鉄	1点のみ出土 脚部を欠損 輪部は瓢形、刺金なし
M46	1号墳石室内	不明	34.2	7.1	2.7	1.77	鉄	玄室右奥部出土 木質残存 下端が鑿状に尖る
M47	1号墳石室内	不明	(2.9)	4.0	1.65	2.28	鉄	板状の鏃形
M48	1号墳石室内	不明	(20.0)	0.6	0.5	1.47	鉄	屈曲する細い鉄棒
M49	1号墳石室内	不明	(27.5)			1.70	鉄	屈曲する細い鉄棒
M50	1号墳石室内	耳環	28.91	32.23	7.61	26.98	銅地金貼	富山大学長柄毅一教授・くらしき作陽大学澤田秀実教授による蛍光X線分析 アマルガム不使用
M51	1号墳石室内	耳環	28.54	32.41	7.71	27.03	銅地金貼	富山大学長柄毅一教授・くらしき作陽大学澤田秀実教授による蛍光X線分析 アマルガム不使用
M52	1号墳石室内	耳環	25.80	28.02	8.01	15.91	銅地銀貼	2号陶棺下出土 富山大学長柄毅一教授・くらしき作陽大学澤田秀実教授による蛍光X線分析 アマルガム不使用
M53	1号墳石室内	耳環	26.00	28.01	8.18	17.30	銅地銀貼か	富山大学長柄毅一教授・くらしき作陽大学澤田秀実教授による蛍光X線分析 アマルガム不使用
M54	1号墳石室内	耳環	27.21	30.83	7.86	22.55	銅	表面剥落により、金・銀の別不明
M55	1号墳南側流土	釘	41.5	22.1	10.6	7.26	鉄	「L」字状の頭部 全体に折れ曲がっている
M56	1号墳周溝	釘	50.9	8.9	10.8	6.57	鉄	「L」字状の頭部 先端部欠損
M71	2号墳石室内	両頭金具	34.8	9.6	7.0	2.50	鉄	弓飾金具 弓木質残存、直交方向の木目 筒部両端の花弁状突起がわずかに残る。
M72	2号墳石室内	両頭金具	(26.2)	6.6	6.7	1.90	鉄	弓飾金具 弓木質残存、直交方向の木目 やや曲がっている。 筒部両端の花弁状突起は不明瞭（欠損か）
M73	2号墳石室内	両頭金具	(23.0)	8.1	6.5	0.72	鉄	須恵器片枕の直下から出土 弓飾金具 弓木質残存、直交方向の木目 筒部両端に花弁状突起あり
M74	2号墳石室内	両頭金具	34.5	6.2	6.6	1.98	鉄	弓飾金具 筒部両端の花弁状突起は不明瞭（欠損か）
M76	2号墳石室内	鎹	25.3	16.1	5.0	3.46	鉄	破片で石室内各所から出土、接合 内面に柄の木質残存 刀子（M75）に付属と推定
M77	2号墳石室内	鉄鐸	91.0	29.2	33.1	44.80	鉄	舌なし 鉄板の合わせ目を残し、下部は開いている。 頂部を閉じず、径約2.5㎜の孔を残す。
M78	2号墳石室内	鉄鐸	80.2	29.5	26.2	34.41	鉄	舌なし 鉄板の合わせ目を残し、下部は開いている。 頂部の構造は錆のため不明

桑山南古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（g）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M80	３号墳石室内	鍔	47.0	33.1	4.4	10.82	鉄	小型の鍔
M81	３号墳石室内	筒金具	(27.4)	20.1	2.0	3.59	鉄	２号陶棺周辺出土 内面に木質残存
M82	３号墳石室内	責金具	(23.1)	11.0	2.4	1.56	鉄	２号陶棺内出土 外面が膨らむように湾曲
M83	３号墳石室内	責金具	(12.0)	8.5	1.2	0.30	鉄	２号陶棺内出土 外面が膨らむように湾曲 合わせ目あり 図の右側辺に沿って錆の付着しない部分あり
M92	３号墳石室内	鐙	(38.4)	(49.8)	16.0	13.97	鉄	２号陶棺北東隅出土 壺鐙の吊手金具 M 92 ～M 94 は接合しないが同一個体と推定
M93	３号墳石室内	鐙	(65.1)	15.2	2.1	8.78	鉄	２号陶棺北東隅の脚下から出土 壺鐙の吊手金具、先端は剣先形で尖る。 鋲釘あり
M94	３号墳石室内	鐙	(52.8)	14.8	2.0	5.56	鉄	２号陶棺北東隅の脚下から出土 壺鐙の吊手金具、先端は剣先形で尖る。 鋲釘あり
M95	３号墳石室内	鉄鐸	55.2	15.0	14.3	10.22	鉄	舌なし 鉄板の合わせ目を残す。 頂部を閉じず、径約２～３㎜の孔を残す。
M96	３号墳石室内	鉄鐸	46.6	16.7	16.8	13.40	鉄	舌なし 鉄板の合わせ目を残し、下部は開いている。 頂部を閉じず、径約３～４㎜の孔を残す。
M104	３号墳石室内	鎌	(98.6)	23.8	3.0	28.35	鉄	石室内開口部付近出土 鎌状の鉄器だが、基部の折り返しをもたない。
M105	３号墳石室内	釘	(45.8)	12.9	10.7	8.31	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部に横方向の木目
M106	３号墳石室内	釘	(39.5)	12.0	13.3	5.48	鉄	「Ｌ」字状の頭部
M107	３号墳石室内	釘	89.6	12.5	11.8	11.63	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部横、下部縦方向の木目
M108	３号墳石室内	釘	87.0	12.5	11.6	10.47	鉄	１号陶棺北側出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横、下半縦方向の木目
M109	３号墳石室内	釘	89.0	11.2	11.0	7.90	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 全体に横方向の木目
M110	３号墳石室内	釘	(81.6)	(5.5)	(4.9)	6.02	鉄	木質残存 全体に横方向の木目、下部は方向が変わる
M111	３号墳石室内	釘	(84.2)	(7.4)	(5.3)	7.40	鉄	木質残存 全体に横方向の木目
M112	３号墳石室内	釘	(74.5)	5.8	4.2	6.50	鉄	２号陶棺付近出土 木質残存 全体に横方向の木目
M113	３号墳石室内	釘	(80.0)	5.8	5.9	9.21	鉄	石室内開口部付近出土 木質残存 下部に縦方向の木目

桑山南古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M114	３号墳石室内	釘	89.7	6.5	6.3	11.80	鉄	２号陶棺付近出土 「Ｌ」字状の頭部
M115	３号墳石室内	釘	81.8	11.6	12.5	10.36	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 下半に縦方向の木目
M116	３号墳石室内	釘	83.5	9.2	10.3	8.08	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部横、下部縦方向の木目
M117	３号墳石室内	釘	83.0	6.3	5.7	9.06	鉄	２号陶棺南側出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横、下半縦方向の木目
M118	３号墳石室内	釘	80.5	6.6	5.2	7.66	鉄	２号陶棺南側出土 「Ｌ」字状の頭部
M119	３号墳石室内	釘	80.0	9.8	9.6	7.86	鉄	１号陶棺下出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横、下半縦方向の木目
M120	３号墳石室内	釘	(69.6)	5.1	4.3	3.79	鉄	２号陶棺南側出土 木質残存 全体に横方向の木目
M121	３号墳石室内	釘	81.1	11.8	9.8	8.35	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横、下半縦方向の木目
M122	３号墳石室内	釘	79.3	11.4	10.1	7.22	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 下半に横方向の木目
M123	３号墳石室内	釘	(74.2)	10.5	10.4	8.57	鉄	１号陶棺内出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 中ほどに横方向の木目
M124	３号墳石室内	釘	(73.2)	4.9	4.7	6.72	鉄	２号陶棺南側出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横、下半縦方向の木目
M125	３号墳石室内	釘	80.2	6.6	(4.2)	6.88	鉄	木質残存 中～下部に横方向の木目
M126	３号墳石室内	釘	(78.4)	(7.2)	(4.3)	6.92	鉄	木質残存 中～下部に横方向の木目
M127	３号墳石室内	釘	76.0	9.4	10.3	6.51	鉄	石室内外半部、床面付近出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部横、下部縦方向の木目
M128	３号墳石室内	釘	68.4	12.4	10.1	6.96	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部に横方向の木目
M129	３号墳石室内	釘	67.8	11.7	10.3	7.46	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上端と下端に横方向の木目
M130	３号墳石室内	釘	69.3	14.3	11.3	9.44	鉄	「Ｌ」字状の頭部
M131	３号墳石室内	釘	64.8	10.5	10.6	6.34	鉄	「Ｌ」字状の頭部
M132	３号墳石室内	釘	(49.0)	10.0	10.8	5.49	鉄	１号陶棺北側出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横、下半縦方向の木目

桑山南古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M133	３号墳石室内	釘	(24.8)	14.8	14.3	3.40	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部に横方向の木目
M134	３号墳石室内	釘	(69.5)	(5.8)	(4.8)	8.00	鉄	
M135	３号墳石室内	釘	(62.4)	10.9	7.6	7.09	鉄	石室開口部付近、床面出土 錆化著しい
M136	３号墳石室内	耳環	26.5	30.3	5.4	11.47	銅地銀貼	１号陶棺下出土
M137	３号墳石室内	耳環	21.3	25.7	5.0	5.36	銅地銀貼	１号陶棺北側出土
M138	３号墳盛土内	釘	64.6	12.2	10.2	8.92	鉄	３号墳南側盛土下層出土 「Ｌ」字状の頭部 木質残存 全体に横方向の木目
M144	５号墳石室内	鑷	14.1	(16.5)	4.0	1.09	鉄	刀子（M143）に付属か 内面に木質残存、木質の途切れる部分あり、柄の先端を示すか
M148	１号墳盛土内	針状	40.2	2.3	2.2	0.23	鉄	須恵器杯身（148）内から出土

桑山南古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
Ｃ３	１号墳石室内	丸玉	7.5	8.7	1.7	1.7	0.5	土	オリーブ黒 (5Y3/1)	完形
Ｃ４	１号墳石室内	丸玉	5.3	7.4	1.9	1.9	0.2	土	褐灰 (7.5YR4/1)	完形
Ｓ１	１号墳石室内	勾玉	13.6	8.8	2.1	1.5	0.5	滑石	モスグレー (5GY6/1)	完形 １号陶棺下出土
Ｓ２	２号墳石室内	切子玉	32.1	15.6	3.9	1.3	8.7	水晶	透明	完形 一部に敲打痕残を残す。 片面穿孔
Ｓ３	２号墳石室内	切子玉	28.2	15.9	5.5	1.3	8.3	水晶	透明	一部に敲打痕残を残す。 一部欠損 片面穿孔
Ｓ４	２号墳石室内	切子玉	22.9	13.7	4.1	1.4	5.4	水晶	透明	完形 一部に敲打痕残を残す。 片面穿孔
Ｓ５	２号墳石室内	切子玉	21.9	15.8	3.8	1.2	6.0	水晶	透明	完形 片面穿孔
Ｓ６	２号墳石室内	切子玉	18.0	13.2	4.0	1.2	3.6	水晶	透明	完形 一部に敲打痕残を残す。 片面穿孔
Ｓ７	２号墳石室内	切子玉	16.6	13.1	4.0	1.5	3.3	水晶	透明	完形 一部に敲打痕残を残す。 片面穿孔

桑山南古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
S８	２号墳石室内	切子玉	17.2	12.2	3.8	1.5	2.8	水晶	透明（若干白濁）	一部欠損 片面穿孔
S９	２号墳石室内	切子玉	14.5	14.6	3.9	1.6	3.9	水晶	透明（若干白濁）	完形 一部に敲打痕を残す。 片面穿孔
S10	２号墳石室内	切子玉	15.8	13.1	3.7	1.6	3.0	水晶	透明（若干白濁）	一部欠損 片面穿孔
S11	２号墳石室内	切子玉	15.6	12.0	3.8	1.6	2.7	水晶	透明	完形 片面穿孔
S12	２号墳石室内	切子玉	15.6	12.2	3.8	1.0	3.1	水晶	透明	完形 一部に敲打痕を残す。 片面穿孔
S13	２号墳石室内	切子玉	15.8	13.0	3.4	1.2	3.2	水晶	透明	完形 一部に敲打痕を残す。 片面穿孔
S14	２号墳石室内	切子玉	13.4	12.6	4.1	1.4	2.5	水晶	透明	完形 一部に敲打痕を残す。 片面穿孔
S15	２号墳石室内	切子玉	12.4	13.3	3.6	1.6	2.6	水晶	透明	完形 一部に敲打痕を残す。 片面穿孔
S16	２号墳石室内	丸玉	7.9	11.1	3.4	1.2	1.5	水晶	透明	完形 一部に敲打痕を残す。 片面穿孔
G１	３号墳石室内	丸玉	8.1	10.1	2.1	2.0	1.14	ガラス	アイアンブルー(5PB3/4)	完形 １号陶棺北側出土
G２	３号墳石室内	丸玉	8.5	10.6	2.9	2.8	1.22	ガラス	ミッドナイトブルー(5PB1.5/2)	完形
G３	３号墳石室内	丸玉	6.3	10.4	2.9	2.5	0.86	ガラス	ミッドナイトブルー(5PB1.5/2)	完形
G４	３号墳石室内	丸玉	6.6	9.2	1.7	1.6	0.82	ガラス	ブルシャンブルー(5PB3/4)	完形

桑山南古墳群　石器

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（g）	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
S17	１号墳周溝内	石核	68.3	104.0	21.0	145.5	サヌカイト	１号墳南側周溝内出土
S18	１号墳南流土	スクレイパー	49.2	23.5	5.7	7.7	サヌカイト	１号墳南側流土層出土
S19	５号墳流土	磨製石斧	82	43	27	125.83	※安山岩	刃部研磨、一部に刃こぼれあり ※岡山大学鈴木茂之氏による石材同定

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
1	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.4		4.3	灰（N6/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
2	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.1	7.1	3.9	灰（N6/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部ヘラ切り
3	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9		4.6	灰白（N7/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
4	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.7		3.3	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好		天井部回転ヘラケズリ
5	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.6		4.3	灰（N6/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
6	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.6		3.9	灰白（2.5Y8/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		天井部ヘラケズリ 天井部にヘラ記号17とセットか
7	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.3	6.5	4.0	灰（N5/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部ヘラ切り後ナデ
8	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.0		(3.2)	灰（N6/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
9	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	12.2		3.5	灰（N7/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
10	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.6		3.8	灰白（5Y8/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
11	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.5		3.8	灰白（N4/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
12	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.2		3.7	暗灰（N3/） 灰（N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
13	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.9		4.0	灰白（N7/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
14	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.0		4.1	灰（N4/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
15	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.3		4.0	灰白（2.5Y7/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
16	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.4		4.0	灰（N5/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
17	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.1		4.1	灰白（2.5Y8/1）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 底部にヘラ記号６とセットか
18	1号墳石室内	須恵器	杯身	10..8		3.6	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
19	1号墳石室内	須恵器	杯身	11.1		4.3	灰（N5/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	歪みあり 底部ヘラ切り後ナデ、ユビオサエ

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
20	1号墳石室内	須恵器	杯身	9.8		3.3	灰（N6/） 黄灰（2.5Y5/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
21	1号墳石室内	須恵器	杯身	9.5		3.5	灰白（N7/）	1mm以下の砂粒（長石）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
22	1号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	15.8		5.6	灰（N6/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	不良		天井部回転ヘラケズリ
23	1号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.2		5.1	褐灰（7.5YR5/1） 灰（N6/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
24	1号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.6		（4.6）	黄灰（2.5Y5/1） 浅黄（2.5Y7/3）	2mm以下の砂粒（長石）	良好		天井部回転ヘラケズリ
25	1号墳石室内	須恵器	高杯		11.3	（10.6）	灰（N6/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 2段3方向透かし
26	1号墳石室内	須恵器	瓶	11.3		13.4	灰（N7/）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好	完形	内外面ヨコナデ 胴部下半回転ヘラケズリ 穿孔部周縁に欠け
27	1号墳石室内	須恵器	平瓶	5.4	8.0	16.5	灰白（N7/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	内外面ヨコナデ 底部周辺外面回転ヘラケズリ
28	1号墳石室内	須恵器	蓋	9.7		4.9	灰（N6/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	内外面ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ 天井部にヘラ記号 29とセットか
29	1号墳石室内	須恵器	短頸壺	7.6	5.2	4.6	灰（N5/1） 浅黄（2.5Y7/3）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 28とセットか
30	1号墳石室内	須恵器	提瓶	（6.7）		（19.0）	灰白（N8/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	外面にカキメ
31	1号墳石室内	須恵器	提瓶			（16.9）	灰（N6/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面にカキメ 環状の把手
32	1号墳石室内	土師器	杯	11.8	7.3	5.4	橙（5YR7/6）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		内外面ナデ、ユビオサエ 口縁部に黒斑あり
33	1号墳石室内	土師器	杯	11.4	6.5	4.7	橙（7.5YR7/6）	8mm以下の石粒・砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		内外面ナデ、ユビオサエ
34	1号墳石室内	土師器	杯	11.4	7.6	4.2	橙（5YR6/6）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好	完形	内外面ナデ、ユビオサエ
35	1号墳石室内	土師器	杯	10.9	6.4	5.1	橙（5YR7/6）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ナデ、ユビオサエ
36	1号墳石室内	土師器	高杯	14.3		（3.8）	橙（7.5YR7/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面に赤色顔料
37	1号墳石室内	土師器	高杯		10.2	（5.5）	明赤褐（2.5YR5/8） にぶい橙（7.5YR7/4）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		内外面に赤色顔料
38	1号墳石室内	土師器	甕	10.6		（5.7）	橙（2.5YR6/6）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面風化 口縁部内面に赤色顔料 胴部内面ヘラケズリ

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
39	1号墳石室内	土師器	杯	12.3	7.6	3.7	にぶい橙（7.5YR7/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		内外面ヨコナデ 底部ヘラオコシ 内外面に赤色顔料
40	1号墳石室内	黒色土器	皿	13.7	6.9	2.7	外：明黄褐（10YR7/6） 内：黒褐（2.5Y3/1）	1mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		内外面ヨコナデ 内面底部ヘラミガキ 貼付高台
41	1号墳石室内	土師器	甕	13.2		11.0	にぶい赤褐（5YR5/3） 浅黄橙（10YR8/4）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	外面タテハケ 内面斜め～ヨコハケ 外面に煤付着
42	1号墳流土	須恵器	杯蓋	14.8		(4.2)	黄灰（2.5Y4/1） 灰（N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
43	1号墳流土	須恵器	杯蓋	13.6		4.5	にぶい黄橙（10YR7/4） 灰（N7/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
44	1号墳流土	須恵器	杯蓋	10.8		4.3	赤灰（5R5/1） 灰白（N7/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
45	1号墳流土	須恵器	杯蓋	11.0		3.7	暗紫灰（5RP4/1） 灰（N6/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
46	1号墳流土	須恵器	台付壺			(7.5)	灰黄（2.5Y7/2）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		内外面ヨコナデ 肩部に刺突文帯
47	1号墳流土	須恵器	台付壺			(6.9)	褐灰（7.5YR4/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		櫛状工具による連続刺突文帯2段 下半外面ヘラケズリ後ナデ
48	1号墳流土	土師器	杯	13.4	6.1	3.3	灰白（2.5Y8/2）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 底部外面ヘラ切り後ナデ
49	1号墳流土	陶器	甕			(7.0)	にぶい橙（7.5YR6/4） 明赤褐（5YR5/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		備前焼 外面に線刻文
50	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8		4.7	灰白（2.5Y7/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
51	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8		4.1	灰黄褐（10YR6/2） 灰（N5/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
52	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.1		4.7	灰白（2.5Y8/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		天井部ヘラ切り後ナデ
53	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.1		(4.0)	灰（N6/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好		天井部ヘラ切り後ナデ
54	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	12.8		(3.9)	灰（N6/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
55	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.6		3.8	灰（5Y6/1） 黄灰（2.5Y5/1）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
56	2号墳石室内	須恵器	杯身	12.6		4.0	灰（N4/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
57	2号墳石室内	須恵器	杯身	12.1		4.3	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
58	２号墳石室内	須恵器	杯身	12.5		3.6	灰（N6/）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
59	２号墳石室内	須恵器	杯身	11.8		3.5	灰（N6/）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
60	２号墳石室内	須恵器	杯身	(11.5)		(2.5)	灰白（5Y7/1）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良		
61	２号墳石室内	須恵器	杯身	11.5		3.5	灰（N5/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
62	２号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.4		(4.3)	灰（N5/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		つまみを欠損 天井部回転ヘラケズリ
63	２号墳石室内	須恵器	短頸壺	7.0		8.5	灰白（N7/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 底部外面回転ヘラケズリ
64	２号墳石室内	須恵器	平瓶	6.3	6.2	15.8	灰（N5/）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		口縁部内外面ヨコナデ 外面胴部上半カキメ、下半回転ヘラケズリ
65	２号墳流土	須恵器	蓋	13.4		(4.9)	灰（N6/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
66	２号墳流土	須恵器	横瓶			(14.3)	灰（7.5Y6/1）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に平行タタキ 内面に当て具痕
67	２号墳流土	須恵器	横瓶	10.3		(27.5)	灰白（2.5Y7/1）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に平行タタキ後カキメ 内面に当て具痕の後一部ナデ
68	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	15.0		4.5	灰（N4/） 褐灰（5YR4/1）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ
69	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	(14.6)		(4.8)	黄褐（2.5Y5/3）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良		天井部回転ヘラケズリ
70	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.7		3.5	灰（10Y6/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 80 とセットか
71	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.0		4.6	灰（N6/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
72	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9		4.4	灰褐（5YR4/2） にぶい赤褐（2.5YR5/4）	6mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ 84 とセットか
73	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.0		(4.6)	灰（N6/）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ 87 とセットか
74	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.7		4.5	灰（N6/）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）多	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
75	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.4		4.3	灰（N6/）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 89 とセットか
76	３号墳石室内	須恵器	杯蓋	(12.8)		(2.8)	灰（N6/）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
77	3号墳石室内	須恵器	杯蓋	11.6		3.5	灰（N5/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ 底部内面螺旋状の当て具痕
78	3号墳石室内	須恵器	杯身	13.6		4.6	橙（5YR6/8）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ
79	3号墳石室内	須恵器	杯身	13.4		3.9	灰（10Y5/1） 灰褐（7.5YR4/2）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
80	3号墳石室内	須恵器	杯身	13.1		4.2	オリーブ灰 （2.5GY6/1）	3.5mm以下の砂粒 （長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ 70とセットか
81	3号墳石室内	須恵器	杯身	13.0		（4.1）	灰（7.5Y6/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ
82	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.0		3.9	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒 （長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
83	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.8		3.9	浅黄（2.5Y7/3）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良	完形	底部回転ヘラケズリ
84	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.8		3.8	褐灰（7.5YR4/1） にぶい赤褐（5YR4/3）	7mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ後ナデ 72とセットか
85	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.8		4.3	灰（N5/）	4.5mm以下の砂粒 （長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ後ナデ
86	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.7		3.2	灰白（N7/）	3.5mm以下の砂粒 （長石）	良好		底部回転ヘラケズリ
87	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.5		4.1	灰白（N7/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 73とセットか
88	3号墳石室内	須恵器	杯身	12.1		3.9	灰（7.5Y6/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 底部内面に当て具痕
89	3号墳石室内	須恵器	杯身	11.9		4.2	灰（N5/・N4/）	3.5mm以下の砂粒 （長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ 75とセットか
90	3号墳石室内	須恵器	杯身	11.9		3.3	灰（N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
91	3号墳石室内	須恵器	杯身	10.8		3.4	暗青灰（5B4/1） 灰白（N7/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
92	3号墳石室内	須恵器	杯身	10.5		3.7	灰（N6/）	1.5mm以下の砂粒 （長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ後ナデ
93	3号墳石室内	須恵器	杯身	9.3		3.3	灰白（N7/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ 底部内面にヘラ記号
94	3号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	16.9		6.4	灰白（2.5Y8/1）	4.5mm以下の砂粒 （長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部内面に当て具痕
95	3号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.7		5.8	灰白（2.5Y7/1）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
96	３号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.7		5.0	灰（N5/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ、カキメ
97	３号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.5		5.1	灰白（7.5Y8/1）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ
98	３号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.6		5.1	灰白（5Y8/1）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部内面に当て具痕
99	３号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	12.6	14.4	20.0	灰白（N7/）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯部底面回転ヘラケズリ ２段３方透かし 脚部上半にカキメ
100	３号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	13.6		(4.7)	灰（N5/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯底部回転ヘラケズリ
101	３号墳石室内	須恵器	高杯	11.1	10.6	14.8	灰白（N7/）	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	杯部下半に沈線２条 ２段２方透かし 脚部にヘラ記号
102	３号墳石室内	須恵器	高杯		9.8	(11.7)	灰（N4/）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ ２段３方透かし
103	３号墳石室内	須恵器	高杯		13.8	(1.2)	黄灰（2.5Y6/1）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 透かしあり、数は不明
104	３号墳石室内	須恵器	高杯	10.7	8.1	7.8	灰黄（2.5Y7/2） 灰（7.5Y5/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		内外面ヨコナデ
105	３号墳石室内	須恵器	脚付壺		14.6	(8.0)	灰赤（10R5/2）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ ３方透かし
106	３号墳石室内	須恵器	椀	8.5	5.9	5.2	灰（N4/）	3.5mm 以下の砂粒（長石）	良好		内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 体部中央にヘラ記号
107	３号墳石室内	須恵器	甕	14.2		(3.9)	暗灰（N3/）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 外面に櫛状工具による刺突文
108	３号墳石室内	須恵器	甕	9.5		11.5	灰（N6/）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ
109	３号墳石室内	須恵器	甕	8.9		10.9	灰（N6/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ
110	３号墳石室内	須恵器	台	9.8		(2.0)	灰（7.5Y6/1）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
111	３号墳石室内	須恵器	壺	12.6		16.7	灰白（N7/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	外面カキメ、平行タタキ、回転ヘラケズリ 内面同心円当て具痕、ナデ
112	３号墳石室内	須恵器	直口壺	9.2		15.2	灰（N6/） 暗赤灰（5R4/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		口縁部に歪みあり 内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ
113	３号墳石室内	須恵器	蓋	9.4		3.8	灰（10Y6/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部にヘラ記号 114 とセットか
114	３号墳石室内	須恵器	短頸壺	7.4	7.7	9.5	灰（N6/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 113 とセットか

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
115	３号墳石室内	須恵器	提瓶	6.6		16.9	灰（N6/）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	環状の把手 外面ヘラケズリ、ナデ
116	３号墳石室内	須恵器	提瓶	6.0		21.5	灰（N6/）	２mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	外面にカキメ やや鉤形の把手
117	３号墳石室内	須恵器	提瓶	5.9		19.1	灰（N6/）	6mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		碁石状の把手 外面にカキメ
118	３号墳石室内	須恵器	平瓶	6.6	4.2	15.0	灰（N6/）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 体部上面にヘラ記号
119	３号墳石室内	須恵器	瓶類	7.9		(6.6)	黒（N2/）	5.0mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 外面中ほどに２条の凹線
120	３号墳石室内	須恵器	瓶類	10.7		(8.6)	灰（5Y4/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面カキメ 口縁部ヨコナデ
121	３号墳石室内	須恵器	特殊扁壺				灰（N5/）	7mm 以下の砂粒（長石・石）	良好		外面にカキメ後刺突文 口縁を「８」字形 胴部中央に円孔
122	３号墳石室内	須恵器	甕			(7.8)	灰（7.5Y4/1） 灰白（2.5Y7/1）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 外面上にヘラ描斜線文、下に櫛状工具による刺突文
123	３号墳石室内	須恵器	甕			(10.1)	灰（5Y5/1） にぶい黄橙（10YR7/2）	6mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に平行タタキ、ナデ 内面に同心円文当て具痕、ナデ
124	３号墳石室内	須恵器	甕			(13.8)	にぶい黄橙（10YR7/2）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好		外面格子目タタキ 内面同心円当て具痕
125	３号墳石室内	土師器	高杯	11.9	9.8	7.9	橙（7.5YR6/6）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に赤色顔料
126	３号墳石室内	土師器	高杯	(9.9)	8.9	7.1	にぶい橙（7.5YR7/4）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面・杯部内面に赤色顔料
127	３号墳石室内	土師器	高杯	9.5	9.8	7.0	橙（7.5YR7/6）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	外面・杯部内面に赤色顔料
128	３号墳石室内	土師器	椀	(10.4)		4.5	橙（7.5YR6/6）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	ほぼ完形	外面風化 内面ナデ
129	３号墳石室内	土師器	壺	9.3		12.7	橙（5YR7/8）	4mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面ハケメ、ナデ 内面ヘラケズリ、ナデ、ユビオサエ
130	３号墳石室内	土師器	甕	10.9		13.1	橙（5YR6/6）	5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面ハケメ、ナデ 内面ヘラケズリ、ナデ、ユビオサエ 黒斑あり
131	３号墳石室内	不明	不明			(2.8)	橙（7.5YR7/6）	5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面ユビオサエ、ナデ 内面ユビオサエ
132	３号墳周溝内	須恵器	杯身	10.0		3.8	灰（7.5Y6/1） 灰黄（2.5Y7/2）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部ヘラ切り後ナデ
133	３号墳周溝内	須恵器	杯身	9.6		3.5	灰（5Y6/1） 灰白（5Y7/1）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
134	3号墳流土	須恵器	高杯	11.2	11.2	17.4～18.2	灰白（5Y7/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯部底面ヘラケズリ 杯部外面にヘラ状工具による連続刺突文 2段3方向透かし
135	3号墳流土	須恵器	有蓋高杯	13.4	10.1	7.5	灰白（7.5Y7/1）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ 杯部底面ヘラケズリ後ナデ
136	3号墳流土	須恵器	甕	13.4		(4.2)	灰白（5Y7/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		口縁部内外面ヨコナデ外面平行タタキ 内面同心円当て具痕
137	3号墳流土	須恵器	甕	(25.0)		(45.0)	灰（N6/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に平行タタキ 内面に当て具痕
138	3号墳周溝内	土師器	椀	10.6		4.9	橙（2.5YR6/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面ナデ、下半ヘラケズリ 内面ナデ、ユビオサエ
139	3号墳流土	土師器	椀	8.6	5.6	4.5	浅黄橙（10YR8/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		風化により器面調整不明
140	3号墳周溝内	埴輪	円筒	25.6		(28.5)	橙（7.5YR6/6） 黄橙（7.5YR7/8）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ
141	3号墳周溝内	埴輪	円筒	25.1		(17.5)	にぶい黄橙（10YR8/4）	4.5mm以下の石粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ、ナデ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
142	3号墳周溝内	埴輪	円筒	24.0		(16.5)	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ、口縁部のみヨコハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
143	3号墳石室内撹乱土	埴輪	円筒	(22.4)		(9.6)	橙（7.5YR7/6） にぶい黄橙（10YR6/3）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 口縁部ヨコナデ 内面ナデ、ユビオサエ
144	3号墳周溝内	埴輪	円筒		16.6	(22.2)	浅黄橙（10YR8/4） にぶい橙（7.5YR7/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面風化 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
145	3号墳石室内撹乱土	埴輪	円筒	27.6		(9.7)	にぶい橙（7.5YR6/4）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 口縁部ヨコナデ 内面ナデ、ユビオサエ
146	3号墳石室内撹乱土	埴輪	円筒			(9.7)	浅黄橙（7.5YR8/6）	6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 内面ナデ 接地面に植物繊維圧痕
147	3号墳周溝内	埴輪	朝顔形	41.0		(16.5)	にぶい橙（7.5YR7/4）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ、口縁部のみヨコハケ 内面ナデ、ユビオサエ
148	3号墳石室内撹乱土	埴輪	朝顔形			(3.6)	にぶい橙（7.5YR7/4）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ 口縁部外面に波状線刻
149	3号墳石室内撹乱土	埴輪	朝顔形			(3.1)	浅黄橙（7.5YR8/4）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ナデ 口縁部外面に波状線刻
150	箱式石棺墓1	須恵器	有蓋高杯	13.4		(4.7)	灰白（N7/） 灰（N4/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯部底面回転ヘラケズリ 3方向の透かし 脚部折り取り
151	箱式石棺墓1	須恵器	有蓋高杯	13.4		(5.1)	灰白（N7/） 灰（N4/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		杯部底部回転ヘラケズリ 3方向の透かし 脚部折り取り
152	1号墳盛土内	須恵器	杯蓋	15.2		4.8	灰白（7.5Y7/1） 灰白（N7/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部回転ヘラケズリ 天井部にヘラ記号 底部内面に当て具痕 153とセットか

細畝古墳群　土器・埴輪

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径（脚径）	器高					
153	1号墳盛土内	須恵器	杯身	13.3		5.4	灰（N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ 底部内面に当て具痕 外面底部にヘラ記号 152とセットか
154	1号墳盛土内	須恵器	杯蓋	15.1		5.3	灰白（5Y7/1） 灰（N7/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部にヘラ記号
155	1号墳盛土内	須恵器	甕			（8.5）	黒（2.5Y2/1） 灰白（2.5Y8/2）	2mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面平行タタキ、底部ナデ 内面同心円当て具痕
156	1号墳盛土内	土師器	甕	（11.1）		（3.3）	橙（7.5YR7/6）	1mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面ヨコナデ 内面ユビオサエ後ナデ 外面に赤色顔料
157	1号墳盛土内	土師器	甕			（6.5）	灰白（10YR8/2）	5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・角閃石・雲母）	良好		外面胴部ハケメ 外面頸部ヨコナデ 内面ユビオサエ、ナデ
158	1号墳盛土内	埴輪	円筒	23.8		（10.7）	橙（5YR6/6） にぶい褐（7.5YR6/3）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 口縁部ヨコナデ 内面ナデ
159	1号墳盛土内	埴輪	円筒	（27.0）		（12.6）	橙（5YR7/6） 灰黄褐（10YR6/2）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 口縁部ヨコナデ 内面ナデ、ユビオサエ

細畝古墳群　鉄刀・刀子

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
M18	1号墳石室内	刀子	（46.1）	（46.1）	（14.27）		5.90	鉄	箱式石棺内北小口付近出土
M19	1号墳石室内	刀子	（38.6）	（13.3）	16.2	（25.3）	5.02	鉄	箱式石棺内北小口付近出土 柄の木質残存 刀身にも一部木質が付着
M20	1号墳石室内	刀子	（48.3）	（48.3）	（10.6）		2.80	鉄	石室内右奥部出土
M21	1号墳石室内	刀子	（57.6）	（26.6）	10.2	（31.0）	6.06	鉄	石室内右奥部攪乱層出土 柄の木質残存 図裏面は刀身部にも木質が付着
M30	2号墳石室内	刀子	（121.7）	（58.7）	8.7	63.0	13.61	鉄	陶棺下から出土 同一個体と思われる2片 計測値（全長・刃部長・重量）は合計値 柄の木質残存
M51	3号墳石室内	大刀	（220.0）	（220.0）	（33.1）		86.65	鉄	銹膨れ激しく層状に剥落、保存状態不良 刀身厚さなど不明
M77	3号墳石室内	刀子	（96.7）	（48.0）	18.5	48.7	16.8	鉄	柄の木質残存
M78	3号墳石室内	刀子	（59.4）	（59.4）	11.5		7.38	鉄	
M79	3号墳石室内	刀子	（64.6）			（64.6）	6.67	鉄	柄の木質残存
M80	3号墳石室内	刀子	（93.9）	（93.9）	（17.0）		14.01	鉄	石室内右側攪乱層出土 保存状態悪く、全体に剥離が進んでいる。

細畝古墳群　鉄刀・刀子

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
M81	３号墳石室内	刀子	(24.9)	(24.9)	(12.6)		2.38	鉄	玄室攪乱層出土 刀身破片
M82	３号墳石室内	刀子	(27.6)			(27.6)	1.71	鉄	茎破片 柄木質残存

細畝古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M１	１号墳石室内	鏃	(158.5)			(111.4)	47.1	31.92	細根・柳葉	鏃身切刃造 茎関に棘状突起あり 茎糸巻残存
M２	１号墳石室内	鏃	(54.3)	(30.0)	9.2	(24.3)		6.11	細根・柳葉	
M３	１号墳石室内	鏃	(40.4)			(40.4)		3.33	細根	頸部破片
M４	１号墳石室内	鏃	(26.8)				(26.8)	1.45	不明	頸部または茎破片
M５	１号墳石室内	鏃	121.2	48.8	28.7	25.7	46.7	22.24	平根・柳葉	矢柄木質・茎糸巻残存
M６	１号墳石室内	鏃	(106.5)	(83.6)	28.2	(30.0)	(10.0)	26.43	平根・腸抉柳葉	保存状態不良、全体的に層状に剥離
M７	１号墳石室内	鏃	(111.8)	(65.7)	(33.5)	17.4	(28.7)	31.92	平根・三角形	
M８	１号墳石室内	鏃	(90.4)	39.0	29.6	28.0	(23.5)	12.40	平根・三角形	石室内外半部出土 茎関に棘状突起あり
M９	１号墳石室内	茎	(47.3)			(17.3)	(30.0)	2.94	不明	茎関に棘状突起あり
M10	１号墳石室内	鏃	(39.5)	(39.5)	32.3			9.45	平根	
M11	１号墳石室内	鏃	(56.9)	(56.9)	28.2			17.40	平根	石室内左奥部床面付近出土
M12	１号墳石室内	鏃	(36.1)	(21.2)	18.7	(14.9)		4.05	細根・柳葉か	箱式石棺内出土 錆化著しく、鏃身外形不明瞭
M13	１号墳石室内	茎	(61.7)					9.08	不明	箱式石棺上層出土 茎破片 矢柄木質・茎糸巻残存
M14	１号墳石室内	鏃	(38.1)				(38.1)	2.67	不明	茎破片 矢柄木質残存
M15	１号墳石室内	鏃	(47.3)			(14.8)	(32.5)	3.94	不明	石室内左奥部床面付近出土 茎関に棘状突起あり

細畝古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M16	1号墳石室内	鏃	(15.3)				(15.3)	0.34	不明	茎破片
M17	1号墳石室内	鏃	(16.3)				(16.3)	0.61	不明	頸部または茎破片
M26	2号墳石室内	鏃	(86.8)	66.3	25.7	18.0	(3.8)	20.48	平根・三角形	
M27	2号墳石室内	鏃	(37.6)	(37.6)	22			4.74	平根	接合しないが、M28と同一個体の可能性あり
M28	2号墳石室内	鏃	(61.9)	(21.7)	26.6	22.4	(19.3)	8.15	平根・三角形	接合しないが、M27と同一個体の可能性あり
M53	3号墳石室内	鏃	(40.8)			(40.8)		3.91	不明	玄室奥部攪乱層出土 頸部破片
M54	3号墳石室内	鏃	(47.2)			(31.0)	(16.2)	6.96	不明	玄室攪乱層出土 矢柄木質残存
M55	3号墳石室内	鏃	(49.7)				(49.7)	4.13	不明	玄室攪乱層出土 茎破片 矢柄木質残存
M56	3号墳石室内	鏃	(23.9)				(23.9)	1.60	不明	玄室奥部攪乱層出土 茎破片
M57	3号墳石室内	鏃	(95.8)	(15.3)	12.9	74.1	(7.3)	13.74	細根・柳葉	玄室奥部攪乱層出土 茎関に棘状突起あり
M58	3号墳石室内	鏃	(38.6)	(35.6)	13.5	(3.2)		3.32	細根・柳葉	
M59	3号墳石室内	鏃	(35.9)	(5.8)		(30.1)		3.10	細根・柳葉	玄室内出土
M60	3号墳石室内	鏃	(50.6)	(32.2)	12.8	(18.4)		5.11	細根・柳葉	玄室攪乱層出土
M61	3号墳石室内	鏃	(29.6)			(29.6)		2.72	不明	玄室奥部攪乱層出土 頸部破片 錆化著しい
M62	3号墳石室内	鏃	(30.2)	(30.2)	(22.9)			3.81	平根	
M62	3号墳石室内	鏃	(79.4)	(52.3)	(22.9)	28.9	(24.7)	16.76	平根・腸抉柳葉	茎関に棘状突起あり 矢柄口巻・木質残存 錆膨れにより層状に剥離、保存状態不良
M63	3号墳石室内	鏃		(46.5)	(24.6)		(21.1)	12.06	平根・腸抉柳葉	茎関に棘状突起あり 矢柄木質残存 錆膨れにより層状に剥離、保存状態不良
M64	3号墳石室内	鏃	(108.2)	60.2	34.0	23.0	(25.0)	26.37	平根・方頭	茎関に棘状突起あり
M65	3号墳石室内	鏃	(119.4)	(77.6)	24.7		40.2	15.55	平根・方頭	茎関に棘状突起あり 錆膨れにより層状に剥離、保存状態不良

細畝古墳群　鉄鏃

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）					重量（g）	分類	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長			
M66	３号墳石室内	鏃	(77.5)	70.5	(26.0)	7.0		27.61	平根・方頭	茎関に棘状突起あり 錆膨れにより層状に剥離、保存状態不良

細畝古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M22	１号墳石室内	座金具	18.0	(17.9)	1.5	1.34	銅	古墳に伴わない後世のものか
M23	１号墳石室内	耳環	26.0	28.5	6.1	12.05	銅地	表面の剥離が目立ち、表面の材質不明 M 24 と対か
M24	１号墳石室内	耳環	24.4	25.3	5.2	5.84	銅地	表面の剥離が目立ち、表面の材質不明 M 23 と対か
M25	１号墳石室内	耳環	25.3	26.8	7.9	17.03	銅地金貼	断面楕円形
M29	２号墳石室内	鑷子状	(48.6)	10.3	2.3	7.12	鉄	図の上 石室内奥部、陶棺下から出土 布目付着
			(44.6)	10.4	2.1	3.00	鉄	図の左下 石室内奥部、陶棺下から出土 布目付着
			(30.3)	11.6	2.5	2.26	鉄	図の右下 布目付着
M31	２号墳石室内	釘	(69.5)	8.8	8.0	13.88	鉄	全体に錆びぶくれ
M32	２号墳石室内	釘	64.7	5.2	4.0	4.16	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 下部に縦方向の木目
M33	２号墳石室内	釘	65.2	6.1	6.5	6.37	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上半横・下半縦方向の木目
M34	２号墳石室内	釘	(58.5)	5.6	4.6	4.67	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 全体に横方向の木目
M35	２号墳石室内	釘	(55.8)	7.2	6.7	4.25	鉄	陶棺下から出土 木質残存 上半に横方向の木目
M36	２号墳石室内	釘	60.2	6.0	5.2	5.54	鉄	「Ｌ」字状の頭部
M37	２号墳石室内	釘	56.2	4.3	3.6	3.36	鉄	石室内奥壁付近攪乱層出土 「Ｌ」字状の頭部
M38	２号墳石室内	釘	50.5	5.5	5.4	3.81	鉄	「Ｌ」字状の頭部 木質残存 上部・下部に横方向の木目
M39	２号墳石室内	釘	(62.2)	5.0	4.6	4.55	鉄	木質残存 上半横・下半縦方向の木目

細畝古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M40	２号墳石室内	釘	(51.4)	4.6	4.9	4.16	鉄	木質残存 上部に横方向の木目
M41	２号墳石室内	釘	(60.2)	5.9	6.4	4.2.0	鉄	陶棺下から出土
M42	２号墳石室内	釘	(59.0)	5.1	4.9	3.51	鉄	木質残存 下部に横方向（やや斜め）の木目
M43	２号墳石室内	釘	(46.9)	5.4	4.5	3.34	鉄	
M44	２号墳石室内	釘	(27.0)	(6.6)	(7.5)	2.20	鉄	銹膨れ激しい
M45	２号墳石室内	釘	(43.6)	4.5	4.4	2.29	鉄	木質残存 下部に縦方向の木目
M46	２号墳石室内	釘	(40.5)	(5.4)	(5.0)	2.28	鉄	屈曲している。
M47	２号墳石室内	釘	(26.0)	(5.2)	(4.8)	1.22	鉄	
M48	２号墳石室内	釘	(34.9)	5.9	4.6	2.94	鉄	「Ｌ」字状の頭部
M49	２号墳石室内	釘	(19.8)	4.5	4.2	0.79	鉄	
M50	２号墳石室内	釘	(0.8)	15.0		1.04	鉄	「Ｌ」字状の頭部のみ残存
M52	３号墳石室内	鍔	(40.0)	(30.0)	4.0	12.21	鉄	わずかな破片で全形不明
M67	３号墳石室内	鉸具	59.0	36.5	12.5	13.67	鉄	M 68 と対 輪部は隅丸長方形で中心部がくびれる形態 刺金は基部を輪に巻き付ける。
M68	３号墳石室内	鉸具	(50.0)	36.0	(5.0)	6.24	鉄	玄室内攪乱層出土 M 67 と対 輪部の約半分と刺金を欠失
M69	３号墳石室内	轡	鏡板・左 101.0	79.0	7.0	348.49	鉄	瓢形環状鏡板付轡 鏡板・銜・引手の連結に遊環を用いる。 遊環は楕円形で断面は扁平な方形 引手先端は「く」の字に曲げず直線的 右側の鏡板・引手を一部欠損 詳細な計測は困難であり、計測値は概数 重量は、銹着したM 71・M 76 を含む数値
			鏡板・右 100.0	81.5	7.0			
			引手・左 139.0	23.0	9.0			
			引手・右 (44.0)	(22.0)	8.0			
			銜・左 81.0	22.5	7.0			
			銜・右 81.0	21.5	7.5			

細畝古墳群　その他金属製品

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M70	３号墳石室内	留金具	50.5	38.5	3.0	17.65	鉄	平面菱形 ４鋲、鋲頭はやや扁平 最大厚は鋲を除く数値
M71	３号墳石室内	留金具	51.0	(40.5)	2.5	－	鉄	轡（Ｍ69）に錆着して出土 平面菱形 ４鋲、鋲頭はやや扁平 最大厚は鋲を除く数値
M72	３号墳石室内	留金具	31.5	29.0	2.0	12.89	鉄	平面正方形 ４鋲、鋲頭はやや扁平 最大厚は鋲を除く数値
M73	３号墳石室内	留金具	25.0	16.0	2.2	6.84	鉄	平面長方形 ２鋲、鋲頭はやや扁平 最大厚は鋲を除く数値
M74	３号墳石室内	留金具	(23.0)	13.0	2.0	3.76	鉄	平面爪形 ２鋲、鋲頭はやや扁平 最大厚は鋲を除く数値
M75	３号墳石室内	留金具	23.5	14.5	3.8	4.29	鉄	平面台形だが、平面形はやや不明瞭 １鋲、鋲頭はやや扁平 最大厚は鋲を除く数値
M76	３号墳石室内	Ｕ字形金具	(16.0)	15.0	6.0	－	鉄	轡（Ｍ69）に錆着して出土 扁平な方形断面のＵ字形金具 機能不明
M83	３号墳石室内	鏃	21.5	18.0	29.4	3.32	鉄	内面に柄木質残存 いずれかの刀子に付属するものと推定
M84	３号墳石室内	耳環	30.8	32.7	7.1	23.47	銅地銀貼	
M85	３号墳石室内	耳環	25.4	25.8	4.4	5.74	銅地銀貼	Ｍ86と対か
M86	３号墳石室内	耳環	24.8	26.7	5.0	8.25	銅地銀貼	Ｍ85と対か
M87	３号墳石室内	耳環	25.9	26.8	4.9	11.46	銅地銀貼	Ｍ89と対か
M88	３号墳石室内	耳環	25.5	28.3	5.5	7.72	銅地銀貼	
M89	３号墳石室内	耳環	26.3	27.2	5.1	8.86	銅地銀貼	Ｍ87と対か

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
Ｓ１	１号墳石室内	勾玉	33.5	19.0	3.5	1.6	6.62	瑪瑙	萱草色 (7.5YR7.5/10)	最大厚8.0㎜ 片面穿孔 表裏面に研磨痕 完形
Ｓ２	１号墳石室内	管玉	23.5	8.3	3.6	1.8	2.62	碧玉	灰緑 (1.5G5/3)	片面穿孔 完形
Ｓ３	１号墳石室内	管玉	12.1	5.4	2.1	1.4	0.6	碧玉	鉄色 (2.5BG2.5/2.5)	片面穿孔 完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
S４	１号墳石室内	切子玉	26.5	15.0	4.3	1.5	6.75	水晶	透明	片面穿孔 完形
S５	１号墳石室内	切子玉	25.5	13.5	4.0	1.3	5.12	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S６	１号墳石室内	切子玉	24.8	12.8	3.4	1.5	4.69	水晶	透明	片面穿孔 完形
S７	１号墳石室内	切子玉	24.3	12.9	3.1	1.2	4.74	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S８	１号墳石室内	切子玉	24.2	13.8	3.5	1.5	5.11	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S９	１号墳石室内	切子玉	21.9	12.7	3.5	1.6	3.78	水晶	透明 （若干白濁）	石室内右奥攪乱層出土 片面穿孔 完形
S10	１号墳石室内	切子玉	21.3	11.9	3.1	1.3	3.43	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S11	１号墳石室内	切子玉	20.4	12.3	3.5	1.5	3.69	水晶	透明 （白濁）	片面穿孔 完形
S12	１号墳石室内	切子玉	18.3	10.9	3.1	1.5	2.66	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S13	１号墳石室内	切子玉	19.7	11.4	3.2	1.4	3.01	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S14	１号墳石室内	切子玉	16.7	13.7	3.7	1.4	3.89	水晶	透明	片面穿孔 完形
S15	１号墳石室内	切子玉	16.4	11.7	3.6	1.5	2.81	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S16	１号墳石室内	切子玉	15.4	12.6	3.6	1.4	2.93	水晶	透明	片面穿孔 完形
S17	１号墳石室内	切子玉	13.8	11.7	2.9	1.1	2.26	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S18	１号墳石室内	切子玉	13.3	12.3	3.3	1.5	2.56	水晶	透明	片面穿孔 完形
S19	１号墳石室内	切子玉	12.2	12.9	3.3	0.8	2.39	水晶	透明 （若干白濁）	片面穿孔 完形
S20	１号墳石室内	切子玉	12.6	10.4	3.4	2.0	1.57	水晶	透明	片面穿孔 完形
S21	１号墳石室内	丸玉	12.6	14.0	3.8	1.5	3.2	瑪瑙	マリーゴールド (8YR7.5/13)	片面穿孔 完形
S22	１号墳石室内	丸玉	10.8	12.3	2.7	2.5	2.19	蛇紋岩様	ミッドナイトブルー（5PB1.5/2） パープルグレー (N7)	完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
S23	1号墳石室内	丸玉	10.6	11.8	2.7	2.6	2.07	蛇紋岩様	黒（N2/）	完形
S24	1号墳石室内	丸玉	8.1	11.6	3.0	2.8	1.47	蛇紋岩様 ※断層岩	褐灰（10YR6/1）	完形 ※岡山大学鈴木茂之氏による石材同定
S25	1号墳石室内	丸玉	8.5	11.0	2.8	2.7	1.37	蛇紋岩様	黒（N1.5/）	完形
S26	1号墳石室内	丸玉	7.9	10.8	2.7	2.6	1.32	蛇紋岩様	黒（N1.5/）	完形
S27	1号墳石室内	丸玉	7.6	10.8	2.9	2.9	1.06	蛇紋岩様 ※方解石	にぶい橙（5YR6/3）	完形 ※岡山大学鈴木茂之氏による石材同定
C2	1号墳石室内	丸玉	6.2	8.9	2.6	2.5	0.49	土	赤墨（5R2/1）	完形
G1	1号墳石室内	小玉	6.0	8.8	5.1	4.8	0.57	鉛ガラス	エメラルドグリーン（4G6/8）	風化により表面の凹凸が激しい
G2	1号墳石室内	小玉	6.0	9.3	1.6	1.6	0.65	ガラス	ネービーブルー（6PB2.5/4）	完形 表面に気泡の破裂による小さな孔あり
G3	1号墳石室内	小玉	7.0	10.1	1.8	1.65	0.81	ガラス	アイアンブルー（5PB3/4）	完形 石室閉塞施設外側で出土
G4	1号墳石室内	小玉	5.5	8.7	2.8	2.7	0.65	ガラス	ネービーブルー（6PB2.5/4）	完形 石室右奥の攪乱層出土
G5	1号墳石室内	小玉	6.9	9.5	1.8	1.8	0.92	ガラス	ミッドナイトブル（5PB1.5/2）	完形
G6	1号墳石室内	小玉	5.3	8.8	1.7	1.6	0.57	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G7	1号墳石室内	小玉	6.8	8.7	2.5	2.3	0.66	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形 石室右奥の攪乱層出土
G8	1号墳石室内	小玉	4.0	8.2	2.0	2.0	0.38	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G9	1号墳石室内	小玉	7.0	7.7	1.9	1.8	0.62	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形 表面に気泡の破裂による小さな孔あり
G10	1号墳石室内	小玉	5.7	8.7	1.6	1.55	0.62	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形 石室内左奥の床面付近出土
G11	1号墳石室内	小玉	3.9	8.1	2.1	1.8	0.32	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G12	1号墳石室内	小玉	6.3	7.7	1.4	1.3	0.55	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G13	1号墳石室内	小玉	5.4	8.4	1.6	1.5	0.47	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	一部欠損

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G14	1号墳石室内	小玉	9.9	8.0	1.6	1.6	0.89	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G15	1号墳石室内	小玉	5.4	7.6	2.1	1.9	0.39	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G16	1号墳石室内	小玉	3.5	7.5	1.8	1.7	0.29	ガラス	サファイアブルー（7PB2.5/12）	完形 面取り跡風の平坦面あり
G17	1号墳石室内	小玉	5.8	8.3	1.5	1.4	0.58	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形 石室右奥の攪乱層出土
G18	1号墳石室内	小玉	5.2	7.4	1.6	1.5	0.42	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G19	1号墳石室内	小玉	6.7	7.8	1.4	1.4	0.52	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G20	1号墳石室内	小玉	6.4	7.7	2.0	2.0	0.56	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	鋳型内に十分な原料が入っていないことにより器表面に凹凸
G21	1号墳石室内	小玉	5.7	7.2	2.4	2.1	0.39	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G22	1号墳石室内	小玉	3.4	6.8	2.4	2.1	0.23	ガラス	サファイアブルー（7PB2.5/12）	完形
G23	1号墳石室内	小玉	5.6	7.1	1.8	1.5	0.37	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G24	1号墳石室内	小玉	5.2	7.7	1.3	1.2	0.43	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G25	1号墳石室内	小玉	3.4	7.1	1.6	1.6	0.25	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形 表面に気泡の破裂による小さな孔あり
G26	1号墳石室内	小玉	4.9	7.0	1.3	1.2	0.36	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G27	1号墳石室内	小玉	5.7	6.4	1.3	1.2	0.38	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G28	1号墳石室内	小玉	6.0	6.7	1.9	1.8	0.37	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形 石室右奥の攪乱層出土
G29	1号墳石室内	小玉	4.4	6.3	2.0	1.9	0.22	ガラス	レモンイエロー（8Y8/12）	完形
G30	1号墳石室内	小玉	5.6	6.3	2.0	2.0	0.36	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G31	1号墳石室内	小玉	4.7	6.7	1.9	1.8	0.25	ガラス	サファイアブルー（7PB2.5/12）	完形 石室右奥の攪乱層出土
G32	1号墳石室内	小玉	6.7	6.7	1.8	1.7	0.34	ガラス	ブルシャンブルー（5PB3/4）	完形 やや角柱状を呈す。

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G33	1号墳石室内	小玉	5.4	6.1	1.8	1.8	0.27	ガラス	アイアンブルー(5PB3/4)	完形 石室奥部の床面付近出土
G34	1号墳石室内	小玉	5.1	6.5	2.0	1.5	0.31	ガラス	プルシャンブルー(5PB3/4)	完形
G35	1号墳石室内	小玉	4.4	6.8	1.7	1.4	0.27	ガラス	レモンイエロー(8Y8/12)	完形 孔の形が不整形
G36	1号墳石室内	小玉	3.9	6.1	2.1	1.9	0.19	ガラス	ターコイズブルー(5B6/8)	完形
G37	1号墳石室内	小玉	3.7	6.3	2.2	2.2	0.2	ガラス	プルシャンブルー(5PB3/4)	完形 表面に気泡の破裂による小さな孔あり
G38	1号墳石室内	小玉	5.1	5.4	2.1	1.8	0.18	ガラス	スマルト(5PB3.5/6)	完形 石室右奥部出土 表面に気泡の破裂による小さな孔あり
G39	1号墳石室内	小玉	4.4	5.5	2.1	1.5	0.17	ガラス	プルシャンブルー(5PB3/4)	完形 表面に気泡の破裂による小さな孔あり
G40	1号墳石室内	小玉	3.7	5.6	1.9	1.7	0.17	ガラス	プルシャンブルー(5PB3/4)	完形
G41	1号墳石室内	小玉	4.6	5.4	1.3	1.2	0.18	ガラス	アクアマリン(7B4.5/6)	完形
G42	1号墳石室内	小玉	4.2	5.7	2.4	2.1	0.15	ガラス	セルリアンブルー(9B4.5/9)	完形
G43	1号墳石室内	小玉	5.5	4.9	2.0	1.7	0.21	ガラス	サファイアブルー(7PB2.5/12)	完形 やや角柱状を呈す。
G44	1号墳石室内	小玉	2.6	4.9	1.6	1.5	0.08	ガラス	サファイアブルー(7PB2.5/12)	完形
G45	1号墳石室内	小玉	3.3	4.7	1.0	1.0	0.1	ガラス	ターコイズブルー(5B6/8)	完形
G46	1号墳石室内	小玉	2.5	4.3	1.1	1.1	0.07	ガラス	プルシャンブルー(5PB3/4)	完形
G47	1号墳石室内	小玉	2.4	4.3	1.1	1.0	0.05	ガラス	マリンブルー(5B3/7)	完形
G48	1号墳石室内	小玉	3.5	4.0	1.5	1.4	0.08	ガラス	ナイルブルー(10BG5.5/5)	完形
G49	1号墳石室内	小玉	2.2	3.6	1.3	1.2	0.05	ガラス	ナイルブルー(10BG5.5/5)	完形
G50	1号墳石室内	小玉	2.4	4.0	1.5	1.3	0.06	ガラス	ナイルブルー(10BG5.5/5)	完形
G51	1号墳石室内	小玉	2.9	3.9	1.1	1.1	0.07	ガラス	ナイルブルー(10BG5.5/5)	完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G52	1号墳石室内	小玉	2.4	3.7	1.3	1.3	0.06	ガラス	ナイルブルー (10BG5.5/5)	完形
G53	1号墳石室内	小玉	1.8	3.2	0.8	0.7	0.03	ガラス	ピーコックブルー (10BG4/8.5)	完形
S28	2号墳石室内	勾玉	33.3	22.2	3.8	1.7	9.99	碧玉	スプルース (3G2.5/2.5)	完形 最大厚 10.6㎜
G54	2号墳石室内	小玉	(4.6)	(9.2)	4.4	4.4	0.51	鉛ガラス	エメラルドグリーン (4G6/8)	風化により表面の凹凸が激しい
G55	2号墳石室内	小玉	7.0	8.7	1.6	1.4	0.72	ガラス	ネービーブルー (6PB2.5/4)	完形
G56	2号墳石室内	小玉	6.0	7.6	1.9	1.6	0.46	ガラス	プルシャンブルー (5PB3/4)	完形
G57	2号墳石室内	小玉	4.6	7.2	2.4	2.1	0.33	ガラス	プルシャンブルー (5PB3/4)	完形
G58	2号墳石室内	小玉	6.3	6.3	1.6	1.4	0.37	ガラス	プルシャンブルー (5PB3/4)	完形
S29	3号墳石室内	管玉	26.3	9.2	3.5	1.1	4.14	碧玉	鉄色 (2.5BG2.5/2.5)	完形 片面穿孔
S30	3号墳石室内	管玉	23.9	10.3	3.9	1.5	4.45	碧玉	革色 (5G3.5/2)	完形 片面穿孔
S31	3号墳石室内	管玉	21.4	8.8	3.7	1.2	2.77	碧玉	灰緑 (1.5G5/3)	完形 片面穿孔 若干面取り痕状の研磨面が残る。
S32	3号墳石室内	管玉	18.6	8.0	2.9	1.0	2.07	碧玉	鉄色 (2.5BG2.5/2.5)	完形 片面穿孔
S33	3号墳石室内	管玉	17.6	7.4	1.9	1.2	1.79	碧玉	鉄色 (2.5BG2.5/2.5)	完形 片面穿孔
S34	3号墳石室内	切子玉	20.1	14.0	3.3	1.5	4.68	水晶	透明（若干白濁）	一部欠損 片面穿孔
S35	3号墳石室内	切子玉	19.4	15.1	3.6	1.2	5.32	水晶	透明	完形 片面穿孔
S36	3号墳石室内	切子玉	15.1	13.3	3.4	1.4	3.51	水晶	透明	完形 片面穿孔
S37	3号墳石室内	丸玉	7.9	6.4	2.6	1.4	0.55	水晶	透明	完形 片面穿孔
C5	3号墳石室内	丸玉	6.3	8.6	2.3	2.1	0.44	土	憲法色 (10YR3/1)	完形
C6	3号墳石室内	丸玉	7.2	8.9	2.3	2.2	0.58	土	黒茶 (2.5YR2/1.5)	完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G59	3号墳石室内	小玉	4.8	6.9	1.7	1.5	0.34	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G60	3号墳石室内	小玉	3.7	5.7	1.7	1.4	0.14	ガラス	アクアマリン（7B4.5/6）	完形
G61	3号墳石室内	小玉	4.4	5.5	1.6	1.5	0.15	ガラス	サックスブルー（1PB5/4.5）	完形
G62	3号墳石室内	小玉	2.5	4.2	1.3	1.2	0.05	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形
G63	3号墳石室内	小玉	2.9	3.9	1.0	0.9	0.06	ガラス	アクアマリン（7B4.5/6）	完形
G64	3号墳石室内	小玉	2.5	4.7	1.2	1.2	0.07	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G65	3号墳石室内	小玉	2.7	4.3	0.9	0.9	0.06	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G66	3号墳石室内	小玉	3.3	4.3	0.8	0.8	0.08	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G67	3号墳石室内	小玉	2.1	4.1	1.4	1.3	0.04	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形
G68	3号墳石室内	小玉	2.3	3.6	1.1	1.1	0.05	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G69	3号墳石室内	小玉	2.2	3.3	0.9	0.9	0.04	ガラス	アクアマリン（7B4.5/6）	完形
G70	3号墳石室内	小玉	2.0	3.7	1.1	1.1	0.04	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G71	3号墳石室内	小玉	3.5	3.6	0.9	0.8	0.06	ガラス	ハンターグリーン（2G3/6）	完形
G72	3号墳石室内	小玉	2.9	3.6	1.0	1.0	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形 玄室礫床下から出土
G73	3号墳石室内	小玉	2.2	3.2	0.8	0.7	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G74	3号墳石室内	小玉	3.0	3.8	0.8	0.8	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G75	3号墳石室内	小玉	3.3	4.0	1.1	1.0	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G76	3号墳石室内	小玉	2.7	3.5	0.8	0.8	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G77	3号墳石室内	小玉	3.2	3.5	1.0	0.9	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G78	3号墳石室内	小玉	2.5	3.4	0.8	0.8	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G79	3号墳石室内	小玉	2.2	3.4	0.7	0.7	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G80	3号墳石室内	小玉	2.9	3.7	1.0	1.0	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G81	3号墳石室内	小玉	2.6	3.4	1.2	1.0	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G82	3号墳石室内	小玉	3.0	3.2	0.9	0.8	0.04	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G83	3号墳石室内	小玉	2.3	3.5	1.0	1.0	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G84	3号墳石室内	小玉	2.7	3.6	1.0	0.9	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形 玄室礫床下から出土
G85	3号墳石室内	小玉	2.9	3.6	1.1	1.0	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形 玄室礫床下から出土
G86	3号墳石室内	小玉	4.0	3.3	1.0	1.0	0.05	ガラス	ナイルブルー(10BG5.5/5)	完形
G87	3号墳石室内	小玉	3.0	3.7	0.8	0.8	0.05	ガラス	ナイルブルー(10BG5.5/5)	完形
G88	3号墳石室内	小玉	3.3	3.3	0.9	0.9	0.05	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G89	3号墳石室内	小玉	2.1	3.8	1.0	1.0	0.03	ガラス	ビリジアン(8G4/6)	完形
G90	3号墳石室内	小玉	2.6	3.6	0.9	0.8	0.04	ガラス	ビリジアン(8G4/6)	完形
G91	3号墳石室内	小玉	2.0	3.7	1.0	0.9	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G92	3号墳石室内	小玉	2.0	3.5	1.3	1.2	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G93	3号墳石室内	小玉	2.5	3.1	0.8	0.8	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G94	3号墳石室内	小玉	2.4	3.5	1.1	1.0	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G95	3号墳石室内	小玉	2.2	3.5	1.1	1.0	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形
G96	3号墳石室内	小玉	1.9	3.6	1.2	1.1	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン(10G2.5/5)	完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G97	3号墳石室内	小玉	1.9	3.6	1.3	1.2	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G98	3号墳石室内	小玉	1.9	3.3	1.1	1.0	0.03	ガラス	ピーコックグリーン（7.5BG4.5/9）	完形
G99	3号墳石室内	小玉	2.4	3.1	0.9	0.9	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G100	3号墳石室内	小玉	1.9	3.2	1.0	0.9	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G101	3号墳石室内	小玉	2.2	3.4	0.9	0.8	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G102	3号墳石室内	小玉	2.0	3.5	1.0	0.9	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G103	3号墳石室内	小玉	2.1	3.3	1.0	1.0	0.03	ガラス	ジェードグリーン（10G5.5/5）	完形
G104	3号墳石室内	小玉	2.1	3.0	1.0	0.9	0.02	ガラス	ジェードグリーン（10G5.5/5）	完形
G105	3号墳石室内	小玉	1.3	3.5	1.1	1.1	0.02	ガラス	フォレストグリーン（7.5G4.5/5）	完形
G106	3号墳石室内	小玉	2.1	3.2	0.9	0.8	0.02	ガラス	ビリジアン（8G4/6）	完形
G107	3号墳石室内	小玉	2.1	3.3	1.0	0.9	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G108	3号墳石室内	小玉	1.9	3.2	0.9	0.9	0.03	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形
G109	3号墳石室内	小玉	2.1	3.3	1.0	0.9	0.03	ガラス	アクアマリン（7B4.5/6）	完形
G110	3号墳石室内	小玉	2.2	3.1	1.1	1.0	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G111	3号墳石室内	小玉	2.5	3.2	0.9	0.8	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G112	3号墳石室内	小玉	2.8	3.0	0.9	0.9	0.03	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G113	3号墳石室内	小玉	2.3	3.0	0.8	0.8	0.03	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形
G114	3号墳石室内	小玉	2.4	3.2	0.8	0.8	0.03	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形
G115	3号墳石室内	小玉	2.3	2.9	0.8	0.8	0.03	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形

細畝古墳群　玉類

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G116	３号墳石室内	小玉	2.0	2.8	0.7	0.7	0.02	ガラス	フォレストグリーン（7.5G4.5/5）	完形
G117	３号墳石室内	小玉	2.2	3.0	0.9	0.8	0.02	ガラス	ビリヤードグリーン（10G2.5/5）	完形
G118	３号墳石室内	小玉	2.0	2.5	0.6	0.6	0.01	ガラス	ジェードグリーン（10G5.5/5）	完形
G119	３号墳石室内	小玉	2.0	2.8	0.8	0.7	0.02	ガラス	マホガニー（5R3/4）	完形
G120	３号墳石室内	小玉	1.5	2.8	0.8	0.8	0.02	ガラス	マホガニー（5R3/4）	完形
G121	３号墳石室内	小玉	1.3	2.7	0.8	0.7	0.01	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G122	３号墳石室内	小玉	2.0	2.6	0.6	0.5	0.01	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形

細畝古墳群　土製品

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				高さ	幅	厚さ					
Ｃ３	１号墳石室内攪乱土	土製品	土鈴	(3.2)	(4.3)	(2.2)	橙（5YR7/6）	1㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	欠損	内外面ナデ、ユビオサエ 穿孔部径３～４㎜ 黒斑あり

細畝古墳群　石器

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（g）	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
S38	３号墳流土	スクレイパー	33	63	7.2	11.89	サヌカイト	背側に原礫面を残す。

桑山南・細畝古墳群　陶棺

古墳名	番号	全長	最大幅	最大高	身																	
					長さ		最大幅		厚さ		色調		内外面調整	高さ		突帯幅			突帯高さ			
					図右	図左	図右	図左	側面	底面	図右	図左		図右	図左	縦	横	切断部	縦	横	切断部
桑山南1号墳	C1	223.8	77.0	97.2	111.8	115.0	72.0	72.0	2.5～3.0	3.0～4.0	橙 (10YR6/6～6/8)	橙～黄橙 (7.5YR7/6～7/8)	ナデ	52.5～57.5	56.4	2.0～2.5	2.0～2.5	蓋受け部 5.0～7.0	0.8～1.5	0.8～1.5	蓋受け部 4.0～5.0
	C2	189.8	67.5	95.8	89.0	104.7	66.0	67.0	2.0～2.5	2.0～2.5	橙～浅黄橙 (7.5YR7/6～8/6)	橙 (5YR7/6～6/6)	ナデ	71.0	71.0	3.5～5.0	3.5～4.5	3.0～3.5	0.3～0.5	0.3～0.5	0.5～1.0
桑山南3号墳	C5	—	—	—	105.0		65.0		3.0～4.0	2.5～3.0	黄橙～明黄褐 (10YR8/6～7/6)		ナデ	—	71.2	6.0～7.3	5.0～6.0	3.5～5.5	0.5～0.8	0.5～0.8	0.8～1.3
	C6	(204.9)	63.2	102.5	(102.3)	106.0	(61.5)	63.6	3.5～4.3	3.3～4.0	黄橙～明黄褐 (10YR8/6～7/6)	明黄褐～浅黄橙 (10YR7/6～8/4)	ナデ	(44.0)	68.5	6.0～7.0	7.0～8.5	3.5～4.0	0.5～0.8	0.5～1.0	0.8～1.0
細畝1号墳	C1	—	—	—	85.8		61.0		3.0～3.8	4.5～5.0	—	橙～浅黄橙 (7.5YR7/6～8/6)	ナデ	—	56.0	5.0～6.0	5.0～7.3	蓋受け部 4.0～5.0	0.8～1.0	0.8～1.0	蓋受け部 4.0～5.0
細畝2号墳	C4	—	—	—	(50.0)	(45.0)	—	—	3.0～3.5	—	橙 (7.5YR6/6)		ナデ	(20.5)	(37.3)	6.0	—	3.5～5.0	0.7	—	1.0～1.5

古墳名	番号	蓋																		
		長さ		幅		高さ		厚さ		色調		突起			内外面調整	突帯幅			突帯高さ		
		図右	図左	図右	図左	図右	図左	側面	天井部	図右	図左	形状	径	高さ		縦	横・中軸	切断部	縦	横・中軸	切断部
桑山南1号墳	C1	112.2	(109.5)	77.0	(68.5)	51.3	47.0	2.5～2.7	2.0～3.0	橙～明黄褐 (7.5YR6/8～10YR7/6)	黄橙 (7.5YR7/8～8/8)	鈎	6.5～8.3（基部）	8.0～8.5	ナデ	2.0	2.0	—	0.7～1.5	0.7～1.5	—
	C2	84.5	94.0	55.8	57.2	30.0	27.0	2.3～2.5	2.3～2.8	橙～浅黄橙 (7.5YR7/6～8/6)	橙 (5YR6/6～7/6)	円柱	6.0～6.5	6.0～6.5	ナデ	3.5～4.5	3.5～4.5	3.0～3.5	0.3～0.5	0.3～0.5	0.5～1.0
桑山南3号墳	C5	(90.3)	(23.6)	—	—	(41.0)	(24.5)	3.0～3.2	—	橙 (7.5YR6/6)	黄橙～明黄褐 (10YR8/6～7/6)	円柱	8.0	8.0	ナデ	5.0～6.5	—	4.0	0.8	0.8	1.5
	C6	99.8	103.0	51.5	52.5	33.4	34.4	3.8	5.0～8.8	にぶい黄橙～黄橙 (10YR7/4～8/6)	明黄褐～黄橙 (10YR7/6～8/6)	円柱	6.0～7.0	6.0～7.0	ナデ	5.5～7.0	6.0～6.5	3.5～4.0	0.5～0.8	0.5～0.8	1.0～1.5
細畝1号墳	C1	(81.0)		—	—	(27.0)		2.0～3.5	—	橙 (7.5YR6/6～7/6)		円柱	4.5	4.5	ナデ	4.5～6.5	4.5～5.5	—	0.7～1.3	0.7～1.3	—
細畝2号墳	C4	—	(45.5)	—	—	—	13.8	3.0～3.3	—	—	橙 (7.5YR6/6)	円柱	6.2	6.2	ナデ	5.5～6.0	—	3.5～4.0	0.5	—	1.0～1.5

古墳名	番号	脚						備　考
		成形技法	下端径	高さ	厚さ	調整		
						内面	外面	
桑山南1号墳	C1	巻上げ	13.5～15.0	13.0～19.0	1.0～2.0	ナデ	タテハケ→ナデ	蓋身別造りの土師質亀甲形。身に蓋受けを有し、埴輪の突帯に似た突帯を巡らす。蓋の小口面に２個一対の穿孔があり、キノコ形の陶栓で塞いでいたか。
	C2	巻上げか	14.8～18.0	15.0～18.0	1.0～2.0	ナデ	タテハケ	蓋身一体造りの土師質亀甲形。ほぼ完形に復元。奥壁側・羨道側とも、２行目中央の脚が省略されている。身の切断時に側面と底面でクランクを設ける。身の底部周辺に用途不明の小穴多数。
桑山南3号墳	C5	巻上げ	13.8～15.0	20.5～22.0	1.8～2.2	ナデ	タテハケ	蓋身一体造りの土師質亀甲形。蓋の一部と奥壁側の身を復元。身の底部に用途不明の小穴あり。
	C6	輪積みか巻上げ	17.4～18.2	13.2～15.0	2.0～2.5	ナデ	タテハケ	蓋身一体造りの土師質亀甲形。奥壁側の底部から脚部以外を復元。身の下半部に色調の違う粘土帯あり。脚部接地面に草本の圧痕。
細畝1号墳	C1	巻上げ	10.0～12.0	10.5～12.0	1.0～2.0	ナデ	タテハケ→ナデ	蓋身別造りの土師質亀甲形。奥壁側の身と蓋の一部を復元。身に蓋受けを有し、突帯には「く」字状の文様を巡らす。
細畝2号墳	C4	輪積みか巻上げ	(18.0～19.0)	(14.0)	1.8	ナデ	タテハケ	蓋身一体造りの土師質亀甲形。身・蓋とも一部を復元。身の縦突帯の一部は上端まで達しない。胎土中に炭化物が混入（第５章第２節分析）。

単位は全て cm

１　調査地遠景（南から）

２　桑山南古墳群（手前）と細畝古墳群（奥）（北東から）

１　桑山南１号墳調査前（北西から）

２　桑山南１号墳全景（上が北西）

１　桑山南１号墳全景（北東から）

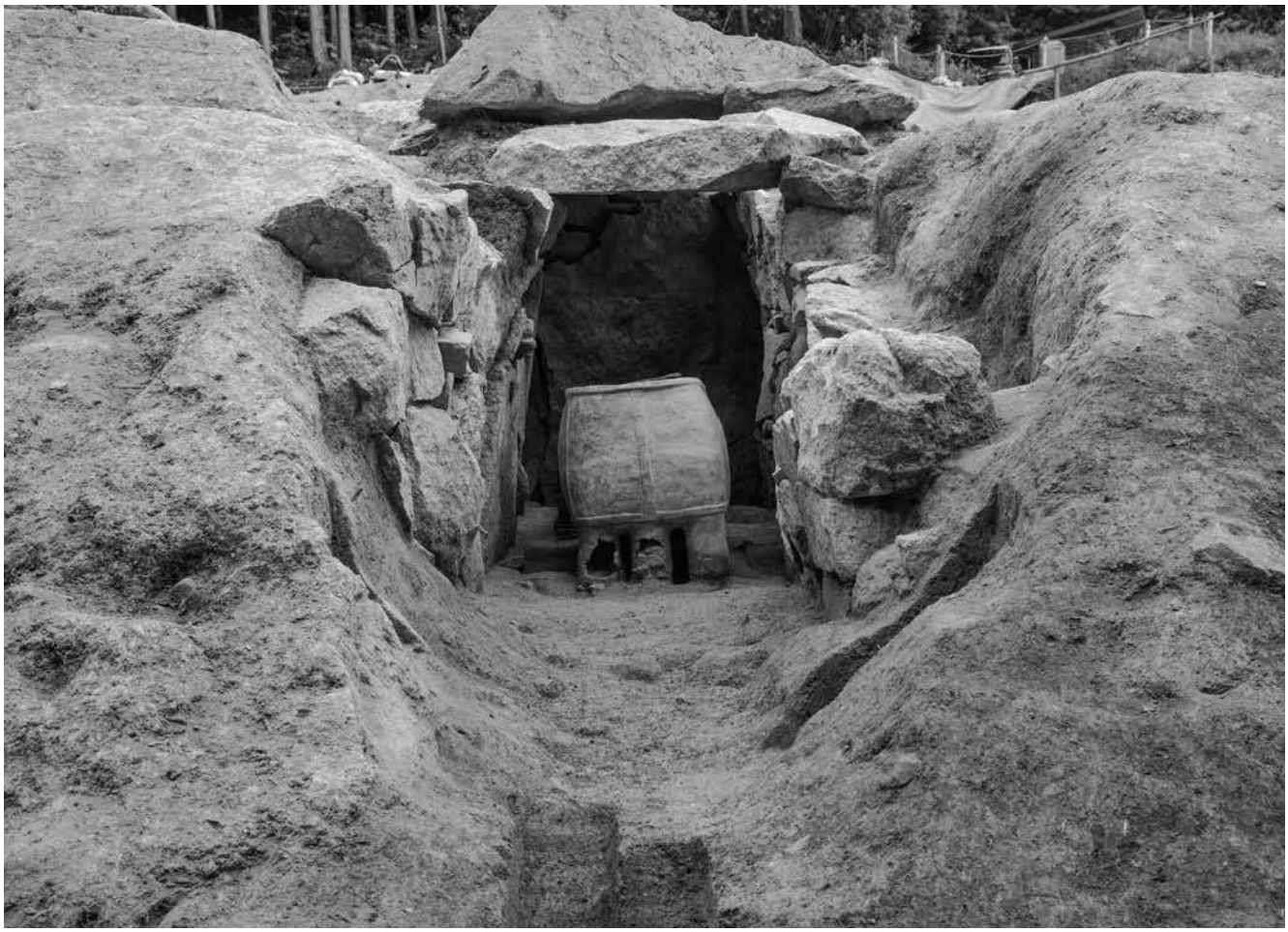
２　桑山南１号墳全景（北西から）

１　桑山南１号墳
調査前石室天井石
（南東から）

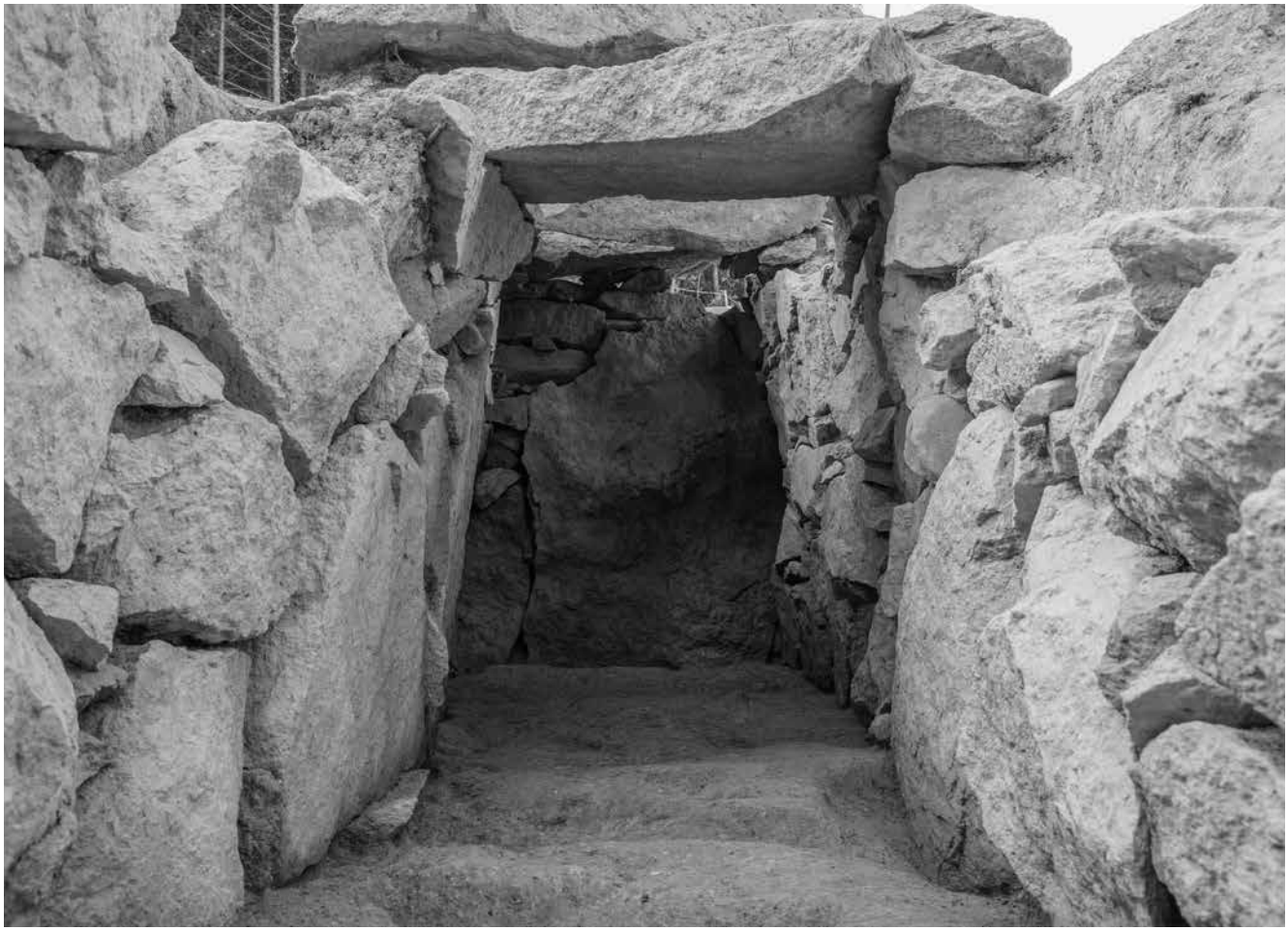
２　桑山南１号墳
墳丘調査風景
（南東から）

３　桑山南１号墳
墳丘下層の土坑１
（南から）

１　桑山南１号墳墳丘断面（南東から）



２　桑山南１号墳石室開口部と墓道（南東から）



１　桑山南１号墳石室（南東から）

２　桑山南１号墳石室右側壁（北西から）

３　桑山南１号墳石室左側壁（北から）

４　桑山南１号墳石室掘り方（開口部、東から）

５　桑山南１号墳石室裏込め部の陶棺片（東から）

１　桑山南１号墳
石室閉塞施設
（南東から）

２　桑山南１号墳
石室閉塞施設下部
（南東から）

３　桑山南１号墳
石室閉塞施設
（北東から）

１　桑山南１号墳
　　１号陶棺蓋出土状況
　　（北西から）

２　桑山南１号墳
　　１号陶棺身出土状況
　　（南東から）

１　桑山南１号墳１号陶棺・周辺遺物出土状況（北東から）

２　桑山南１号墳２号陶棺出土状況（東から）

1　桑山南１号墳
　１号陶棺周辺遺物
　出土状況（南東から）

2　桑山南１号墳
　玄室西隅部土器
　出土状況（東から）

3　桑山南１号墳
　玄室北隅部土器
　出土状況（南東から）

1　桑山南１号墳
玄室中央部須恵器（22・24）出土状況（南西から）

2　桑山南１号墳
１号陶棺付近耳環（Ｍ 51）出土状況（南から）

3　桑山南１号墳
２号陶棺内象嵌装大刀（Ｍ１・Ｍ２）出土状況（南東から）

1　桑山南１号墳
石室羨道部遺物出土状況（南東から）

2　桑山南１号墳
石室閉塞部須恵器提瓶（41）出土状況（北西から）

3　桑山南１号墳
石室閉塞部須恵器鈴付高杯（27）出土状況（南から）

1　桑山南２号墳調査前（南東から、奥は桑山南４号墳）

2　桑山南２号墳全景（南から）

1　桑山南２号墳全景（東から）

2　桑山南１号墳（奥）・２号墳（手前）全景（北西から）

1　桑山南２号墳
石室上部集石
（南東から）

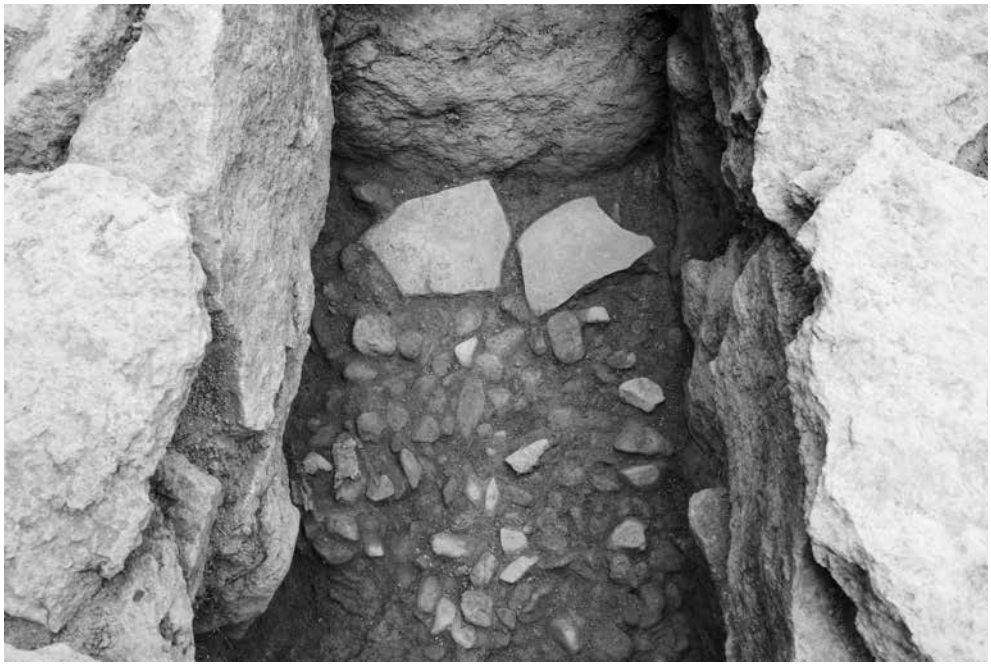
2　桑山南２号墳
石室天井石
（南東から）

3　桑山南２号墳
石室天井石（北から）

1　桑山南２号墳石室（南東から）

2　桑山南２号墳石室北東端部遺物出土状況（南西から）

1　桑山南２号墳
石室北東端部遺物出
土状況（南西から）



2　桑山南２号墳
石室北東端部須恵器
片転用枕（88）ほか
出土状況（南西から）

3　桑山南２号墳
石室北東端部枕下の
遺物出土状況
（西から）

1　桑山南２号墳
石室北西側壁
（南東から）

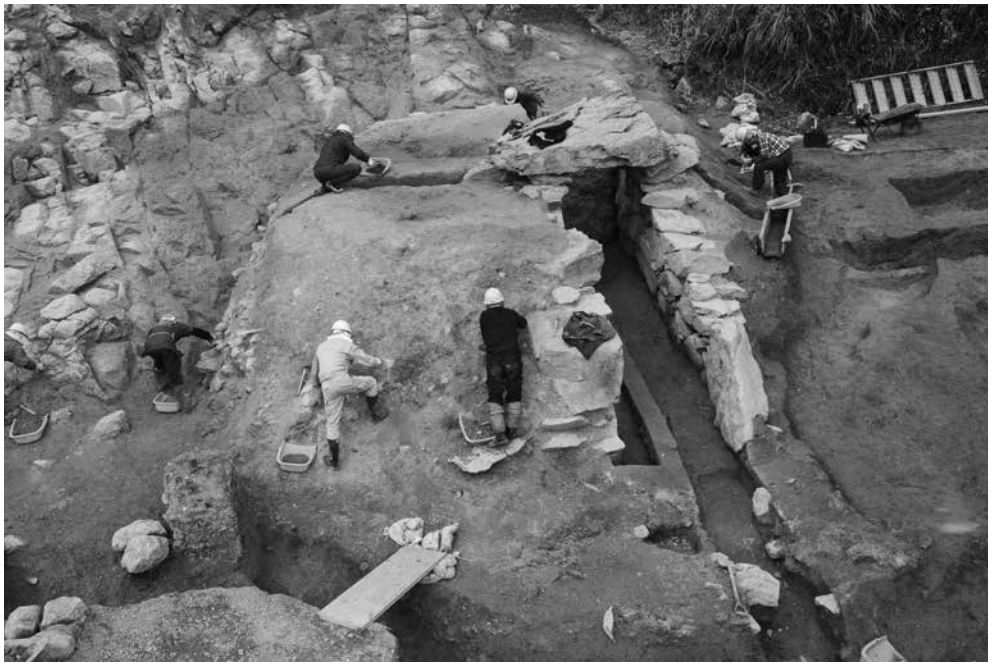
2　桑山南２号墳
石室南東側壁
（北西から）

3　桑山南２号墳
石室掘り方
（南西から）

1　桑山南３号墳調査前（東から）

2　桑山南３号墳全景（東から）

1　桑山南３号墳
全景（北東から、奥は桑山南５号墳）



2　桑山南３号墳
墳丘作業風景
（南東から）

3　桑山南３号墳
盛土中須恵器高杯
（122）出土状況
（北から）

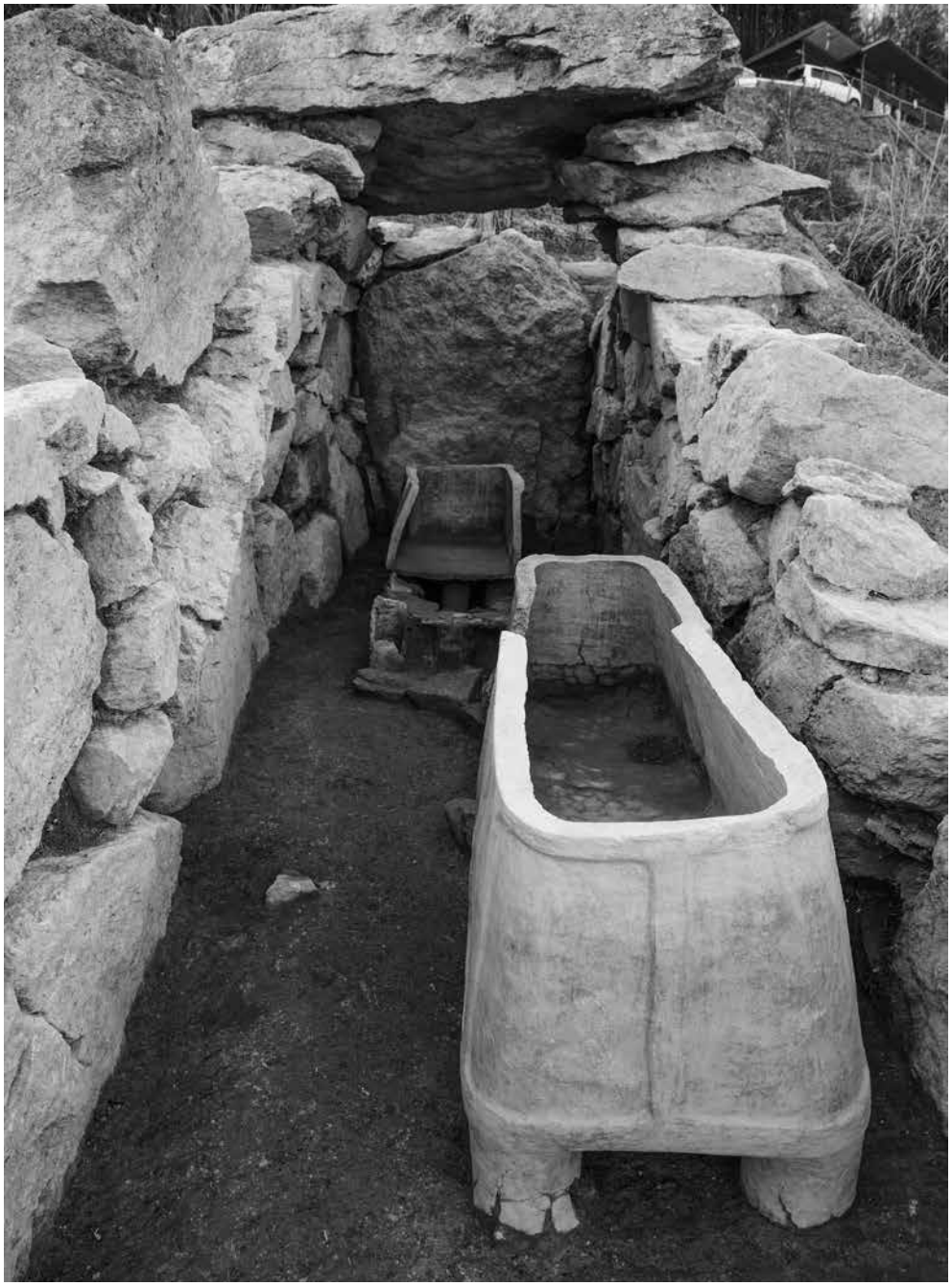
1　桑山南３号墳石室（東から）

2　桑山南３号墳石室右側壁（南西から）

3　桑山南３号墳石室左側壁（北西から）

4　桑山南３号墳石室（西から）

5　桑山南３号墳石室奥壁部仕切石（東から）



1　桑山南３号墳
陶棺出土状況
（東から）

2　桑山南３号墳
１号陶棺出土状況
（西から）

1　桑山南３号墳
１号陶棺出土状況
（東から）

2　桑山南３号墳
２号陶棺出土状況
（東から）

3　桑山南３号墳
２号陶棺出土状況
（南から）

1　桑山南３号墳
２号陶棺身出土状況
（南から）

2　桑山南３号墳
陶棺棺台石（東から）

3　桑山南３号墳
２号陶棺内遺物出土
状況（東から）

1　桑山南３号墳
２号陶棺南側遺物出土状況（東から）

2　桑山南３号墳
石室開口部遺物出土状況（南東から）

3　桑山南３号墳
２号陶棺下須恵器子持器台（108・109）出土状況（南西から）

1　桑山南４号墳墳端付近（南東から）

2　桑山南５号墳発見時の状況（南東から）

1　桑山南５号墳全景（南東から、右奥は桑山南３号墳）

2　桑山南５号墳全景（北西から）

1　桑山南５号墳墳丘作業風景（南東から）

2　桑山南５号墳石室（東から）

1　桑山南５号墳
石室控え積みの状況
（西から）

2　桑山南５号墳
石室掘り方断面
（南西から）

3　桑山南５号墳
石室内北部遺物出土
状況（南東から）

1　桑山南５号墳石室内遺物出土状況（南東から）

2　桑山南５号墳石室内人骨頭部出土状況（東から）

1　桑山南５号墳
石室内遺物出土状況
（南西から）

2　桑山南５号墳
石室内人骨脚部出土状
況（南東から）

1　箱式石棺墓１
（南東から）

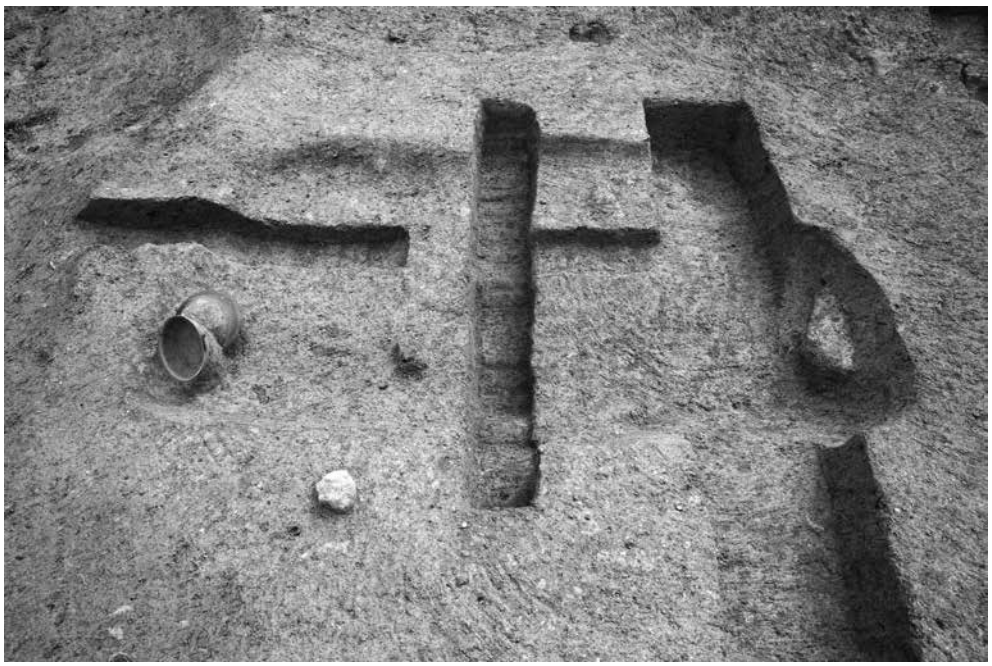
2　箱式石棺墓１
（北東から）

3　箱式石棺墓２蓋石
（南東から）

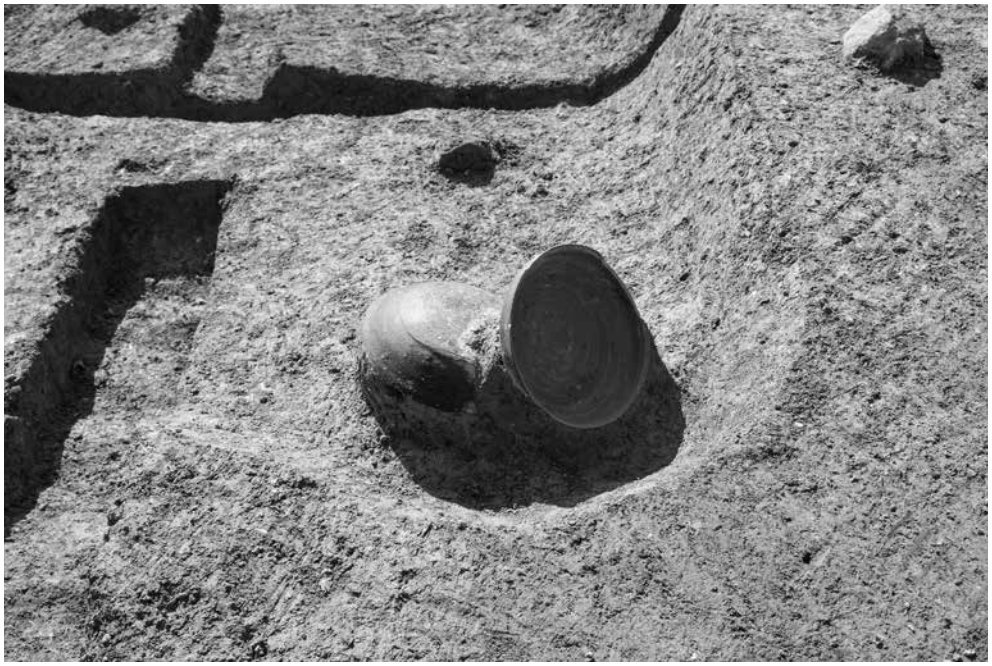
1　箱式石棺墓２
（南西から）

2　土坑墓１（南から）

3　土坑墓１須恵器出土
状況（南から）



1　土坑墓２（北西から）

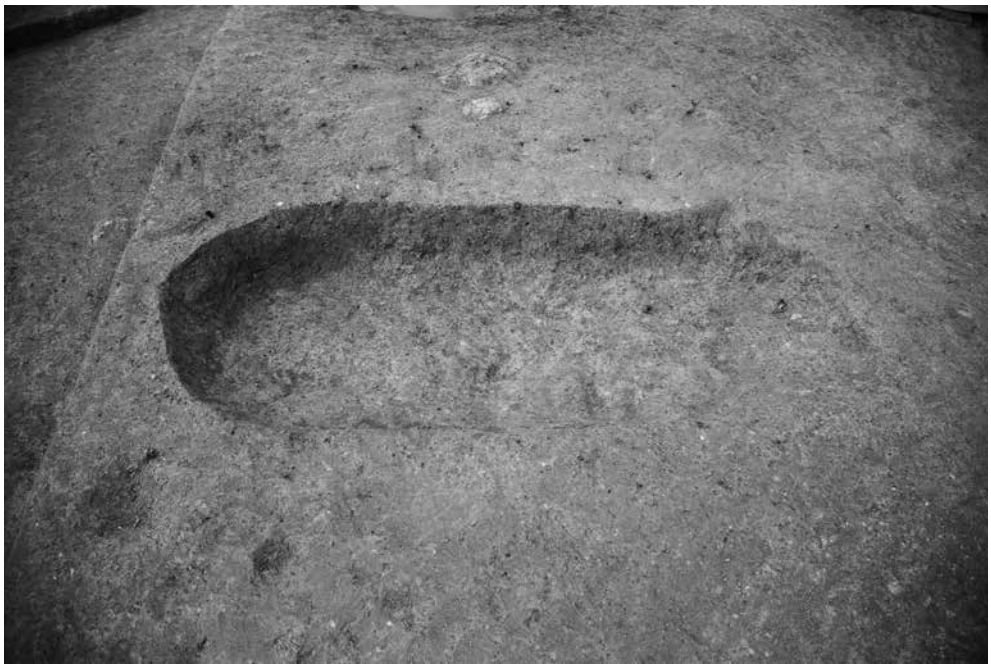


2　土坑墓２須恵器出土状況（北東から）

3　土坑墓３（南から）

1　土坑墓３須恵器出土状況（南から）

2　土坑墓３と桑山南１号墳（南西から）



3　土坑墓４（南東から）

1　桑山南１号墳
盛土中須恵器（147・148）出土状況
（南東から）

2　桑山南１号墳
盛土中鉄鏃（M 147）
出土状況（南東から）

3　中世の土坑墓群
（北東から）

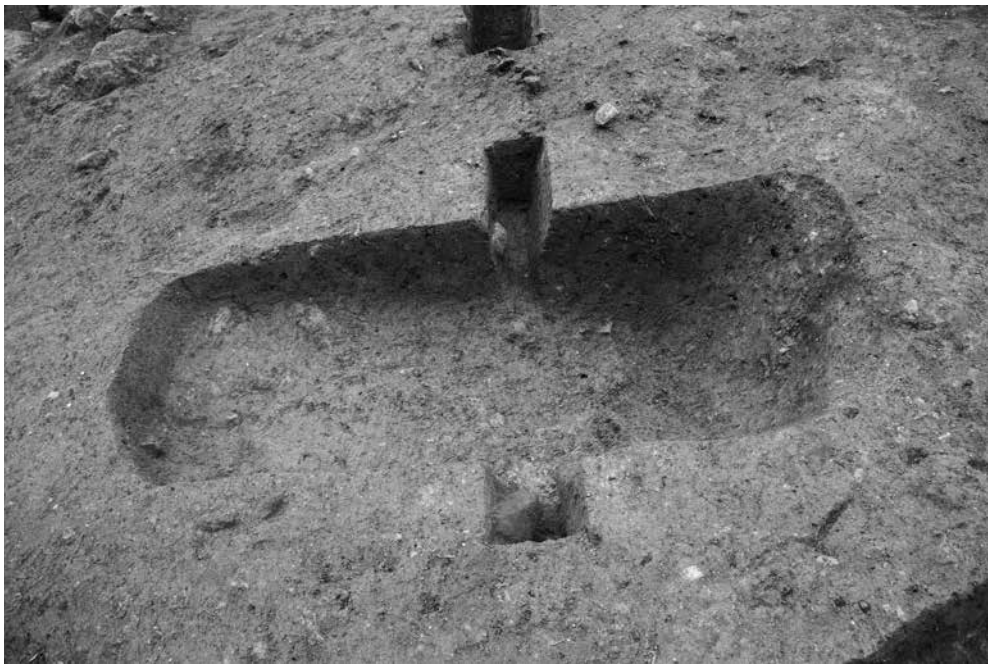
1　中世の土坑墓群
（西から）

2　土坑墓５（南から）

3　土坑墓６（南東から）

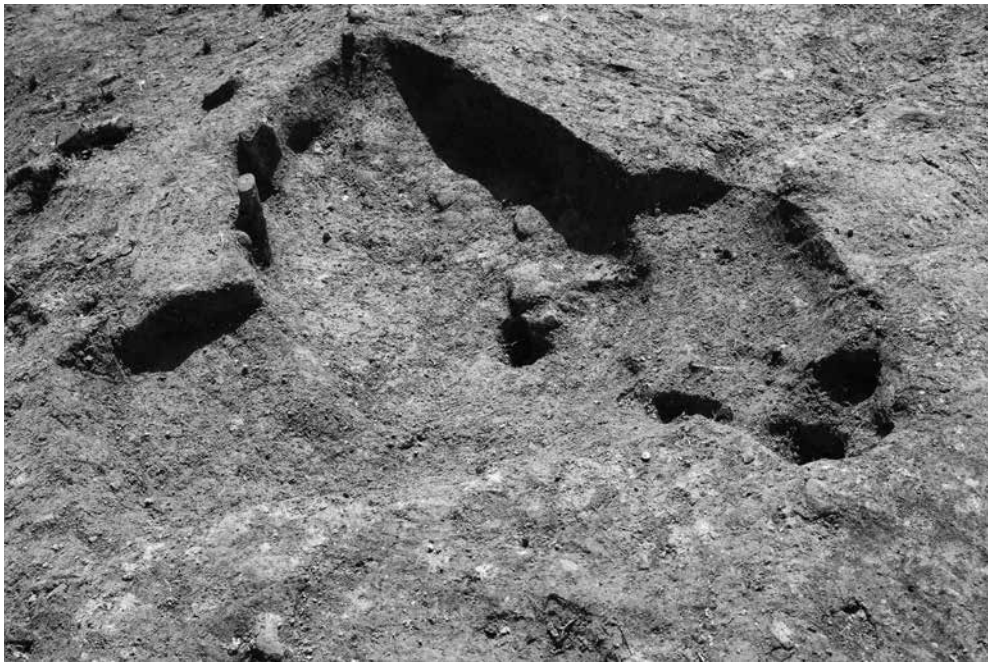
1　土坑墓７（南東から）

2　土坑墓８（南から）

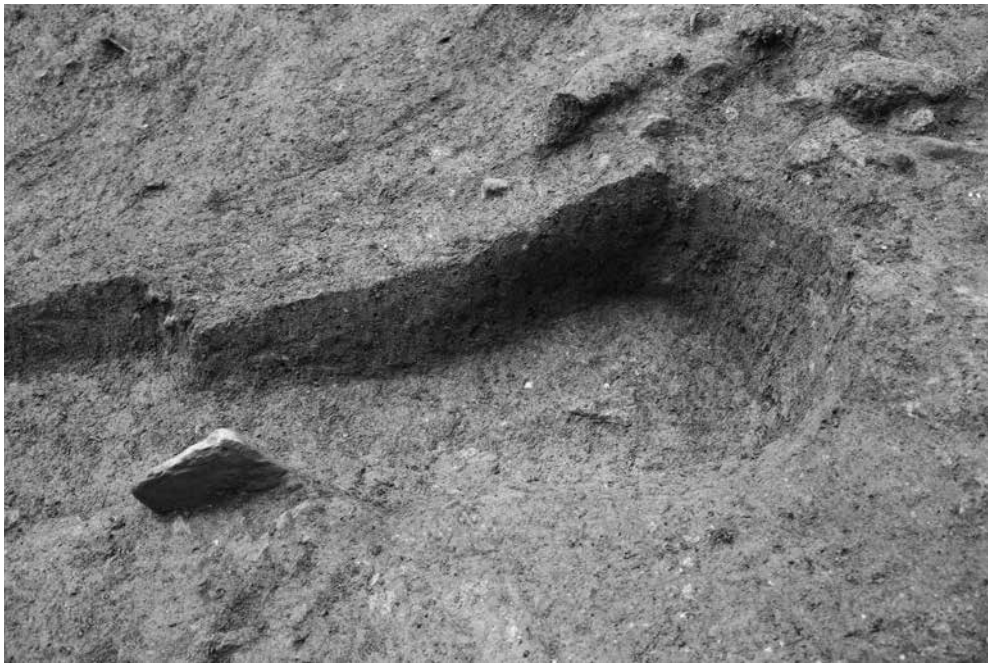


3　土坑墓９（東から）

1　土坑墓 10（西から）



2　土坑墓 11（北西から）

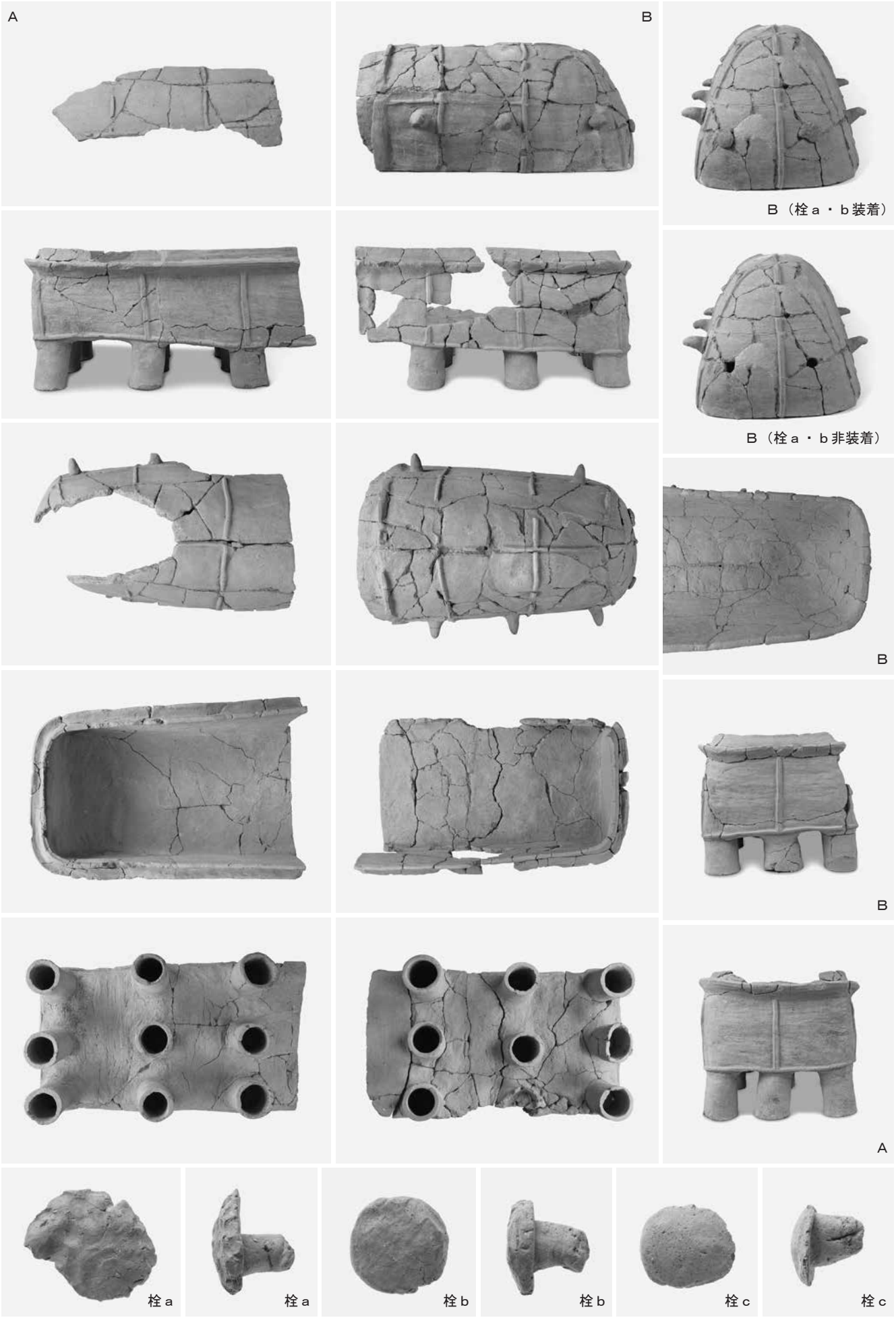


3　土坑墓 12（東から）

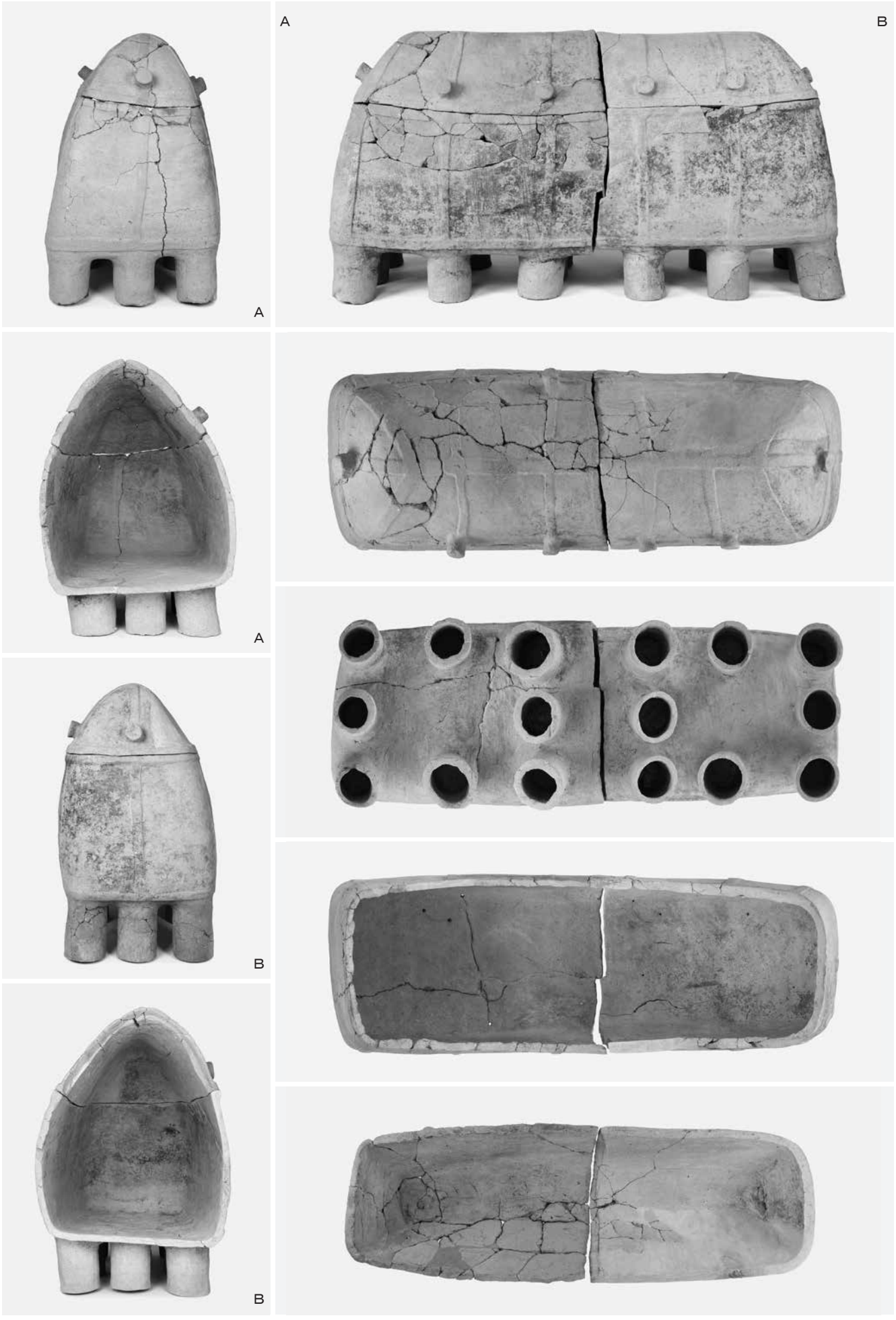
1　土坑墓 13（東から）

2　土坑墓 14（東から）

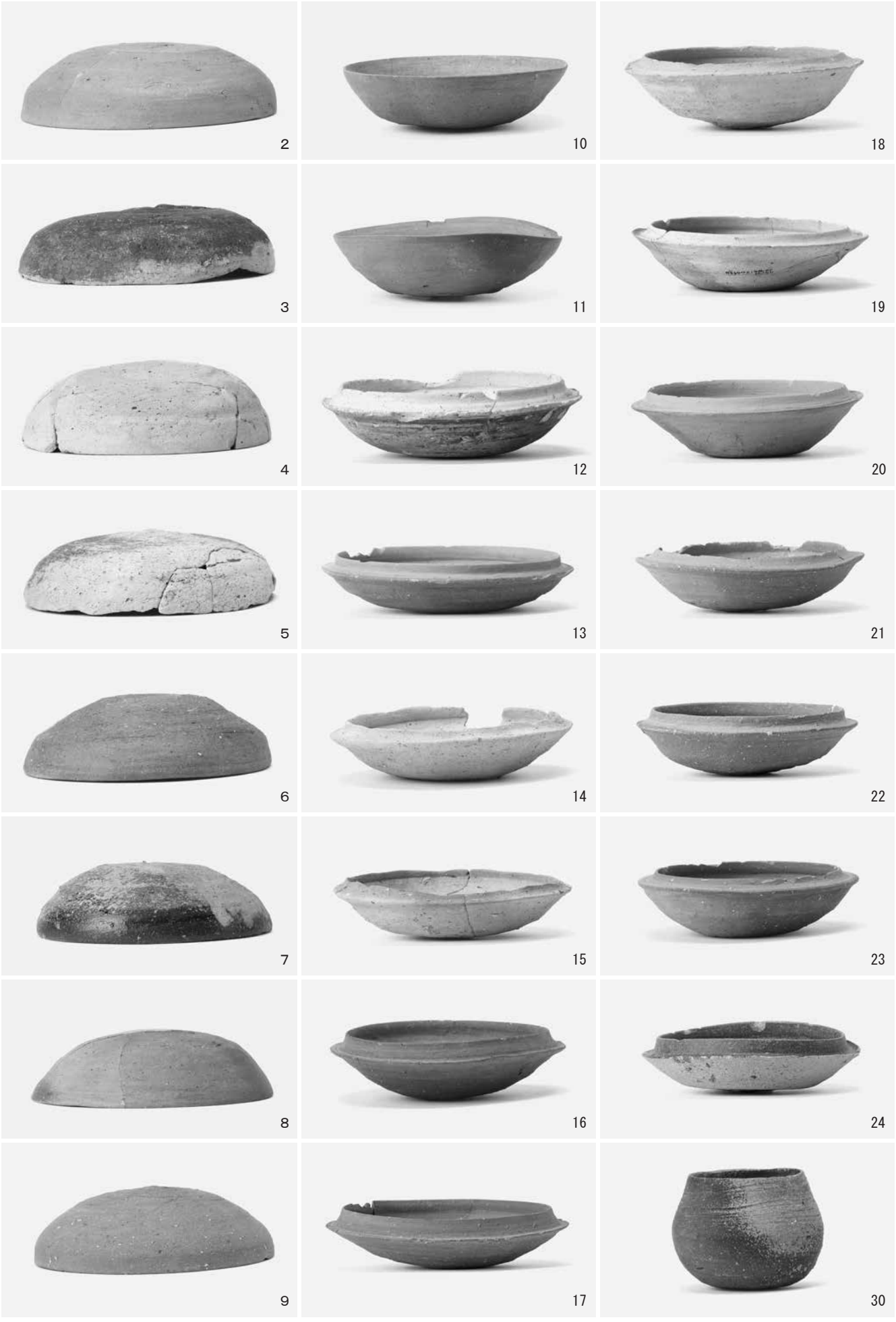
3　土坑２（南東から）



桑山南１号墳出土１号陶棺（Ｃ１）



桑山南１号墳出土２号陶棺（Ｃ２）



桑山南１号墳石室内出土土器①

25

26

27

28

29

31

32

34

35

36

39

37

38

桑山南１号墳石室内出土土器②

40

43

44

45

50

58

46

52

59

48

53

61

49

56

62

桑山南１号墳石室内出土土器③

63

64

65

66

68

69

70

71

72

73

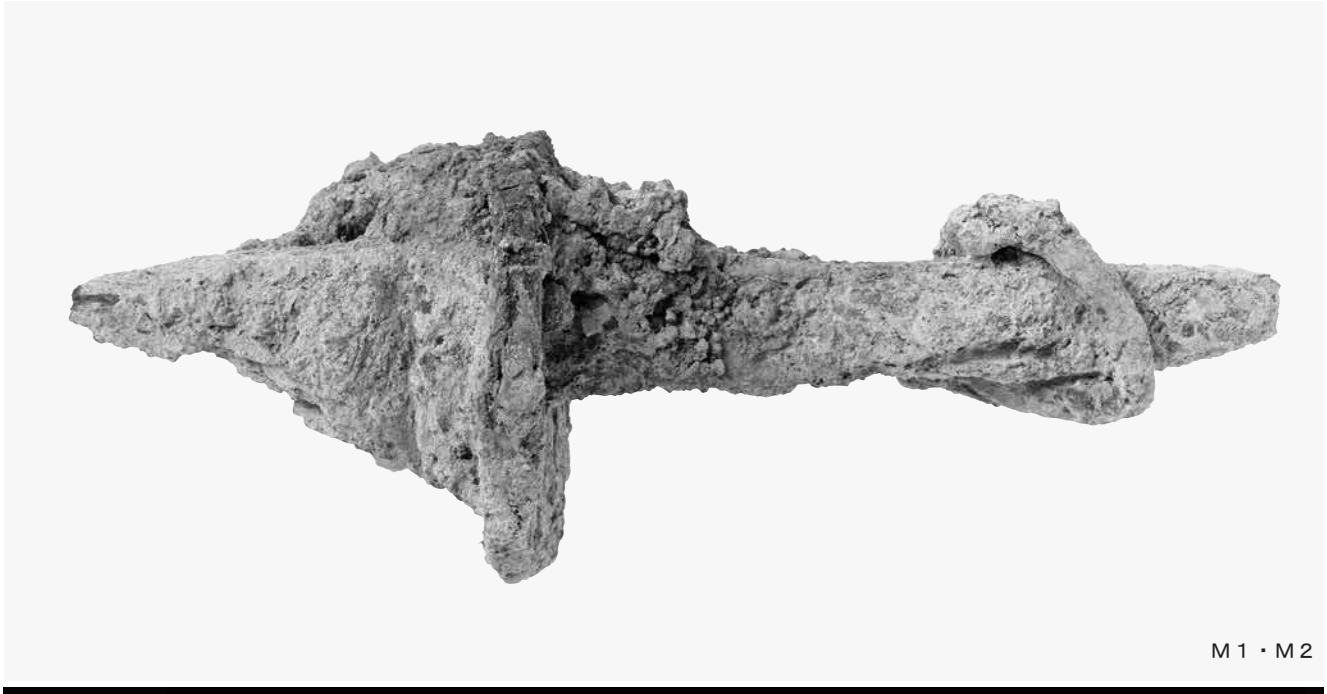
74

75

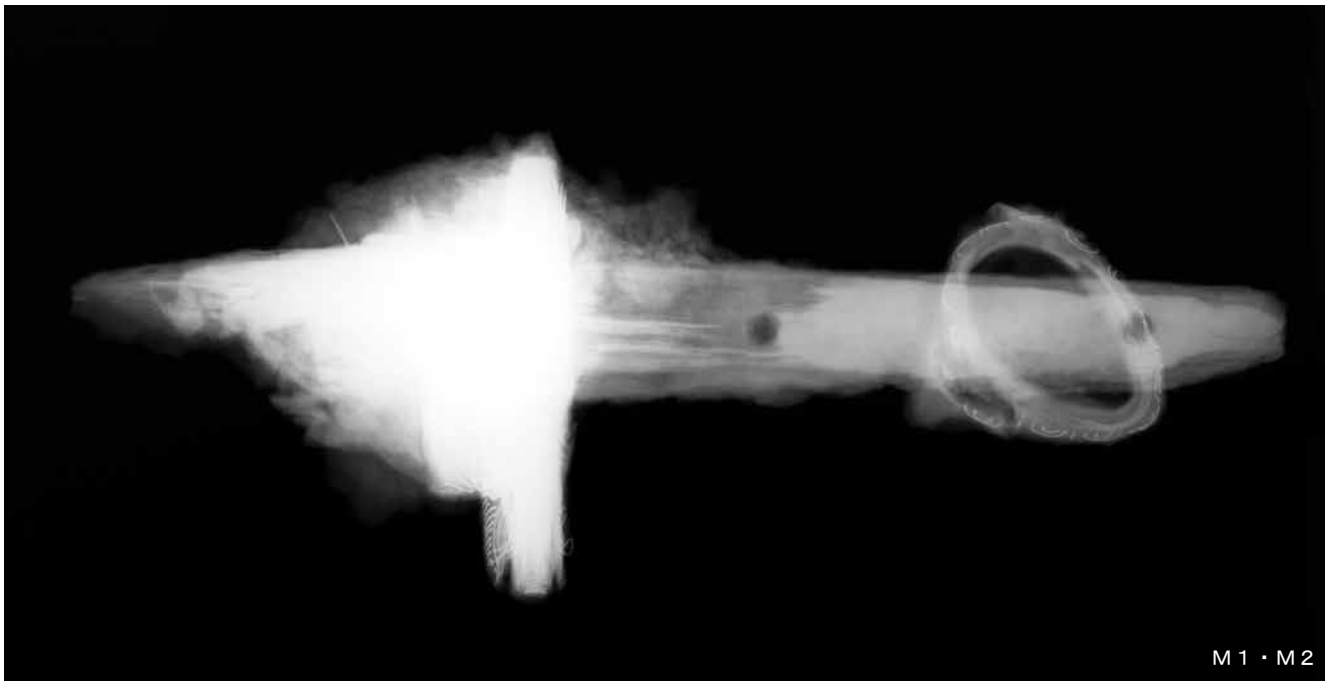
76

77

桑山南１号墳石室内出土土器④



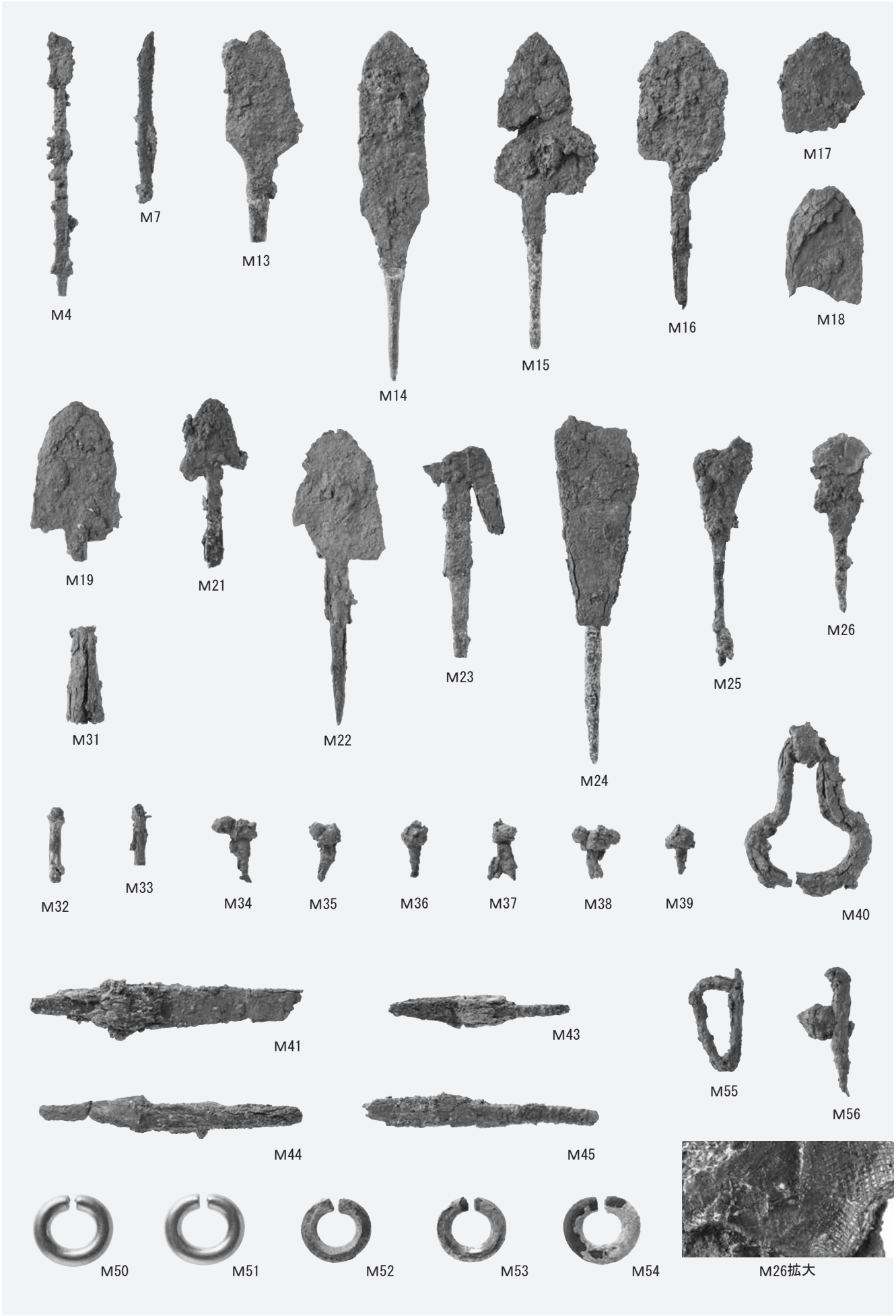
M１・M２



M１・M２

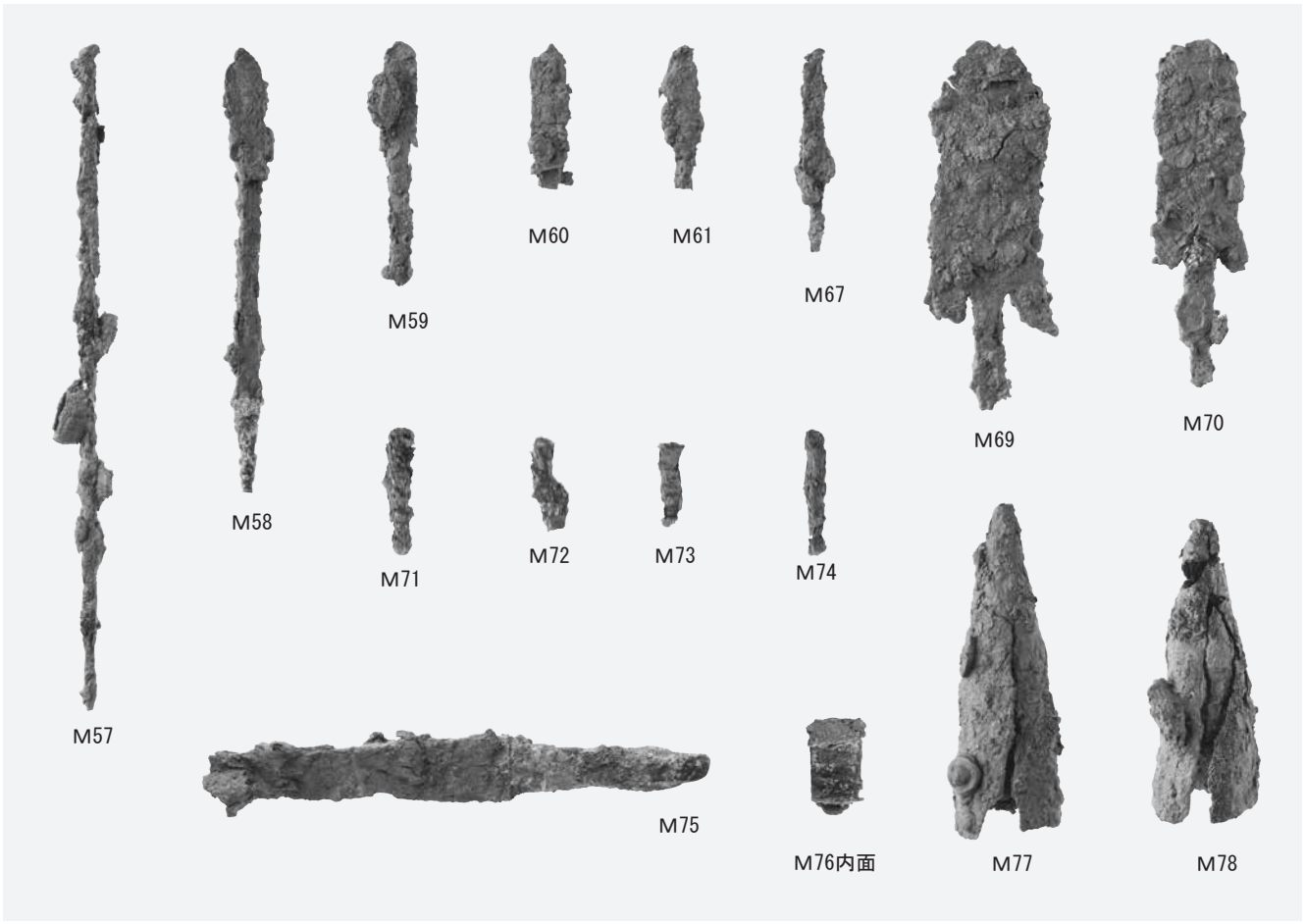
M１

桑山南１号墳石室内出土象嵌装大刀（クリーニング・保存処理前）



桑山南１号墳出土金属製品

1　桑山南２号墳石室内出土土器



2　桑山南２号墳石室内出土鉄器

83

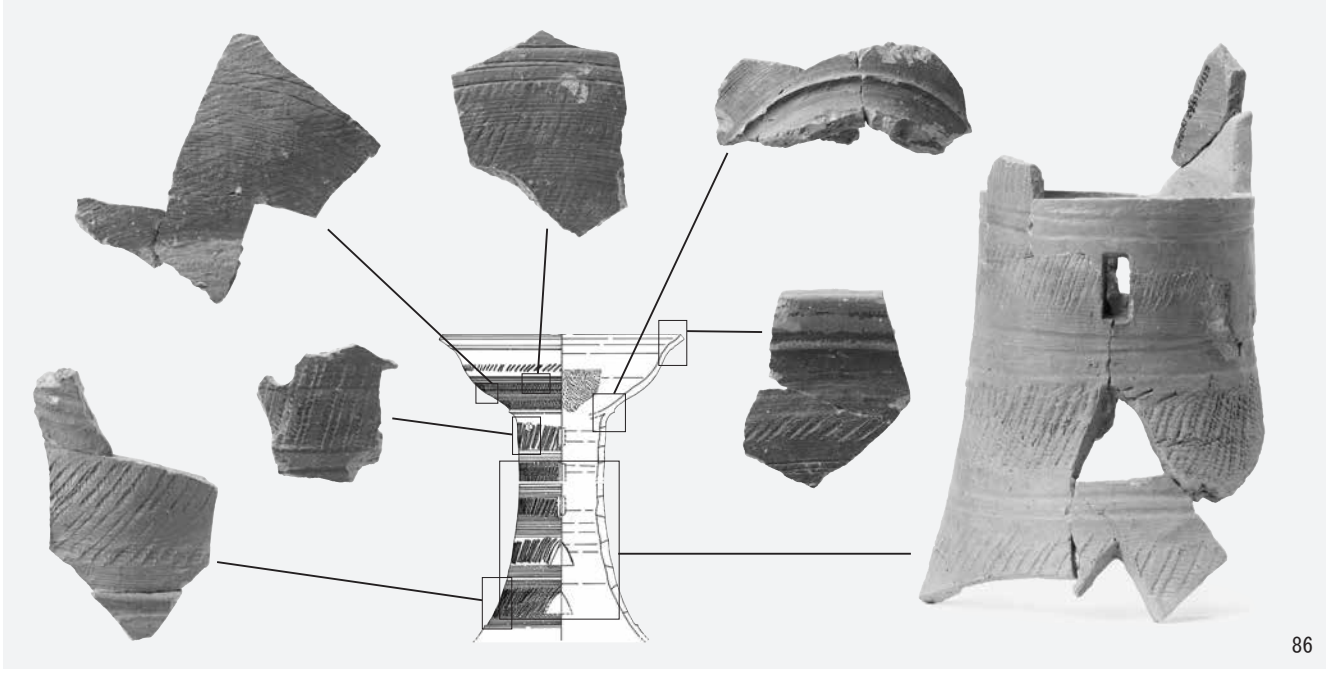
84

85

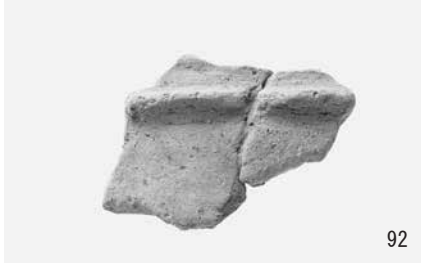
87 口縁部

87 小器杯

87 脚部


86

90


92

94

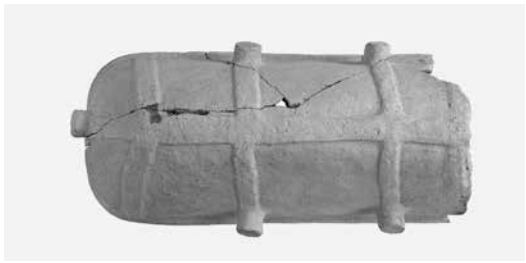
93

95

桑山南２号墳周辺出土遺物

桑山南３号墳出土１号陶棺（Ｃ５）

差し込み突起・封じ穴



桑山南３号墳出土２号陶棺（Ｃ６）

99

100

101

108

109

111

118

119

102

103

104

105

112

116

117

106

107

113

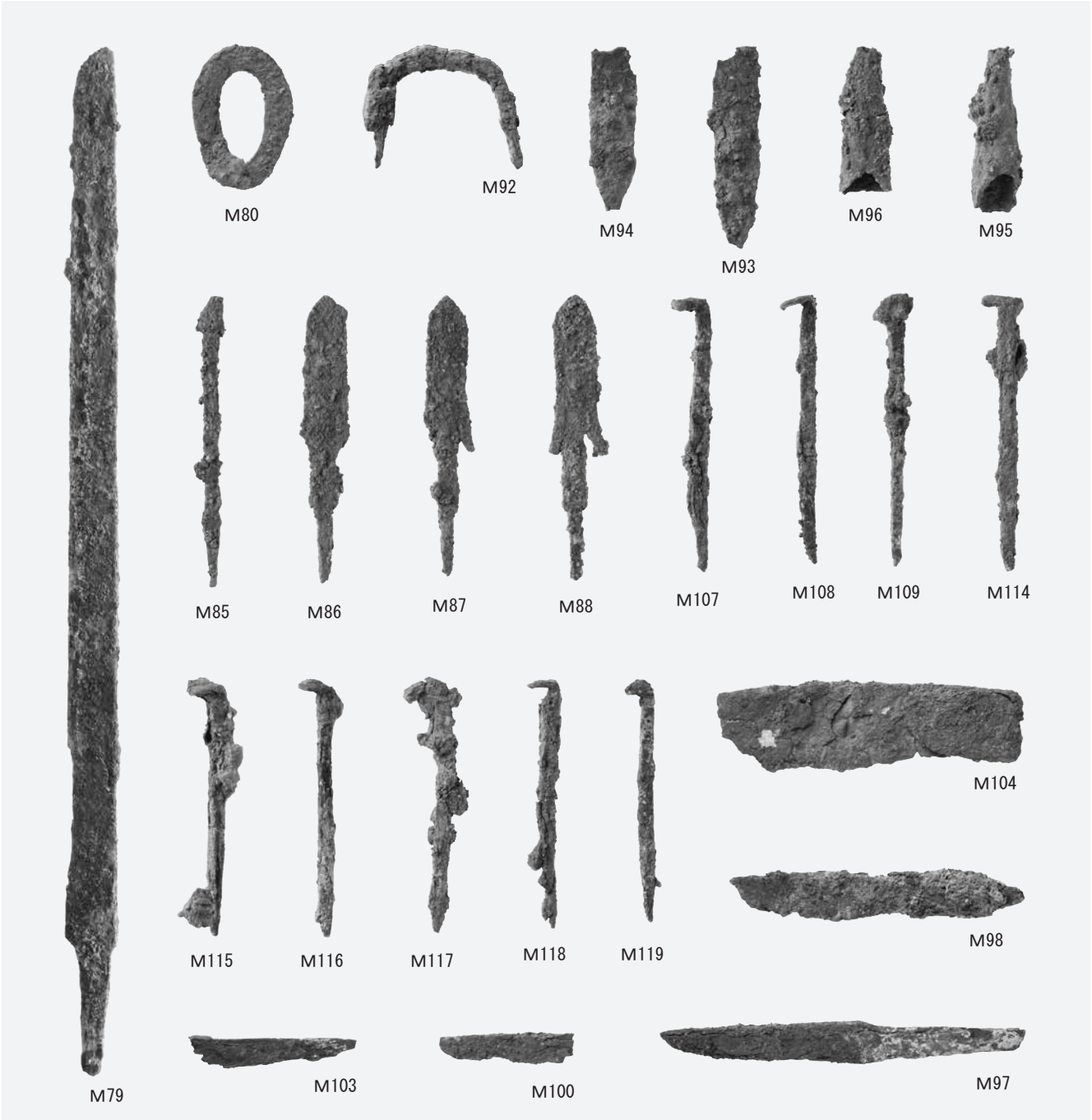
120

121

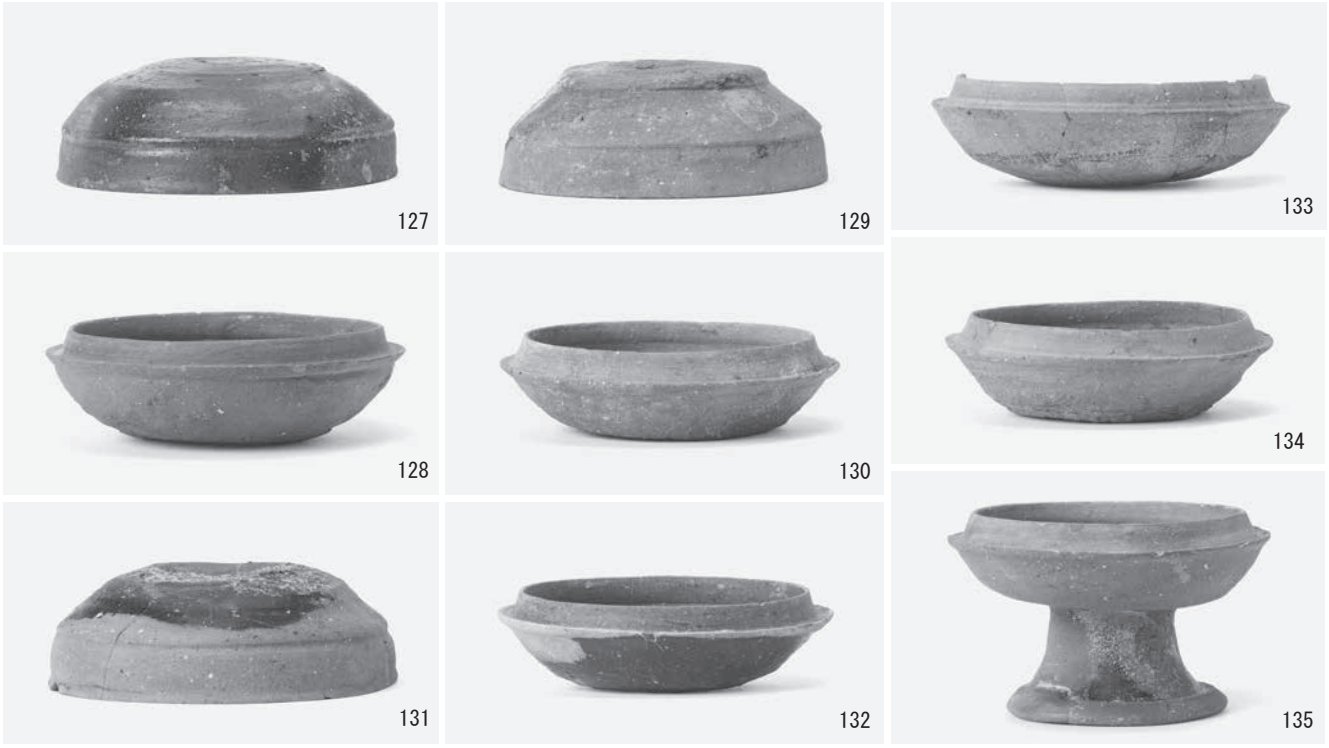
桑山南３号墳石室内出土土器①

1　桑山南３号墳石室内出土土器②

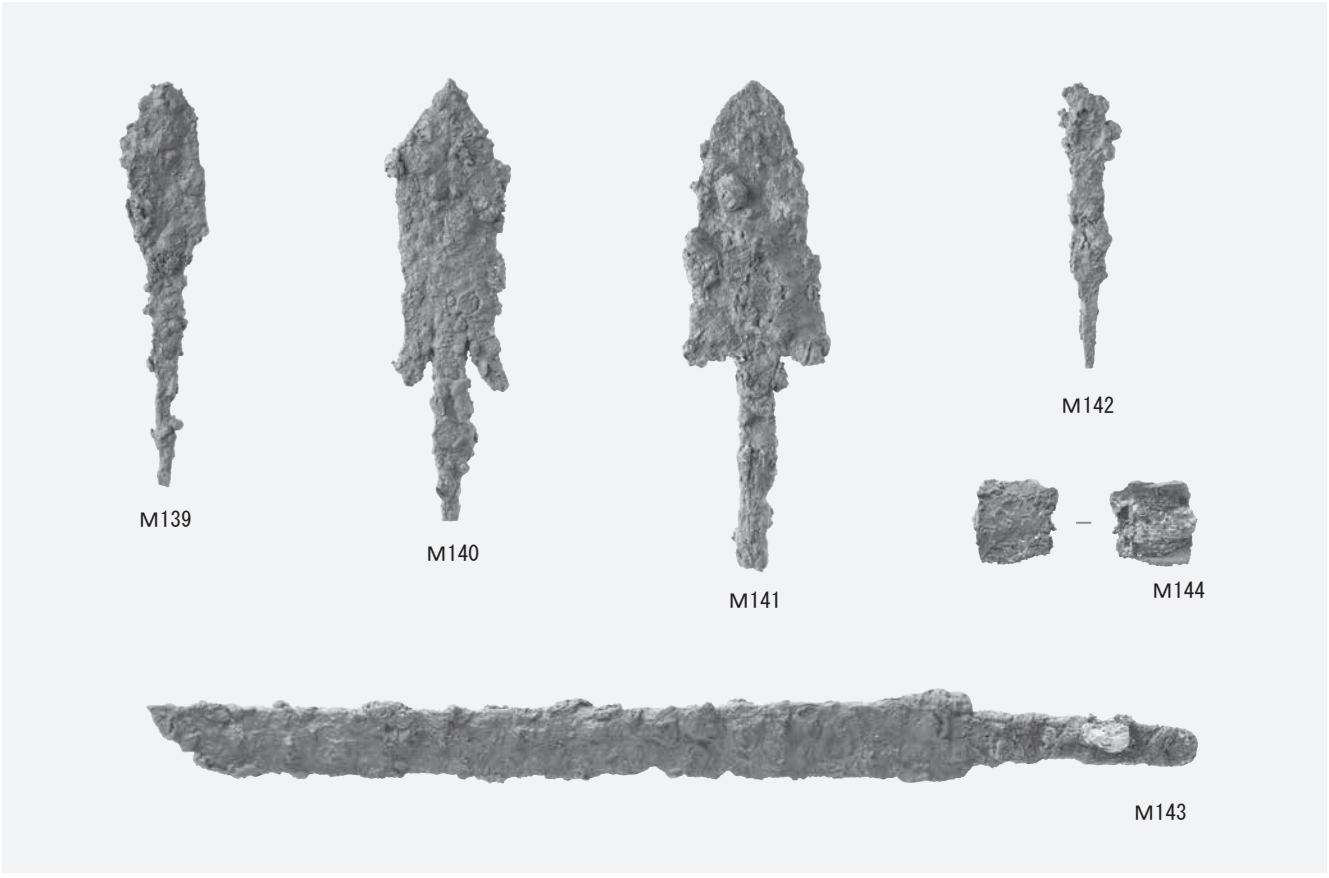
2　桑山南３号墳墳丘・周辺出土遺物



3　桑山南３号墳石室内出土鉄器



1　桑山南５号墳石室内出土土器



2　桑山南５号墳石室内出土鉄器

1　箱式石棺墓・土坑墓群出土遺物

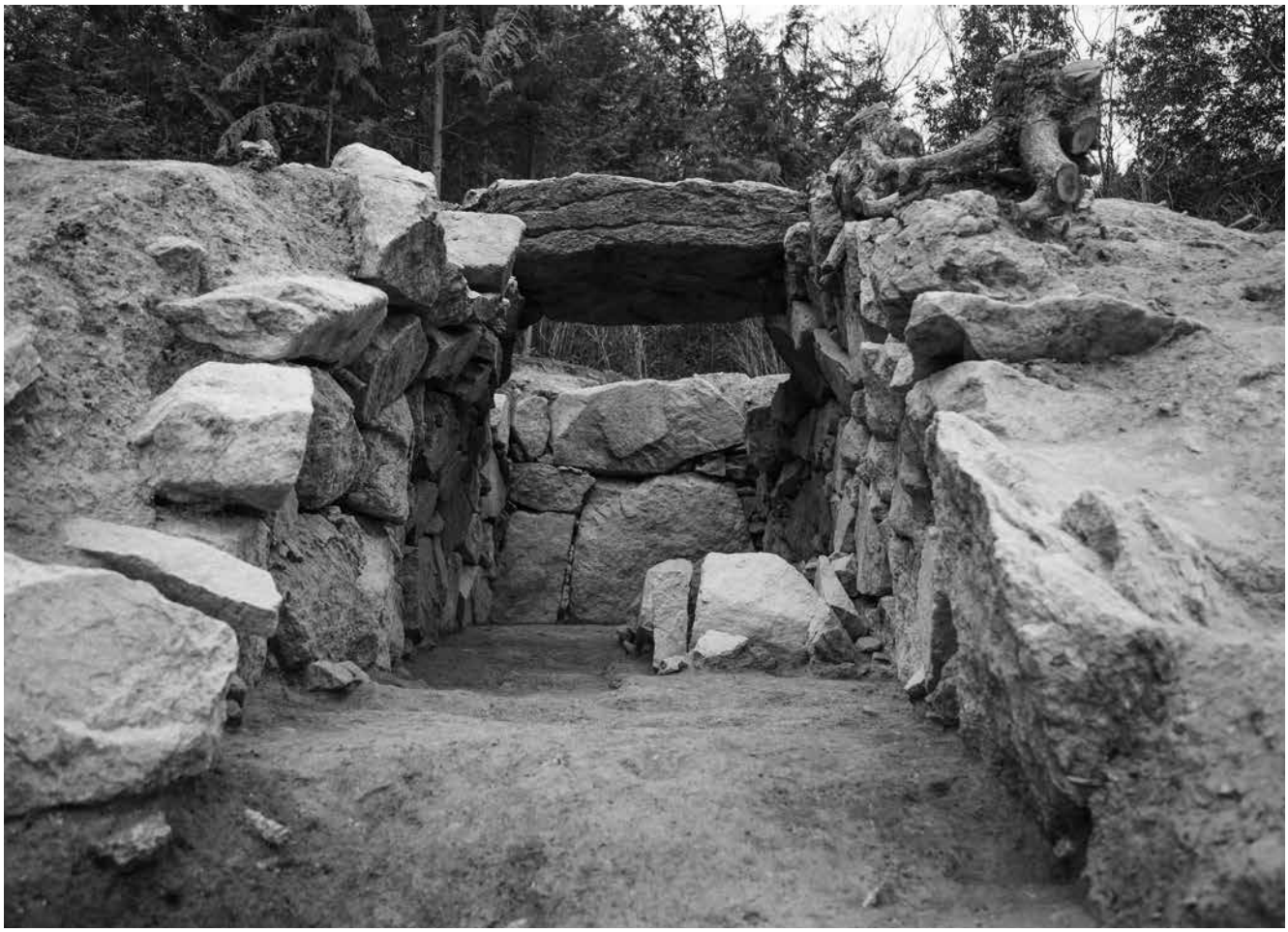
2　桑山南１号墳墳丘盛土中・周辺出土遺物

3　中世の土坑墓群出土遺物

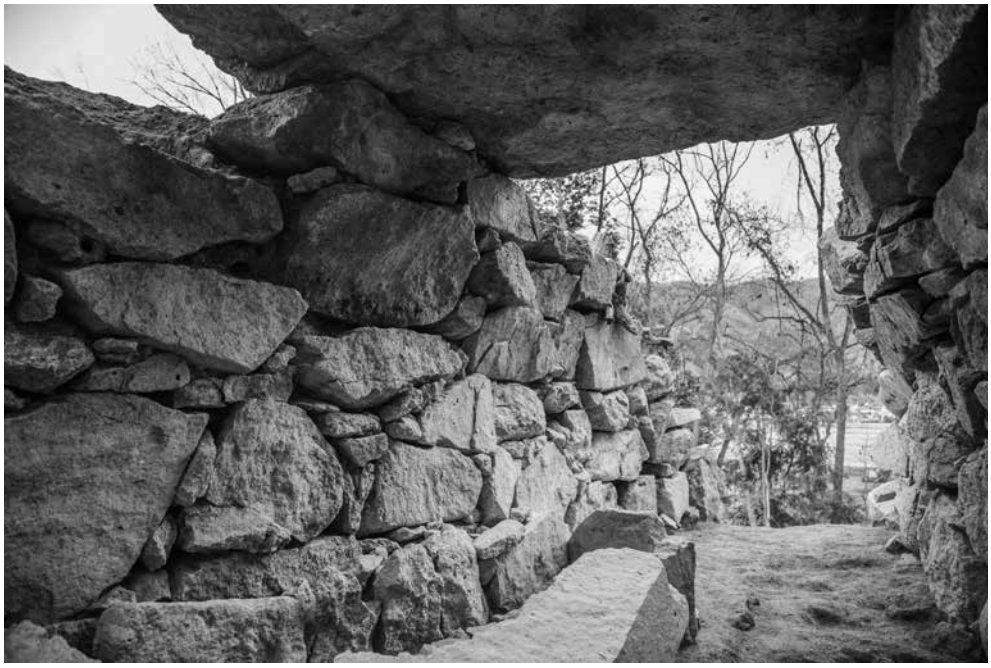
1　細畝１号墳調査前（東から）

2　細畝１号墳調査前石室開口部（南から）

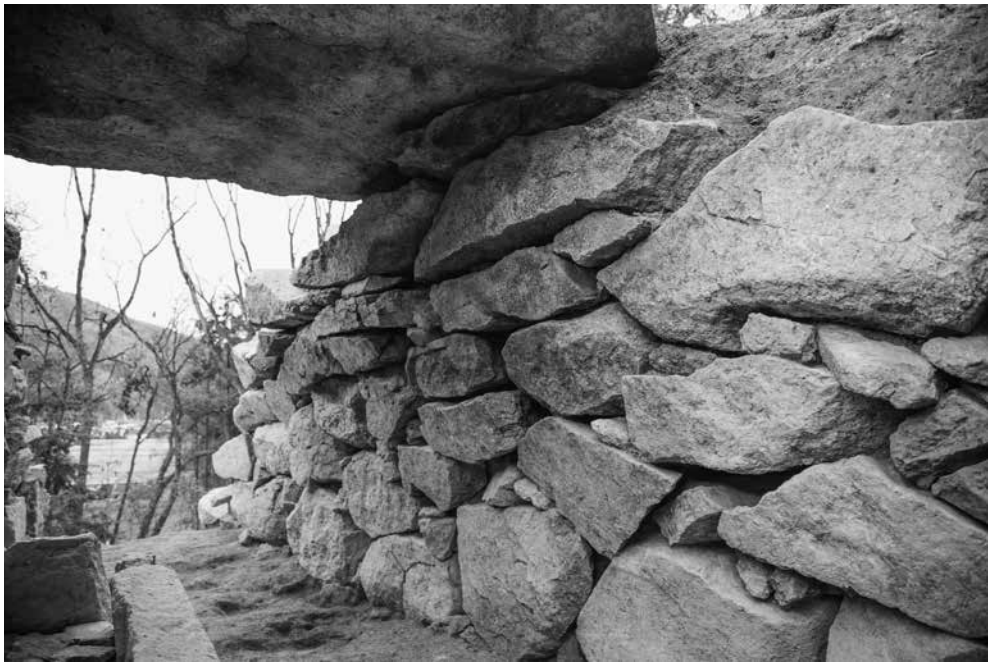
1　細畝１号墳全景（上が北）



2　細畝１号墳石室（南から）



1　細畝１号墳
石室右側壁
（北西から）



2　細畝１号墳
石室左側壁
（北東から）

3　細畝１号墳
石室内（南から）

1　細畝１号墳
石室閉塞施設
（南から）

2　細畝１号墳
石室閉塞施設
（北から）

3　細畝１号墳
石室内箱式石棺
（北西から）

1　細畝１号墳
陶棺身出土状況
（南から）

2　細畝１号墳
陶棺脚出土状況
（西から）

3　細畝１号墳
箱式石棺内遺物出土
状況（南から）

1　細畝１号墳
石室奥部遺物出土状況（北東から）

2　細畝１号墳
石室内箱式石棺西側遺物出土状況（北から）

3　細畝１号墳
石室奥部耳環（M 24・M 25）ほか出土状況（西から）

1　細畝１号墳
石室内玉類集中部
（西から）

2　細畝１号墳
石室閉塞部須恵器
瑞（26）出土状況
（東から）

3　細畝１号墳
石室内作業風景
（北から）

1　細畝１号墳
石室内古代の土器
（40・41）出土状況
（南から）

2　細畝１号墳
石室奥の小石室
天井石（北から）

3　細畝１号墳
石室奥の小石室天井
石除去後（北から）

1　細畝２号墳調査前（南から）

2　細畝２号墳全景（東から）

1　細畝２号墳石室（東から）

2　細畝２号墳石室（西から）

1　細畝２号墳
石室右側壁
（南西から）

2　細畝２号墳
石室左側壁
（北西から）

3　細畝２号墳墳丘南半断面（東から）

4　細畝２号墳墳丘北半断面（東から）

1　細畝２号墳
石室内陶棺出土状況
（東から）

2　細畝２号墳
石室内土器出土状況
（東から）

3　細畝２号墳
石室内勾玉（S 28）
出土状況（南から）

1　細畝３号墳調査前（北西から）

2　細畝３号墳全景（北東から）

1　細畝３号墳石室（南東から）

2　細畝３号墳石室（北西から）

1　細畝３号墳
石室右側壁（西から）

2　細畝３号墳
石室左側壁（北から）

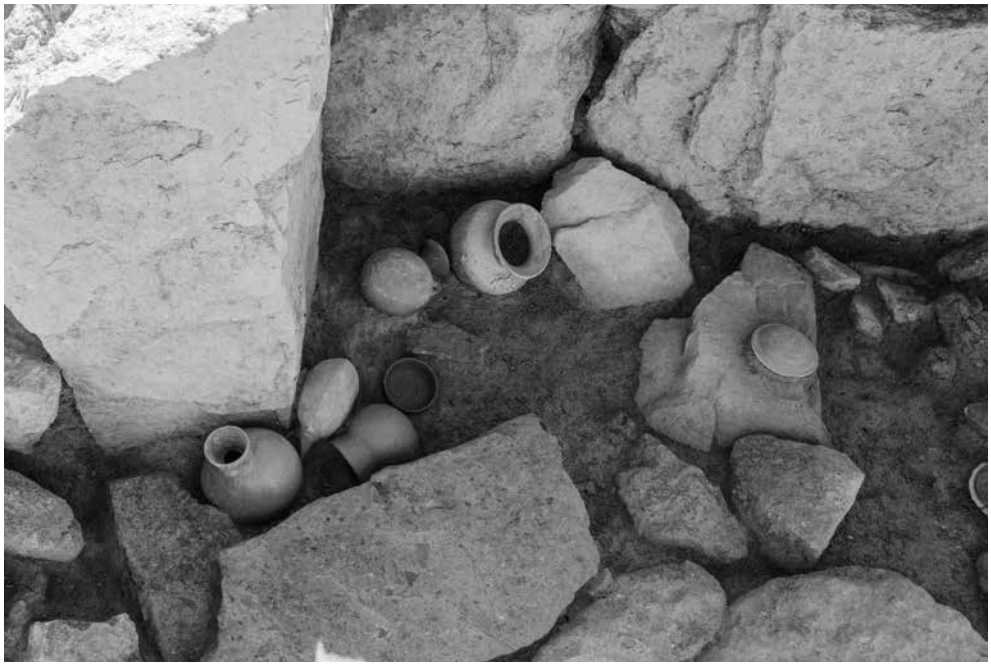
3　細畝３号墳
石室羨道床面
（南西から）

1　細畝３号墳
石室内遺物出土状況
（北西から）

2　細畝３号墳
石室内遺物出土状況
（南東から）

3　細畝３号墳
石室右側壁際遺物出
土状況（北東から）

1　細畝３号墳
石室袖部周辺遺物出土状況（北から）



2　細畝３号墳
石室袖部遺物出土状況（北東から）

3　細畝３号墳
石室羨道部遺物出土状況（南西から）

1　細畝３号墳
石室内馬具（M 69
ほか）出土状況
（南西から）

2　細畝３号墳
石室内耳環（M 84・
M 85）ほか出土状況
（北西から）

3　細畝３号墳
石室内作業風景
（西から）

1　箱式石棺墓１
（西から）

2　箱式石棺墓１
（東から）

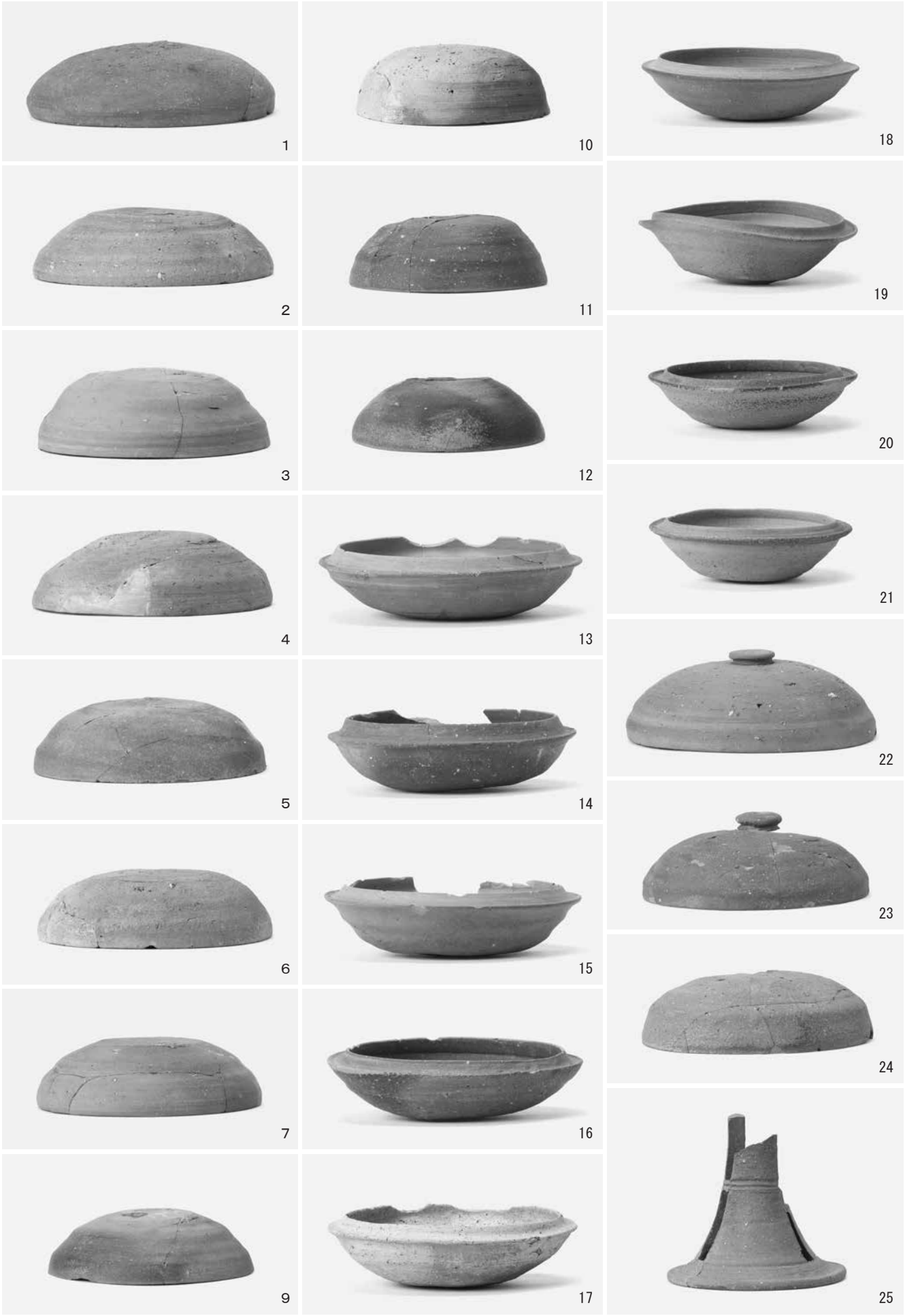
3　箱式石棺墓１須恵器
出土状況（南西から）

1　箱式石棺墓２
（東から）

2　箱式石棺墓２
（北から）

3　土坑１（南西から）

細畝１号墳出土陶棺（Ｃ１）



細畝１号墳石室内出土土器①

26

27

28

29

30

32

34

31

35

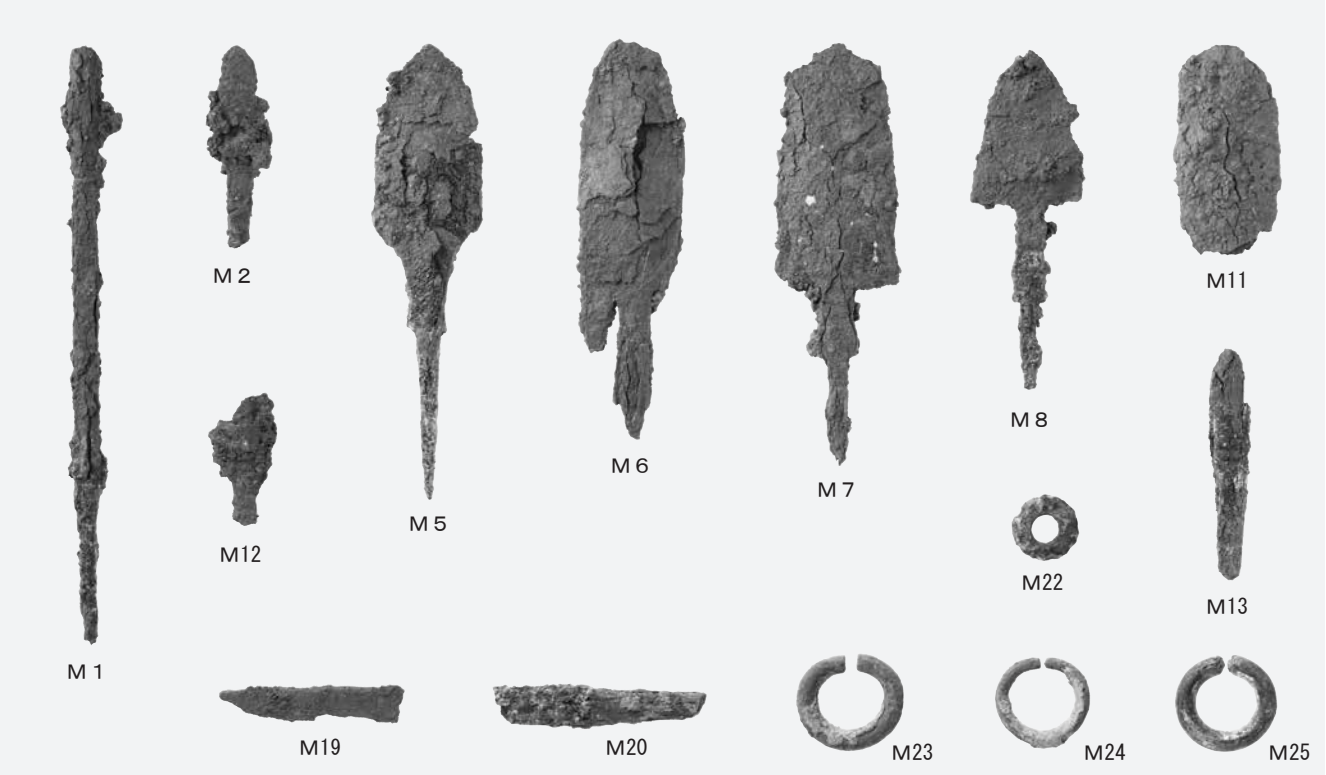
37

39

40

41

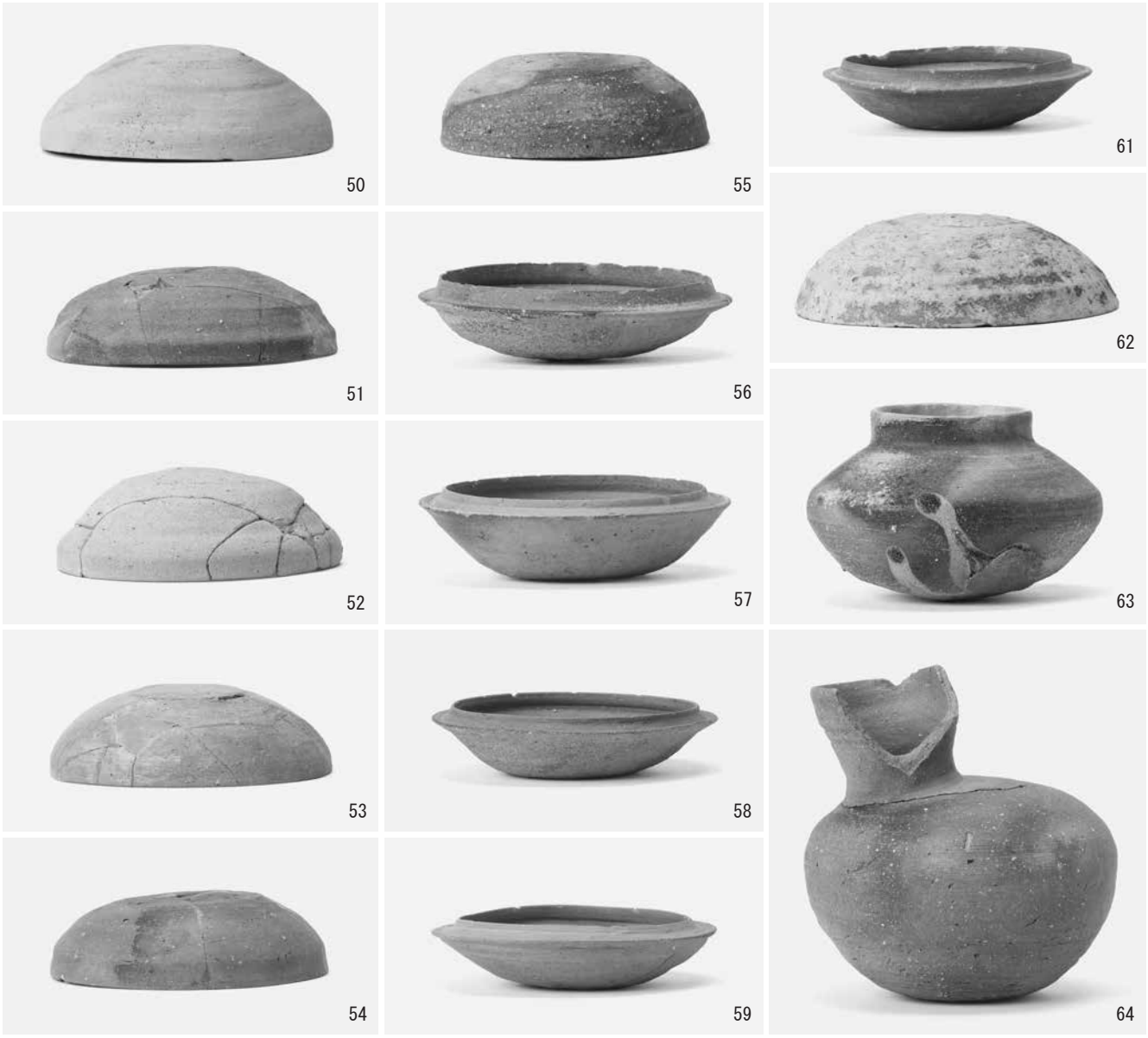
細畝１号墳石室内出土土器②



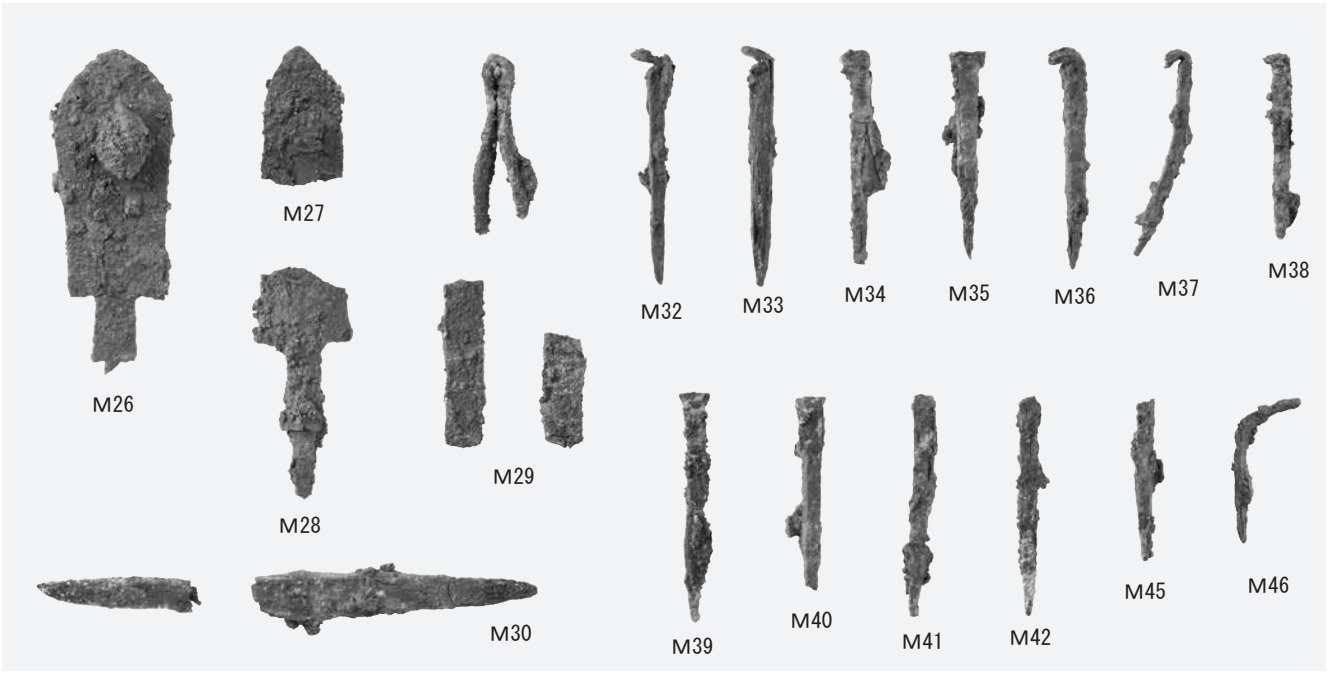
１　細畝１号墳石室内出土金属器

２　細畝１号墳周辺出土土器

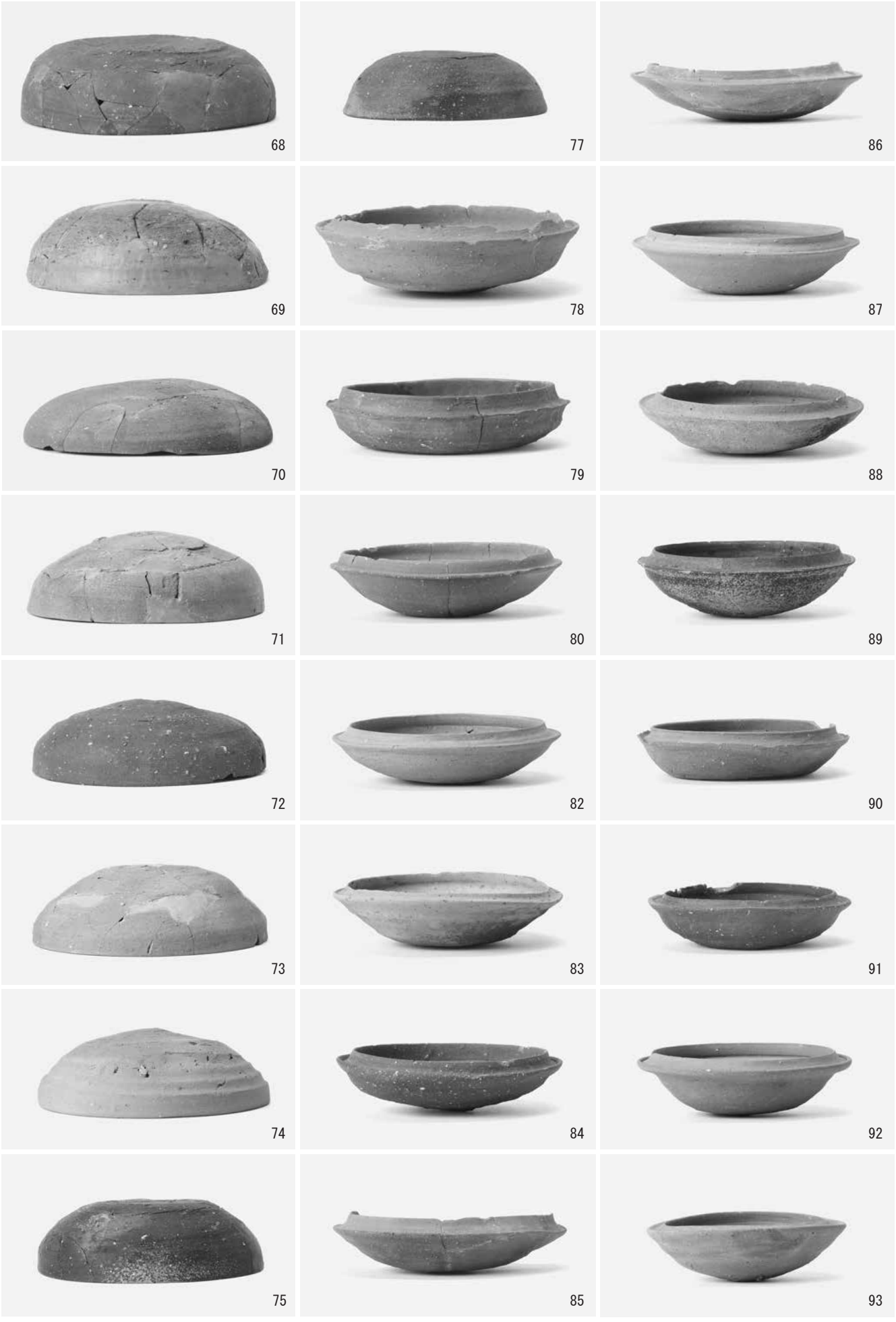
３　細畝２号墳出土陶棺（Ｃ４）



1　細畝２号墳石室内出土土器



2　細畝２号墳石室内出土鉄器



細畝３号墳石室内出土土器①

94

95

96

97

98

99

100

101

102

104

106

108

109

111

112

細畝３号墳石室内出土土器②

113

114

115

118

116

121

117

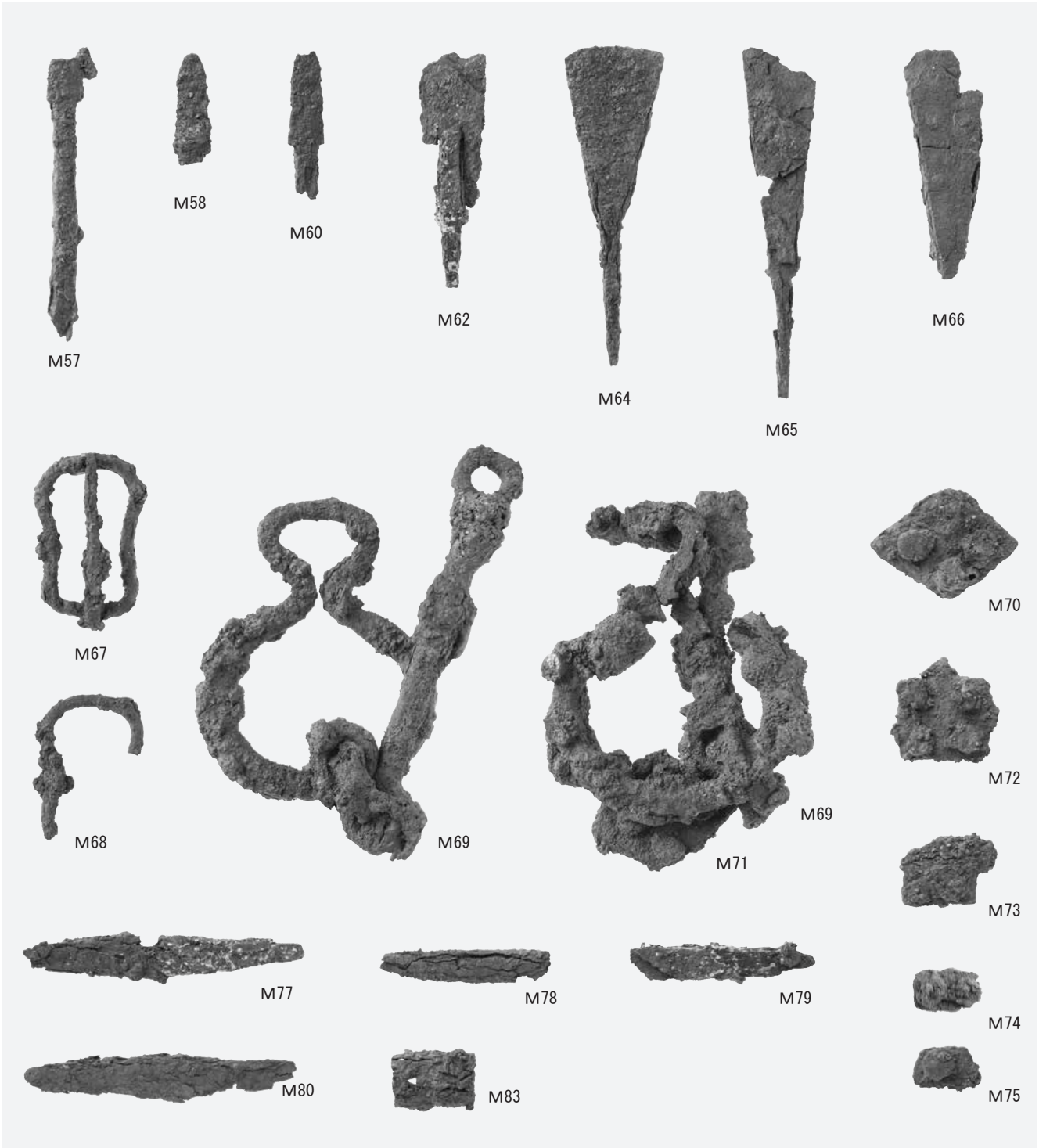
125

126

127

細畝３号墳石室内出土土器③

1　細畝３号墳石室内出土土器④



2　細畝３号墳石室内出土鉄器

1　細畝３号墳石室内出土耳環

2　細畝３号墳周溝・周辺出土遺物

3　箱式石棺墓１・細畝１号墳墳丘盛土中・細畝１号墳石室掘り方内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	くわやまみなみこふんぐん　ほそうねこふんぐん
書名	桑山南古墳群　細畝古墳群
副書名	一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 1
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	255
編著者名	尾上元規　小嶋善邦　藤井翔平　藤井雅大　大橋雅也　鈴木真太郎　若山聡良　白石純 株式会社パレオ・ラボ　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒 701-0136　岡山県岡山市北区西花尻 1325-3　TEL 086-293-3211　FAX 086-293-0142 URL　https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒 700-8570　岡山県岡山市北区内山下 2-4-6　TEL086-224-2111
発行年月日	2022 年 1 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
桑山南古墳群（くわやまみなみこふんぐん）	岡山県（おかやまけん）津山市（つやまし）高尾（たかお）1582 ほか	33203	332030435（1 号墳）	35° 2′ 29″	133° 57′ 54″	20180101 ～ 20180316	1,565	記録保存調査
		33203	332030436（2 号墳）	35° 2′ 29″	133° 57′ 53″			
		33203	332030437（3 号墳）	35° 2′ 30″	133° 57′ 54″	20190409 ～ 20190916		
		33023	332030428（4 号墳）	35° 2′ 29″	133° 57′ 53″			
		33203	332031233（5 号墳）	35° 2′ 29″	133° 57′ 54″	20191121 ～ 20200313		
細畝古墳群（ほそうねこふんぐん）	岡山県（おかやまけん）津山市（つやまし）高尾（たかお）1527 ほか	33203	332030439（1 号墳）	35° 2′ 28″	133° 57′ 52″	20180412 ～ 20190116	620	
		33203	332030440（2 号墳）	35° 2′ 28″	133° 57′ 52″			
		33203	332030441（3 号墳）	35° 2′ 28″	133° 57′ 53″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑山南 1 号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳 1	須恵器・土師器・大刀・鉄鏃・馬具・弓飾金具・刀子・耳環・玉類・陶棺	棺は陶棺 2 基。 銀象嵌装大刀は陶棺内から、鈴付高杯は石室床面から出土。
桑山南 2 号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳 1	須恵器・鉄鏃・弓飾金具・鉄鐸・玉類	石室内から鉄鐸出土。 墳丘上から子持器台出土。
桑山南 3 号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳 1	須恵器・土師器・大刀・鉄鏃・馬具・刀子・鉄釘・鉄鐸・耳環・玉類・陶棺	棺は陶棺 2 基、「箱式石棺」 1 基、木棺 1 基。 石室内から鉄鐸・子持器台出土。
桑山南 4 号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳 1		
桑山南 5 号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳 1	須恵器・鉄鏃・刀子・人骨	石室内に人骨遺存。
細畝 1 号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳 1	須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・耳環・玉類・陶棺	棺は陶棺 1 基、箱式石棺 1 基。

細畝２号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１	須恵器・鉄鏃・鑷子状鉄製品・刀子・鉄釘・玉類・陶棺	鑷子状鉄製品出土。
細畝３号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１	須恵器・土師器・大刀・鉄鏃・馬具・刀子・耳環・玉類	特殊扁壺出土。
要約	隣接する尾根上に築かれた古墳群の発掘調査 （桑山南古墳群） １号墳は径約 14 ｍ、残存高約３ｍの円墳で、南東に開口する全長約 6.5 ｍ、高さ約 1.7 ｍの横穴式石室をもつ。片袖式の横穴式石室には、棺として陶棺２基が埋葬されていた。副葬品には多数の土器、武器、馬具、工具、装身具などがある。６世紀末頃に築造され、７世紀の中葉頃まで追葬している。 ２号墳は６世紀中葉頃に築造された径８～９ｍの円墳で、全長約 2.1 ｍ、幅約 0.5 ｍの竪穴式石室をもつ。石室内は一部攪乱を受けていたものの、原位置を保つと考えられる遺物が出土した。 ３号墳は、７世紀前半から中葉頃に築造された径約 12 ｍ、残存高約 4.5 ｍの円墳である。東に開口する無袖式の横穴式石室の規模は、全長約 6.3 ｍ、高さ約 1.6 ｍを測る。棺には陶棺、「箱式石棺」と想定される仕切石のほか、木棺が想定される。 ４号墳は、調査区内に明確な墳端や周溝が確認されなかった。 ５号墳は径約９ｍ、残存高約２ｍの円墳で、６世紀中葉頃に築造された。埋葬主体は竪穴式石室で、攪乱により天井石や壁体の約半分が失われたていたものの、その規模は全長約 2.2 ｍ、幅約 0.7 ｍである。礫敷である床面から人骨が出土した。 ２・５号墳とほぼ同時期の箱式石棺墓２基と土坑墓４基が検出されたほか、中世の土坑墓が 10 基確認された。 （細畝古墳群） １号墳は南に開口する横穴式石室をもつ径 10.5 ｍ、残存高約２ｍの円墳である。石室は無袖式で、その規模は全長約 6.5 ｍ、高さ約 1.9 ｍを測る。棺には陶棺１基と箱式石棺がある。６世紀末葉頃築造され、７世紀中葉頃まで追葬している。 ２号墳は径約９ｍ、残存高約２ｍの円墳で、北東に開口する横穴式石室をもつ。石室は無袖式で、その規模は全長 6.05 ｍ、残存高約 1.25 ｍである。棺には木棺と陶棺があるが、陶棺についてはその出土状況から棺として利用していたのか明らかでない。７世紀前葉頃築造され、７世紀前半から中葉頃まで追葬している。 ３号墳は径約 13 ｍ、残存高約２ｍの円墳で、大規模に破壊された片袖式の横穴式石室をもつ。土器や金属器、玉類など多数の遺物が出土した。６世紀後半頃に築造され、７世紀中葉頃まで追葬が行われていた。 １号墳に先行する箱式石棺墓１基や時期不明の箱式石棺墓が検出されている。				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255

桑山南古墳群
細畝古墳群
一般国道 53 号（津山南道路）
改築工事に伴う発掘調査１

令和４年１月 31 日　印刷
令和４年１月 31 日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山県岡山市北区西花尻 1325-3
発行　岡山県教育委員会
　　岡山県岡山市北区内山下 2-4-6
印刷　株式会社中野コロタイプ
　　岡山市北区玉柏 390